

やはり俺がサッカーを  
するのは間違っている。

セブンアップ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最近イナズマイレブンを始めたことと、最近やっと俺ガイル3期が始まったことと、どうせならクロスオーバーしようと考えました。

自己満足で作ってるので、つまらなかつたらその場で見るのをやめてもらって構いません。

# 目次

## 地上最強編

イプシロン襲来	1
雷門レギュラー登場	10
雷門に加入	17
ナニワのCCC	24
雷門vs大阪ギャルズCCC	33
エイリアの修練場	40
吹雪とデザーム	46
最凶イプシロン	57
福岡陽花戸中学	63
最後の試合	73
さらば比企谷八幡	79

エイリアに加入	85
マスターランク集結	93
エイリアの日常	100
マックスコーヒー	109
ウルビダ	117
プロミネンス	124
独占欲	133
歪な愛	145
再会	155
アフロデイ降臨	166
引き分け	174
カオス結成	184
ムゲン・ザ・ハンド	191

ファイアブリザード	199
決戦準備	208
吹雪覚醒	220
止まらない進化	233
決着	244
さらばエイリア学園	252
終わりになき脅威	265
雷門 v s 雷門	273
友情の究極奥義	283
世界への挑戦 アジア予選編	
地上最強から世界一	298
選考試合	308
日本代表結成	319

暗雲	329
練習禁止	343
v s ビッグウェイブス	356
海を制する者	365
宇都宮虎丸	373
砂漠の獅子	387
目覚める虎	395
依存	405
ネオジャパン	413
久遠ジャパン v s 瞳子ジャパン	424
荷物持ち	434
豪炎寺とお爺さんと泥と不良	446

アジア予選決勝	455
パーフェクトゾーンプレス	463
一進一退	476
不動明王	483
世界への切符	497
世界への挑戦 世界大会編	
FFI世界大会	510
世界レベル	525
英国の騎士	544
異次元の技	557
練習無し	570
立向居だけの技	581
求めるもの	590

不落の要塞	603
イナズマジヤパン敗北	615
さらば栗松鉄平	633
最強のアメリカ	640
最後の試合	650
不死鳥の最後	661
崩壊	676
イタリア戦前	691
カテナチオカウンター	705
熱闘	716
ミスターKとルシエ	729
ミスターKの最期	738
最後のノートと伝承の鍵	752

究極の強化人間プレイヤー	931
コトアール襲撃	916
サツカー王国の逆襲	901
ロニージョの暴走	882
ガルシルドの陰謀	869
ザ・キングダムの間	857
音無の想い	842
千年の決着	832
魔王降臨	819
音無奪還	802
魔界軍団Z	789
天魔襲撃	775
グループAのオールスター	765

恐怖のチームガルシルド	940
40年の終止符	948
あの時の契約	960
謎の幻影	969
オルフェウス再び	978
エール	991
決勝戦	1009
頂上決戦 前編	1020
頂上決戦 後編	1038
世界一	1052

# 地上最強編

## イプシロン襲来

俺こと比企谷八幡は、総武中の3年生である。学内で有名な雪ノ下雪乃と、同じクラスの子の由比ヶ浜結衣と3人で、今日も変わらず奉仕部という部活に取り組んでいる。今では妹の小町を含め、新奉仕部として活動していた。

「ねえねえお兄ちゃん」

「なんだ？我が妹よ」

「喉乾いたからなんか買ってきてよ」

「ちよつと小町ちゃん？なにお兄ちゃんをパシリにしようとしてるの？」

小町は相変わらずである。兄に対する接し方が今日も厳しい。どこで教育を間違えたんだろうか。

「大体、喉乾いたなら雪ノ下から紅茶淹れてもらえばいいだろ。小町の掛け声一つで美味しい紅茶が飲めるんだぞ」

「あら？貴方いつの間に私を扱き使うようになったのかしら？武を弁えなさい。このパシリ谷くん」

いつものようにキレのある罵倒をする雪ノ下さん。今日も調子が良いですね。

「そうだよヒツキー！ゆきのんをパシったらダメなんだから！」

いつものように明るく振る舞う由比ヶ浜さん。その優しさを俺にもくるとありがたいんですが…。

そんないつも通りの時間を過ごしていると……。

「誰なんだ、君たちは!？」

外から誰かの大きな声が部室にまで聞こえてきた。この声は……。

「今の、隼人くんたちじゃない?」

我がクラストッププカーストの葉山隼人。そんなあいつがこんな大きな声を出しているということは、何かあったんだらう。

「隼人くん達に何かあったのかも!行こうよ!」

俺達は葉山達、サッカー部が練習しているグラウンドに向かった。グラウンドの周りには、放課後に部活や委員会で残っている生徒や教師陣が集まっていた。

「君たち!」

駆けつけた俺達の後ろから、平塚先生がやってきた。

「平塚先生。この騒動は一体……」

「……宇宙人だ」



平塚先生はふざけた様子ではなく、真面目な顔でそう告げた。普通なら、有り得ないと言わざるを得ない。しかし、普通ならば、だ。

「宇宙人って……最近学校壊してるっていう……」

「ああ。この総武中に、エイリア学園が来たんだ」

全国の学校を片っ端から破壊している組織、エイリア学園。あのFF優勝校の雷門でさえ、破壊されているという。

「我々は、エイリア学園ファーストランクチームのイプシロン。我々の力を示し、愚かな人間達を平伏すために来た」

黒のサッカーボールを持った、黒尽くめの謎の長身の男がそう告げた。それに対し、葉山は。

「残念だが、俺達は君らと試合する気はない」

「断れば、この学校を破壊することになるが？」

「くっ……」

学校を守るためには、サッカーで宇宙人に勝つしかない。逃げ場はゼロである。

「……分かった。引き受けよう」

「ちよ、隼人くん!？」

「このまま学校を壊されるわけにはいかないだろ？頼む、戸部」

「……隼人くんがそう言うなら仕方ないって！」

「…ありがとう。みんな、絶対に勝つぞ!!」

葉山の一声にサッカー部は意気投合する。ベンチにいる、一色いろはを含めたマネージャーは心配そうに見ている。

「では早速試合を開始する。先行はそちらに譲ろう」

キックオフは葉山達から。戸部と葉山のツートップのようだ。ホイッスルが鳴り響き、試合が始まった。

葉山達は、パスを繋ぎながら相手陣内に切り込んでいくが、イブシロンは誰一人動かなかった。

「隼人くんッ！」

「ああー！」

戸部と葉山は連続でシュートパスを繰り返す。すると、ボールは分裂し、二人の足元に。

「デュアルツ…ストライクツ!!」

戸部と葉山の同時シュート。打たれた二つのボールは一つに戻り、それぞれの威力が合わさって黒尽くめの男に向かって飛ぶ。

だが、黒尽くめのあいつは。

「打ち返せ」

たつたそれだけ。その言葉でDF二人は、デュアルストライクを軽々と返す。返ったボールはデュアルストライクより遙かな威力を放ち、戸部と葉山を吹き飛ばす。

「うああああッ!!」

そのボールを止めようと、他の選手は群がるが、威力が威力だけに彼らは吹き飛ばされてしまうだけだった。

そのまま返されたボールはキーパーごとゴールの中へ。

たつた一回のカウンターが、総武中の選手を全滅させた。しかし、葉山だけは諦めなかった。

「絶対に……諦めてなるものか……!」

彼は重い足取りでボールを拾い、プレーを続けようとした。俺達は、それを黙って見るしかなかった。

葉山からのキックオフで試合再開。だが、戸部を含め誰も立てずにいる。

「つまらん。ゼル、ガニメデプロトンだ。戦術時間は3.7秒」

「了解しました」

ゼルと呼ばれる男は、ウサイン・ボルトをも超える加速で葉山から奪う。パワーが足りないせい、葉山は吹き飛ばされてしまう。

「ぐあああああッ!!」

そのままゼルはシュートの体勢に。ボールに手をかざし、気を送る。気を送られたボールは凄まじいパワーを放つ。

「ガニメデ……プロトンツ!!はアツ!!」

所謂、かめはめ波とも呼ぶべきシュートは倒れたキーパーなどお構いなしに、ゴールに突き刺さる。

「これが……エイリア学園……」

俺は驚愕のあまり、そんなことしか言えなかった。小町は恐怖に怯えた顔で俺の腕に抱きつき、由比ヶ浜は雪ノ下にしがみついている。

「は、葉山先輩ツ!!」

そんな中、一色は倒れた葉山達に駆けつける。

「葉山先輩ツ! 戸部先輩ツ!」

一色がいくら声をかけても、彼らはただ倒されて返すことすら出来なかった。

「我々エイリア学園の力を思い知ったことだろう。総武のサッカー部員は倒され、勝負は着いた」

黒尽くめのやつは、まるで演説をしているかのように、総武の人間に伝える。

「まだ……まだだ……」

それでも、葉山隼人は諦めていなかった。

「は、葉山先輩！」

「まだ……試合は終わっていない」

だが、葉山も虫の息だ。意識を保っていることが奇跡なレベル。

「まだ我々に刃向かうとはな。ならば、二度と立てないようにしてやろう。マキユア！」

「了解しました」

マキユアと呼ばれる女選手は、葉山に向けて打ち込んだ。一色は葉山を庇おうと背中を向ける。

だが、何故だろうか。俺は、気がつけば……。

「クソがッ!!」

俺は、マキユアのシュートに足を出していた。正直、バカにならないほど痛い。だが、ここでボールが後ろに飛ばば悲惨なことが起きる。

「ああアアッ!!」

俺は足を振り抜いた。ボールの威力が弱まり、どこかに転がっていく。

「いつてえ……!!」

「せ、せんばい！」

「比企谷……!?!」

しかし、皮肉にも俺の身体は痛みになれているようだ。以前、雪ノ下のリムジンに轢かれたことで耐性が付いたのだろうか。

「せんばいつ！せんばいつ!!」

「一色……お前、わりと無茶するやつなのな……」

「せんばいこそ！なんで出てきちやうんですかつ!？」

「なんでだろうな……。身体が勝手に動いたってやつだな……」

俺は足を震わせながらも、立ち上がる。せめてもの反発として、やつらを睨む。

「ほう……ただの人間が我らイプシロンのシユートをカットするとはな……。控えの選手か？」

「んなわけないだろ。制服姿の控え選手がいてどうすんだよ……。いつてえマジ……」

「ふっ。雷門の他にも、このような逸材がいたとは……。貴様、名は？」

「人に名前を聞くときは、まず自分からって宇宙で習わなかったか？」

「……私はイプシロンを率いる長。名はデザームだ」

「……比企谷八幡だ。覚えなくて結構だよ」

「比企谷八幡だな。潰しておくには惜しい逸材だ。……引き上げるぞ、イプシロンの戦士よー!」

そう言つて、デザームの足元に黒いサッカーボールがいつの間にか現れて、禍々しい

赤色の光を放つ。デザームの周りにイプシロンが集まり、赤い光が一気に光り出すと、イプシロンの戦士は消えていた。

「ふう……」

俺は気が抜けたせいか、その場で力無く座り込んでしまう。

## 雷門レギュラー登場

エイリア学園イプシロンが去った後、総武中には何台もの救急車が駆けつけ、サッカー部員を運んでいく。

担架で運ばれていく葉山や戸部に、俺達は駆け寄る。

「隼人くん……」

「悪いな結衣……優美子や姫菜たちに、謝っててくれ……」

「うん……」

いくらF F全国大会に参加していたとはいえ、ここまでズタボロにされるとは……。

「比企谷……」

不意に、葉山が俺の名を呼ぶ。

「……なんだ」

「……最後に教えてくれ。なんであのととき、助けた？」

「……別に善意で助けたわけじゃねえよ。さっきも言ったら、身体が勝手に動いた。それだけだ」

「……そうか……。怪我が治ったら、一度君とサッカーをしてみたいな……」



「お断りだ。大体、俺に集団でやるようなスポーツが出来てんなら今頃パリピだわ」  
「…それもそうだな」

葉山は儂げな笑みで、救急車の中に運ばれていく。学校は壊されずに済んだものの、総武中サッカー部は全滅だ。

「……これからどうなるんだろ」

由比ヶ浜は不安げに呟く。

「…サッカーで力を見せつけてくるあたり、この学校は狙われないかも知れない。狙われる可能性も否定はしないが」

「…どのみち、私達には何も出来ないわ」

あの雪ノ下でさえ、現状を打破することが出来ないと言う。超常的なことが起こってしまったからか、誰も受け止め切れていなかった。

「せんばい…」

一色がいつものようにあざとらしく俺の袖を掴む。だが、顔は今にも泣き崩れそうであつた。

「…行かなくていいのか？」

「……はい。葉山先輩たちが学校を守ったんです。サッカー部のマネージャーで生徒会長でもある私にも、何かやるべきことではないかなって……」

「…強いな、お前」

眼前で葉山たちが倒されておきながら、自分に何か出来ることを模索している。すると、救急車とは入れ違いで、青いキャラバンが総武中に乗り込んできた。

「平塚先生、あれなんすか？」

「いや……私にも分からん」

青いキャラバンから、青色と黄色の鮮やかなジャージを纏った者達が次から次へと降りてくる。

「お兄ちゃん……あれって……」

話したことはないが見覚えがあつた。バンダナを付けた男にゴーグルを付けた男、中学生にしてはだいぶデカイ男も。

「雷門……」

F F 全国大会優勝校で、一度エイリア学園を退けた雷門中学。キャプテンの円堂守を筆頭に、強者達が顔を揃えてやってきた。

「くそつ、一足遅かったか……」

「でも、校舎は壊されてないでやんすよ？」

「イブシロンがまだ来てないとか？」

キャラバンから、女性が現れる。おそらく、雷門の監督か何かだろう。

「失礼、その貴女」

「は、はいっ！」

謎の女性は一色に話しかける。

「イプシロンが総武中に襲撃予告が届いたと聞いたのだけれど……」

「え、えつと……」

「イプシロンは先程、この総武中に来ました」

一色の代わりに、平塚先生が答える。

「そうですか……」

「一つ、聞いていいですか？」

ゴーグルを付けたドレッドヘアーに、青のマントを羽織るオプシオンだらけの男が質問する。

「何だ？」

「イプシロンはジェミニストームと同じく、学校破壊を主軸に強豪校に姿を現しています。ですが、イプシロンが来たのにも関わらず、総武は破壊されていません」

「ああ……そのことか……」

チラリと俺を見る平塚先生。

いやちよつと待って。なんで俺見るの？俺何かしたか？

「せんぱいですっ！せんぱいがイプシロンを追い払ったんですっ！」

一色が興奮気味にそう答える。

せんぱい？ああ、葉山達だな。確かに身を挺してまで学校を守ったからな。

「葉山先輩達はイプシロンに倒されて……でも、せんぱいが駆け付けて助けてくれたんですっ！」

葉山達じゃなければ、きっと謎の存在Xだな。X先輩ありがとう。総武中を守ってくれて。

「ちよつとトイレ行ってくるわ」

「待ちなさい比企谷くん」

この場からフェードアウトしようとするも、雪ノ下が俺の腕を掴む。もう嫌な予感しかしないんだけど……。

「ちよつと落ち着きなさい。その、貴女の言う先輩って、一体どなた？」

茶髪のお嬢様のような子が一色に問う。一色はこちらに振り向いて、指を差した。

「あのせんぱいです！あの人が、イプシロンを追い払ってくれたんです！」

すると周りと同じところに一斉に視線を向けた。視線を向けた場所は……。

はい、勿論俺しかいません。

「あいつがイプシロンを……？」

「へえーっ！スッゲーなあいつ！」

バンダナ男、円堂守が一目散にこちらに駆け寄る。

「君、総武のサッカー部？」

「い、いや……。つか、サッカーなんてリフティングとドリブルぐらいしかしたことないし」

勿論、一人でね。

一人野球も一人サッカーも一人バスケットも出来ちゃう比企谷八幡ですこんにちわ。

「君、サッカー好きなのか？」

「別に嫌いじゃないけど……」

つかさつきからこいつぐいぐい来るんだけど。コミュ力高くない？まさか葉山達と同じ、あちら側の世界の人間か？

「俺、円堂守！君、名前は？」

「……比企谷八幡だ」

「比企谷だな！よろしくな！」

円堂は右手を差し出す。何これ。カットアゲ？

「お兄ちゃん、握手だよ握手」

「お、おう。まあ、何。よろしく」

俺と田堂は握手をする。つーかめっちゃ握るやんこいつ。痛いし。

「監督！比企谷をイナズマキヤラバンに参加させてもいいですか？」

「え？」

「……その前に、彼の実力が知りたいわね」

「ちよつと？」

なんか知らん間に勝手に話進んでるんだけど。

「俺達と一緒にサッカーしないか？」

「へ？」

「イプシロンを追い払ったんだ！きつとやってみたら楽しいぞ！」

「ちよつと待って？サッカー素人なんだけど。リフティングとドリブルしかしたことな

いけど。一人で」

「大丈夫だって！な？サッカーやろうぜ！」

いや何が大丈夫なのん。イプシロンを追い払ったことで、おかしな展開になっていてしまった。

## 雷門に加入

前回のあらすじ。なんかサッカー誘われた、以上。

いやおかしいから。なんで誘われちゃうの。

「……なんでこんなことに……」

どうやら俺はサッカーすることになりました。雷門の監督、吉良瞳子監督曰く、実力がどの程度のものかを見てみたいから、という理由でやらされることに。

1 vs 4のサッカーバトル。勿論、俺が一人。キックオフは俺からで、ゲーム内容は俺が相手ディフェンスを突破出来るかどうか。

「……無理ゲーだろ」

相手は雷門だ。ど素人が叶うような実力じゃない。

「では始めて！」

吉良監督の合図でホイッスルが鳴り響く。俺はとりあえずドリブルで相手陣内に走っていく。

しかし、一ノ瀬一哉が俺の前に立ち塞がる。

「あ。あそこにUFO……」

俺は明後日の方向に指差すが、誰一人として向いていなかった。  
やだ何恥ずかしい。

「…それで突破出来ると思ってたのかい？」

「いや、出来たら良かったな……みたいな」

よしちゃんしよう。小町がゴミみたいな目で見てる。

こうなれば、ぼっち生活の中で会得した必殺技を披露しよう。

俺は誰もいない場所に、強烈なスピンをかけてボールを出す。

「えっ？」

相手は反射的にスピんがかかったボールに視線を向ける。その隙に俺は一之瀬を抜いて、抜いた先にはスピんをかけたボールが俺の足元に戻ってくる。

これぞ、ぼっち生活の中で会得した必殺技、ひとりワンツ―。

「へえー中々やるねー」

しかし次に立ち塞がるのは鬼道有人。元帝国学園のキャプテンで、今は雷門にいる。

彼は、司令塔という役に徹している。

「ふっ。それなりには出来るようだな」

「いや、あれで出来る範囲になるの？」

イブシロンとか思いつきり必殺技を打ち返してたけど。出来るってそんなくらしい



じゃないの？

俺が右に行こうとすると、彼も右に来る。左に行くとき左に。それに、さっきのワンツーを警戒しながらも、こちらを伺っている。

ちよつと強引だが、試してみる価値があるプレーが頭によぎる。

「怪我すんなよ、鬼道」

「何？」

俺は少し後ろに下がり、そのままドリブル。その勢いで、思いつきり足を後ろに振り上げる。

鬼道は自分が当てられるといち早く察知し、防御の体勢に入る。

俺はそれを狙った。防御の体勢に入った瞬間に俺は鬼道目掛けてシュート………ではなく、鬼道の頭上にボールを浮かせる。

ボールは鬼道を超えて、その隙に俺は鬼道を抜き去る。

「何ッ！」

「鬼道が抜かれた!?!」

これぞ初見殺しの必殺技……ライアーショットってね。今初めてやったが、かなり上手い具合に成功した。

誰だつて当てられるつてなつたら本能的に防御の体勢に入る。それを逆手に取る必

殺技だ。

「やるな、比企谷」

そのままドリブルしていくが、目の前には巨大な壁が……ではなく、壁山が立ちはだかる。

「この先は絶対行かせないっす！ザ・ウオオオール!!うおおおおおッ!!」

壁山の雄叫びと共に、後ろから山の様な壁がそり立つ。

壁山の気迫に俺は押されてしまう。だが、俺は今まで様々な敵意を向けられてきた。

気迫程度で、押されることはない。

俺は壁山のザ・ウオールの壁を超えるようなループボールを打つ。浮いたボールは壁山の大きな壁を超える。

その隙に、横から抜き去る。

「スッゲーな比企谷!」

そういうと円堂は右手を開き、左手を握りしめて、両手で気合いを入れるようにパン叩く。

「よし、来い!!」

コースを狙うなんてそんなことは出来ない。パワーだってない。止められるのは分かりきったこと。

それでも俺は、ゴールに打ち込む。

蹴られたボールは、ゴールの隅に飛んでいく。しかし、それをドンピシャで反応した  
円堂は、横っ飛びでボールを掴む。

「へへっ！いいシュートだ！」

「止められてるけどな」

「監督！どうですか!？」

円堂が吉良監督に尋ねる。吉良監督は、

「…そうね。中々センスはあるようだし。…比企谷くん、君のイナズマキヤラバンの参加を認めます」

どうやら合格はしたらしい。円堂は嬉しそうにこちらに駆け寄る。

「やったな、比企谷！」

だが、俺は。

「…折角の合格ですけど、イナズマキヤラバンには参加出来ません」  
俺はその誘いを断った。

「な、なんでだよ！折角いいプレーが出来るのにさ！」

「…俺には、妹がいる。それに、あいつらも……」

小町と奉仕部の二人。

あいつらを放って行くことは出来ない。

「行きなさい、比企谷くん」

雪ノ下は迷わずそう言った。

「奉仕部のことは、私と由比ヶ浜さん、それに小町さんに任せてちょうだい」

「そうだよ！ヒツキーがいない間、私達が奉仕部を守るから！」

「お兄ちゃんが帰ってこなくなるのは寂しいけど……でも、小町的にはサッカーをしてるお兄ちゃんもありかなあって……」

「小町……雪ノ下……由比ヶ浜……」

本当、みんなカツコよすぎだろ。俺はヒロインかよ。

「せんばい……」

「……一色」

「……葉山先輩の仇、ちゃんと取ってくださいよね！もし取れなかったら、あることないこと言いふらしますから！」

「え、ちよつと。それはダメ」

交換条件が怖すぎんだろ。

……本当、カツコよすぎだろ。

「……分かったよ。ちよつと行ってくるわ」

こうして俺は、イナズマキキャラバンの一員となった。

## ナニワのCCC

愛する千葉から離れ、エイリア学園を倒すため、全国から強いサッカープレイヤーを集める旅に出た俺。

イナズマキヤラバンに参加したのはいいんだが。

「なあ、あの一人ワンツってどうやるんだ？」

「一人で練習していたと言っていたが、どんな練習をしていたんだ？」

「なんで死んだ魚みたいな顔なんですか？」

転校生あるあるの質問攻め。俺は転校生じゃないぞ。

あと最後。マネージャーの音無だっけ？もはや人間じゃないよねそれ。化け物でしょそれ。

個性溢れる雷門の連中からの質問を流して、目的地に着くまで待った。次に行くのは、大阪である。そこには、エイリア学園のアジトがあるそうだ。

そして数十分後。

大阪には着いた。確かに着いたのだが……。

「エイリア学園って遊園地好きなの？」

まさかの大阪にある遊園地、ナニワランドに着きました。

正直、エイリア学園のアジトがこんなところにあるとはあんまり考えられないが……。

「お父様からの情報では、ここナニワランドにエイリア学園が頻繁に訪れているらしいわ」

マジかよ。

あいつらの行動どうなってんだよ。

「よーしー！そうと分かれば、みんなで探すぞ！エイリア学園のアジトー！」

円堂の掛け声で、みんなは意気込む。そうしてみんなはそれぞればらけてナニワランドに探索に出る。

あと、吹雪くん？だっけ。さらつと逆ナンされてませんでした？

俺も探そうと意気込むも、既に誰一人周りにはいない。残ったのは俺一人でしたテヘペロ。

キャラバンに入ってもぼっちとは。孤高の存在過ぎてマジヤバイ。

「…探すか」

とりあえず、虱潰しにナニワランドを探索する。しかし、どこもかしこも遊園地ばか

りで、エイリア学園が潜んでいる気配はない。

そもそもやつら瞬間移動出来るんだから、わざわざアジトに入る用の入り口なんて作ってないと思うけど。

しばらく探して、休憩がてらベンチに座る。

「木暮くん、遊びに来たわけじゃないの！エイリア学園のアジトを探すために来たんだから！」

「楽しかったーっ！次はあれにしよう！」

マネージャーの音無の姦しい声が聞こえる。どうやら、木暮という人物に振り回されている……というより、勝手に遊んでいる木暮を音無が追いかけてるって構図が正しい。

「…おいしい」

すっかり楽しんでますね木暮くん。そのまま彼らはまたどこかに消えて行く。

「…マツカンでも買おうかな」

そう思い、近くの自動販売機まで足を運ぶも。

「…またマツカンがない、だと…」

なんでマツカンが全国展開されないのか疑問である。

こんなこと分かってたら、家にあるマツカンを根こそぎ持ってくるんだったな……。



「……ん？」

溜息を着き、再び探そうとしたが、今度は一之瀬が逆ナンされている現場を目撃した。関西人さつきから逆ナン多くね？

とはいえ別に俺が気にする必要もないし、一ノ瀬を置いて再び探し始めた。

1時間後。

ナニワランド出口で雷門のみんなが集合。しかし、誰もエイリア学園のアジトらしき場所を見つけられなかったそう。

「…あれ？一ノ瀬くんは？」

マネージャーの木野が、一之瀬がいないことに気づく。

「一之瀬ならさつき地元らしいギャルに逆ナンされてたぞ」

「ぎ、逆ナン!？」

「どこ行ったかは知らんけど」

「一之瀬なら外に出たらしいよ」

俺の言葉に、逆ナン第1号の吹雪が答える。なんだかんだで君も楽しんでたのね。

吹雪と一緒にいた女の子からの情報だと、大阪の市街地の中にあるお好み焼き屋さんに行つたそう。

その情報を得て、俺達はお好み焼き屋さんに向かった。

「ここだな、あの子達が言ってたお好み屋焼き屋さん」

円堂が引き戸をガラガラと開ける。中には、一之瀬とさつき一之瀬を逆ナンしたギャルが楽しそうに話していた。

「あ、円堂！」

「一之瀬！こんなところで何してたんだ？」

中を見た感じ、一之瀬くんはお好み焼きを平らげたようですねそうですか。

「さつき言うてた仲間うちゅーのはこいつらなん？」

「あ、うん。じゃあ俺そろそろ行かなきゃ。お好み焼きご馳走様！本当美味しかったよ」  
一之瀬は礼を言って立ち去ろうとするが、ギャルがそれを遮った。

「あんた、ウチが作ったラブラブ焼き食うたやろ？あれ食べたなら結婚せなあかん決まりやねんで」

「け、結婚?！」

そっかそっか結婚するんだ一之瀬くん……………え、結婚？

あれか？人生の墓場って呼ばれるあれか？

「で、でもさつき一言も…」

「先に言うてたら食わなかったやろ？ま、そういうわけで。宇宙人なんか知らへんけどそれはあんたらが勝手に倒しといてな。ウチはダーリンとラブラブな生活を送るね

ん」

「だ、ダーリン!？」

そう言つて彼女は聞く耳持たずに俺達を店から追い出した。

「ふ、ふ、くくつ……」

「…比企谷、笑いすぎだ」

「い、いや。すまん」

鬼道に窘められた。

つい笑つてしまった。葉山が振られたくらい面白かつたわ今の。

「でもどうするんすか? 一之瀬さん、このままお好み焼き屋さんで働くことになつちゃうんすか?」

「そんなわけではないだろ! 何が結婚だ」

円堂がもう一度引き戸を開けようとする、誰かが隣から円堂を押しして割り込んできた。

「何するんだ!」

「何つて、リカ呼びに来たに決まってるやん」

するとぞろぞろと同じユニフォームを着た女子たちがやってきた。

「キュート!」

「シツク！」

「クール！」

「ウチらナニワのサッカー娘！」

「キュートでシツクでクールな大阪ギャルズ…CCC!!」

な、なんじゃこの連中は……。つか、一人。どう見てもサッカー娘とは言えないガタイのやついたろ。

「ちよ、リカ！もう練習時間過ぎてんで！」

チームメイトの一人が一之瀬が平らげた後の皿を見ると、

「みんなーっ！リカの結婚相手決まったでー！」

「えー！嘘ー！」

「どんな人なん？」

CCCの連中は一之瀬の姿を一見ようと店の入り口前でわらわら集まる。

「…ま、でもこのままじゃ、勢いで面倒なことになるけども。どうすんの、円堂」

「どうするって言われても…」

「こうしたらいいじゃないですか！」

眼鏡をキラリと輝かせた目金が解消方を説明した。

「サッカーで決める!?!」

「試合で勝ったチームが一之瀬くんを連れて行けるんです」

「まあこのままだと騒ぎが起きて監督も来るからそれもありなんだろうが……やけに自信あるな、お前」

「相手は女子チームですよ？僕達が負けるわけじゃないじゃないですか」

そんな理由で試合を挑んだのかよ……。見た目で人を判断すんなって言いたいが、もしかすればこの目金とやらも、相当なプレーヤーなのかもしれない。

「それおもしろいな！ウチらは全然ええで？」

「じゃ、決まりですね」

そう言つてCCCとともにサッカーグラウンドに向かった。グラウンドに着いて、各チーム準備に入る。

「比企谷、今回から入つてくれるか？」

「いや、それはいいけど。足引つ張るぞ？」

「大丈夫ですよ。なんせ相手は女子チーム。気楽に行つてください」

そう言つて、代わりにベンチには目金が入る。

君は入らないの？あんだだけ自信ありげだった君は何処へ？

「……ま、なんとかする」

しかし俺が着いた位置がFW。いやちよい待ち。俺シュートとか決められないんだ

けど。

「俺の位置大丈夫？」

「別にいいんじゃないの？……たく、なんで私達がこんなチームと試合しなきゃいけないの？」

「どうやらご不満なようでございます、私のチームの総理大臣の娘さんは。」

「リカ、頑張るで！」

「当たり前や！見ときや！ウチの必殺つうてんかくシユート打ち込んだるわ！」

「そう言つて、相当な自信を持ちながら俺達にプレッシャーをかける。」

「……そんな技あつたん？」

「そんなんあるわけないやん、アホやな。こんなん、言うてたらええねん」

「……小町。関西人にはあまり近づかないようにね。思考回路がマジで意味不明すぎる。」

「キックオフは大阪ギャルズから。ホイッスルが鳴り、一ノ瀬を賭けた試合が始まった。」

## 雷門 v s 大阪ギヤルズCCC

大阪ギヤルズからの試合開始。ボールを持った御堂がそのまま攻めていく。見たところ、普通のドリブルだった。

目金の言うように、単なる野良のチームだったのか。

…と、そう思いきや。

御堂は両足で足を挟み、そのままロンドルトからのバク転でドリブルしていく。何あれ、サーカス芸？

そのドリブルを風丸が止めようとするも、一瞬動きが止まって抜かされてしまう。そのまま御堂は浦部にパス。

浦部のダイレクトシュートがゴールに向かうが、円堂がガツチリキャッチした。

「風丸、どうかしたのか？」

「い、いや…」

風丸は御堂を見ていた。対する彼女は、手を振ってウィンクしている。それを見た風丸は顔を赤くする。

「…そういうことかい」

一色さん。どうやら貴女と同じ人種の方々が関西にもいるようですよ？

そこから先は完全に大阪ギャルズのペース。単に容姿を使つて翻弄しているだけでなく、しつかりとした実力がある。手強い相手だと、素人の俺でも分かる。

「比企谷！」

鬼道からボールが俺に渡る。俺はそのまま攻め上がる。

「行かさへんで？」

先程の風丸同様に、ウインクを仕掛けてくる。しかし。

「ふっ！」

それを無視して必殺ひとりワンツートを繰り出す。

「え、なんなん今の!？」

残念だったな。こっちの地域には小悪魔な後輩とか妹とか世界を統べそうな魔王がいるから耐性は付いてる。

…嫌な耐性だな。

しかし、それを警戒したのかMFの天王寺とDFの堀が前からボールを奪いに来ようとする。

「怪我しても知らねえぞッ！」

俺はそのまま彼女達にぶつけるつもりでシュートの構えに入る。反射的に、彼女達は



身を守ろうとするが、その隙を付いて彼女達の頭上にボールを浮かす。

「ライアーショット」

そのままゴールに持ち込むも、横から梅田にボールを奪われた。

「ミスったかッ…」

梅田から流れるようにボールが渡り、いつの間にか御堂と浦部がシュート体勢に入る。

「バタフライドリイームツ!!」

不規則に曲がるツインシュートが円堂に向かって飛んでいく。

「熱血…パンチツ!!」

思い切り振りかぶった円堂のパンチを軽やかにかわし、ゴールに入る。

そのまま前半終了のホイッスルが鳴る。彼女達は誰かのママさんが作ったお好み焼きを食べて休憩しようとした。

対してこちらは。

「…目金。女子チームめちやくちや強いんだけど?」

「お、おかしいですねえ…」

「こいつ本当なんなんだ。」

「けど、本当に強いよ。彼女達」

「…相手の攻撃方法は置いといてな」

雷門の彼らでも苦戦する強さ。ただの野良チームがここまで強くなれるものなのか？

「とにかく、相手のペースに惑わされずに行こう！いつも通り、俺達のサッカーをするんだ！」

後輩から、FWには財前と吹雪が交代。どうやら彼が雷門のエースストライカーのようだ。

「よろしくね、比企谷」

「お、おう」

なんだこのイケメンスマイルは。君は葉山くんなの？ザ・ゾーンでも使えるのん？後半のホイッスルが鳴る。ボールは俺に渡り、そのまま駆け上がる。

「ここは止めるで！」

3人がかりのディフェンス。俺の実力じゃ抜けないと判断し、吹雪にパスへ。

「吹雪！」

するとボールが吹雪に渡った瞬間、彼の雰囲気豹変する。

「エターナルブリザードッ!!うおおおオオオッ!!」

氷を纏ったシュートは大阪ギャルズのゴールに突き刺さる。

後半開始早々、吹雪が点を入れる。

「ナイスシュートだ、吹雪！」

「うん」

シュートを決めた途端、普段の穏やかな吹雪に戻る。

吹雪は二重人格か何かか……？

取られた点は取り返す。そう言わんばかりに、大阪ギャルズの反撃が開始。彼女達の華麗なドリブルで雷門デیفエンスを突破。

壁山はザ・ウォールを繰り出しても、浦部は軽々突破。

「オチは最後まで取っとくもんやで!!」

浦部は空中でシュートの体勢。

「ローズ……スプラッシュ!!」

浦部から放たれたバラを纏うシュートは円堂に襲いかかる。

しかし、彼は前を向かず、後ろに振り向く。あれは……。

「マジン・ザ・ハンドオツ!!うおおおお!!」

円堂の後ろには魔神が現れ、その魔神と共にローズスプラッシュをガッチリ止めた。

「あれがマジン・ザ・ハンド……凄えな」

テレビで見るより、迫力や気が全然違う。止めた円堂は一ノ瀬にパス。

今度は彼が、大阪ギャルズを華麗なドリブルで躲して行く。ゴール前まで向かった一之瀬は必殺技の体勢に。

「スパイラル…シヨットツ!!」

強烈なスピンのがかかったボールは大阪ギャルズゴールに突き刺さる。これで2—1。そこから先は、吹雪と一之瀬の活躍が止まらなかつた。

そして試合終了。

結果、4—1で雷門の大勝。

「やっぱ強いなあ、雷門は」

「ほんまに。流石FFで優勝しただけあるわ」

しかし浦部は。

「さっきの試合めっちゃカッコよかったでダーリン！ウチ、もう絶対離れへん！」

「え、ええ!?!話が違うよ…」

「どうやら尚のこと悪化したようだ。」

「でも、君達も強かったよ」

「本当つす。これでも俺達ジェミニストームに勝ってるつすよ?」

「…大方、凄い特訓場が近くにあるんじゃないやねえの知らんけど」

すると俺の言葉に、彼女達は沈黙する。

おや？これはもう答え出ちゃってますね。

「それやったらな……」

浦部が答えかけたその時、彼女達が一斉に口止めする。それだと本当にあるって言ってるようなもんなんだけどね。

その後、彼女達は納得したのか、彼女達の強さの秘密を教えてくださいることになり、再びナニワランドに向かうことになった。

## エイリアの修練場

大阪の地元チーム、大阪ギャルズCCCに試合で勝ったあと、彼女達の強さの秘密を知るために再びナニワランドにやってきた。

入ったのは、なんでもないただの城だった。

「ここならさつき来たけど、何もなかったぞ」

風丸は思い出すように言った。確かに見渡す限り、何も無い。

「やと思うやろ？ここにちよつと来てみ」

浦部がいるところにみんなが集まる。浦部は手すりをガコンと押し出す。それと共に、床が下に降りていく。そこは遊園地とかけ離れた雰囲気を持つ場所だった。

「ここが、ウチらの特訓場やで」

一番下に降りると、使い込まれたルームランナーや様々なサッカー専用の機会が揃えられていた。

「これがCCCの強さの秘密か……。確かに、使い込めば身体能力はかなり上がりそうだが。しかしナニワランドも妙なところに特訓場作ったな」

「これ別にナニワランドのものちやうで？」

「は？」

俺は呆気に取られた声で聞き返す。

「ナニワランドで探検してたら偶々見つけてもうて。じゃあなんかいっぱいトレーニグの機械あるし、ダイエツト代わりになるんちやうかなって思ってた使おうとってんで、ずつとトレーニングしてた結果、メキメキ強くなったと。」

「…この施設の技術力を見るからに、おそらくエイリアの修練場かも知れないわ」

吉良監督が周りを見てそう考察する。確かに、言われてみればナニワランドがこんな修練場を作る必要がない。さらに言えば、あんな分かりにくい仕掛け、一般人が分かるわけがない。

「…まあ浦部達が今まで使い込んでるみたいだし、エイリアが放棄した施設っぽいな」

「イプシロン戦まで残り3日。このトレーニグルームを使えば…!」

「ああ! パワーアップ間違いなしだぜ! なあ、使わせてもらってもいいか?」

円堂が浦部に尋ねる。対して浦部は嫌そうな顔をする。

「ダメかな?」

一之瀬が尋ね直すと、嫌そうな顔が一転。

「うん! めっちゃめっちゃええで!」

どうやら浦部には一之瀬を使うと効果抜群と。ポケモンかよ。

俺達は修練場を隅から隅まで見回った。……なんで所々デコられてんのかはよく分からんが。

俺達は早速使うことにした。俺はそもそも基礎体力やスピードが彼らより劣っているため、それを伸ばすためにトレーニングを始めた。

それから数時間後。休憩時間になり、みんなは昼食時間に。CCCのメンバーが差し入れを持ってきたようだ。

みんなが集まって昼食している最中、俺は離れてサッカーのルールブックを読み込んでいた。

なんで一人かっつて？あんな集まって食べるの無理だし。察して。

「比企谷ー？食べないのかー？」

「別にそんなに腹減ってるわけじゃないしな」

最悪余ったやつ食べばいい。事実、そこまで腹が空いているわけではない。

しかし、俺のぼっちタイムを壊す輩がやってきた。

「はい、比企谷先輩！これ、適当に取ってきたやつです！」

初対面で俺の顔を最大限にデイスった音無春奈。聞いたところ、鬼道の妹らしい。複雑な事情があるんだとかなんとか。

「別に食べてて良かったんだぞ？」



「先輩も食べないと！この後の特訓でお腹が空いて死んじやいますよ？」

「別に死なねえよ。ま、サンキュな」

「はい！」

見たところ、餃子にお好み焼きに串焼きにたこ焼き。大阪名物尽くしだな、これ。

串焼きは、二度漬け禁止という。確か、普通の串焼き屋はタレがもう店側でもう机の上に用意されており、みんなが使い回すらしい。一度目は誰も口を付けていないからタレを漬けることができるが、二度目は食いかけの串焼きを漬けることとなってしまう、衛生面やらなんやらであまり良くないらしい。

博識な俺マジ天才過ぎる。

俺は適当に食べていくが、隣にはまだ音無がいた。

「まだ何か用か？」

「比企谷先輩って、なんでいつも一人なんですか？」

「なんでって言われてもな……」

そう真正面に聞かれても困る。

「まあ、別に理由はない。これがいつもの俺だからだ」

正直、あまりまだ信用は出来ていない。勝手な猜疑心を持っている俺は最低だろう。しかし、まだ会って間もないやつ達を、素直に信じる事が出来ているのならぼっちに

なっていない。

小さい頃から俺はいじめの対象だった。かつて虐められていた女の子がいて、不覚にも助けてしまったことがある。

親がいないと虐められていた女の子で、その場の正義感で助けてしまった。しばらくして、彼女は消えていた。もしかすると、俺が余計なことをしたからかも知れない。もう顔はあんまり覚えてないけど。

真実は闇のままだが、まあ要するに今までの環境のせいで人間不信だ。環境のせい、と言っただけはいるが結局は責任転嫁しているに過ぎない。

自業自得。身から出た錆。

つくづく当てはまると思ってしまう。

「比企谷先輩？」

「……ん？なんだ？」

「いや、目がすつごく腐りきってるっていうか……死んだ目になりつつあったので。何かありましたか？」

「別になんもねえよ。ほら、お前もさつきと食わねえと無くなっちゃうぞ」

「いっぱい食べたら太っちゃうので、大丈夫です！」

それは分かった。分かったけどなんでまだいるのん？俺のこと好きなのん？

「私、雷門のマネージャーなので！選手のことは把握しないとイケません！」  
どうやら離れるつもりはないようだ。

話をすり替えよう。このままグダグダ俺の話を聞かれるのも面倒だ。

「雷門のマネージャーなら、一つ教えてくれ」

「はい！なんででしょうか？」

「マフラーの……吹雪って名前か、あいつ。なんで攻撃と防御であんなに雰囲気変わるんだ？」

「さあ、なんでなんででしょうか？興奮するからですかね？」

「にしても変わりすぎだろ」

あれを興奮してるからで済ませるには決定打にはならない。

二重人格と言った方がピンとくるが……。

あまり本人に聞かない方が良さだろうか。

「……まあいいや。サンキュ」

吹雪士郎……ね。

どこぞの遊戯王みたいな厄介な過去を持っている可能性は高いな。

吹雪のことを頭の中の片隅に置き、俺は再びサッカーのルールブックを読み始めた。

## 吹雪とデザート

イプシロンは雷門に10日ほどの猶予を設けたらしい。そして時は経ち、9日目。ついに明日、イプシロンが来る。

みんなはトレーニングにトレーニングを重ねて、パワーアップをしていく。俺も俺で、サッカーの基礎、身体能力を向上させた。

しかし、一つ気になることがあった。

雷門のエースストライカー、吹雪士郎のことである。イプシロン戦が近づくと、彼は焦りを見せ始める。情緒が不安定と言っても過言ではない。

だから、それを聞くために今は練習を休んでいる。

「……何の用かしら？比企谷くん」

至っていつもと変わらない表情をした吉良監督。彼のことを聞くには、チームを率いる監督から聞くのが一番早い。

「まあ用つちや用ですね。……吹雪の攻撃と防御の時の雰囲気の変わりよう……あれ、なんですか？」

「……成る程。私が一人になるときに聞いたのは、そういうことなのね」

「吹雪本人に聞くのはタブーです。でも、音無達も雰囲気の変わりように関してあまり知っている様子じゃなかった」

「それで私に聞いたのね」

「…まあ、チームを率いる監督なら、せめて選手のことくらいは知ってるんじゃないかと」

地上最強を目指すために全国を回る旅にしてるんだ。監督として、選手のことを知ってるのは当然であろう。

「……そうね。比企谷くんには先に教えておくわ。実は吹雪くんは……」

そこから先は、悲惨な話だった。

吹雪が二重人格を持っているのは、俺の推測通りだった。防御時が吹雪士郎、攻撃時が吹雪アツヤと人格を変えていたようだ。

小さな頃、吹雪兄弟はサッカーをしていた。士郎がディフェンス、アツヤがアタック。完璧なコンビネーションで、とても強かったらしい。

だがある日、吹雪兄弟を乗せた車は雪崩で事故。士郎は無事だが、両親とアツヤがそのまま亡くなったそうだ。

そしていつしか、吹雪の中にアツヤの人格が生まれた。エターナルブリザードは、アツヤの必殺技だそうだ。

「……それ、だいぶヤバいんじゃないすか？」

「……何が言いたいのか？」

「人格を使い分けたことないから分かんないですけど。普通に考えて、それって精神的疲労が凄いいんじゃないですか？」

それだけじゃない。今の吹雪は、何かに対して焦っている。日が経つたびに焦っているあたり、多分イプシロンと何かあったのだろう。

「……エイリアを倒すとはいえ、この選択は正解だったんですかね」

「……それが私の使命だからよ。話が終わりなら、早く練習に戻りなさい」

吉良監督はそのままどこかへと去っていく。俺も明日のイプシロン戦に向けて、軽めな練習で上がることにした。

そして決戦当日。

ナニワの地下修練場のさらに地下のグラウンドにて。

「時は来た。10日ほどの猶予をやったのだ。どれだけ強くなったか見せてもらおう」  
イプシロンが再び現れる。

いつ見てもおっかなそうな連中ばかりだ。

「我々エイリア学園の力を、改めて地球の民達に知らしめる時が来た。この試合を通して、我々に歯向かうことの愚かさを噛みしめるがいい。愛するサッカーで、自分の弱さ

を否が応でも知ることになる」

「そうはいかない！俺達は、お前達に必ず勝つ！」

「フツ……そうこなくてはな」

俺達は試合の準備をする。まあ、今日はベンチ入りかな。

「比企谷くん、君はMFのポジションをお願いするわ」

「……いいんですか？この一戦、大事かも知れないのに素人を入れて」

「大事だからよ。君の才能は、エイリア学園にも通用する」

「……あんまり買いかぶりすぎないで下さい。……まあやれと言うならやりますけど」

どうやら最初からレギュラー入りになっちゃった。あと因みに、浦部もキャラバンに参加しました。一之瀬への愛ゆえに。

FWは浦部のワントップ。MFには、鬼道、一之瀬、俺、財前。DFは、壁山、風丸、木暮、土門、吹雪だ。GKは勿論円堂。

「……なんか悪いな栗松。いつでも変わって欲しかったら言ってくれ。即変わるから」  
「大丈夫でやんすよ！それより、イプシロンを倒してきて欲しいでやんす！」

「……強いな、お前」

きつと自分も入りたかつたらうに。俺なら陰でめっちゃ言ってるからな。

位置についた。間も無く試合が開始する。キックオフはイプシロンから。ホイッス

ルが鳴り、試合開始。

ボールを持ったマキユアが攻め込んでくる。

「メテオシャワー!!」

飛んだマキユアが下にボールを打ち込む。打ち込まれた衝撃がまるでメテオのように次々と雷門を襲う。浦部、財前、鬼道はダウン。

「行かせるかッ!」

風丸が徹底したディフェンスでマキユアに着く。マキユアもそう簡単には攻め込めず苛立つ。吹雪と木暮も風丸のフォローに入る。

しかしこういう時は……。

「マキユア!」

「必ず他のFWにパスするよな」

マキユアはゼルにパスするも、それを俺がカット。予測を立てれば、なんてことはなかった。

「いいで比企谷!そのまま攻め上がれ!」

目の前からMFのクリプトが襲いかかる。とりあえず牽制含めての必殺技。

「ライアーショットツ!」

クリプトが自分の防御に入った隙を狙って抜き去る。



「宇宙人って言ってもやつばボールを当てられることに抵抗はあるんだな。可愛いやつだ」

そう皮肉げに言い捨てると。

「…ぶっ潰す」

「……やつべ」

先程抜き去ったクリプトが、敵意満々でこちらに加速してくる。激おこぶんぶん丸だよ。いや古いな。

誰かにパスをしようにも、しっかりマークが付いており。

「ぶっ潰すー！」

クリプトは死角から俺のボールを奪って雷門陣に攻め上がる。

「ゼルー！」

クリプトからゼルへのセンタリング。ゼルが必殺技の体勢に。

「ガニメデプロトンッ！はああアアッ！！」

何度見てもかめはめ波だと思われるシュートが円堂に襲いかかる。円堂はマジン・

ザ・ハンドの体勢に入る。

「マジン・ザ・ハンドッ！！うおおおオオッ！！」

ガニメデプロトンをガッチリ止める円堂。そのキャッチに勢い付いた雷門は攻め上

がる。

「ツインブースト!!」

一ノ瀬と鬼道の連携シュート。しかしデザームは片手で止める。

「…最高だ」

雷門が攻めればイプシロンが守り、イプシロンが攻めれば雷門が守る。両チーム互角と言える試合である。

それに、これは俺個人の感想であるが、この前とは違いやつらのスピードに少し着いていくことが出来ている。イプシロンと対等に戦えている。

しかし。

「…いつまで守ってんだよー」

吹雪の雰囲気が変わり、イプシロンからボールを奪う。吹雪、もといアツヤが表に現れ、イプシロンのゴールへと突き進む。

「吹雪、パスだ!」

鬼道からの呼びかけも無視する。まさにアツヤのワンマンプレー。

吹雪の攻撃を止めようとするタイタンとケイソんだが、

「打たせろ」

デザームはディフェンス陣に道を開けろと言う。

「こいつが今日のメインディッシュだ！」

「ぎっけんな…!!くらいやがれエツ!!」

アツヤはデザームの言動に苛立ち、至近距離からの必殺技の体勢に。

「エターナルブリザード!!うおおおオオオツ!!」

力強い氷を纏ったボールがデザームに飛んでいく。対してデザームは怪しげな笑みを浮かべながら必殺技を繰り出した。

「ワームホール！」

アツヤのエターナルブリザードはデザームが繰り出す空間に吸い込まれ、そのまま空間移動して下に叩きつけられた。

「この程度では物足りんぞ……。もつと魂を熱く滾らせるようなシユートを叩きこめエ!!」

「ふざけんな…!!」

デザームが前線に大きくスローする。

「攻撃せよ！戦術時間は7.4秒だ！」

「了解！」

デザームの指示によりイプシロンが攻め上がる。ボールはファドラに。

「ギャヒヒヒ!!そこをどけエツ!!」

俺はファドラの前に立つても呆気なく抜かされる。

つーかあいつやべえよ。クリプトや陽乃さんより怖いよあの人。

ファドラが一気に攻め上がり、ゼルにパス。

「ガニメデプロトンツ!!はああああアア!!」

もう一度ガニメデプロトンを放つゼル。

「マジン・ザ・ハンドツ!!うおおおおオオツ!!」

ゼルのガニメデプロトンを再び止める円堂。円堂がシュートを止めたところで、前半終了のホイッスルが鳴る。

0-0。互角と言える戦いだろう。しかし、奴らはまだ何かを隠してる。単なる勘だが、このまますんなり終わりはしないはずだ。

ハーフタイムになり、後半に向けての作戦を練る。

「吹雪くん」

「……はい」

「攻撃に気を取られすぎよ。ディフェンスに専念しなさい」

吉良監督はそう言い放つ。確かに、苛立ちや焦りが見えている以上、攻めても意味がないだろう。

「…監督。吹雪をFWに上げてください」

反対に、鬼道は吹雪を今のままにしておくと思見する。

…俺は吹雪の事情を知ってる。このまま、吹雪を放置しておけば、いつしかとんでもないことになる。

二つの人格が存在している以上、俺にできる選択肢は。

「……吹雪をベンチに下げる、ってのはどうだ」

俺の意見に、誰しもが驚く。吹雪本人も。

「…吹雪をベンチに下げたんじゃ攻撃も防御も大きく減るんだ。その提案は却下だ」

「……一つ聞いていいか？」

鬼道の反論に俺は疑問を投げかける。

「……サッカーってのはチームプレーだろ。確かに攻撃も防御もできるプレーヤーなんてそういない。だからベンチに下げれば戦力ダウンなのは分かってる」

「なら……」

「…けど、それって遠回しに言えば吹雪に頼りきってるってことになる」

誰かを頼ることは別に悪いことじゃない。俺だって小町に、由比ヶ浜に、雪ノ下に頼ることなんてある。

でも、最初から頼る気満々なのは、あまりにも無責任にも程がある。吹雪の二つの人格を知らずに頼りきるっていうのは非道である。知らないから仕方ないじゃダメなん

だ。

「…大丈夫だよ、比企谷くん。僕は全然平気」

彼は笑って答えた。

しかし吹雪の表情は、言葉のように平気そうではなかった。

## 最凶イプシロン

結果的に、俺の提案は却下。吹雪にはカウンターを命じられた。防御から攻撃に転じる。これを続かせれば、隙が生まれるという理由であった。

不安が残りつつ、後半がスタート。

イプシロンの攻撃を吹雪が止め、他の選手にパスするも、すぐさまボールを奪われてしまう。

そして。

「そのボールを寄越せエツ!!」

人格がアツヤに変わる。ボールをキープしていたマキユアから強引に奪う。

「サイドから崩せ吹雪！パスだ!」

「点取るには俺が必要なんだろう!!」

またも鬼道の呼びかけをスルーして猛然と切り込む。巨大のタイタンが立ちほだかるも、

「退けよツ!!」

スピードに乗ってタイタンを躲していく。残るはデザームのみ。

「吹き荒れるろ…!!エターナル…プリザアードツ!!」

さつきより強化されたエターナルブリザード。

だが。

「ワームホール!!」

イブシロンのキーパー、デザームの前にはそれも無力になる。

「もつとだ……もつと打ってこい!」

デザームは吹雪を挑発し続ける。

戦況は一転し、イブシロンが攻める。FWのマキユア、メトロン、ゼルが加速してゴールに向かう。

「ガイアブレイクだ!戦術時間2.7秒!」

「ラジャー!!」

そう言うって彼らは必殺技の体勢。地面が盛り上がり、盛り上がった地面のかけらがボールに纏う。

「ガイアブレイクツ!!!」

強烈な三人の連携シュートが円堂に放たれる。木暮がガイアブレイクを止めようと必殺技を繰り出そうとするが間に合わず、木暮とボールもろとも円堂に襲いかかり、そのままゴールになる。



そこからは激しいボールの奪い合い。しかし、疲労もあってイプシロンの攻めがやや有利になる。

ボールはゼルに渡り、またガニメデプロトンの体勢に入りつつある。

「今度は止めてやる!!旋風陣!!はあああああつ!!」

木暮が逆立ちをしながらその場で器用に回転する。その回転が風を巻き起こし、ゼルからボールを奪った。

「いいぞ木暮!!」

木暮から吹雪にパス。クリプトがマークに入るが、その途端にアツヤに人格が変わり、強引に突破。

「エターナルブリザード!!」

先程よりパワーが上がったエターナルブリザードがデザームに飛んでいくが、

「ワームホール!!」

だが、それでもデザームには完璧に止められてしまう。

「クソオオオオツ!!」

アツヤは悔しさのあまり嘆く。その嘆きから焦りになり、ついには仲間のボールをも奪ってしまう。その勢いから、イプシロンのデイフェンスを抜き去って1対1に。

「デザーム今度こそ吹き飛ばす!!エターナル……ブリザアアアード!!!」

「ワームホール!!」

デザームはワームホールを繰り出す。しかし、先程までとは様子が違うように見える。吹雪のエターナルブリザードが押し始めている。

「うおおおおおつ…!!」

「行けえええエエエツ!!」

エターナルブリザードがワームホールを打ち破り、イブシロンのゴールに入る。ついに、デザームから点を取ったのだ。

「おっしやああああアアツ!!」

1 vs 1。同点である。

だが、イブシロンもただでは終わらず、マキユア、ゼル、メトロンの三人が主軸として攻め上がる。この構図はガイアブレイクの前兆。だから止める必要性があるプレイヤーは絞られる。

「ガイアブレイクだろ?」

「なツ!?!」

ガイアブレイクを打つ前に俺がやつらの背後から忍び寄る。そのままボールを持ったマキユアから掠めとる。

こちとら普段の経験で108個の得意技を会得してるんだ。相手に気づかれずに忍

び寄ることくらい、出来るっちゃ出来る。

これぞまさに、ステルスヒツキー。

「こつちだ比企谷!!」

俺は鬼道にパス。そのままダイレクトで前線にパスをする。その先は勿論、吹雪であつた。

「これが最後だデザーム!!エターナル……ブリザアアアード!!」

最後の渾身のエターナルブリザードをデザームに向かって放つ。

「来るか……ならば、私も応えよう!!」

デザームはワームホールと違う体勢に入る。右手を上に掲げると、巨大なドリルが出現する。

「ドリルスマツシヤアアーツ!!」

その巨大なドリルはエターナルブリザードにぶつける。すると、回転するドリルは簡単に吹雪のシュートを弾いてしまう。

「な、何ッ!?!」

「フフフ……私にドリルスマツシヤアを使わせるとはな……」

そう言つてデザームは高笑いする。そして笑い終えたあと、グラウンド外にボールを投げ捨てる。

「試合終了だ」

「何!？」

「た、確かにもう時間はあまり残されていないが……」

審判役を務める古株さんは腕時計を見て「デザームに相槌を打つ。

「引き上げるぞ、イブシロンの戦士達よ」

「はっ!」

「デザームの周りにイブシロンの選手が集まり、それと同時に黒いボールが赤い光を放ちながらデザームの足元に降ってくる。

「再び戦う時は遠くない……我らは真の力を示しに現れるだろう」

「そう俺達に告げ、赤い光に包まれて目の前から消えていった。イブシロンとの試合は、引き分けという形で幕を下ろした。

「おおお……!!」

吹雪が唸りを上げそうになるも、ピタリと止まる。

「吹雪?大丈夫か」

「……何でもないよ。もう一点取れなくて、ごめんね……」

「そう言つて疲れた足取りで吹雪はどこかに去つて行く。彼の後ろ姿は、とても儚く、そして脆く見えた。」

## 福岡陽花戸中学

イブシロンとの試合は引き分けで終わり、次の試合までナニワランドの修練場で特訓を続けていた。そんなとき、吉良監督から号令がかかる。

「みんな。今すぐ、福岡の陽花戸中学に向かうわ」

「陽花戸中？なんでそこに行くんですか？」

「俺のじいちゃんのノートが発見されたんだってさ！」

「円堂のじいさんのノート……イナズマ落としや炎の風見鶏が書かれてたあのノートか」

え、何そのノート。私全く知らないんだけど。俺は近くにいる音無にノートのことを尋ねる。

「円堂のじいさんのノートってなんだ？」

「そういえば比企谷先輩は知らなかったですよね。キャプテンのおじいさん、円堂大介さんが様々な必殺技を書き残したノートのことなんです。マジン・ザ・ハンドも、キャプテンのおじいさんが残した必殺技なんですよ」

「そうか……」

円堂のじいさん凄えな。様々な必殺技を思いつくインスピレーションがズバ抜ける。それで完成されてるから、大した人なんだろうな。

「あとで見せてやるよ！じいちゃんのノート！」

そんなこんなで、大阪から福岡に行くことに決まった。俺達はイナズマキャラバンに乗り、ナニワランドから出て行く。

大阪を出てしばらくすると、

「ほら、これがじいちゃんのノート！」

円堂が大量に持ってくる。見た感じ、だいぶ古くなってボロボロである。

「比企谷……覚悟して見ろよ」

「え、何？開けたら死ぬの？そんなファンタジーな本なのこれ」

隣にいた風丸が俺に忠告する。俺は覚悟してノートを開くと……。もはや形容し難い何かが俺の目の前に広がった。

「……風丸、これはなんだ」

「だから言っただろ……。これが、円堂のじいさんが残した必殺技なんだ」

「え、必殺技？これが？俺にはぐちやぐちの落書きにしか見えねえんだけど。何これ」

「これはイナズマ落としの秘伝書なんだ！」

「……因みにこれ、なんて書いてんの？」

「イナズマ落とし。一人がビヨーンと飛ぶ。もう一人がその上でバーンとなって、くるつとなってズバーン！これが、イナズマ落とした」

……頭痛くなってきた。ビヨーンとかズバーンとかばつかじやねえか。由比ヶ浜とどっこいどっこいかよ。

「…円堂返すわ」

「もういいのか？まあ、また読みたくなったら言ってくれよ！いつでも貸すからさー」  
「…そうだね。そうするね」

字が汚いし擬音語ばかりだし。円堂のじいさん、国語の成績ヤバかったんじゃないのか。まあ何がしたいのかはある程度予想はできるけど。

俺はイヤホンを付けて、眠りにつく。福岡に着くのは、おそらく夕方になるだろう。

そして数時間後。目を覚ますと、派手派手しい大阪とは一転し、何か懐かしい様子を感じさせる景色が広がっていた。

「……もう着いたのか？ふあ……あ……」

俺は欠伸をしていると、隣の風丸、前の席にいる財前などに笑われる。

「…え、何？何か人の顔に付いてる？」

「ひ、比企谷……これ……ぶ、くくくつ……」

風丸から手鏡を受け取る。手鏡で自分の顔を見ると、無残に落書きをされた跡が。

「…え、まさか風丸？」

「ち、違うよ。木暮だよ…くくくつ…。」

木暮は後ろでしてやったりみたいなの顔をして笑っている。

ほほう。人様がすやすや寝てる間に落書きするとは、だいぶヤンチャなことだ。

「そろそろ着くぞ。陽花戸中だ」

円堂大介が残したノート…か。まあ円堂にしか読めない魔法書みたいなものなんだろうけど。そんなものが、なんで今の今まで発見されなかったんだらうか。

陽花戸中に入ると、グラウンドには杖をついてスーツを着たおじいさんと、周りにサッカー部員らしき者達が集まっている。

「…なんだこの迎えは」

「遙々遠いところからよう来んしゃった。私は、陽花戸中の校長つたい。そして周りにいるのは、陽花戸中のサッカー部つたい」

校長の挨拶とともに、円堂とはまた違うバンドナを巻いた男が挨拶をする。

「ようこそ、陽花戸中へ。俺は陽花戸中キャプテンの戸田だ。会えて嬉しいよ、雷門のみんな」

「よろしく！俺は円堂守だ！」

「知ってるよ。FFを優勝したんだ。陽花戸中みんな、雷門中のファンさ！」



まあその時俺いないけどね。ファンになったの、多分初期メンバーだよな。

「そっかー！なんか嬉しいな！みんなよろしく！」

「よろしくお願ひします！」

陽花戸中のみんなが声を合わせて挨拶をする。凄え人望だ。俺には今後一生ない縁だわ。

「おい立向居！何してるんだ？」

「え、あ、あの……」

戸田は立向居という人物に声をかける。その立向居は、サッカー部員の後ろに隠れて何やら緊張している。

「お前円堂くんに会ったら絶対話すって言ってただろ？」

「は、はい！」

立向居は緊張しながら、円堂の前に歩いて行く。

「お、俺、陽花戸中1年、立向居勇気つていいいます！円堂さんに会えて、俺感激してます！良かったら、握手してもらえませんか？」

「おうー！いいぞ」

何を見せられてるんだろうか俺は。その後、一頻り陽花戸中と話し終えたあと、校長が、吉良監督と雷門と円堂を連れて円堂大介のノートについて話すということでは一旦離

れた。

その間、みんなは合同で練習を始めていた。

「?比企谷先輩は練習しないんですか?」

「俺、イプシロン戦でもあんま役に立ってなかったからな。チームワークとかよりサッカーの基本からまだ学ぶ必要がある」

「でも、もう比企谷くん立派にサッカー出来てると思うけど……」

「ま、あれだ。念には念をつけてやつだ」

そう言つて、俺は離れて木陰で練習をする。確かに俺は練習をしたかったが、もう一つ気になることがある。

吹雪のことだ。

イプシロン戦ではあいつが大活躍だった。だが、デザームにエターナルブリザードを何発も止められたことが精神的疲労をより蓄積していたに違いない。

ただでさえ人格を使い分けるなんてあり得ないことをやってる上に、エースストライカーの責任。デザームに止められる悔しき。そして、デザームから点を取れるのが吹雪なのだともんが信頼している。

吹雪は、もうきつと限界に近い。キャラバンを辞めさせた方が、吹雪の為になるのかもしれない。

しばらくそんなことを考えつつ、一人で練習していると円堂達が戻ってきており、何やら騒がしくなる。

とりあえず木陰から離れてみんなのところに集まる。

「…何の話してんの？」

「今から陽花戸中のみんなと練習試合するでやんす」

「ああ…。じゃ、栗松。あとは頼んだ」

「えっ？比企谷さんは出ないでやんすか？」

「こないだお前の代わりに出ただろ。俺は今回パス」

そう言つて、俺はまた一人で練習を始める。みんなは配置に着いて、試合を開始しようとした。

誰もが平和な光景だと思った。そんな中。

「ッ!？」

誰かに視線を向けられていると思い、俺はその方向に振り向く。

「どうしたんですか？比企谷先輩」

「……ちよつと抜けるわ」

……もしさっきのがエイリアなら、また面倒なことが起きるに違いない。確か、裏門の方から視線が感じたはずだ。

俺は裏門に走り、裏門の外に出て周りを見渡す。しかし、誰一人としていない。

「……気のせい、だったか……」

「気のせいではない」

「ツ!？」

俺の後ろには低い声をした女の声が届く。振り向くと、どう考えても一般的な服ではなく、まるでエイリアが着こなしたような服を着た、青髪の女がいた。

「……誰だ、お前」

俺は警戒を高める。さつきまで周りに誰一人いなかったはずなのに、急に現れたこの女。

「……そんなことは時期に分かる。それより、比企谷八幡。お前を我がチーム、ザ・ジエネシスに迎え入れる」

「ザ・ジエネシス……? やっぱお前ら、エイリアのやつらか」

「この間のイプシロンの試合を見たぞ。我々ならばお前達のような貧弱なチームなど容易に叩き潰せる。しかし、お前は他のやつらより素質がある」

「だから買いかぶりなんだよ。ただの人間に、そこまで求めてんじやねえよ」

「…フツ。まあいい。しかし次会う時は、お前の答えは関係なく、貴様を連れて行く」

そう言って、彼女は眩い光を放ちながらその場から去っていく。

「はあっ……はあ……」

彼女が去った途端に、俺はその場で座り込む。

名前は知らないが、あいつのあの目……俺は寒気がした。敵意ではない……だが、その形容し難い何かが、俺に圧迫感を押し寄せた。

「比企谷先輩!? どうしたんですか!?!」

「お、音無か……何でもねえよ……」

さっきのやり取りを聞かれていたのなら、きっと音無にも被害が行くし、そうでなかつたとしても、音無達に話すのは違う。

「何でもないわけじゃないですよね!?! 一体、何があつたんですか!?!」

「いや、そんな大声出さないで。何事かと思われちゃうよ?」

「でも、比企谷先輩の顔青いですよ!?!」

……思つたよりぐいぐい来るなこいつ。騒ぎになりかねないし、とりあえず。

「あれだあれ。あの、蜂の大群が来たんだよ。だから陽花戸から離れてダッシュで逃げたんだよ」

「……本当ですか?」

「嘘ついてどうすんだよ」

「……わかりました。比企谷先輩がそう言うなら、私も納得します」

音無はまだ納得いかないという表情だったが、ひとまずは落ち着いたようだ。「じゃ、早く戻りましょう。陽花戸中との試合、まだ始まったばかりなんですから」そう言って、俺達は陽花戸中グラウンドに戻っていった。

## 最後の試合

陽花戸中の練習試合は雷門の勝利で終わる。しかし、ある人物が俺達を驚かせた。

立向居勇氣。

彼は、円堂の持ち技であるゴッドハンドを使いこなした上に、試合中で未完成ながらもマジン・ザ・ハンドをやつてのけた。戸田曰く、立向居は見ただけで必殺技を繰り出せたそうだ。

恐ろしい才能だ。

次に円堂大介のノート。究極奥義たるものが書かれていたらしい。やはり、円堂以外に読解は出来なかつたが。早速練習試合で試したものの、やはり失敗に終わった。

そんなこんなで時間が過ぎて行き、福岡の夕日も姿を消し、周りは完全に暗くなる。陽花戸中の部員達と和気藹々と食事をしているなか、吹雪士郎が一人でポツンと座っていた。

「……カレー、食わないのか」

「……比企谷くん。うん、ちよつと食欲がなくて……」

「そうか」

その先には会話はなく、ただ無言の時間が過ぎてゆく。すると吹雪が、口を開く。

「ねえ、比企谷くん」

「なんだ？」

「この間のイプシロン戦、なんか変じゃなかった？」

「……まあ吹雪と会って間もないから、そんな細かいことは言えんけど。まあ、変だったな。特に防御から攻撃に転じる瞬間。あの時、俺は苦しそうに見えた」

「……すごいね。よく見てるなあ」

「人間観察が得意なんだな」

アツヤのことも聞かれてなお意識して吹雪を見たから分かったのかも知れないが。

「……監督から聞いたぞ。お前と、そしてアツヤのこと」

「！そう、だったんだ……。もしかして、この間の比企谷くんの提案もそれを知った上で？」

「人格を使い分けるなんて想像出来ないからな。何をきつかけに精神崩壊するかわかったもんじやない」

俺がそう返すと、吹雪はポツポツと話し始める。

「……僕ね。完璧にならなきゃならないんだ。完璧こそが全て。完璧になることで、僕



が雷門にいる意味があるんだ」

「……聞いていいか？お前の言う、完璧ってなんだ？」

「……分からないんだ。でも、最近こう思い始めたんだ。アツヤになることで、完璧になるんじゃないかって。アツヤがいるから、僕は求められる。僕が雷門にいる理由になる。でも、シユートを止められたなら、僕がいる理由がなくなる。∴僕は、また一人になる」

……どうやら吹雪の精神は思ったより深刻な状態だった。雷門に求められるために、彼はアツヤ自身になる気である。一人にならないために、誰かから求められるために。

「……そうか。けど、お前は一人じゃないだろ」

「えっ……」

「雷門が消えても、白恋中のみんながいるんじゃないやねえの。シユートを決められなくなつて、それで縁を切られるならその程度のチームだったってことだろ。ま、誰かに求められることなんてないから今のは聞き流してもいいけど」

俺はそう言つて、吹雪から離れる。この問題は、吹雪にしか解決できない。俺達は、彼を見守ることしか出来ないのである。

翌日。

どうやら円堂の知り合いらしい人物のチームと、昼頃から試合を始めるらしい。午後12時に、その人物が現れる。

「…12時だ」

すると、陽花戸グラウンドに黒い霧が足元を漂う。この感じは…エイリア学園だ。

「来たー！」

グラウンドの真ん中に、眩い光を放ちながら、やつらは現れた。赤髪の少年が筆頭に、いずれも一癖も二癖がありそうな選手がいる。

その中には、昨日の謎の女がいた。

「やあ、円堂くん」

「!?そ、その声……お前まさか……ヒロト…なのか?」

「うん。今日は俺のチームを連れてきたんだ。さあ、円堂くん。サッカー、やろうよ」

ヒロトと呼ばれる赤髪の少年は、まるで友達感覚で話している。しかし、円堂から聞いた限り、ヒロトと呼ばれる者は友達と言っていた。つまり、人間だつてことである。

しかし、現に彼らはエイリアの格好をしている。

「今日は単純に君達とサッカーをしに来たんだ。それと、ウチのウルビダが雷門にいる選手に用があるって聞かなくてさ」

赤髪の隣に、昨日の青髪の女が話を継いだ。

「いいか、よく聞け。雷門イレブンよ。この試合で貴様達が敗北した場合、比企谷八幡を貰っていく」

「な、何だと!?!」

「なんで比企谷くんが…!?!」

どうやら否が応でも俺を連れて行きたいそうさ。青髪の女、ウルビダという人物は。

「比企谷八幡は素質がある。雷門にいるには惜しい人材だ。我々、エイリア学園でこそ、やつの力は発揮できる」

「ふざけんな! 比企谷は絶対に渡さない!」

「ならば我々の試合を受けることだ。我々、ザ・ジエネシスに勝つことができれば、先程の話はなかったことにしてやる」

「……というわけさ。えっと、比企谷くん、だっけ? 悪いけど、雷門が負けたら君を連れて行くから」

赤髪の少年は、丁寧に謝ってくる。それが逆に怖くて仕方がない。

「……勝てばいいんだろ」

と、見栄を張るものの、恐らく雷門は負ける。イブシロンより上のチームっぽいし。多分、やつらを出し抜いてフェードアウトは出来ないだろう。神出鬼没の連中相手に、

俺の逃げ場はない。

「……腹括るか」

俺を必要とする以上、命までは取らないはずだ。だが、危険な目に遭わないとも言いきれない。

「比企谷！絶対勝とう！」

「ああ……」

円堂は意気込むが、やはりみんなの心境は穏やかではなかった。イブシロンを超えるチームが現れたこと、俺が何故標的になったのかということ、パニックが生じている。「比企谷くん、君にはこの試合に参加してもらいます」

「……はい。分かりました」

これが雷門での最後の試合になる。小町達にはなんて説明すりゃいいんだろうな……。

ついにジエネシスとの試合が始まる。FWは浦部と吹雪。MFは俺と鬼道と風丸と一之瀬。DFは壁山、木暮、土門に財前だ。GKは円堂。

「……はあ……」

俺は落ち着いて深呼吸をする。覚悟を決めるしかない。雷門での最後の試合が、ホイツスルの合図から始まった。

## さらば比企谷八幡

ジエネシスとの試合が始まる。浦部が相手陣内に攻め込むが、いつの間にか目の前にいたウィーズにボールを奪われる。

俺と一ノ瀬はウィーズからボールを奪おうとマークに入るが、あまりのスピードに付いて行けずにいた。

ウィーズからアークに。アークからコーマに。コーマからウルビダに。ウルビダからヒロト、もといグランに、流れるような素早いダイレクトパスで前線に繋いだ。

グランは速攻でゴールに向かう。

「行くよー！ 円堂くん！」

グランは必殺技ではなく、普通のシュートを打つ。

「マジン・ザ・ハンドツ!!」

円堂はマジン・ザ・ハンドを繰り返すが、その技は呆気なく破られてしまい、ゴールに入る。

「入っちゃった……」

グランは入ることを想定しておらず、ポカンとしていた。円堂があまりに弱いという

ことを、彼が理解していなかった証拠である。

「イブシロンより上のチームとはいえ、円堂のマジン・ザ・ハンドを簡単に破るとは……。」

「ジェネシス……思った以上に手強いチームだ。」

「だが、ただ一点だけで満足するジェネシスではなかった。俺達の反撃をいとも簡単に防ぎ、人間離れたスピードで攻め上がる。」

「そして再び、ボールはグランに。」

「もう一度行くよ！」

「今度は止めてやる！」

「グランはまたも普通のシュート。」

「マジン・ザ・ハンドツ!!」

「もう一度、マジン・ザ・ハンドを繰り出すも、やはり簡単に破られる。」

「これで2点目。だが、ジェネシスの猛攻は止まらない。やつらの攻撃を防ぐことが出来ず、ただただ点を取られてしまう。」

「スコアは今、0-12。」

「円堂ももうボロボロだ。あれだけ吹っ飛ばされながら、まだ立っていられる気力が凄  
い。」

「円堂、大丈夫か？」

「あ、ああ……まだまだ、平気さ……」

全然平気には見えない。円堂だけじゃない。みんな、疲労が出始めている。

…特に、吹雪が気がかりだ。

しかし、依然ジエネシスの攻撃は続く。アークからコーマにパスするが、俺はそれをインターセプト。

俺はそのまま攻め上がる。

「フツ……お手並み拝見というかー」

後ろからウルビダが加速して追いかけてくる。俺は鬼道にパスし、そのまま鬼道は前線の吹雪に繋ぐ。

だが、吹雪の様子がおかしい。ゴールに近づいたたびに、恐怖の顔になりつつある。そしてゴール前になると、吹雪が立ち尽くす。その隙に、DFのゾーハンがボールを弾いた。

「おい、吹雪……」

「……うるさいっ……僕がシュートを打つんだっ……!!」

何やら独り言をぶつぶつ呟く吹雪。その表情はとても苦しそうに見える。

……そろそろヤバいかもな。

試合が再開して、また俺達がボールを奪う。そして、鬼道から吹雪のパス。だがしかし。

「なッ!?!」

吹雪へのパスを、俺はカットする。そのプレーに雷門イレブン、およびジェネシスの連中は驚いていた。

俺はそのままGKネロにシュート。だが、容易く止められてしまう。

「おい比企谷。なんのつもりだ」

「……どうせ負けるんだ。なら、何やっても俺の勝手だろ。もうじき、俺はお前らの仲間じゃなくなるしな」

鬼道が詰めるように聞いてくる。

逆に、この戦力差で試合をひっくり返せる根拠を教えてほしいものだ。

ネロからグランにロングパス。グランは猛然と切り込んでいく。誰一人として、グランを止める者はいなかった。

「好きだよ、円堂くん。君の…その目」

グランは上にボールを打ち上げる。そのまま一回転くるりとして、右足に力を込める。

「流星……ブレード!!」



グランから放たれたボールは、名前の通り流星のごとくボールで円堂に飛んでいく。しかし、俺が目を離れた際に、吹雪は雷門ゴールに猛ダツシユ。

まさかあいつ…。

「ストップだ吹雪！」

俺の声は届かず、吹雪はグランが放ったシュートに突っ込んでいく。

「うああああアアアツ!!」

吹雪は大きく吹っ飛ばされた。グランのシュートはゴールに入りはしなかったが、代わりに犠牲となった吹雪は傷だらけで倒れてしまっている。

そしてここでホイッスル。前半終了だが、みんなはボロボロで、これ以上試合にはならないような状態だ。

倒れた吹雪の様子を見に行こうとするも、前にはウィーズ。後ろにはゾーハンとハウザー。ジェネシスが誇る巨体が俺を囲む。

「……退けよ」

「そうはいかねえ。お前を連れて行くのが、ウルビダの望みだからな」

ウィーズがそう答える。

「比企谷!!」

円堂が走ってこっちに向かってくるが、コマとアーク、そしてグランが円堂の行手

を遮る。

「後半などしなくても結果は火を見るよりも明らかだ。比企谷八幡を貫っていくぞ」

「クソ!!そこ退けよ!!」

「ごめんね、円堂くん。それじゃあ、またね」

そうやって俺を含めたジエネシス達には登場時の眩い光が包まれる。それと同時に、俺は意識を落としてしまった。

じゃあな、雷門。

## エイリアに加入

「……知らない天井だ」

意識を取り戻す主人公の定番のセリフ。そんなセリフを呟きながら、身体を起こして、周りを見渡す。何もなく、ただただ殺風景な部屋であった。

「……そういや、連れて来られたのか」

陽花戸中でジェネシスに大敗北をくらった後、俺はジェネシスに拐われてしまった。すると、ガチャリとドアの開く音が部屋に響く。入ってきたのは、黒ずくめのスキンヘッド達だ。

「……誰だ」

「歓迎するよ、比企谷くん。我々はエイリア学園の志に賛同する者。まあ、エーエージェントとでも呼んでくれ」

「……俺を連れてきた理由はなんだ。俺はサッカー歴浅いし、そこまで身体能力がズバ抜けてるわけじゃない。ジェネシスに敗北したのが何よりの証拠だ」

そんな人間をエイリアにスカウトする動機が分からん。どうやら、ジェネシスのウルビダってやつがやたら俺に固執しているようだが…。

「そんなことはないさ。確かに君はサッカーを初めて間もないし、身体能力も並程度。しかし、君の観察眼は我々も一目置いているのだよ。イプシロンの動きに付いていけるのは、君がよく動きを観察しているからだろう」

「……変に褒めてくるな。何が目的だ」

「そうツンケンするなよ。これから一緒に行動する仲間じゃないか」

「……お前らみたいなスキンヘッドの仲間なんてこつちからお断りだ」

「……まあいい。どのみち君はここから逃げられない。我々に賛同するのは時間の問題だ」

俺が連れて来られた場所は、簡単に逃げる事が出来ない場所ということか。

「……さて、ここに来たのは単なる挨拶などではない。君には、我々エイリアのことをまず知ってもらう必要がある。付いてきたまえ」

そう言われて、俺はエージェントに連行される。廊下に出ると、やけに科学技術が最先端っぽい雰囲気醸し出している。

しばらく廊下を歩いていると、

「ご苦労。あとは私がやる」

廊下にはジェネシスのMF、ウルビダが腕を組んで立っていた。

「いえ、これは我々が……」

「二度も言わせるな」

「はっ」

エージェント達は来た道に戻っていく。戻ったことを確認し、ウルビダは俺に目線を向ける。

「さて、改めて自己紹介しよう。ザ・ジェネシスのウルビダだ。ようこそ、星の使徒研究所に」

「星の使徒研究所……？」

「ここが我々のアジトだ。これからお前には、このアジトで過ごしてもらおう。勿論、我々の野望にも協力してもらおう。断ることは許されない」

「……どうせ、逃げられないんだろ」

「お前は話の通じるやつで助かる。まず、先程のやつらの話を継ぐとしよう。我々、エイリア学園の正体を」

「エイリア学園の正体……」

そんな戦ったことはないが、今まで戦ってきたのに何一つエイリアのことを知らなかった。

「まず。我々は、宇宙人ではない」

「……そうか」

「その反応だと、察しは付いていたのか？」

「そんなわけないだろ。単にピンとこなかっただけだ」

確かにズバ抜けて早いスピードも、人間を吹き飛ばすパワーも、目の前から消えてしまふあのワープも、宇宙人だからという一言で済ませることが出来るだろう。

それでも、俺はその現状を受け入れてなかった。受け入れられなかった、という方が正しい。

「…ただ、宇宙人じゃないなら、やつらのスピードやパワーはどう説明する。練習したつて言っても限度があるだろ」

「そうだな。そのためにわざわざお前を部屋から出したんだつたな。付いてこい」

俺はウルビダに案内される。しばらく歩いてみると、目の前に大きな自動ドアがそびえていた。

「……だ」

その部屋に、俺とウルビダは入る。入ると、目の前には大きな紫色の塊があった。周りには、何やら機械やパイプなどで囲っている。

この塊はなんだろうか。この塊を見ているだけで、何やらざわついてしまう。

「……これは、なんだ」

「これはエイリア石だ」

「エイリア、石……?」

「これがエイリア学園の、力の源なのだ」

「力の源……ってことはまさか」

「そう。お前の察した通り、ジエミニストームやイプシロンはこの石を使役して強くなった、ただの人間だ」

この塊が近くにあるだけで、あれだけの力を手に入れたつてのか……。しかし、一体何のために。

「そしてお前にも、これを付けてもらおう」

ウルビダから手渡されたのは、小さな紫色の結晶が埋め込まれたペンダントだった。

目の前にあるエイリア石と、全く一緒のものだ。

「却下だ。こんな怪しいもん、誰が付けるかよ」

「ならば、仕方ない」

するとエイリア石の目の前に、何かが映される。少女がベッドで寝ている……。  
「ッ!?!」

よく目を凝らしてもう一度その少女を見た。ショートの髪型にアホ毛が生えて、目は閉じているが可愛らしい顔の女の子。俺が前まで毎日顔を合わせていた人物。

「……、小町……なのか……!?!」

俺の前の映像には、我が妹の比企谷小町が映されていた。特に縛られているわけもなく、ただベッドで寝ているという映像だけだが。

これだけでも、俺は怒りを買うことはできた。

「お前……小町にまで手を出したのか……!」

「簡単には乗ってこないだろうと予想はしていたからな。エージェントに任せて別室で眠ってもらっている」

「お前ツ……!」

「どうする? お前がこれを付けるならば、妹には手を出さない」

「クツ……!」

正直、雷門をあまり裏切りたくはなかった。だが、それでも俺は妹を優先する。俺にとつては、雷門より妹の存在が大事なんだ。

「いや、そうだな……。エイリア石に関してはお前の意志でいい。ただこれだけは誓え。私に、そして私のお父様に絶対の忠誠を誓うということを。それだけ守れば、妹には何もしないでやろう」

「……お父様?」

「吉良星二郎。吉良財閥の者であり、我々のお父様だ」

「我々の……?」



ウルビダの言う、吉良星二郎ってやつがこいつらを束ねるボスということは理解出来たが、我々のお父様、という部分には疑問があった。

「そんなことはどうでもいい。さつさと誓え。でなければ、先程のエージェントがお前の妹に何かしてしまうかもな」

彼女は自然に、悪気なくそう言うが、そのセリフは俺を追い詰める強いパンチの効いたものだった。

「…やめろッ!!」

「ならば誓え、今すぐに。お前の居場所は雷門でも総武でもない。我々、エイリアこそがお前の居場所なのだ」

俺の心はもう、完全にへし折られていた。小町を引き出しにされては弱いことを、こいつは分かっていたのだろう。

エイリア石とかいう怪しいもの付けるくらいなら、まだウルビダに忠誠を誓っている方が幾分かマシだ。

だから俺は。

「……………分かった。誓う。誓うから小町には手出ししないでくれ」

ウルビダの要求を呑むことにした。

悪い。雪ノ下、由比ヶ浜。それに雷門のみんな。恨んでも、嫌ってもいい。

きっとまた、間違えた選択を取ったんだと思う。でも、世界の平和と小町を天秤にかけるなら、間違いなく小町を選ぶ。

「…そうか。お前なら、分かってくれると思っていた。お前は今日から、比企谷八幡ではない。… エイト」とでもしておこうか」

「…もう何でもいい」

小町を助けることができるなら、何でもいい。もし小町の代わりに命を差し出せと言われれば、間違いなく差し出す。

何があっても、小町は絶対俺が守る。例えば、それが間違った選択だったとしても。

## マスターランク集結

「エイトも我々に賛同したところで、一応他のメンバーにも顔を合わせておこう」

「…他のメンバー？ イブシロンとジェネシスなら、もう見たことあるぞ」

「ああ、そうだな。だが、我々以外にまだ2チーム残っている」

「は？」

イブシロンを倒したら終わりと思っていた矢先にジェネシスが現れ、ジェネシスを倒したら終わりと思えばまだあと2チームもいるのかよ。

辛い戦いになりそうだな、雷門は。

「それと、お前には助っ人扱いとしてチームに参加してもらおう」

「助っ人扱い？ ジェネシスに入るんじゃないかなかったのか？」

「勿論、それもそうだな。しかし、あとの2チームにもお前は助っ人扱いとして入ってもらおう」

まあ人間の俺が入っても邪魔になるだけだがな。しかし、こんなエイリア石まで使つてまでサツカーをしようとは思わない。副作用が計り知れないからだ。

「さて、我々のグラウンドだ」

研究所内部を歩いていると、目の前にはサツカーグラウンドが広がっていた。アンテナやホロビジョンを映す機械など、中々にメカメカしい。

「やあ。比企谷くん、だったね」

ジェネシスのキャプテン、グランが挨拶する後ろから、毛量の多い白髪の少年と、チューリップでも生やしているのだろうかと思ってしまう赤色の髪型をした少年がグランの後ろから現れた。

「こいつがウルビダが固執している人間か？ チンケな野郎だな」

「チンケで悪かったなチューリップ」

「!!て、 temeエ……!!」

俺のその言葉に、赤髪のチューリップは顔を赤くして怒りの表情になる。あら、もしかして禁句でした？

「ち、チューリップ……た、確かに、バーンの髪型ってどうなってるんだい？」

「フツ、フフ……先手を打たれてしまったな、バーン」

「グラン！ ガゼル！ temeエら笑ってんじゃねエ!!」

何これ。エイリア学園ってこんな穏やかなのん？ 普通の学生と変わらなくね？

「それより、ウルビダ。彼のことを二人に紹介してあげよう」

「そうだな。ガゼル、バーン。こいつはエイト。我々に賛同する新たな戦士だ」

「ウルビダが固執しているってことは、それなりの実力者なのかい？」

「まあ、敵に回すと些か厄介ではあるがな」

そんな厄介扱いされてたのかよ俺。サッカーやってたらプロ入りだったんかな。まあそれ以前にチームプレー出来ないから周りからハブられるんだろうけど。

「私はダイヤモンドダストのキャプテン、ガゼルだ」

「プロミネンスのキャプテン、バーンだ。この陰気野郎」

すつかりチューリップには嫌われたようで。いや、嫌われて正解なんだけどさ。気に入られても仕方ないし。

「それで、ウルビダ。彼は僕のチームに？」

「こいつには、ガイア、ダイヤモンドダスト、およびプロミネンスのチームに助っ人扱いとして参加してもらう」

「？ガイアってなんだ」

「ガイアっていうのは僕達のチームさ」

「や、ジェネシスって言うてたでしょ。お前」

「まあ、色々訳ありだね。今の段階では、僕達のチームはガイアという名前だから」

話がややこしいことになる。ジェネシスだのガイアだの。今の段階ではって言うてるあたり、何か条件を満たすとジェネシスという名前になると予想してみた。

「助っ人？こんな弱いやつがか？余計に負けるのが目に見えんだろ」

「今回ばかりはバーンに賛同するね。ウルビダが固執する人間をどんなものかと思ってみれば、エイリア石も使っていないただの人間に我々の野望が成就するとは思えない」

「論より証拠だ。今から2 v s 2の形式で戦闘を行なってもらおう。ガゼルとバーン。そして、相手はエイトとグランだ」

「ハッ！ただの人間相手に、俺達が負けるとは思えねエ」

「この勝負、やるまでもないな」

「……俺的意思には関係なく、エイリア学園上位のチームと組むことになりました、ハイ。」

キックオフは俺達から。俺達の勝利条件は、ボールを奪うこと。まあ、ボールを奪うことくらいなら。

「それでは、始めろ」

ウルビダの合図で二人はこちらに攻め上がる。

「どう動く？」

「……とりあえず、あのバーンってやつにマーク付いてくれ。俺あいつ苦手だから」

まあ、エイリアに限って言えないことではないがな。俺の周りの大半の存在は苦手で

ある。

「グランなんざ俺の相手じゃねエ！そこをどけエ！」

バーンは人間離れした跳躍でグランを躲す。トランポリンを使って跳ぶより遥かに高い。

「ガゼル！」

ボールはガゼルに。ガゼルはグランに劣らないスピードで突っ込んでくる。

「見せてもらおう！君の実力を！」

俺は棒立ちのままである。ガゼルは遠慮なく、俺の横を抜き去った。

「この程度かい？」

「足元見てみるよ」

「何……？……なツ!?いつの間に!？」

ガゼルの足元にはボールはない。ボールがあるのは俺の足元だ。ガゼルは目をキツとして、こちらを睨みながら問う。

「何をした……!？」

「何って、単にボールを奪っただけだ。相手を抜くとき、どうしても視線は自分が抜く先に視線を向ける。それを先読みして奪っただけだ」

確かに相手はスピードがバカにならない。だが、彼がどちらに抜くか分かれば、早め

に足を出せばいい。普通の試合なら、11vs11だから、一人に集中しているわけにはいかない。

だが、グランがバーンをマークしている以上、ガゼルは俺を抜くしかない。だからガゼルだけを集中して観察し、後は先読みしてボールを奪えばいい。

ボールを奪うテクニクは、雷門でそれなりに鍛えてきたからな。エイリアが強いのはあくまで身体能力のみ。サッカーの技術だけを見ていれば、俺も無理して取れる程度の実力だ。

「…とはいえ、これ完全なる個人プレーだからな。チームプレーとしては役に立たない」「いや。その個人プレーが、我々にとって大きな戦力になる。ガゼル、バーン。エイトの実力は分かっただろう。エイリア石を使わずとも、渡り合えた」

ウルビダが少しだけ悔しがるガゼルとバーンに尋ねる。二人は渋々と答える。

「……確かに、動体視力や観察眼はズバ抜けているね。あとはそれを裏付けるための身体能力と技術かな」

「確かに認めてやる。エイトはそれなりに強エ。だが、この程度のやつが俺のチームにいたんじゃ邪魔でしかねエ。だから、俺達プロミネンスがこいつを強くしてやるよ」

「待った、バーン。君と彼では相性が合わない。彼のような冷静な人物は、私達ダイヤモンドダストにこそ相応しい」



二人はこちらには目もくれず、言い合っていた。その様子を見た俺の隣に、ウルビダが寄ってくる。

「そういうことだ。正式に、我々エイリア学園に迎え入れる」

「……強制的だな」

「いいか。これからお前は私の、私のお父様の手となり足となる。私の命令は一切拒否できん。もし拒否したら……」

「しねえよ。そんなことすりゃ小町が傷付くからな。お前の言うことくらい、従ってやるよ。俺が本気を出せば、土下座も靴舐めも余裕で出来るレベル」

「……ならいい。では、今日のスケジュールを教えておこう。まず、二時間後には我々がイアがここで練習をする。その練習にお前も参加しろ」

「……分かったよ」

雷門行ってもエイリア行ってもサッカーの練習で。こいつら実は雷門に負けないサッカー好きの集まりじゃないのかね。

## エイリアの日常

俺は新たに雷門のユニフォームから、ジエネシスのユニフォームに着替えて、再びグラウンド向かった。なんかピチピチで動きにくいし、気持ち悪い。

「改めて紹介しよう。我々エイリアに賛同することになった、エイトだ」

グランが俺の代わりにジエネシスのメンバーに軽い紹介を行なった。ジエネシスのメンバーは、疑いをかけるような目を俺に向けていた。巨体なFW、ウィーズがグランに尋ねる。

「本当にこんな人間を仲間にしていいのかよグラン。俺達の動きに付いてこれるわけがねえ」

「確かに彼はエイリア石を使っていない。けれど、彼はガゼルに勝っている」

「何……?」

勝ったって言っても、単にボールを奪っただけだけだね。それだけで実力が認められるのもどうかと思う。

「エイト、君確かMFだったよね?」

「まあシユートは打てんからな。FWとGK以外なら、別にどっちでもいい」

「じゃあ、今日はオフENSEの練習に入ってくれ。コマ、アーク。よろしく頼むよ」

金メッシュの入った茶髪と糸目のコマという人物と、赤いスポーツサンングラスを着けたアークと呼ばれる人物にグランは命じた。

「では各自、調整に入る」

グランの合図でジェネシスの練習が始まる。FWは徹底的にシュートを打ち、それをGKが全部止める。MFはDFを相手に突破出来るか。また、DFはMFの攻撃を止められるか。

「おい、エイト」

「お、おう。なんだ、アーク」

「なんだ、じゃない。さっさとオフENSEの練習に入れ」

「お、OK」

俺はオフENSEの練習に入ることになる。しかし、動きが規格外なため、やっぱり付いていけずにいた。

その様子を見たコマが溜息をつきながら話しかけてくる。

「しっかりしてください。これでもまだウォーミングアップですよ」

「や、単なる人間が急にジェネシスと同じスピード出したら怖いでしょうよ」

「ならエイリア石を使えばいいじゃないですか」

「それはやだ。あれ怖いし」

エイリア石に関しては自分の意思でいいとウルビダが言った。一応部屋には置いてはあるが、使うのは最終手段だ。

「貴方が来た理由がなんなのかは分かりませんが、我らジェネシスの下に来た以上、それ相応の働きをしてもらいます」

「エイリア石使ってるやつスピードに順応するやつ苦労知ってる？」

ウサイン・ボルトを軽く超えるスピードに対してサラツと順応出来る方がおかしいんだよ。

「残念ですが、我々ジェネシスはエイリア石など使っていない」

「は？」

「我々は、エイリア石によって強くなったジェミニとイプシロンと戦うことで強くなったのです。つまるところ、ただの人間です」

「ま、マジかよ……」

ただの人間が、あんなスピードを出せるってのか……。ただジェミニやイプシロンと戦っただけで……。

「だからエイトも、早くジェネシスの動きに慣れてください」

「え、あ、おう……」

あまりのカミングアウトに、驚きを隠せずにした。いや、だがしかし。

コーマの言う通り、ジェミニやイプシロンと戦って強くなっているのならば。それはきつと、雷門にも言えることだろう。

ジェネシスは完成されたチーム。対して雷門は発展途上のチーム。ぶつちやけ、客観的に見て試合をしたくないと思うのは雷門だ。

完成されているなら、ある程度は戦略が読める。だが、発展途上する雷門は試合の中で強くなる。こちらの予想を上回るチームなのだ。

……超次元サツカーマジパねえ。

俺はなんとかジェネシスの動きに付いていき、オフエンスの練習を行なっていた。練習を続けていることで、段々やつらのスピードにも見慣れてきた。

慣れてって怖いね。

20分の休憩が入り、俺は一人で肩で息を切らしながら休んでいた。そこには、やはりやつが来た。

「どうだ。ジェネシスの戦士の動きに付いていけているか？」

「……まあ技術や身体能力に関してはまだ無理だ。だが、まあ段々スピードには見慣れてくる」

「フツ。流石だな」

そう言って、彼女は隣に座ってくる。

いや、近いし。汗かいてるはずなのになんかいい匂いだし。なんなら大きいのが目に毒なので近づかないでください。何が大きいとは言わんが。何がとは。

「……一つ、聞いていいか」

「なんだ」

「前から思っていたんだが、何故お前は俺に固執しているんだ。俺より優れた観察眼や動体視力の持ち主なんて、探せばそれなりにいるだろ」

ウルビダはしばらく沈黙する。

こいつの独断で俺を連れてきたっぼいけど、まずこいつに固執されるほど何もしていない。

「それを今言ったところで何になる。お前は私に従ってればいい。余計なことを聞くな」

そう言って、彼女は立ち上がり、離れていく。

余計なこと、か。俺に固執する理由は他にもありそうだが、この様子だと聞けないな。

ジェネシスの練習がひと段落終わると、温厚そうな人物と、長身痩躯で青白い顔をした人物がこちらにきた。

「お父さん！」

「え、お父さん？」

グランがお父さんと呼んだ。ウルビダのお父さんじゃないのか？

そんな疑問を頭に巡らせていると、グランのお父さんらしき人物がこちらに歩み寄る。

「初めまして、比企谷八幡くん。私は吉良星二郎です」

「ど、どうも」

「ウルビダから話は聞いています。先程の練習、見させていただききました。確かに、君の観察眼は素晴らしい。雷門に埋もれるには惜しい人材だ」

「は、はあ……」

「これからも、私の目的のために、その才能を大いに奮ってください。では」

そう言つて、吉良星二郎と隣の長身の人物はグラウンドから去つて行つた。

……食えない男だ。一見優しい様相をしているが、裏では黒い何かを孕んでいる。

「…じゃあ、今日はこれまでにしよう」

グランの一声で、ジエネシスは解散した。俺も自分の部屋に戻ることにした。部屋に戻ると、一通り生活に必要な衣類品や消耗品が置かれていた。

こういうところは律儀に置いてくれるのね。サッカーで汗をかいたので、シャワーを浴

びに行こうとして部屋を出ると、そこには。

「貴様……比企谷八幡だな」

見覚えのある男だった。吹雪のエターナルブリザードを幾度も止め、サッカーに変に熱くなっていたイプシロンのGK。

デザーム。

「……こ、こんにちわ?」

「答える。何故お前がここにいる」

デザームの疑問は当然のことである。この間まで雷門にいたやつがこんなところにいたら、怪しむのも仕方がない。

「ウルビダ様に誘拐されたから」

「ウルビダ様に?……何を考えている……?」

「知らん」

俺はなるべく、短い返事で答えていた。あまりエイリアの人物と話したくないため、その場から去りたかったからだ。

「……まあいい。くれぐれも、あのお方の期待を裏切るような真似はしてくれないよ」

「勝手に期待されても困る」

「……フン。ではな」



デザームはそのままどこかに歩いて行く。俺も、シャワー室を目指して研究所の廊下を歩いていった。

だがしかし。

「……広すぎんだろ」

研究所の内部は広く、迷ってしまった。せめて現在地を書いているマップくらい用意しておいて欲しい。

ダンジョンかよここは。

「……何してるの?」

「ひ、ひやいつ」

俺がそんなふざけたことを考えていると、隣から冷ややかな声をした女が声をかけてくる。少し短めの青色の髪の毛の両側に、黄色い髪留めを止め、こちらをジト目で見ている。

「君、見たことない顔。ガイアに新入りが入ったんだ?今更、なんでなんだろ」

「そんなこと言われても。俺連れてこられた身だからな」

「連れてこられた……?誰に?」

「ウルビダ」

「ウルビダ……?ああ、そういえばガゼル様が何か言ってたね。ウルビダが新入りを連れてきたって。君がエイトで、合ってる?」

「まあ、多分？知らんけど」

「自分の名前でしょ」

「イトって付けたのウルビダだから。俺の名前比企谷八幡なんだけど。周りからエイトって言われても、すぐ反応出来ないし。」

「まあいいや。私はクララ。ダイヤモンドダストのDF」

え、クララ？ハイジと仲良いあの女の子か？全然違くない？

しつかり自分の足で立ってるじゃん。

「…何？」

「い、いや。何でもない」

「ジト目で見られるから余計にキョドってしまう。これがデフォなんだろうか。」

「そういえば、君何してるの？」

「や、シャワー室行こうと思っただけ迷った」

「はあ……。シャワー室なら、突き当たりを左に行けばあるから」

「お、おう。サンキュ」

俺はクララに軽い礼をする。

「なんだ。エイリアと言ってもみんなわりと親切なのね。少し拍子抜けした俺は、クララに教えてもらった道筋を辿ってシャワー室に向かった。」

## マックスコーヒー

シャワーを浴びたあと、俺は部屋で寝転んでいた。部屋には何もなく、ただ時間が経つのを待つしかない。

小町の居場所も分からないし、下手に動けば小町に危険が及ぶ。それに、この研究所内部には警備マシンがそこら辺に多数いる。怪しい動きをすればゲームオーバー。

近いのに手が届かない。こんなにもどかしいことがあるだろうか。

それとは別に。

「……腹減ったな」

そういえばここには食堂など存在するのだろうか。エイリア達がここで住んでいる以上、何かしら食糧はあるはずだ。

すると、俺の部屋に誰かがノックを叩く。エージェントか？

「……誰だ」

「ウルビダだ。出てこい」

俺は起き上がり、スリッパを履いてドアを開ける。そこには、エイリア共有の無地のシャツを着たウルビダと、目を大きく開けたちびっ子、クイールとキャバ嬢みたいな雰

困気を醸し出すキープがいた。

「…何の用だ」

「まだお前は夜食を摂っていないだろう。行くぞ」

「ああ、そういう……」

腹も減ってるし、丁度いい。俺は部屋から出て行き、ウルピダ達に付いていく。

しかし、こうしてみるとただの学生が寮で過ごしている風にはか見えない。どこで彼女達は、いや、あの吉良星二郎は道を誤ったのか。

「着いたぞ」

どうやら着いたらしい。自動ドアが開くと、そこにはエイリア達が食事を摂っており、周りにはエージェントが監視している。

「これ、食堂か？」

「ああ。流石に私達も、飲まず食わずに生きていけるわけではない」

でしょうね。逆に飲んで食ったからどこか育ったんでしょね。どこがとは言わないけど。

「…ていうか、なんで俺誘ったの？や、食堂の場所分かったからいいんだけどさ」

「理由はない」

理由も無いのに誘うのね。俺達はどこか座れる場所を探していると、

「あ、エイト」

隣から、ダイヤモンドダストのクララが話しかけてきた。

「おう。さつきぶりだな」

「エイトも夜ご飯？」

「ん、まあな」

「じゃあ一緒に食べる？新しくエイリアに入ったってことで。まだエイトのこと何にも知らないし、色々教えてよ」

「いや、俺は別に……」

「おい、エイト。こっちだ」

クララと話していると、ウルビダに右腕を力強く引かれる。つーかこいつ力強え。

クララとだいぶ離れた席に、無理矢理座らされた。

「いいか、お前はここに座っている。他所の席には行くな。お前の食事は私が持つてきてやる」

そう言つて、ウルビダ達は夜食を取りに行くために食堂の券売機に向かった。

「いつて……」

人間離れしてる身体能力持つてんだからもうちょい優しくしてください。雪ノ下でさえ優しいような……いや、気のせいだな。

「お前は雷門の……」

俺が掴まれた右腕を摩っていると、後ろから誰かに話しかけられる。振り向くと、そこには見覚えのあるエイリア達がいた。

「お前らイプシロンの……」

確か、ゼル、マキユア、メトロン、クリプトだったか。クリプトだけが凄まじい敵意を向けてくる。まだ根に持つてるのね。

「何故お前がここにいる」

「それ、お前らのリーダーにも聞かれた」

とりあえずエイリアにきた経緯を軽く説明した。イプシロンのグループは、納得出来ないような表情だった。

「……まあいい。あまり下手な真似はするなよ」

それも言われた。エイリアでは鉄板の返しなのかそれは。彼らはそう吐き捨て、他所の席に座った。

「待たせたな」

ウルビダ達が戻ってきた。差し出されたのはパンが二つ。そして

「ま、マツカン……だと……!?」

俺は幻覚を見ているのだろうか。パンの隣に、千葉県民のソウルドリンクであるマツ

クスコーヒー、通称マツカンが置かれている。

「マツクスコーヒー、だったな。お前の好物であると既に調べ済みだ」

「え、何これ飲んでいいの?」

「構わん」

久々のマツカンじゃああああ!!やつほおおおい!!宴じゃ宴じゃああああ!!

俺は内心、狂乱している。マツカンのプルタブを開けて、一口。

「う、美味え……!!」

ヤバい美味すぎる。美味すぎて涙が止まらないレベル。

「そんなに美味しいの?それ」

「ばっかお前マツカンは主食だぞ舐めんな。これが世界から無くなれば自殺するレベ

ル」

「そ、そうなの……」

クイールとキープは軽く引いている。ハッ、なんとでも思え。俺の好きなものは小町とマツカンだ。誰から引かれてもこれは絶対に譲らん。

「そんなに喜ぶとはな」

「サンキュー!愛してるぜウルビダ!」

「なっ……」

俺は急いで次のマツカンを補給しに行く。ここにあるマツカン根こそぎ頂こう。マツカンは誰にも渡さん。

「あ、エイト」

なんだこの忙しいときに俺の邪魔をするやつは。声をかけたのは、またクララであった。後ろには、先程いなかった仮面を付けた女と目つきが少し鋭いセミロングの女がいた。

「なんだクララ。今から俺はマツカンを補給せにやなんのだ。悪いがお前に構ってる場合はねえ」

「マツカン？ ああ、あの甘ったるい缶コーヒーよね」

思わぬところからマツカンの名前が出た。目つきが少し鋭い子。名前は知らん。

「あれ飲むって大概の甘党よね。あれ好きなの、アンタ」

「ぼつかあれは千葉のソウルドリンクだぞ。好きとかいうレベルじゃない。無くてはならないものなんだよ」

「そんなわけないでしょ。千葉を何だと思ってるのよ。私の兄さんも、あんな甘ったるいコーヒーは身体に悪いって言ってたわよ」

「お前ちよつとそのお兄さん連れて来い。マツカンの素晴らしさを一から教えにやなん」



「なんでよ」

つと、マツカンを布教してる場合じゃねえや。さつさとマツカンを補給しないと禁断症状が起きる。

「とりあえずマツカン補給するから。じゃあな」

俺はダツシユでマツカンを補給しに行く。受付は警備マシンが行なっているようだ。

「ちよ、マツカン全部」

もはや何言ってるのか自分でもさつぱりだが、理解してくれた警備マシンはマツカンが詰められた箱ごと持ってきてくれた。

神かお前は。

「マックスコーヒー、ゼンゼンウレナクテコマツテイタ。ダカラ、オマエニヤル」

なんで売れねえんだよ。こんな美味い水を誰も買わないとは損してるぜ。

俺は箱ごと運んで、さつきの席に戻る。席に戻ると、ウルビダが異様に静かにしていた。

「エイト、それ何だっポ?」

「全部マツカンだ。今日は俺の気分もいい。お前らに布教してやる」

俺はマツカンを渡す。これでマツカンを信仰する者がいれば、なお良し。

二人はマツカンを開けて、一口飲む。

「あ、甘っ……」

「甘いっポ……」

「この甘さがクセになるんだよ」

二人は同じ感想だった。しかし、ウルビダはマツカンに手を付けずに俯いていた。

「…何、どしたの？」

「…何でもない。悪いが先に部屋に戻る」

ウルビダはそう言っつて、食器が乗ったお盆を返却口に出して帰っていく。

「……なんだ、あいつ」

まあいいや。マツカンマツカン。俺は2本目を、カシユ、という音を鳴らして飲み口

を開ける。うん、やっぱ美味しいわ。

## ウルビダ

部屋に戻った私は、すぐさま布団をかぶって籠り始める。

「エイト……」

私はエイトの名前を呟く。

比企谷八幡、通称エイトである。私がそう名付けたのだ。

「はあ……」

私はあいつが好きだ。お父様と同じくらいに、私はあいつのことを愛している。だから、私は無理にでもエイリアに連れてきたかった。

エイトを、私の下から離さないように。

あいつとは、小学校の頃に一緒のクラスだったことがある。とはいえ、あまり話したことはなかった。覚えているのは、あいつが周りからいじめられていたことだけ。

そして私も、一時期いじめに遭っていたことがある。理由は忘れたが、とにかくいじめられて泣いたことは覚えている。そのことをお父様にも話した。

それでも、いじめは止まらなかった。

しかし、あいつが。エイトが、私を助けてくれた。自分がいじめられて苦しんでいる

はずなのに、私を助けてくれたのだ。

その瞬間から、私はエイトのことを好きになった。なんともチープな理由だと私は思う。ただ一回助けられただけで、好きになってしまったのだ。

そして私は学校が終わるたびに、お父様にエイトのことをずっと話していた。好きなやつのは、何故か話したかったから。

だが、そんな平和に終わりはしなかった。

突如、富士山麓に飛来した隕石。その隕石から、身体能力を上げるエナジーが放出されたそう。名をエイリア石と呼び、お父様はその強力なエナジーに目が眩み、変わってしまった。

昔、お父様には実の息子がいたそう。名は吉良ヒロト。サッカーが好きその人物は、サッカー留学をしていたとき少年犯罪に巻き込まれ殺されてしまう。その事件には政府要人の息子が関わっていたとかで事実を揉み消され、事故死とされた。

この件から、世界に対する復讐心を抱いていた。そしてエイリア石に目が眩んだお父様は、その抑えていた復讐心を解き放った。

お父様の目的は、エイリア石で私達、お日様園の孤児達を強化し、ハイソルジャーに仕立て上げ、世界に対して復讐、支配をすることであった。

それに対して、私達は一切の拒否を見せなかった。私達は、お父様に数え切れないほ

どの恩がある。だから、私達はお父様の野望に賛同した。どんな辛いことにも耐えてきた。お父様のためならば、私達は傷付いても構わない。

だが、お父様の野望に賛同した反面、エイトとは会えなくなってしまうた。お父様に尽くしてきたことに不満はない。

だが、もし隣にエイトがいたならば。

そんな考えが、頭を駆け巡った。しかし、所詮は私の駄々でしかない。だから、エイトのことは頭の隅に置いて、お父様の野望のことだけを考えた。

しかし、この間の大阪でのイブシロンと雷門の一戦。

ただの興味本位でその試合をビジョンで見っていた。雷門で目立つのは、ジエミニストームから点を取ったストライカーと、FFで優勝したGKの円堂守だけ。

興味も失せ、私はすぐにビジョンを消そうとしたその時。

ただのパスをカットしたシーン。マキュアが三人のディフェンスで詰められており、やむなくゼルにパスをするシーンだった。

そのパスをカットした人物から、私は目が離せなくなった。

その人物は、私を助けてくれた、エイトだったからだ。

エイトが雷門にいる。ということは近い未来、我々と戦うことになる。

私は珍しく、興奮してしまった。

感情など、サッカーには不必要で、お父様の野望のためには邪魔でしかない。

しかし、エイトが雷門に。近い未来、あいつと出会える。頭の隅に置いていたエイトのことが、一転してエイトのことしか考えられなくなった。

出会うだけじゃ物足りない。ずっと私の手元において欲しい。

こうなれば、無理矢理にでもあいつを私の手元に置こう。そう考えた私は、妹の比企谷小町を誘拐するようにエージェントに命じた。

正直、妹のことなどどうでもいい。別に今すぐ家に返してもいい。しかし、エイトは妹のことを大事にしているそう。妹を盾にあいつを脅せば、エイトは私のモノになってくれるに違いない。

そして福岡での一戦。雷門が負けた条件として、エイトを拐うことを決めた。結果は我々の圧勝。そして、強引にエイトをここに連れてきた。

予想通り、妹を盾に脅したら、すんなり私に従うことを決めた。その瞬間、私は天にも登るような気分だった。

お父様の役に立つことができ、かつエイトは私だけのモノになった。これ以上の幸せがあるだろうか。

しかし、少しお父様に不満を抱いた。エイトのことは私が何度も話していたので覚えていたらしいのだが、あいつの才能をガイアだけに使うのは勿体ないと言い、ダイヤモ

ンドダスト、およびプロミネンスにも助つ人という程で扱ふことになった。

ガイアだけでも、と思つたがお父様の命令は絶対なので、私はそれに従つた。

それでも、どこにしようがエイトは私のモノということに変わりはない。それだけでも良かった。

しかし、今日。食堂でダイヤモンドダストのクララと話していたとき、私は非常に嫉妬した。クララがエイトに、エイリアに入ったということとで親交を深めようと食事に誘つた。その瞬間、クララを吹き飛ばしてしまいたかつた。

私のモノに軽々しく話すな。ガイアに劣るダイヤモンドダストごときが、私のエイトに近づいて欲しくなかつた。気に入らなかつた。

エイトは私だけのモノだ。

今日はクララに嫉妬していたが、顔に出さないだけで今まで私はずっと嫉妬していた。エイトの今までの生活を調べているうちに、周りには女の知り合いが多いのだ。

だが、やつらは気付いていない。エイトは既に、私のモノだということを。やつらが呑気にエイトを待っている間、エイトは私のモノになっているのだ。

それに。

”サンキュー！愛してるぜウルビダ！”

あいつの口からはつきりと。愛していると言われた。

よもやあの女達が入る余地はない。エイトと私は、もう一緒にいなくてはならない関係なのだ。

こうなれば、お父様に頼むしかない。ダイヤモンドダストとプロミネンスの助っ人扱いを取り消して欲しいと。

あいつに愛していると言われた以上、私はあいつを離さない。どこにも行かせはしない。

もう一度言おう。

エイトは、比企谷八幡は。



全部、私だけのモノだ。

## プロミネンス

「今日は俺達プロミネンスと練習をしてもらう」

俺の部屋に来るなり、バーンはそう言う。まだ納得していない表情であった。

「や、別に誘いたくないなら誘わなくてもいいんじゃないかね？」

「うるせエ。さっさとユニフォーム着てグラウンドに来やがれ」

言うだけ言って、彼は乱暴に部屋のドアを閉める。俺の部屋には、ご丁寧にプロミネンスのユニフォームが用意されていた。それだけではなく、ダイヤモンドダストのユニフォームも。

俺はプロミネンスのユニフォームを着て、グラウンドに向かう。グラウンドには、プロミネンスのメンバーが揃っていた。

「遅エぞエイト」

「これでも早く来たんですが」

「バーン様、この人間は……」

炎の模様を表したヘッドバンドを装着していて、暗い瞳をした男がバーンに尋ねる。

「あア、こいつは最近エイリアに入ったエイトだ。認めたかねエが、こいつの実力はそれ

なりにある」

あと同じやりとりを一回くらいしなきゃならないのだろう。デジャブかこれは。

「いいかテメエら！俺達は必ずジエネシスの座を掴み取る！ガイアやダイヤモンドダストの野郎達に、絶対負けるわけにはいかねエ!!」

バーンがメンバーを奮い立たせると、プロミネンスは気合いを入れて練習を始めた。で、俺何すりゃいいの？

「え、俺は？」

「ああ？ああ、そうだな。おいレアン、ヒートー！」

髪は赤色のセミショートで、前髪がカールした女と、ツンツンに立った白髪で、顔の右側の傷が目立つ男がバーンの呼びかけに応じる。

「どうした、バーン」

「テメエらの練習にこいつを加えておけ。俺の練習にこいつは必要ねエからな」  
「分かった。エイト、だったな。こっちに來い」

ヒートに連れられ、俺は練習に加わる。今回、俺はデイフェンスの練習をするように指示される。

昨日のジエネシスの動きを見慣れてるからか、プロミネンスの動きにも付いていけている。ただ違うのは、プレーに荒々しきがあるところだ。激しいタックルに、厳しいス

ライディング。ジエネシスとは違い、力押しのようなプレーだ。

ちよこちよこファウル紛いのタックルやスライディングをしてくるのは、私怨でないと信じたい。

そして数時間後、数十分の休憩が挟まる。

「しんど……」

激しいタックルやチャージなどで、普通のプレーより体力をより消耗する。それに、プロミネンスのユニフォームって長袖だから暑い。余計に体力が減らされる。

「ねえ。私と勝負しなさいよ」

ハチマンは勝負を仕掛けられた！目を合わせてすらないのに強制バトルかよ。お前はライバルか？

「…レアン、だったか？」

「私、貴方が気に入らないの」

おっと何もしてないのに嫌われるとは思わなんだ。すると、ヒートが耳打ちで事情を話してくれた。

「レアンのやつ、自分より強い選手は気に入らない性格だな。すぐ勝負を挑みたがるんだ。エイトの実力を認めている反面、エイトに劣っているという事実が嫌なんだろう」

「何それ新手の戦闘狂？」

理由が私的すぎて笑えてくる。ていうか、俺は別にレアンより強い自覚はない。サツカーだってまだ毛が生えた程度だからな。

「私MFなの。今日のデイフェンス見せてもらったけど、私ならあの程度のデイフェンスくらい突破出来るわ」

「そ、そうか。そりやまた自信がおありで……」

「私が貴方のデイフェンスを突破出来たら私の勝ち。止めたら貴方の勝ち。簡単でしょ？」

「せめて、休憩くらいさせてくれない？しんどいんだけど」

「ハッ、やっぱり人間の身体能力なんてこの程度よね」

軽く会話した感じ、レアンは負けず嫌いでプライドが高い。まるで雪ノ下みたいだ。

「ああそうだな。俺が今お前とやり合っても俺の負けは目に見えてる。棄権するからお前の勝ち。それでいいだろ」

正直、レアンとやる理由もメリットもない。ただただ自分より強い人間を許さないために、勝負を挑んでいる。迷惑な話だなおい。

「ふざけてんの？私がそんなんで納得すると思ってる？」

「逆に、俺が私的なる理由で納得して勝負を受けると思ったのかよ」

「逃げるの？」

「逃げの何が悪い。戦略的撤退って言葉を知らねえのかよ」

「…貴方のそういうところ、気に入らない」

レアンはキツと俺を睨む。別に俺じゃなくても、バーンにでも勝負を仕掛ければいいのにな。

「エイト、諦めて受けてくれ。レアンがああなった以上、止められない」

「マジかよ…」

俺は溜息をついて、ゆっくりと立ち上がる。メリットもない勝負を受けるなんて、これっきりにしたい。

「やっとその気になったわね。さあ、始めましょ」

俺とレアンはグラウンドに入る。他のメンバーは、この勝負に興味を示し、見届けようとしている。

「手加減してね？俺まだビギナーだから」

「安心して。本気で燃やし尽くしてあげる」

安心しての意味を広辞苑で調べて欲しい。何一つ安心出来る要素がないんだが。

「それじゃあ行くわよ！」

レアンは、猛スピードでこちらに突進する。レアンはボールとともに宙に浮き、そのボールを地面にめり込ませる。

「フレイムボール!!」

めり込んだ衝撃からか、地面から火柱が発生。火柱は段々こちらに近づき、最後は炎の膜が俺の前に発生する。

「チッ!」

炎の膜に当たる直前に、後ろにジャンプ。かろうじて、フレイムボールを躲す。

「やるわね!でも、デیفエンスとしては悪手よね!」

そう。このまま下がるというのは、攻撃の進行を許しているも同じである。

だが、俺には強力なデیفエンス技など持っていない。

だから、俺は俺のやり方で。

「あ!」

「ツ!」

「あそこにUFO……………なんつって」

以前雷門にもやってみせた技。その様子に、プロミネンス全員はゴミを見る目をしてきた。そんな見つめないで恥ずかしい。

キモいなこれ。

「…ふざけてるの?悪足掻きにしても、そんな子供騙し…」

今だ。俺は全力で足を動かして、レアンに突っ込む。レアンは一瞬、判断が遅れてし

まった。その隙を突いて、俺は強引にボールを奪う。

「……子供騙しがなんだって？」

「ひ、卑怯よ！こんなの無効よ！」

レアンは納得していないという言い分だったが、勝利条件はボールを奪うこと。ボールを奪えば、それで勝利なのだ。

「卑怯？違うな。油断したお前が悪い。俺は悪くない」

あそこにUFOなんて、誰も引つかからないことは分かりきったこと。でもふざけたことをすれば、相手に水を差すことができる。そこに、油断が生まれる。

「大体、どう考えてもお前の方が強いに決まってるんだろ。まだビギナーだぞ？」

「う、うるさい！もう一度勝負よ！今度は正々堂々と！」

「ええ……」

第二ラウンド決定。勝利条件は先程と同じ。レアンが速攻でドリブルしてくるとまたあの技の体勢になる。

「フレイムボール！」

火柱がこちらに向かってくるが、よくよく見ればコーンを立ててドリブルで躲す構図と似ている。そう考えると、火柱を容易く躲すことができた。

「な、何ッ！」



そして、どんな必殺技も必ず終えたあとには何かしらの隙が生まれる。

その隙を突いて、俺はレアンからボールを掠めとる。

「今度は正々堂々としたぞ。これで俺の勝ちだ」

「なんで勝てないの!?! エイリア石まで使って、身体能力が上がってるって言うのに! ただの人間に負けるなんて!」

「エイリア石はあくまで身体能力を上げるもの。テクニクは上がらないだろ」

「ッ…!!」

「お前のサッカーのテクニクは知らん。けど、借り物の力で自分が強くなったっていうのはただの思い上がりだ。借り物は所詮借り物。本物の強さじゃないだろ」

俺は普通に特訓して、今の身体能力と技術を手に入れてる。対して彼女は、エイリア石によって常人ならない身体能力を手に入れた。確かに身体能力はサッカーには不可欠だが、テクニクが追いつかないなら意味がない。

「……絶対に勝つ」

「はっ」

「この練習が終わった後、もう一度私と勝負しなさい! 私が勝つまで、貴方に挑み続けてやる!」

「ええ……」

比企谷八幡です。エイリアに来てから、厄介な人物ばつかりに目を付けられるようになりました。

## 独占欲

「練習終わった……」

しんどい。プロミネンス、というよりエイリア達の動きに付いていくだけでだいぶ体力が消耗する。

部屋に帰ってさっさと休もう。そしてマツカンを飲んで寝よう。

「エイト、勝負よ！」

勝負好きのプロミネンスMF、レアンがサッカーボールを持って俺を逃すまいとする。その様子を見たプロミネンスの面々は、そそくさとグラウンドから去る。バーンに頼るなんぞ論外だ。こちらを見もしない。

「別にもう今日じゃなくてよくね？」

「今日じゃなかったらいつするのよ」

「……気が向いたら？」

「ふざけんじやないわ。今するわよ」

レアンとの1vs1再び。逃げ切れる気がしないため、仕方なく勝負を受けることにした。

最初、わざと負けてレアンが二度と勝負しないように仕向けるも、

「貴方、わざと負けたでしょ！ふざけんじやないわよ！」

強いやつにずっと勝負を挑み続けているせいからか、相手の力のコントロールが見抜けるようで。手を抜けばすぐ見抜かれる。見抜かれれば、また勝負を仕掛けられる。

そんな感じで、かれこれ一時間はやっていただろうか。俺は身体に限界を感じ、その場で座り込み、肩で息をする。

「今日はこれくらいにしない？マジしんどい」

「まだよ！まだ私は貴方に勝ってない！今度は勝つ！」

「ちよ、マジでしんどいから……」

レアンの性格にも困ったものだ。プロミネンスのメンバーがそそくさと帰るのも頷ける。

「貴様、何をしている」

すると、俺の後ろから底冷えするような声でレアンに尋ねる。振り向くと、そこにはウルビダがいた。

「うるさいわね。今私はエイトと勝負してんの。部外者は出てつてくれない？」

「プロミネンスごときが私に指図するか。貴様のような三流プレーヤーに指図されるとは、私も落ちたものだ」

「あのお方に優遇されてるからっていい気になってるのも今のうちよ。ジエネシスの座は、私達プロミネンスがいたたくんだから」

「弱き者の僻みは聞くに堪えないな」

あれだね。男子同士の喧嘩より、女子同士の喧嘩の方が数倍怖いよね。ちびつちやいそう。

「まあいいわ。エイト、勝負の続きしましょ。あんなやつ放っておいて」

「待てエイト。私から離れる気か？そんなことをすれば、あの娘はどうなると思う？」

…そうだった。今のウルビダには逆らえないのだ。少しでも逆らえば、小町に危険が及ぶ。

「……悪いなレアン。勝負はまた気が向いたらな」

「は、はあ!?ちよつと待ちなさいよ!まだ私は貴方に……」

「エイトの答えは聞こえただろう。貴様もとつと戻るのだ。行くぞ、エイト」

納得がいかない表情をしたレアンをグラウンドに残して、ウルビダとともにグラウンドから出て行った。

「エイト。レアンの勝負をもう受ける必要はない。私がさせない」

「それは別にいいんだが……」

一つ気がかりなのは、何故あの程度のことまで小町を盾にしてまで俺を連れ行く必要が

あつたんだろうか。俺がエイリアから抜けたり、エイリアに障害を起こす何かならば、小町を盾にするのは分かる。

だが、レアンに勝負を挑まれた程度で小町を盾にして俺を引き離す理由が見当たらない。

「いいか。プロミネンスやダイヤモンドダストのメンバーなどと親しくするな。ガイアに劣る連中などに愛想を振りまくな」

「別に愛想振りまいてないけどな。なんなら愛想じゃなく振りまいてるの敵意だけだね」

「お前は他人に甘すぎる。だからレアンも調子に乗って勝負を挑んでくるのだ」

「俺が他人に甘い？ ばっかお前、俺は他人には厳しく、自分には甘く生きてる男だぞ」

「どうだかな」  
ウルビダはどうやらご機嫌斜めらしい。今ここで阿波踊りでもしようなら、間違いない殺される。

いや、多分誰でも殺すと思う。俺の阿波踊りとかどこ向けのサービスだよ。殺意しか湧かねえよ。

まあ女ならばそういう日はあるんだろう。ここは妙なことをせず、黙っておくのが利口だ。

しばらく歩いていると、俺の部屋が見えて来る。

「じゃあな」

俺がドアノブを掴むと同時に、ウルビダが「待て」と静止をかけた。

「シャワー浴びたらすぐ自分の部屋に戻れ。私もシャワーを浴び終えたら、お前の部屋に向かう」

「や、もう食堂の場所も分かってんだから別にウルビダは…」

「黙れ。私の命令に歯向かうな。妹がどうなってもいいのか？」

「まただ。また小町を盾に使う。」

「お前、それは流石に理不尽だろ」

あまりにも理不尽なウルビダに、少し声を荒げてしまう。しかし、それは逆効果だった。た。

「私の気分で妹をいつでも始末出来る。私の命令さえ聞いていれば、妹は無事でいられるんだぞ」

「ツ……分かったよ。別に待たない理由もないし、いいけど」

「そうだ。お前は私の命令にだけ従っていればいい。では、後でな」

そう言って、ウルビダは去って行く。ウルビダのやつ、未だに俺に固執してる節がある。もうエイリアに入ったんだから、あいつが俺に執着する必要がないはず。

何か、あるのか？

「……考えるだけ無駄か」

疲れた時に考えても何も浮かばない。さっさとシャワーを浴びて、部屋に戻るとしよ  
う。

———  
やはり、エイトは私の手元に置いておくしかない。

今日、エイトの人事をお父様に意見したが、その意見は否定された。

曰く、エイトはエイリア石を使わずとも対等に渡り合える人間。ガイアと練習するの  
もよいが、プロミネンスやダイヤモンドダストと練習していても結果は変わらない。む  
しろ3チームを掛け持ちさせれば、お父様の野望にも近づくかもしれないとのこと。

ダメだお父様。エイトを私以外のところに向かわせば、間違いなく鬱陶しい女が寄り  
付く。

今日も、プロミネンスのレアンがエイトを独占していた。私が目を離れた際にこれ  
だ。昨日は、クララがエイトを勧誘していた。

どいつもこいつもふざけるな。エイトはレアンのモノでもクララのモノでも、まして



やお父様のモノでもない。

私だけのモノだ。

エイトもエイトだ。私達に敵意を向けているのなら、突き放せばいい。にも関わらず、あいつは突き放さずに付き合っている。

もしエイトが正式にプロミネンスのメンバーになれば、あるいはダイヤモンドダストのメンバーになれば。ガイアのメンバーにならなければ。

私はその2チームを破壊する。リミッター解除をしても構わない。エイトだけは、奪わせん。

「エイト……」

そうだ。お父様の野望が成就すれば、褒美としてお願いしてみよう。私とエイトだけがいられる場所。そんな場所をお父様に提供してもらおう。

他の者が来ることができない、私とエイトだけの空間。

そうだ、そうしよう。その為に、早く雷門を潰そう。今の雷門など、私達には遠く及ばない。ましてや、エースストライカーの豪炎寺が不在の中で、やつらは私達に勝てるわけがない。やつがいたとしても、勝てるわけもないが。

雷門を潰して、お父様が世界を支配すれば。その支配下の中で、私とエイトは自由に過ごせるのだ。

楽しみだな、エイト。

「…すつきりしたな」

汗かいた後のシャワー最高。つかプロミネンスのユニフォーム暑すぎるんだよ。半袖にしとけよ暑いから。

頭の中でユニフォームに文句を言いつつ、俺は自分の部屋に戻った。ベッドに寝転ぶと、なお気持ちいい。

「やっべ………疲れたせいか、ベッドが超気持ちいいわ……」

もうこれ以上動きたくねえ。このままヒモになりたい。誰か養ってくれないかな。

俺は大量にあるマツカンを手に取り、プルタブを使って開ける。

「んっ………」

俺はマツカンを豪快に飲む。シャワーの後のマツカンって最高だな。これはいい情報が入った。

そんないい気分をしていると、誰かが部屋をノックする。

「誰だ？」

「ウルビダだ」

ご機嫌斜めのウルビダが俺の部屋に訪れた。ウルビダは、俺の部屋に入る。夜食のパンも持ってきて。

「ほら。夜食の」

「ああ、悪いな」

俺はウルビダからパンを受け取る。アルミニウムを破いて、パンを齧る。

「エイト」

不意に、俺はウルビダから名前を呼ばれる。視線を向けると、ウルビダの様子がおかしかった。

「……なんだ。今日はどうしたんだよ、マジで」

「……お前は私のモノだ。絶対に離さん」

「その、私のモノってなんなんだよ。何？俺ついに人間じゃなくなるの？ていうか、別に俺お前のモノになってないけど」

こないだからウルビダはこんな感じだ。確かに事実上、俺はウルビダの言う通りにしなきゃならないが、こいつの言い方はまた別の何かを感じる。

現に彼女は。

「…違う。お前は私のモノなのだ。私の言う通りに従って、私だけに尽くして、私だけを

見ていればいい」

「……断れば、また小町か？ふざけんなよ」

「お前の弱き部分は妹への愛だ。……気に入らない」

「…何が？」

「……なんでもない」

ウルビダの情緒がイマイチ分からないでいる。彼女の怒りのツボが、意味不明すぎてどうしようもない。

「……明日はダイヤモンドダストと練習だったな」

「ああ。まさか、練習に出んなどか言う気か？それならそれで大歓迎だけど」

「いや、参加しておくといい。だが、クララやアイシー、リオーネとは絶対に親密になるな。お前には必要のないコミュニケーションだ」

「…まああつちから話さない限り俺も話さんから言われるまでもないけど。レアンの時といい、何かあんのかよ」

「……いや、こつちの話だ。とにかく、今後は私の命令だけに集中しろ。いいな」

話を通してみたところ、こいつは妙な独占欲を持っている。しかし、その独占欲をなんで今発揮するのが分からん。

一応、仮説として一つ立てているものの、馬鹿げた仮説だし、また黒歴史を生む可能

性があるから没だ。

「…分かったよ。話は終わりか？ならばよ自分の部屋に帰るかガイアのメンバーとでも飯食つてろよ」

「いや、今日はこのままこの部屋にいる。私が離れば、お前はまた別の女に誑かされるからな」

「そんなことねえよ。小中で嫌ってほど女の人の怖さは知ったからな。大体、今だけだぞ？そうやって話しかけてくるのは」

「…どういう意味だ」

ウルビダが尋ねる。俺は例え話を披露した。

「転校生が来たとしよう。みんなは、その転校生が気になつて寄つてくるだろ？でも数週間もすればそんなことはなくなる。何故か。もうその人と話す理由がないからだ」

「…つまり、目新しきで最初は接してくるものの、あとからそれは薄くなつて最初のように話しかけてこない、と？」

「そういうことだ。レアン……は、まあ論外として、クララとか他のメンバーが俺に話しかけてくるのは今だけだ。新しいから話しかけてくるだけで、段々と飽きてくるんだろうよ」

「……やはりお前は甘い」

……ウルビダ、か。  
何が彼女をここまで変えたのだろうか。

## 歪な愛

今日はガゼルが率いるダイヤモンドダストとの練習であった。プロミネンスの暑いユニフォームとは一転し、通気性のあるユニフォームで、それなりに動きやすい。

「知っているとは思いますが、改めて紹介しよう。エイトだ」

端的に俺の紹介を済ましたガゼル。ちらほら見たことあるやつもいる。

「いいか。我々には、勝利以外許されない。ガイアとプロミネンスを退け、ジェネシスの座を頂くのだ」

ここ最近で分かったことは、3チームはジェネシスという称号を獲得するために争っているらしい。優勢なのはグラン率いるガイアらしいが、プロミネンスとダイヤモンドダストも引き下がるところか、食ってかかる姿勢で戦っている。

「君にはMFの練習をしてみよう。ドロル、リオーネ」

ガゼルが呼びかけたのは、二人とも顔に仮面を着けたやつだった。

なんなの？君ら仲良いの？仮面夫婦なのん？

「エイトを連れて行け」

「はっ」

そうやって、俺は二人に連れて行かれる。3チームの共通点は、FWはFWの練習、MFはMFの練習と、自分のポジションの練習しかしていない。チームプレーの練習ではなく、個人技を鍛えている。雷門の様に、連携を重視するわけではなさそうだ。

「あ、エイト」

「こないだのマツカン好きじゃない」

ドロールとリオーネに連れて行かれたところには、クララと食堂で絡んできた目つきの悪い女がいた。

「マツカン美味いだろ。なんなら水分補給代わりにマツカン持って来てんだよこちとら」

「いつか糖尿病なるわよ」

「マツカンでなるなら本望だ」

そんな軽い雑談を交わして、早速練習を始める。プロミネンスの様な荒々しいプレーとは反対の、鋭く、素早い動きで掠めとったり、抜き去ったりしている。

そして数十分の休憩を挟む。俺はスポーツドリンクの代わりに、マツカンを持ってきている。これがあれば完璧だ。

「ねえ、エイト」

一人で休憩しているところに話しかけてきたのは、クララであった。



「それ、美味しいの？」

「ああ。これぞ千葉の水であり俺の主食だ」

「そんなわけあるか。千葉の水が甘くてどうする」

そう鋭いツツコミを入れてきたのは、メガネをかけたイケメンDF、アイキュー。因みに目つきが悪いセミロングは妹のアイシーである。

「飲むか？」

「いらん。甘過ぎて身体を壊す」

「じゃ、私貰うよ」

クララが意外と乗り気である。俺は予備のマツカン Coolerボックスから出して、クララに渡す。

「どんなのだろ……」

クララはマツカンを開けて、一口飲む。

「……あつま……いけど、なんだろ。なんか、クセになりそう……」

「だろ？これがマツカンの力よ」

「え、嘘でしょクララ？よくそんな甘ったるいもの飲めるわね」

「うん、気に入ったかも。これ」

マツカンの同士が一人増えた。これからクララにはマツカンの歴史を教えることに

しよう。

「……おい」

クララにマツカンを布教している最中、後ろからとても低い声で俺を呼ぶ者がいた。何度も聞いた覚えのあるその声に、俺は冷や汗をかく。

「…ウルビダ」

後ろにはウルビダがいた。彼女の表情を見ると、瞳孔が開き切っており、クララやアイシーに凄まじい敵意を向けている。

「昨日言ったこと、もう忘れたのか？」

昨日ウルビダが言ったこと。それは、クララやアイシー、リオーネと親密にならないこと。

「……忘れてねえよ」

「ならば何故そのように仲良く振る舞っている」

「…単にマツカンを布教してただけだぞ」

「…話が見えてこないけど、どうしたの？」

クララがウルビダにそう尋ねると、ウルビダはクララに対して睨み付ける。

「ガイアに勝らぬ三流プレーヤーは黙っている」

「ちよつと、あんた達ガイアがまだジェネシスの座を獲ってないならあんた達も私達と

同じじゃない」

「ダイヤモンドダストがガイアと同レベルだと言いたいのか？笑わせるな」

「何の用かな、ウルビダ」

この騒ぎにはガゼルも気付いたようで、ウルビダに尋ねた。

「貴様には関係のない話だ、ガゼル。エイト、来い」

ウルビダは俺の手を強く掴み、強引に引っ張っていくと、もう一方の手を掴む者が。

「エイトが嫌がってる。やめたらどう？」

意外にも、クララが助けに入る。しかしその行動がウルビダにとって気に入らないよ

うであり。

「貴様……なんのつもりだ」

「エイトが嫌がってるって言うてるの。それに、今日はエイトはダイヤモンドダストの

メンバー。連れて行かれると困る」

「はっ、エイトはダイヤモンドダストのメンバーではない。エイトは我がガイアのメン

バーなのだ」

「ウルビダ、君はエイトのことになると感情的になるね。エイトと何かあるのかな？個

人的に」

ガゼルがウルビダにそう問うた。俺に固執する理由。それは俺が一番知りたかった。

束縛が激しい上に、情緒が不安定。いくらエイリアに賛同していても、理由もなしに詰められたのでは身体が保たん。

「……貴様には関係のないことだ。エイト、さっさと来い。さもないと、お前の妹に……」

「分かったよ、行くよ」

何かある度に小町を出してくる。そうまでして、俺を縛り付ける意味も分からない。いや、分からないわけではないが、俺の仮説が正しいはずがない。

ウルビダに、俺は何もしてないはずだから。

「……悪いけど、今日の練習はパスするわ」

俺はそう言って、クララの手を振り解く。先行していくウルビダに付いていく形で、グラウンドから去っていった。

どこに向かってているか分からないが、彼女は未だに不機嫌であった。

「聞いてもいいか」

「なんだ」

「お前、なんでそこまで束縛するんだよ。小町を引き出しにしてまで、俺を縛り付ける理由は何なんだよ」

ちゃんとした答えが返ってくるとは思っていないが、とりあえずダメ元でウルビダに

理由を聞いてみた。しかし、彼女から返ってきた答えは。

「お前が悪いのだ。お前が私から離れなければ、お前の妹を引き出しにすることはなかったのだ。私は言ったはずだ。私に忠誠を誓えと。よもや冗談だとも思ったか」

確かにあの時、彼女はそう言った。小町を守るために、俺は彼女に忠誠を誓った。しかし、まさかここまで縛り付けられるとは思っていなかった。

「お前については、私の一存に任せるとお父様に命じられた。だから、お前のことは私が決める。確かにガイア以外のチームに参加することは認めたが、あの様に親しく振る舞う必要はない。同じエイリアとはいえ、やつらも敵なのだ」

「けど、それは俺を縛る理由にならないだろ。仮に、俺があいつらと親しくなっているとしよう。でも、ウルビダには何の関係もないはずだ」

「いいや、関係ある」

ウルビダはそう言い切る。言い切った後に、ウルビダは振り返る。そんなウルビダの表情は、かの魔王とも呼ぶべき雪ノ下さんより怖いものがあつた。別のベクトルの怖さではあつたが、その表情は戦慄させるに十分だった。

「お前は私のモノだ。私のモノに勝手に触れるなど断じて許さん。逆もまた然りだ。私のモノであるお前は、私以外に尻尾を振るな」

「……………めちやくちやだろ、それ。ヤンデレかよ」

「ヤンデレ……というのはいくぶん分かんないが、お前がやつらに近づかれるだけで潰したくなる。お前に話しかけるやつらが気に入らない」

まさか、リアルなヤンデレが存在するとは思わなかった。

前々から、ウルビダから好意を向けられているのではないか。そう考えていた。違うなら違うで勘違いで済ませたのだが、だいぶ重症な様だ。

こういうタイプに理屈は通用しない。いかに彼女の機嫌を損なわない様にするかが鍵になる。小町を守るためにも、下手な選択はできない。

間違った選択でも、らしくない選択でもいい。小町を守るためなら、俺は何だってやる。

「……分かった。これからはきつちりとお前に従う。小町のこともある。千葉の兄に二言はない」

「…信用ならないな。お前はそう言っつて、今まで何度裏切った？」

「…じゃあどうすればいいんだよ」

「……そうだな。これからは私の部屋で寝泊まりしろ。お前の行動は私が管理する。だからまず、お前の部屋にあるものは全て私の部屋に持ってこい」

まずは監禁もどきか。まあ、エイリアのこともあるだろうから練習には出してもらえるんだろうけど。

おそらく、練習やシャワー、トイレ以外はウルビダの部屋から出られない状態になるだろうな。出たとしても、多分ウルビダが近くにいるだろう。

俺はウルビダに従い、俺の部屋に向かって必要最低限のものを部屋から漁り出した。とはいえ、研究所の中で歩き回るシャツとユニフォーム、そしてマツカンくらいしかない。だからそれほど持ち込むものはなかった。

そしてそれが終わると、ウルビダに部屋を案内される。俺の部屋からはそう遠くなく、すぐに到着した。

「さあ、入れ」

ウルビダに招かれ、俺は部屋に入る。とりあえず邪魔にならないところに、荷物を置いておく。

「ベッドで腰でも掛けるといい」

「あ、ああ…」

言われるがままに、俺はウルビダの部屋のベッドに腰掛ける。すると、ウルビダは真隣に腰掛ける。

「エイト、そのユニフォームを脱げ。ダイヤモンドダストのユニフォームを着ていられては不愉快なことこの上ない」

「あ、ああ」

俺はすぐにダイヤモンドダストのユニフォームを脱ぐ。半裸状態になった俺に、ウルビダは躊躇いなく俺に抱きつく。

両腕を俺の首の後ろに回し、ウルビダの顔はすぐ目の前に。

「……私は幸せだ。お前を、エイトを私が独占しているのだから。この綺麗な肉体も、私だけが見ることができる」

そう囁いたウルビダの表情は、恐ろしく妖艶であった。

「……あの、流石に恥ずいから離れてくれ」

「ふっ、可愛いやつだ。だが、離れるわけにはいかない」

いくらヤンデレウルビダとはいえ、女性に抱きつかれることに耐性がないため、恥ずかしい。怖さと恥ずかしさが入り混じった状態である。

「……さあ、今日はこのまま私と共に過ごそう。今日からは、私と二人きりだ」

拗らせたウルビダに俺はどうすることも出来ず、ただただ彼女の指示に従う操り人形と化した。



## 再会

あれから数日。ウルビダに管理される毎日を送り続けている俺は、なんとか彼女の機嫌を損なわない様にしていた。

人の顔を伺って接するなど、俺の嫌いなことだったが、小町のことがある手前やるしかない。

今日も練習を終えた後に彼女と過ごしていると、部屋にノック音が響く。

「誰だ」

「…ガゼルだ。エイトに用がある」

「…いいだろう。ただしふざけた内容ならば叩き出すからな」

ウルビダはガゼルに忠告し、ドアを開く。ガゼルは「失礼する」と言って部屋に入る。

「エイト、明日に私のチームに参加しろ。試合だ」

「……ウルビダがそれ許すと思うか？」

しかし、ウルビダは少し考えた後に。

「…いや、構わん。許可しよう」

未だにウルビダの思考が読めない。この間は練習を中断してまで無理矢理連れて

行ったくせに。

「…元よりエイリアの助っ人扱いとして来たからな。ガイアの戦力アップのためにも、試合は練習より経験値を得ることが出来る」

「……まあウルビダがそう言うならいいけど。で、相手は？」

俺はなんの気無しに聞いた。しかし、ガゼルが答えた相手は。

「雷門だ」

「…雷門……」

ダイヤモンドダストの相手が雷門……。いつか戦うことになるとは思っていたが、思いの外早かったな。

「…相手はお前の元チームメイト。イプシロンが破れてしまった以上、我々が手を下すしかない」

前は同点で終わったつてのに、ついにイプシロンに勝てるようになったのか。きつと、血の滲むような努力をしてきたんだろうな。

しかし、俺はそれでも。

「分かった。雷門だろうが関係ない。エイリアである以上、やつらを倒す」

「君ならそう言ってくれると思っていた。では、また明日。グラウンドに来てくれ」

ガゼルはそう言って、部屋から出て行く。ガゼルが出て行った後、ウルビダが俺に釘

を刺す。

「……明日の試合は私はビジョンで見ている。もし、またクララやアイシーなどに尻尾を振るようであれば……」

「分かってるよ。毎度毎度小町を出されちゃ、身が持たん」

それだけではない。

彼女の異常な独占欲から来ているのか、俺の身体にキスマークを付けている。まだ互いにキスはしていないが、ウルビダのモノだとみんなに見せつけるために付けられている。

最初は怖さや気持ち悪さなど、俺は拒絶気味だったが、段々とその行為は慣れてしまった。ウルビダと一緒にいることで、少しずつ俺は壊れてしまっている。

「……さて、明日は早いのだろう。今日は早めに就寝しよう。さあ、早く入れ」

「……ああ」

ウルビダが端に寄って、俺が入るスペースを開けた。

狭いシングルベッドで、俺とウルビダと一緒に寝ている。狭いせいで、ウルビダと密着する羽目になり、彼女の肉体が俺にストレートで当たる。

小町とも一緒に寝たことはあるが、ここまで流石にない。

「……ではな。愛しき私のエイトよ」

彼女は決まって、寝る前に俺の首筋に軽く噛み付く。何度も噛まれていたせいで、肌が敏感になり、少しヒリヒリして痛い。しかし、ここで拒絶すれば、ウルビダの機嫌は間違いなく悪くなる。

だから、機嫌が悪くならないように、突き放さず、逆にウルビダの身体を更にこちらに寄せる。

つまるところ、抱きしめていることになる。

そうすることで、ウルビダの機嫌を抑えることが出来るのだが、その時のウルビダの顔は、もはや練習の時とは別人である。雪ノ下風に言えば、欲情した猿みたいな表情。

だが、こうすることが彼女の機嫌を損なわない唯一の方法。そして、小町を守る方法なのだ。

「…おやすみ」

そして俺は目を閉じて、意識を離れた。

翌日。

いよいよ雷門との試合の日。俺はダイヤモンドダストのユニフォームに着替えて、集

合場所のグラウンドに向かった。

グラウンドには、既にダイヤモンドダストのメンバーが揃っていた。

「来たな、エイト。では、早速向かうとしよう」

ガゼル専用の黒いサッカーボールがガゼルの足元に現れ、青白い光がグラウンドで輝く。

その光は段々と収まり始め、周りを見ると大きいサッカーグラウンドが俺の目に映った。しかし、それと同時に俺の目の前には巨大な身体が立ちはだかっていた。

どうやらゴツカさんの背中の様です。ていうか君デカイよ。本当に同じ中学生かよ。

「我々はエイリア学園マスターランク、ダイヤモンドダスト」

「来たな！ガゼル！」

顔は見えないけど徐々に円堂の声を聞いた。相変わらず喧しい。

「円堂、君達に凍てつく闇の冷たさを教えてあげるよ」

ずっと前から思ってたんだけど、ガゼルって色んな意味で寒いよね。色んな意味で。

「熱いも冷たいなんてどうでもいい！サッカーで町や学校を壊そうなんてするお前達

を、俺は許さない！」

「フツ……中々威勢がいいことだ。だが、これを見てもそんなことが言えるのかな？」

俺はずっとゴツカの背中を見つめている最中、ゴツカは俺の目の前から退いてゆく。

ゴツカの代わりに目の前に映ったのは、雷門イレブンだった。

「ひ、比企谷!?!」

「比企谷さん!!」

雷門イレブンは、みんなして俺の姿を見て驚愕していた。まあ、この間まで人間だったやつが急に宇宙人になってたら、そら驚くわな。

「…久しぶりだな、円堂」

「ひ、比企谷!なんでお前がそこにいるんだよ!?!しかもその格好……」

「…まあ、あれだ。エイリア学園の一員になったんだわ。つまりお前らの敵だ」

「そ、そんな……」

しかし、納得していない円堂はこちらに駆け寄って、俺の両肩を力強く掴む。

「お前、なんで宇宙人の仲間になったんだよ!一体、お前に何があったんだ!?!」

円堂、お前の優しさは素直に嬉しい。でも、お前らを倒してでも守るべきものがあるんだ。

「……それを話したところで、お前らに何か出来るわけじゃない。俺はお前らを倒す。絶対に」

「ひ、比企谷……」

「それよりさっさと試合の準備しろよ。俺を説得する暇があるならよ」

俺は円堂の両手を振り解いて、試合の準備に取り掛かる。ストレッチを始めると、クララが話しかけてきた。

「あれが、エイトの元チームメイト？」

「まあ、ほんの数日だけだな」

「ふうん……」

各自がストレッチを終えた後、各自の配置に付く。バレンの代わりに俺が入る。

こちらのフォーメーションは4―4―2。DFにアイキュー、俺、ゴツカ、クララ。M Fにドロル、リオ―ネ、アイシー、ブロウ。FWはフロストと、キャプテンのガゼル。G Kはベルガだ。

対してあちらには、以前いなかったピンクの髪の毛が多いDFと、ツンツンした頭のFWが配置に付いていた。ピンクの方は知らないが、FWのやつは、FFでも活躍していた豪炎寺修也という雷門のエースストライカーだ。

何のために今までいかなかったのかは知らないが、そいつがいるってことはかなり戦力アップしたんだろう。

キックオフは雷門から。ホイッスルが鳴り響いたと同時に、俺以外のメンバーは端に寄る。

え、何これ。俺ハブられたの？

「エイトー」

ガゼルが俺を呼ぶ。

今の状況と、ガゼルのニヤリとした表情を見てなんとなく分かった。

ゴールまでの道をガラ空きにしておくことで挑発し、あいつらにキックオフシュートを打たせることだ。

シュートを打たなくても、やつらは必然的に俺に向かって突進するだろう。要するに、やつらの攻撃を止める力をやつらに見せつけろってことだ。

俺は豪炎寺を睨むと、豪炎寺もこちらを鋭い眼光で睨み返してくる。

あ、ヤバイ。死ぬやつやこれ。

豪炎寺は思い切り足を振り切って、力強いシュートをこちらに打ち込んできた。俺はそのボールを真正面でトラップしようと構えた。ボールが身体に当たる瞬間。

「ぐえっ」

……なんとかトラップした俺は、足でサッカーボールを抑える。それとともに、胸を押さえる。

普通に痛いんだよ、あいつのシュート。肺が破裂するんじゃないかって思ったわ。

「豪炎寺のシュートがあんな簡単に!?!」

「あいつ、あんなにパワーあったか!?!」



「しかも今、変なカエルの声出てましたよ！」

「おいコラそこに触れんな。豪炎寺のシユート普通に痛いんだよ」

本当、音無ちゃんも変わらないよね。そういう、人を小馬鹿にしてるところ。事実だからいいんだけども。

トラップした俺は、アイシーにショートパス。そのままエイリアお得意のスピードで雷門を抜き去る。

「ガゼル様！」

アイシーからガゼルにセンターリング。ガゼルはダイレクトで円堂にシユートを打ち込む。しかし、円堂はしっかりとキャッチする。

「ビリビリくるぜツ……！」

こんな状況でも、円堂は笑ってプレーしている。あれがあいつの強みなんだろうな。

円堂から壁山、財前、鬼道へとボールが繋がれる。鬼道がボールをキープしながら、こちらに駆け上がっていく。

「行かせねえよ」

俺は鬼道からすれ違いざまにボールを奪う。

確かに、雷門は血の滲むような努力で身体能力やテクニックが上がっている。そうではなくても鬼道は、ハイスペックなプレーヤーだ。

しかし、こちらエイリアの尋常ではないスピードを相手に毎日特訓している。それに比べれば、雷門のスピードはやや劣るように見え、ボールも奪いやすく感じる。

「くっ……！」

鬼道から奪った俺は、そのまま前線に上がっていく。FWのガゼルとフロストはマークされている。なら、このまま上がるしかない。

「行かせない！」

ゴールに向かう先に待ち受けていたのは、一之瀬と財前だった。

「比企谷！絶対に君を止めて見せる！」

「元仲間でも容赦はしないよ！」

「……そうかい」

そんな世迷言を吐かす二人の間を、さらりと抜き去っていく。しかし、抜いた先にはまだあいつがいた。

「行かせないっス！」

雷門の鉄壁を誇るDF、壁山。彼が俺の目の前で立ちはだかる。

「ザ・ウオオオオール!!！」

壁山はザ・ウオールを発動。俺は以前と同じ方法で、ザ・ウオールの頭を越すボールを蹴り上げる。そのまま壁山を抜き去ろうとするも、

「打たせねえよ!!」

ピンク色の髪をしたD F、綱海が恐ろしい身体能力の高さを見せつけ、俺の突破をカットした。カットしたボールは、そのままグラウンドの観客席に入っていく。

審判の古株さんがボールを取りに行こうとすると、ボールはグラウンドから戻ってきてた。すると、そのボールとともに一人の少年がグラウンドに舞い降りた。腰下ほどまである金髪の長髪、独特なユニフォームの上に、灰色の襷を袈裟懸けしている少年だった。あの姿に、俺は見覚えがある。

「……アフロデイ」

世宇子中学のキャプテン、アフロデイが俺達の目の前に君臨した。

## アフロディ降臨

俺達の前に現れたのは、世宇子のキャプテンであるアフロディだった。FFでは、その圧倒的な実力で様々なチームをズタボロにしてきた。決勝でも雷門を圧倒するが、彼らの粘り強い精神力が世宇子を打ち破った。

「……何しに来たんだ、アフロディ」

「…君達と戦いに来たんだ。君達とともに、やつらを倒す」

しかし、アフロディは雷門を圧倒した人物。そんな彼を、みんながあつさり迎え入れるとは思わない。

「…疑うのも無理はない。でも信じて欲しい。神のアクアに頼るような愚かな真似は、もう二度としない。僕も一緒に、戦わせて欲しい」

「……分かった！今のお前は嘘をついてないからな！俺はお前を信じるぜ！」

「…感謝する」

そう言つて、アフロディは雷門のユニフォームに着替え、浦部の代わりにFWの位置につく。

「……そんなんアリかよ」

俺はそう皮肉げに呟いた。雷門を圧倒したキャプテンが助っ人とかチートやチーターやんそんなん。

リオーネからのスローイン。ボールはドロルに渡る。そのままスピードに乗って攻め込むが、

「ボルケイノカットツ!!」

土門の必殺技でボールを奪われてしまう。奪った土門はそのまま攻め上がっていく。アフロデイが空いている。今アフロデイに渡されたら、点を取られる可能性が高い。

「もらったッー」

土門からボールを掠め取る。

とつとアフロデイにパスすれば良かったものを、どこか躊躇っていた。

「ブロウー」

前線のブロウにループパス。ブロウが攻め上がっていくが、目の前には壁山が立ち上がる。だかる。

「ザ・ウオオオオール!!」

壁山の必殺技でブロウがボールをカットされる。壁山はそのまま持ち込むが。

「壁山! アフロデイがフリーだ!」

「え!? で、でも…」

「パスするんだー！」

鬼道に指示された壁山はアフロディにパス。だが、パスされたボールはアフロディの少し先に転がって、グラウンドから出ていく。

試合が再会し、ボールはリオーネに。

「はああああッ!!フレイムダンスッ!!」

一之瀬の華麗な必殺技でリオーネからボールを奪い取る。前線には、マークの厳しい豪炎寺とマークが緩いアフロディ。

二回もアフロディにパスが渡らない理由がなんとなく分かった。だから、きっとパスされるのは。

「…豪炎寺ッ！」

「やっぱ豪炎寺だよな」

一之瀬のパスを俺がインターセプト。雷門の大半は、アフロディをまだ信用出来ていない。だからアフロディにパスするのを躊躇う。

「ガゼル！」

ガゼルに繋ぐ。ガゼルはスピードに乗ってカウンターに出る。前からは綱海がディフェンスに入るが、ガゼルのフェイントであっさり抜かれる。抜いたガゼルはそのままシュート。

「はあッ！」

しかし、円堂も負けじとキャッチ。流石に、あいつのガードを崩すのは容易じゃないな。

ダイヤモンドダストの攻めが終わらない。フロストが前線に攻め上がっていくが、  
「旋風陣!!はあああああッ!!」

木暮の旋風陣でボールを奪われる。

「うっしっし。どんなもんだい」

「いい気になるな！」

奪った木暮に容赦なく突進していくガゼル。木暮は焦って綱海の少し前にパスを出してしまう。

「パスが乱れたぞ！奪え！」

ブロウとリオーネが綱海からボールを奪いに行く。

「アフロデイ！」

しかし、綱海は強引にアフロデイにパスを繋ぐ。ボールを受けたアフロデイは、ダイヤモンドダスト陣内に切り込んでいく。

アフロデイに向かって走ってくるドルとアイシー。

「ヘブンズ…：タイム」

「アフロディは、右手を上に掲げて、指を鳴らす。その直後、ドロルとアイシーの背後に現れる。アフロディが元いた場所から旋風が巻き起こり、二人を吹き飛ばしてしまふ。」

そんなアフロディの前に、ガゼルが回り込む。

「墮落したものだな。君を神の座から引き摺り下ろした雷門に手を貸すとはね」

「引き摺り下ろした？ 違うな。彼らの、円堂くんの強さが僕を悪夢から目覚めさせてくれた。新たな力をくれたんだ」

「…君は神のアクアがなければ…」

ガゼルはアフロディに突っ込む。

「何もできない！」

「…そんなもの必要ない」

アフロディは後ろからいつの間にか走り込んできた豪炎寺にパス。その隙にアフロディはガゼルを抜き去ったのワンツー。

「見せてあげよう…生まれ変わった僕の力を!!」

アフロディは大きく翔び、背中から神々しい翼を出す。その翼から送り出されるオーラがボールに纏い、ボールは神々しく輝く。

「ゴッドノウズ!!」



アフロデイの必殺シュート。

そのシュートは周りを照らし、力強い威力でベルガに襲いかかる。ベルガは反応出来ず、ゴールを許してしまう。

「マジか……」

ダイヤモンドダストが失点した。エイリアには勝利以外許されない。引き分けは敗北と同義。

ウルビダの人格なら、負けても小町には手を出さないだろう。

しかし、吉良星二郎という男を俺は知らない。エイリアの親玉と呼ぶべき人物だ。この結果を見て、もしかしたら小町を弾き飛ばすくらいの指示はできるはずだ。

エイリアにいる以上、勝たなきゃならん。どんな卑怯な手を使っても、どんなに野次られてもいい。

小町は俺が守る。

「…ガゼル。本気で叩き潰すぞ」

「…君がそう言うとは思わなかったな。だが、同感だ。我々に敗北などあつてはならない」

一芸だけじゃ雷門には勝てない。この時のために身につけた必殺シュートをやつらに叩き込む。

試合が再会。ボールはすぐ鬼道に奪われ、鬼道は攻め上がる。

「見せてやろう……絶対零度の闇を！」

ガゼルの合図で動きが変わる。鬼道に立ちはだかるのは、巨体のゴツカ。

「フローズンステイル!!」

氷を纏う強烈なスライディングで鬼道を弾き飛ばす。そのまま前線に連続のダイレクトパス。ボールはドロルに。

「ザ・ウオオオオール!!」

壁山はザ・ウオールを繰り出す。対して、ドロルは。

「ウオーター……ベール!!」

フレイムベールの水バージョンのドリブル技で壁山を吹き飛ばす。

「ドロル!回せ!」

デیفエンスラインから俺は全速力で前線に攻め上がった。ドロルからボールを受け取り、俺はゴールに突き進む。

「来い!比企谷!!」

俺はボールと共にジャンプし、ボールに回転をかけて威力を高める。黒紫色のオーラを纏い始めたボールを、右足に力を入れて蹴り込む。

これが、アストロブレイクの進化版。

「アストロゲートツ!!はああアアツ!!」

打ち込んだボールは円堂に飛んでいく。円堂は左足を大きく上げ、勢いよく左足を踏み込む。

「はああアア!!正義の…鉄拳ツ!!」

円堂の右手からは勢いよく金色の大きい拳が現れる。しかし、アストロゲートは少しずつ正義の鉄拳を押し始める。その勢いは止まらず、正義の鉄拳を破り、円堂ごとゴールに押し込んだ。

そして前半終了のホイッスルが鳴り響く。俺はダイヤモンドダストのベンチに戻っていく。

後半に備えて、マツカン二本くらい飲んどこ。

## 引き分け

1—1の同点のまま後半に突入。前半より更に息詰まる攻防が繰り広げられる。あちらが攻めればこちらは守り、こちらが攻めればこちらは守る。まさに一心同体とでも言うべき試合内容だ。

ボールは立向居。立向居が攻め上がって行くが、

「フローズンステイール!!」

ゴツカの強烈なスライディングで立向居からボールを弾く。弾かれたルーズボールは俺が拾って、そのまま攻め上がっていく。

「行かせないよ!」

俺の目の前には財前が。

「ザ・タワアアア!!」

財前はザ・タワーを発動。しかし、タワーを盛り出してから雷を発生させるまで僅か数秒の間がある。

エイリアで身につけたスピードなら、ザ・タワーを攻略できる。

そう考えた俺は、スピードを上げてザ・タワーを不発で終わらせる。そのままフリー

のガゼルにセンタリング。

「凍てつく、がいい!!ノーザン……インパクト!!」

ガゼルの十八番、ノーザンインパクトが炸裂。エターナルブリザードよりも更に冷たく、強烈なシュートが円堂に飛んでいく。

「はああああアツ!!正義の……鉄拳!!」

円堂は正義の鉄拳を繰り出す。しかし、円堂は少しずつ後ろに退がっていく。そのまま正義の鉄拳を粉碎し、ゴール。

「くっそお……」

「勝つのは、我々ダイヤモンドだ!」

ようやく勝ち越した。だが、まだ油断はできない。追い詰められる度に、彼らの底力は発揮される。

雷門のキックオフから試合再会。点を取られたことで士気が上がったのか、雷門の猛攻が始まる。

さつきまで奪えていたのが、今では奪えなくなっている。

ボールはアフロデイに。アフロデイに、ゴツカ、アイキユ、クララがマークにつく。「バカ!そんなにマークに行ったら……」

俺は判断が遅れ、パスをカットできなかつた。アフロデイからパスを受けたのは、雷

門のエースストライカー、豪炎寺だった。

ボールを受けた豪炎寺は、炎の魔神と共に大きく回転しながらジャンプする。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺から放たれる強烈な炎のシュート。

「これ以上入れさせるか!」

俺は豪炎寺のシュートの威力を少しでも減らすために、ディフェンスに入る。右足を力を含めて、シュートを迎え打つ。

だが、

「があアアツ!!」

豪炎寺のシュートは凄まじい威力を誇り、俺如きでは弾き飛ばされてしまった。

「アイス……ブロック!!」

ベルガが氷を纏う拳で爆熱ストームにぶつけるが、その勢いは止まらず、ベルガごとゴールに叩き込んだ。

2-2。再び同点。しかも、残り時間はあまり残ってはいない。次入れた点が試合を決めることだろう。

ダイヤモンドダストのキックオフ。攻撃陣は猛然と雷門陣内に突入していく。だが、雷門の底力の高さゆえに、攻めあぐねている。

すると、ゴールから円堂が飛び出し始めた。ボールは一之瀬が保持している。これはまさか……。

「アイキユーは土門を！クララは円堂にマーク！」

俺はもしかしてと思い、アイキユーとクララに指示を出す。二人は指示通りに動いてくれた。

一之瀬が一人になったところを、

「もらったッ！」

俺は掠め取る。ゴールはガラ空き。円堂は戻るのに時間がかかる。

「ガゼル！」

俺は前線のガゼルにロングパス。だが、そう物事は上手くいかず、身体能力の高い綱海は、驚異的な跳躍を見せてそのパスをカット。ボールはグラウンド外に転がってゆく。

「チツ……」

あと少しで点が入ったものを。

全然知らんやつだが、さっきからなんなんだあの身体能力は。

試合は再開して、ダイヤモンドダストのスローイング。だが、すぐまたボールを奪われる。鬼道がボールをキープし、そのまま上がって行く。

「行くぞ豪炎寺！円堂！」

鬼道の合図で豪炎寺と円堂が駆け上がる。ザ・フェニックスの次はイナズマブレイクの体勢かい。

鬼道が勢いよくボールを上蹴り上げる。

「打たせるか！」

俺は蹴り上げられたボールをトラップし、そのまま攻め上がっていく。しかし、今度はアフロデイが邪魔をする。

「円堂くん戻れ！早く！」

「くっそ！」

流石世宇子のキャプテン。テクニックがずば抜けている。

「こっちだ！エイト！」

後ろから駆け上がっていたガゼルの呼びかけに応え、俺はパスを出す。そのままハイスピードで雷門ゴールに突き進む。

「凍てつく闇の恐怖を思い知れ！ノーザン：インパクトツ!!」

ガゼルは構わずノーザンインパクトを打ち込んだ。しかし、打つたと同時に円堂がノーザンインパクトに回り込み、正義の鉄拳の体勢に。

「ダメだ円堂！ペナルティエリア外だ！ハンドになる！」



円堂はペナルティエリア外でも迷わず正義の鉄拳を繰り出そうとしていた。しかし、繰り出したところで止めれるとは限らない。

すると円堂は自棄になったのか、ノーザンインパクトを頭でぶつける。その後、頭から拳のようなものが現れ、ノーザンインパクトを弾いてしまった。

「何ッ!？」

そしてホイッスル。試合が終了した。

2―2の同点。最後の最後は円堂の新技らしきもので幕を下ろした。

「そこまでだよ、ガゼル」

グラウンドに現れたのは、私服姿のグラン、およびバーンの姿。

「試合は見てたよ円堂くん。短い間に、よくここまで強くなったね」

「エイリア学園を倒すためなら、俺達はどこまでも強くなってみせる」

「……いいね。俺も見てみたいなあ。地上最強のチームってやつを」

「……本当に、そう思っているのか？」

円堂の問いに、グランは答えずにはぐらかす。そして上から黒いサッカーボールが降ってきて、俺達を眩い光で包み込む。

「円堂守……次は必ず、君達を倒す!」

ガゼルはそう言い残して、ダイヤモンドダストを引き連れて去って行った。グランや

バーンとともに、グラウンドから消えて行った。

「……………え」

去って行った？消えて行った？

あれ？俺は？これ目の前には星の使徒研究所が広がってるパターンじゃないの？なんでまだ目の前に円堂達いるの？

これはまさか。

「……放って行かれた…」

ヤバイヤバイ。円堂達がすごい目で見てくるんだけどどうしよう。俺帰れないじゃん。わざわざ富士山まで自力で帰れってか。

鬼かよ。

「えっと……比企谷、先輩？」

「ひ、ひやいつ」

「あ、良かった。比企谷先輩ですね」

いや確認方法。

なんだその確認方法は。斬新だな音無よ。

「もしかして放って行かれたの？だっせーの。うっしっし」

はいその通りです。放って行かれましたよ。何か悪いですか悪いですねすみません。

どうしよ。とりあえずこの場から去るしかないよな。俺は何も言わず、グラウンドか

ら去ろうとすると、

「待て、比企谷」

デスヨネー。そりゃ引き止めますよねー。

去り際に引き留めたのは鬼道だった。

「お前は何故、エイリアに味方する。エイリアが今までどれだけのことをしてきたか、お前には分かるはずだ」

「そ、そうっスよ！理由くらい話して欲しいっス！」

味方する理由、か……。

それを聞いてくるあたり、こいつらはまだ俺を嫌っていないと見える。裏切ったやつなど、普通は話しかけたくも無いはずなのに、だ。

でも、誰しも言えない秘密や物事が沢山あるのだ。だから俺は口にしない。それでも、あえて言うならば。

「……エイリア学園を倒せば、理由くらいは話すと思う」

「……比企谷……」

「……本当、お前ら凄えよ。ダイヤモンドダストと互角に戦うんだから。あれでもエイリアではトップクラスだぞ」

「そりゃそうだろう！エイリア学園を倒すために、俺達は日々努力しているんだ！それに、お前だって凄いじゃないか！いつの間にあんな必殺シユートを覚えたんだよ！」

「……円堂は変わらないな」

一応俺はエイリアだぞ？なのに円堂は、それを度外視して笑いながら会話している。すると、もう一つの黒いボールがグラウンドに現れる。眩い光と共に姿を現したのは、

「……全く、エイトを連れて帰ってくるのを忘れるとは何事だ」

いつものユニフォームを着た、ウルビダが溜息混じりで呟きながら現れた。

「お前はジエネシスの！」

「……今日はお前達などに用はない。さあ、行くぞ」

「……おう」

俺はウルビダの隣に立つ。黒いサッカーボールは光を放ち、俺達を包み込む。

「比企谷！」

「……またな」

俺は別れを告げて、今度こそ彼らの前から去って行った。次からはきちんと連れて帰って欲しいです。マジで。

## カオス結成

雷門との試合から4日程度経った。俺はマツカンを飲みながらゆっくりしていた。

いやしかし、マジで放って行かれた時は絶望したわ。研究所の場所が場所だけに一般人が来れる様な場所ではないから。富士山麓だぞ富士山麓。

迷って死んじゃうよクソが。

「エイト、戻ったぞ」

ウルビダが帰ってきた。帰ってきた彼女は俺の隣に腰掛ける。そして、口を開いた。

「……事後報告をしておこうか。今回の試合で、ダイヤモンドダストは用無しとなった」

「……マジか。だいぶ厳しいな」

「当たり前だ。引き分けは敗北と同じ。同様に、プロミネンスも追放だ」

マスターランクの2チームが一気に解散。ということとは、マスターランクのみんなが執着していたジェネシスの座というのは、ガイアになったということなのか。

だが、俺はきつと恨まれているだろう。助っ人扱いとされている俺が結果を出せず、ジェネシスの座を頂くチームに所属しているのだから。

「…別にお前が気にするほどじゃない。それに、我々の敵が消えたのだ。………それに、

「エイトに近づく目障りな女も消えた。無様だな」

雷門と同様に、エイリア学園も負ければ追放される。悲劇しか生まない戦いは、一体いつになったら終わるのだろう。

「エイト。もうあんなやつらのことは気にするな。消えたやつらのことなど捨て置け」  
「……ああ、そうだな」

追放された者達は、きつとどこかで彷徨うことになるだろう。行き所を失って、どこに行けばいいのかわからない状態になる。

最悪、警察に保護されるといいのだが。

「……エイト……」

ウルビダは唐突に、俺の首筋を噛み始める。勿論、俺の体を逃さない様に抱きしめる形で。

もうこの行為には特に意味を成さないはずなのに、未だに彼女は躊躇いなく続けている。きつと、彼女なりの欲求解消なんだろう。

「……エイト……エイトっ……」

首筋を噛みながら、俺の名前を連呼する。それを交互にして、何度も何度も繰り返している。その行為が続くたびに、ウルビダの抱きしめる力が徐々に強くなっていく。

彼女は俺に依存している。それも重度の依存症だ。もし小町関係なく、俺がエイリア

を去ると言い出せば、彼女は死んでも止めるだろう。止めるどころか、きつと俺を監禁するまでである。

そんな考察をしていると、ウルビダの通信機に受信が入る。彼女は舌打ちしながらも、応答に出る。

「……なんだ」

「お父さんが呼んでいる。今すぐ来てくれ」

「……分かった」

ウルビダは通信機を切って、ベッドから腰を上げた。

「お父様からの呼び出しだから行ってくる。ではな」

ウルビダは部屋を出て行き、俺は一人となった。

「はあ……」

ウルビダの依存症にも困ったものだ。妙に疲れた俺は、ベッドで寝転んだ。少しすると、部屋にノックをする者が。

「…開いてるぞ」

俺がそう許可を出すと、部屋に入ってきたのはガゼルとバーン。ダイヤモンドダストのキャプテンとプロミネンスのキャプテンが何しに来たのだろうか。

「エイト。君の力を貸せ」



「……いや、急になんだよ。力貸せつて、お前らエイリアから用無し判定されたんじゃないのか？」

「そんなもん、認められるわけがねエだろ！ ガイアがジエネシスとは認めねエ！」

「私達は、グランに思い知らせるのだ。上には上がいることをね」

ジエネシスの座についてガイアを認めることが出来ず、彼らの独断でジエネシスの座を獲ろうとしているのだろう。

ここから考えられるのは、おそらく雷門との勝負。もしガイアを相手にするならば、ガイアのメンバーである俺を誘うことは出来ないからな。

その上、今エイリアの脅威にとりつつある雷門を倒せば株は上がるだろうから。

「……しかし、ウルビダがなんて言うか……」

俺の独断で行こうものなら、彼女は分かり次第連れ戻す。それだけじゃない。また小町を盾にするかも知れない。

「私達は知っているのだ。ここに、君の妹がいることをね」

「な、何……？」

ガゼルから驚愕の告白を受けた。小町のことを知ってるのは、俺とウルビダ、あとは吉良星二郎とエージェントくらいだけだと思っていた。

ガゼルは俺に構わず説明をし続ける。

「いくら実力者とはいえエイトにあそこまで固執するウルビダが気になってね。私が秘密裏に探っていたのだが、まさか妹が監禁されていたとはね」

「どうだ？俺達の混成チーム、ザ・カオスに入りやア、お前の妹を助けてやるぜ」

確かに、出鱈目を言っている様子は無さそうだ。こいつらの提案に乗れば、小町は助かる……か、どうかは分からないが、少なくともそういう希望はある。

だが、その場合。

彼女は、ウルビダはどうなってしまふのだろう。

俺が消えたことで彼女の精神は崩壊してしまうかも知れない。いや、自棄になって当たり構わず壊してしまうかも知れない。

……何故、俺は自分を束縛する相手を気にしているのだろう。そもそも、エイリアはみんな敵なんだから、敵であるウルビダは放置してもいいのだ。

だが、きつと彼女は俺がいなくなることで、自分の身を滅ぼしてしまう。俺のせいで、彼女が不幸になる。

彼女が何故、俺を好いているのかは分からない。だが、少なくとも彼女の一端には俺が取らねばならない責任がある。

「……聞いてんのかエイト！」

「ッー」

バーンのその声に、俺はブーツとしていたことに気づく。  
「で、どオすんだよ。入るか入らねエか」

だが、もとより俺は小町を助けるためにここにいる。ウルビダのことは、また後で俺が責任を負えばいい。ウルビダの人格上なら、これくらいでは小町には手を出さなはずだ。

これ俺の勝手な予想だし、普通に考えて小町に手を出すことも十分に有り得る。それでも、俺は早く小町を助けなきゃならない。

「……分かった。そのチームに加わらせてもらう」

「……良い答えだ。では、今すぐ来てもらおうか」

「もう試合するのか?」

「ああ。お前には、MFに入ってもらおう」

俺はバーンの指示に頷く。ガゼルからは、赤と青が混じったユニフォームを渡される。

これが、カオスのユニフォーム。

「……着替えたらグラウンドにさっさと来い」

そう言い残して、彼らは部屋から出ていく。俺はカオスのユニフォームを着て、ウルビダの部屋から彼らの後を追う様に行った。

グラウンドには、ダイヤモンドダストとプロミネンスで見たことある人物が揃っていた。

「あ、エイト……」

「…クララか。お前もカオスに？」

「うん。あのままじゃ、引き下がれないから」

ガゼルやバーンだけじゃなく、他の連中もジエネシスの座を諦めていない様だ。

なんでサッカーやるやつはみんな変に負けず嫌いなんだろうか。

「…では行くぞ」

グラウンドには、黒いサッカーボールが落ち、いつもの様に眩しい光が俺達を包み込む。

二度目の雷門との決戦だ。

## ムゲン・ザ・ハンド

星の使徒研究所から移動した場所は、また大きいグラウンドである。FFスタジアムより劣るものの、辺境のグラウンドにしては設備がいい。

そして目の前には、ついこの間戦った雷門が揃っていた。

「おめでたいやつらだ」

「負けると分かっていながら、のこのこ現れるとは」

いや、多分現れたのはどっちかという俺達の方なんですけどね。バーンとガゼルに、心の中でツツコミを入れる。

「円堂守！宇宙最強のチームの挑戦を受けたこと、後悔させてやる」

「負けるもんか！こっちは、地上最強のチームが揃っているんだ！」

「勝負だア!!」

カオスと雷門の試合が始まる。フォーメーションは4―4―2のベーシックな陣形。LBにはクララ、RBにはバーラ。CBは、ゴツカとボンバの巨漢のダブルディフェンス。LMにリオーネ、RMにはドルル、CMには俺とネッパ。FWは言わずもがな、ガゼルとバーンのツートップ。GKにはグレント。

対してあちらは、円堂がフィールドプレーヤーとして立っていた。GKには立向居。この間の試合を鑑みて、フォーメーションを変えてきたのか。

雷門からのキックオフで試合が開始。ホイッスルが高らかに鳴り響き、まずはショートパスで繋ぎつつ攻め上がっていく。

ボールは財前に渡り、ドロールがボールを奪いに行く。

「お前なんかに取りられるかよー！」

だが、財前はすれ違い様にボールを奪取される。ドロールはその勢いのまま、雷門の連中を次々と抜き去っていく。

「任せろー！」

綱海がドロールに突っ込んでいく。ドロールは、FWのガゼルにパス。

「今度こそ教えてあげよう……凍てつく闇の冷たさをー！ノーザン……インパクトッ!!」

ガゼルはノーザンインパクトを発動。対して立向居は、

「マジン・ザ・ハンドッ!! ツぐああアアッ!!」

立向居は、マジン・ザ・ハンドを繰り出すも一瞬で粉碎される。カオスは簡単に一点を取った。

「これが我らの真の力……」

「エイリア学園最強のチーム、カオスの実力だー！」

……こいつらは、この試合に全ての力を注いでいる。いつもガイアで練習していて身体能力の差は少し分かりづらかったが、こいつらの身体能力はこの間よりも上がっている。

全ては、ジエネシスの称号を手に入れるために。

点を取られた雷門から試合再開。ボールは豪炎寺に渡る。上手く前線に上がっていない。

しかし、ゴツカとクララがディフェンスに付いた。

「アフロデイー！」

アフロデイーに繋がる。アフロデイーはそのまま上がっていくが、真正面からはネットパーが向かっていく。

「ヘブンス…：タイム」

ヘブンスタイムが発動。しかし、ネットパーはアフロデイーのボールをカットした。あのチートなドリブルを破ってみせた。

「な、何っ…？！」

動揺するアフロデイーを傍らに、ネットパーはバーンにロングパス。目の前には壁山と円堂が。

「ジエネシスの称号は俺達にこそ相応しい！それを証明してやるぜ！」

バーンは壁山と円堂を跳躍で躲してそのままオーバーヘッドキックの構え。

「アトミック：フレアアッ!!」

灼熱の炎を纏った豪快なシュートが立向居に襲いかかる。

「マジン・ザ・ハンドッ!!」

だが、マジン・ザ・ハンドは再び破れる。立向居ごとゴールに叩き込んだ。

更に試合は一方的な展開になっていく。豪炎寺が攻め上がっていくが、クララがディフェンスでボールを奪う。

「クララ、こっちだ！」

俺はクララにパスの要望を出した。クララは頷き、俺にボールを繋ぐ。

「行かせるかよ！ボルケイノカット！」

土門はボルケイノカットを繰り返す。これは地面からマグマが吹き出すような壁を作っている。だが、この壁にも高さがある。その高さは、きつと限度がある。

俺は真正面からボルケイノカットに向かっていき、ボルケイノカットの壁を跳躍で躲す。

「まだっス！今度は俺っス！ザ・ウオオオール!!」

壁山はザ・ウオールを繰り返す。それを俺はお構いなしに、必殺シュートの体勢。



「アストロゲートツ！はああアツ！」

壁山に向かってアストロゲートを放つ。アストロゲートはそのまま壁山のザ・ウォールを崩し、立向居に飛んでいく。

「マジン・ザ・ハンドツ!!」

だが、三度マジン・ザ・ハンドは破れる。カオス、これで3点目。

今の立向居は、円堂やガイアのネロのガードより遙かに劣っている。だから無理に打つても入るのではないかと思つたが、思いの外柔かつた。

しかし、これだけではカオスの勢いは止まらなかつた。ガゼルとバーンが主軸として、雷門を圧倒する。ものの十数分で、10-0というスコアになっていた。

雷門は攻めあぐね、カオスは大量リードにより勢いが乗っている。

ボールはネツパーに渡り、ネツパーの正面には鬼道が。

「こつちだ！」

俺はネツパーに呼びかけるが、ネツパーは俺を無視してバーンにパスを繋いだ。

え、俺何かした？まさか俺の知らないところでハブられてる？お前ごときが指示すんな調子のんなつてやつ？なんかすいません。

そう心の中でネツパーに土下座している中、再びネツパーにボールが渡る。

「ネツパー！」

次に、横からリオーネの呼びかけがかかる。しかし、ネツパーはリオーネを無視してバーラに繋いだ。

俺だけならまだしも、リオーネまで無視される。それに、やたらとプロミネンスのメンパーばかりにパスを回しているが…。

まさか、あのネツパーという男は…。

三度ネツパーにボールが渡り、またもやバーラにパスを出す。だが、そのボールを鬼道がインターセプト。

「行くぞー！」

鬼道を中心に、土門と円堂が上がっていく。一体何のつもりなのだろうか。

鬼道が上にボールを打ち上げ、それとともに三人が回転しながらジャンプ。三人はボールを囲いつつ回転することで、ボールに気を送っている。

「デスゾーン……2!!」

鬼道と土門、そして円堂の三人が同時にキック。凄まじい威力を放つシュートがグレントに飛んでいく。

「バーン……アウトオツ!!」

両手を燃やしてボールにぶつける。だが、威力はデスゾーン2が優っており、グレントを弾き飛ばしてゴールに叩き込んだ。

「……なんて威力だ……」

正直、豪炎寺の爆熱ストームとアフロデイのゴッドノウズにしか警戒していなかった。まさか、この数日の間にこんな威力のシユートを完成させていたとは。

今度はカオスのキックオフ。ボールはバーンに渡り、猛然と切り込んでいく。鬼道がバーンに向かって走っていくが、バーンのスピードに乗ったフェイントに躲かれてしまう。

次に円堂がディフェンスに入るが、バーンの得意なジャンプで躲す。

「たかが一点で調子に乗ってんじゃねエ!!」

バーンはそのまま、アトミックフレアの体勢に入った。

「アトミック…フレアアアッ!!」

バーンのアトミックフレアが炸裂。立向居に向かって飛んでいく。立向居は、マシン・ザ・ハンドを繰り出す……と、思いきや、全く違う体勢に入った。

彼が両手を合わせると、立向居の背後から無数の手が伸び始める。

「ムゲン・ザ・ハンドオッ!!」

無数の手はボールを次から次へと包み込み、アトミックフレアを完璧にキャッチしていた。

「な、何だとッ!?!」

アトミックフレアを止められたバーンは驚愕していた。恐らく円堂の正義の鉄拳を破るであろう、アトミックフレアを完璧に止めていたから。

こうなってしまうては、話が違ってくる。ガゼルのノーザンインパクトも恐らく止められる。

立向居がアトミックフレアを止めたところで前半終了。依然カオスリードに変わらないが、後半も油断せずに行かなければならいな。

## ファイアブリザード

100-1のカオスリード。あちらは爆熱ストーム、ゴッドノウズ、デスゾーン2という強力なシユート技を持っている上に、アトミックフレアを止めるほどのキャッチング技のムゲン・ザ・ハンドがある。

リードしているとはいえ、このまますんなり勝たせてもらえそうではない。

それに、一つ問題がある。

プロミネンスのMFネットパーは、俺やダイヤモンドダストのメンバーを完全に無視している。状況から考えれば、プロミネンスだけで勝ってジエネシスの座を獲りたいのだろう。ネットパーの行動を境に、恐らくダイヤモンドダストのメンバーもプロミネンスを無視するだろう。

しかし、それを俺が言ったところで何の解決にもならない。この試合に勝つには、ダイヤモンドダストとプロミネンスがしっかりと協力することが必須だ。それに、俺が余計なことを言って、尚更隙を作るのは避けたい。何か、やつらが一つにならなきやならないきっかけがあれば、後押し出来る。

カオスからのキックオフで後半は試合再開。ボールはネットパーに渡る。ドロールに繋げると思いきや、強引にバーンにパス。だが、鬼道は見逃さずにそれをカット。

「アフロデイ！」

鬼道からアフロデイへのセンタリング。

「ゴツドノウズ!!」

「バーン…アウトオツ!!」

アフロデイはグレントの必殺技を破って追加点。しかし、雷門の追撃は止まらない。豪炎寺やアフロデイを中心として、次々に点数を入れられていく。

ダイヤモンドダストとプロミネンスの仲違い関係なく、普通に支配率は雷門が上になっている。俺の動きも、やつらには読まれている。気付けば10-7。

「……やばいな」

そろそろ追加点取らないと、逆転される可能性がある。正直にハーフタイムの時に言っておけば良かったかな。

「…バーン、ガゼル。これがカオスの現状なんだが」

「…見ていれば分かるよ、そんなことは」

「あいつらは分かっちゃいねエ。なんでカオスつつウチームを結成したのかを。…ガゼル」

「ああ。私達がやるしかないな」

そう言つて、二人は自分の位置に戻つた。一体、何をするつもりなんだろうか。

カオスからのキックオフ。試合が再開すると、バーンとガゼルは全速力で雷門陣内に切り込んでいく。豪炎寺や鬼道、デイフェンス陣をあつという間に抜き去り、残るは立向居一人。

バーンがボールを蹴り上げると、

「バーン!!」

「ガゼル!!」

二人揃つて高く跳躍する。

「これが我らカオスの力!!」

「宇宙最強チームの力!!」

バーンの右脚は炎を、ガゼルの左脚は氷のオーラを放ち、それを纏いながらシュートの体勢。

「ファイア……ブリザアアードオオツ!!」

二人が織りなす炎と氷の混沌とした強烈なシュートは立向居に向かって飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出す。しかし、二人のシュートはムゲン・ザ・ハ

ンドを弾き、立向居ごとゴールに叩き込んだ。

「……これがカオスの力だ！」

バーンとガゼルの勇姿に、他のメンバーは驚きを隠せなかった。今までジエネシスの座を獲得するために争っていた2チームのキャプテンが同時にシュートを打ったからだ。

「……このままダイヤモンドダストだの、プロミネンスだの意固地になると、雷門に負けちまうな」

「な、何だと！」

皮肉げに言った俺に噛み付いたのはネツパー。

「なんでいきなり一気に点を取られたか、分かるか？」

「……雷門の勢いが付いたから？」

ネツパーの代わりに、リオーネがそう答えた。まあ一概に間違いとは言えない。だが、それはある歪があつたから勢い付いたのだ。

「……それもある。だがもう一つ。お前らは、プロミネンスはプロミネンス、ダイヤモンドダストはダイヤモンドダストのメンバーとしかプレーをしていないからだ。互いのチームを信頼してないが故に、隙が生まれたんだよ」

こいつらの考えは分かる。ついこの間まで敵だったチームと組んで上手くやれなんて言われてもすぐ出来るわけがない。



しかし、バーンとガゼルはそれをやってのけた。カオスとしての使命を、あいつらは果たした。

「まあすぐに信頼しろとまでは言わんけど、最低限の協力くらいはした方がいいんじゃないかねえの」

そう言つて、俺は自分の位置に戻った。

試合再開。財前が上がっていくが、ドロルが奪う。

「ネッパー!!」

ドロルからネッパーにボールが繋がる。ネッパーは自分のスピードで次々と雷門を抜き去っていく。

「これ以上行かせるな!」

ネッパーに対して、円堂、木暮、土門が迫る。すると、ネッパーは俺にパスを出す。

「エイト! そのまま持ち込んでくれ!」

「……了解」

俺はそのまま攻め上がる。向かいには壁山がザ・ウォールの体勢だが、ザ・ウォールを出す前に壁山を抜いていく。

「ガゼル! バーン!」

俺は上に大きく打ち上げる。それと同時に、バーンとガゼルはファイアブリザードの

構え。だが、

「やらせるかよ!!」

才能マンのDF綱海がボールをカット。前線にいる豪炎寺にロングパス。

豪炎寺はドリブルで持ち込む。

「ここから先は行かせん!」

目の前には、プロミネンスの巨漢ボンバが立ちほだかる。

「イグナイトスタイル!!」

ボンバの炎を纏ったスライディングは豪炎寺に躲される。だが、ボンバに続いてゴツカがデیفエンスに回る。

「フローズンスタイル!!」

ゴツカのフローズンスタイルが豪炎寺を吹き飛ばす。えげつないコンビネーション技だな……。

再びボールは豪炎寺に渡り、攻め上がっていくが。

「イグナイトスタイル!!」

豪炎寺がボンバのイグナイトスタイルを躲すが、

「フローズンスタイル!!」

次のゴツカのフローズンスタイルがまたもや豪炎寺を吹き飛ばす。これが、カオス

最強のダブルデイフェンスと言えるだろう。これを破れる者は、ガイアとてそういないだろう。

今度は、アフロデイにボールが渡る。アフロデイが攻め上がっていくが、

「イグナイトステイル!!」

「フローズンステイル!!」

やはり、ゴツカのフローズンステイルで吹き飛ばされてしまう。だが、アフロデイは諦めずに挑戦していく。再びアフロデイは攻め上がっていく。

「イグナイトステイル!!」

「フローズンステイル!!」

アフロデイは再び吹き飛ばされる。だが、彼は依然ダブルデイフェンスに挑戦し続ける。しかし、挑戦し続けると同時に、彼は何度もダブルデイフェンスにより吹き飛ばされてしまう。

気付けば、身体は傷だらけ。もう限界に近いだろう。

俺は、アフロデイの前に回り込んでデイフェンスに入る。

「お前、もう限界だろ。その辺にしとかなないと、マジで病院行きだぞ」

「…僕には果たさなくちゃいけない役目がある。覚悟の上だよ」

そう言って、アフロデイは俺を抜き去っていく。

「これでとどめだア!!」

アフロディに迫っていくボンバとゴツカ。三人がぶつかり合う瞬間、上から何か凄い勢いでグラウンドに落ちてきた。

衝撃により、アフロディ、ボンバ、ゴツカは吹き飛ばされてしまう。

衝撃が止まると、グラウンドには宙に浮いた黒いサッカーボール。しかも、この黒いサッカーボールは…。

「みんな楽しそうだね」

上からそんな声が聞こえた。その方角に視線を向けると、グランとウルビダが俺達を見下ろしながら立っていた。

「ヒロトー!」

「やあ、円堂くん」

二人はグラウンドに降り立つ。

「……何しに来たんだ」

「安心しろ。今日は貴様達などに用はない」

円堂の問いに、ウルビダが答えると、グランは険しそうな表情でバーンとガゼルを見る。

「…何を勝手なことをしている」

「ツ…俺は認めない！お前達がジエネシスに選ばれたことなど！」

「我々は証明してみせる！雷門を倒し、誰がジエネシスに相応しいのかを！」

「……そのために私に無断でエイトを連れ去ったのか。この下らん試合に」

「ジエネシスは、我々ガイアが選ばれている。往生際が悪いな」

グランの黒いサッカーボールは、グラウンドを眩く照らす。その光は俺達を飲み込み、光が止むと俺達はグラウンドから去っていた。

## 決戦準備

カオスの試合は中断となり、俺はウルピダの部屋に連れて行かれた。カオスの面々は、いつの間にか消えていたようだ。

「……さて、ガゼルとバーンが私に断りもなくエイトを連れて行ったとはいえ、お前は私から離れたな？その理由を話せ」

理由を話さなければ殺す。そう言わんばかりの表情であった。

「……ガゼルが俺の妹のこと知ってたんだと。カオスに参加して雷門に勝った代わりに小町を助けてくれるって言ってたから、俺はそれに乗った」

「……ほう。……余計な真似をしてくれた」

彼女は憎しげにそう呟く。

「……まあいい。こうして私のところに帰ってきたのだから結果的には良しとしよう。だが、くどいようだが言っておくぞ。……お前は私のモノだ。私はお前を離さないし、離れたとしても必ず私が見つげ出す。だから私から離れることは出来ない、頭に叩き込んでおくことだ」

「……分かってるよ」

「……ならいい。では、シャワーを浴びて早く戻ってこい」

俺は頷いて、シャワールームに向かう。シャワーを浴び、俺はすぐにウルビダの部屋に戻っていった。

「……帰ってきたか。さあ、私の隣に來い」

俺はウルビダの隣に腰掛ける。その瞬間、俺はまたウルビダに首筋を噛まれてしまう。

「……私のマーキングは一生消させぬ。私が付け直す。例えば、他の女の匂いがお前の身体から少しでも付着していれば、私が上書きする。まあ最も、他の女のところになど行かせはしないがな」

「……本当、俺のこと好きすぎだろお前」

「……何を今更なことを。未来永劫、私はお前のことを愛している。将来、私とお前は結婚するのだ。私とお前しかいない、そんな生活を送ろう。子どもなど必要ない。私とお前の方に誰かがいるなど邪魔でしかない。結婚すれば、グランもお父様も呼びはしない。勿論、お前の妹にも来ないように予め言っておく。私とお前はずっと一緒だ」

やばい。これ地雷踏んだわ。

ウルビダは尚も話を進める。

「ずっと一緒だ。私が寝るときはお前も一緒に寝ろ。私がお風呂に入るときはお前も一

緒に入れ。私が用を済ませるときはお前も一緒に用を済ませろ。性行為の際に私が果てるときはお前も果てる。私が死ぬときはお前も死ぬ。私とお前はずっと一緒じゃなければならぬ。少しでも違っていたならば、私はお前を調教する」

「お、おう……」

ウルビダの依存は日に日に重くなっていく。既に後戻り出来ないほどまでに。

「……まあ、それはさておいてだ。そろそろお父様の計画も大詰めだと聞いた」

「そうなのか？」

「ああ。私達はハイソルジャーとして、お父様の敵である世界に対して攻撃を仕掛ける」

「……お前はいいのか」

「何がだ？」

「いくら親父の言うことが絶対だからって、何も中学生であるお前らが戦争紛いなことをしても、傷つくだけだろ。争いは悲劇を生むってよく聞くぞ」

「……私はそれでも構わない。お父様に尽くすことが私の使命。それに……」

ウルビダは、俺の手を握る。俺の指と指の間を、彼女の指で埋めて、絡めるように握る。

「エイトがいれば、私は何でもできる」

「ウルビダ……」



……それでも、自分の計画のために子どもを巻き込むのは許されない。どんな理由があっても、巻き込んでいいはずがない。犯罪の片棒を子どもに担がせるとか、どんな神経してんだよ。

「……私は幸せだな。お父様の役に立つことができ、愛しいエイトとずっと一緒にいることができる。バチでも当たりそうだな」

「……さよか」

今のウルビダは、本当に幸せな表情をしている。それと同時に、彼女は再び俺の首筋を噛み始める。

「……お父様の計画が始まれば、こんなことをする暇がなくなる。だから、今のうちにお前を堪能しておこう。……エイトっ……」

ウルビダはそう言っただけで俺を押し倒して、上からマウントを取る。そのまま、俺の首筋だけではなく、上半身全てをくまなく噛み始めた。

その行為はずっと続き、いつの間にか夜ご飯をも食はずになつていた。ウルビダはその行為に必死になり、俺はウルビダが機嫌を損ねないように接した。気付けば、俺の意識はフェードアウトした。

翌日。俺はガイア、もといジェネシスのユニフォームを着がえて準備をしていた。どうやら、雷門がこの研究所にやってくるらしい。

昨日は色々あつて疲れたため、爆睡していた。目を覚ませば、ウルビダもおらず、書き置きだけが残されていた。どうやらグランと共に吉良星二郎に呼ばれたから先に出で行つたとのこと。

俺はマツカンを開けて、一気に飲み干す。

「…行くか」

俺はウルビダの部屋を出て、グラウンドに向かつていく。

今でも、マツプを見なければ迷う時もある。複雑すぎるんだよなあ。俺が探り探りでグラウンドに向かつていくと、前には警備ロボットを潰したであろう雷門イレブンがいた。

「比企谷……」

俺の気配にいち早く気がついたのは、鬼道だった。

「比企谷じゃないか!」

「よう」

俺は軽く挨拶をして、そのまま去ろうとするが。

「ま、待てよー！」

そうは問屋が卸さない。

俺に待ったを掛けたのは、勿論円堂だった。

「お前、その格好は……」

「……そういや助っ人扱いのことはお前から知らなかったな。本当の所属チームはジエネシスだ。つまりお前らの対戦相手」

「……俺達が勝ったら、教えてくれるんだよな。お前がなんでエイリアに手を貸していたのか」

「……そういやそんなこと言ってたな。まあ話すんじゃねえの知らんけど」

すると、俺のポケットに入れていた通信機が鳴り響く。実は拐われたときから、ケータイをウルビダに没収されて、この通信機を使わされているのだ。

「……はい？」

「剣崎だ。聞こえているな？」

相手は吉良星二郎の側近の剣崎だった。

「雷門イレブンを、今すぐホロビジョンルームに連れてきなさい」

「……分かりました」

俺はそう返して、通信機を切断する。ポケットに通信機を入れ、俺は今のことを伝え始めた。

「今からお前らをホロビジョンルームに連れて行くわ。なんでか知らんけど」

「…ホロビジョンルーム？」

「とりあえず案内するから。多分、罠とかではないと思う」

俺はそう言つて、雷門を先導していく。俺は手元にあるマップを見ながら、ホロビジョンルームに向かった。

「なんでマップ見ながら案内してるんスカねえ？」

「単に道音痴なだけじゃねーの？うっしっし」

「おいコラ聞こえてんだよ。ここの複雑さ舐めんな。もはやダンジョンなんだよ」

俺が壁山と木暮にそう返すと、クスツと笑つた者がいた。それは、音無春奈であった。  
「…なんだよ」

「比企谷先輩、エイリアに行つても雷門にいた時と変わってませんから。ちよつと安心しちゃつて」

「確かに。エイリアに行つて、もう雷門のことはどうでもいいのになつて思つてたけど」

音無が続いて木野が相槌を打つ。

「いや、別に雷門に思い入れはないんだが……」

「まあまあ、そう照れんなよ!」

円堂はそう言つて俺に肩を持つ。え、何ちよつと触れないで近いし熱いし何より葉山と同じ雰囲気しててちよつと無理。

唯一葉山と違うところは、優柔不断ではないところだけ。

しばらく歩いてみると、ようやくホロビジョンルームに到着。目の前にある大きな扉が自動で開く。

中に入ると、扉は閉まり、俺達の上には吉良星二郎が浮かんで映っていた。

「…日本国首脳陣の皆様、お待ちせいたしました。ただいまから我が国が強力な国として君臨するための、プレゼンテーションを始めさせていただきます」

吉良星二郎は、淡々と話を始めていく。俺は壁の後ろにもたれ、雷門の様子とそのプロモーションを拝見していた。

まず最初に映されるのは、ボロボロになっている学校とジェミニストームの連中だった。

「皆様は、エイリア学園のことをもうご存知でしょう。その力は強大です。…さて、今日は謎に包まれたエイリア学園の衝撃の真実をお話いたします」

「…衝撃の真実?」

雷門は、ついに知ることになる。エイリア学園がただの宇宙人ではないということ

を。

「…自らを星の使徒と名乗る彼らですが、その正体は実は宇宙人ではないのです」  
「えええええっ!？」

雷門イレブンは衝撃を受けた。今まで宇宙人だっと思って思い込んでいたのが、違ったからだろう。続いて映されるのは隕石が地球に落下して映像だった。

「全ては5年前……地球に落下した隕石から始まったのです。富士山麓に落下した隕石……その隕石には、人間の潜在能力を最大限に引き出す物質が見つかりました」

それこそが、あのドーピングとも言えるエイリア石である。

「私はこの素晴らしい物質を有効に使うために、研究を重ねました。そしてついにエイリア石の力を使って、人間の身体能力を飛躍的に高めることに成功したのです。私は総理大臣、財前宗介にエイリア石を使って、強い戦士を作る計画を提案しました。それがハイソルジャーです。ハイソルジャーが人類の新たな歴史を創造するのです」

「ハイソルジャー?」

「……人間を戦うマシンに変える、恐ろしい計画よ」

ハイソルジャーのことを復唱した一ノ瀬の疑問に、吉良監督が簡潔に答える。

「…しかし、事もあるうか財前総理は、この夢の様な計画を撥ねつけました。財前総理、貴方は正義のリーダーを気取っていますが、何も分かっていない。そこで、私は財前総

理にハイソルジャーの素晴らしさを教えて差し上げることになりました。大のサッカー好きだという総理に、一番分かりやすい方法でね……」

そう。今まで、何故サッカーで彼らはこの日本を攻め込んできたのか。それは全て、財前総理にハイソルジャー計画を押し通すための準備だったということなのだ。

「即ちそれが、エイリア石によつて身体能力を高められた子ども達……エイリア学園なのです」

「……………つまり、今までお前らが戦ってきた相手は、エイリア石で人工的に強くなった人間だつてことだ」

ジエミニやイプシロン、ダイヤモンドダストやプロミネンスはエイリア石を使って強くなっている。

「……………なんてことを……!」

「私本日ここに、エイリア学園最後のチーム、最強のハイソルジャーをご紹介いたしましよう。その名は、ザ・ジエネシス」

「ジエネシスがハイソルジャー……ということとは、比企谷くんもハイソルジャー……?」

雷門が俺に向かってそう尋ねる。まさか、とは言わんばかりの表情であった。

「……………ああ。俺は、吉良星二郎の計画の為に、ハイソルジャーになった」

「何のためにそんなことを!」

円堂が俺を問い詰める。

「…言っただろ。お前らが勝てばその理由を教える。何度も聞いてくんな」

「ひ、比企谷……」

そんなやり取りをしている傍ら、吉良星二郎のプレゼンテーションはいよいよ終盤に差し掛かってきていた。

「究極の戦士ジエネシス……その素晴らしい能力、完璧なる強さを最高の舞台でご覧にいきましょう。ジエネシスとの最終決戦の相手は、雷門イレブンです」

そう告げて、吉良星二郎のホロビジョンは消えていく。それと同時に、ホロビジョンルームに一つの眩い光が差し掛かる。そこには、側近の剣崎がいた。

俺達は剣崎の後を付いていくと、吉良星二郎だけの仮想空間の部屋に到着した。吉良星二郎は、俺達を見つめて立っていた。

「エイト、今すぐ準備に取りかかりなさい」

「…うつす」

俺は吉良星二郎の指示で、いち早く仮想空間から出ていき、グラウンドに向かった。グラウンドには、既にジエネシスのメンバーが揃っていた。

「遅いぞ、エイト」

「すまん」



もうすぐ、全ての戦いに決着する。雷門が勝って世界が守られるのか、ジェネシスが勝って世界を支配するのか。

いずれにせよ、俺は小町のために戦うだけだ。世界を敵に回しても、小町を守るのが俺の役目なのだ。

## 吹雪覚醒

ついに雷門がやってきた。雷門の表情は、どれも確固たる意志を持っているかのよう  
な、そんな表情だった。

「とうとう来たね、円堂くん」

「ああ。お前達を倒すためにな！」

「俺はこの戦いで、ジエネシスが最強の戦士であると証明してみせる」

「…最強だけを求めたサツカーが楽しいのか？」

「……それが父さんの望みだから。俺は父さんのために最強になる。ならなきやならな  
いんだ」

「……今の俺達は最後のチーム、ザ・ジエネシス。円堂、お前の考えが正しいというのな  
ら、サツカーでジエネシスを倒してみろよ」

「比企谷……」

俺達は早速準備に取りかかる。今回、俺はMFで出場。アークの代わりに出場するこ  
とになった。

ごめんねアークくん。

ジェネシスのフォーメーションは5―3―2。DFはハウザー、キープ、ゾーハン、ゲイル、コーマ。MFは俺、ウルビダ、クイール。FWはグランとウイーズのツートップ。雷門イレブンも、位置に着いた。キックオフはジェネシスから。

最終決戦のホイッスルが今、高らかに鳴り響く。

まずはショートパスで繋げつつ、前線に上がっていく。

「ウイーズ！」

ウルビダからウイーズへのパス。ウイーズはそのままダイレクトにシュートを打つ。

だが、

「メガトン……ヘッドオツ!!」

円堂のメガトンヘッドがウイーズのシュートをブロックし、そのまま鬼道へと繋げていく。

「行かせません」

コーマが鬼道に向かって詰める。

「イリユージョンボール！」

ボールがいくつも分身させ、コーマを軽やかに突破。鬼道から一之瀬へ。一之瀬は前線に上がって、浦部にパス。

「行くで必殺!! 通天閣シュートツ!!」

浦部が放った必殺技はさながら大阪にある通天閣を連想させるシュートだった。

「エイト、止めろ」

俺の後ろからネロの指示が飛んでくる。ネロは止める構えすら見せておらず、本当に止める気がないようだ。

せめて保険として構えくらいは取っという欲しいわ。それに下がってるとはいえ仮にもMFなんだけどね俺。

俺は通天閣シュートに向かって、右脚を思い切り振りかぶり、そのまま勢いよくぶつめた。

「らアッー」

俺は通天閣シュートを蹴り返すことでブロック。しかし、ボールを蹴り返した角度が不味かったのか、よりにもよって豪炎寺のところに飛んでいく。

ごめんねネロ。テヘペロ。

豪炎寺はそのままシュート体勢。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺の渾身の爆熱ストームがネロに向かって飛んでいく。しかし、ネロは顔色変えずに必殺技の構えに入る。

「プロキオンネットツ!!」

ネロが編み出した、さながら冬の大三角系のような形状のような膜を形成し、爆熱ストームを包み込む。勢いを殺し、ネロは片手で止めた。

「エイト、せめて蹴り返す方向くらい考えたら？」

ネロは俺にボールを預けつつ、愚痴をこぼした。

何それ愚痴ってるんですか私サッカー始めてまだ数ヶ月なのでそんな器用なことまだ出来ないんですごめんなさい。

「エイト、上がってこい！」

ウルビダから指示が入る。俺はネロから受けたボールをそのままキープして持ち込んでいく。

「行かせるか！」

財前と一之瀬が目の前に立ちはだかる。俺は臆せず、二人を抜き去っていく。

「は、速い！」

「エイト、こっちだ！」

ウルビダにボールを繋げる。ウルビダの前には円堂がデیفエンスに入るが、ウルビダはすれ違い様にグランにパス。

「流星…ブレードッ!!」

グランの必殺流星ブレードが立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!うおおオオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドで流星ブレードを包み込む。しかし、グランのシユートはバーンとガゼルのファイアブリザードより強力なのだ。

ファイアブリザードでさえ止められなかった立向居が、グランの流星ブレードを止められるわけもなく、ムゲン・ザ・ハンドは呆気なく弾けてゴールになる。

「これが強くなつた雷門か。容易いな」

「……あんまあいつら舐めない方がいい。試合の中で進化してくるからな。ある意味厄介だ」

俺はウルビダにそう忠告した。

あいつらは未完成。発展途上であるが故に、何を起こすのかが予想が出来ない。

失点した雷門。点を取り返すべく、反撃を試みる。

豪炎寺が攻め上がり、爆熱ストームの構えに入った。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺は爆熱ストームを放つ。しかし、打ち込んだ方向は逆方向である。だが、それはミスではなく計算していた結果であった。

爆熱ストームに向かって円堂が走っていく。

「メガトン……ヘッドオ!!」

円堂は爆熱ストームをメガトンヘッドで跳ね返す。爆熱ストームの勢いをメガトンヘッドで跳ね返すことで、更なる威力を誇るシュートが生まれたということか。

だが。

「プロキオンネットツ!!」

ネロは完璧に止める。

この程度の工夫では現状、ネロに止められるのが関の山だ。ネロからハウザーにボールを繋げる。グランは円堂と鬼道が厳しくマークしている。

ならば。

「ウルビダ、上がるぞー!」

「ああ!」

ハウザーからウルビダに渡る。ウルビダに並ぶ様に、俺も前線に上がっていく。

「行かせるか!!せんぷう……」

「遅い!」

木暮が旋風陣を発動する前に抜き去っていく。そのウルビダを止めようと、土門と財前がディフェンスに入る。

「エイト!」

「しまった!」

俺はウルビダからボールを受け取り、必殺技の構えに入る。

「アストロゲートツ!!うおオツ!!」

俺はアストロゲートを発動。しかし、目の前には壁山が聳え立つ。

「ザ・ウォール!!」

壁山はザ・ウォールを繰り出す。だがアストロゲートはザ・ウォールを崩して立向居に飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!うおオオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出す。だが、アストロゲートはムゲン・ザ・ハンドを弾き、そのままゴールに……。

と、思ったのだが。

「入れさせねえ!!」

立向居が止められなかったシュートを、綱海が背後まで回り込んで足を伸ばす。綱海の手が俺のシュートを弾き、ゴールの外側に飛んでいく。

ザ・ウォールとムゲン・ザ・ハンドで威力がだいぶ落ちてしまったか。戦う度に思うのだが、綱海の身体能力は軽く引くレベル。あいつ運動神経良すぎだろ。

しかし、ジェネシスの勢いは止まらない。雷門は攻めるどころか、守ることで精一杯の様子。ここで後、2、3点は入れておきたい。



ボールはウィーズに渡る。

「グラン！」

ウィーズからグランへのセンタリング。グランはオーバーヘッドで立向居に打ち込む。しかし、立向居はボールを弾いてしまい、再び外に出る。

「…スーパーノヴァを出すまでもないな」

「だといいいけどな」

スーパーノヴァを打てば軽く10点くらい取れるだろう。だが、それを出さないのは、ジェネシスが力半分程度でも雷門を倒せる力を見せたいということだろう。

「選手交代！浦部リカに代わって、吹雪士郎！」

「吹雪か……」

ここで浦部から吹雪に交代。確かに、攻撃も防御も長けた吹雪を入れることで試合の流れを変えようと思えば変えられるだろうが……。

だが、俺が気になるのは吹雪のメンタル面だ。完璧という言葉に捉われすぎた結果が、陽花戸での惨事を起こしたのだ。

コーナーキックはウルビダから。試合が再会し、ウルビダはウィーズにセンタリング。だが、それを読んでいたのか、ボールの先には豪炎寺がいた。

「ファイア……トルネードッ!!」

豪炎寺は雷門ゴールからジェネシスのゴールに向かってファイアトルネードを打ち込んだ。超ロングシュートに対して、ネロはプロキオンネットさえも構えず、片手を出す。

だが、それはシュートではなくパス。ファイアトルネードの先には、吹雪が走っていた。そして、吹雪士郎から吹雪アツヤに人格が変わり、豪炎寺からのシュートパスを受け取る。

「エターナルブリザード!!うおおおオオオツ!!」

ファイアトルネードを加えたエターナルブリザードがネロに飛んでいく。

だが。

「プロキオンネット!!」

ネロは簡単に止めた。どんな工夫をしても、ネロの前には全てが無になる。ネロから徐々にグランに繋がる。吹雪は前線からグランを追いかけて、ディフェンスを仕掛ける。

「アイスグランド!!」

だが、吹雪のアイスグランドはグランに破られる。そのままグランは円堂、壁山、土門と次々に抜き去っていく。対する立向居は、グランのシュートを止められないことを悟ったのか、意気消沈としている。





「メガトン……ヘッドツ!!」

円堂のメガトンヘッドは徐々に流星ブレードの勢いを殺していく。

「いつけえ!!吹雪ツ!!」

「吹雪ツ!!」

雷門のみんなが吹雪に向かって叫ぶ。メガトンヘッドで弾いたボールは吹雪に渡る。

「聞こえる……ボールからみんなの声が……みんなの声が込められたボール……」

突っ立っている吹雪を狙ってクイールとコーマがスライディングタックル。しかし、吹雪はそのスライディングをジャンプで躲し、いつも身につけていたマフラーを思い切り取り外す。

すると、吹雪の雰囲気、髪型が変わる。

「吹雪……?」

吹雪は振り返ると、そのまま駆け上がっていく。ハウザーとゾーハンが立ちほだかるが、豪炎寺との高速ワンツーで抜き去る。

吹雪のスピードが大幅に上がった。今までの比にならないスピード。

「これが、完璧になることの答えだツ!!」

吹雪はボールと共にジャンプし、鋭い蹴りでボールに凄まじい回転をかける。

「ウルフレジエンドオツ!!うおおおオオ!!」

新たな必殺技をネロに打ち込んだ。

「プロキオンネットツ!!」

だが、ネロの様子がおかしい。いつもならば楽々と片手で取れているものが、今では震えている。

「行けえええエエツ!!」

吹雪の叫び声とともに、ネロのプロキオンネットが破れる。ネロを倒し、同点ゴールを決めた。

アツヤとしてではなく、自分を持った吹雪士郎が点を入れた。

「凄えぜ吹雪!!」

吹雪はようやく目覚めた。あいつは、アツヤと一緒にすることで完璧だと思い込んでいた。だが、あいつの完璧はそうじゃない。仲間と共に、ゴールを目指すこと。みんなと心を一つにしてこそ、完璧だと言えるのだろう。

「……良かったな、吹雪」

「……比企谷くん……ありがとう」

俺はすれ違い様に小さくそう呟いた。それに対して、吹雪はありがとうと感謝を告げた。

お前はもう、独りじゃない。

## 止まらない進化

吹雪が覚醒したことにより同点になった。

これ以上の失点は許されない。グランにボールが渡り、速攻で攻め上がっていく。しかし、グランの前には三人のデイフェンスが。

「エイトー！」

俺はグランからパスを受け取る。

「アストロゲート!!うおおオツ!!」

アストロゲートを立向居に打ち込む。しかし、今の立向居の表情はなんだか自信に満ち溢れている。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!うおおおオツ!!」

立向居のムゲン・ザ・ハンドが進化した。先程より手が増えることで、ボールの威力を殺す力が増した。

立向居にガツチリとキャッチされてしまった。

「マジか……」

吹雪だけでなく立向居まで進化しやがった。雷門の底力はやはり恐ろしい。

そして立向居からのパスで試合が再開して、雷門とジェネシスの攻防が繰り広げられた。

刹那、研究所が大きく揺れる。地震か？

そんな直後、吉良星二郎のアナウンスが入る。

「ご苦労様、鬼瓦刑事。しかし貴方達の苦労も残念ながら無駄だったのです」

どうやら今の地響きは、鬼瓦とかいう刑事の仕業の様だ。

「貴方達の考える通り、エイリア石から送られるエネルギーは人間を強化する効果があり、エネルギーの供給が切れると元の人間に戻ってしまう。では、そんなエイリア石を使って強くなったジェニストームやイプシロンなどを相手に、人間自身の能力を鍛えたら……？」

「ま、まさか……」

「鬼道が考えている通りだ。ジェネシスは、訓練で強くなった普通の人間。エイリア石無しで強くなったプレーヤーだ」

俺の言葉に、雷門イレブンは戦慄する。さっきまで戦っていた人間離れたスピードやパワーが、鍛えた結果の能力だったからだ。

最も俺は例外で、ジェネシスやダイヤモンドダストなどを相手に練習していた。ジェニストームやイプシロンより遥かに強いマスターランクの相手と練習することで、マ



スターランクレベルの身体能力を手に入れた。

「ジェネシスこそ新たな人の形……ジェネシス計画そのものなのです」

そんな吉良星二郎が語っていると、それに対して円堂は激怒する。

「お前の勝手で!!これ以上みんなのサッカーを悪いことに使うなッ!!」

「……君達に、父さんの崇高な考えを理解できるわけがない」

グランは速攻で攻め上がり、またもや流星ブレードを放った。だが、財前達のパーフェクト・タワーによって完璧に止められてしまう。

「吹雪!!」

弾いたボールは円堂がトラップし、吹雪にダイレクトパス。

「ウルフ……レジエンドオツ!!」

吹雪のウルフレジエンドがネロに飛んでいく。しかし、プロキオンネットの構えを見せずに違う構えに。

「時空の……壁ッ!」

ネロのもう一つの最強技、時空の壁でウルフレジエンドを弾き飛ばし、センターサークルにいるグランに渡る。そしてグランの周りに、俺とウルビダが。

「うおおおおオオオツ!!」

俺達は雄叫びを上げながら、ボールを囲み上空へと飛ぶ。そして、俺達の気を送り込

んだことで、ボールには禍々しいオーラを纏う。

「スーパーノヴァ!!」

三人一緒に波動の様なものを発生させ、禍々しいオーラにぶつける。そのシユートは立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

進化したムゲン・ザ・ハンドはスーパーノヴァに挑む。だが、容易く崩して、再び得点に。

「我ら、ジエネシスコそが最強だということだ」

だが、油断は出来ない。やつらは進化するチーム。それこそ、スーパーノヴァを止める可能性も否定はできない。後々になって面倒にならないように、今のうちに点を取っておかねばならない。

「ジエネシスコそ新たなヒトの形……世界を支配する真の力を持つ者達なのです」

「…俺達のサッカーを……悪いことのために使って汚すなツ!!」

「……どういう意味です?」

「力は、みんなが努力して身につけるものなんだ!!」

円堂は、吉良星二郎の考えが間違っていると豪語する。だが、吉良星二郎は穏やかに円堂の言葉を否定する。

「忘れたのですか？ 貴方達もエイリア石によつてパワーアップしたジェミニやイプシロンと戦うことで強くなったというところ。エイリア石を利用したという意味では、雷門もジェネシスも変わりないのです」

吉良星二郎の言葉に円堂は反論出来ずにいた。確かに吉良星二郎の言う通り、雷門もジェネシスも間接的にエイリア石によつて強くなった。

「雷門もすっかりメンバーが変わつて強くなりましたね……しかし、道具を入れ替えたからこそ、ここまで強くなれたのです。我がエイリア学園と同じく、弱い者を切り捨て、強い者を引き入れたからこそ強くなれたのです」

「ふざけるなツ!! 弱いからじゃない!!」

「いいえ、弱いのです。弱いから怪我をする、チームを去るのです。実力が無いから脱落していったのです。彼らは貴方達にとつて、無用の存在なのです」

「違う、違う、違うツ!! あいつらは弱くない!! 絶対に違う!! 俺が証明してやるツ!!」

吉良星二郎は鼻で笑い、アナウンスが終えた。それが試合再開の合図になる。ボールを持つている円堂は雄叫びを上げながら攻め上がっていく。だが、グランにあつさり奪われてしまう。

奪われた円堂は、負けずにグランに突っ込んで、突っ込んで、突っ込んでいく。何度も突っ込んでいくが、全てグランにあつさり躲される。

今のあいつのプレーは、怒りをただぶつけているだけ。仲間が弱くないということを否定することしか頭になく、それを源として動いている。

……惨めなだけだ。

「円堂くん、GKに戻りなよ。そうしないと倒しがいがない」

オーバーキルにも程があるだろ今のは。グランの言葉に挑発された円堂はまたもや突っ込むが、それは無意味だった。

グランが躲し、そのまま俺達はスーパードヴァの体勢に入る。

「スーパードヴァッ!!」

スーパードヴァを打ち込む。雷門はこれ以上の失点を許さないために身体を張ってスーパードヴァを止めに行くが、簡単に吹き飛ばされていく。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

だが、再びムゲン・ザ・ハンドは破れる。ゴールの中に入るといところで、ゴールまで戻ってきていた豪炎寺と吹雪が同時に蹴ってゴールの外へと弾いた。

「全員でカバーしなければならぬGK……それが君達の弱点であり、敗因となる」

ジェネシスの猛攻が続く。FWの豪炎寺や吹雪までもがディフェンスに入ってカバーしなければならぬ様な劣勢状態。一方、円堂はただ怒りに身を任せて動いている。それをグランが躲す。

そんな攻防が続くと、前半終了のホイッスルが鳴る。

「……前半終了か」

俺はベンチに戻り、持参していたマツカン飲み始める。

俺は、肩で息をして地べたに座り込んだ。そんな様子を、ウルビダは見下ろしていた。

「おい、まさかもう息切れなどと吐かすなよ」

「あのおな、こちとらお前らの動きに付いていくのに割と無理してんだよ。マツカンでも飲まなきゃやってらんねえわ」

いくら身体能力が向上したとはいえ、彼らは俺より前に訓練している。どう考えてもウルビダ達の方が上に決まってる。

これ以上速くなられたら、流石に付いていけないわ。

「小町……」

この試合が終われば、少なくとも小町に近づくことができる。世界が終わろうが関係ない。この試合、絶対に勝つ。

後半が始まるホイッスルが鳴り響く。ボールは円堂に渡り、攻め上がっていく。前半とは、何か違う様子だった。

「君に俺は抜けないよ」

円堂の前にグランが回り込む。だが、円堂はフェイントでグランを抜き去り、鬼道に

ボールを回す。

円堂だけではない。雷門の動きがまた一段と良くなった。

「やっぱ厄介だわ……!」

ハーフタイムで円堂が吹っ切れたせいか、念入れにギアを上げたのか、やっぱり油断ならない相手だ。

「行かせるか!」

円堂がボールを持っている。俺は円堂の前に立ちほだかり、円堂の動きを観察する。円堂はチラツと左を見る。そこには、後ろから走ってきていた土門がいた。

俺は土門にパスをすと思う、円堂と土門の間に入ろうとした。だが、それはフェイントだった。

円堂は土門にパスをせず、土門の左にいた鬼道にパスを出した。

「何ッ!」

鬼道にボールが渡り、三人は回転しながら跳躍する。

「デスゾーン……2!!」

前よりもパワーアップしたデスゾーン2がネロに襲いかかる。

「時空の……壁ッ!!」

ネロは弾き返す……と、思いきや、ネロはデスゾーン2に弾き飛ばされてしまった。

「またもや同点に追い付かれてしまった。」

「……ジエネシスが2点も入れられるとは……」

「……油断出来ねえって言っただろ」

俺達はすぐに点を取り返すべく、試合再開早々に雷門陣内に攻め込んだ。

「スーパーノヴァアツ!!」

今の立向居ではスーパーノヴァを止められない。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

予想通り、立向居のムゲン・ザ・ハンドは破れる。だが、ゴールに入るところで、円堂が現れた。

「たああアアツ!!メガトン……ヘッド!!」

円堂は身を挺してのメガトンヘッドでスーパーノヴァを弾き返した。

いくら底力があるって言っても、強くなりすぎだろ……。ジエネシス最強の技だぞ  
…。

俺達はもう一度、スーパーノヴァを放つ。

「立て、立向居!!雷門のGKはお前だ!雷門のゴールを守れるのは、お前なんだ立向居  
!!」

「行けッ、立向居!!」

「立向居!!!」

雷門イレブンの応援により、吹き飛ばされた立向居はゆっくりと立ち上がる。そして、スーパーノヴァに対抗するために、ムゲン・ザ・ハンドの構えに入る。

「ムゲン・ザ・ハンドッ!!うおおおオオッ!!」

なんと、またムゲン・ザ・ハンドを進化させて、スーパーノヴァをしつかりと止めた。「ま、マジかよ……」

スーパーノヴァでさえ、立向居に効かないつてのかよ……。グランは、その場で跪いてしまう。

すると、またもや吉良星二郎からのアナウンスが入る。

「グラン、リミッター解除です」

「り、リミッター解除!?!」

リミッター解除?なんだそれ。

吉良星二郎の指示に、グランは慌てて意見する。

「父さん!そんなことをすればみんなが……!」

「…怖気付いたのですかグラン。貴方には失望しました。ウルビダ、代わりに指揮を取りなさい」

「…分かりました、お父様」



グランの様子から察するに、何かヤバいことが起きそうなのは間違いない。

「おい、ウルビダ。リミッター解除ってなんだよ」

「エイトは黙ってみている。ここからは、本気のジエネシスを見せてやる。……ジエネシスのメンバーに告ぐ！リミッター解除だ！」

そう言つて、ウルビダはユニフォームの胸に装着されているボタンを押し始めた。ウルビダだけでなく、フィールドにいるジエネシスのメンバー全員がボタンを押し始める。

「……何が起きるんだ……？」

立向居から円堂に渡り、円堂はジエネシス陣内に攻め上がっていく。だが、誰も動く気配を見せなかった。構わず円堂はウルビダを抜き去る。

刹那、円堂の足元からボールは消え、代わりにウルビダの足元にボールがあつた。

「う、動きが、見えない……？」

俺はウルビダの動きに、驚愕した。あれが、リミッター解除……？

## 決着

リミッター解除で、ジエネシスの動きが異常に速くなり、次々と雷門を抜き去っていく。完全に人間の力を超えている。

「人間は、身体を守るために限界の力を超えない様に無意識に力をセーブしている……では、その力を出し切れるとしたら？」

ちよつと待て。そんなことすりやあいつら全員身体がポロポロになって立っていられなくなる。

「お、おい！あんた、いくらなんでもやりすぎだろ！」

「残念ですが、リミッター解除をさせたのは雷門イレブンです。意見するなら、雷門イレブンにして下さい」

俺の言葉はあつさり取り下げられた。自分の子どもですら道具扱いかよ…。

俺はウルビダ達を止めるために、上がっていく。

「ま、待てウルビダ！グラン！それ以上動いたら…！」

「黙って見ていろエイト!!これが、我らジエネシスの真の力だ!!」

ウルビダは身体に力を込めてオーラを放つと、周りからペンギンが現れる。ペンギン

と共に、グランとウィーズが飛んで、ツインシュート。

「スペースペンギン!!」

ペンギンと共にとてつもない威力のシュートが立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

しかし、ムゲン・ザ・ハンドは三度破れてしまう。スーパーノヴァよりも強力な必殺技、スペースペンギンが炸裂。ジエネシス、勝ち越しになるが…。

「ぐ、ううツ…!!」

「か、身体がツ……!!」

ジエネシスのメンバーは、自分の身体を抑えていた。限界以上の力を意識的に発動なんてすれば、筋肉痛どころの騒ぎじゃない。

「もうやめとけ!それ以上したら、確実に身体をぶっ壊すぞ!」

「黙れエイト……!私に意見するな……お前は…私の言う通りに従ってればいい……ぐツ!」

「う、ウルビダツ!」

「お父さんのためなら……この程度の痛み…!!」

「ぐ、グラン……」

そう言って、ジエネシスのメンバーは自分の位置に戻っていく。その後ろ姿は、悲痛

に見えた。

そんな中、試合が再開される。円堂がボールをキープし、攻め上がっていく。

「遅いッ！」

ウルビダが円堂に向かって突っ込んでいく。だが、円堂は鬼道とのワンツースでウルビダを抜き去る。

リミッター解除したウルビダを躲しやがった……。

これも、雷門の力なのか…？

「豪炎寺！」

円堂から豪炎寺へのセンターリング。

こいつらが進化している以上、豪炎寺のシュートも下手すりや点を取られてしまう。

「打たせるかよッ！」

そう危険だと思った俺は、そのセンターリングをカットする。そのまま攻撃に転じようとするが、

「ふッ！」

「しまったッ！」

吹雪のスピードによりボールを奪取される。そのまま豪炎寺と吹雪は二人で攻め上がっていく。

「豪炎寺くん！」

「ああ！」

「うおおおおオオオツ!!」

豪炎寺は炎の、吹雪は氷の波動を纏い、お互いが交わした瞬間にツインシュートをネロに打ち込んだ。まるで、ファイアブリザードの様なシュートが飛んでいく。

「時空の…壁ッ!!」

だが、時空の壁は簡単に破れてしまい、三度雷門と同点になってしまう。リミッター解除をして尚、得点を許してしまう。こいつらの底が見えないわ。

しかし、試合が再開してグランとウルビダが速攻で上がっていく。

「最強なのはジェネシスの…!!」

「父さんのサッカーだ!!」

雷門を抜き去り、ウィーズと合流してスペースペンギンの体勢に入る。

「スペース…ペンギンッ!!」

スペースペンギンが立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドッ!!」

立向居は、気力でスペースペンギンを止めようとするが、少しずつ押されていく。

だが、

「もう一点も……ゴールをやるわけには、いかないんだッ!!」

そう言って、立向居はムゲン・ザ・ハンドをまたも進化させて、スペースペンギンをしっかりと止めた。

「ジェネシス最強のシュートが……!!」

止めた立向居は綱海にパス。綱海は木暮に。一人一人、ボールを回していくと、ほのかにボールが輝き始める。

「なんだ……あの光……」

ボールは円堂に。円堂の後ろには、豪炎寺と吹雪が共に上がってきている。

ほのかに輝いているボールを中心に、円堂、豪炎寺、吹雪が合掌して立つ。残りの八人は、三人に気を送る。雷門の想いが込められたボールと共に三人は飛び、凄まじい勢いでボールにキックを入れる。

「ジ・アアアアアース!!!」

三人に蹴られたエネルギーが1本の矢の様に分かれ、再び一つになって矢の様に飛んでいく。

ジェネシス全員は身を挺して止めるが、呆気なく吹き飛ばされてしまう。

「グラン、エイト!!」

俺とグランとウルビダで、ゴールに入れまいとジ・アースを死に物狂いで止めようと

する。

「お父様のために……!!」

「負けるわけにはいかない!!」

彼らは吉良星二郎のために。俺は小町のために。負けられない理由を課せて、今日まで戦ってきていたのだ。

それでも。

「うああああアアツ!!」

あいつらの、雷門の信じる力、サッカーへの思いが俺達、ジエネシスを勝る。ジ・アースが決まり、雷門の逆転となる。

そして、ホイッスル。試合終了。

勝ったのは雷門イレブン。ジエネシスを倒して、地上最強のメンバーが誕生した。

これが、心の力、か……。

「…勝ちたかった……！お父様のために……私はッ……！」

「ウルビダ……」

掛ける言葉が見つからない。5年にも渡って、吉良星二郎に尽くしてきたものにも関わらず、それが全て無意味となった。

「円堂くん。……仲間って、凄いなだね」

「……そうさーそれを、ヒロトにも教えたかったんだ！」

グランと円堂は握手を躲す。仲間が生み出す力は、10倍にも100倍にもなるつか……。

本当、超次元サッカーばないわ。

「ヒロト……」

すると、いつの間にかグラウンドに降りてきていた吉良星二郎が申し訳なさそうな表情をしてグランに話しかける。

「ヒロト、お前達を苦しめて済まなかった……」

「父さん……」

「……私は、あのエイリア石に取り憑かれていた……。雷門イレブンのお陰で目が覚めた……。そう、ジェネシス計画そのものが間違っていた……」

すると、ウルビダは立ち上がり、怒りの表情で吉良星二郎を睨み付ける。

「ふざけるなッ……これほど愛し、尽くしてきた私達を、よりもよって貴方が否定するなアツ!!」

ウルビダは吉良星二郎の向かって思い切り打ち込んだ。

「バカ！」

だが、吉良星二郎は動かなかった。



ボールは吉良星二郎に……と、思いきや、その人物を庇った者が  
「ぐ、グラン……お前……」

グランはウルビダのシユートをもとに受けて、倒れてしまった。

## さらばエイリア学園

ウルビダの怒りのシュートによって倒れたグランに、円堂と吉良監督が駆け寄る。

「…何故だグラン！何故止めた！そいつは私達の存在を否定したんだぞ！私達はそいつの為に、辛いことも苦しいこともしてきた！強くなるその一心で……………それを今更間違っていた!?そんなことが許されるのか、グラン!!」

「…………多分違う。ウルビダ」

グランへの問いを、代わりに俺が答えた。

「何が違うというのだ!!」

「…確かに、今までやってきたことを全て否定されるのは間違っている。そんなのはただの傲慢でしかない。…………でも、それでもグランにとってはきつと、吉良星二郎は大事な親父さんなんだろう。だから許した。だから庇った。無茶ぶりなこと聞いてきた。……だろ、グラン」

「…………その通りだよ」

グランは俺に続けて、語り始めた。

自分は本当の息子ではないこと。ヒロトという名前ではないこと。身寄りのないお

日様園でのこと。

「……例え存在を否定されようと、俺達を必要としなくなったとしても……俺にとって、父さんは俺にはたった一人の、大事な父さんなんだ！」

「ヒロト……お前、そこまで私のことを……。……私は間違っていた……。こんなにも想ってくれていたお前達を蔑ろにして……。お前達の父親の資格などない……」

すると、吉良星二郎は自分に向かって打たれたボールをウルビダに返す。そして、グランの前で手を広げて立つ。

「さあ打て。私に向かって打てウルビダ。……。こんなことで、許してもらえとは思っていない。だが少しでもお前の気が治るのなら……」

「父さん……」

ウルビダは吉良星二郎をもう一度睨み付けて、足を振りかぶる。だが、ボールは吉良星二郎に飛ばず、その場で転がるだけだった。

「…打てない……。打てるわけない……。!!だつて貴方は……。私にとって、大事な父さんなんだ……!!」

ウルビダは膝をついて、涙を流す。ウルビダに続けて、ジェネシスのメンバーは次々と涙を流していく。そんな様子を見た吉良星二郎は、膝をついて、酷く悔やんだ。

「……話してもらえませんか、吉良さん」

すると、吉良星二郎に話しかける人物が。ローグコートを羽織り、歳は割と老けてい  
る人物が。だが、俺はその人物の隣に目を向けた。

「こ、小町……？小町、なのか？」

謎の人物の隣には、俺の妹、小町がいた。

「お兄ちゃん……お兄ちゃん!!」

「小町ッ！」

俺は思わず小町に駆け寄って、抱きしめていた。

「……良かった……無事で良かった……」

小町を久々に見たのか、助かって安堵したのか分からない。だが、俺の目からは、涙  
が止めどなく溢れていた。

「…君が、比企谷八幡だね？」

謎の人物は、俺の名前を確認する。

「はい……………えっと、貴方は…」

「ああ、俺は鬼瓦。刑事をやってる。数日前に総武中の平塚教員から、君の妹が行方不明だと聞いてね。エイリア学園が現れた時期だったから、まさかとは思ったが……………。この施設に拉致されると思い、エイリア石爆破と同時並行で救出したんだ」

「……………あ、ありがとうございます…!!」

俺は鬼瓦刑事に深く頭を下げた。

本当に良かった。小町が無事で…。

「……………話が逸れましたが、話してもらえませんか、吉良さん。何故ジエネシス計画というものを企てたのか……………。巻き込んでしまったあの子達のためにも……………」

鬼瓦刑事が、吉良星二郎、もと吉良さんに尋ねる。吉良さんは、ゆっくりと話し始めた。

「……………確かに、私にはヒロトという息子がいた。サッカーが大好きで、夢はプロのサッカー選手になると言っていた程だった。ある日、ヒロトはサッカーの勉強のために海外留学したのだが、そこで謎の死を遂げた……………。私は真相を追及するために、警察に掛け合った。だが、事件に政府要人の一人息子が関わっていたとかで、事故死として認定さ

れてしまった。……悔やんでも悔やみきれなかった……。息子に何もしてやれなかった悔しさ……。それ以上の喪失感……。大切な一人息子を失った私の心に大きな穴が空いた時、瞳子が身寄りのない子ども達が集まるお日様園を勧めてくれたのだ……。最初は娘のためだと思い、お日様園を創設したが……。いつの間にか、子ども達と関わることで、私の傷は癒えていった……。……本当に、お前達には感謝している。お前達だけが、私の生きがいだったのだ……」

「父さん……」

「……そして、5年前。富士山麓に隕石が落下。それがエイリア石だった。エイリア石の分析を始めた私達は、人間の身体能力を飛躍的に上げることができる物質が含まれていることを知った。そのエイリア石の魅力に取り憑かれたと同時に、心の奥底で抑えていた復讐心が芽生えたんだ……」

そこから先が、エイリア学園の誕生、だということか……。吉良さんは話し終えた後、今度は俺に視線を向けた。

「そして、比企谷くん。君も巻き込んで済まなかった……」

「……そういえば、なんで父さんは比企谷くんをエイリア学園に連れて行ったの？」

吉良監督が、吉良さんにそう尋ねた。そういえばそうだ。サッカーの実力云々で連れて行かれるなら、お門違いにも程がある。

「……比企谷くんを連れてきたのは、ウルビダの願いだったからだ」  
「ウルビダが？」

確かにウルビダは、最初から俺にやたらと固執していた。その理由が分からずに拐われた。

「……比企谷くん。君は、ウルビダのことを覚えているかな？」

「……え……？」

吉良さんの問いに、俺は思考が遅れた。

今の言い方だと、俺は以前ウルビダに会っていた……？

「……やはり、覚えていなかったか。君はウルビダの恩人なんだ、比企谷くん」

俺は頭の中で過去の記憶を探る。すると、一つの記憶が頭に過ぎる。確か、親がいないとバカにされた女の子を助けた記憶がある。

「……まさか」

「お兄ちゃん？」

「……5年前の、5年の時同じクラスにいた……八神……か？」

「……覚えていないとは、酷いじゃないか。エイト……いや、八幡」

ウルビダはこちらにフラフラと歩いてくる。彼女は、俺に微笑みかけ、語り始める。

「……5年前のあの時からずっと、私はお前に惚れていたんだ。……あの時、私は親がい

ないとバカにされていた。父さんがいたとはいえ、義理の父親……。だから否定したくても出来なかった。……クラスの連中は誰も助けてくれず、泣いていた私を助けてくれたのが、お前なんだ」

「……俺が、八神を……」

「あの時、私がいじめられる前からお前はいじめられていた。私も同じクラスだったから、なんとなく覚えていたのだ。でも、全く関わりのないお前が私を助けてくれた。自分がおおいじめられても……」

確かに、俺は親がいないとバカにされていた人物を助けた記憶はある。だが話したこともないやつだったから顔も名前も全く覚えていなかった。

「チープな理由で笑えるだろう。……それでも、私はお前のことが好きなんだ」

「……そう、だったのか……」

「……でも、私はお父様の計画のために、余計なことは忘れたかった。遂行するためには必要だと。だが、大阪でのイプシロン戦。お前の戦う姿を見て、私はいてもたってもいられなかった。八幡もエイリアに参加すれば、お前とずっといられるのではないか。私だけのモノになるのではないか。そのために、お前やお前の妹を連れ去ったのだ」

ウルビダが固執する理由も、小町が拐われた理由も説明された。全ては、5年前にあったのだ。



「……済まなかった。今まで私の無茶振りに付き合ってもらって。こんな女、嫌いに  
なっただろう……？」

「……別に、嫌いじゃねえよ」

そう。嫌いではない。小町の建前があつたとはいえ、ウルビダが俺を求めるときに、俺は明確な拒絶をしなかった。ずっと、小町のためと、自分の中で言い訳をしていたが、もしかすればウルビダの行為を容認していたのかもしれない。むしろ、俺はウルビダが落ち着くならと思つて抱き返したくらいである。

アホか俺は。なんだそれ恥ずかしい。

「……結局は小町にも手を出さなさかつたわけだしな。被害は何も出ていないし、何よりエイリア学園に来たことでマツカンがただで手に入った。それに、全て終わったことだ。気に病む必要はねえよ」

「……八幡……」

すると、凄まじい爆音が研究所に響いたとともに、研究所が少しずつ崩れ始めた。「なんか分からんけど、このままここに居るのはヤバそうだな……」

「みんな出口へ！」

だが、出口は大きな瓦礫が降り注いで閉ざされてしまった。すると、逆側から車の走行音が聞こえてくる。振り向くと、そこにはイナズマキヤラバンが現れた。

「みんな！早く乗るんだ！」

「古株さん！」

え、何あれ古株さんカツコ良すぎだろ。

俺達は一目散にキヤラバンに乗り込む。俺も乗り込もうとした時、グランと円堂と、逃げる気配を見せない吉良さんがまだ乗り込んでいなかった。

「ちよ、何してんだ。早く乗れよ」

「そうだよ父さん！一緒に逃げよう！」

「……………私のことはいい。私はここで、エイリア石の最後を見届ける。それが、お前達に對してせめてもの償いだ……………」

「……………ふざけんな」

俺は、吉良さんの言葉を否定した。

「償い？バカかあんたは。そんなもんあんたの自己満足だろ。ここであんたが死んで、ウルビダやグラン、残されたあいつらはどうすんだ。あいつらに寂しい思いをさせるのかよ。本当にこいつらのために償いたいと思うのなら、まず生きることが前提条件だろ」

「……………行こう、父さん」

「……………私はお前達に酷いことをした……………そんな私を、ヒロト、お前は許してくれるという

のか……?」

「……うん」

俺達は強引に吉良さんをキャラバンに連れて行き、乗り込んだことを確認した古株さんは、全速力で元来た道を走っていく。爆風がキャラバンに迫いつきそうになるも、なんとかキャラバンは研究所から脱出した。

脱出した後、みんなはキャラバンから降りていく。しばらくすると、警察の護送車が何台かやってくる。一人の警察官が、鬼瓦刑事に報告していた。

「ジェミニストーム、イプシロン、プロミネンス、およびダイヤモンドダストの子ども達を全て保護しました」

「ご苦労。では、行こうか。吉良さん」

吉良さんは小さく頷いて、連行されていく。

「父さん!」

「……ヒロト……?」

「俺、待つてるから!父さんのこと、ずっと待つてるから!」

「…………ありがとう……」

吉良さんはパトカーに乗せられ、連行されていった。

「…………君達も行こう」

ジエネシスのメンバーは鬼瓦刑事の指示に従って、護送車に乗っていく。だが、彼女は護送車の方に行かず、俺の方に歩いてきた。

「……お前とは、もう会えなくなるな。……私は、寂しい」

「…別に、今生の別れってわけじゃねえだろ。またどこかで会うんじゃないの」

「…それもそうだな。……八幡」

「なんつ……」

俺はウルビダに聞き返す暇もなかった。何故なら、俺の口は彼女の口によって塞がれたからだ。彼女と俺の顔が離れたとき、彼女の頬は少し赤くなっていた。

「……お前が初めてだ。八幡は？」

「……そんなもん、何度もあったまるか」

「ふふつ……ならばこれで、お前は正真正銘、私だけのモノになったな。お前の初めてをもらったんだからな」

俺は彼女の言葉に、何も返せずにいた。キスをされて、それどころじゃなかったからだ。

「…ではな、八幡」

「ああ……」

ウルビダは、いや、八神はそう別れの挨拶を告げて、護送車に乗っていく。グランも、

吉良監督と共に護送車に乗っていく。

曰く、彼らのそばに寄り添ってあげていたいとのこと。グラン達が乗り終え、鬼瓦刑事と共に目の前から護送車が去っていった。

「……終わったんだね、お兄ちゃん」

「……そうだな。……さて、これからどうしようか……」

このまま千葉に帰ることが目的となるが、未だにここは富士山麓。護送車で送つてもらった方が良かったか……。

そんな考えをしている間。

「比企谷！」

円堂がこちらに来た。円堂だけではない。雷門イレブンのみんなが、俺のところへ寄ってくる。

「比企谷！これからどうするんだ？」

「……まあ千葉に帰るけど」

「ならば、折角だしキャラバンに乗って行けよ！俺達、風丸達に勝利報告するために雷門中に戻るからさー！」

「……いや、別に途中で下ろせば良くない？敵に寝返ったやつだぞ、一応」

「そんなの関係ないさ！比企谷は今も、これからも俺達雷門イレブンの仲間だ！」

すると今度は、マネージャー達が雷門のユニフォームを持ってこちらに来る。

「……なんだこれ」

「貴方のユニフォームよ。いつ戻って来ても大丈夫なように、貴方のユニフォームをしっかりと保管していたの」

「……マジかよ」

たった数日しか一緒にサッカーしてなかったやつがユニフォームをしっかりと保管してたのかよ。

…本当、お涙頂戴にも程があるわ。

「…ありがとな」

「良かったね、お兄ちゃん！」

「……ああ」

こんな俺にも嫌な顔一つせず、迎えてくれる。お人好しの集まりだよ、雷門イレブンは。

## 終わりなき脅威

長かったエイリア学園の生活も終わり、俺は改めてキャラバンに入ることになる。といつても、ただ単に雷門中に向かうのを付いていくだけだが。

キャラバンは富士山麓から雷門中へ向かった。だが、稲妻町に着いてから空模様が妙に変に感じる。今にも何かが起きそうな、そんな予感だった。

霧が立ち込めた雷門中に到着し、俺達はグラウンドに入る。しかし、誰一人として気がしなかった。すると、霧の向こう側から誰かが歩いてくる。段々と、姿が鮮明になっていく。その人物は…。

「待つていましたよ、雷門イレブン」

「け、劍崎……お前、なんでここに…」

吉良星二郎の側近の劍崎竜一がそこにいた。

「エイト、君の実力にはがっかりしました。まさかりミッター解除にすら付いていけないレベルだったとは。一時期、ハイソルジャーに加えようと考えた私はどうかしていました」

「ハイソルジャー……?」

「そう。貴方達にはまだ、最後の戦いが残っていますから」

すると、剣崎の後ろには黒いフードを深々と被った集団がこちらに歩いてくる。その集団の中心にいた人物が、円堂の前に。そして、フードを取ると、その人物は思いがけない人物だった。

「か、風丸!?!」

雷門のDFの風丸が、険しい表情で顔を晒す。風丸に続いて、次々とフードを取り外す。そこには、テレビで見たことある雷門の一員が揃っていた。

「…久しぶりだな、円堂」

「ど、どういうことだよ……」

「…ようやく、私の野望を実現する時が来ました」

風丸は、エイリアスが所持していた黒いサッカーボールを手にしていた。

「…挨拶代わりだ」

風丸は躊躇いなく、円堂に向かって黒いサッカーボールを打ち込む。円堂は反応し、止めようとするが、その威力により弾き飛ばされてしまう。

「……円堂。俺達と勝負しろ」

あいつらの様子がおかしい。そう思い、注意して見てみると、ユニフォームの中から紫色に光を放つ。



「……お前、エイリア石使ってんのか」

「な、何だって!？」

「エイリア石は、研究所と共に爆破されたはずじゃあ……」

そんな雷門の驚き気味の疑問に、剣崎はクツクツと笑いながら感謝を告げる。

「皆様に感謝しております。お陰であの無駄極まりないジエネシス計画に固執していた

吉良星二郎を片付けることが出来ました」

「……つてことは、あの爆発もお前の仕業か」

「ええ、エイトの言う通りです。エイリア石を私だけのものにするために破壊しました」

あの時、吉良星二郎の隣には剣崎がいなかった。そして突然の爆発……。すぐ考えれば辿り着きそうな答えだった。

「旦那様は、エイリア石の価値を理解していなかった。何一つね。ですからこの私がエイリア石の真の使い方を教えるために、究極のハイソルジャーを作り上げたのです」

「まさか、風丸達が!？」

「そう……彼らこそがジエネシスをも超えるハイソルジャー……その名も、ダークエンペラーズ!」

吉良星二郎に接近したのは、あくまでエイリア石を自分だけが使うタイミングを伺っていたってことか。前から吉良星二郎同様に、気味が悪い感じはしていたが……。

「今日は究極のハイソルジャーを見せつけるために来ました。彼らが貴方達、雷門イレブンを完膚なきまでに叩きのめすことでしよう」

「……………こんなの嘘だ！」

円堂は風丸の肩を掴み、説得する。

「お前達は騙されているんだ！」

「……………騙されている？フン、違うな……………俺達は、自分の意思でここにいる」

「そ、そんな……………」

風丸は徐に、首に掛けていたエイリア石を取り出した。

「このエイリア石に触れた時、力が漲るのを感じた。求めていた力が……………。…俺は強くなりたかった。強くなりたくても、自分の力では超えられない限界を感じていた……………でも、エイリア石は、信じられないほどの力を与えてくれたんだ」

風丸はローブを脱ぎ捨てる。脱ぎ捨てた風丸の格好は、いかにもエイリアの様だ。

「俺のスピードもパワーも桁違いにアップした。この力を、思う存分使ってみたいのさ！」

「ち、ちよつと待てよ！エイリア石の力で強くなっても、意味がないだろ！」

「それは違うでやんす……………強さにこそ意味があるんでやんす」

「く、栗松……………」

「俺はこの力が気に入ったぜ……もう豪炎寺にも吹雪にも負けはしねえ」  
「染岡くん……」

風丸と栗松以外はあんまり知らないが、要するに怪我や限界を感じてキャラバンを降りたのだろう。怪我で降りたならまだしも、自分に限界を感じて自らキャラバンを降りた。そんなやつらが、借りた力でドヤ顔してるとは、

「……惨めだな」

「……何?」

つい本音が出てしまった。俺の言葉に風丸は反応し、睨みつけてくる。

「惨めだつて言ったの聞こえなかったか?それとも聞いてなかったのか?」

「お、お兄ちゃん……?」

「ゲームのチートと同じだろ。自分の力じゃ勝てないから、バグや改造、チートに頼つてまで勝とうとする。そんな借り物の力で満足してるお前らが惨めだつて言ったんだよ。借りた力が自分の力だつて言い張るとは、お前ら中々笑わせてくれるな。お笑いでも目指したらそれなりにウケるぞ?」

俺のそんな言葉や態度にイラついたのか、未だにフードを被ったままの人物が黒いサッカーボールを俺に蹴り込んでくる。俺はそのサッカーボールをなんとかカットする。

「……流石だな、比企谷」

「……あ？」

俺に打ち込んできた人物は俺の名前を呼ぶ。

その声に、俺は聞き覚えがあった。その人物はローブを脱ぎ捨てて姿を表す。

「……葉山……か……？」

見間違えるわけがない。俺に向かって蹴り込んだのは、クラス内トップカーストに君臨する葉山隼人本人だった。いつもの様な輝いた笑みはなく、風丸同様に険しい表情だった。

「……久しぶりだな、比企谷」

「……まさか、お前までドーピングに手を出すとはな……。そんなに偽物の力に縋りたいのかよ」

「君には分からないのです。力がなければ怪我をする、チームを離れる。エイリア学園に助っ人として扱われた君が、彼らの苦しみが分かれますか？」

剣崎は言葉巧みに俺に向かってそう言うが、そもそもあれウルビダの独断だったし、別に自分の意思でエイリアにいたわけじゃない。

「……知らないな。他人の限界なんて興味ない。大体、人間には限界があるもんだろ。なんで自分の限界を肯定してやれないんだよ」

「……君は何も分かかっていない。限界が分かかってしまうから辛いんだ。自分に力がないと、そう理解してしまう。……力がなければ何の意味もない」

「葉山……お前……」

「……これが誰もが取り憑かれる魅力……それがエイリア石です」

「剣崎……」

俺は憎しげに剣崎を睨む。別に葉山が洗脳されたからじゃない。あいつの全てが気に食わないのだ。

「ダークエンペラーズの記念すべき相手が決まった。お前達、雷門イレブんだ」

風丸は指を差してそう告げる。それに対して円堂は、はつきりと拒絶する。

「い、嫌だ！こんな形で、お前達とサッカーをするなんて！」

「そうっス！嫌っス！」

「ああ。互いに得られるものは何もない」

「……断ることなど出来ない。断れば、雷門中を破壊する」

風丸は黒いサッカーボールを雷門中に向かって打ち込もうとする。

「だめだ！やめろ風丸！」

「分かりましたか？貴方達に選択肢は無いのですよ」

逃げ場はなし、か。どちらにせよ、風丸達を元に戻すには戦ってエイリア石が必要ないと証明しなければならぬ。

「……分かった！その勝負、受けてやる！」

「やっとその気になりましたか……」

「円堂、人間の努力には、限界があることを教えてやる」

こうして、俺達は風丸達ダークエンペラーズと試合をすることになった。エイリア石が不必要だと証明するために。

## 雷門 V S 雷門

エイリア石によって強化された風丸達を倒すべく、俺達はダークエンペラーズと対決することになった。

あちらのメンバーには、みんなの顔見知りの人物が揃っている。

「…みんな、忘れちゃったんスカねえ……?」

壁山が何かの板を見つめながら、悲しげに呟いた。その板を見ると、”サッカー部”と書かれていた。

「……そんなわけあるか。俺達は、必死に努力してサッカーを続けられてきたんだ、だから、エイリア石なんかに潰されるはずがない!仲間は、ずっといつまでも仲間なんだ!」

「取り戻そう、本当のみんなを!」

「あいつらは、俺がサッカーを諦めかけた時、そばにいてくれた仲間だ。今度は俺達が……!」

「ああ!」

「ウチも協力するで!」

すると、後から雷門イレブンに入ったメンバーも協力すると名乗りあげる。

「俺達も、雷門イレブンだからな！」

「ああ！勿論だよ！」

「俺もやります！」

「俺だって、雷門イレブンだ！」

本当、雷門イレブンってお人好しの集まりだわ。だからだろうな。みんなが雷門の魅力に惹かれていくのは。

すると、みんながこちらに目線を向ける。あ、これ俺も何か言った方がいい流れなのかな。

「……そうだな。俺も、とつとと助けて千葉に帰りたいからな」

「最後まで捻アレだなあ……」

変なことを言うな小町ちゃん。

「お前達、準備はいいな？あいつらに見せてやれ！お前達のサッカーを！」

「はー！！」

雷門イレブンは円陣になり、手を重ねていく。何これ恥ずかしくない？そんなスポ根な作品なのこれ。

「おい比企谷、お前も！」

「……はいよ」



俺も、手を重ねる。そして円堂の声出し。

「行くぞー!!」

「おおっ!!」

俺達は自分の配置に着いた。

F Wは豪炎寺と吹雪のツートップ。M Fは俺と一之瀬、鬼道と土門。D Fは壁山、円堂、木暮、綱海だ。G Kは立向居だ。

キックオフは雷門から。

ホイッスルが鳴り響き、試合が始まる。ボールは鬼道に渡り、後ろにはいきなり円堂が上がつていく。

鬼道からのバックパスで円堂に繋がる。しかし、円堂に向かって走っていくのは、風丸だ。

「来い!俺の力、見せてやる!」

すると、風丸は円堂とすれ違い様にボールを奪取。風丸はそのまま攻め上がっていく。

「行かせるか!」

土門と俺がディフェンスに入る。

「疾風ダッシュユ!」

凄まじい速さで俺達二人を抜き去る。

「な、なんだあの速さ!？」

恐らく、リミッター解除をしたジェネシスよりも遥かに速い。

風丸が向かう先には壁山が立っていた。風丸は躊躇いなく、壁山に向かってボールを打ち込んだ。

「ザ・ウオオール!!」

壁山渾身のディフェンス。だが、それは容易く崩れていき、立向居に向かって飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り返し、なんとかボールを死守。

速さだけでなく、パワーもジェネシスより遥かに高い。

雷門は怯まず、攻め込んでいく。だが、やつらの身体能力の高さがこちらのプレーを上回り、全て奪われてしまう。

今度は、俺にボールが渡る。エイリアで培った全てを出して、攻め上がっていく。

目の前には少林寺と穴戸が立ちほだかる。

「退けよー!」

俺は二人を抜き去る。

確かに、ジエネシスより一回りも二回りも強いことは確かだ。だが、こちとらステータスが低レベルの状態でもマスターランクのやつらとサツカーをしてきている。今更驚きはしないし、無理してなんとかすればやつらの動きに付いていけなくはない。

ゴール前まで攻め上がって、俺はシュートの体勢に入る。

「アストロゲート!!うおおオッ!!」

俺は渾身の必殺シュート。だが、前線にいたはずの葉山が戻ってきていた。

「これが俺の力だッ!!」

そう言って葉山は、一度ジャンプして足を振り切る。

「デーモン…カットツ!!」

葉山が足を振り切ると、地面から鬼の顔の様なエネルギーフィールドが放出される。そのエネルギーフィールドで、俺のアストロゲートを難なく止めてしまう。

「甘いな、比企谷」

「…くそつたれ」

俺はそう吐き捨て、葉山に向かって突っ込んでいく。葉山は怪しげな笑みで、俺にボールを渡す。すると、

「ぐおッ!!」

「ジャツジスルー……」

葉山はボールを通して、スライディングから俺の身体を連続で蹴り始めた。その連続蹴りは続き、

「2!!」

フィニッシュは俺の顔を両足で蹴り飛ばす。俺は痛みのみならず、腹を抑えて蹲る。

「ぐはッ……!!……ごほッ……ごほッ……い、いつてえ……!」

「お、おい!あれファウルじゃないのか!」

「い、いや、ファウルにならない様に計算して蹴っているが……なんて技だ……」

「君とは格が違うんだよ、比企谷」

葉山は俺を見下して笑う。

「葉山!こっちだ!」

染岡の指示で、葉山は染岡に繋げる。染岡は凄まじい速さで攻め上がっていく。染岡の前には、壁山と円堂が。

「先には行かせない!」

「フハハハッ!今の俺はどんなディフェンスだって突破することが出来るんだぜ?」

「そんなものは、本当の力じゃない!」

「だったら俺を止めてみるよ。エイリア石を否定するなら……それ以上の力を俺に見せてみる!」

染岡は壁山と円堂のディフェンスを強引に吹き飛ばす。

「どうだ！俺の勝ちだ！」

「染岡くん！」

染岡の前には、吹雪が回り込んでいた。

「アイスグラウンド!!」

染岡の動きを封じて、なんとかダークエンペラーズの猛攻を止めた。染岡は舌打ちして、戻っていく。

「染岡くん！」

吹雪は染岡をなんとか説得しようと試みる。

「僕は忘れてないよ！君がどんな悔しい思いでチームを離れたのか……どんな思いで僕に後を託したのか！」

「……そんなもん、覚えてねえよ」

「染岡くん……」

今のあいづらに説得は無駄だろう。今あいづらが信じているのはエイリア石の力のみ。それだけに執着して、今までのことなんて全て忘れている。

試合が再開し、ボールは一之瀬に渡る。一之瀬の背後には、円堂と土門が一緒に攻め上がっている。ザ・フェニックスの体勢に入るが、

「スピニング…カットオツ!!」

DFの西垣が三人を吹き飛ばしてボールを奪う。

「フェニックスはもう翔べない!」

「西垣……」

「西垣こつちだ!」

風丸の指示で西垣から大きく風丸へとパスを出す。それを読んで鬼道は風丸にマークに着くが、簡単に振り切られてしまう。

「葉山ッ!」

ボールは葉山に渡った。葉山はボールを一度蹴り上げると共に、葉山も大きくジャンプする。

「ガンシヨットツ!!うおおオオツ!!」

葉山はボールを両足で挟み、勢いよく回転をかける。回転がかかったボールは、さながら弾丸の様に立向居に飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!うおおオオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出す。だが、葉山のガンシヨットの方が威力が上であり、ムゲン・ザ・ハンドは破られてしまう。

「葉山アッ……!」

「惨めなのはどうかやら君の様だな、比企谷……」

葉山の点で勢い付いたダークエンペラーズ。怒涛の勢いで攻めてくる。ボールは染岡に渡り、ゴールへと突き進んでいく。だが、その染岡を止めるために前線にいた吹雪が一気に染岡に向かって走ってくる。

「染岡くんは僕が止める！止めなきゃならないんだッ！」

「やれるもんならやってみろ!!」

染岡はボールを上打ち上げる。それと共に、地面から青い大きな龍が現れて飛翔する。

「ワイバーン……!!」

染岡が打ち込むと同時に、吹雪が間髪を置かずに染岡のボールを吹雪が足でブロックする。

「テメエ……さつきから俺の邪魔ばっかしやがって!!」

「染岡くん！僕と一緒に風になろうって言ったじゃないか！忘れちゃったの!」

「だから……!!そんなこと覚えてねえって言ってんだろオ!!」

染岡は力任せに吹雪を吹き飛ばして、立向居にシュートを打ち込んだ。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!うおおおオオツ!!」

だが、葉山の時と同じく、ムゲン・ザ・ハンドは容易く破られてしまい、立向居ごと

ゴールに入れた。

ダークエンペラーズ追加点。スコアは0―2。ダークエンペラーズの圧倒的な力の前に俺達は、無力も同然だった。

「どうだ！最強のストライカーは俺だ！フハハハッ！ハーツハツハツハ！！」

こいつらの力はジェネシスより遥かに強い。どうすれば、ダークエンペラーズに勝てるのだろうか。



## 友情の究極奥義

前半2点のビハインドを背負った雷門。だが、ダークエンペラーズの猛攻は止まらない。松野と半田が共に攻め上がってくる。

「見ろ円堂！」

「これが俺達の、真の力だ！」

二人は互いに両手を掴み、そのまま勢いよくボールを巻き込みながら回転して飛んでいく。

「レボリューション…:V!!」

フィニッシュはVの形で打ち込むこととなり、地面を抉ぐるような凄まじいシュートが立向居に飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

しかし、ムゲン・ザ・ハンドは三度破れる。ゴールに入るところで、円堂がなんとかカットしてグラウンドの外に出す。

「なんとか止めたか……」

少し安堵をしたその傍ら、立向居が手を押さえているのが見えた。さっきの手を

やったか……？

そして試合を再開し、俺達は攻め続けていくが、ダークエンペラーズに阻止されていく。俺達が攻めあぐねているそんな時に、前半終了のホイッスルが鳴り響く。

俺達はベンチに戻り、ダークエンペラーズの攻略について悩んでいた。

「どう動いてもあいつらに取られてしまう……」

「……今まで一緒にサッカーやってきてたんなら、動きのクセとかも分かかって当然だけどな……」

共に戦ってきた時間が仇となっている。何か、あいつらが動揺する秘策があれば……。いや、ちよつと待てよ。

「……円堂。俺が拐われる前のチームの時に風丸や栗松はいたが、いつ抜けたんだ？」

「……比企谷が拐われた後の次の日だったけど……それがどうかしたか？」

「成る程……。これからの作戦が決まったわ」

「ほ、本当か!？」

俺は小さく頷き、その作戦を説明していく。

「……俺達が動けばやつらが動く。それは、お前らと身近で戦ってきたから出来ることだ。でも、やつらでもまだ把握し切れていない人物がいる。それは……綱海だ」

「え、俺？」

「お前がいつの間に入ったのか知らんが、お前あいつらのこと知ってるか？」  
「い、いや……知らねえけどよ」

「そう。綱海はあいつらのことを知らない。裏を返せばあいつらは綱海のことを知らない。だから、俺達が動いた時がチャンスだ。お前の十八番、超ロングシュートを打てば必ず隙が出来る」

「綱海風に言うならば、フィールドに波の様なリズムを作り出すということだ」

俺の説明の後に、鬼道が綱海に理解しやすく付け加えた。

「……波のリズムか……面白え！やってみようぜ！」

「よし！みんな、絶対に勝つぞ！エイリア石の力なんて必要ないってことを教えてやるんだ！」

「おお!!」

後半の作戦が決まって、俺達は自分の位置につく。

そして、後半が開始。俺達は、自分の陣地でパスを回していく。だが、それは風丸に最も容易く奪われる。

風丸の前に、円堂がディフェンスに。風丸は円堂を抜き去ろうとするが、円堂はしごとく食らいついていく。そんな円堂に苛立ちを感じた風丸は、

「邪魔だアツ!!」

円堂にボールをぶつけて吹き飛ばす。倒れた円堂を、吹雪が支える。風丸のそんな行動に、綱海は激怒。

「お前、何すんだ！お前ら、円堂の仲間だったんじやねえのかよ！円堂をボールで吹っ飛ばして、何にも思わねえのか！そんなにエイリア石が大事なのか！」

「お前に何が分かる！」

「いや、僕達だから分かるんだ」

「何っ……？」

「俺、このチームが好きだ」

吹雪に続けて木暮もそう告げる。

「……お前ら、このサッカーバカに惹かれて今までサッカーしてきたんだろ。心からサッカーを愛する円堂を、お前らは好きはずだ」

「キャプテン達に会えたから、今の僕がここにいる！」

風丸は動揺する。今の自分が間違っているのではないか。エイリア石の力を信じる  
ことが正しいのか。

そんな風丸の隙を突いて、俺はスライディングで風丸からボールを奪取。

「比企谷、こっちだ！」

前線にいる鬼道や豪炎寺がダークエンペラーズの連中を引き付けている。

「おっしや！波が引いたぜ！」

「行つたれ綱海ッ！」

俺は綱海にパス。綱海は、必殺シュートの構えに入る。

「ツナミ……ブースト!!おらああアアッ!!」

綱海の超ロングシュート。ダークエンペラーズは誰も止めることが出来ず、GKの杉森が対応する。

「ダブルロケットツ!!」

両手からボールを追尾する拳が現れ、ツナミブーストを弾く。しかし、弾いた先には前線に上がっていた吹雪が拾う。

「ウルフレジエンドツ!!うおおオオツ!!」

目にも留まらぬ怒涛の攻撃で、ついにダークエンペラーズから点を取り返す。綱海を中心とした作戦がズバリハマる。その作戦の効果で、雷門は攻め上がることができた。

豪炎寺と吹雪が共に攻め上がり、ミラクルツインシュートの構えに入る。

「クロスファイアッ!!」

「ダブルロケットオッ!!」

クロスファイアがダブルロケットを破り、雷門は同点に追いつく。この作戦を続けければ、なんとか勝機はあるはずである。

「こ、こんな……はずが……」

そんな風丸達を見た劍崎は。

「何をしているんです！何のためにエイリア石を与えてやったと思うのですか！もつともつとお前達の力を見せつけてやりなさい！」

劍崎は風丸達に怒号を飛ばす。劍崎の声に反応する様に、風丸の胸元にあるエイリア石が光を放つて反応する。

「……そうだ。俺達の力はこんなものじゃない」

試合が再開して、風丸と染岡、そして松野が一気に攻め上がる。

「俺達是最強の力を手に入れた！見せてやる……最強の必殺シュートを!!」

風丸と染岡、松野の三人が同時に力強くボールを上蹴り飛ばす。禍々しいオーラを放ちながらボールは飛んでいくが、そのオーラからは歪な色をしたフェニックスが誕生する。

三人は共にジャンプし、同時にオーバーヘッドキック。

「ダーク……フェニックス!!」

今までのシュートなんかより桁違いの威力を誇る必殺技が立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出すが、やはり破られてしまう。

2―3。ダークエンペラーズ勝ち越し。だが、ダークエンペラーズの猛攻は止まらない。あらゆる強烈な必殺技で、雷門イレブンを吹き飛ばしていく。雷門の半分以上は、倒れてしまっている。

「ダーク……フェニックス!!」

とどめと言わんばかりのダークフェニックス。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

立向居は、なんとか立ち上がりムゲン・ザ・ハンドを繰り出す。だが、やはり威力はダークフェニックスの方が勝り、立向居を押ししていく。そんな立向居背中を、円堂は後ろから支えて、なんとかダークフェニックスを死守。

「ぐっ……あぁっ……!」

立向居は膝について手を押さえる。

「どうしたんだ、立向居!」

「すいません円堂さん……ちよつと手が痺れて……」

「手を見せてみる!」

円堂は立向居のグローブを取り外す。とてもちよつと痺れたとは言えないくらいの傷。これ以上は立向居の手がイカレちまう。

「どうする円堂？まだ続けるか？」

「何？」

「見ろ。あの無様な姿を……。もう諦めろ」

風丸の言う通り、とても試合を続行出来るような状態じゃない。しかし、円堂は風丸のその言葉を否定する。

「嫌だ……！絶対諦めない……ゴールは俺が守る！」

円堂はGKのユニフォームに着替え、グローブを取り付けてゴールの位置に着いた。

「……さあ、来い！」

「勝負してみたかったんだ……GKのお前と！」

風丸は力を込めた普通のシュートを円堂に打つ。円堂は風丸のシュートを止めようとするが、その威力が凄まじいゆえに、円堂を弾いてボールはゴールに入ろうとする。

「まだだあアツ!!」

しかし、円堂は気合いで後ろにジャンプし、ボールを掴む。そのまま尻餅をついて、倒れてしまう。

「……諦めない……それが、円堂……」

「風丸……？なあ、なんでエイリア石なんか頼るんだ!？」

円堂は風丸に問うた。風丸はシンプルに答えた。



「強くなりたかった……お前の様に！」

「ッ……!!」

円堂の表情は、何か後悔したような表情だった。エイリア石に頼らせるきつかけを作ったのは、もしかしたら自分ではないのか。

きつと、そんな後悔が残っていたのだろう。

円堂はボールを風丸に向かって転がした。

「来い！お前の全てを受け止める！」

円堂の言葉に再び苛立ったのか、風丸は円堂に打ち込む。

「ゴッド……ハンドオツ!!」

円堂はゴッドハンドを繰り出し、風丸のシュートを止める。そしてまた、風丸に向かってボールを転がす。

「風丸………思い出してくれ！」

「………黙れえええエエツ!!」

今度は、風丸と穴戸と栗松の連携技の構え。

「トリプル……ブースト!!」

「ゴッド………ハンドオツ!!」

トリプルブーストに対してゴッドハンド。しかし、円堂は少しずつだが後ろに押され

ていく。

「思い出せ……!!みんな……!!俺達の……サッカーを……!!」

円堂はからくもトリプルブーストを止めるが、力を使い切ったのか、その場で倒れてしまう。

「勝負は……着いたな……」

円堂も倒れてしまった。ダークエンペラーズの前に、みんなが倒れてしまう。

「みんな立ちなさい!立ち上がって!!」

雷門がみんなにそう呼びかける。しかし、誰もそれに対して答えはしない。だが。

「らーいもん!らーいもん!らーいもん!」

木野が、一定のリズムで雷門コール。そんな木野に影響され、ベンチにいたメンバーとマネージャーと小町。そしてこの試合を学校外から観戦している者達。みんなが、雷門に向かって応援する。

そんな応援に應えるために、一人、また一人とゆっくり立ち上がっていく。

みんなが立ち上がり、倒れているのは円堂のみ。

「円堂!!」

「円堂!!」

豪炎寺、鬼道が円堂を呼びかける。

「…立てよツ!!円堂オツ!!」

柄にもなく、俺は大きな声で円堂を呼びかけた。

「つ……………まだ……………まだツ……………」

円堂は、目を覚ます。そのまま、ゆっくりと立ち上がる。みんなの呼びかけが、円堂を立ち上がらせることができた。

「終わって……………ねーぞ……………!!」

円堂は風丸にボールを投げつける。

何度も痛めつけているのにも関わらず、立ち上がる円堂や雷門イレブン。そんな姿に風丸は、

「うああああアアアツ!!」

雄叫びを上げながら、染岡と松野との連携技に入る。

「ダーク……………フェニックスツ!!」

力を振り絞ったダークフェニックスが円堂に向かっていく。

「たああああアアアツ!!……………ゴッド……………ハンドオオツ!!」

円堂が繰り返し出したのは、虹色に輝くゴッドハンド。円堂は、ゴッドハンドをダークフェニックスにぶつける。

円堂も力の限りを出し切り、完璧にダークフェニックスを止めた。

「思い出せえええエエツ!!みんなああアアアツ!!」

円堂はサッカーボールを掲げる。すると、サッカーボールから淡い緑色に輝く波動がダークエンペラーズの選手の胸に。

その波動がダークエンペラーズを包み込むと、彼らの首にかかっていたエイリア石が粉々に砕ける。

「……円堂……ありがとう……」

風丸は、涙を流して感謝を告げて倒れる。それと同時に、暗雲が姿を消し、段々と青空が広がっていく。

円堂はそんな空を見上げて、倒れてしまう。

一方、風丸達が倒れてエイリア石が砕けた現象を見た剣崎は、アタツシケースを開いてエイリア石の無事を確認しようとするが、

「な、なんだ?!どうしたのだ!これは?!」

ただの石と化していた。

「お前の企みもここまでだな」

鬼瓦刑事を含む警察の人間が、剣崎とエージェントを連行していった。

これで、エイリア石による悲劇は起こらなくなった。

しばらくすると、風丸達は目を覚ます。風丸達は、円堂のところに向かって目が覚めるのを待つ。そして少しすると、円堂が目覚めます。

「円堂……」

「風丸……染岡……」

「……お前達……!」

円堂は目を覚まし、一人一人に呼びかけた。風丸達は、先程の様な険しい表情ではなく、今まで通り、仲間としての表情だった。

「……効いたよ……あのゴツドハンド」

「みんな……思い出したんだ!!……やったああ!!……やったぞおお!!」

円堂は感激の涙を流す。

ようやく元に戻った。俺はひとまず、大きな安堵を吐いた。

「比企谷……」

「……葉山……」

葉山も元に戻った様だ。彼の表情は、清々しい笑顔である。

「……ありがとう、比企谷。君の、君達のおかげで元に戻ったよ」

「……ただの成り行きだ。本来ならお前らスルーして千葉に帰るところだったぞ」

いやマジで。あのまま富士山麓を下山したらスルーしてたわ。

「……まあ、でも。……良かったんじゃないの？」

「はははっ……比企谷らしくない言葉だな」

「お前それ褒めてんの？」

相変わらず嫌いだわこいつ。人の好き嫌いなんてそう簡単に変わらんからな。

「よーし！このまま続けるぞおーっ!!」

「おおー!!」

試合が再開する。みんなは生き生きとプレーし始める。サッカーを楽しむ様に、みんなは笑顔になっていた。

因みに、豪炎寺が杉森から点を奪い、同点になっていた。

そしてそのまま試合が終了になる。

「よーし！円堂胴上げだぁー!!」

綱海がそう言つて、みんなが円堂の周りに集まる。円堂が困惑している中、

「これはお礼だ」

財前は、円堂の頬にキスをする。

あらかだ財前さん大勢人がいる中でなんて大胆なことを。

気を取り直して、みんなは円堂を胴上げする。そんな様子を遠目に見ていた俺に、

「お疲れ様、お兄ちゃん！」

小町が俺を労る。俺はふつ、と笑って、小町にこう答えた。

「……帰って寝たい」

……しばらくは引きこもりでいいかな。俺頑張ったよ、色々。

## 世界への挑戦 アジア予選編

### 地上最強から世界一

エイリア学園の事件から3ヶ月。地上最強のメンバーとしてスカウトされていたみんなは、それぞれの故郷に帰り、それぞれの生活を送っていた。

そして、この俺、比企谷八幡も。

「せんぱいせんぱい！ サッカー部に入りましょうよ！」

いつも通りの時間を送れると思っていたのだが……。

どうやら、雷門で共に戦っていたことがこの間のダークエンペラーズ戦で知られた。そういえば、確かに中継されていたけども。それを見ていた一色が、毎度毎度サッカー部に勧誘してくる。

「やだよ面倒だよ第一リア充の部活なんて入りたくねえよ」

「あはは……ヒッキーは相変わらずヒッキーだね」

「大体、その男にチームプレーを求めることが間違いいよ」

「そうだぞ。俺は普段からぼっちなんだからみんなに合わせるとか無理だ」

「全く、この愚兄は……」



雷門でサッカーをやるうが変わらない俺。これこそ、ヒツキークオリティ。

サッカーとも距離を置き、受験勉強に励んでいた。とはいえ、第一志望も第二志望も適当に自分が行けるところを選んでるけど。

とまあ、奉仕部で平和に過ごしていると。

「比企谷、ちよつといいか」

部屋に平塚先生が入ってくる。

「どうしたんですか？また依頼ですか？」

「いや、今日はお前に客が来てな。済まないが、今すぐ生活指導室に来てくれ」

「はあ……」

俺は平塚先生に言われるがままに、生活指導室に向かった。生活指導室に向かうと、そこには。

「……久しぶりだな、比企谷」

そこには、雷門の監督である響木監督がいた。

「お久しぶりです……えっと、何の用ですかね？」

「……明日、サッカーをする準備をして雷門中の体育館に来てくれ」

「明日ですか……」

明日は普通にゴロゴロして休もうかもって思ったんだけど。雷門に呼び出すくらい

だから何かそれなりの用なんだろう。

「分かりました」

俺は了承の返事をして、少しして響木監督は総武中から去って行った。  
果たして何の用だろうか。

—————

翌日になり、俺は総武中のジャージを着て雷門中に向かった。普通に少し寝坊してしまつたため、やっちまつたと思つた。

一時間程度くらい電車に乗り、稲妻町に到着。俺は新しく買ったケータイの地図アプリを頼りに、雷門中を目指した。

しばらく歩いていると、雷門中が見えてきた。なんだか久しぶりのようだと思ひながら、体育館へと向かう。

体育館のドアを開くと、何やら見覚えのある顔が揃っていた。

「比企谷!!お前も来たのか!!」

朝から相変わらず声が大きいな円堂くん。

「これ何?何の集まりなの?」

「いや、それが俺もよく分からなくて……」

円堂でさえ知らないこの状況。雷門中のメンバーは勿論、浦部と財前、何故か一之瀬や土門を除いた地上最強のメンバーも集まっていた。

「やあ、久しぶりだね」

円堂の後ろから声がした。

その顔、その声。円堂より過ごした時間が長いからすぐ思い出した。

「グラン……か？」

ジエネシスのキャプテン、グランがそこにいた。

「もう今はグランじゃないよ。基山ヒロトとして、俺はここにいる」

「……そうか。そら良かったな」

「ああ。あと、君に会えるって言って聞かない人が……」

「八幡ツ!!」

「うおっ」

後ろから俺は抱きしめられる。勢い余って、俺は前に倒れてしまう。

「とうか、この声……」

「会えた……やつと八幡に会えた……やつぱり、私は八幡がいなければどうにかなって  
しまいそうだ……」

「う、ウルビダ……か……？」

エイリア学園きつてのヤンデレちゃん、ウルビダこと八神玲名が俺を離すまいとしが  
み付いていた。

「…あ、相変わらずだな……」

「…八幡……もう離さないからな……。私の下から離すものか…」

段々と、八神の締める力が強まっていく。強くなる度に、ウルビダのメロンが当たるのですが。柔らかい。

「まさか、あのウルビダがここまで惚れてるなんてね」

グラン、もとい基山の後ろから誰かが来た。緑色の長髪を、ポニーテールで纏めている男。

「…誰？」

「俺は緑川リユウジさ。エイリア学園、ジェミニストームのキャプテン。よろしく！  
えーっと、八幡でいいかな？」

「…お、OK」

「なんで英語なのさ…」

緑川って言ったか。宇宙人の時からこいつはこんな気さくなやつだったのかな。  
「……しかし、一体どういう集まりなんだろうな」

円堂が不意に疑問を投げかける。確かに、まさかエイリア学園メンバーまでいるとは思わなかった。大体、なんか昔の不良みたいなやつもいるし。

この集まりは一体なんなのかを考えていると、

「みんな揃ってるか？」

響木監督とマネージャー三人組が現れた。俺達は響木監督のところに集合しようとする。誰かがボールを蹴り込んだ音が聞こえてくる。

ボールは鬼道に飛んでいくが、反応の早い鬼道はそれを打ち返す。打ち返されたボールは、トサカのようなモヒカンの髪型をした目つきの悪い少年がトラップする。

「不動！」

不動と呼ばれる人物は、不敵な笑みを浮かべる。

「不動！何の真似だ！」

「何って、挨拶だよ挨拶。シヤレの分かんねエやつ」

「ひ、響木さん！まさかあいつも!？」

眼帯を付けたロングヘアの男が響木監督に尋ねると、響木監督は笑みを浮かべて話し始めた。

「これで全員だな。いいか、よく聞け！お前達は、日本代表候補の強化メンバーとして招集された！」

「日本代表？」

「今年から始まるサッカーの世界大会……フットボールフロンティアインターナショナル…通称“FFI”が開催されることになった。少年サッカーの世界一を決める大会

だ。お前達は、その代表候補なのだ」

サッカーの、世界大会……。

「……うおおおおおッ!! スゲーぞみんな!! 次は世界だあ!!」

みんなが大きく盛り上がる。

この俺が、サッカーの日本代表候補に抜擢されるなんて……。小町やあいつらに言ったら、どんだけ驚くかな。

「いいか。あくまでこの22人は候補だ。この中から、17人を絞り込む」

「まず、11人2チームに分けます。その後、その2チームで日本代表選手選考試合を行います。では、メンバー編成を発表します」

そして、選考試合のチームを分けられた。

俺は、Aチームだった。円堂を始めとして、基山、綱海、吹雪などがいた。しかし、対するBチームは不安要素が生まれてしまった。

鬼道と不動の仲は、どうやら最悪と言っても過言ではなく、試合になってしつかり戦えるのかと思うくらいである。

「円堂、鬼道。お前達がキャプテンだ。いいな?」

「はいー!」

「はい……」

「試合は二日後。一人一人の力を見るために、連携技を禁止とする。持てる力の全てを出してぶつかれ」

「はい!!」

今日はとりあえず、ここまでとして解散となる。練習は明日、雷門中学で行われる。最低限の話を聞いて、俺は家に帰ろうと駅に向かう。

だが。

「私も八幡の家に行くとする。我が愛人の家を確認しておきたいからな」

「いや、帰って? 基山と緑川と一緒に帰って?」

八神が付いてきたら小町が困惑するだろうよ。俺は却下すると、八神はハイライトを消して、俺に迫る。

「何故だ? 私とお前は常に一緒にいなければならぬだろう? それとも、私がきては何か不都合なことがあるのか?」

「いや、そんなもんはないけど……」

「ならばいいだろう。この3ヶ月あまり、お前が隣にいないことで私は苦しい思いをしたのだ。あんな別れをしたとはいえ、辛かった。絶望した。死にたくなかった。もうお前とは一生離れたくない。それこそ、1秒たりともな」

エイリア学園が無くなり、エイリアだった者達は身寄りがないたため保護下に置かれて



いた。それが却って、八神の依存を更に増大させた。

「だから、私達は共にいなければならぬ。お前がもし、私から離れようとしたり、見捨てようとするなら覚悟しておくがいい。ただでは済まさないからな」

「……………頼むから、何もすんなよ」

俺は八神の依存の重さに溜息を吐いて、家に帰ることにした。

因みに家に帰ると、予想通り小町が困惑していたのはここだけの話である。

## 選考試合

昨日は散々でした。

我が家に八神が乗り込んで小町はパニックになってしまったのに、更に俺が日本代表の候補に選ばれたと言つて更にパニック。あまりの情報量に、小町は倒れてしまった。

まあ無理もないわな。

そして翌日。日本代表選考試合の練習のために、雷門中に訪れていた。勿論、八神も一緒です。

「…今思つたんだけど」

「何だ？」

「仮に、俺が選ばれたとしてお前どうすんの？ていうかこれからどうすんの？帰るのか？」

「もし八幡が代表に選ばれたなら、私は八幡専用のマネージャーとして付いて行こう。八幡の世話を、他の女にやらせるわけにはいかん」

「そうですか……」

「どうやら本気で付いてくるようです。」

読者の皆様、ヤンデレ八神ちゃんはこれからマネージャーとして活躍すると思うのでよろしく願います。

……俺は一体誰に説明してるんだろう。

グラウンドに向かうと、もう円堂達が集まっていた。

「遅いぞーっ！」

「悪い。普通に寝坊したわ」

どうやら最後に来たのが俺だったらしく、念入りにストレッチして練習に合流した。

全然知らんやつとコミュニケーションを取ることであり、気が滅入った。そんな感じ  
で2日が経つ。

—————

選考試合当日。流石に試合に遅れないわけにはいかないと思い、早めに家を出た。勿論、八神さんは我が家に泊まっています。

「お兄ちゃんの試合、雪乃さん達と観に行くからね！」

そう笑顔で言った小町は可愛かった。小町がマネージャーになってくれんな……。したら俺ハットトリックとか頑張って目指すんだけどな。

だが、忘れないで欲しい。嫉妬深く、束縛が激しい八神が隣にいたことを。小町はさつき「雪乃さん達と観に行くからね!」と言っていた。

何が言いたいか分かるか?

八神の前で、雪ノ下の名前を出したのだ。そんな八神は聞き逃すはずもなく。

「…雪乃、とは誰だ。お前に近づく女か? その女と一体どういう関係なのだ? ……まさか、私に隠れてその女と何か関係を持っているわけではあるまいな?」

はい、見ての通りです。俺と雪ノ下の関係を明確にするために、俺は八神に詰められている。

「…気に入らん。私の八幡と近づくだけでも気に入らんに、なんらかの関係を持っていること自体が気に入らん。……まあいい。私と八幡は相思相愛。私達の深くて濃厚な関係を、その女達に見せてつけてやろう……」

挙げ句の果てには、こんな物騒なことを呟く始末。気が滅入りながらも、俺は雷門中に向かった。

雷門中に着くと、選考試合を観にきた観客がそれなりにいた。それだけではなく、テレビに映すカメラやパソコンなど、あらゆる機材が置かれていた。

俺は集合場所である体育館に向かった。そこではAチームのユニフォーム、および日本代表として戦うユニフォームが配られていた。

鮮やか青と黄色の袖が良い色を醸し出している。日本代表と言つちやあ日本代表つばいユニフォームと言えるだろう。

「こいつを着て、絶対世界に行くぞ!!」

「おお!!」

そして試合の時間となり、俺達はグラウンドに向かった。グラウンドには、先程より観客層が多くなっていた。

日本代表が懸かった試合だから、当然と言えば当然か。

俺達は円陣を組んで、手を重ねていく。

「みんな！悔いのないゲームにしようぜ！」

「おお!!」

俺達は自分の位置に着く。靴紐を結び、俺も行くこうとすると。

「お兄ちゃん!!」

俺達が先程までいた逆側の観客席から、小町の声が。それだけじゃない。小町を始めとした奉仕部の面々、マイエンジェル戸塚や一色、更には葉山や三浦などのグループに川なんとかさんまでいる。平塚先生や雪ノ下姉、まさかの城廻先輩までもがいた。

いや、知り合い多くね？ほぼオールスターじゃん。材木座？そんなやつは俺の知り合いにおらん。

でも、これだけ俺の知り合いが来ているんだ。みつともない真似は出来んよな。

俺は自分の位置であるCMFに着いた。FWは、染岡と吹雪。MFには、武方、基山、俺、佐久間。DFは綱海、壁山、土方、飛鷹。GKは我らがキャプテン、円堂だ。

しかし、相手もこちらと同程度の実力を持つ人材ばかり。鬼道や豪炎寺は勿論、栗松や木暮、風丸に立向居。簡単に勝てるとはいかないだろう。

そして今、選考試合開始のホイッスルが鳴り響く。キックオフはAチームから。ボールは基山に渡る。

「染岡くん！」

基山からボールを受け取る染岡。Bチームのゴールに向かっていくと、不動が不敵な笑みを浮かべて立ちはだかる。染岡はフェイントで躲す。

「どうだ!!」

「そこだああアアツ!!」

躲した先には風丸のスライディング。対応しきれない染岡はボールを奪われる。

「鬼道！」

奪った風丸は鬼道に。続けて鬼道は前線の豪炎寺にパスを出す。武方のマークを振り切った豪炎寺は、ゴールに向かって走る。だが、巨漢の土方がデイフェンスに入る。

「闘ぎ合いを制したのは豪炎寺。土方の足元にボールを転がして抜き去っていく。  
行くぞ、円堂！」

「よし、来い!!」

豪炎寺は炎を足に纏いながら回転して飛んでいく。

「ファイア…トルネードツ！改！」

豪炎寺のファイアトルネードが円堂に向かって飛んでいく。円堂はファイアトルネードに対して。

「真…ゴッドハンドツ!!」

虹色を輝かせながら繰り出した大きな手は、ファイアトルネードを完璧に止める。

止めた円堂は前線にパントキック。ボールを受けたのは俺だ。俺はそのまま攻め上がっていく。

「行かせないよ！」

M Fの緑川がディフェンスに入る。俺はそのままスピードに乗りながら、ひとりワンツで抜き去っていく。

「染岡！」

俺は染岡にセンタリング。

「ワイバーン…クラッシュユ！V2!!」

進化しているワイバーンクラッシュが立向居に向かって飛んで行く。

「ムゲン・ザ・ハンドツ!!」

前よりムゲン・ザ・ハンドをパワーアップさせている。ワイバーンクラッシュをガツチリとキャッチし、ゴールを守った。

「鬼道さん!」

立向居から鬼道に渡る。鬼道は上がっていくが、吹雪と武方がマークに着く。

「こつちだ!」

フリーと不動が鬼道に指示を出す。鬼道は苦虫を噛み潰した表情をしたが、不動にボールを繋げる。

「行かせるかアー!!」

佐久間の強烈なスライディングで不動のボールを弾く。弾いたボールは俺が拾って上がっていく。基山には風丸、染岡には目金弟がマークが付いてる。

ならば俺が打つしかない。

俺は木暮を躲していく。

「行かせないでやんす!」

木暮を躲した俺は必殺シュートの体勢。

「アストロゲート…V2ツ!!」



俺は栗松にお構いなくアストロゲートを打ち込んだ。栗松は躲したが、立向居は反応出来ずにゴールを許してしまう。

Aチームが先制。なんとかアピールは出来たと思う。

Bチームからのボールで試合再開。Bチームは反撃を試みる。ボールは、不動に渡る。

「通すな、飛鷹！」

「う、うつす」

飛鷹が不動に向かって走っていく。

「お前ごとくじゃ……!!」

不動は走りながらのループシュート。飛鷹と円堂の頭を超えていく。

「しまった！」

だが、綱海の横つ飛びディフェンスで不動のシュートをクリア。ボールは場外に転がっていく。相変わらずの身体能力の高さよ。

対して飛鷹は、お世辞にも日本代表候補に選抜される実力がない様に見える。どうやらサッカーは無経験な様だが……何かあるのか？

Bチームのスローインで再開。ボールはすぐに豪炎寺に渡る。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺の渾身の必殺技が炸裂。

「正義の……鉄拳ッ!!」

対して円堂は正義の鉄拳を繰り出す。だが、爆熱ストームの方がやや勝り、ゴールにねじ込んだ。

Bチームが点を取り返したことで同点になる。Aチームにも火が付いて、試合再開後、すぐに基山が上がっていく。

「流星……ブレードッ!!」

立向居はまたもや反応出来ず、点を許してしまう。

2―1でAチームがリード。だが、Aチームの勢いは止まらない。

MFのシャドウが攻め上がるが、武方がボールを奪う。前線には、染岡と吹雪がいる。武方は染岡にパスを出す、ちやっかり目金弟がそれをインターセプト。目金弟は宇都宮に繋げる。ボールを受け取った宇都宮がそのまま攻め上がっていく。

「通しやしねえぞ!!」

土方がどつしりと構える。宇都宮は臆せず、誰もいないところにボールを蹴る。それとともに宇都宮は土方を抜き去り、蹴られたボールは宇都宮の足元に。

あれひとりワンツーじゃん。ぼっちの特技を会得しているとは。あいつ、まさかのぼっちか？

攻め上がる宇都宮。しかし、得点の要とも言える豪炎寺は厳しいマーク。

「豪炎寺さん！」

「行け！虎丸！」

すると宇都宮はシャドウにバックパス。それと同時に、前半終了のホイッスル。俺達のリードで前半を終えた。

疲れた俺はベンチで休む。

「八幡、飲め」

「…サンキュ」

八神からスポーツドリンクを渡される。俺は乾いた喉を潤すために、一気に飲み干す。

「いい活躍ではないか」

「…ま、それなりに目立たないとな」

普段のサッカーなら目立つ必要がないが、選考試合ともなれば話は別だ。小町達が応援に来てくれてるし、なんとしても日本代表にならねえと。自慢の兄だつて思つて欲しいしね、個人的に。

「……あれがお前に近づく女共か。……気に入らん」

「頼むから今は何もしないでくれ。あいつらがいるいないに関わらず、今違う意味で目

立ちたくはないからな」

「……仕方ない。だが、試合が終えたときは待っている。あの女共に、私達の間関係を見せつけてやる」

「……頼むからそれもやめてくれ」

八神のヤンデレに気が滅入る中、少し考え事をしていた。

まず飛鷹。素人なのに選考試合を選ばれる理由が見当たらない。あるとするなら、隠れた才能を持っている、とかだろう。

もう一つは宇都宮。飛鷹と違ってサッカーの実力は本物だ。それこそ、地上最強のメンバーに選ばれないのもおかしいほどに。でもまあ、それはいいとして。

さっきのバックパス。シュートチャンスだったはずなのに、シャドウに渡した。あれだけのサッカープレイヤーが、シュートを外すわけがない。止められるにしても、アピールしなきゃ選ばれない。

にも関わらず、あいつはシュートを打たなかった。何か、シュートを打つことができないう、打ちたくない理由でもあるのだろうか。

## 日本代表結成

日本代表選考試合もいよいよ後半戦。選手達は、代表に選ばれようと必死にアピールしている。

「まぼろしドリブル!」

栗松のドリブル技で吹雪を欺く。栗松から鬼道へ。鬼道から豪炎寺へと連続ダイレクトパス。ボールを受けた豪炎寺はシュート。

「ザ・ウオオール!」

豪炎寺のシュートを壁山が弾き、佐久間がそれを拾ってドリブルしていく。栗松を躲けて進んでいくが、

「旋風陣!!はああああッ!!」

木暮の旋風陣がそれを食い止める。木暮から宇都宮に渡り、宇都宮から風丸に渡る。

「行かせるか!」

綱海が風丸の前にディフェンスに入る。

「負けるかアッ!!」

風丸は自慢のスピードで綱海を抜き去る。そのスピードは、後から風が巻き起こり綱

海を吹き飛ばすほどだった。そのまま風丸はサイドからのカーブシュート。

それを円堂が横つ飛びキャッチ。

「へへっ、やるな！」

「次は決める！」

みんな、生き生きと楽しそうにプレーしている。代表選考とはいえ、みんなは笑顔だ。

Bチームは尚も攻め続ける。鬼道がボールを持ち込み、豪炎寺がゴールへと走っていく。

「壁山、土方！豪炎寺をマークだ！」

円堂の指示で壁山と土方がマークに着く。だが、それが鬼道の作戦だった。豪炎寺を囷に使って、ノーマークの宇都宮に繋げる。

宇都宮に向かって綱海のスライディング。宇都宮は体勢を崩されてしまうが、その体勢のままサイドから上がってきていた緑川に。

「アストロ……ブレイクツ!!」

飛鷹はアストロブレイクを止めようとするも吹き飛ばされてしまい、そのままゴールに突き刺さる。

2-2。白熱した試合だと言っても過言ではないだろう。

Bチームは点を取ったことで勢いに乗る。試合再開後、すぐにボールを奪われて攻撃

される。

ボールは鬼道がキープしていく。

「行かせねえッ！」

俺は鬼道からボールを奪いに行く。

「イリユージュオンボール！」

鬼道の華麗な技で突破されてしまう。そのままシャドウへとセンタリング。

「ダーク……トルネードッ!!」

ファイアトルネードの黒色バージョン、ダークトルネードが円堂に襲いかかる。

しかし再び、飛鷹がシュートブロックに挑戦。

「クソッ！今度こそオッ!!」

飛鷹は思い切り足を振り上げる。すると、振り上げられた足から風が巻き起こり、

ダークトルネードを包み込んで失速させた。

「えっ?」

円堂は勢いが無くなるダークトルネードをキャッチ。追加点を許さない。

「……シュートが失速したのか」

当の本人が一番動揺しているけれど。一体、あのデフェンスはなんなんだろうか。

そんな謎はとりあえず捨て置き、試合に集中する。AもBも互いに譲らない。試合は

終盤に差し掛かり、次の一点が試合を決めるだろう。

「みんな！最後まで全力だ！悔いを残すな！力を出しきれッ!!」

円堂から綱海にボールが渡る。

「うおおおオオツ!! ツナミブーストッ!!」

綱海の必殺超ロングシュートがBチームのゴールに飛んでいく。

「みんな！なんとしても通すな!」

風丸、栗松、木暮の三人が身を挺してのディフェンスでツナミブーストをブロック。

弾かれたボールは基山が拾う。

「吹雪くん!」

基山から吹雪へのラストパス。

「ウルフレジエンド!! うおおおオオオツ!!」

吹雪の必殺技、ウルフレジエンドが炸裂。

「ムゲン・ザ・ハンドッ!!」

立向居はウルフレジエンドに対して食らいつく。だが、吹雪の方が勝っており、ムゲン・ザ・ハンドを破って点を追加した。

3-2。ついに勝ち越した。

そして、試合終了のホイッスルが鳴り響く。俺は試合の消耗が激しく、その場で屁垂



れ込んだ。

「……疲れた……」

人事は尽くした。後は、天命を待つだけだ。

しばらくして、俺達は整列し始めた。すると、響木監督の隣にもう一人、男性がいた。「選考通過者を発表する前に、日本代表の監督を紹介しよう」

あ、響木監督が日本代表の監督じゃないのね。隣の男性は、淡々と紹介を始めた。「私が監督の久遠道也だ。よろしく頼む」

円堂は、響木監督に尋ねる。

「どうして、響木監督じゃないんですか？」

「……久遠なら、お前達を今まで以上に力を引き出してくれる。そう判断したからだ」  
円堂の問いに、響木監督はそう答えた。

「では、代表メンバーを発表する」

久遠監督は、手元のバインダーを見ながら日本代表に選抜された者の名を挙げていく。

「鬼道有人」

「……はい！」

「豪炎寺修也」

「はいー！」

エースストライカー的存在と、チームの司令塔の二人がまず挙げられる。まあ、当然だわな。

「基山ヒロト、吹雪士郎」

ジェネシスを率いたストライカーと、攻守が優れたオールラウンダー、基山と吹雪。

「風丸一郎太、木暮夕弥、綱海条介」

スピード自慢の風丸に、身体能力が高い木暮と綱海。

「土方雷電、立向居勇氣、緑川リュウジ」

沖繩から来た豪快な守備を見せる土方に、円堂に引けを取らない立向居。そして、セ

カンドランクだったとはいえ選考試合でも活躍した緑川。

「不動明王、比企谷八幡」

「は、はいー！」

良かった……ここで囁んだら晒し者もいいところだ。俺と共に、孤高のMF、不動が呼ばれる。

「宇都宮虎丸、飛鷹征矢」

謎の天才プレーヤーの宇都宮と、謎の風を巻き起こした飛鷹も抜擢される。

「壁山塀吾郎、栗松鉄平」

雷門の砦となっている壁山に、ムードメーカーの栗松。

今で16人。17人を選ぶって言うていたから、最後は勿論。

「円堂守」

「はいっ!!」

「以上、17名だ」

……このメンバーで、世界を相手に戦うのか。ただの一般生徒の俺が、気付けば日本代表に選ばれているなんて、何そのスケールのデカイストーリー。

「いいか。今日からお前達は、日本代表イナズマジャパンだ。代表に選ばれた者は、選ばれなかった者の思いを背負うのだ」

「はい!!」

そう言つて、響木監督は去っていく。

「いいか。世界への道は険しいぞ。覚悟しておけ」

「はい!!」

今日から俺は、イナズマジャパンのメンバー。続いては、練習の際の説明を受けた。どうやら雷門中には一人一人の部屋を設けており、合宿をするとのこと。

今日はとりあえず家帰つて、荷物を纏めてまた雷門に来ることになる。

解散となり、観客席にいた小町達がこちらに来る。

「お兄ちゃんおめでどう！」

「おう。まあ、なんとかあったわ」

「絶対みんなで応援に行くからね、ヒッキー！」

「……ああ」

すると、こちらに葉山グループが歩いてくる。葉山は、いつもの様に変わず笑みを浮かべる。

「おめでどう。君は、総武中の代表だよ」

「ヒキオ！日本代表に選ばれてんだから、絶対優勝しろし！負けたりしたら承知しないから！」

「……おう」

葉山グループに応援されるなんて、この先一生ないだろうな。まあ二度もいらんけど。

「比企谷。世界を相手に、暴れてこいよ」

「お姉さんも、応援はしてあげるからね」

「私も、比企谷くんを応援してるから。頑張つてね〜」

平塚先生は拳を突き出して俺を鼓舞する。なんてカッコいいんだあんたは。

しかし反対に、大魔王の応援とか怖すぎてヤバイ。試合中で下手すりや殺されるか

も。

だが、それを相殺するめぐり先輩のマイナスイオン。

「せんぱいの活躍は、しつかり見てあげますからね！」

「うん！八幡が活躍するところ、早く見たいなあ」

「よし任せろなんなら今からリフティング1000回くらい見せてやる」

「……バカじゃないの、本当」

戸塚のためなら俺は活躍してやる。なんなら豪炎寺よりも得点を取るレベルで。

「……比企谷くん」

「……どうした、雪ノ下」

「……日本代表になっていいるのだから、みつともない真似はしないことね」

「……ま、大丈夫だろ」

「……そう。……頑張つて」

俺は雪ノ下の言葉に小さく頷く。これだけの人間が応援してくれている。雪ノ下の言う通り、みつともない真似は……。

「八幡」

……ヤバイ。大魔王よりある意味厄介なやつがいたんだったわ。どうしよう。

「八幡。聞こえているだろう？まさか私を無視する気か？」

「……なんだよ。ちゃんと言っているよどうしたんだよ」

「…さっさとこちらに來い。…お前達も、私の愛人に近寄るな」

はい爆弾発言ありがとうございました。由比ヶ浜は分かりやすく、動揺する。

「あ、ああ、あ、愛人!?!ひ、ヒツキー、どういうこと!?!」

「言葉通りだ。こいつは私だけのモノ。お前達に入る余地はない。これからは、私がこいつの世話をする。私だけが、八幡の隣にすることを許される」

「…妄言も程々にしておくことね。比企谷くんが、本当に貴女のことを好いているとでもっ。」

「当たり前前だ。なあ、八幡。私とお前は相思相愛。切っても切れない関係だろう? 昨日だって、私と濃密な時間を過ごしたじゃないか」

「濃密な時間って……!ま、まさかせんばい……ヤっちゃったんですか!?!」

「いや何もしてないから。家に泊まりに來ただけだから」

なんなんだこのカオスな展開は。頼むから休ませてくれないかな。こちらら選考試合終わって疲れてるんだから。

俺は荷物を纏めて雷門に來るために、一度千葉に歸ることにした。

因みに。千葉に歸る時、八神と総武中の一部の人間が敵意をぶつけ合い、気が滅入りました。まる。

## 暗雲

「……ふあ……あ」

俺は目を擦りながら起き上がる。窓を開けて見渡すと、土のグラウンドが見える。

「……よく寝たわ」

ここは雷門中。日本代表イナズマジャパンに選ばれた者は、雷門中の合宿所で寝泊りすることになった。

俺は洗面所に行つて顔を洗い、歯を磨く。一通りの準備をし終えた後、イナズマジャパンのジャージを羽織る。グラウンドに向かう途中で、思わぬ人物に遭遇する。

「遅いわよ、比企谷くん」

「………なんでお前いるの?」

俺の前には、総武中のジャージを着た雪ノ下雪乃がいた。

いや、マジでなんでいるし。

「朝早く雷門中に来たからだけれど?」

「違う。whyだwhy。来た理由を聞いてんだ」

「ああ……。昨日、実は……」

雪ノ下は、ここにいる経緯を語り始める。

—————

「ねえねえ。このままで本当にいいのかな？」

「？何の話かしら？」

「だから、さっきの女の子のこと。ヒツキーのことすつごく好きな様だけどき、多分日本代表のマネージャーになると思うの」

「そう言えばあの人言っていましたね。せんぱいのお世話をするのは私とかどうとか」

比企谷くと別れた私達は、三人で集まって話し合っていた。あの女、八神玲奈は比企谷くんを異常なまでに好いている。彼からは、彼女の様な人がいるだなんて話は一度たりとも聞いていない。

「……私さ、何も出来ないのが悔しくて。多分マネージャーになっても、みんなに迷惑かけちゃうだろうし。いろはちゃんはサッカー部のマネージャーだし、ゆきのんは何でも出来るよね」

「……結衣先輩……」

「……でも一番悔しいのは、何も出来ないままヒツキーをあの子に取られることなの。」



何も出来ない……だけど、私はヒツキーを近くで応援したい。ヒツキーに”お疲れ様”って言ってあげたい。その役目だけは、誰にも譲りたくない”

彼女は淡々と話していく。これを話すために、きつとそれ相応の覚悟を決めたのだらう。

「……二人はどう？」

「……確かに、結衣先輩の言う通りですよ。ぽつと出の女に、せんぱいを取られるのつて、なんか気に入りませんよね」

「……ゆきのんは？」

由比ヶ浜さんが、私に尋ねる。彼女は、真剣な眼差しをしていた。

……私としても、比企谷くんのプレーを近くで見たい。

それだけではない。近くで彼を応援したい。彼の近くにいたい。彼の隣に立っていたい。

八神さんとかいう女に、いきなり比企谷くんを連れて行かれては困る。比企谷くんは、貴女のモノじゃない。

彼は、奉仕部の人間だ。

彼は確かにイナズマジパンのメンバー。けれどそれ以前に、彼は奉仕部の人間なの。だから、彼をここから逃しはしない。あのような女に、連れて行かれるわけにはい

かない。

「……そうね。彼に一方的な愛を捧げているだけで満足しているあの女に、連れて行かれるわけにはいかないわね」

「でもどうするんですか？流石に三人もマネージャー行つたんじゃ……人数制限もあるでしょうし」

「うん。だからさつき、あらかじめあつちに電話したの。じゃあ、後一人はマネージャーがいてもいいって言つてた。ということ、この中から一人、イナズマジャパンのマネージャーになることができるの」

この中から一人。比企谷くんの、イナズマジャパンのマネージャーになることが出来る。

しかし、由比ヶ浜さんの行動の早さには恐れ入る。妙なところで頭は回るんだから……。

「どうやって決めます？」

「……どうしよう？」

「そこは考えてなかつたんですね……」

最後の最後で抜けている彼女。そこは変わらない。

とはいえ、どうやって決めましょうか……。

「まあ、無難にジャンケンとかでいいんじゃないんですか？恨みっこなしってことで」  
一色さんがそう提案する。確かに、ジャンケンならば手っ取り早く、かつ公平に勝敗を決めることが出来る。

「…そうしましょう。明日から練習らしいし、早いところ決めておく必要はあるわね」  
「そうだね。じゃあ、恨みっこなしだからね？じゃーんけーん……」

—————

「……というところで、ジャンケンで勝った私が来たということなの。分かったかしら？」  
「…そうか」

ジャンケンでマネージャーを希望するとは思わなかったわ。しかも、希望理由が、俺の矯正が残っているからとは。

ここまで来てまだ俺の依頼かよ。ていうか、もうぼっちじゃなくね？サッカーしてるんだし。

「じゃあ、早く行きましょう。もうグラウンドに集まっている人もいるんだから」  
「へいよ」

俺はグラウンドに向かう。もうみんなストレッチを始めていた。俺も合流し、スト

レッチを始めるが。

「なんだ貴様。まだ私の八幡に何かしようとしているのか」

「私はただ、イナズマジヤパンのマネージャーになるために来たの。貴女と違って、自己中心的な理由で来たわけではないことを理解して欲しいわね」

ほーら。雪ノ下にせよ由比ヶ浜にせよ、誰かがマネージャーになったら確実に八神に敵視される。怖いよう、小町い。

そんな彼女達にビクビクしながらストレッチをしていると、

「お、遅れてすいませーん！」

エナメルバッグを肩から掛けた宇都宮が息を切らしながらやってきた。そういえばあの子、実家通いだっただね。

「おはよう！虎丸！」

「お、おはようございます！な、なんか、信号という信号が、全部赤になってて……」

「だから無理して家から通わなくても、ここで泊まればいいのに……」

「ここのご飯、すつごく美味しいですよ？」

壁山、お前はどこに惹かれているんだ。

「…でも俺、自分の部屋じゃないと眠れないもので……」

「え？そうなのか？」

「は、はい……」

なんだそれ可愛いなお前。

「大方、ママに子守唄でも歌ってもらってんじやねエのか？」

宇都宮に対して、不動は嘲笑うかの様に嫌味を眩く。

「……ま、別に家が好きな人とかいるだろ。なんなら妹に子守唄を歌ってもらったら俺は爆睡できるな。それか戸塚」

「……相変わらずの妹好きね……」

「……気持ち悪い」

あの、皆さん？冗談だよ？冗談だからそんな冷めた目で見ないで？

そんなやり取りをしていると、久遠監督と隣に女の子が歩いてやってくる。俺達は集まった。

「お前達も顔を知っているだろうが、改めて紹介しておく。娘の冬花だ。マネージャーとして参加させる」

「久遠冬花です。私、マネージャーの仕事なんてやったことないから、上手く出来るかどうか分からないけど……」

「大丈夫だつて！分かんないことがあつたら、なんでも俺に聞いてくれ！」

君選手でしょうよ。なんでマネージャーの仕事まで教えちゃうんだよ。

「ありがとう、守くん」

「思い出したのか!? そうそう! そんな感じで昔、俺のことを守くんって呼んでたんだぜ?」

「…ずっと前のことはよく分からないけど……こっちの方が呼びやすいから、守くんってことにしたの」

なんだろう。

円堂がなんだか哀れに見える。

「そして、こちらの二人も今日からマネージャーとして参加することになった。挨拶を」

「……私のことを知っているだろうと思うが、八神玲名だ」

「…まさか、ウルビダがマネージャーとして参加するなんてね……」

「本格的に逃げられなくなったね、八幡」

基山も緑川も他人事だからそんな楽しそうなんだろうが、一度俺と入れ替わってみ?

怖いから。

「…雪ノ下雪乃よ。私も、今日からイナズマジャパンのマネージャーとして参加させていただくわ」

「あれって比企谷さんの学校にいた人っスよね?」

「なんだなんだ? 比企谷あんな綺麗な彼女いんのか?」

「気のせいだ。久遠監督そろそろ練習始めましょうさつきと練習しましょう今練習しましょう」

これ以上あらぬことを言われるとメンタルが保たない。頼むから少し黙っててくれ。久遠監督は一度咳払いをし、改めて話を始めた。

「これからアジア予選の練習を行う前に、一つお前達に言っておくことがある。はつきり言おう。今のお前達では、世界に通用しない」

久遠監督の言葉に、少なからず驚きや困惑の表情を浮かべる者達がいた。しかし、随分はつきり言ったな。地上最強メンバーですら、世界レベルに達してないのかよ。

「なんだその顔は？まさか自分達が世界レベルだと思っていたわけではあるまいな？お前達の力など世界に比べれば、吹けば飛ぶ紙切れの様なものだ」

こういうのはつきり言うところは、雪ノ下と共通している。最も、雪ノ下の方がメンタルに刺さる一言も混じるから、それに比べれば久遠監督はまだ優しい、のか？

知らんけど。

「私は、そんなお前達を一から鍛え直す様に頼まれた。中には私のやり方に不満を持つ者もいるだろう。だが口答えは一切許さん。お前達は、私の言うことを実行することだけ考えていればいい。特に鬼道、吹雪、豪炎寺、そして円堂」

久遠監督はその4人の名を挙げる。

「私はお前達をレギュラーだとは全く考えていない。試合に出たければ、死ぬ気でレギュラーを勝ち取ってみせろ」

監督の評価上げなきゃならないのね。何それパワプロ？いつの間にかサクセスやることになったの？

俺達は、そんな不安や困惑を抱きながら日本代表としての初練習を始めることになった。しばらく、いつも通りの練習を続けていると。

「ストップだ！」

久遠監督からストップの指示がかかる。久遠監督はまず、壁山へと視線を向けた。

「壁山！どうしてもっと前に出ない！突っ立っているだけがDFか！守ることしか考えていないDFなど、私のチームに必要な。それから風丸！」

壁山の次に、風丸。

「何故土方にパスを出した」

「な、何故って……」

「鬼道が言ったからか？お前は鬼道の指示がなければ、満足にプレーも出来ないのか！」  
確かに先程、風丸はドリブルの際に三人に囲まれて中々抜け出せずにいた。だから鬼道の指示で土方にパスを出した。

……サッカーの細かいルールとか、自分でこうした方がいいとかはまだ理解出来てい



ないけど、さっきの指示が最善だったからパスを出したのではないか。

そんな久遠監督の厳しい指示の下、練習が再開した。そして夕方に、一日の練習が終える。

「……疲れた……」

「ほら、比企谷くん」

雪ノ下からスポーツドリンクのボトルを受け取る。

「ああ、悪いな……」

「ちよつと待て八幡。お前はこの女の子の水を飲むというのか」

「……別にいいだろ。どうせ中身変わらんのだし」

「ダメだ。お前の世話は私がする。……雪ノ下、とか言っただけか？これからは八幡に近づくな。貴様は他の選手に目を配っていればいい」

「どうして貴女にそこまで言われる必要があるのかしら？貴女こそ、一方的な好意をぶつけているだけで、相思相愛だと思いがっているのではなくて？」

また始まった。この構図、まるで三浦との論争だ。俺はもう疲れたので、彼女達を放って合宿所に戻っていく。

シャワーを浴びて、俺はすぐさま自室に向かう。部屋に着いた途端に、俺はベッドで寝転ぶ。

「……マジしんど……」

夜飯も食う気にならない。

俺は目を瞑り、意識を手放した。

—————

翌日。

久遠監督の指導の下、厳しい練習が始まる。久遠監督の言い方は厳しいが、裏を返せば足りないところをきちんと言ってくれる。中途半端に肯定したりしては成長にならない。

そういう意図があるのだと思いたい。

現在、ボールは風丸に渡る。すると、風丸に向かって突っ込んでいく人物が。風丸を後ろからスライディングし、ボールを奪取する。その人物は、不動明王だった。

「不動！今のはわざと後ろから……」

「いいぞ、不動。ナイスチャージだ」

「ごめんちよつともう監督の考えが分からなくなってきた。」

前から奪って評価するならまだ分かる。だが、後ろからスライディングはファウル同

然のプレーだ。それを評価するとは……。

そんな独りよがりのプレーに、緑川も影響されてしまう。綱海からパスの指示があるのにも関わらず、それを無視して一人で攻め上がっていく。

きつと少なからず、久遠監督の考えに不満などがあるのだろう。例え納得しても、監督は実力主義者。レギュラーを勝ち取るために、不動の様なプレーに走ったのだろう。

俺はある一つの疑問が浮かび、練習が終えてシャワーを浴びた後、食堂にいる音無に話しかけた。

「音無、ちよつといいか？」

「はい？なんですか？」

「お前、確かパソコン持ってただろ。ちよつと貸してくれねえか？」

「あ、はい。別に構いませんけど……」

俺は音無からパソコンを借りて、電源を点け始めた。

「何を調べるんですか？」

「ちよつと気になることがあってな」

俺は「久遠道也」と検索する。だが、久遠監督の情報は一切出てこない。

「……出てこない、か」

「……なんか、変じゃないですか？」

「ああ……」

俺が調べたかったのは、久遠監督の過去の実績や指導についての評価などだった。日本代表の監督に抜擢されるくらいだから、それ相応の指導力を持った監督だと思ったのだが。

「……響木監督は、なんで無名の人を代表監督に抜擢したんだ……」

「……よし！比企谷先輩、私に任せてください！」

「いや、任せろも何も、情報が出てこないんだぞ」

「大丈夫です！」

音無は自信満々な顔でそう嘆願するが……。なんだろう。なんだか不安だわ。何もやらかしたりしないよね？

## 練習禁止

翌日。一日の練習が終わり、宇都宮、飛鷹、不動を除いた俺達は音無に招集を受け、食堂に集まった。

「それで、一体どうしたんだ？音無」

「久遠監督のことで、少しお話しがありました……」

「久遠監督のこと？」

「はい。昨日、比企谷先輩とネットで久遠監督のことを調べたんですけど……該当無しってなっています」

「……変ね。日本代表の監督に選ばれるくらいなのだから、何かしら掲載されていてもおかしくはないはず……」

「それで今日、目金さんとサッカー協会に忍び込んだんですけど……」

「ちよつと待て全然安心できないんだけど。何さらつととんでもないことを言っているの？何お前、スパイか？」

「……それで、サッカー協会で見つけたの？」

「はい。実は久遠監督、10年前まで桜咲木中の監督をしていたんです。桜咲木中はそ

の年のFFを大差で勝ち進んだ強豪校なんです。でも、決勝戦になって久遠監督が事件を起こしてチームは棄権……」

しかし、一つ解せないことがある。それが事実なら、尚更記事にされていてもおかしくない。大事にしたくないあまり、金でも握らして事を済ましたのか？

「…詳しくは、記述が無くて分からなかったんですけど……。後、桜咲中の監督に関する情報を調べていたら、変な噂が流れていたんです。……久遠道也は、”呪われた監督”だつて」

呪われた監督、な……。まあ流れからすると、久遠監督がいるせいで試合に負ける、あるいは試合に出れなくなる、とかなんだろうけど。

10年前に何があつたのか……。

—————

いよいよ今日はFFIアジア予選の組み合わせ抽選会の日。1日の練習を終えた俺達は、テレビを点けてその模様を見ていた。

「FFIは5つのエリアに分けて予選を行い、各エリアの優勝チームがFFI本戦の場、ライオコット島に集結します。アジア予選は日本を含め、8カ国が参加しています」

まず最初に壇上に上がったのは、韓国代表ファイアードラゴン。解説者曰く、アジア最強との呼び声が高いとのこと。

「ファイアードラゴン。3―A」

3―Aの空白の部分に、韓国代表の文字が表記される。韓国に続いて壇上に上がったのは、オーストラリア代表ビッグウェイブス。韓国と並ぶ強豪チーム。

「ビッグウェイブス。1―B」

ビッグウェイブスは1―B。続いてカタール代表、サウジアラビア代表と抽選を始める。

そして次は、日本代表の抽選。相手はどこになるのだろうか。

「イナズマジヤパン。1―A」

「決まりました！イナズマジヤパン、FFIアジア予選一回戦の対戦相手はオーストラリア代表ビッグウェイブスとなりました！これは熱い試合が期待されます！」

いきなり優勝候補とはな……。

だが、決まった以上は自分の役割を果たすだけだ。

「よし！みんな、オーストラリア戦に向けて、明日からも特訓だ!!」

「おお!!」

明日からより一層厳しい練習が始まる。とつと寝て身体を休めよう。

……と、思っていた時期がありました。

「練習禁止か……」

久遠監督の指示で、俺達はオーストラリア戦までの二日間、合宿所から出ることを禁じられた。部屋の行き来は勝手だが、外には一歩たりとも出るなどのこと。

久遠監督が優れた指導者なら、これがオーストラリア戦に向けての唯一の特訓だと言えるだろう。だがもしチームを潰す気なら、これは最適な潰し方だろう。

なんせ、グラウンドでサッカーが出来ないのだ。チームプレーなんて出来るわけがない。ベッドで寝転んでいると、俺の部屋にノック音が。

「私だ。入るぞ」

ガラガラと引き戸を開けたのは八神だった。八神は俺のベッドに腰掛ける。

「比企谷くん。失礼するわね」

続いて雪ノ下が入ってくる。その途端、八神は雪ノ下に向けて敵意を向ける。

「…貴様、何の用だ。私と八幡の部屋に踏み込んでくるな」

「別に貴女の部屋でもないでしょう？……比企谷くんはどう思う？久遠監督の指示」



「……単にチームを潰す気が、オーストラリア戦に向けて何かを伝えたいのか……」  
とはいえ、二日間もサッカーしなけりや少しは鈍る。けれど外には出れない。

「比企谷先輩、いますかー?」

俺の部屋に、音無がやってくる。

今日は来客が多いな本当。

「どうした?」

「比企谷先輩に用があるって人が……今食堂で待たせているので、来てください」

俺に用……? 小町か由比ヶ浜辺りでも来てくれたのか? そう思い、食堂に向かうと。

「あ、エイト」

「……お前らかよ」

食堂にいたのは、エイリア学園ダイヤモンドダストのクララとアイシー、そしてプロ  
ミネンスのレアンが来ていた。

「貴様ら……一体何しに来た」

「何って、陣中見舞いみたいなものよ。それよりエイト! 私と勝負よ!」

「来て早々に勝負仕掛けないでよ……」

エイリア石があるうがなかうが、こいつらは相変わらずの様だな。

「……そういえば、なんで今日は練習してないの? おやすみ?」

「ああ……実は……」

俺は事の顛末を簡潔に述べた。

「練習禁止って……その監督大丈夫なわけ？」

「オーストラリア戦まで二日でしょ？練習しなくていいの？」

「……さあな」

決まったことを後から言っても仕方がない。これからどうするか。それを考えなければならぬ。

すると、クララが何かを思い出し、それを俺に聞き始めた。

「あ、そうだ。エイト、ガゼルとバーンがどこに行つたか知らない？」

「ガゼルとバーン？いや、知らんけど……」

「ここ最近、ガゼルとバーンがどっかに行つちやつて。それだけじゃなくて、デザイナーとか一部のエイリア学園の選手もいなくなつちやつて」

「……なんじゃそりゃ」

エイリア学園の人間が突如失踪か……。変な事件に巻き込まれてなければいいが。

「まあ、あいつらなら大丈夫でしょ」

「……だといいいけど」

「それより！二日後のオーストラリア戦、しつかり頑張りなさいよね。試合に出てない

とかだつたら、貴方を燃やし尽くしてやるわ」

「それ監督に言つてくれ」

彼女達は少しすると、去つていく。彼女達なりの応援を残して。

「……比企谷くんには、沢山の女性が応援してくれるのね。あれだけ自分をぼつちだとか言つていたわりには」

「……まあ、あれは成り行きで……」

「……別に、言い訳なんてしなくていいのよ？ 貴方がどんな人脈を持つとうが私には関係ないことなのだから。けれど、女性に現を抜かして下手なプレーをすれば、貴方の居場所はないと思ひなさい」

おっと、雪ノ下様がどうやらお怒りの様です。ああおそろしやおそろしや。

俺はとりあえず部屋に戻り、何をするかを考えていた。最初は受験勉強でもしようかと思つていたが、たった二日しかない中で勉強してもあまり意味がない。コツコツとやることに意味がある。

結局何もせずに、何をするのか考えているとお昼時になる。再び食堂に向かい、昼飯を食べることにした。

「あーあ……練習したい……」

「俺もっス！ 練習しないから、食欲が沸かないっス！」

いや壁山、既に君俺の倍以上食べてるよね。どうなってんだこいつは。カービイか己は。

「みなさーん!!」

そんな中、目金が急いで食堂に駆け込んできた。右手には、見せびらかす様にディスクを持っていた。

「オーストラリア代表の情報を入手しましたーっ!!」

マジか。他国の選手の情報なんて、そう簡単に手に入らんだろ。どつから仕入れたんだよ。

目金はディスクをDVDデッキに入れて、モニターの電源を点ける。モニターに映るのは、ストレッチを始めている選手達。こいつらが、ビッグウェイブス…。

「どんなプレーをするんだ……?」

キックオフはビッグウェイブスからだ。ホイッスルが鳴り、図体のデカイFWがパスをしたところで画面が切り替わる。

そこに映っていたのは、ビッグウェイブスの試合状況ではなく、ビッグウェイブスが海で遊んでいる様子だった。

「め、目金……なんだ、これ?」

「流石に国と国との試合……代表チームの情報を手に入れることは難しくなっていま

す。ですがこの目金！それで諦める男ではありません！プレーは無理でも、海で遊ぶシーンを手に入れてきましたっ！」

諦めない結果がこれかよ。むしろ諦めろよ。何で諦めないんだそこで。

「……見る意味ねエじゃん」

「……それって役立たず……？」

久遠さん、それオーバーキルや。大人しそうな雰囲気なのになんてこと言ってんだ。目金が落ち込んでるのを傍らに、雪ノ下がビッグウェイブスの情報について話し始めた。

「……ビッグウェイブスは、海の男と呼ばれているそうよ」

「海の男？」

沖繩きつてのサーファー、綱海がいち早く反応する。

「彼らはサッカーだけでなく、マリンスポーツに触れることで、精神力と身体能力を鍛えているの。そしてこれがビッグウェイブスの特徴なのだけれど……彼らは特に守備が手強く、相手の攻撃を完全に封じる戦術もあるそうよ」

「……つてことは、その守備による戦術を崩すことが勝利の鍵となりそうだな」

「ええ。そうなるわね」

流石ユキペディア。で、その情報のソースはどこなんだよ。

「うー!!聞いてたら益々練習したくなってきた!!」

円堂は外でサッカーをしようと試みるが、一瞬で蹴散らされた。俺達は、結局部屋に戻ることになる。

「……外で練習すんなつつつてもな……」

俺はしばらく考えていた。相手の攻撃を完全に封じる戦術を、どう破るか。やはり、突破力やキープ力が必要不可欠になる。そんな時に外で練習するなつてのは…。

「……………あ」

……もしかすれば、俺達は思い違いをしていたのかも知れない。確かに、久遠監督から外出禁止と言い渡された。現に、外には出られないし、外で練習は出来ない。

そう。それが外ならばの話だ。中で練習すんなどは言っていない。

復習しよう。問題は問題にしない限り問題にはならない。つまり、中での練習も問題にはならない。

そう考えた俺は、ウォーミングアップで部屋の中でリフティングを始める。リフティングくらいならば、部屋の中でも出来る。

「……………まさかな」

それを気づかせるために練習禁止をしたのならば、流星に遠回しにも程がある。杞憂

だったな。

しばらくリフティングしていると、八神が部屋に入ってくる。

「…何をしているのだ？」

「見りゃ分かるだろ。練習だ。あの監督は外出禁止しか言っていない。けど部屋の中で練習禁止なんて誰も言っていないだろ？」

「……確かに。言われてみれば、そうだな」

俺はリフティングを止める。

「…八神。今からドリブルの練習するんだが、お前が嫌じゃないならちよつと相手になつてくれ」

「……いいだろう。私も、久々にサッカーをしたくなつたしな。それに、八幡に頼まれたなら聞かないわけにはいかない」

俺はサッカーボールを持って、廊下に出る。廊下の幅の広さなら、一人一人を躲すこともできるし、逆に狭いところでの練習は却つて経験になる。

俺は八神を相手に、ドリブルの練習を始めた。ハイソルジャー云々の力が失つたとはいえ、八神は強力なプレーヤーだ。練習相手として、うつつけである。

ドリブル音に気付いたのか、みんなが部屋からぞろぞろと出てくる。サッカー好きの円堂が真っ先に聞いてきた。

「比企谷！なんで練習してるんだよ！」

「なんでって……流石に二日も練習しなきゃ鈍るだろ」

「で、でも練習禁止って……」

「それは語弊があるな。監督は練習禁止とは言っていない。外出禁止とは言っていない。外に出禁禁止とは言っていない。ど」

「た、確かに……」

俺の言葉に、みんなは納得し始める。

「外出禁止になれば練習が出来ない。だからいつの間にか、練習禁止って思い込んでいただけだ。けど、実際は外出禁止なだけ。中で練習するなどは一言も言っていない。チームプレーは出来なくても、個人プレーくらいは鍛えることは出来る」

「……でも意外ね。比企谷くんが自分から練習するなんて。いつもなら、面倒くさいとか言ってるさ」

雪ノ下が少し拍子抜けした様な顔をしてそう言った。

「……まあ一概に間違いではない。けど、小町や由比ヶ浜達に応援されたんだ……アジア予選の一回戦で躓いてられるかよ」

「……比企谷くん……」

そう。こんな俺を、嫌な顔一つ見せずに送り出してくれた小町や由比ヶ浜、それに総



武中の連中の期待を裏切りたくはない。いつもならば、勝手な期待に困っていたところだが、今回はそんなことも言っていられない。

「……獲るんだろ？世界」

「…ああ!!みんな、目指すは世界一だ!!アジア予選で躓いちやいられない!!優勝しようぜ!!」

「おお!!」

円堂の一言で、みんなが活気付く。みんなは部屋に戻り、それぞれが今出来ることを果たしていた。

因みに、さっきの俺のセリフ。後々から思い出して、恥ずかし過ぎて死にたくなかったのはここだけの秘密。

合宿所の中で二日間、オーストラリア戦に向けての練習を続けた。

なんとか、アジア予選で躓かないようにしないとな。

## V S ビッグウエイブス

今日はF F I アジア予選一回戦の日。対戦相手はオーストラリア代表ビッグウエイブス。場所はF F スタジアムで行われることになる。

開会式も済ませて、俺達は試合の準備に入る。そんな中、久遠監督が今回のスターティングメンバーを発表した。

F W は、豪炎寺、吹雪、基山。M F は鬼道、緑川、俺。D F は壁山、土方、木暮、綱海。G K は円堂。

「八幡、頑張るんだぞ。活躍したら褒美をやるからな」

「その褒美は褒美じゃないだろ」

むしろそれ八神に対する褒美になっちゃうから。

「……頑張つて」

「……ああ」

間も無く試合が始まる。俺達は位置につく。

そして今、試合開始のホイッスルが高らかに鳴り響く。まず、ボールは鬼道に渡り、F W 陣は前線へ攻め上がっていく。

鬼道も共に攻め上がっていくと、ビッグウェイブはいきなり仕掛けた。四人が一瞬にして、鬼道を囲む。

鬼道に対して、続け様に足を伸ばす。にも関わらず、陣形が全く崩れない。

攻撃を封じる戦術……まさかあれが。

「フツ……ボックスロック・デイフェンス！」

鬼道はボールをキープしようとするが思うようにキープができない。そして、ドルフィンの足が鬼道のボールを弾く。

弾かれたボールは、FWのジョーンズが拾う。そのままジョーンズは一気に攻め上がって、シュートの体勢。

「メガロドンッ!!」

サメの一種であるメガロドンと共に放たれる必殺シュート。円堂は、正義の鉄拳の構えに入る。

「正義の……鉄拳ッ!!うおおおオオッ!!」

メガロドン vs 正義の鉄拳。

正義の鉄拳が徐々に押され始め、ついには打ち破られてゴールに入れられてしまう。先制はビッグウェイブとなる。

「……これが世界レベル……」

紙切れの意味を実感した。こんなに早く点を取られるとはな。それも全て、向こうのボックスロック・デイフェンスからの速攻があったから。

「凄いな！こんな強い相手と試合出来るなんて、燃えてきたぜ！」

強い相手ほど燃える……流石は円堂。あいつの闘志が、今までどれだけの人間を奮い立たせてきたか。

俺達の反撃が開始する。ボールは豪炎寺に渡り、豪炎寺は攻め上がっていく。しかし。

「ボックスロック・デイフェンス！」

鬼道の次は豪炎寺がボックスロック・デイフェンスに嵌められる。豪炎寺は鬼道と同様に、あの陣形の中でキープしようとするが思うようにいかない。

そう考えた豪炎寺は上に飛び上がる。だが、それを読んでいたドルフィンもジャンプをして豪炎寺からボールを奪う。

奪ったドルフィンは攻め上がる。だが、さつきと違いメガロドンを放つジョーンズを壁山と土方の二人がかりでマーク。

「ふっ！」

すると、ドルフィンはジョーンズとは反対側にパス。そこに、もう一人のFWリーフが走り込んで、シュート。

「たあッ!!」

だが、これは円堂がしつかり止める。

次に、ボールは吹雪に渡る。だが、またしても。

「ボックスロック・デیفエンス!」

今度は吹雪がボックスロック・デیفエンスの餌食に。ビッグウェイブスは、このボックスロック・デیفエンスでボールを奪い、怒涛の攻撃で点を奪いに来る。

円堂がなんとかボールを弾き、コーナーキックとなる。その時間を使って、俺はボックスロックのことを尋ねた。

「豪炎寺、吹雪。ちょっと聞いていいか?」

「どうした?」

「ボックスロックに囲まれたとき、どんな感じがした?例えば、動きにくいとか」

「どんな感じ、か……。そうだな……。なんて言うんだろう。まるで箱の中に閉じ込められた様な息苦しさだった」

箱の中に閉じ込められた……。ボックスロックとは、箱を閉じるという意味として捉えることができる。さっきの陣形を見る限りと、吹雪の感想を重ねると、狭いスペースでボールをキープしなければならぬ。

狭いスペース……………。

「……まさか」

「…何か分かったのか?」

「外出禁止……ある意味正解だったわ」

久遠監督が伝えたかったのは、このことか。だとすれば、遠回りにも程がある。

試合が再開し、コーナーキックからのシュートを円堂はキャッチする。

「円堂! こつちに回せ!」

「分かった!」

俺は円堂からボールを受け取り、攻め上がっていく。隣で共に走っている鬼道が、俺に聞いてきた。

「何か分かったのか?」

「まあ見とけ」

俺が攻め上がっていると、ビッグウェイブスの四人が俺を囲む。

「ボックスロック・ディフェンス!」

吹雪の言う通り、確かに狭く息苦しい。なら、この狭いスペースでボールをキープすればいい。

俺は次々と伸びてくる足を躲しながら、部屋の中で練習したりフティングの応用を使ってキープしていく。

「何ッ!？」

こちらら部屋で1000回もリフティングしてんだ。今更狭いスペースでボールをコントロールするなんてお茶のこさいさいだ。

「もつと激しくいけッ!」

ドルフィンの指示で更にディフェンスが激しくなる。だが俺は、根気強くボールをキープし続ける。

「何を手こずっている!」

俺がしばらくボールをキープし続けていると、ドルフィンとアングルの肩がぶつかり、その二人の間に隙が生まれた。俺はそこを見逃さずに、間を通して鬼道にボールを繋ぐ。

「ば、バカな!」

「ボックスロック破れたりってな」

俺はドヤ顔で去っていく。

あースツキリしたわ。あんなゴツイ選手四人に囲まれるとか息苦しい前にむさ苦しい。しかも一人イケメンだから尚許さん。

私怨? 知るかそんなもん。

鬼道が攻め上がっていくと、

「一度破ったからっていい気になるなよ!」

鬼道が再びボックスロックに。だが、先程と違って鬼道も軽やかにボールをキープ。再び隙が生まれ、前線にいる吹雪に繋ぐ。

「ウルフレジエンドッ!!うおおおオオッ!!」

吹雪必殺のウルフレジエンドが炸裂。しかし、GKのベイカーは余裕の表情。

「グレートバリアリーフ!」

ベイカーが左手を横切ると、ゴール前に波が発生。ウルフレジエンドを包み込み、勢いを殺して止めてしまう。感覚的にはネロのプロキオンネットと近い。

ベイカーからビーチにパス。だが、豪炎寺がそれをカットして必殺シユート。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺の爆熱ストームが飛んでいく。だが、ベイカーは変わらずに余裕の表情。

「グレートバリアリーフ!」

ベイカーの必殺グレートバリアリーフは爆熱ストームの勢いをも殺し、完璧にキャッチしてみせた。

ベイカーからウオーターマンへ。だが、ウオーターマンはグラウンドの外にボールを出した。どうやら、選手を二人交代させる様だ。小柄なビーチとシユリンプに代わりに、サマーズとバラックを投入。



イナズマジヤパンからのスローイン。ボールは緑川に。ボックススロックが来るかと思いきや、バラック一人で緑川に挑む。

「グレイブ…ストーン!!」

バラックが両手を地面に叩きつけると、緑川の周りには尖った岩が次々と伸びてきて、最終的には緑川の足元から伸びて吹き飛ばした。

ボックススロックが効かないから個人技でのディフェンスで切り替えたってことか。流石は世界レベル。対応が早い。

バラックからサマーズに。俺はサマーズの前に立つ。するとサマーズはボールを少し浮かせ、そのまま俺に背を向ける。

「カンガル…キック!!」

「ぐあッ!」

背を向いたサマーズは両足でボールを俺に蹴り込み、吹き飛ばした。ちょうど鳩尾辺りに当たって超痛い。

両チーム一進一退の攻防が続く。

ボールは鬼道に繋がる。鬼道に向かって、アングルとウインダスがスライディング。アングルのスライディングをジャンプで躲すが、着地した瞬間にウインダスの大きな足が鬼道の足首辺りに直撃。

「うああアツ!!」

鬼道は堪らず足首を押さえて倒れてしまう。今のはファウルだった様だ。

「鬼道、大丈夫か!？」

「あ、ああ……大丈夫だ……!」

フリーキックで試合再開。鬼道にボールが渡るが、まともに歩くことも出来ず、足首を押さえていた。そしてここで前半終了。

0—1という不利な状況から、後半に挑むことになった。

## 海を制する者

0—1でハーフタイムに突入。鬼道は先程のスライディングで足首を痛め戦線離脱。代わりに宇都宮が入ることになる。

「後半の指示を伝える。吹雪、お前は中盤に下がって相手の攻撃の芽を詰め。宇都宮は、そのまま鬼道のポジションに入れ。前にボールを繋げろ」

「そ、そんな大事なポジション、俺でいいんですか？」

「お前がやるんだ」

「…はい！」

宇都宮は、どこか緊張している。そんな宇都宮に、綱海が軽く励ます。

「ま、気楽にいけつて。後ろには俺達が付いてつからよ」

「それから綱海」

「ええッ！まさか、俺も交代？」

「綱海。お前は俺の指示を聞かず、外で特訓していた様だな」

お前何してんだよ。つーか、逆によくバレずに外に出れたな。

「その責任として点を取れ。新たな必殺技でな」

「……知ってたのか。けど、まだ全然出来てなくってよ……」

「完成していないのは、頭にビジョンがないからだ。ビッグウェイブスを倒すためにどんな必殺技が必要なのか、お前には分かるはずだ。ヒントは、あのフィールドにある。誰にだって自分だけのステージがある。…行け！海はお前のモノだと証明しろ！」

「…はいー」

後半戦が間も無く始まる。ボックスロックがなくても十分に固いGK技のグレートバリアリーフ。あれを打ち破るには何が必要だろうか。

ホイッスルが鳴る。

FWのリーフとジョーンズが共に攻め上がってくる。だが、入ったばかりの宇都宮がディフェンスに行った。

宇都宮に対して、リーフとジョーンズがワンツーパス。宇都宮は抜かれた……と思いきや、宇都宮は抜かれた瞬間に左足を後ろに伸ばしてボールをインターセプト。

宇都宮はそのまま攻め上がり、ドルフィンとアングルを躲して豪炎寺に繋ぐ。

「爆熱……ストオオーム!!」

「グレートバリアリーフ！」

豪炎寺は爆熱ストームを打ち放つが、ベイカーのグレートバリアリーフに止められてしまう。

後半も前半と同様、一進一退。時間だけが削れていく。

ボールは俺に回され、バラックを抜き去ってシュートを打つ。

「アストロゲート…V2!!」

「グレートバリアリーフ!」

アストロゲートを打ち込むが、やはりベイカーに止められてしまう。ベイカーからアングルへと大きくパス。だが、それを宇都宮がトラップ。

「俺に回せ!」

後ろから攻め上がってきている綱海が宇都宮にパスの指示。宇都宮は綱海にパスを出し、綱海は新必殺技の体勢に入る。

「うおおおオオツ!!!」

綱海の新技が炸裂。しかし、

「グレートバリアリーフ!」

綱海の新技はグレートバリアリーフによって防がれる。

「その程度で乗りこなせると思うな」

まだ綱海の新技は完成していない。綱海の表情から察しても、それは伺える。

ビッグウェイブスの逆襲。ベイカーからドルフィン、そしてサマーズからFWのジョーンズに繋がった。ジョーンズのシュートチャンス。

「メガロドンッ!!」

ジョーンズはメガロドンを放つ。対する円堂は。

「この技は一度見た!」

円堂はなんと目を閉じる。そして目の前にメガロドンが迫ると目を開き、正義の鉄拳の体勢。

「正義の……鉄拳!!」

なんと円堂、土壇場で正義の鉄拳を進化させてメガロドンを完璧に弾き飛ばす。弾き飛ばされたボールは綱海に渡る。

「俺に乗れねえ波はねえ!!」

綱海は再び新技の体勢に入る。ツナミブーストの波以上に更に荒れ狂う中で、綱海は完璧に乗りこなしてみせた。

「うおおおおオオオツ!!いけえええエエツ!!」

ツナミブーストの進化技がベイカーに飛んでいく。

「グレートバリアリーフ!」

ベイカーのグレートバリアリーフが綱海の新技を食い止めようとする。

「海は……俺のモンだああアアッ!!」

綱海が打ったシュートは激しく回転し、グレートバリアリーフを打ち破る。

「な、何ッ!？」

ボールはベイカーの後ろに。

綱海がグレートバリアリーフをついに破り、同点に追いついた。

「よっしやああああアアッ!!」

綱海はガッツポーズをする。

しかし、恐ろしい監督だ。綱海が必殺技を編み出しているということも知っていて、それでいて的確な指示。これだけを見ていると、久遠監督が事件を起こしたとは考えにくい。

まあ、あまり気にしないでおこう。本当に久遠監督がチームを潰す気があるなら、その時に考えればいい。

するとここで、ビッグウェイブスはメンバー交代。アングルからクライブに。

ここで交代させるということは、またこちらの動きを封じるためのもの……。恐らく、綱海の新技を危険視したんだろう。

試合が再開すると、予想通り綱海にマンツーマンでマークが付く。

「陸では俺に敵う者はいねえ」

「小せえな、お前」

「何だと?」

「男ならこんなネチネチやってねえで、ガツンとぶつかってきやがれ！」

綱海はクライブのマークを振り切った。それを見た宇都宮は、再び綱海にパス。

「これ以上打たせるな！」

綱海に対して徹底したディフェンス。綱海は仕方なく、壁山にパスを出す。だが、壁山以外は全員マンツーマンのマークに。壁山が孤立してしまった。

そんな壁山を土方にマークしていたジョーンズが襲いかかる。

「ひいひいッ!!どーしたらいいッスかああ!？」

「一人で持ち込め！」

壁山が慌てふためいた時、久遠監督の指示が飛んでくる。ジョーンズは壁山に向かってショルダーチャージ。一度体勢を崩されかけるも、

「負けないッスううッ!!」

壁山は気合いで粘り、逆にジョーンズを倒して突破する。

なんだよカッコいいな壁山。

ジョーンズを突破した壁山は前にいる宇都宮に繋げる。宇都宮はシュートの体勢に入る。だが、豪炎寺をマークしていたカーメイが宇都宮に向かってスライディング。

宇都宮は機転を利かせて、シュートと見せかけてカーメイのスライディングを軽やかに躲す。



「豪炎寺さん！」

宇都宮から豪炎寺へのラストパス。豪炎寺は爆熱ストームの体勢ではなく、新たな必殺技の構えに入る。

「はああああアア!!せああああアアツ!!」

ファイアトルネードの回転を更に速くし、その勢いを使って爆熱ストーム以上の威力を生み出す炎のシュートがベイカーに襲いかかる。

「グレートバリアリーフ！」

しかし、グレートバリアリーフは容易く破れてしまい、ベイカーごとゴールに叩き込んだ。

2-1。ついにビッグウェイブスから逆転する。

そして、試合終了の長い笛。

ビッグウェイブスを下して、初戦を突破した。

「……………ふう」

大歓声の中で試合したせいとか、どっと力が抜けてしまう。まあ、俺前半頑張ったし？  
ボックスロック破ったし？

「ご苦労だった、八幡」

「お疲れ様、比企谷くん」

八神と雪ノ下からスポーツドリンクを差し出される。

「…なんだ貴様。私が八幡に渡すのだ。他所へ行け」

「私、結構負けず嫌いだから。そう言われると余計に行きたくなるの」

頼むから喧嘩すんな。

俺は二人からスポーツドリンクをひったくり、一気に飲み干す。

「…これでいいだろ。頼むから喧嘩するなら他所へ行け他所へ」

やばい。一気に飲んだせいでお腹ちやぶちやぶだわ。誰かこの場所変わってくれねえかな。

## 宇都宮虎丸

オーストラリア代表ビッグウェイブスを破った俺達は、今度はちゃんと外で練習することになった。俺個人としては、部屋の中でも良かった。

なんせ、最近異様に気温が高くなっているからである。季節はもう夏だから、当たり前と言えば当たり前なただけ。夏はエアコンが効いた部屋でゴロゴロするのが至高だ。

朝の練習も終わり、俺達は食堂でミーティングすることになる。

「アジア予選二回戦の相手が決まった。カタール代表『デザートライオン』

『デザートライオン……』

確か、一回戦でタイ代表サザンクロスと戦っていたところか。

「どんなチームなんスか？」

「このチームの特徴は、疲れ知らずの体力と、当たり前負けしない足腰の強さを備えていることだそうです」

「このチームと戦うには、基礎体力と身体能力の向上が必要不可欠だ。この二点を試合までに徹底して鍛えること。いいな？」

「はい!!」

並外れた基礎体力に身体能力か……。確かにカタールの気温は日本に比べて長期的に暑いし、所々に砂漠地帯もある。そんな暑い中で育ったカタール代表に対抗する基礎体力と身体能力をどうやって身につけるかだな。

「……とは言ったものの、どうやってその二つを鍛えたらいいんだろ……?」

「そんなもん、走り込むしかねえだろ。走って走って走りまくって、強い体力と足腰を身につけるんだよ」

なんて単純な練習なんだ……。

いやまあ、綱海の言うことも一概に間違っているわけじゃない。このクソ暑い中で走り込めば、そこそこ体力は付くだろう。

「あ、あの……すいません。俺、これで失礼します」

宇都宮は申し訳なさそうに言って、帰って行った。

「あいつまたでやんす……」

「なんであいつだけ途中で帰るんだ……?」

まあこないだ言ってた、自分の部屋じゃないと寝られないという理由は嘘だろうな。本当にそんな理由なら、この間の外出禁止の時に帰れるわけがない。ということとは、家に帰らなきゃならない理由があるということだ。

「…みんな、虎丸くんの早退が気になってる…」

「このままでは、チームの指揮に関わりかねません。ここは調査すべきかと！」

目金が喋ると碌なことにならねえから黙っててくんないかな。あとその探偵の服装と虫眼鏡どこから出した。

「分かりました！任せてください！」

と、目金を押し除けて意気揚々と言う。だからその探偵グッズどこから出したの？

「キャプテン！虎丸くんのごことは私達が調べてきます！何か分かったら連絡しますね！さあ行きましょう先輩達！」

「わ、私も…？」

「は、離せ！私は八幡にツ…！」

音無は強引に木野と八神、そして雪ノ下を連れて行く。あいつの力めつちや強いじゃん。

宇都宮の件は彼女達に任せて、午後の練習は全て走り込みとなった。しばらくは、走り込みの練習となるだろうな。

「よーしー！今日の練習はここまでだ！」

練習を早く切り上げたものの、みんなの体力はかなり消費している。夏の東京の暑さの中で走り込み。エアコンの効いた部屋でゴロゴロばかりしている俺や、北海道出身

の吹雪などが一番消耗している。

「…疲れたわ」

そういうや、ハマってるラノベの最新巻がもう発売されていたんだっけ。今まで色々と忙しかったし、軽くシャワーを浴びて着替え直して、本屋に見に行こう。

—————

「行くか」

俺はシャワーを浴びて着替え直し、ラノベが売つていそうな本屋を探すために雷門中を出て行く。正門から出て行くと、木野と円堂、そして豪炎寺がいた。

「…何してんの?」

「おう比企谷!俺達、今から虎丸の所に行くんだけどさ!一緒に行かないか?」

そういうえば音無が調査するとか言ってたね。もう突き止めたのね。

とはいえ、別に宇都宮の早退は気にしてないしな。家の事情とかなんだろうし。

「…遠慮しとく。俺本買いにいきたいし。」

そう言つて俺は円堂達の誘いを断つて去っていく。グーグルマップで近くの本屋を探していると、思いの外早く見つけられた。

「…あったあった」

目的の本も見つけて、俺は元来た道を辿っていると。

「あれ？比企谷じゃないか！」

このエンカウント率の高さは一体なんなの？

俺は円堂とその愉快的仲間達に出会った。なんか久遠もプラスされているんですけど。

「比企谷くん、もう本は買ったの？」

「ん。まあな」

「じゃあ、ついでに私達と一緒に来ない？」

「や、俺は……」

俺が断ろうとすると、

「可愛いじゃん彼女達イ〜」

俺の後ろからなんか出た。

バイクの様に改造されたデコチャリに乗ってきた黒いパーカー、フード、紫色の短ランが特徴の男とその取り巻きらしき者達が出てきた。

「そんなやつとつるんでねエでさア、俺達とかつ飛ばそうぜ？こいつでよ」

見た感じ不良っぽいが……どう考えても俺より年下だろ。高校デビューならぬ中学

「デビューしちゃった痛い人達かな？」

「まあとにかく、面倒ごとは避けたいな。」

「……円堂。ここで揉めて面倒ごことになるのは……」

「ああ。……俺達、急いでるんだ。みんな、行こう」

「俺達は不良達をスルーしていく。だが、」

「キャツ！」

不良のリーダーが久遠の手を掴む。

「いいから付き合えよ」

「手を離せ」

豪炎寺が睨みを利かせる。しかし不良のリーダーは物怖じしていない。

「ああ？痛い目見たくなかったら引つ込んでなア」

「……………ダメだわ、もう限界だわ」

俺は腹を抱えて笑ってしまふ。今まで我慢していたが、耐えられねえわ。そんな様子を見た不良は、今度は俺を標的にした。

「なんだテメエ」

「……いや、まあ何？古いナンパの仕方にデコチャリでやって来て？更にはお約束みたいなセリフを吐いて？これを笑うなって言う方が無理だわウケる」



「…なんだと?」

いいぞ。あの不良は久遠から目線を逸らして標的を俺にしている。見た感じ、本当に厄介そうなのはリーダーくらいだろう。だが、それでも彼らはまだ中学生だ。

だから、現実を教えてやる。

「…今ここでボコれば俺は確実に警察に通報する。女子を無理やり連れて行こうとした拳句に俺達をボコれば、お前らの居場所はなくなるだろうな。…見たとこ中学生だろ? もし通報がバレて学校側にも連絡がいけば、お前らは後ろ指を差されながら学校生活を送らなきゃならない。親にも連絡がいつて、近辺の人間はお前らを白い目で見るだろうな。お前らのこの先の人生は転落人生と言っても過言じゃない」

こちらとら代表選手の上に、まだ手を出してはいない。突つかかってきたのはあいつらだ。代表選手が不良にボコボコにされて出場出来ないとなれば、その事実は日本どころか世界中に知れ渡る。

それほどのリスクをやつらは受け入れられるわけがない。それに、警察を盾にすれば、大抵は萎縮するからな。

「…何をしている」

すると、聞き覚えのある声が不良達の背後から聞こえる。そこにいたのは、飛鷹征矢だった。

「飛鷹サン！」

どうやら不良達と知り合いな様だ。イナズマジヤパンに入る前に一緒にいたのだからか。

「お前ら、チームのオキテを忘れたのか？」

「うっ……」

「オイオイオイ。アンタはもうリーダーじゃないんだぜエ？飛鷹サンよオ」

「カラス……お前が新しいリーダーってわけだな。…鈴目はどうした」

「鈴目エ？ああ、あいつは目障りなんで追い出したよ……ボコボコにしてねエ」

「テメエ……！」

「アンタの時代は終わったんだよ飛鷹サン……やれ」

不良のリーダー、カラスが取り巻き達に指示を出す。取り巻き達は飛鷹に突っ込んでいく。

「バカ野郎どもがアツ！」

飛鷹は足を勢いよく振ると、周りに荒々しい風が巻き起こり、取り巻き達を倒していく。

……なんて風だ。あの蹴り、あの風……。選考試合でシャドウのダークトルネードを止めた時と同じだ。

「……チツ。役に立たねエやつらだ。じゃア今度は俺が……」  
「やめろ！」

カラスが手をパキパキ鳴らしながら飛鷹に向かっていくと、円堂が飛鷹の前に立つて庇おうとする。

「飛鷹は、俺の大事なチームメイトなんだ！殴るなら俺を殴れ！」

「き、キャプテン……」

「お前もだ飛鷹！どうしても喧嘩するっていうなら、俺が相手をする！」

……流石は円堂。仲間の揉め事となればすぐに介入する。

「……チツ、萎えちまったぜ。今日のところはこれで帰りますよ。でもこの借りは必ず返しますよ。飛鷹サン」

カラスはそう吐き捨てて、デコチャリに乗って去っていく。飛鷹は、先程吹き飛ばした取り巻き達に話しかける。

「……手荒なことをしてすまなかった。……だが、どうしてあんな真似をした？」

「……仕方がなかったんです。自分の敵になりそうな相手を大勢で潰すのが、新リーダーのやり方なんです」

「俺達も、カラスさんのやり方が間違ってるのは分かっています。でも、歯が立たなくて……」

「お願いです飛鷹さん！チームに戻ってきて下さい！」

どうやら取り巻き達はカラスという不良より飛鷹に余程の信頼を寄せている。新リーダーがカラスになったといい、チームに戻ってきてくれといい、飛鷹は不良チームのリーダーをやめたのだろう。やめた先が、イナズマジヤパンだったということなんだろう。

「……悪いが、これはお前達の問題だ。俺にはどうすることもできねえ」

飛鷹はそう言つて、取り巻き達はトボトボと帰つていった。そして、飛鷹は謝罪をする。

「……昔のダチが迷惑をかけました」

「……どういふことなんだ？」

「……すみません。昔の話は勘弁してください」

そう言つた飛鷹の表情は、後悔した様な表情だった。となれば、これ以上聞くのは野暮というものだろう。

「ああ！分かつた！」

飛鷹は軽くお辞儀をして、その場から去つていった。

「……昔の話、か。虎丸のことも、これ以上突つ込まない方がいいのかな？」

「円堂。俺はチームメイトとして虎丸のことが知りたい。苦しいことも辛いことも一緒

に乗り越えていくのがチームメイト。それを教えてくれたのはお前じゃないか」

……苦しいことも辛いことも一緒に乗り越えていく、か。生憎、俺の人生でそんなお人好しなやつはいなかったけど。なんなら俺に人脈なんて皆無でしたテヘペロ。

「……どうしたの？比企谷くん」

木野が心配そうにこちらを見る。こうやって心配される場合、大体は目が死んでいつている証拠だと小町に言われた記憶がある。

「なんでもねえよ。……宇都宮のところに行くんだろ？」

「おっ、来てくれるのか？」

「……まあ、色々と気になるからな」

宇都宮の家事情なんてのはこの際どうでもいい。俺が知りたいのは、シユートチャンスなのにシユートを打たないプレーのことだ。

もしかすれば、それが分かるかもしれない。俺は円堂達に付いて行き、宇都宮がいる商店街の虎ノ屋に向かうことにした。

—————

商店街にやっと着いた。目的地の虎ノ屋の前には、音無達が待っていた。

「……ここに虎丸がいんの？」

「はい！確かに、入るところを見ました！」

「…何かご用かしら？」

俺達の後ろから、栗色の髪のポニーテールに大きなリボンをつけている年上の女性に声をかけられる。

「あの、俺達虎丸のチームメイトの…」

「虎丸くんの？」

「何騒いでるんだよ乃々美姉ちゃん。俺今から出前に……」

すると、虎ノ屋の中から宇都宮が出前箱を持って出てきた。

「キャプテン……それにみなさん……」

俺達は店の中に入り、宇都宮の事情を教えてもらった。

「…まさか、この店を一人で切り盛りしてるとは…」

宇都宮がここにいるのは家も含めてなんだが、宇都宮がここで働いているのは身体の弱い母に負担をかけない様に、お弁当屋の乃々美さんと共に働いている。しかも、練習

が終わった後でだ。

「私の身体が弱いせいで、あの子には苦勞をかけて……本当は目一杯サッカーをしたいはずなのに……」

宇都宮の母が一通り話し終えた後、宇都宮が出前から帰ってきた。帰ってきて早々、宇都宮は母を労る。

小町もこれくらい俺を労ってくれたらなあ……。

「虎丸!」

「は、はい!?!」

「なんでこんな大事なことを黙っていたんだ!」

「えと、す、すみません……」

すると、円堂は出前箱を持ち始める。

「これ出前だろ?手伝うぞ!」

そう言つて円堂は店から飛び出していく。いや、お前出前先の場所分かるの?するとすぐに円堂が戻ってくる。

「……これ、どこに運べばいいんだっけ?」

「……アホかあいつは」

俺達は虎ノ屋の店を手伝うこととなる。

俺の役目は皿洗いです、はい。まあホールに出て注文承ったり、出前に行つて怖がられるのもあれだし。

出前や料理を運んできたのがゾンビとか何それどこのホラゲー？

そういうことで、俺達は営業終了まで手伝つた。

—————

「…疲れた」

俺達は店を後にして、雷門中の合宿所に帰ることになった。

確かに、宇都宮が早退する理由は分かつた。でも、あいつのプレーは結局、何一つ分からなかつた。そんな謎を残したまま、俺達はカターン戦を迎えることになる。



## 砂漠の獅子

今日はアジア予選二回戦の日だ。相手はカタール代表デザートライオン。立っているだけで汗を流しそうな今日の気温は、試合に少なからず影響するだろう。

俺達はFFスタジアムでストレッチを始めていたが、マジで暑い。それに比べてデザートライオンのメンバーは、汗一つかいていない。

今日のスターティングメンバーは、ほとんどオーストラリア戦と変わっていない。木暮と風丸が交代したくらいだ。DFは綱海、壁山、土方、俺。MFは、緑川、鬼道、風丸。FWは豪炎寺と吹雪と基山だ。GKは円堂。

それぞれの位置に付いて、いざ試合開始。

基山がドリブルで上がっていく。に対して、FWのザックが激しいスライディング。しかし、基山はなんとか持ち堪えて抜き去っていく。

「鬼道くんー！」

ボールは鬼道に渡る。

「抜かせんぞー！」

MFのメッサーが鬼道に対して強めのシールドアタック。だが、鬼道は負けずに吹

き飛ばしていく。

しかし、デザートライオンは最初からラフプレーが多いな……。気性が荒いチームなのか？

鬼道から豪炎寺に渡る。豪炎寺に対してムサとジャメルがダブルスライディング。豪炎寺は躲して吹雪に繋ぐ。

「ウルフレジエンド!!」

吹雪のウルフレジエンドが炸裂。しかし、キャプテンのカイルが身を挺して防ぐが、吹き飛ばされてしまう。

「やらせるかッ!」

ナセルがパンチングでなんとか防いでボールを外に。チャンスが続くイナズマジヤパン。風丸のコーナーキックから始める。

「これが俺の…新必殺技だ!」

風丸はボールを大きく蹴る。ミスキックかと思いきや、大きく弧を描いてゴールに向かう。反応が遅れたナセルは触れることが出来ず、ゴールを決められてしまう。

しかし、凄いいカーブシュートだ。プロの選手でも直接ゴールに入れることはあるが、あそこまで大きく曲がるとは。コーナーキックだからこそ使うことのできる必殺技か。

イナズマジヤパンの先制。しかし、尚も勢いが止まらないイナズマジヤパン。

試合開始後、ザックが攻め上がっていく。

「邪魔するやつは吹き飛ばす！」

「思う念力岩をも通すと言ってるね！」

緑川はザックからボールを奪取。そのまま攻め上がっていく。

「やつを止めろ！」

ファルとスライが緑川にディフェンスを仕掛ける。

「吹雪！」

「やつだ！マークに付け！」

吹雪に対してカイルとジャメルがマーク。だが、緑川のパスをアドリブでスルー。

ボールを通ったのは基山だ。

「流星……ブレードツ!!」

そのアドリブプレーがナセルの反応を送らせ、基山の得点を許してしまう。怒涛の追加点。

ただ、ここまで簡単にいくと何か気味が悪い。オーストラリアがいくらか優勝候補だったとはいえ、ここまで呆気ないものなのか？

尚も攻め上がるイナズマジヤパン。だが、ここで前半終了のホイッスル。ハーフタイムになり、俺達はベンチに戻り休憩する。

「飲め、八幡。今日は特に暑いからな。しっかりと水分補給をしておかないと、後半持たないぞ」

「ああ……」

俺はあまりデیفエンスをしていなかったから消耗はそんなになんだが、FWやMFの消耗が早い。いくら暑いからといってそんなに早く消耗するものなのか？

「……比企谷くん。何か変じやないかしら？」

「ああ……いくら体力差があるって言っても、前半でここまで消耗するなんて……」

別段変わりない試合運びだろ。違和感があるとすれば、カターのラフプレーと底無しの体力が目立つだけで……。

「……………まさか」

前半のラフプレーは、意図的に狙ったのか？確かにラフなプレーには力強い突破で返り討ちにはできるが、その分こちらの消耗も激しくなる。しかもこの気温だ……カターののやつらに比べれば屁でもない暑さなんだろうが、日本人にしたら気が滅入る暑さ。

こればかりは、体力の差がモノを言う。一夜漬けで得た体力じややつらの体力に勝てないだろう。

そんな不安を残しながら、後半戦が始まろうとする。カタールはスリートップという攻撃的な布陣に変えてきた。

そして、後半戦開始。ザックが攻め上がっていく。緑川と鬼道がマークに付くが、「どけッ！」

ザックはラフプレーで二人を吹き飛ばして突破。次に土方を強引に躲してシュートを打つ。

「正義の……鉄拳ッ!!」

円堂はなんとかセーブ。デザートライオンの猛攻を一度止めるため、弾いたボールを風丸がグラウンドの外に出す。

すると、誰かが倒れた様な音がする。

「緑川!!」

緑川は苦しそうに息をする。

「どうしたんだ?こんな早く息が上がるなんて……」

「……ずっと、練習していたツケが回ってきたみたいだ……」

確かに、緑川はいつも誰よりも特訓していた。偏に、レギュラーの座を譲りたくない一心だったのだろう。

「過ぎたるは猶及ばざるが如しか……!……すまない、みんなに迷惑をかけて……」

緑川は交代し、代わりに栗松が入る。

緑川のオーバーワークにも問題があったんだろうが、他にもそろそろ限界に近いやつ

もいる。あと一点くらい突き放しておかなければ、マジで面倒なことになる。

デザートライオンからのスローイング。ボールはザックに渡り、マジデイに繋ごうとするが、栗松がそれをカットし攻め上がる。

だが、吹雪も基山も栗松に付いていくのが精一杯の様だ。

こうなれば、博打に出るしかない。

「栗松……つちに回せ！」

俺はデیفエンスラインから一気にデザートライオン陣内に上がっていく。

「比企谷さん！」

栗松からボールを受けて、俺は攻め上がっていく。

「お前達……狩りの時間だ！」

「おう！」

カイルの指示で動きが変わる。

デザートライオンのMFとDFが次々とボールを奪いにくる。俺はなんとか抜き去っていくこうとするが、目の前にカイルが立つ。

「デザート……ストーム!!」

カイルは土煙を上げる。周りが見えない俺は身動きが取れず、ボールを奪取されてしまう。

奪ったカイルはそのまま攻め上がっていく。鬼道がマークに付くが、それすら振り切ってしまう。

「ザック！」

カイルからザックにボールが渡る。

「行かせない！」

基山がザックに向かっていくが、逆に返り討ちに遭う。そのままザックが攻め上がり、マジデイへとセンターリング。

「させるかッ！」

空中で綱海とマジデイのヘディングでの闘ぎ合い。だが、徐々にマジデイの方が綱海を押しつけている。

「うおおおオオッ!!」

「何ッ！」

「吹っ飛べエツ!!」

マジデイは綱海と円堂諸共ヘディングでゴールに押し込んだ。

まさか、必殺技無しでゴールを決められるなんて……。それに、円堂と綱海を吹き飛ばす力強いヘディング……。

「……………って、おい。綱海!？」

円堂はなんとか立ち上がったが、綱海は未だに倒れたままだった。円堂は倒れたままの綱海に呼びかけるが、一切反応しない。

するとそこへ、カイルが来る。

「……ここからが俺達のサッカーの始まりだ。俺達は灼熱の砂漠とフィールドで育ち、その中で鍛え上げられた身体と無限の体力。それがデザートライオンの最大の武器。昨日今日練習しただけのお前達に付いてこれるわけがない」

やはり、デザートライオンの狙いはラフプレーで俺達の体力を消耗させて動きを鈍らせる。そして消耗したところを自慢の身体と体力をフルに使って仕留める。

「お前達は砂漠に迷い込んだ旅人も同然。後は息の根が止まるのを待つだけだ」

カイルはそう言い捨てて去っていく。確かにやつと言う通り、このままだと本当に息の根が勝手に止まる。

どうすればいい……。



## 目覚める虎

久遠監督は、限界に達した基山と綱海を退げて、飛鷹と木暮を投入。DFが増えたことで、5-3-2の防御的布陣に変わり、俺はMFのポジションになる。

イナズマジヤパンのボールで試合再開。吹雪が攻め上がるが、いつもの吹雪のスピードが出せていない。

「もらったッ！」

ザックがスライディングでボールを弾く。こぼれ球を鬼道が拾う。鬼道に向かってカイルが突っ込んでいく。

「いくぞ吹雪！」

鬼道から吹雪のセンタリング。

「ウルフレジエンド!!うおおおオオッ!!」

吹雪はウルフレジエンドを打ち込んだ。しかし、GKナセルは余裕の笑み。

「ストームライダー!!」

ナセルはその場で回転しながら、砂嵐を生み出してウルフレジエンドを包み込む。ウルフレジエンドは砂嵐の勢いで弱まり、その弱まったところをナセルが上から勢いよく

叩きつけてキャッチする。

「フン、この程度か？」

「…そ、そんな……」

吹雪も限界に達して、ドサツと重々しく倒れてしまう。ここに来て吹雪もダウンか…。

「大丈夫か？」

「う、うう……」

「……ここまでの様だな」

再び、カイルが俺達を見下す様に話し始める。

「この気温の中、よく頑張ったと認めてやろう。最後に勝つのは、極限まで鍛え上げたフィジカルを備えた俺達だ。お前達の得意なチームプレーで、どこまで戦えるかな？」  
一点リードされているのにこの余裕。一点リードは負けているうちに入っていない様に見える。

ダウンした吹雪に代わり、宇都宮が投入される。宇都宮のテクニクなら、デザートライオンのラフプレーにも対応できるだろうが……。

GKナセルから試合再開。ボールはザックに渡る。

「カイル！」

ザックからのパス。だが、それを宇都宮がインターセプト。そのままデザートライオンのメツサーとジャメルをあつという間に抜き去り、ゴール前に。

宇都宮はシュートの体勢……になるが、またもやシュートを打たずに豪炎寺へとバツクパス。だが、それはムサによって奪われてしまう。ムサは大きく前線にパス。

そのパスを受け取ったザックはスライにパス。

「はああああ!!旋風陣!!」

後半に入ったばかりの木暮がスライからボールを奪う。

「木暮こつちだ!」

俺は木暮からボールを受け取る。しかし、目の前からメツサーとセイドが立ちほだかる。

「ライアーショット!」

俺はライアーショットで隙を生み出して二人を抜き去る。

「鬼道!」

俺は鬼道に向かってループパス。しかし、それにデザートライオンは対応して鬼道にマークに付く。すると、鬼道へのパスを宇都宮がカット。

この大胆なプレーにデザートライオンのデイフェンスは反応が出来ない。

「今だ!打て虎丸!」

宇都宮の決定的なシュートチャンス。宇都宮はシュートの体勢に入るが、またシュートを打たずに豪炎寺にパスをする。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺は爆熱ストームを放つ。

「ストームライダー!!」

しかし、GKナセルは余裕で爆熱ストームをキャッチしてみせた。

……しかし、マジでさつきから宇都宮は何をしている。あれほどシュートチャンスがあつたのに一つも打たないとは。どういう理由があるのかは知らないが、客観的に見ればただ迷惑なやつだろ。

GKナセルからザックに。デザートライオンは、カイルを中心に猛然と迫ってくる。

「行かせるかッ!」

「どけッ!」

俺はザックからボールを奪おうとするも、ザックの強引なドリブルで吹き飛ばされてしまう。こいつら、読みもクソもねえ。目の前にいるやつらを吹き飛ばすことしか考えていない。

「カイル!」

ザックからカイルへのセンチタリング。カイルは必殺技の構え。

「ミラージユ……シュートオツ!!」

カイルの必殺シュートが円堂に迫っていく、

「正義の……鉄拳ツ!!」

円堂は正義の鉄拳を発動。カイルのシュートをなんとか弾いて外に出す。時間もロスタイム。ここで食い止めれば勝てる。

デザートライオン、カイルからのコーナーキック。すると、ここでショートコーナー。意表を突かれる。

ボールを受けたセイドは円堂に向かってシュート。だが、円堂が止める前にいつの間にか円堂の目の前にまでザックが迫っていた。

「何ッー」

セイドのシュートをザックのヘディングで強引に軌道を変えて、ゴールへと押し込んだ。  
だ。

「ま、マジか……」

ロスタイムというところで追いつかれてしまった。これじゃまるで、ドーハの悲劇じゃねえか。

このまま延長に持っていかれると、確実に勝ち目がなくなってしまう。

イナズマジャパンボールで試合が再び始まる。俺達は必死に上がっていくが、カタ-

ルのゴールが遠く感じる。

ボールは宇都宮に渡し、メツサーを抜き去っていく。宇都宮と豪炎寺はゴール前に辿り着く。

「豪炎寺さん！」

宇都宮は豪炎寺にボールを繋ぐ。だが、豪炎寺は宇都宮にボールを蹴り返す。それも、宇都宮が吹き飛ばすほどの。まるで、吹雪にやったのと同じ様だ。

「いった……何するんですか、豪炎寺さん！」

「さつきからなんだ！お前のプレーは！」

「ッ……」

「試合時間は残されていないんだぞ！精一杯、ベストだと思えるプレーをしろ！」

「これが俺のベストなんです！俺のアシストでみんなが点を取る……それが一番なんですよ！そうすれば俺がみんなの活躍の場を奪うこともない……みんなで楽しくサッカーが出来るんです！」

そんな身勝手な宇都宮の理由に、豪炎寺は憤慨。

「ふざけるなッ!!」

「ッ……」

「そんなサッカーは、本当の楽しさじゃない！」

サッカーの楽しみは人それぞれだからそこは何も言わんけど、宇都宮のプレーに俺は文句の一つも言いたくなる。

「……まあ豪炎寺がキれるのも分からないわけじゃない」

「比企谷さん……」

「俺も暑さ込みでイライラしてたし。宇都宮のプレー」

「ここで宇都宮の理由を聞いて、「じゃあ仕方ないからシュート打たなくていいぞ」とか言ったところでこいつのためにもチームのためにもならない。

「……お前さ、そんなふざけたプレーを続けるならもうチームから抜ければ？ 他所のサッカークラブでやってくんねえかな、そのプレー」

「ッ……」

「何が活躍の場を奪うこともない、だよ。お前調子乗んなよ。俺が本気出したらお前くらい軽く捻り潰せるからな」

「ごめん嘘ついた多分返り討ちに遭うと思う。普通に考えたら俺の方がサッカー歴短い多分。」

「……宇都宮。俺達が集められた理由はなんだ？」

「……それは、俺達が世界一を目指すために戦うんじや……」

「そうだ。でもそれは俺達だけじゃなく、相手も同じことだ。あいつらも俺達も、国中の

人間の思いを背負って全力で戦うためにここにいるわけだ。それ忘れんな」

「……そうだぞ、虎丸」

すると、宇都宮の周りには円堂達が出てきていた。

「全員が全力でゴールを目指さなくちゃ、どんな試合にも勝てないぜ。もっと、俺達チームメイトを信じろって！」

こういうのは円堂の役目だ。俺が言えるのはそいつに現実を教えるくらいだ。お涙頂戴のセリフなんて言えないしな俺。

「チームメイトを……？」

「ああ！今の思いを、サッカーに全部ぶつける！俺達が全部受け止めてやる！」

「……キャプテン……」

「虎丸。ここには、お前のプレーを受け入れられない様なヤワなやつは一人もない」

「やろうぜ！虎丸！」

「……いいんですか？本気でやっちゃっても」

「フツ…俺を驚かせてみる、虎丸」

「はい!!」

デザートライオン、ザックのスローイングから試合が開始。ユスフに投げ渡し、再びザックに戻る。



すると、ザックに向かって飛鷹が詰める。

「な、なんだこいつ！カイル！」

「通させるかアツ!!」

カイルに渡るボールを風丸がカットし、鬼道に繋げる。

「虎丸ツ!!」

鬼道から宇都宮へのパス。宇都宮は受け取って、攻め上がっていく。

「抜かせんぞ!!」

宇都宮の前にはメツサー、ユスフ、ムサの三人が立ちはだかるが、宇都宮はいとも簡単に抜き去っていく。

あいつやば。神がかってんじゃねえか今の。

「こいつツ!!」

ジャメルのチャージも簡単に躲していく。続いてセイドが宇都宮に迫る。

「比企谷さん！」

宇都宮からのパス。このボールを取れなきや、多分一生あいつにナメられる。俺は宇都宮からのパスを受けて、そのまま蹴り返す。

「行け、虎丸！」

宇都宮は攻め上がっていく。

今のあいつの表情は、どこか生き生きとした表情。心の中からサッカーを楽しんでいる。そんな表情だった。

「ずっと封印してきた俺のシュート……!!」

今度こそ、宇都宮はシュートの構えに入る。しかも、必殺シュートの構え。

「タイガー……ドライブッ!!」

宇都宮が打ち込んだボールとともに、虎がゴール目掛けて駆けて行く。

「ストームライダー!!」

ナセルはストームライダーを発動。だが、宇都宮のタイガードライブが勝り、ストームライダーを破ってゴール。

「やったああああ!!」

宇都宮、試合終了寸前にデザートライオンを突き放す強烈なシュートを決めた。

そして、試合終了のホイッスル。二回戦を突破し、アジア予選決勝へと駒を進めた。

「ギリギリだな……」

それにクソ暑い。とつとと帰ってシャワー浴びて寝たい。俺は重い足取りで、ベンチに戻っていった。

## 依存

カタール代表デザートライオンを倒してついに決勝戦。本来のプレーを取り戻した宇都宮も最近は積極的にシユートを打っている。

……あと、彼小学6年生だったのね。小町より一歳年下じゃん。

時間は朝。食堂にて、鬼道が話を始めた。

「みんな聞いてくれ。オーストラリア戦、カタール戦を通してある程度世界レベルは実感出来たと思う。だが、アジア予選を勝ち抜き、世界大会で戦い抜くためには更なる必殺技が必要不可欠となる。風丸、お前が日本代表での選考試合で綱海を突破しようとした時を覚えてるか？」

「俺が綱海を……？」

「そーいや、なんか風が巻き起こってたな」

綱海を吹き飛ばしてそのままシユートにいった時のことか。

「覚えてるぜ。確かに凄え風だった」

「あの風に更に磨きを掛ければ、強力なオフエンス技となるだろう。久遠監督にも自主練習の許可は得ている」

「分かった。その必殺技を完成させればいいんだな?」

「ああ。それから吹雪と土方。二人には連携シユートの必殺技を習得してもらいたい。パワーと安定したボディバランスを持つ土方に、スピードの吹雪。この二つが組み合わせれば、強力なシユート技になる」

「攻撃の幅を広げるんだな? よし任せとけ。やろうぜ吹雪」

「うん」

風丸のオフエンス技はともかく、よくそんな技をポンポン思いつくよね。どうなってるんだよ鬼道の頭の中は。

「連携技か……なんか面白そうだな。よし壁山!俺達もやろうぜ!」

「え、ええ!?!俺っすか!?!」

「なんだよ嫌なのか?」

「いい、嫌じゃないっすけど……」

「よし決まり!いいだろ鬼道!」

「綱海と壁山か……面白い組み合わせだな」

しかし、連携技ね……。俺には無縁の領域だな。ジエネシスにいた時、何度かスパークを打ったけど、元を辿れば八神に強制的にやらされたしな。何度か失敗したけど多分あれ俺のせいだろうし。

俺は俺個人の技を作らないとな。ライアーショットもひとりワンツーも、世界大会では通用しなくなってくるだろう。

とはいえ、イメージがないから出来ないんだけど。

「よし・そうと決まれば、早速特訓だ！」

朝食を食べ終えた俺達は、朝の練習に向かうことにした。それぞれが新しい必殺技、乃至スキルアップの練習を始めることにした。しかし、中々必殺技のイメージが浮かばないのでどうしたものかと考えていた。

俺の一日の練習は、結局必殺技をイメージしただけで終了した。夕食も食べ終え、俺は部屋に戻って、どういう必殺技にすればいいのかを考えていた。

すると、

「何を悩んでいる？」

悩んでいる俺の隣に、八神がやってきた。ていうか君いつの間に入ってきたの？怖いよ。

俺は簡潔に、ありのままを八神に伝えた。

「…新しい必殺技か。しかし、お前はライアーショットやアストロゲートがある。悩むことがないのではないのか？」

「……ライアーショットはほぼ初見殺しみたいところだし、アストロゲートはオース

トラリア戦で止められてる。ひとりワンツ〜なんて初見でも取れるやつ多分いるだろうし」

「…まあそう悲観的になるな。お前には私がいる。お前が悩んでいるのなら、私はいくらだって知恵を貸してやる」

こいつはいつからこんなカッコいい子に育ったの？八幡嬉しくて涙が出そう。

「…だから他のやつには悩みを明かすなよ。お前の悩みは私だけが聞いて私だけが解決する。特に、あの雪ノ下には絶対に話すな」

はいいつも通りのヤンデレ八神ちゃんでした。

まあとりあえず、イメージが無ければ技もクソもない。決勝まで時間はあるから、変に焦る必要もないけど。

「そうだ八幡。オーストラリア戦、そしてカターン戦のご褒美を忘れていたな」

「ご褒美ツ……!?!」

八神は唐突に、俺の首筋を噛み始める。そしてそれと同時に、噛まれる部分だけが吸われている感覚が首筋を襲う。

「……最近はずしくて私のモノだという証拠を付けられなかったが、今は二人だけだ。

………なあ八幡。私と、あの時の様に……互いが互いを求め合わないか？お前の身体に私の存在を、私の身体にお前の存在を刻み付けるのだ」

「……決勝が近いんだ。そういうのはしばらくやめろ」

すると、八神の目は段々と暗くなる。やばい不機嫌になった証拠だどうしよう。

「…何故断る。私達は相思相愛だろう？あの時、お前は私に愛していると言った。あの時、お前は拒絶せずに私を抱きしめ返してくれた。あの時、お前は私を許してくれた。これでも相思相愛ではないのか？」

愛しているとか言ったつけ俺。後の二つはなんとなく覚えてるけども。

「……お前が愛してくれないのなら私に存在価値がない。お前が私を求めてくれるから、私という存在がいるのだ。……しかし、愛してくれないなら私はもうここにいる必要がない」

また八神が病んできている。こういうタイプは放っておくと何をしでかすか分かったもんじやないのは体験済み。エイリアにいた時より落ち着いたと思ったのだが、それでもなかつたみたいだ。

しかし、いきなり八神の身体を抱きしめるのは八幡的にちよつと意味分かんないから、とりあえず彼女の手を握ることで落ち着かせよう。

「……これじゃダメか」

「…ダメだ。私を抱きしめろ。私が苦しくなるくらいに。壊れてしまうくらいに。お前という存在を私の身体に、私の身体だけに刻み付けて欲しい」

結局抱きしめることになりました。俺は溜息を吐いて、仕方なく実行に移るとした。

「……頼むから今回だけな」

俺は八神の身体を強く抱きしめる。彼女は素早く、強く抱きしめ返してくる。二度と俺を離さないと言わんばかりの抱擁力の強さ。

「……私にはお前しかいない。私は、お前がいなければダメな女なのだ」

「……そうか」

「……だから、これからも共にいよう。私達はずっと一緒だ」

彼女を落ち着かせることになんとか成功した俺は、結局そのまま彼女と共に眠ってしまつた。

—————

そして翌日。

「……何をしているのかしら？ 貴方達は」

目を覚ますと、俺の部屋には雪ノ下が見下げ果てた目で俺を見てくる。

……終わつた。

「……まあどうせ、八神さんから強引にきて断れなかつたんでしょう？ もし貴方が八神



さんを誘う様な低俗な輩なら、私はとつくに襲われているわ」

なんだかんだと理解してくれて助かる。序盤の雪ノ下なら間違ひなく通報して刑務所にぶち込まれていたかも。

「八神さん、起きなさい」

「……………もう…朝か……………」

八神は目を擦りながら身体を起こす。

こういうところは、普通の女の子って感じがするんだけどな。

八神は目を覚ますと、雪ノ下の方を見て途端に睨み付ける。

「……………ちよつと待て。何故、貴様が八幡の部屋にいる」

「ただ起こしに来ただけよ。マネージャーなのだからそれくらいは当然よ。八神さんもマネージャーならさっさと起きて朝食の準備を手伝いなさい」

「……………チツ……………では、また後でな八幡」

八神はそう言つて、俺の部屋から出て行つた。しかし、雪ノ下が未だに俺の部屋から出て行かない。

「……………どうした？」

「…比企谷くん。貴方、彼女のこと好きなの？」

俺が八神を……………？

そういうえば、何故俺は八神に付き合っているのだろう。前みたいに、もう小町を盾にすることも無い。だから拒絶なんていくらでも出来る。

「……少なくとも、恋愛感情としては見ていない」

彼女は狂気のレベルで俺に好意を寄せてくれているが、俺は彼女に対して恋愛感情を抱いたことはない。だからといって、別に人間的に嫌いというわけではないが。

「……ならいいのだけれど。……貴方は優しすぎるのよ」

雪ノ下は去り際に小さく呟いた。

……俺は別に優しくしない。俺が優しくするのは小町 and 戸塚だけだ。だから八神にも優しくはしていない。

……しかし、なんだかんだ八神に付き合ってしまったっている俺は、きっと依存しているのかもしれない。狂気的な愛をぶつけられ、それを否定すれば彼女の精神は崩れてしまう。

自分のせいでそうなってしまうのなら放っておけない。そんな一心で接しているうちに、八神同様に依存しているのだろう。

「……優しすぎる、か……」

俺に合わない言葉だな、本当。

## ネオジヤパン

必殺技をイメージし続けて、あとは形にするだけだった。そんな中、久遠監督は練習試合を行うと言い出す。

「それではチーム分けを発表する」

すると、どこからか誰かがボールを蹴る音がグラウンドに響いた。誰が蹴ったかわからないボールは円堂に向かって飛んでいく。

「なんだ!？」

円堂は反応して、そのボールをキャッチする。

「…流石は円堂守。素晴らしい反応だ」

ボールを止めた円堂に、見知らぬ人物が称賛する。妙に背が高く、肌もそれなりに白い。何より、今発した声は……。

「…お前、デザームか？」

「ええ!？」

だが、長身の男は否定する。

「デザーム? フン、今の私は砂木沼治。チーム、ネオジヤパンのキャプテンだ」

デザーム、もとい砂木沼がそう言うのと彼の後ろから彼と同じユニフォームを着た者達がゾロゾロとやってくる。

「源田、成神、寺門！」

「霧隠！」

「御影専農に尾刈斗、千羽山に木戸川清修の武方もいるでやんす！」

それに、イプシロンのゼルやジエネスのウィーズやゾーハン、プロミネンスのヒートまでいる。クララが一部の選手がいなくなったのは、ネオジャパンに入ったことを悟らせなかったからだろう。

それに、それだけじゃない。

……またあいつと戦うのかよ。

「……葉山」

「……フツ。久しぶりだな、比企谷。それに雪ノ下さんも」

葉山隼人がネオジヤパンのユニフォームを着て俺の前に現れる。あいつ、マジで一体何しに来たんだ。

「久しぶりね。円堂くん」

すると、また聞き覚えのある女性の声。その声の人物は、彼らの後ろから姿を表す。

「ひ、瞳子監督!?!」

かつて吉良星二郎の野望を阻止すべく地上最強チームを作り上げた雷門の一時的な

監督、吉良瞳子監督がいた。

「……久遠監督ですね？初めまして。私は吉良瞳子といいます」

「君のことは響木さんから聞いています。地上最強のチームを率いたのだと」

「ご存知なら話は早いですね。私はネオジャパンの監督として、正式にイナズマジャパンに試合を申し込みます。そしてネオジャパンが勝った暁には、日本代表の座をいただきます」

「ええ!?!」

そんなのありかよ。確かに大会の公式ルールとして、今代表に選ばれていない者も起用される可能性があるが……。にしても無茶振りにも程がある。

「……私達の挑戦、受けていただけますか？」

「……まさにファイナルジャッジメントだな。さて、久遠監督はどうする。

「……いいでしょう」

久遠監督は受諾した。まあ久遠監督の人格上なら、受けないなんて選択肢はないと思つてたけど。吉良監督が集めた選手なら、十分に強いんだろうしな。そんな強い相手と戦える機会なんてそうないし、普通に練習するより経験値を得ることができる。

俺達は試合の準備をして、ポジションにつく。FWは豪炎寺に宇都宮、吹雪。MFは基山と緑川、鬼道。DFは、綱海と壁山、土方に俺である。GKは円堂。

相手の布陣は……。

「…砂木沼がMF?」

GKではなく、MFのポジションにいる。あいつ元々はMFだったのか。

「見せてもらおうか。貴女が作り上げた最強のチームを。鍛え上げられた選手達のプレーを」

今の言い方……まさか、戦力になりそうな選手がいたら代表に入れるつもりか？

…とはいえ、俺達が勝てば何の問題もない。俺達に負けた連中を代表に入れるとは考えにくいしな。

イナズマジヤパンからのキックオフで試合再開。吹雪が攻め上がっていく。

「行かせるか!」

霧隠が吹雪にチャージ。だが、吹雪は難なく突破。

「郷院! 寺門!」

しかし砂木沼の指示でDFの郷院と寺門が素早くディフェンスに入る。突破は無理だと考えた吹雪は宇都宮にパス。

「成神!」

だが成神のスライディングで宇都宮はボールを弾かれ、外へと飛んでいく。

中々強固なディフェンスだ。

俺からのスローイングで試合開始。鬼道に渡してすぐさま基山に繋がる。

「改！石平！」

攻め上がる基山に下鶴と石平のダブルデイフェンス。基山に続き、みんなが攻め上がるが一向にゴール前まで辿りつかない。ネオジャパンのデイフェンスが強固な証拠である。

「吹雪さん！」

宇都宮から吹雪に渡る。吹雪は宇都宮からのセンターリングを受ける。

「ウルフレジエンド!!うおおおオオッ!!」

吹雪のウルフレジエンドがGK源田に襲いかかる。

すると源田は、思いがけない必殺技を繰り出した。

「ドリルスマッシュャー…V2!!」

源田はなんとドリルスマッシュャーを繰り出し、ウルフレジエンドを完璧に止めた。

ドリルスマッシュャーって、確か砂木沼の必殺技だろ。

「源田のやつ、いつの間に……」

「驚くのはまだ早い。源田！」

ボールは源田から砂木沼へ。砂木沼は猛然とイナズマジャパン陣内に攻め上がった。鬼道と基山が砂木沼のデイフェンスに入るが、



「イリユージョンボール改！」

砂木沼は鬼道のオフエンス技、イリユージョンボールを繰り出して二人を突破。

「行かせないぜ!! スーパー……しこふっ……!」

「ダツシユストームV2!」

土方は技を出す間もなく、砂木沼のオフエンス技に吹き飛ばされてしまう。

「こいつら、他の選手の技を習得しているのか!？」

鬼道がそう言う。確かに、鬼道のオフエンス技は、元は帝国で生み出したもの。ネオジャパンに帝国のメンバーがいるわけだし、そいつらからコツを教われば出来なくはない。

「改ッ!」

砂木沼から下鶴へのセンタリング。下鶴は右足でボールを踏みつけると、下から異空間が開き始める。そのまま異空間に潜り、シュートを放つ。

「グングニルV2!!」

下鶴に打たれた矢の様な強烈なシュートは異空間から飛び出し、円堂に襲いかかる。

「うおおおオオッ!!正義の……鉄拳!!」

グングニルに正義の鉄拳をぶつける円堂。しかし、円堂は徐々に後ろへと押されていき、正義の鉄拳が崩れてしまい、そのままグングニルはゴールへと突き刺さった。

「…なんなんだよ、今のパワー…」

「…円堂守。私は、お前からサツカーとは熱く、楽しいものであることを学んだ。…だが同時に勝負とは、辛く険しく、そして厳しいものなのだ」

そう言う砂木沼の表情には、凄みを感じさせられた。きつと、この日のために、そして世界と戦うために死に物狂いで特訓したのだろう。選ばれなかった悔しさを力にして。

「日本代表の座は必ず勝ち取る！」

しかし負けるわけにはいかない。こちとら小町や総武中のやつらの思いを背負って戦ってる。こんなところで立ち止まるわけにはいかんよな。

イナズマジャパンのボールで再開。みんなは攻め上がっていくが、やはりネオジャパンの硬いディフェンスを破れない。

ボールは砂木沼に。

「改ッ！」

またもや下鶴にボールが渡る。そして、グングニルの体勢に入った。

「グングニルV2!!」

下鶴のグングニルが放たれる。しかし、今のままでは止められない。

「うおおおおオオッ!!正義の…鉄拳!!」

なんと、この土壇場で円堂は正義の鉄拳を進化させてグングニルV2を弾き飛ばした。そのセーブでイナズマジパンは勢い付き、果敢に攻め上がっていく。が、ネオジャパンのデیفエンスは尚も崩せずにはいた。

ボールは砂木沼に渡る。

「葉山ッー」

砂木沼から葉山にボールが渡る。俺は葉山に向かって突進していく。

「来たな、比企谷」

そう不敵な笑みを浮かべると、葉山は右手を上には挙げて指を鳴らす。

「へブンズタイム改ー」

すると俺の目の前にいた葉山はいなくなり、いつの間にか背後を取られ、置き土産と言わんばかりの旋風が俺を吹き飛ばす。

「クッソ……」

葉山はそのまま攻め上がって必殺シュートの構えに入る。

「ガニメデプロトン……改ッ!!」

あれはゼルの必殺シュート。

進化したガニメデプロトンが円堂に襲いかかる。

「正義の……鉄拳!!うおおおオオ!!」

しかし進化した正義の鉄拳の前にはガニメデプロトンも弾かれてしまう。そのままボールは外へと転がっていく。

「選手交代！宇都宮に代わって、風丸」

宇都宮と交代した風丸は、凄い量の汗を流していた。

え、どうしたの？君は灰呂くんなの？燃えてる人なの？

スローイングは霧隠から。霧隠から砂木沼に渡って緑川を躲していく。だが、続く鬼道が砂木沼からボールを奪取。

「風丸！」

鬼道から風丸に繋がる。風丸に向かって、DFの郷院が走ってくる。

「風神の……舞ッ!!」

すると、自慢のスピードで郷院の周りに竜巻を発生させ、その竜巻の中で郷院を翻弄し、竜巻から抜け出したと同時に郷院が吹き飛ばされていく。

あれが風丸の新たなオフェンス技……。あの汗の量は、さっきまでこの技を完成させるために練習してきていたということか。

「豪炎寺！」

風丸から豪炎寺へのセンタリング。

「爆熱……ストオオーム!!」

豪炎寺の爆熱ストームが炸裂。

「ドリルスマツシャー：V2!!」

豪炎寺の爆熱ストームにドリルスマツシャーをぶつける源田。だが、ドリルスマツシャーの回転が止まり始め、先端からヒビが入り始める。そして先端からボロボロとドリルが崩れていき、源田諸共、ゴールに押し込んだ。

それと同時に、前半終了のホイッスル。1―1の同点のまま後半戦に突入することになる。

## 久遠ジャパン v s 瞳子ジャパン

ネオジャパン戦の後半が開始する。ここでネオジャパンのメンバーが交代。石平に代わり牧谷。寺門に変わり平良を入れてくる。今ここでメンバーを入れ替えるということは、風神の舞対策なのだろう。

後半戦開始。

ネオジャパンの猛攻が始まる。瀬方にボールが繋がり、攻め上がっていく。そこを基山がカット。

「ヒロトー！」

風丸が上がっていくが、風神の舞を警戒したネオジャパンは風丸に厳しくマーク。

「緑川！」

基山から緑川に渡る。緑川が攻め上がっていくに対して、ネオジャパンの霧隠がディフェンスに向かった。

「はああああアッ!!」

すると緑川は、まるで閃光のごとく速さで霧隠を抜き去った。だが、すぐ牧谷にボールを奪取される。牧谷から瀬方に。瀬方から伊豆野に渡る。

伊豆野は攻め上がっていくが、そこを俺はカット。俺はそのまま上がって、突破力のある緑川か風丸に繋ごうとするが、ネオジャパンの厳しいマークが付いていた。

「…なら俺が行けばいい」

俺はそのまま攻め上がるが、目の前から葉山が突進してくる。

「行かせないよー」

俺この試合何にも活躍してないしな。一発ここで新必殺技を見せておかないと、「お前交代な」とか言われそう。

俺は指先に光を集めて振り下ろす。刹那、周りが宇宙空間の様な景色に錯覚する。それと同時に、葉山の動きと俺の動きが一瞬鈍くなる。そして次の瞬間に、俺は目にも留まらぬ速さで葉山を抜き去る。

葉山を抜き去ると、葉山を中心とした十字の爆発が起きて葉山が吹き飛ばされてしまふ。

「な、何ッ！」

「いいぞー！比企谷ー！」

命名するならば「サザンクロスカット」ってところだな。なんとか形には出来て良かったわ。

続いて成神と霧隠のダブルデイフェンス。

「サザンクロスカットツ!!」

「うああああ!!」

成神と霧隠を抜き去って、豪炎寺へとセンチリングを上げていく。

「爆熱…ストオオーム!!」

豪炎寺の爆熱ストームが源田に襲いかかる。しかし、源田はドリルスマッシュの体勢にはならず、ずっと腕を組んだままだった。すると、そんな源田の前に牧谷と郷院が立つ。

「真！無限の壁!!」

するとゴール前には巨大な壁が聳え立ち始めた、豪炎寺の爆熱ストームを簡単に防いだ。

何あのチートみたいなディフェンス。ゴール前を完全に塞いでるし。

「千羽山の技をパワーアップさせたというのか……」

鬼道がそう呟いた。

「え、何お前あの技知ってるの?」

「ああ……。無限の壁とは、千羽山がFFで無失点記録を誇った最強の技だ」

いよいよチート染みて来てるじゃねえか。無失点記録を誇った技を最大に進化させてるとか。



しかし、この程度のピンチでイナズマジヤパンが屈するわけがなく、むしろ果敢に攻め上がる。

「ウルフレジエンド!!」

「真!無限の壁!!」

吹雪のウルフレジエンドも完璧に止められてしまう。

続いて基山が。

「流星……ブレードツ!!」

「真!無限の壁!!」

基山の渾身の技も止められてしまう。今度はディフェンスラインから俺が上がって、

必殺技の体勢に。

「アストロゲート…V2!!うおおおオオ!!」

「真!無限の壁!!」

イナズマジヤパンの怒涛の攻撃を、無限の壁一つで防ぎ切ってしまった。確かに、あんなディフェンス技があれば無失点記録も誇れるわな。マジでチート過ぎない?あれ。

「砂木沼!」

源田から砂木沼に渡る。鬼道がマークに付くが、砂木沼のテクニクに及ばず、抜かれてしまう。鬼道だけでなく、他のみんなもネオジヤパンの進行を許してしまう。

攻め続けた反動か…。

「今だ！瀬方、伊豆野！上がれ！」

砂木沼のサイドから瀬方と伊豆野が上がる。そしてネオジャパンは立て続けに円堂に向かってシュートを打ち込んでいく。円堂の身体にも、そろそろ疲労が溜まっていつているはずだ。これ以上は円堂が保たない。

そう考えた俺は、砂木沼からボールを奪取しようとするが。

「イリユージョンボール改!!」

「やっべー！」

イリユージョンボールで抜き去られてしまい、ゴール前まで突進していく。

「こい！ゴールは破らせない!!」

「それがお前のサッカーに対する熱い思いかッ…!!だが、これで終わりだアッ!!」

砂木沼は背中から神々しい翼を生やして、ボールと共に飛翔する。あれはアフロディの……。

「ゴッドノウズ！改イツ!!」

進化させたゴッドノウズを円堂に向かって打ち込んだ。

「絶対に止める！負けるわけにはいかない！世界へ行くためにも!!」

円堂は再び、正義の鉄拳の体勢に入った。

「正義の……鉄拳!!うおおおオオッ!!」

今までの正義の鉄拳とは違い、虹色のオーラを纏う拳がゴッドノウズにぶつかる。

また正義の鉄拳を進化させたよ円堂くん。君一体一試合でどれだけの経験値稼いでるのん?

進化した正義の鉄拳はゴッドノウズ改をも完璧に弾き飛ばす。ボールがタッチライオンを割ると、ここで選交代の指示が入る。

緑川に代わって飛鷹。綱海に代わって立向居。立向居を入れたということは、円堂がリベロになる証拠だ。円堂がリベロになれば、攻撃の幅が一気に広がる。

ただ一方で、飛鷹が入ることに不安がある。少しは上手くなっているものの、戦略的に考えれば木暮や栗松、不動を入れてもいいはず。飛鷹を入れるということは、飛鷹を入れなければならない何かがあるということだろう。

もしあの謎の蹴りのディフェンスを期待しているなら、博打にも程がある。もし意図的に出来るなら、最初からしているはずだしな。

そんな不安を抱きながら、ネオジャパンのスローイングで試合開始。ボールは平良に渡る。

「上がれエッ!!」

するとネオジャパンは、DFの牧谷と郷院を残して全員攻撃という大胆な策に出た。

その猛攻に、俺達は止めることが出来なかった。

真無限の壁が後ろに備わっているから出来る攻撃なんだろう。それに、円堂がリベロに入れば攻撃力を増すが、その一方守りが薄くなる。そこを全ての力を結集させるってことか。

「瀬方！伊豆野！」

伊豆野のサイドから瀬方と砂木沼が素早く上がる。伊豆野が攻め上がる瀬方に強烈なパス。

「あの動きはッ……！」

「木戸川清修の……！」

伊豆野からボールを受けた瀬方は上に思い切りダイレクトパス。そのパスを受けるために、伊豆野の肩を借りて砂木沼が飛ぶ。

「たとえ私の必殺技が破られようとも……我々が力を合わせればアツ!!」

瀬方からのパスを砂木沼はダイレクトにシュート。ダイレクトパスを繋ぎ続けた結果、砂木沼のシュートは凄まじい威力に変わっていった。そして打ち込んだ後、まるで組体操の様なポーズになる。

なんだあれ。

「トライアングルZ！改イ!!」

シユートの威力凄いのに決めポーズどうなの？

とはいえ、馬鹿にならない威力を放っている。そんなシユートにDFの飛鷹が横つ飛びでボールに触れようとするが、あと一つが届かない。

「クツソオオツ!!」

飛鷹は自棄になり、その場で思い切り足を振り切る。するとトライアングルZは急に失速し、そのシユートを立向居がキャッチ。

「円堂さん!」

立向居から円堂に繋げていき、イナズマジヤパンのカウンターが始まる。ネオジャパンは全員攻撃を仕掛けていた反動で、すぐには戻れずにいた。

「うおおおオオオツ!!」

砂木沼は雄叫びを上げながら全速力で円堂を追う。そして、円堂に追いついてシヨルダータツクルを繰り出す。

「行かせるものかアツ!!」

砂木沼の激しいタツクル。しかし、円堂は負けじと踏ん張り、砂木沼を突破する。

「鬼道!豪炎寺!」

ボールは鬼道に渡り、背後から豪炎寺と円堂が走ってくる。

「イナズマブレイクツ!V2!!」

進化させたイナズマブレイクをゴールに向かって放つ。

「真！無限の壁ッ!!」

ネオジャパンは真無限の壁を繰り出す、イナズマブレイクが少しずつ押ししていく。そして、真無限の壁にヒビが入り、木っ端微塵に崩してゴールへと入れた。

2―1でイナズマジャパンの逆転になる。そして、ここで試合終了。

なんとか、代表の座を守り切った。

「ふう……」

「……いい試合だったよ」

「……そうかい」

「次は決勝戦。世界まであと一戦だ。俺達に分まで、頑張ってくれよ」

「……おう。まあ出来る範囲でな」

試合が終わり、俺達は整列し始めた。

「……私達の完敗です。流石は日本代表を率いる監督。見事な采配でした」

そう称賛する吉良監督に、久遠監督は小さく会釈する。

「砂木沼！」

円堂は砂木沼の名を呼び、右手を差し出す。

「お前とやれて、良かったぜ」

そう言った円堂に対して、砂木沼は握手をせずに俺達にこう告げた。

「…確かに今日は負けた。だが、諦めたわけではない。お前達が少しでも気の抜いたプレーをすれば、日本代表の座は我々が奪い取る！」

「…ああ！挑戦なら、いつでも受けて立つぜ！」

とにかく、日本代表の座を守り切れて良かった。ここで奪われたら、俺千葉に帰れなくなるからね。

## 荷物持ち

ネオジャパンを退けた俺達は、決勝戦に向けて練習をしていた。一日の練習は終わり、今は自主練習といったところだ。

俺がりフティングでテクニックを鍛えていると、そこに基山と緑川、そして八神がやってくる。

「八幡、ちよつといいかな？」

「……どうした？何かあったのか？」

「単刀直入に言うよ。俺達三人で新必殺技作ってみないかい？」

基山はそう提案してきた。

連携技か……。あまりチームプレーは得意としてないんだよな、俺。

「この技を完成させれば、アジア予選や世界大会でも通じるはずだと思つてさ」

そんな技が完成すれば確かに大幅に戦力がアップすること間違いなしだろう。しかし、一つ疑問がある。

「……なんで俺なんだ？」

そんな俺の疑問に基山が答える。



「元エイリア学園の三人だからこそ、完成させることが出来るんじゃないかと思つてね」  
確かに。緑川も基山も、そして俺もエイリア出身だな。細かく言えば一時的に俺はエイリアだったけど。

基山の言い分に納得した俺は、その提案に賛成する。

「まあいいけど。それで、どういった必殺技なんだ？」

「…これは、ジエネシスのスーパードヴァアをアレンジしたシュート技なんだ」

しかし、スーパードヴァアのアレンジか……。確かにやってみる価値はあるかもな。

俺が足を引っ張らなければね。

「今日の自主練習は、そのアレンジ技を完成へと近づけるための練習だ」

「…了解。ならとつととやるか」

俺達は、そのスーパードヴァアのアレンジ技とやらの練習を行ない始めた。ただ、スーパードヴァアの完成にはだいぶ苦勞した記憶がある。だから、そのアレンジ技もそう簡単に行くとは思えない。

もしかしたら俺のせいで遅れてるかも知れないけど。

今日一日は、新技の練習に時間を費やした。

—————

翌日。

今日の練習は午前中に終了した。しかし、俺達三人はアレンジ技を習得するために午後の2時半まで自主練習を行なった。その自主練習を終えたあと、俺は自分の部屋に向かおうとすると、

「八幡、ちよつと待て」

そこへ、八神が引き止める。八神だけでなく、久遠を除いたマネージャー陣が揃って来た。

「……え、俺拉致されんの？」

「あながち間違いではないわね。比企谷くん、貴方も手伝いなさい」

「何をだ」

「えつとですね……夕飯の買い出しとかその他諸々ですね」

そういうのは壁山か栗松にやらせとけ。あいっなら喜んでやるだろうから。

俺は面倒だと断ろうとするが、

「あ、言っておきますけど、面倒って理由は無しですから」

音無さんはエスパー？なんで俺の思考が分かるのん？

だが、面倒の一言が却下された時の言い訳をもう一つ用意しているのだ。

「……今日は無理だ。忙しい」

「では、理由を述べてみなさい」

「アレだアレ。部屋でゴロゴロするから…」

「行きましようか」

音無の指示で八神は俺の腕を掴んで無理矢理に連れて行く。  
痛い痛い痛い。それに力強いし。

俺は半ば強制という形でマネージャー陣の買い出しを手伝うこととなる。と言っても、荷物持ちという素敵な雑用なんだろうけど。

「…はあ……」

「ごめんね、比企谷くん。練習で疲れてるのに付き合ってもらって」

木野ちゃん貴女は天使なのですか？さうなのですか？ヤバイこの子優しすぎて涙出そう。

「…別に、気にする必要ねえよ。荷物持ちも案外トレーニングになるだろうしな」

「ふふっ……本当、比企谷くんって捻くれてるなあ」

「うるせえ」

木野とそんなやり取りをしていると、彼女達がレジから帰ってくる。中身には、スポーツドリンクや消耗品などが沢山入っている。八神は平気そうだが、雪ノ下や音無が

重そうに持つてくる。

「……ん」

俺は手を差し出す。だが、雪ノ下は却下する。

「…別に大丈夫よ」

「アホか。お前体力ないんだから。途中でへばられても困る」

重いもん持つて暑い中買い出しとか、雪ノ下にしてみれば地獄の中の地獄だろう。

「……仕方ないわね。そんなに荷物を持ちたいなら、遠慮なく持たせてあげるわ」

そう微笑む雪ノ下は、俺に大量に買った消耗品やスポーツドリンクが入ったレジ袋を渡す。

「……ほれ。お前らも」

「わあ！ やつぱり男手がいると助かりますねー！」

音無からもレジ袋を受け取る。しかし、一方で八神は渡してこない。

「…八幡も荷物を持つているのだ。私も持つ」

「……そうかい」

俺達は次の買い出しに向かう。とはいえ、次に買ったものは比較的軽いものだったので、マネージャー達が持つていく。

「……あつっ……」

7月の初めにしては、クソ暑い。俺達が稲妻町の商店街を通り抜けていくと、  
「みなさん、少し休憩しませんか？ほら、あそこ！喫茶店ありますし！」

音無が指差す先にはオサレな喫茶店があった。

「…そうね。私もちよつと休みたいかも。雪ノ下さんと八神さんは？」

「私も別に構わないわよ」

「任せる」

「やったー！じゃあ、早速入りましょう！」

俺思うんだけどさ。男女比4：1で喫茶店に入るのって大丈夫じゃなくない？普通に  
考えたら何これ。

俺達は喫茶店に入る。

店内は冷房が効いており、地獄から天国に変わったような開放感であった。店員さんに  
テーブルに案内され、席に座る。俺の左には八神、右には音無が座る。向かいには木  
野と雪ノ下。

既におかしいけどねこの構図。

「いやー……涼しいですねー！」

確かに涼しい。なんならこのまま外から出たくないまである。しかし、俺の左手だけ  
が熱い。

それは何故か。

俺の左に座っている八神の右手が俺の左手を握っているからだ。互いの手の指の間を埋める様に握っている。向かいの雪ノ下達には勿論、音無に見られない様に死角を使って。

俺達はとりあえずメニューを見て、品を決めて頼む。俺は因みに、コーヒーである。

「比企谷先輩って、コーヒー飲むんですね？ブラックとかいけるクチなんですか？」

「逆だ逆。ブラックなんて苦くて飲めるか。ガムシロ三つ入れて砂糖も三杯くらい入れなきゃ無理だ」

「それって甘すぎない？」

「ぼっかお前。人間の人生は苦いことばっかだぞ。コーヒーくらいは甘いくらいがいいんだよ」

ほら完璧に決まった。自画自賛するレベルのフレーズだ。

だからそんな冷やかな目で見ないでくださいお願いします。そんな「お前何言ってるの？」みたいな表情はやめて。

「……まあそれはともかく。次の決勝の相手は一体どこなのかしらね」

「次にイナズマジヤパンと当たるのは、韓国代表ファイアードラゴンか、サウジアラビア代表ザ・バラクーダのどちらかですね。どちらも強豪チームですよ」

「…それに勝てば、世界か」

なんだかんだで険しい道のりだった。久遠監督の言う通り、あの時の俺達は紙切れ同然のレベルだった。オーストラリア戦ではボックススロックや戦術の切り替えに苦戦し、カタル戦では基礎体力や身体能力の違いを見せつけられた。

「…頑張つてね。比企谷くん」

雪ノ下が俺にそう微笑みながら言う。俺は小さく頷く。日本代表になった以上負けは許されない。勝つしか世界の頂上には行けないのだ。

「お待たせしました」

彼女達と会話をしていると、頼んでいた品々が運ばれてくる。コーヒーが運ばれた瞬間、ガムシロ三つと砂糖三杯をコーヒーの中に入れる。

「うっわ……甘そう……」

「この男、このコーヒーより甘いコーヒーを毎日飲んでるわよ」

「ええ……？ダメよ、毎日そんな甘いもの飲んじゃあ……。身体に悪いわよ？」

大丈夫だ。逆にマツカン飲みすぎてハイになるレベル。

……それはそれで大丈夫じゃないなそれ。

そうして、俺達はしばしの間喫茶店で休憩した。だいぶ休憩した俺達は、再び買い出しを始めた。

そして、雷門中に帰る最中。怪しいと言わんばかりの連中が、俺達が喫茶店とは別の店の前に隠れていた。

「何してるんや円堂！ほら、男なら女の気持ちを正面から受け取らんかい！」

「何をですか？」

「黙って見とき！今からがクライマックスなんや！」

「……何の？」

店の前に隠れていたのは浦部と財前、壁山と栗松、そして風丸と緑川であった。

や、マジで何してんの？

「あ、秋!?それに春奈達まで……！」

彼女達は一体隠れて何を見ていたのだろうか。その店に視線を向けると、円堂と久遠が一緒にいた。しかも、デカイパフエを頼んで久遠が円堂に食べさせようとしているところだった。

少しすると、久遠がこちらを向く。

「あ、あかん！」

「こりやバレたな……！」

「ほ、ほな帰るか」

浦部はそそくさとその場から去っていく。



「……よく分からんが、浦部に擲掬われたってところか？」

「……まあ、リカの面倒な性格が出ちやつてき……」

「……帰りましようか」

「え？ キャプテン達に一緒に帰ろうって言わなくて良いんですか？」

「……うん。円堂くんなら大丈夫だよ。それじゃあ行こ」

木野はそう言つて、先行していく。それに続いて俺達は後を追う。

—————

雷門中に戻つてきた。買い出しの荷物の整理を手伝い、自分の部屋に戻る。少し時間が経つと、俺の部屋にノック音が。

「どうぞぞー」

俺は適当に返事をしてラノベを読んでいると、入つてきたのは八神だった。八神は何も言わず、俺の身体にしがみつく。

「……お前の身体にはあの女達の匂いが付いている。すぐに上書きしてやる」

「や、今日の買い出しお前何にも言わなかつたじゃねえか」

「黙れ。私のモノが私に意見するな。お前は大人しく私の言うことを聞いていろ」

彼女はそう言って、再びあの行為が始まった。まずは挨拶代わりと言わんばかりの、首筋に軽めなキス。それを数回繰り返し、次はキスしたところを舐め始める。

そしていよいよ、八神は嘔みつき始める。

「ちよ、痛い痛い……」

これは自分だけのモノだ。そう言わんばかりのキスマークを付けている。キスマークを付け終えると、彼女はいつもの様に瞳孔が開き切った様な目をしながらこちらを見る。

「……お前はすぐ他の女に尻尾を振るからな。あいつらも、私だけの八幡と分かっているから、尚色目を使いおつて……。いいな？八幡は私だけを見ろ。私だけに依存しろ。私だけに欲情しろ。私だけを求めろ。私は八幡しか見ない。八幡にしか依存しない。八幡にしか欲情しない。八幡しか求めない。私達は互いがいれば、他のやつらなど必要ない。そういう関係なのだ」

「……流石に、そんな関係は無理だろ」

「無理？何故？私達がしようと思えば出来るはずだろう？イナズマジヤパンが解散した暁には、私達だけで家に住もう。私達だけで過ごそう。それくらい出来るはずなのだ。互いが互いを求め、互いが互いしか必要しないそんな生活を。……ああ……きつと幸せなのだろうな……」

彼女の目は死んでいるが、頬は明らかに赤くなっている。きっと、そんな妄想をして興奮しているのだろう。

ヤンデレって得てして変態もジョブプラスされるんだね。勉強になりました。

## 豪炎寺とお爺さんと泥と不良

俺達は決勝に向けて練習を行っていた。俺と基山と緑川はスーパーノヴァのアレンジ技に向けて練習。一方で、豪炎寺と宇都宮が新しい技の練習を始めていた。

見たところ、タイガードライブと爆熱ストームの連携技である。確かに、面白い試みかも知れない。あの二つが噛み合えば、戦力アップ間違いなしだ。

すると、豪炎寺が響木監督に呼び出され、一旦練習から抜けることになった。呼び出された豪炎寺の表情は驚いたものの、すぐに納得した様な表情だった。

呼び出される様な心当たりがあるのだろうか。

「八幡！ボーつとするなよ！いくぞ！」

「…悪い」

豪炎寺のことは頭の中の片隅に置いておいて、練習に集中する。

—————

「終わった……」

今日の一日の練習が終わり、片付けに入っているその間、豪炎寺と宇都宮が未だに新

必殺技の練習を続けていた。

先程から見ている感じでは、理事長に呼び出されてから豪炎寺の表情が変わっていた。表面上は取り繕っていたが、シユートを外す度に辛そうな表情というのか、そういう表情になっていた。

「あの、比企谷先輩」

「どうした、音無」

「豪炎寺先輩……今日何か変じやないですか？ 気合が入ってるのは分かるんですけど……」

「……確かに変だな。分かりやすいくらいに」

「何か知ってるんですか？」

「いや全く。ただ、理事長に呼び出されてから表情がまた変わった様な気がするからな。呼び出されるってことは、それだけの何かがあるってことだ。豪炎寺があんな表情するくらいなのな」

理事長に呼び出されてから表情が変わっていた。理事長に呼び出されるくらいのもだから……もしかすると。

「……やめとこ。今考えても解決も解消も出来ねえわ」

「ええ？」

「…戻るか」

豪炎寺の問題は、豪炎寺自身が解決すべきだ。部外者である俺達が介入しても、余計ややこしくなるだけだ。

その問題が、たとえサッカーをやめなければならぬということでも。

—————

翌日。

変わらない練習をして、休憩に入った時。

「円堂くん！手紙が来てるわよ！」

木野が走って来ながら円堂にそう言った。木野は円堂に手紙を渡して、封筒を確認する。

「差出人は無しか…」

「誰からでやんすかね？」

「ま、円堂のことだからファンレターってことはねえだろうな」

「あんたの場合はもつとないけどね。うっしっし」

そんなやり取りをしている中、円堂がずっと静かであった。そんな様子を見た木野が声をかける。

「この手紙…」

立向居と栗松が手紙の内容を覗く。

「この字は—」

「キャプテンの特訓ノートと同じ字でやんす！」

手紙の内容は不明だが、どうやら円堂のお爺さんの字で書かれた内容であった。

「…ということは、この手紙は大介さんから？」

「でも円堂のお爺さんは、もうずっと昔に亡くなって…」

そういえば円堂のお爺さんが亡くなったことしか知らなかったけど。

「…音無。円堂のお爺さんって病気とかで亡くなったのか？」

「……長い話になるんですけど……」

俺は音無から円堂のお爺さんの死にまつわる話を聞いた。

要は、その時監督だった円堂のお爺さんが気に入らなくて、雷門中のメンバーであった影山ってやつがバスに細工して事故らせて殺したということである。

「……なんて書いてあるの？」

「…頂上で待ってるって…」

「FFI世界大会に参加するどこかのチームに、円堂くんのお爺さんが関わっていると  
いうことになるわね」

「…もしかすれば、罨かも知れせんね」

目金がそう言った。

「どこかの国が円堂くんを動揺させるために、円堂くんのお爺さんの字を真似て送ってきたのです」

目金はそう推理するが、それは間違いだ。

「…多分一個も合っていないぞ、お前の推理」

「? どういうことなのだ、八幡?」

「そもそも、こんな文字を真似れるわけがない。だって、こんなクソ汚い字をどうやって真似ろって話だ。それこそ、円堂のお爺さんと長く関わっていないければ書けない文字だからな」

見た感じぐちゃぐちゃにしか見えないが、仮に適当にぐちゃぐちゃな字を送っても、円堂は読むことが出来ないだろう。そもそもこれを送った人物は円堂のお爺さんの文字を読み解くことが出来なければ真似もクソもない。

「で、ですが…」

「大体、国を背負う連中がこんな狡い真似してくるわけないだろ」

仮にも世界一を目指して競う大会だぞ。そんなやつがいたなら、そいつ俺みたいになクソ野郎だろ。



「ま、気にしても仕方ないさ！この手紙が間違いなら、それはそれで済む話だしな！本物なら、F F I 世界大会に行けば会えるってことだしさ！それより特訓しようぜ！」

こいつのポジティブには本当に頭が下がる。どうしたらそんなポジティブになれるのだろうか。そんな下らないことを思っていた俺のところ、雪ノ下がやってくる。

「…比企谷くん。ちよつといいかしら」

「…どうかしたか？」

「さっきの円堂くんのお爺さんの話、引つかる部分があつただけれど……」

雪ノ下は、さっきの話に疑問を抱いていた。多分、その疑問は俺と同じだろう。

円堂のお爺さんがなんで生きてるって疑問もあるが、それはまあ置いておこう。

俺達が引つかった部分。それは。

「……影山ってやつが、本当に一人でそこまで出来たのかって話だろう？」

円堂のお爺さんを事故に見せかけて殺そうとしたのは影山だと言う。だが、その時影山は中学生だ。そんなことが出来るなら、マジで生粋の殺人鬼としか言いようがない。

影山ってやつのことを俺達はあんまり知らんけども。

「…まあ、影山の後ろに誰かいたんだろうな。影山に力を貸すほどの存在が」

とはいえ、影山は死んだらしいし。何を思っただ背後にいたやつは影山を操ったのかは知らないが、少なくとも俺達にはあまり関わりのない話だろう。

そんな話は置いておいて、決勝戦に向けてアレンジ技を完成させなければ。

—————

そう思っていた時期がありました。決勝の相手は韓国代表ファイアードラゴンとなり、俺達は必殺技の練習に取り掛かろうと意気込んだ。

だがしかし。

「決勝までの3日間は、ここで練習してもらおう」

目の前に広がっているグラウンド、もとい泥がたつぷりと流されているグラウンドで練習しろとのこと。

「外出禁止の次は泥のグラウンド……」

これも恐らく、韓国戦に対する練習場なんだろう。しかし、みんなは久遠監督の意図に気付いておらず、意見する。

まあ俺もなんで泥のグラウンドでしなきゃならんのかは知らんけど。

「必殺技の特訓は必要ない。お前達は、私の言うことに従っていればいい」

そんな横暴染みた監督の物言いに、みんなは納得できずに入ることが出来なかった。すると、一番最初に入ったのは円堂でも鬼道でもなく、豪炎寺だった。

豪炎寺は泥のグラウンドで特訓を始め、一人でドリブルを始めた。

俺も特に意見することがなく、泥のグラウンドに入って一人でリフティングを始める。すると今度は円堂がグラウンドに入り始める。

「豪炎寺！」

円堂が豪炎寺を呼びかけると、豪炎寺は円堂に向かってパス。円堂の足元にボールが着地するが、代わりにその衝撃で泥がユニフォームに飛び散る。

「円堂！」

豪炎寺は円堂に背を向けて走っていく。円堂は豪炎寺に向かってボールを返し、そのまま二人一緒に走っていく。

「鬼道！」

「ああ……俺達も行くぞ！」

そんな二人の特訓を見ていた彼らも、次から次へと泥のグラウンドに入り始めて特訓を始める。

必殺技の特訓をやめにして、決勝戦までの三日間は泥のグラウンドで泥に落ちない様にボールをコントロールしながら特訓を続けた。

—————

決勝当日。FFスタジアムに向かうために、俺達はイナズマキャラバンに乗り込んだ。

「…八幡、頑張れよ」

「…比企谷くん、頑張つて」

両サイドは混ぜるな危険レベルの関係である雪ノ下と八神がいる。

「…雪ノ下。お前は他所の席に行け。八幡の隣にいるのは、私だけでいい」

「あら奇遇ね、八神さん。私も同じことを思っていたの」

彼女達がそんなやり取りをしていると、キャラバンに急ブレーキがかかる。

「どうしたんですか!?!」

木野が古株さんにそう聞くと、古株さんは目の前を指差す。その指差すところに視線を向けると、キャラバンの前にはデコチャリで妨害するあいつらがいた。

「……唐須」

虎ノ屋に向かう前に絡んできた不良のリーダーと、また別の不良を連れてキャラバンの前に立ちはだかっていた。

## アジア予選決勝

「お久しぶりですねエ、飛鷹先輩」

FFスタジアムに向かう途中、以前俺達に絡んできた不良のリーダーとまた違う取り巻きが妨害してきた。

「唐須……テメエ何の真似だ!」

「今から大事な決勝戦らしいじゃないですか。だから応援に来たんですよ。ほら、先輩にお世話になった連中もこんなに集まってくれましたよオ」

借りを返すつてのはこういうことだったか。この騒動を収めるために、円堂と飛鷹、それに綱海や土方がキャラバンから降りていく。

「そこを退いてくれ! スタジアムに急がなくちゃいけないんだ!」

「えエ? 折角応援に来た友達を追い返すんですか先輩イ?」

そんな唐須の言葉に、綱海は苛立ちの表情を見せて迫る。

「何が応援だ! タチの悪い嫌がらせじゃねえか!」

「おつ? いいんですかア? 喧嘩なんかしちゃったら折角の決勝戦、出場停止処分になっちゃいますよオ?」

確かにここで揉め事を起こせば決勝戦には出れなくなる。かと言ってこのまま手を拱いていると決勝戦に出れなくなる。こいつらはどうしても俺達を試合に行かせたくないらしい。

「お別れです、みなさん」

そんな中、飛鷹が突然に別れを告げる。

「行ってくれキャプテン。俺がこいつらの相手をする。元は俺が招いた問題。こんなことで、みんなの夢を台無しにしたり出来ねえ」

「へエ……やるんですかア？」

「ああ」

飛鷹が不良達に詰めて行こうとすると、円堂が飛鷹の肩を掴み引き止める。

「やめろ、飛鷹」

「大丈夫ですよ。こんな連中、俺一人で……」

「違う。お前も一緒に試合に出るんだ。誰一人欠けちゃいけない……俺達は、全員でイナズマジヤパンなんだ！」

円堂は飛鷹にそう説得する。だが、そんなやり取りに唐須は鼻で笑う。

「美しい友情つすねエ……そんなもん!!全部俺達がぶち壊してやるぜええエエ!!」

唐須と取り巻きは飛鷹と円堂に襲い掛かろうとするが、それを阻止した者達が俺達の

前にスケボーで現れた。

「間に合ったみたいですね……！」

「す、鈴目？」

そいつらは、以前俺達に絡んできた不良の取り巻きだった。あとの一人は、初めて見る顔だ。

「飛鷹さん、ここは俺達に任せてください！」

「これ以上、唐須のやつに好き勝手にはさせません！」

「お、お前達……！」

「急いでください！試合に遅れちゃいけません！」

「す、鈴目……！」

「俺達の夢を消さないでください……！飛鷹さんが活躍するのが、俺達の夢なんです……！羽ばたいてください、飛鷹さん！世界に!!」

俺達は鈴目とかいう不良に後を任せて、キラバんでFFスタジアムまで向かった。本当、なんだあのカツコいいあいつらは。ドラマでも中々ないぞ。

---

俺達はFFスタジアムに到着。出口前には、久遠親子が待つていた。

「遅れてすみません！」

「…全員揃っているな？行くぞ」

「はい!!」

俺達はFFスタジアムに入場。観客席を見回すと今まで以上に人が増えている。流石は決勝戦だ。

俺達はベンチ前で円陣を組む。

「みんな！いよいよ決勝戦だ！絶対に勝って、世界に行くぞ!!」

「おお!!」

「…元氣そうだね」

俺達が円陣で意気込むと、俺達に話しかける者が現れる。そちらに視線を向けると、そこにはあいつがいた。

「それでこそ、全力で倒す価値があるというものだ」

「あ、アフロデイ!?!」

俺達の目の前には、世宇子のキャプテンで一時的に雷門の仲間だったアフロデイがいた。いや、アフロデイだけではなく、後ろからまた見知った顔が現れる。

「やつと会えたね」



「長くて退屈したぜ。決勝戦までの道のりは」

「ガゼル!？」

「…バーンまでもが何故ここに……」

アフロデイの後ろから現れたのは、エイリア学園ダイヤモンドダストのキャプテンであるガゼル、そしてプロミネンスのキャプテンであるバーンがアフロデイと同じユニフォームを着ていた。

その顔ぶれに俺は勿論、基山や八神、緑川が驚く。

「涼野風介。南雲晴矢。彼らもまた、僕のチームメイトさ」

「それじゃあ、まさか……」

「そう。韓国代表…ファイアドラゴン!」

バーンとガゼルがいなくなったのは、韓国代表に入ったからなのだろう。

とはいえ、三人とも日本人はず。何故韓国代表に選ばれているのか。

「でも、なんで……?」

「不思議ではないだろう?僕が母国のチームに選ばれても」

アフロデイって、韓国出身だったのね。

「俺達は、アフロデイにスカウトされてこのチームに入ることを決めた」

「もう一度、君達と戦うためにね」

「かつての僕達だとは思わないことだ。各々が過酷な特訓を重ねた。そしてこのチームには、チェ・チャンスウがいる」

彼らの隣から現れたのは、藍色のアフロ頭にゴーグルが特徴で、目を閉じている戦士。左腕にキャプテンマークを付けているので、ファイアードラゴンのキャプテンは彼らしい。

「初めまして、イナズマジヤパン。今日はいいい試合にしましょう」

「ああ」

「しかし、気をつけて。決勝戦のフィールドには、龍がいますから」

彼はそう告げ残して、俺達の前から去っていく。

……韓国代表にも材木座みたいなやつがいるんだな。材木座に比べれば数十倍はマシなんだろうけど。

「……アフロディ達が相手とはな」

「確かに彼らも強力なプレーヤーだけれど、一番警戒すべきなのはあのチャンスウという男よ」

「……そんな強いのか？」

「……フィールドを支配する韓国きつての司令塔。その巧みなゲームメイクは完全なる戦術と呼ばれ、あらゆる敵を倒してきたそうよ。まさに希代の天才ゲームメイカー……龍

を操る者と呼ぶ者もいるわ」

流石はユキペディア。本当、どっからそんな情報仕入れてるのか気になるな。

そんな情報を聞いて、怖気付くこともなく、逆に闘志に火が付いた者が一人。

「面白いじゃないか！やろうぜみんな！決勝戦だ！」

「おお!!」

俺達は試合前のストレッツチャウオーミングアップを入念に行なった。

「…まさか、ガゼルとバーンが韓国代表だったとはな……」

「まさに青天の霹靂だな。けど、こうやってエイリア学園の仲間達と戦い続けるのは、俺達の運命なのかもしれない」

「…成る程。なら、尚のこと負けられないな。砂木沼達の思いに掛けても」

「…そうだな。どのみち、勝つしかねえな」

そう。勝つしかない。世界一になる以上、相手が誰だろうが勝てばいいだけだ。

ストレッツチャウが終わり、決勝戦のスタメンを発表される。

「FWは吹雪、豪炎寺、基山。MFは風丸、鬼道、緑川。DF、比企谷、土方、壁山、綱海。そしてGK……立向居だ」

「え、ええええええッ!?!」

このスタメンには俺も驚かされた。まさかの円堂がベンチスタートとは。このスタ

メンに、みんなが納得せずに意見する。

「ち、ちよつと待つてください！何故円堂をベンチに!？」

「今のチームに円堂は必要ない。それだけのことだ」

久遠監督は簡潔に理由を述べた。俺達はその指示に従い、フィールドへと向かっていく。

……監督が意味もなく円堂を戦力外通告を言い渡すわけがない。つまり、今のあいっには足りない何かがあるということだ。それを円堂が気付かない限り、今日の試合には出られない。

頼むからさっさと戻ってきてくれ。

## パーフェクトゾーンプレス

円堂を欠いたスタメンで決勝戦を迎えた。このスタメンには、流石のアフロデイ達も驚いている。

「おいおい！なんで円堂が出てきてねえんだよ！」

「大事な決勝戦だというのに……一体何を考えているんだ……？」

それは知らん。久遠監督に聞いてくれ。円堂に足りないものがあるから出していないんだろうが、その足りない何かは俺も検討はつかん。

とにかく、円堂抜きで試合が開始された。イナズマジャパンのボールから開始され、攻め上がっていく。ボールを受けた風丸はライン側を駆け上がり、それに合わせて豪炎寺と吹雪が上がっていく。

「取る！」

ウミヤンが風丸にスライディングタックル。風丸はそれを飛んで躲し、センターリング。

しかし、チャンスウは謎の指揮で指示を出す。豪炎寺にはドウユン、吹雪にはミヨンホがマークに付く。するとボールがカーブし、そのセンターリングを受けたのは基山であ

る。

「流星……ブレードッ!!」

基山は流星ブレードを放った。すると、ジョンスは両手から炎を出し始める。

「大爆発張り手!!」

炎を纏った両手はまるで張り手の様に次から次へと流星ブレードを連続で叩いていく。そしてフィニッシュは両手同時に叩いて爆発させることで、流星ブレードを弾き飛ばす。

ボールが飛んだ先には、チャンスウがいた。チャンスウはボールを受け取り、攻め上がっていく。

「涼野!・南雲!・アフロデイ!・上がりなさい!」

「おう!!」

韓国最強のスリートップがチャンスウの指示で攻め上がっていく。

「行かせるかア!!」

土方のスライディングがチャンスウを襲う。だがチャンスウはセンタリングをすることで上手く躲す。

「アフロデイか!」

センタリングを受けるのはアフロデイ。俺はアフロデイに突っ込んでいくが、あと一

歩遅かった。

「真…ゴツドノウズ!!はああああアア!!」

砂木沼のゴツドノウズ改より更に上の真ゴツドノウズが立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドオツ!!」

しかし、最大まで進化したムゲン・ザ・ハンドは真ゴツドノウズをがっちりキャッチする。

だが、ファイアードラゴンの攻撃は尚も続く。ペクヨンが攻め上がっていくが、豪炎寺の強烈なスライディングタックルでボールを奪う。

しかし、ここでホイッスル。どうやら、豪炎寺のスライディングはファウルだったのだ。

豪炎寺がファウルをするとは……。

ファイアードラゴンのフリーキックとなる。蹴られた先には土方とウンヨンがいたが、クラッシュしてボールはそのまま溢れる。

「もらった!」

そのこぼれ球を俺が拾って攻め上がっていく。しかし、俺の背後からバーンとガゼルが追いかけてくる。

「比企谷、こっちだ!」

俺は中盤にいる鬼道にパスするが、それをチャンスウがインターセプト。奪ったチャンスウはバーンにボールを預ける。

バーンが攻め上がるとともに、ガゼルも攻め上がる。カオスツートップの二人は目にも留まらぬパスワークで土方と壁山を抜き去る。

「ここは行かせない！」

だが、前線にいた吹雪がゴール前まで戻ってディフェンスに回った。

「スノーエンジェル！」

吹雪の新たなディフェンス技、スノーエンジェルで二人の動きを止め、ボールを奪った。吹雪は勢いに乗って攻め上がっていく。吹雪だけでなく、後ろから土方までもがオーバーラップ。

「土方くん！」

「おう！あの技だな！よっしゃあ！」

二人はミヨンホを躲してゴール前に。

「行くぞ吹雪！！」

「ああ！！」

「これが俺達の連携技ア！！」

吹雪がトップスピードで駆け上がり、そんな吹雪に向かって土方が力強いシュート。



それにタイミングを合わせて、吹雪が飛んで更にシュートチェイン。

「サンダー……!!」

「ビースト!!」

青い雷を帯びたボールはジョンズに向かって飛んでいく。

「大爆発張り手!!」

ジョンズは張り手でシュートを止めようとするが、サンダービーストの威力が勝り、ファイアードラゴンのゴールを打ち破った。

1-0でイナズマジャパンの先取点。ここで連携技を間に合わせてくるとは恐れ入る。それに、吹雪のディフェンス技……。

あいつ益々チートみたいになってきてない？攻守優れすぎにも程があるでしょ。カッコよすぎだろ。

「完成してたんだな、二人とも!」

「凄いシュートだったっス!」

「よし!!この調子でガンガン攻めようぜ!!」

確かに新技が炸裂している風向きではある。ただ、このまま簡単に終わる連中でも無さそうだな。

そんな不安を抱きながら、試合に集中することにした。

点を取られたファイアードラゴンからのボールで試合が再開。韓国はボールを繋いで攻め上がっていく。チャンスウにボールが渡るが、吹雪がディフェンスに回る。

「スノーエンジェル！」

吹雪の活躍が止まらない。ボールを奪った吹雪は駆け上がっていく。だが、奪われたのにも関わらずチャンスウは不敵な笑みを浮かべる。

「吹雪！」

中盤にまで駆け上がっていた綱海に吹雪はパス。すると、

「龍の雄叫びを聞け！我らが必殺タクティクス…パーフェクトゾーンプレス!!」

「な、なんだ!？」

チャンスウが謎の言葉を発する。と同時に、ボールを持っている綱海にチャンスウとウミヤンが高速で走り回って包囲し、すぐ近くにいた吹雪をドウユン、ミヨンホ、ペクヨンが高速で走り回って包囲する。

「……なんだこの技。吹雪と綱海だけじゃなく、俺達まで分断するって寸法かよ」

「残念だがこれは技ではない。戦術だ」

俺の呟きに、涼野がそう答える。

「見ていてごらん。二つの包囲網の動きを……龍が君達を締め付けてくるよ……」

フィールドに龍がいる……チャンスウが指示することで、まるで龍が締め付ける様に

プレーヤーを包囲するということか。

これが完全なる戦術……。ボックスロックとはまた違った必殺タクティクスだ。

「さあ、貴方はこの包囲網をどうやって脱出しますか？」

パーフェクトゾーンプレスの包囲網がじわじわと縮まる。外から見てるからあまり分からないが、恐らく綱海と吹雪の心境は穏やかではないはずだ。

すると、綱海がついにボールを奪われてしまう。綱海を囲う包囲網は、綱海を嘲笑うかの様にダイレクトでパスをしていく。

「この野郎……取り返してやる！」

綱海は包囲網にタックルするが、弾き返されてしまう。倒れた綱海の次は、外側にいる吹雪をターゲットにした。MFの包囲網とDFの包囲網がダイレクトパスで翻弄していく。

「このスピードの中で、なんて正確なパス回しなんだ！」

「奪うことが出来ますか？」

「ああ！ やってやるさ！」

「あつたまきました！ こんな壁打ち破ってやる！ 吹雪！」

「ああ！」

綱海と吹雪はMFの包囲網の中からボールを奪い返そうとする。しかし、やつらは絶

妙なところでパーフェクトゾーンプレスを解除する。

すると解除されたことで、綱海と吹雪は勢い余って激突してしまう。チームメイト同士でクラッシュしやがった。吹雪は脛を、綱海は膝を押さええている。

「……これも戦術のうちってことか」

「その通り。この悲劇を招いたのはあの二人です。徹底したプレッシングによって相手の動きを封じ、恐怖によって精神を支配する。こうなるともう正常な判断は出来ません」

「…動きを封じて精神を支配する……」

「これこそが我らファイアドラゴンの必殺タクティクス……パーフェクトゾーンプレスです」

なんて厄介なもん作ってきてんだよ。

しかし、パーフェクトゾーンプレスは見事と言える。包囲網で動きを止めるのは勿論だが、狭まることで相手の精神を支配していく。人間、狭いところや暗いところに閉じ込められてしまうとピリピリしてしまうという説がある。

「選手交代だ。吹雪に代わって宇都宮。綱海に代わって飛鷹」

「監督！」

「僕達、まだやれます……ぐっ！」

「そんな足では戦力にならない」

負傷した吹雪と綱海が抜け、代わりに宇都宮と飛鷹が入ることになった。

フリーキックでイナズマジヤパンボールから試合が再開。ボールを受け取ったのは緑川。

「ライトニングアクセル!!」

迫るウンヨンと緑川は閃光のごとくドリブルで躲す。しかし緑川に向かって次にソ  
ンファンが迫る。緑川はバックパスで土方に。

「よっしゃあー!」

「俺が繋ぐー!」

土方と共に飛鷹が攻め上がっていくが、

「パーフェクトゾーンプレス!!」

すぐさまファイアードラゴンはパーフェクトゾーンプレスを発動。包囲されたのは  
土方と飛鷹だ。

「土方! 飛鷹! 無理はするな!」

あの中に入れば、否が応でも無理しなきや突破出来ない。そういう思考になってい  
た。土方はボールを奪われ、取り返そうとした飛鷹もあえなく撃沈。

ボールはパーフェクトゾーンプレスの外に弾き出され、涼野が受け取って攻め上がっ

ていく。涼野はチャンスウにボールを繋げていく。

「行かせないっス!!」

「奈落落とし!!」

チャンスウは空中でボールをかかと落としてボールを叩きつけ、バウンドさせたボールを壁山にぶつけて吹き飛ばして突破する。

チャンスウから南雲へのセンチタリング。

「アトミックフレア! V2!!」

以前よりパワーを増したアトミックフレアが立向居に襲いかかる。

「ムゲン・ザ・ハンドオツ!!」

立向居の最大のムゲン・ザ・ハンドをアトミックフレアにぶつける。

「うああああ!!」

だが、南雲のアトミックフレアの威力がムゲン・ザ・ハンドを超えており、破られてしまう。

1-1の同点。反撃をしたいところだが、パーフェクトゾーンプレスを発動されたら必殺技どころかまともに突破出来ない。

いや、ちよつと待て。必殺技どころじゃない……。まさか、あの特訓はパーフェクトゾーンプレスを破るためだったってことか？

俺は久遠監督の言葉や特訓の意図を、頭をフル回転させて考える。

あの特訓は人によって様々だったが、前提条件として泥に落ちない様にキープするこ  
とだった。つまり、地面にボールを着けないということ。だから必然的に空中のダイレ  
クトパスに切り替わる。

空中のダイレクトパス……。

「……あ」

久遠監督が必殺技を禁止したのは、必殺技が必要じゃないっていう意味ではなく、必  
殺技が使えないということを教えたかったのだろう。全てはパーフェクトゾーンプレ  
スを破るために。そのパーフェクトゾーンプレスを破るために、泥の特訓でやってきた  
ことをそのまますればいい。

「パーフェクトゾーンプレス……想像以上に手強いな」

「心配ないですよ豪炎寺さん！俺達の秘密兵器をやつらに見せてやりましょう！」

「……あの必殺技か」

「けど、やつらのプレッシングを受けたら、必殺技どころじゃないぞ」

「……そう。必殺技どころじゃない」

パーフェクトゾーンプレスの打開策を説明しようとすると、鬼道がハツと思いつい  
た、というより思い出したような挙動になる。

「……成る程。そういうことだったのか」

「え、俺まだ何も言っていないけど」

「…比企谷、確認がしたい。先日まで泥の特訓をしていた理由は、パーフェクトゾーンプレスを破るため、だな？」

「…そうなのか？」

流石は鬼道。

でもドヤ顔したんだよ俺。ちよつと自慢したくてドヤ顔したの。だから俺のドヤ顔返して？」「何お前ドヤ顔して出てきたわりには鬼道に全部持っていかれてるじゃん」とか思われたら今すぐ代表から抜けるから俺のドヤ顔返して？

俺はとりあえず鬼道の確認の言葉に頷く。

「やはりか……」

「鬼道、どういうことなんだ？」

「…みんな。泥の特訓を思い出してくれ。フィールドを泥だと思ってボールをコントロールするんだ」

「パーフェクトゾーンプレスはあくまでボールを地面に付けた状態だから有効なんだ。けどボールを宙に浮かせればそれは無効になる」

「久遠監督が言っていた必殺技は必要ないって、このことだったんすね！」



パーフェクトゾーンプレスは鬼道に任せるとしよう。むしろ、パーフェクトゾーンプレスを破つてからのことも考えなければならぬ。

そのためには。

「…基山、緑川。俺達は前線に上がる。あの技だ」

「ああ、分かった」

「……緑川。いけるか？」

俺は緑川に確認する。確かにあの技は大事だが、緑川自身のことが一番大事だ。

「何を言ってるんだよ八幡。俺なら大丈夫さ。俺達の技、ファイアードラゴンに見せてやろう！」

「……そうだな」

緑川本人がやるというなら俺はそれを止めない。そんな権利は俺にはないからだ。

策は講じた。後は、結果を見せるだけだ。

## 一進一退

パーフェクトゾーンプレスの打開策を決めて、俺達からのボールで試合再開。宇都宮が中央を攻め上がっていくが、ウンヨンとペクヨンがマークに付く。

「虎丸、こっちだ!」

宇都宮からボールは鬼道に渡る。

「パーフェクトゾーンプレス!!」

次に包围されたのは鬼道と宇都宮だった。

「次なる餌食は貴方です」

「ここは泥のフィールドだ」

「何?」

「さあ、奪ってみろ!!」

鬼道はボールを上大きく蹴り上げる。このプレーに流石のファイアードラゴンもパーフェクトゾーンプレスを解除しなければならなくなった。

「俺が取る!」

跳躍力のある南雲がボールを取ろうとするが、その前に風丸にボールを取られる。風

丸は鬼道のパスをダイレクトに宇都宮に繋げる。

「泥のフィールドって、こういうことですかッ！」

宇都宮から土方に。怒涛のダイレクトなパス回しでファイアドラゴンを翻弄。ボールは俺に渡し、それと同時に基山と緑川が上がっていく。

「行かせるか！」

ウミヤンが突進してくる。

「サザンクロスカットッ！」

サザンクロスカットでウミヤンを突破し、基山に繋ぐ。

「行くよ！緑川、比企谷くん！」

俺達はボールを囲み、煌びやかな黄金のオーラをボールと共に纏いながら上へと大きくジャンプ。

「あ、あれは！」

「スーパーノヴァか!？」

確かにソースはスーパーノヴァだが威力が違う。スーパーノヴァのアレンジ技……

その名は。

「ネオ・ギヤラクシイイイイーツ!!」

黄金のオーラを纏うボールに三人一緒に波動の様なものを発生させてぶつける。ぶ

つけられた黄金のオーラを纏うボールがジョンスに向かって飛んでいく。

「大爆発張り手エツ!!」

ジョンスは大爆発張り手を繰り出す。しかし、ジョンスの大爆発張り手は破られてしまい、ジョンス諸共ゴールに叩き込んだ。

「よしー!」

「決まったな! ヒロト、八幡!」

「…そうだな」

2-1で勝ち越しリード。

このままもう一点取りたいが、多分チャンスウは警戒してくるはずだ。さっきみたい  
に、そう簡単にはいかないだろう。

ファイアードラゴンのキックオフで試合開始。ファイアードラゴンは流れる様に攻  
め上がってくる。

ウンヨンにボールが渡るが、それを風丸が奪取。

「虎丸!」

宇都宮にボールが渡り、それと同時に豪炎寺も攻め上がる。

「豪炎寺さん! 今こそ、俺達の秘密兵器の出番ですよ!」

「よしー!」

しかし、豪炎寺の表情がどこかおかしく見える。試合に集中し切れていない……そんな表情で必殺技の体勢に入る。

「タイガー……!!」

宇都宮のタイガードライブが炸裂。それに合わせて豪炎寺が飛ぶ。

「ストオオーム!!」

二人の連携技が飛んでいくが、ゴールから思い切り逸れてしまう。やはり、豪炎寺は集中し切れていない。連携技も、おそらく豪炎寺に問題があるのだろう。

ジョンスのゴールキックで再開。ボールをインターセプトしようと、土方と鬼道が向かうが、チャンスウが横からボールを奪ったまま、奈落落としての構えに入る。

「奈落落とし!!」

ボールをぶつけられた土方は後ろに吹き飛ばされ、そのまま鬼道に激突し、倒れてしまう。ぶつけられたボールは場外に飛んでいく。

すると、さっきのクラッシュで今度は土方が足を押さえている。

「すまねえ……捻つちまった。……いって」

鬼道はすぐに立ち上がるが、土方は試合続行不可能の状態だ。

「選手交代。栗松、行け」

「はい!」

負傷した土方に代わって栗松が入る。

チャンスウからのスローイング。ボールはペクヨンに渡る。風丸はペクヨンにチエック。だが、抜かれてしまう。

「ザ・ウオオール!!」

壁山のディフェンスでペクヨンからボールを奪う。

「栗松!」

壁山は栗松にパス。入ったばかりの栗松が攻め上がっていく。

「まぼろしドリブル!!」

栗松はまぼろしドリブルを繰り返す。だが、ウミヤンは動じずに、必殺技の体勢。

「地走り火炎!!」

ウミヤンがまぼろしドリブルを破って攻め上がる。涼野へとパスするが、それを基山がカット。しかし、すぐさま南雲がボールを奪ってアフロデイにセンターリング。

「進化しているのは……君達だけじゃない!」

アフロデイの背中から、ゴッドノウズより遙かに煌びやかで凄まじい翼が生える。

「ゴッド……!!ブレイクツ!!はああああ!!」

ゴッドノウズの進化版、ゴッドブレイクが立向居に向かって飛んでいく。

「ムゲン・ザ・ハンドオ!!うおおおオオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出す。だが、ムゲン・ザ・ハンドは簡単に破れてゴールに突き刺さる。

あつという間に同点に追いつかれてしまった。パーフェクトゾーンプレスがなくても、やはり韓国の個々の実力は高い。

同点になったところで前半終了。同点とはいえ、韓国はまだ余裕の笑みを浮かべて入る。

ハーフタイムになって、俺達はベンチに戻る。

後半は更にメンバーを変えろ。緑川、鬼道。お前達は下がれ」

「ち、ちよつと待ってください！まだやれます！」

「緑川。無理をし過ぎだ。それに、さっきのネオ・ギャラクシーで足に相当負担がかかったはずだ。鬼道は土方とぶつかった時、膝を痛めただろう。下手に庇ってプレーすれば悪化するだけだ」

鬼道と緑川をベンチに下がる。

「不動。後半から入れ」

「不動!？」

久遠監督のその指示に誰もが驚き、不動に視線を向ける。

「…へエ、やつとですか」

「ま、待つてください！不動はまだチームに解け込んでいません！世界大会進出のなかった試合に、何故不動を……！」

「相手は不動を知らない。言うなれば、不動はジョーカーだ」

ジョーカー。つまり切り札ということか。

「……そういうことか。今まで不動を試合に出さなかったのは、不動の情報を相手に流さないため。そんな実力未知数なやつが試合に出てきたなら、少なからず相手は不動に對してどう動けばいいか分からないってことだ。流れを呼び戻すには、確かにそれもありだな」

「確かに、一理あるわね」

「いいこと言うねエ、比企谷くん」

不動は不敵な笑みを浮かべながら俺の肩を持つ。

「強い者は弱い者を喰らって生きる。それが自然界のオキテだ」

不動はそう吐き捨ててウォーミングアップを始めた。一人は不動が入り、もう一人は。

「後一人は、木暮だ」

……ということは、円堂はまだ出てこないか。とはいえ、監督も意地悪で言っているわけではない。足りないものをさつきと見つけて欲しい。



## 不動明王

依然、円堂を欠いたまま後半戦に突入する。鬼道と緑川の代わりに木暮、そして今大会初出場の不動が入る。

韓国サイドから攻撃が始まり、ボールは南雲に渡る。入ったばかりの不動が南雲にチャージする。

「その程度で俺から奪えるかア！」

不動は諦めずに何度もチャージし続ける。いい加減にしつこく感じた南雲は、少し荒めに不動を押し飛ばそうとするが、絶妙なタイミングで不動はそれを躲す。

「何ッ！」

勢い余った南雲は体勢が崩れてしまい、その隙に不動がボールを奪取。駆け引きを使った頭脳プレーだ。攻め上がっていく不動にペクヨンがチェック。スピードに乗った不動はペクヨンを抜き去っていく。

続いてウンヨンが不動の前に立ちはだかるが、不動は自陣に戻ってくる。

何逆走してんのあの子。サッカーやらなさ過ぎてルール忘れたの？

自陣に戻る不動は壁山に向かって走っていく。

「どういっつもりっすか!？」

壁山が困惑している隙に、不動が勢いのあるボールを壁山に蹴り込んだ。ボールは壁山に当たり、ウンヨンの頭を超えていく。そのボールを不動が拾い、再びファイアードラゴン陣内に攻め上がっていく。

この前代未聞のプレーにイナズマジヤパン、およびファイアードラゴンが驚愕する。不動にマークに行つたのはウミヤン。今度は、風丸にボールをぶつけて突破する。

「こっちだー！」

基山がパスとコールするが、不動は無視してゴールに向かつていく。そしてそのままジョンスに蹴り込むが、ジョンスはガツチリと掴み取る。

そんな不動のワンマンプレーに、少なからず不満を抱く者もいた。

「不動! どうしてヒロトに回さなかった!?! 何故パスしない!?!」

「うるせエなア。どうしようと俺の勝手だ」

「なんだと!」

「そう熱くなるなよ。風丸クン」

今のプレーで不動の人格は大体分かった。あいつは俺以上に人を信用していない。俺もそれなりに人間不信だと自覚はあるが、あいつはそれ以上かも知れない。そのせいで、周りも不動を信用しようとしていない。

「やめるんだ！今は仲間同士唾み合っている場合じゃない！」

基山が仲裁に入るが、不動は鼻で笑って自分のポジションに戻っていく。

試合が再開するが、変わらず不動のワンマンプレーが続く。一人で上がってはシュート、一人で上がってはシュート。その繰り返しだ。

再び不動がボールを持って上がっていく。

「パーフェクトゾーンプレス！」

ファイアードラゴンの必殺タクティクスが発動される。包囲されたのは不動と風丸だ。

「不動！泥の特訓を思い出せ！そいつらの頭を越すパスを出すんだ！」

「うるせエ!!」

不動は包囲された中でボールをキープし続けるが、思う様には動けない。

「二人ではパーフェクトゾーンプレスは破れません」

不動はボールを奪われて包囲網の外に出される。飛んだ先には涼野が待ち構えていた。

「やらせねえ！」

俺は涼野に向かってスライディング。ボールをクリアし、なんとか外へと出していく。

「危ねえ……」

俺が安堵する傍ら、不動に対して風丸が意見する。

「いい加減にしろ不動！パスを回せ！みんなに合わせるんだ！」

「俺に命令すんじやねエ！俺は出したい時に出す！」

「……勝手にしろ」

……このままじゃイナズマジヤパンが負けそうだ。豪炎寺は試合に集中し切れていないし、不動達は唾み合っているし。

こういう時に、円堂がいればなんとかなっただらうな。

ペクヨンからのスローイング。ウンヨンに投げ込むが、不動がそれをインターセプト。不動に対して前からウミヤンとチャンスウ。背後からスリートップが不動に迫る。

「味方から嫌われても敵には人気だなア」

「俺の力を認めたということだろ？」

「なんだと？」

「お前達との遊びは終わりだ」

すると不動、この試合初めてのパスを出した。しかし、風丸はボールに届かずに、外へと転がっていく。

「チッ！しつかりしやがれ！」

「今更何を！それにどこに蹴ってるんだ……！」

ウンヨンからスローイング。ペクヨンに渡り、チャンスウへとパスを出す。パスを出す。パスを出す。パスを出す。パスを出す。壁山がカット。次にパスを出した相手は、壁山。

だが、またも届かず外へと転がっていく。

「いい加減にしろよ！」

「あんなの、届かないっすよ！」

……妙だな。普段なら届いているボールが何故届かないのだろうか。今の壁山も、さっすきの風丸も。

再びボールは不動に。今度は基山にパスを出す。それも届かない。パスが通らない。ことに苛ついた不動は風丸達に文句をつける。

「何故取れない……!?何やってんだ、バカどもが！」

「今のは取れるわけないっす！」

「なんだと!？」

「イナズマジャパンは、お前だけのチームじゃない！」

……これだからチームプレーが必要になるスポーツは苦手なんだ。個人技も確かに必要になるが、大半はチームプレーが必要になる。信頼や信用が無ければ、チームは崩壊する。

不動は相手の動きや味方の動きを把握した上でパスを出している。それを把握するために、序盤に一人で攻め上がっていたのだ。

しかし、みんなは不動を信用していないせいで普段通りのプレーが出来ていない。

……まあボールをぶつけられたらそりや信頼度は下がるけど。

しかし、今は基山の言う通り唾み合っている場合ではない。不動の人格はとりあえず置いといて、不動のプレーにだけ集中すればいい。不動の人格を一々気にしなればいゝ。そう考えれば、所詮は俺達と変わらないプレーヤーからのパスが来てるだけだ。

試合は再開し、ボールはアフロデイに。

「南雲、涼野！」

南雲と涼野にセンタリング。二人は大きくジャンプする。

「ファイアブリザードかッ！」

アトミックフレアでさえ破れているムゲン・ザ・ハンドに、ファイアブリザードは正直止められる気がしない。

「ファイア……ブリザードオツ!!」

涼野と南雲のファイアブリザードが炸裂。だが、それを阻止すべく飛鷹が突っ込んでいく。

「止めてやる!!」

飛鷹は得意の蹴りでファイアブリザードを阻止しようとするが、空振りに終わる。  
「ムゲン・ザ・ハンドオツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを繰り出してファイアブリザードを包み込む。しかし、やはり威力はファイアブリザードの方が上であり、破られてしまう。

「させねえ!」

立向居が破られることを想定して、俺は立向居の後ろまで走ってファイアブリザードを力づくでクリアする。ボールは外へと飛んでいき、なんとか点は取られずに済んだ。

「すみません、比企谷さん……止められなくて……」

「いや、別にいい。それより目の前のボールに集中してろ」

ファイアードラゴンの攻撃はまだまだ続く。チャンススのコーナーキックでペクヨンへとセンタリング。

「今度こそ!!」

ペクヨンのセンタリングをカットしようとして、飛鷹はジャンプするが、空振りしてしまう。ペクヨンはヘディングでシュートするが、立向居がそれをセーブ。

「壁山さん!」

ボールは壁山に繋がり、イナズマジヤパンの反撃が始まる。壁山から風丸に。風丸は基山にパスしようと試みるが、間に不動が入る。

「ヒロトー！」

不動を無視して基山にパス。攻め上がる基山に長身のソングファンが立ち塞がる。

「豪炎寺くん！虎丸くん！」

基山は宇都宮へとパス。二人はゴール前まで攻め上がっていき、またもや連携技の体勢に入る。

「タイガー……!!」

「ストオオーム!!」

しかし、やはりゴールからボールは逸れてしまう。何度か連携技の特訓を見ていたが、その時の方がまだマシだった。

色んな意味でこのままじゃイナズマジヤパンは世界には行けない。

「あーあ。このままじゃイナズマジヤパン負けちゃうなあ」

俺の言葉にいち早く反応したのは風丸だった。

「どういう意味だ？」

「どういう意味もこのままじゃ負けるって言うてるの。試合に集中し切れていないお荷物のFWに、妙に見せ場を作ったがるDF。挙げ句の果てには試合中に仲間割れ。これで逆に勝てる見込みを教えて欲しいもんだ」

「お前は知らないんだ！不動のことを！あいつは自分のために他人を蹴落とすやつなん



だ！」

「そうだな。俺は不動と話したことないから知らんし、ぶつちやけあいつが今まで何してきたかとかどうでもいい。だからって、何もあいつのプレーまで否定することはねえだろ」

確かに人のプレーには人の性格が現れるだろう。それはもう仕方がない。

だが、あいつのパスは理に適ったパスを出している。あいつが一手先、二手先を読んでいる証拠だ。

険悪なムードのまま試合が再開される。ファイアードラゴンの攻撃で、南雲が攻め上がってくる。

「行かせるか！」

南雲に対してスライディングでクリア。ボールは外へと転がっていく。

「選手交代！立向居勇氣に代わり、円堂守！基山ヒロトに代わり、鬼道有人！」

基山と立向居に代わって、円堂と鬼道がフィールドに入る。みんなが駆け寄ってくる。

「円堂……」

「……みんな！勝ちたくないのか!？」

「……勝ちたいさ！勝つために俺達はここに……でも……」

「比企谷も言っていただろ！今は不動の言葉や性格じゃなくて、不動のプレーを見るんだって！」

円堂がみんなにそう言い切るが、やはり不動に対する不信感が消えていない。

「分からないのか!?不動は自分一人じゃない、お前達を活かしたプレーをしようとしている！」

「いや、あいつは誰にも届かないパスを出してきた！あれは嫌がらせだ！」

「ボールは嘘をつかない！」

何そのボールは友達的な名言。サッカーやる人間はこぞつてボールに意思が宿つてると思い込んでいる。もう一種の病気だろこれ。

「パスを受けてみれば全て分かる！」

「円堂……」

円堂がいくら説得しても、納得は出来ないだろう。なら納得するしかないプレーを俺達がすればいい。

ジョンズからのゴールキックで試合再開。ボールはアフロデイへと飛んでいくが、不動がそれをカット。その不動に対してファイアードラゴンの素早いマークが付く。

「不動……つちに寄越せ！」

俺はディフェンスラインから一気に中盤にまで駆け上がった。不動は俺に向

かってパスを出す。俺は走って、不動のパスを受け取る。

「返すわ！」

俺は不動にボールを戻す。次に不動のマークに付いたのはソングファン。

「不動……つちにもくれ！さっきのより早く強いパスで構わない！」

サイドから鬼道が上がっていった。

「なら、これでどうだツ!!」

不動は鬼道にパス。ボールを受け取ったそのままシュートするが、ジョンスのパンチングで弾かれてしまう。

だが、今のプレーでよく分かった。不動のパスは完璧だった。一人一人を活かす最高のパスを、不動は出していた。恐らく、みんなが見ていないところで努力していたのだろう。

栗松からのスロージングで再開。鬼道にボールが渡り、すぐさま不動に繋ぐ。不動に向かってウンヨンとチャンススが迫る。

不動は壁山にバックパス。しかし、先程と違って壁山はしっかりとボールを受け取った。壁山は不動にボールを戻して、不動は次に風丸にパスを出した。風丸も壁山同様、しっかりとボールを受け取っている。

ボールは不動に戻り、そのまま攻め上がっていく。しかし、再びチャンススが不動に

迫る。

「龍の誇りに賭けて抜かせません！」

不動はチャンスウを躲そうとするが、チャンスウの完璧なディフェンスに抜くことができない。

「不動!!」

不動の背後から鬼道が走ってきていた。向かってくる鬼道に対して不動も鬼道に向かい走る。そしてそのまま二人は同時にボールに強烈な蹴りを入れる。

「うおおおおオオオ!!」

同時に蹴ることでボールが激しくスピんし、ボールに紫色のエネルギーフィールドが展開してチャンスウを吹き飛ばした。

犬猿の仲だったあいづらがこの土壇場で連携技を発動してみせた。このプレーにイナズマジヤパンも驚いている。

攻め上がる不動にウミャンとドウユンが迫る。不動はヒールリフトで思い切りボールを上を蹴り上げる。

「行くぞ壁山!!」

「はいっす!!」

それに合わせて壁山と風丸が走り込んできており、同時にジャンプ。だがウミャンと

ドウユンも同じくジャンプし、ボールを奪おうとする。しかし、風丸は不敵な笑みを浮かべた。

風丸は壁山の足の裏を踏み台にし、ボールに向かってさらにジャンプ。

「たああああアアッ!!」

そして回転をかけてのオーバーヘッドシュート。さながら竜巻の様なシュートが、ジョンスに向かっていく。

「大爆発張り手エ!!」

ジョンスの強烈な張り手が新技を次から次に叩いていくが、ジョンスを吹き飛ばしてゴールに入れる。

3―2。ついに勝ち越しリードだ。

この一点は、紛れもなく不動が中心となって得たものだ。風丸や壁山も、不動に対する認識を改めた様だ。

「…最高のタイミングだったよ」

「……俺が欲しいのは勝利だけだ」

不動はそう短く言い捨てていく。

「なんだ？あの態度は……」

「……あれが不動明王さ」

不動を取り巻く問題は解決した。あとは、飛鷹と豪炎寺の問題だ。これを解決しない限り、たとえ世界に行けても勝てやしない。

ここからが正念場だ。勝って世界に行くのは、イナズマジヤパンだ。

## 世界への切符

円堂が入り、不動もチームの一員となる。しかし、ここで終わる様なファイアードラゴンではないはずだ。

試合が再開し、アフロデイが攻め上がってくる。

「真…：へブンスタイム！」

アフロデイは得意のへブンスタイムを使って、あつという間にゴール前に。

「ゴツド…：…!!ブレイクツ!!はああアア!!」

ムゲン・ザ・ハンドを破ったゴツドブレイクが円堂に向かって襲いかかる。

「うおおおオオ!!正義の…：鉄拳ツ!!」

ネオジャパンとの試合で極限まで進化した正義の鉄拳をゴツドブレイクにぶつける。徐々に後ろに押されるが、なんとかゴツドブレイクを弾き飛ばした。

そのルーズボールを木暮と飛鷹が拾いに行こうとするが、横からアフロデイが掠めとる。

「…：流石だね」

するとアフロデイの背後から涼野と南雲が飛び出す。アフロデイはゴツドブレイク

の構えに入り、アフロディと共に涼野と南雲が大きく飛ぶ。そして三人同時に、そのボールを蹴り込んだ。

「カオス…ブレイクッ!!」

ゴッドブレイクとファイアブリザードが合体した様な必殺技、カオスブレイクは凄まじい威力を放ちながら円堂に向かって襲いかかる。

「うおおおおオオオ!!正義の鉄拳ッ!!」

円堂は正義の鉄拳でカオスブレイクに挑むが、簡単に破れてしまい、ゴールに突き刺さる。

「なんて威力だ……」

ネオ・ギヤラクシーと互角、もしかすればそれ以上の威力を誇っている。流石ファイアドラゴン最強のスリートップだ。

3―3の同点となって、イナズマジパンボールで試合が続く。ボールは鬼道に渡る。

「飛鷹!」

鬼道は飛鷹に繋ぐ。しかし、飛鷹は何をすればいいのかが分からず動けないでいる。

「飛鷹!鬼道に回せ!」

円堂から指示が飛ぶ。飛鷹は頷いてパスを出そうとするが、その前にチャンスウのス



ライディングでボールを奪われてしまう。チャンスウから南雲に繋がる。

南雲はボールを上蹴り上げる。

「またアトミックフレアかッ！」

俺は思い切り跳躍するが、やはり南雲には敵わない。

「そんな甘つちよろいジャンプじゃ俺には届かねエ!!アトミックフレア……V2!!」

南雲のアトミックフレアがゴールに向かって飛んでいく。

「させないっス!!」

壁山がゴール前に立ちただけ、デイフェンスの構えに入る。

「ザ・マウンテンツ!!」

「何ッ！」

ザ・ウォールの進化版、ザ・マウンテンがアトミックフレアを外に弾き飛ばした。

「やったっス！」

「凄いぞ壁山！」

ザ・ウォールの進化版、ザ・マウンテンでなんとか攻撃を防いだ。しかし、ファイアードラゴンのチャンスは続く。チャンスウからのスローイングから試合再開。

ここで、アフロデイ、涼野、南雲の三人が勢いよく飛び出す。ゴール前まで一気に迫り、カオスブレイクの構えに入る。

「今度は打たせねえよ！」

俺は再び大きくジャンプして、カオスブレイクが打たれる前にボールを奪取した。

「飛鷹！」

俺はヘディングで飛鷹にパスを出す。しかし、飛鷹は空振りしてしまい、ボールは外へと転がっていく。

「くっそおお……!!」

ミスをした飛鷹は、何かに対して怖がっている。いや、ミスをする前から飛鷹の様子は変だった。

もしかすると、さっきの不良達の応援が却ってプレッシャーとなっているのか…？

「何を怖がっているんだ、飛鷹！」

「えっ……そんなことは……」

「いいか飛鷹。失敗したってカッコ悪くない。もつとカッコ悪いのは、失敗を怖れて全力のプレーをしていない今のお前だ！」

「キャプテン……」

「思い切りプレーしてみろよ！失敗したっていいじゃないか！」

「失敗したっていい……？」

「ああ！今のお前を全部プレーにぶつけてみるよ！」

失敗したっていい。俺はこの言葉がすごく無責任な言葉だと思っていた。結局のところ、失敗した本人しか責任を取るしかないのだから。

けど円堂が言うのと、不思議とそんな後ろ向きな意味に聞こえてこない。

「…分かったよキャプテン。…やってやる!」

円堂の言葉に何か吹っ切れた飛鷹は、気を引き締め直した。

チャンススウからのコーナーキックで試合再開。アフロデイにボールが渡り、再びカオスブレイクの体勢に入った。

「うおおおおオオオ!!」

すると飛鷹は雄叫びを上げながら大きくジャンプ。

「失敗がなんだ……俺は飛鷹征矢だ! うおおおおオオ!!」

飛鷹は右足で大きく空中を裂くように蹴り込む。蹴り込まれたことで空間が裂けて、アフロデイ達を吹き飛ばす。その空間にボールが包み込まれ、ボールの威力を無効化する。

カオスブレイクを未然に防いだ飛鷹は、前線へと大きくパス。俺達はカウンターを仕掛けて一気に攻め上がっていく。

「比企谷!」

鬼道からボールが繋がる。向かう先にはペクヨンとウンヨンが立ちはだかる。

「サザンクロスカットッ!!」

俺は二人を吹き飛ばしてそのままシュート体勢に入った。

「アストロゲート…V2!!」

角度を使ったアストロゲートをジョンスに打ち込む。

「大爆発張り手エ!!」

だが、大爆発張り手の前にアストロゲートは吹き飛ばされてしまう。そのボールを鬼道が拾おうとするが、素早いアフロデイが奪取する。アフロデイは攻め上がり、背後からは涼野と南雲が猛然と駆け上がってくる。

「行かせないっスーザ・マウンテンッ!!」

壁山はザ・マウンテンを繰り返すが、アフロデイは大きく上に蹴り上げ、それと同時に三人が飛んでザ・マウンテンを躲す。

「今度は決める!」

アフロデイ達はカオスブレイクの体勢に入った。

「カオス…ブレイクッ!!」

今度こそカオスブレイクが発動。今の円堂ではカオスブレイクは止められない。

だが、円堂はここで奇跡を起こす。

正義の鉄拳の構えではなく、右手に力を込めて大きくうえにジャンプする。すると、

後ろから魔神の様なものが見える。

「うおおおおオオオ!!」

円堂は右拳をカオスブレイクにタイミングよく地面に叩きつけ、完璧に止めてみせた。

「何ッ!」

円堂は土壇場で正義の鉄拳を進化させてカオスブレイクを粉碎。ここまで頼もしいGKはきつと世界を探してもそういない。

「みんな!反撃だあッ!」

円堂が前線に大きくキック。鬼道がボールを受け取り、ウンヨンを躲す。

「豪炎寺!」

躲した鬼道は豪炎寺へと繋げる。豪炎寺の後ろから宇都宮も駆け上がる。

「豪炎寺さん!今度こそあれを!」

「よし!」

二人は再び連携技の構えに入る。

「タイガー……!!」

「ストオオーム!!」

しかし、またもや失敗してゴールから遠ざかっていく。

ジョンスのゴールキックとなり、ペクヨンにボールを蹴り上げる。そこに鬼道が突っ込んでインターセプト。豪炎寺へと繋ぐ。

「行け!!俺達の挑戦が、このまま終わっていいわけがないだろ!!」

「…ああ!!」

豪炎寺と宇都宮が再び連携技の構えに入る。

「タイガー……!!」

「ストオオーム!!」

だが、やはり成功はせず、ゴールから大きく逸れていく。そんな豪炎寺にみんなは心配する。

「どうしちゃったんですか、豪炎寺さん!!」

しかし豪炎寺は何も答えない。そんな豪炎寺に、あいつは激怒する。

「豪炎寺!!お前それでもエースストライカーか!!」

「ッ……!!」

「どんな時だって、俺達は悔いのない試合をしてきた!!この試合だってそうだ!!」

「…円堂……」

「……円堂の言う通りだな。豪炎寺、お前何しにここに来たんだよ」

円堂の言葉に続いて、俺も話しかける。カタール戦の時の宇都宮みたいに、俺はイラ

イラしている。

「…お前点取るためにここにいるんだろ。吹雪や宇都宮にプレー云々言っておきなから、自分はそのザマかよ」

「…比企谷」

「今のお前はエースストライカーじゃない。日本代表のお荷物だ。お前が何に對して悩んでるか知らないし、俺達はそれを解決出来ない。だが試合になったら試合のことだけに集中しろ。他のこと考えながらプレー出来るほどお前は上手いのかよ」

「そうですよ…こんなの…俺の憧れの豪炎寺さんじゃないです!!」

豪炎寺は何も言い返せずにいた。すると、円堂がゴールから離れて豪炎寺に近づく。

「お前の親父さんにも見せてやろうぜ! サッカーの素晴らしさをさー!」

「円堂…比企谷…虎丸…」

豪炎寺はフツと笑う。

「分かったよ、円堂」

今の豪炎寺の表情は、まるで何を長く悩んでいたのだろうか、呆れた笑みだったが、それはどうやら吹っ切れた表情であった。

ジョンズからのゴールキックで試合再開。チャンスウに向けて蹴り上げるが、不動がそれをカットして豪炎寺に繋ぐ。

「豪炎寺!!」

豪炎寺と宇都宮は再度攻め上がっていく。

「虎丸!!今度こそ決める!!付いてこい!!」

「はい!!」

決心がついた豪炎寺に、宇都宮は笑顔で答える。

「タイガー……!!」

「ストオオーム!!」

二人の連携技であるタイガーストームが成功し、ジョンスに向かって勢いよく飛んでいく。

「大爆発張り手エ!!」

ジョンスも負けじと大爆発張り手を繰り出す。しかし、ジョンスは徐々に後ろへと押されていく。

「ぐおおおオオツ!!」

ジョンスの大爆発張り手を打ち破って、ゴールへと突き刺さる。残り時間がない中で、やっと二人の連携技が決まった。

4-3でイナズマジヤパンの勝ち越しリード。ここで守り切れば勝てる。

ファイアードラゴンからの試合再開。ボールはチャンスウに渡る。



「まだだ……まだだッ!!」

チャンスウの閉じていた目が開眼し、アフロデイ達と共に猛然と攻め上がっていく。チャンスウの前には壁山が立ちはだかるが、

「奈落落とし!!」

ザ・マウンテンを出す前に吹き飛ばされてしまい、そのままアフロデイに繋がって、カオスブレイクの体勢に入った。

「カオス……ブレイクッ!!」

彼らの渾身のカオスブレイクが円堂に迫る。

「キャプテン!!」

「円堂!!」

みんなが円堂に呼びかける。その呼びかけに対して、円堂は応えようとする。

「この一点、絶対守ってみせる!!」

円堂は再び新技の体勢に入った。

「いかりの……てっついッ!!」

新技、いかりのてっついを発動させた円堂はカオスブレイクを必死に抑え込もうとしている。しかし、カオスブレイクの威力も先程より上がっている。

「うおおおおオオッ!!」

ここで、強い衝撃によって爆発。煙によって、入ったのかどうか分からなくなっていた。

煙は段々と薄くなり、俺達が見えたものは、座り込んでいる円堂と、ゴールに入らず地面にめり込むボールだった。

そして、ここで試合終了のホイッスル。

「わああああああ!!」

試合終了のホイッスルと同時に大きな歓声が沸いた。アジア予選を突破し、俺達はファイアードラゴンを下して世界進出を決めた。

ベンチに戻り、俺達は勝利を分かち合った。

「おめでとう、比企谷くん。とてもいい試合だったわ」

「…ありがとな、雪ノ下」

「良い活躍だったぞ八幡。流星は私の八幡だ。これは褒美としてくれてやろう」

そう言つて八神は俺を強く抱きしめる。これいつもやってることじゃね? なんなら俺の褒美というよりお前がしたかったただけだよな。

「何しているのかしら八神さん。盛るのもいい加減になさい」

「黙れ。疲れた八幡を癒すのが私の役目だ。貴様はどこかに消えろ」

そしてこいつらのいつものやり取り。そのやり取りが何故か、俺を安心させてくれ

た。

「……次は世界か」

世界大会はこれまで以上に激しい戦いが予想される。

それでも、俺は勝たなければならぬ。総武中のために。小町のために。由比ヶ浜のために。雪ノ下のために。

## 世界への挑戦 世界大会編

## F F I 世界大会

ファイアードラゴンを下してアジア予選を突破。日本代表はついに世界大会に進出することが出来た。

それから一ヶ月が経つ。

俺達は、世界大会の舞台であるライオコット島に向かうために新東京国際空港に来た。いた。

「お兄ちゃん！世界大会でも応援してるから！」

「絶対見るから！ヒッキーの試合！」

「…ありがとな」

新東京国際空港に総武のみんなが見送りに来ていた。

「雪ノ下先輩も、せんぱいのマネージャー頑張ってください！」

「うん！でも、あまり無理はしないでね？」

「ええ、ありがとう。一色さん、由比ヶ浜さん」

選考試合に続いて、これだけの人が見送りに来るなんてな……。

出来るなら小町と戸塚を一緒に連れて行きたかった。今から久遠監督に説得してみようかな。多分却下されるだろうけど。

「…エイト。頑張れ」

「世界大会で下手なプレーしたら帰ってきた時燃やし散らかしてやるからね！」

「何その新たな殺人予告」

なにかとエイリアで話すことが多かったクララやレアン、アイシーなども見送りに来てくれた。

「頑張りなさいよ。ガゼルやバーン、それにデザームやレーゼ、エイリア学園のみんなの思いも懸かってんだから」

「…分かっている」

そう。レーゼ、もとい緑川と吹雪は代表から抜けることとなった。吹雪はファイアードラゴン戦の綱海とのクラッシュで足を痛め、緑川は普段の練習が足に来ていた様だ。代わりに染岡と、帝国の佐久間が加入することとなる。

とはいえ、足を治しさえすれば代表に復帰することも不可能ではないということ。ネオ・ギャラクシーが打てなくなるのは残念だが仕方がない。

「あとウルビダ。貴女そろそろエイトから卒業したら？」

「黙れアイシー。私と八幡は一生一緒なのだ。これからずっと、互いの命が消えるまで

な」

「エイト、ウルビダと結婚でもするわけ？」

「や、そんなわけ……」

俺はレアンの問いに否定しようとした。だが、俺が否定する言葉を八神は遮る。

「ああそうだ。私と八幡は将来を誓い合ったのだ。いくらお前達が色目を使おうが、私だけの八幡なのだ。もし八幡に手を出すのなら貴様を容赦なく潰してやる。私の八幡に手を出したことを後悔させてやるからな」

「……ウルビダの独り相撲じゃん。それ」

やっぱりガールズ同士の会話って怖いよう。助けて小町ちゃん。略してこまちゃん。

「全員集合……これより出発する」

久遠監督と響木監督がやってきて、メンバーを招集する。俺達はイナズマジヤパン専用の飛行機、イナズマジエツトに乗り込んで、日本から旅立った。

「サッカーアイランド？」

俺がそう聞き返す。機内での席で両サイドに八神と雪ノ下がいるのはもういいとして、雪ノ下がライオコット島のガイドブックを見ながらそう言った。

「ええ。このライオコット島はなんでも、F F I 世界大会のために南の島を丸ごと改造したのよ。付いた別名がサッカーアイランド」

「そんなアホな」

いくらなんでも大掛かり過ぎだろ。たかだか少年の世界大会だぞ。W杯でもそこまですらないぞ。

「それともう一つ。このライオコット島にはとある伝説があるの」

「え、そんなのまでマップに乗ってんの？」

「いえ、これは私が事前に調べたことよ。遙か昔、ライオコット島は天界と魔界が交わる場と言われている、天使と悪魔が存在していたそうなの」

「戸塚と一色か」

「違うわよ」

違うのかよ。天使⇨戸塚ことツカエルだろ。小さい悪魔って意味合いじゃ、いろはすっしょ。マジっべー。

「天使と悪魔、つまり天界と魔界の民は互いの覇権のために長い戦いが繰り広げられたけど、決着がつくことがなかったの。不毛な戦いを終わらせるために、天界と魔界の民は人間が用いる力の優劣を決める手段で戦いを始めた。それが、サッカー」

なんでやねん。確かにサッカーじゃ勝ち負けがはつきり決まるけど、それなら別に野

球でもバスケットでもよくない？

なんでサッカーにこだわったんだよ。みんなサッカー好きなのか。みんな円堂か。やだ何それキモい。円堂がいっぱいいるとか地獄絵図かよ。

「…それで、その勝負の結果はどうなったのだ」

「…結果は天界の勝利。魔界の王である魔王が封印され、長き戦いに終止符を打った。……これがライオコット島の伝説よ」

「一色の背後には陽乃さんまでいたのかよ」

「だから違うわよ」

あの人は誰もが慄く魔王だからな。見た目こそ女神と思わせる容姿だが、中身は最後までたつぷり魔王だよ。一色まで従わせるとかマジ陽乃さんヤバイ。

でもその二人を倒した戸塚がもつとヤバイ。流石トツカエル。毎朝俺に味噌汁作ってほしいわ。

「天界と魔界の戦いが決着した後、二つの民はマグニード山へと姿を消したそうよ」

雪ノ下がライオコット島の地図を広げて、指を差す。差されたところには、確かに火山らしきものがある。これが天界と魔界の民が住まうと言われているマグニード山か。「しかし、どこに行っても伝説ってのはあるもんだな」

その後、ゆつたりと空の旅を楽しみ、ライオコット島に到着するまでの時間を潰した。



ようやくライオコツト島に到着。イナズマジエツトから降りて、空港を出ると、目の前に広がっていたのはサツカーアイランドに相応しい景色だった。南の島でありながら、どこもかしこもサツカーに関連するものばかり。

「おっ、やつと来たね。比企谷くん」

俺の名を呼ぶその女性。その声、その話し方、そしてその立ち振る舞い。

何故彼女がこんなところにいるのだ。

「…陽乃さん」

そう。強化外骨格とも呼べる女性で俺が散々魔王だなんだと揶揄し、そして雪ノ下の姉である雪ノ下陽乃がそこにいた。

「ひゃっはろー。雪乃ちゃん、比企谷くん」

陽乃さんがいることに疑問に思った雪ノ下が彼女に尋ねた。

「…姉さん。何故ここにいるの」

「んー？このライオコット島のスタジアムや施設なんかはお父さんの会社の仕事の範疇でね。南の島を大掛かりに改造するとかでF F I運営委員の会長とかに、社長であるお父さんも直々に挨拶に来てね。私はその付き添いで連れて来られたんだけど」

そういうえば雪ノ下の親父さんは雪ノ下建設の社長、および地方議員の一人でもあったな。

「もうこの島は完成したし、お父さんも日本に帰っちゃったから。私も帰ろうかなって

思ってたけど、比企谷くん達日本代表が来るってなったじゃない？それだったら、この島に残ってサッカー観戦もアリかなって」

「…神出鬼没過ぎでしょ、あんた」

「照れてるの？可愛いなあ」

照れてねえ。つーかいきなり魔王とエンカウトとかどゆこと。戸塚呼ばないと。

魔王を封印できるのは戸塚だけなんだぞ。

「……ま、それだけじゃないんだけどね」

「…姉さん？」

「とにかく！日本代表の試合を見に来てるんだから、比企谷くんちゃんと試合に出てよ？」

「それは久遠監督に言っして下さい」

「ちゃんと出るの。じゃないとお姉さん怒るからね？じゃ、ばいばーい！」

陽乃さんはそう言っただけかへと去って行った。相変わらず破天荒な人だ。

しかし、そのやり取りを見ていた八神が素早く俺に迫ってくる。俺を見る彼女の瞳孔は、再び開き切っていた。

「……八幡。あの女は誰だ」

「…あれは雪ノ下の姉だ」

「雪ノ下だけでなくその姉までもが私から八幡を奪おうとするのか。姉妹揃って目障りだ」

「別にそういうのじゃねえって。あの人は周りをからかいたいだけだ。一々気にしてたら身が持たんぞ」

「……ならいい。だが、決してあの女に靡くなよ」

八神はそう忠告し、俺からゆっくり離れる。

その後、俺達はイナズマキャラバンに乗り込んでライオコット島を巡ることにした。

まずはライオコット島のエントランスエリアから。ライオコット島のガイドブックを持つている音無が説明し始める。

「ここが島の中心となる、セントラルストーリーです！」

「まさに南の島って感じだな！いいじゃねえか！気に入ったぜ！」

キャラバンがしばらくエントランスエリアを走っていくと、周りの風景がガラリと一変する。

「ん？南の島じゃなくなったぞ」

「この島は出場チームが最大限に力を発揮出来るように、そのチームが滞在するエリアには母国と同じ街並みを再現しているんです！」

「まるで映画のセットだな……」

今俺達はアメリカエリアにいるが、さながらアメリカの西部を思わせる風景であった。

アメリカエリアからまた風景が一変する。

「ここはイギリスエリアです。街並み再現の為に、本国から取り寄せた数百年前のレンガを使っているそうです！」

「たかだか世界大会のためだけによくやるねエ」

今回ばかりは不動に同感だ。いくら少年サッカーの世界大会が初めてとはいえ、気合入れ過ぎだろ。イギリスエリアを通り過ぎ、また風景が変わる。

「ここはイタリアエリア。地中海の街並みが忠実に再現されています」

確かに言われてみれば、イタリアの街並みそのものだ。ライオコット島にいただけある程度世界旅行が出来るじゃねえか。

イタリアエリアのグラウンドを通り過ぎようとすると、

「古株さん！止まって下さい！」

俺達はキャラバンからイタリアエリアのグラウンドを見つめていた。どうやらイタリア代表が練習を行なっている様だ。

「FW！常にパスラインを意識して攻め上がる！中盤！常に敵とボールの位置を把握！ボールを奪われる状況をいつも想定しておくこと！DF！チャンスがあれば攻め上が

る！守る意識だけでは勝てない！」

なんてやつだ。指示を出したイケメン君は、目視していないDFの動きまで把握している。

「…世界のトップレベルでもいるそうさ。空から見ているかの様に、フィールドの全てを見渡すプレーヤー……」

「フィールドの全てを……」

「これが世界か！」

俺達はイタリヤ代表の練習を見物し、その後様々なエリアを見回り、俺達の滞在エリアであるジャパンエリアに向かった。到着する頃には、もう夕方だった。

「今日の夜にタイタニックスタジアムで開会式が行われる。必ず20時までには宿舎に集合しろ。分かったな」

「はい!!」

20時まで時間がある。折角だし、ジャパンエリアをぶらつこう。

とも言ううと思ったか。残念だな。俺は部屋に引きこもる。

そう決めた俺は荷物を自分の部屋に置いて、時間までゆつくりと過ごした。

—————

そして20時。時間となり、俺達はエントランスエリアにあるタイタニックスタジアムへと向かい、整列した。

すると、スタジアムから歓声が沸き、多量の火花が夜空に打ち上がっていく。

「さあ、全世界が注目するサッカーの祭典！フットボールフロンティアインターナショナル世界大会！予選を勝ち抜いた強豪10チームがサッカーのために作られたこの聖地、ライオコット島で激突します！」

世界大会の開会式が華々しく始まった。どうやら解説はヨーロッパのMVPストライカーのレビン・マードックだ。俺でも知ってる有名人だぞ。

「いよいよ選手入場です！最初に入場してきたのはブラジル代表ザ・キングダム！先頭に立つのはマック・ロニージョです！」

「またの名をキング・オブ・ファンタジスタ。フィジカル、テクニク、さらに冷静な判断力はどれをとっても超一流。ブラジル史上最高と評されるプレーヤーです」

流星はブラジル代表。初っ端から歓声がすごい沸きあがっている。それだけブラジル代表に期待している選手がいるということなんだろう。

「続いての入場は、イタリア代表オルフェウス！先頭はあのフィディオ・アルデナです！」

「ヨーロッパ屈指のストライカーで、華麗なテクニクとそのスピードはまさに”流星

”と呼ぶに相応しいものです」

定石通りなら、イタリア代表は防御が優れているはず。その防御をどう崩すのかが鍵になる。

「続いての入場はアルゼンチン代表ジ・エンパイア！率いるのはキャプテン、テレス・トルーエー！」

「予選大会を無失点で勝ち上がってきましたが、全てテレスを中心とした鉄壁の守りがあつたからです」

アルゼンチン代表は攻撃力が高いと思つていたのだが。まさか防御力が高いとはな。しかも予選大会を無失点で勝ち上がってくるほどの実力。イタリア以上に強固なディフェンスと見ていいだろう。

「次に入場するのはイギリス代表ナイトオブクイーン！キャプテンはエドガー・バルチナスです！」

「長い歴史を誇るヨーロッパリーグの中でも屈指の強豪チーム。特にエースストライカーのエドガーは実力人気ともに最高の選手と言われており、各国のプロチームも注目するほどです」

イギリスの解説が終わり、次の入場は日本代表だった。

「全員揃っているな？」



「はい！よし、行くぞみんな！」

「おう！！」

俺達は円堂を筆頭に、スタジアムへと入場していく。

「日本代表イナズマジャパンの入場です！キャプテンは円堂守！このチームは世界のレベルから見ればまだ経験も浅く成長途上ですが、アジアの優勝候補だった韓国を破って世界大会の切符を手にしました！」

「逆に成長途上にあるが故、爆発的な進化の可能性を秘めていると言えます。今大会のダークホースとなるかも知れません」

とはいえ、歓声がイタリアやアルゼンチンみたいにそこまで沸きあがっていない。実況の言う通り、まだ世界のレベルには達していないということだ。

「続いて入場するのはコトオール代表リトルギガント！チームを率いるのはロココ・ウルパー！」

「アフリカエリアからの代表ですが、データが少なく、その実力は全くの未知数です」

俺達と同じで歓声が沸き上がらない。まあ、あまりアフリカエリアのサッカーが強いつてのは聞かないからな。

「さて、リトルギガントに続いての入場は、アメリカ代表ユニコーン！旗手はキャプテンのマーク・クルーガー！」

アメリカ代表のメンバーを見てみると、約3名ほど見たことのある顔がアメリカ代表の中にいた。

「二之瀬、土門！それに木戸川の西垣まで！アメリカ代表に選ばれていたのか！」

代表選考試合にいなかったのは、アメリカ代表に選ばれていたからだ。何故日本ではなくアメリカを選んだのか、なんとなくは分かるけど。

アメリカに続いて、ドイツ代表、スペイン代表にフランス代表が行進する。10チームが整列を終える。

「さあ、いよいよこの強豪10チームが激突します！世界の頂点に輝くのは、果たしてどのチームなのか！フットボールフロンティアインターナショナル世界大会！ここに開幕いたします!!」

ここからが本番だ。ブラジルにアルゼンチン、スペインなど様々な強豪チームが出揃っているが、負けるわけにはいかない。

世界大会、開幕。

## 世界レベル

開会式も終わり、正式に世界大会の開幕となる。開会式の次の日、俺達は改めて大会のルールやグループ分けについて話を聞くことになった。

「世界各地の予選を勝ち抜いてきた10チームで争われ、5チームごとにグループAグループBに分かれて、まずはグループ内で総当たりを行なってもらいます。各試合ごとに勝った場合は3点、引き分けは1点、負けたら0点と勝ち点が加算され、最終的に各グループから勝ち点の多い上位2チームが決勝ラウンドへ進出。合計4チームで決勝トーナメントが行われます」

「私達イナズマジャパンはグループAよ。他にはイタリア代表オルフェウス、アルゼンチン代表ジ・エンパイア、イギリス代表ナイツオブクイーン、アメリカ代表ユニコーンがいるわ」

それなりに強豪揃いのグループだ。それに、一ノ瀬達アメリカ代表が同じグループA。みんなは一ノ瀬達と対決したくて楽しみにしていることだろう。

「私達の初戦は二日後。相手はイギリス代表ナイツオブクイーン。ヨーロッパの中でも強豪と言われるチームよ」

「正直、初戦で当たりたくなかった相手ですね……」

「…面白そうじゃねえか!」

目金のネガティブな言葉に、綱海はポジティブな言葉で返す。

「折角ここまで来たんだしよ! どうせやるならそれくらい強え相手じゃないと面白くねえからな!」

「……どうせやるなら、強いやつ、か」

綱海の言葉に少し笑う。強豪と聞かれて怖気付くようなやつはこのチームにいない。常勝思考もここまでくると清々しいわな。

「よーしみんな! 全力でぶつかっていくぞ!!」

「おう!!」

俺達はイギリス戦に向けて特訓を始めた。新たなメンバー、染岡と佐久間を加えた初めての特訓。彼らの動きは選考試合の時とは見違える様だった。

アジア予選の間かなりレベルアップしたのだろう。緑川や吹雪が抜けたのは痛い。が、戦力としては申し分ない。

しばらく練習していると、木野が招集をかけた。

—————

「親善パーティー!?」

「ナイツオブクイーンからの招待よ。試合をする前に親睦を深めたいから、今日の18時にロンドンパレスに正装して来て欲しいって…」

超絶的に面倒だ。親睦を深めるなんて建前に決まっている。何か狙いがあつて招待を出しただろう。

「……にしても正装か…」

以前、川崎が働いていたバーに行くために正装はしたけど、お世辞にも似合うとは言い切れない格好だった。

「……面倒だし行かんとこかな」

「あ、比企谷先輩そういうの無しなんで。無理矢理にでも連れて行きますから」

こつわ音無の笑顔こつわ。単なる笑顔なのになんでこんなに怖いんだよ。

「私達の正装は全部イギリス街にある店で用意されてるって。パーティーが始まるまでには取りに来てくださいだって」

「へエ、随分準備がいいこつて」

「だから今日の練習はこれまで。片付けが終わったらキャラバンでイギリス街に向かいましょう」

そんな通達を受けて、俺達は早めに練習から上がる。そしてキャラバンでイギリスエリアに向かって発進した。

イギリスエリアに到着。パーティーまでまだ時間があるらしく、パーティーの準備も兼ねて少しの間自由行動にしていいらしい。

「比企谷先輩は私達と一緒にいきますよ。先輩、隙を見て逃げかねないですから」

「そうね。比企谷くんは存在感を消すのが得意ものね。流石の私も存在感を消されてしまつては見つづけるのは困難になるわ」

「八幡の隣には必ず私もいるのだ。どこにも逃げさせはしない」

みんなが俺に厳しいよ。自由行動なのに自由に動けない俺はマジ可哀想。

戸塚来てくれねえかな……。戸塚の正装姿を見たかった。なんなら写真に納めたかった。納めて自室に飾りたかったな。

「じゃあどこから回ります?」

「…そうね。私個人としては、紅茶が気になるわ」

そんな雪ノ下の提案で、まずはイギリスエリアにある紅茶専門店に向かった。本場の

イギリスを再現しているとはいえ、しつかりと紅茶専門店を構えているんだな。

「なるほど……ハロツズやウィツタードまで置いてあるのね。中々興味深いわ」

「雪ノ下先輩って紅茶が好きなんですか？」

「ええ。イギリスでしか売っていない紅茶もあるから、来てみたかったの。けれど今は荷物になるから、また今度にしましょう」

そう言つて紅茶専門店から出て行く。その後俺達は行くあてもなく、少しの間イギリスエリアを歩き回つた。

—————

指定された時間前にパーティーの準備を終えた俺達は一度集まつて、用意されている正装に着替え始めた。

「うへえ……なんでこんなもん着なきやなんねえんだよ……」

綱海は嫌な顔で着替え始める。まあ、イギリスって言つたら紳士の国だからな。仕方ないっちゃ仕方ないわな。

とはいえ分かるぞ綱海。その気持ち。パーティーが終わり次第即行脱いでやるからな。

男性陣は着替え終わり、集合場所でマネージャー達が着替えるのを待っていた。  
「みんな、用意は出来た？」

するとマネージャー達がドレスに着替え終え、脱衣室から出て来る。その姿に一部のメンバーは見惚れていた。

「わあ、可愛いです！」

「き、綺麗でやんす！」

普段のマネージャー達の姿から考えれば、ギャップがあつて見惚れてしまうのも仕方がない。

「へえ、思ったより似合ってるじゃねえか」

「ええ、思ったより？」

綱海今の完全に自爆したな。綱海の言葉に反応したマネージャー達は、ジト目で綱海を睨んだ。

「悪い悪い！ついつい思ったこと言っちゃまってよ！」

「フオローになつてないぞ……」

ものの数十秒で綱海の好感度が少し下がった瞬間でした。

「あれ？円堂くんは？」

木野が周りを見渡すが、円堂だけがいなかった。



「…サツカーの特訓でもしてんじゃねえの知らんけど」

「全く、円堂くんだったら…、私、円堂くん呼んでくるね」

「…いや。俺呼んでくるわ」

「えっ? いいの?」

「別に俺一人抜けても、あつちは多分気にしないだろうしな。それに、流石にそれで走らせるわけにはいかんだろ」

いくらバス使うつつつてもジャパンエリアのバス停から宿舍まで少し距離があるからな。そんな距離をヒール履いたやつに走らせるのは気が引ける。

「おぉー! 比企谷先輩って意外に気遣いが出来るんですね!」

意外ってなんだ音無。普段から俺気遣ってるからな。気遣ってるから、誰とも話さないうようにしてるんだろうが。

そういやいつだったか同じことを誰かに言った気がする。…まあいいや。

「じゃ、行ってくるわ」

俺は急いでジャパンエリアに戻って行った。

—————

ジャパンエリアのバス停から降りると、まず宿舍のグラウンドへと走っていった。

宿舍のグラウンドに到着すると、案の定円堂がいた。だが、円堂だけでなく、イタリヤ代表とアメリカ代表、およびアルゼンチン代表の中心人物ばかりがグラウンドでサッカーをしていた。

何やってんのあれ。みんな寄って集ってボールを奪い合っている様だが、本当に何しにジャパンエリアに来たのよ。

そんな疑問は後にし、当初の目的を果たすことにした。俺はゴール前で仁王立ちしている円堂に声をかける。

「おい、円堂」

「あれ？比企谷じゃないか？どうしたんだその格好」

こいつパーティーに呼ばれてること忘れていやがった。

「お前パーティーのこと忘れてんじゃねえよ。イギリスから招待状が来てただろ」

「あ、あああああつー!!忘れてたああああーっ!!」

円堂のその叫び声に彼らはプレーを中断しこちらに注目する。円堂を見てすぐさま俺に注目する。

そんなに熱い視線を向けなくて恥ずかしい。

やつべ気持ち悪い。

こんな時、海老名さんならキマシタワーって言って勢いよく鼻血を吹き出すんだろうな。

「悪いみんな！俺。パーティーに呼ばれてたんだ！」

「パーティー？」

「じゃあ俺行くから！またな！」

円堂は最後に楽しかったと告げて勢いよくダツシユしていく。俺も円堂に続いて走っていく。

「今の時間なら、イギリスエリア行きのバスが出てるはずだ」

「急ごうぜー！」

俺達はイギリスエリア行きのバス停に向かって走っていくが、無慈悲にもバスは発車されていった。

「ま、マジかよ……」

だいぶ遅刻してる。こんなのが久遠監督の耳に入ったら何言われるか分かったもんじゃないやねえ。

そんな途方に暮れているとき、まるで俺達を呼ぶようにクラクションを鳴らす車がやってきた。窓を開けると、運転席から陽乃さんが顔を出していた。

「比企谷くんじゃない。どしたの？」

「…イギリスエリア行きのバスに乗り遅れたんですよ」

「じゃあ私の車に乗っていく？一々止まるバスよりは早くイギリスエリアに着くと思うけど」

「本当ですか!？」

「うん、いいよ。どうせ私も暇だったし」

「ありがとうございます！やったな比企谷！」

「…そうだな」

何か借りとか作られそうで怖いけど、この際仕方がない。俺と円堂は後ろの席に乗ろうとする。

「比企谷くんは助手席ね」

ほーら最初から何かおかしい。魔王が隣で運転するとか恐怖しかねえよ。

俺は陽乃さんの言う通りに助手席に座る。みんなが乗り込んだことを確認し、陽乃さんは車を発進させる。

「そういえば私の名前言ってなかったね。私は雪ノ下陽乃だよ。よろしくね」

「俺は円堂守です！…ってあれ？雪ノ下って……」

「君が思ってる通りだよ。マネージャーの雪乃ちゃんは、私の妹」

と、陽乃さんは運転しながら円堂と会話を始めた。流石陽乃さん。コミュ力がズバ抜

けていやがる。

「円堂くんだったね。君、凄いやね。試合の中でどんどん進化して行って、シュートを止めていく。きっと、血の滲む努力をしてるんでしょ?」

「はい!小さい頃から俺サッカーが好きで……」

「その気持ちは大切だね。サッカーに限らないけど、スポーツは楽しんだ人が勝つってよく言うでしょ?」

陽乃さんからそんな言葉が出てくるとは。

なんだろう。気持ち悪い。

「今失礼なこと考えてたでしょ、比企谷くん」

「…気のせいです」

なんで俺の周りは俺の思考を読み取れるの?そんなに表情に出てるのん?

陽乃さんと円堂がしばらく会話をしていると、トンネルが見えてきた。

「おっ、そろそろイギリスエリアに到着するよ」

そのトンネルを潜ると、ジャパンエリアから一変してイギリスエリアに変わった。

パーティー会場から少し離れた駐車場で、陽乃さんは車を停める。

「乗せてくれてありがとうごさいます!」

「いいよそんなの。その代わり、次のイギリス戦にはちゃんと勝つてよ?お姉さんとの

約束だよ?」

「はい!絶対に勝つてみせます!」

円堂はそう言つて車から降りて、パーティー会場へと走つていった。俺も助手席から降りようとする、陽乃さんに右腕を掴まれてしまう。

「…なんですか」

「折角イギリスエリアまで乗せてあげたんだから、お姉さんに何かご褒美があつてもいいと思いまーす」

「褒美つて……直球に一つ貸しだからつて言えばいいじゃないですか」

「じゃあ貸し二つね」

「おかしいでしょ」

なんで一つ増えてんだよ。その一つは一体どこから来たんだよ。

「比企谷くん、ケータイあるでしょ?出して」

「はあ……」

俺はケータイを陽乃さんに渡す。陽乃さんは自分のケータイと俺のケータイを同時に素早く操作する。

「はい。私の連絡先登録完了」

「え」

「ふふっ、嬉し過ぎて言葉も出ないでしょ?」

「違いますよ。絶望を露わにしてて声が出ないんですよ」

あんた何してくれてんだ。

陽乃さんの連絡先とかいらねえよ。俺のケータイが魔王の配下と化してしまったよ。

「私の貸しは一つだけ。私と呼んだったらすぐ来なさい」

「いや、俺練習あるんですけど……」

「大丈夫だよ。そこはちゃんと考慮してあげる。流石に練習中に来いまでは言わないよ。……とはいえ、私もそんなに暇じゃないんだけどね」

「単にサッカー観戦に来てるだけじゃないんですか?」

「失礼だなあ。これでも私、この島でやることあるんだから」

「じゃあなんで呼んだったらすぐ来いなんて貸しにしたんすか。呼ぶこともそんなにないですよね?」

「…暇つぶし?」

だと思つたよ。本当、この人自由人過ぎだろ。

そんな陽乃さんに、俺は溜息を吐いた。

「まあとりあえず、貸し云々はまた連絡するからね」

「…はあ」

俺はようやく車から降りる。

俺が一番の遅刻者じゃねえか。

「じゃあね比企谷くん。雪乃ちゃんのこと頼んだよー」

陽乃さんはそう言って、俺の前から去って行く。俺もパーティー会場へと、急ぎ足で向かって行った。

---

「遅いわ」

会場に到着早々、雪ノ下からそう厳しく言われた。

「田堂くんの方が先に来てたけど、貴方何をしていたの？」

「…お前の姉に捕まってた」

「姉さんに？」

ここまで来る経緯を雪ノ下に軽く説明する。説明を聞き終えた雪ノ下はこめかみに手をつく。

「全く……姉さんは……」

大変な姉を持つと妹は苦勞するんだな。小町も俺みたいな面倒な兄を持つと苦勞し



てるんだよなあ。小町に悪いな本当。

少しすると、タキシード姿の円堂が現れた。

「…何か変なんだよなあ…」

「円堂さん！」

「こつちだこつち！」

「おう！」

円堂が風丸達のところに向かおうとすると、

「ふ……ふ……ふ……ふ……」

ネイビー色の長髪で右目が髪の毛で隠れている長身の男、エドガー・バルチナスが不気味に笑い始めた。

「いや、失礼。あまりにも似合っていたものだから……」

要するに円堂のタキシード姿はダサイと。まあ分からんでもないぞエドガー。

だが俺からしてみればタキシード以前のメンバーに向かつてダサイと言つてあげた。西洋騎士風の鉄兜を被る者もいれば、スポーツを履き違えたのかボクシングのグローブとヘッドギアもある。円堂より余程ダサイと思うのは俺だけなんだろうか。

「冬花さん。向こうに行きましょう。デザートもありますよ」

「あ、あの……」

「ちよつと待つてくれませんか？」

エドガーがその場から去ろうとすると、目金が引き止める。

「今のうちのキャプテンに失礼じゃないですか」

「失礼?…困るなあ、誤解してもらつては。私は褒めたんですよ」

「褒めた？」

「ええ。だから言つたじゃないですか。似合つてゐるつて…」

「どうやら俺達はナメられている様だ。まあイギリスからすれば日本なんて勝つて当然の相手だからな。格下と見るのも無理はない。」

「お前なあッ…！」

「やめろ、綱海」

「けど円堂…このままじゃ…！」

「キャプテンを馬鹿にされて黙つてられないでやんす！」

「その思いはグラウンドでぶつけたらいい。俺達のサッカー見せてやればいいんだ。だつて俺達は、サッカーをしに来たんだろ？」

自分が馬鹿にされても尚、そんな強い言葉が言えるなんてな。流石円堂。

「つてことだ。楽しみにしてな。コテンパンにやつつけてやるからよ」

「…だつたら、やつてみますか?今ここで。私のシユートを君に止められるかどうか。」

……嫌とは言わないですよね？」

「いいだろう。受けて立つ」

円堂を止めようとした鬼道を、不動が止めた。

「円堂ッ……!?!」

「いいじゃねエか。やらせてやれよ」

俺達はイギリスエリアのグラウンドに集合し、円堂vsエドガーの勝負を見届けることにした。両者共に、ユニフォームに着替えていた。

「ルールは簡単。一本勝負。私は君に向かってシユートを打つ。それを止められれば君の勝ち。……では、行きますよ」

「よし、来い!」

エドガーはボールを蹴り上げて、すぐに空中へとジャンプして前方に一回転。

「エクス……カリバアアアアアッ!!」

右足から魔方陣と巨大な剣が出現し、そのまま大剣を振り下ろす様にかかと落とし。地面を抉りながらボールは低い弾道で円堂に向かって飛んでいく。

「いかりの………てっついい!!」

韓国戦でカオスブレイクを粉碎したいかりのてっついをエクスカリバーにぶつける。

しかし、円堂のいかりのてっついは簡単に破られてしまい、ゴールへと突き刺さった。

カオスブレイクでさえあれだけの威力なのに、エドガーのエクスカリバーはそれ以上つてことかよ。

流石プロチームが注目するストライカーだ。世界レベルは伊達じゃない。

「さあ、余興は終わりです。パーティー会場に戻りましょう」

「これが……」

「ん？」

「これが世界レベル……！ボールのパワーが身体全体にズシンつてきて……！凄いなエドガー！あんなシュートが打てるなんて！」

いかりのてつついを簡単に破られているにも関わらず、円堂の表情は笑っていた。

「みんなも見ただろ!?今のシュート！これが世界レベルのサッカー！そして俺達はその世界と戦える！こんな強い相手と戦えるんだ！」

ここまでのサッカーバカだと、本当清々しいわ。まあこういうところが、円堂の強みだと言えるけど。

「…俺達も負けてらんねえな！」

「ああ！みんな、明日からまた特訓だ！」

「おう!!」

世界レベルを目の前で感じ取ることが出来た。

イギリス戦までの二日間。気合を入れて特訓しないとな。

## 英国の騎士

今日はナイツオブクイーンとの試合。妙に寝付けなかった俺は、ユニフォームに着替えてジャージを羽織り、宿舎の外へと出て行く。

「…砂浜でも行くか」

妙に寝付けなかったのは、心が変にざわついている証拠。二度寝しようかと思っただが、多分爆睡するだろうからやめておいた。心を落ち着かせるために、砂浜でのんびりするのにはアリだ。

そう考えた俺は、宿舎の裏側にある砂浜へと向かった。砂浜に向かうと、鬼道が黄昏ていた。

俺の足音に気がついたのか、鬼道がこちらを振り向く。

「…比企谷か」

「…うつす」

俺は砂浜に座り込んで、海辺を眺めていた。千葉の海もいいが、ライオコット島の海もとてもいい。流石は南の島。

そうゆったりしていると、

「おはよう！鬼道、比企谷！」

朝から大きな声で挨拶をする円堂と、その隣には豪炎寺がいた。

「……なんだかんだみんな早起きなんだな」

「なんか、寝付けなくってさ……」

昨日あんなものを見せられたら、当然サッカーバカの円堂は寝付けずに決まっている。

「……ついに、俺達の力が試されるんだな。世界の舞台上」

「……そうだな」

しばらくして俺達は宿舍のグラウンドへと戻っていく。ここでは、みんながウォーミングアップとしてサッカーをしていた。

「こんな朝早くから練習か！」

「キャプテン！」

円堂だけじゃなかった。みんなサッカーバカだわ。

「やっぱり、みんなジツとしてられなかったのか！」

「ああ。気合が入っちゃまってさ。ほら、見せつけられただろ？エドガーってやつのは必殺技」

「それに昨日のグループBの初戦見ましたか？」

「ああ。ブラジル代表ザ・キングダムの圧勝だったな。流星は優勝候補だ」

「今は違うグループだけど、決勝トーナメントに上がればブラジルとも戦うことになるかも……。イギリスにブラジル……。世界レベルのサッカーを見せつけられていてもたつてもいられなくて……」

「俺、自分のサッカーが通用するかどうか分からないでやんす……」

目の前で見せつけられた世界レベルの実力。今の俺達からすれば、遥かに高く厚い壁だと言える。

「……ま、大丈夫じゃねえの」

「……比企谷？」

「確かに世界は俺達の想像を軽く超える強さと言える。だが、言ってしまうえば俺達もその世界の一部だろ」

「比企谷の言う通りさ！ここまで来たんだ！思いつきり、世界のスゲーやつらと競い合おうぜ！」

「そうだけ！びびったってしょうがねえ！当たって砕けるだ！」

「砕けたら負けちゃうでやんすよ……」

「大丈夫さ！当たっても俺達は砕けたりしない！絶対ナイツオブクイーンに勝つんだ！」



「おう!!」

俺達は準備をしてライオコット港に向かって、ウミヘビ島行きの船に乗り込んだ。

ウミヘビ島に到着し、俺達は試合会場のウミヘビスタジアムへと向かう。ウミヘビスタジアムに到着し、会場へ入ると大勢の観客が集まっていた。

「ナイツオブクイーン! ナイツオブクイーン! ナイツオブクイーン!」

会場にいる観客の大半がナイツオブクイーンを応援している。完全なアウェイである。

だがそんな中、物怖じしないのが我らがキャプテンである。

「みんな、リラックスイだ! いつも通り俺達のサッカーをしよう! 世界に俺達のサッカーを見せてやろうぜ!」

「おう!!」

F Wは豪炎寺と宇都宮。M Fが鬼道、土方、基山、俺。D Fは綱海、壁山、飛鷹、栗松。G Kは円堂だ。

ピッチサイドではコイントスが行われている。どうやらキックオフはイナズマジヤパンからだ。

「お互いに頑張ろう」

「ああ」

円堂とエドガーが握手をする。

「健闘を祈るよ」

エドガーは余裕の笑みでそう言った。未だに格下相手だと見られているようだ。

ポジションに着いた。ホイッスルが鳴り響き、試合が開始される。

最初にボールが渡ったのは鬼道だった。フィリップとエリックがチェックに入るが、鬼道が突破する。

「虎丸！」

ボールは宇都宮に渡る。ランスとデービッドが宇都宮に向かって走っていく。宇都宮は豪炎寺へとパスを出す。エツジがそれをインターセプト。

イギリスの守りは硬く、攻めても攻めてもボールを奪われてしまう。MFのピーターからエドガーへのセンターリング。

「通さねえぞー！」

綱海とエドガーにマークに入るが、エドガーはその中でトラップし、フィリップへとボールを繋ぐ。ゴール前まで走ってきていたフィリップはダイレクトに蹴り込む。

円堂は反応し、横っ飛びで辛うじてセーブする。

「これが日本のサッカーか……中々頑張っているじゃないか」

エドガーはそう言って円堂を見下した。

円堂からボールは俺に渡る。ゲイリーとフィリップのマークが厳しくなり、俺は宇都宮へとボールを渡す。宇都宮はエリックを抜き去り、そのままゴール前まで走っていく。

しかし、宇都宮の前にはDFのランスが立ち塞がる。

「ストーン…プリズン!!」

ランスが両手を上に掲げると、宇都宮の背後の両サイドから石の柱が次々と生え始める。それに気を取られてしまう宇都宮は、目の前に映え出した石の柱に気付かずにつかってしまいボールを奪われる。

ランスからエドガーへとパス。

「受けてみる! 聖なる騎士の剣を!」

エドガーはボールを蹴り上げて、自身も飛ぶ。

「エクス…カリバアアア!!」

エドガーはエクスカリバーを発動。凄まじい威力のシユートがグラウンドを抉りながら飛んでいく。

「止めろ円堂!」

すると、エクスカリバーを阻止すべく壁山が立ちはだかる。

「ザ・マウンテン!!」

壁山はザ・マウンテンを発動。だがエクスカリバーを止めることは出来ず、そのままゴールへと飛んでいく。

「いかりの……てっつい!!」

壁山のブロックもあり、威力が落ちたエクスカリバーを円堂はなんとか防ぐ。

ボールは再び俺に繋がり、反撃を試みるが、ナイツオブクイーンは妙な陣形に切り替えてきた。エドガーの合図で、その陣形は動き出す。

「サザンクロスカット!」

向かいからフィリップがボールを奪いに来るが、俺は突破する。だが、すぐさまエリックがマークに入ってきた。俺はスピードに乗ってエリックをなんとか突破するが、次にボールがやってきてボールを弾かれてしまう。

そのこぼれ球を基山がフォローし、攻め上がっていく。だが、エドガー、ピーター、ゲイリーと続け様に襲われてしまい、ボールをまた奪われてしまう。

「これで私達の必殺タクティクス：アブソリュートナイツ!」

次々と襲いかかることで相手に一息させずにボールを奪うということか。

基山からボールを奪ったボールは飛鷹を躲し、エドガーへとボールを繋ぐ。そこへ綱海がエドガーにスライディング。しかし軽やかに躲かれてしまい、そのまま円堂に

シユート。

円堂は反応し、しつかりとキャッチする。

「ナイスセーブ」

「…負けてたまるか…！俺達は、世界一を目指してここに来たんだ!!」

「…世界…?」

「ああ！そのために激しいアジア予選を勝ち抜いてきたんだ！」

円堂は世界と戦う理由をエドガーに述べる。だが、エドガーから発された一言。それは、

「無理だ」

エドガーは無理だとはつきり言い切った。

「君達は、世界一の意味を本当に分かっているのか？」

エドガーは大きめな声量で、俺達にそう問う。

「円堂。君の言う“世界一”は、自分達だけのものなのだ。…世界の舞台で戦う代表チームは、自分達の国の数えきれない人々の夢を託されている。それを裏切ることとは出来ない。その夢を背負って戦うことが、代表としての使命なのだ」

「代表としての、使命……」

「私達は、ナイツオブクイーンに選ばれた誇りを胸に戦っている。ただ目の前の高みし

か見えていない君達に、負けるわけにはいかない！」

円堂は何も言い返すことが出来なかった。もしかしたらどこかでそういう感情があつたかも知れないからだ。

再びナイツオブクイーンがボールを支配し、エリックに繋がる。

「止める！」

俺はエリックに向かって突進していく。エリックは両足でボールを挟み、バク転を連続してこちらに進んでくる。そして俺の目の前に来ると大きくジャンプ。

「ウルトラムーン!!」

華麗な必殺技で抜かれてしまう。エリックと共に、少し前にいるフィリップが駆け上がっていく。

「行かせるな！」

エリックとフィリップに注意して、デیفエンスを固める。エリックはフィリップにパスを出す。するとフィリップはダイレクトでバックパスを出し始める。

パスの先には、エドガーがいる。

「これが聖なる騎士の剣……真実の姿だ！」

エドガーはゴールからだいぶ離れたところからエクスカリバーの体勢に入る。

「エクス……カリバアアアアアアア!!」

エドガーの超ロングシュート。

あれだけ離れていれば威力はだいぶ落ちる。完全に止めるとはいかなくても、だいぶ威力を削ぐことが出来る。

そう思つてエクスカリバーに挑むが、ゴールからだいぶ離れたところから打つた様なスピードやパワーではないと気づいた。

「ザ・マウンテン!!」

壁山は再びザ・マウンテンを繰り出すが破られてしまう。

「いかりの……てっつい!!」

円堂はいかりのてっついを繰り返す。だが、先程と違つて簡単にいかりのてっついを破つてしまい、ゴールに突き刺さつた。

0-1でナイツオブクインの先制。エドガーに回せば決められてしまうことが分かつた。逆にエドガーに回さなければ勝機はある。

とはいえ、あのアブソリュートナイツとかいう必殺タクティクスを破らなければ、点を取れない。

次々に真正面から襲いかかってくる必殺タクティクス……。

「鬼道！比企谷！」

俺と鬼道は久遠監督に呼び出される。

「…アブソリユートナイトには大きな弱点がある。それを見抜けないお前達ではあるま  
い」

「弱点……」

「……そういうことね」

確かにやつらのアブソリユートナイトには弱点がある。俺達はグラウンドに戻り、ドリブル力のある栗松を呼び出して作戦の概要を説明する。

「俺でやんすか!?!」

「ああ。お前のドリブルが必要なんだ」

「はいでやんす!」

イナズマジヤパンからのボールで試合再開。ボールは俺に渡り、そのまま俺、栗松、鬼道と縦の布陣で攻め上がっていく。

「何をしても無駄だ」

エドガーの合図で、他のメンバーは動き始める。俺の前にはフィリップがマークに入るが、後ろにいる栗松へと繋いでフィリップを突破。栗松の前にはエリックが来るが、同様に後ろに鬼道へとボールを繋いで突破する。

鬼道の前にはポールが現れ、フィリップを足止めしていた俺は駆け上がっていく。それを讀んだエッジは俺にマークに付く。



「今でやんす!」

しかし、それはフェイク。俺の逆側から栗松が飛び出し、鬼道からボールを受け取る。栗松に向かってゲイリーが走ってくる。

「まぼろしドリブル!!」

栗松のまぼろしドリブルでゲイリーを突破。その先にはデービッドとピーターがデイフェンスに入るが、その前に栗松は豪炎寺へとパス。

だが豪炎寺の前にはランスが立ちはだかる。

「ストーンプリズン!!」

今度は豪炎寺が石の柱に囲まれる。だが、咄嗟の判断力が優れている豪炎寺はストーンプリズンをジャンプで躲す。

「爆熱……スクリユウウーツ!!」

オーストラリア戦で編み出した新技を発動するが、

「そうはさせない!」

「何ツ!?!」

爆熱スクリユウを打つ前にゴール前まで戻ってきていたエドガーがボールを奪う。そのままエドガーはゆっくりとイナズマジヤパンゴールを睨む。

まさかあいつ…。



## 異次元の技

「エクス…カリバアアアアアアアアアア!!」

エドガーが自陣のゴールエリアからエクスカリバーを放った。徐々に威力を増していくエクスカリバーに、再び壁山が挑む。

「ザ・マウンテン!!」

壁山がザ・マウンテンでエクスカリバーを止めようと食らいついていくが、

「無駄だ!」

ザ・マウンテンが砕かれてしまい、そのまま円堂へと飛んでいく。

「いかりのてっつい!!」

円堂はいかりのてっついを繰り出し、エドガーのエクスカリバーを間一髪で死守する。円堂がボールを止めて、反撃を開始しようとするが、壁山がうつ伏せのまま倒れて立ち上がらないでいた。

「壁山ツ!!」

どうやらさっきのエクスカリバーで無理をし過ぎた様だ。今までエクスカリバーを止めようと必死でブロックしていたからな。恐らく、これ以上のプレーは難しいだろ

う。

「壁山、よく頑張ったでやんす！」

「根性あるな、お前」

「何度もやられたら悔しいっす！イナズマジャパンの失点は、俺達だけの失点じゃないっすから！」

「…壁山……」

「…分かった。後は任せとけ」

壁山がベンチに下がり、代わりにFWの染岡が入る。アブソリユートナイトが綻びを見せ始めている今、攻撃中心のフォーメーションは妥当なところだと言えるだろう。

試合が再開し、円堂から俺に渡る。ナイトオブクイーンは、アブソリユートナイトの体勢になる。

「鬼道！・栗松！」

俺達は再び縦の布陣で攻め上がっていく。先程と同じ様にアブソリユートナイトに向かつて進行していく。

「宇都宮！」

俺は栗松と見せかけて相手の裏をかき、宇都宮にパスを出す。ジョニーがそれをインターセプト。読まれていたのか。

「エドガー!」

「行かせるかよ!」

ジョニーからエドガーへのパスを染岡がカット。そのまま攻め上がっていく。

「染岡!」

少し先行している豪炎寺へとパス。デービッドとGWのフレデイが豪炎寺に警戒を始めた。豪炎寺はその裏をかいて、染岡へとボールを戻す。

「このユニフォームを着ることの重さは、俺が一番知っているんだ!」

染岡は必殺技の構えに入る。上空から翼と手足のある巨大なドラゴンが降臨し、大地を踏みしめた反動でボールが浮き上がる。

「ドラゴン……スレイヤアアアッ!!」

足を大きく振りかぶってボールを蹴り込むのと同時に、ドラゴンがボールに撃ち出す形に口から破壊光線みたいなのを発射。

強烈な威力を誇るシュートが、フレデイの逆を突いてゴールに叩き込んだ。

「よっしやああああッ!!」

入って早々に染岡の同点ゴール。選考試合からだいたい特訓を重ねたのか、染岡は化けた。その積み重ねが、今の一点に繋がったのだ。努力は結果を裏切らないとは、まさにこのことである。

「……凄えわ」

見えないところで染岡は努力をしていた。その姿に素直に敬服するよ。

1-1の同点となった中、ナイツオブクイーンがメンバー交代。MF4人と控えのGKメンバー以外を全員交代させた。

オーストラリア戦みたいなのに、アブソリュートナイツが破られたから違う策で来るといふ可能性が見られる。

次はどういう策なのかと気構えていると、ナイツオブクイーンは妙な布陣に切り替わった。両サイドをガラ空きにして、中央に密集する布陣となる。

ここにきて揺さぶりをかけてきたな……。

試合が再開し、エドガーがボールを持つ。豪炎寺がエドガーへと向かっていくと、エドガーは後方にいるデービッドにバックパス。同時にDFがサイドから上がってくる。そのDF達をサイドにいた俺と染岡、宇都宮と基山が警戒する。

デービッドに向かって再び豪炎寺が走っていく。デービッドは前線にいるエドガーへとパス。

エドガーが駆け上がってくるが、同時にエドガーの前からフィリップが、サイドにはニツクとマイキーが着いた。刹那、4人は青いオーラを纏い、まるで槍の様にイナズマジヤパン陣内に攻め込んでくる。

センターにいた鬼道と土方が止めようと試みるが、簡単に中央突破されてしまう。そのままエドガー達はDF達を次々と倒していく。

「見たか！これが攻撃型必殺タクティクス……無敵の槍！」

ナイツオブクイーンがメンバーを変えたのは、無敵の槍を発動させるためだったのか。

エドガー以外のメンバーはバラけて、円堂と一対一に持ち込んだ。

「行くぞー！」

「何がなんでも止めてやる！」

「フツ……ここはこの技だ」

エドガーはエクスカリバーの体勢ではなく、横に一回転して左足でトーキック。

「パラディン……ストライクツ!!」

エドガーのもう一つの技が円堂に向かって飛んでいく。

「いかりの……てっつい!!」

円堂はいかりのてっついを発動。だが、威力はパラディンストライクの方が勝り、再びゴールを決められてしまった。

エクスカリバーの他にもあんな強烈なシュートを持ち合わせていたとは。流石はプロが注目しているプレーヤー。

円堂が決められて前半を終える。俺達は後半のためのミーティングのため、控え室へと戻る。

「これ以上の失点は許されない。後半はボールをキープして、常に動かし続ける。鬼道、お前がコントロールしろ。分かったな」

久遠監督の指示に鬼道が頷く。

「そしてもう一人は不動。後半はお前達二人が司令塔だ。同時にピッチにいる意味を考えてプレーしろ」

「……そういうことだよ、鬼道くん？」

「……ああ。…円堂、ゴールは任せたぞ」

「ああ」

後半の作戦を練り、再びグラウンドに戻る。ここでメンバー変更。土方、綱海、栗松に代わって不動、佐久間、木暮が入る。

後半開始のホイッスルが鳴る。俺達は中央を大きく空けて、ナイツオブクイーンを誘い出す。

「ならば遠慮はしない！無敵の槍！」

再びナイツオブクイーンは無敵の槍を発動。

「飛鷹！狙うのはシュートの瞬間だぞ！」



「ああ！」

無敵の槍が解け、シユートを撃つ瞬間を見逃さず、木暮と飛鷹がエドガーに迫り来る。木暮は躲されてしまうが、エドガーは躲した反動で飛鷹を抜き去ることが出来ず。

「どりゃああアアツ!!真空魔!!」

飛鷹のデیفエンス技でエドガー、および無敵の槍を封じ込めた。

シユートを打つときを狙ってガードをしている選手を引きつけ、ボールを奪った。

飛鷹から鬼道へと渡る。

「相手にボールを渡すな！」

鬼道から木暮に、木暮から基山に。

「飛鷹くん！」

基山から飛鷹にボールが行く。

「右に流れるぞ！」

飛鷹から今度は俺に渡る。鬼道、そして不動の指示の下で俺達はボールを繋げ続ける。目まぐるしくボールが移動することでナイツオブクイーンを翻弄する。

次にボールは不動に渡る。

「染岡！豪炎寺！」

前線にいる染岡と豪炎寺が一気にゴールへと上がって行く。

「これ以上好きにはさせない！」

エドガーが不動に迫る。

「今だ、ヒロト！」

不動から基山へのパス。

「1m右だ！」

鬼道の指示で基山はボールをトラップ。そして、必殺技の体勢。

「流星ブレードツ！V2!!」

基山の流星ブレードがフレディに向かって飛んでいく。

「ガラテイイーン!!」

フレディは気を右手に溜め、上に突き上げる。すると、右手には巨大な剣が備わり、それを流星ブレードへとぶつけて一刀両断。

しかしイナズマジヤパンの攻めは止まらない。ボールは不動に渡る。

「虎丸！」

不動から宇都宮へのパス。だが、目の前に立ちはだかるのはDFのランスである。

「何度来ても無駄だ！ストーン…プリズン!!」

ランスはストーンプリズンを発動。しかし、柱を隔てて様子を確認するが宇都宮はどこにもいなかった。

「これならどうだ！」

宇都宮は豪炎寺と同じくストーンプリズンをジャンプで躲す。そのまま宇都宮は必殺技の構えに入る。

「はああアア!!」

宇都宮が両手を広げると、同時に周囲に鋭い剣が出現する。

「せえやああアア!!」

宇都宮がボールを蹴り込む。すると、出現した剣もワンテンポ送れてボールと共にフレディに向かって飛んでいく。

「ガラティイーン!!」

フレディはガラティーンで宇都宮の新技にぶつける。しかし宇都宮の新技の方が威力が高いため、ゴールを許してしまう。

イナズマジヤパンは2-2の同点に追いついた。

試合時間はあまり残されていない。次の1点が決勝点となる。ナイツオブクイーンからキックオフで試合再開。

フィリップにボールが渡るが、

「もらったッ！」

すれ違い様に俺はフィリップからボールを掠め取る。ビートとニックがマークに入

るが、奪われる前に染岡へと繋げる。

「行け！染岡！」

ボールを受けた染岡はデービッドを躲してゴール前に。

「轟け！！ドラゴン……スレイヤアアアアアアッ！！」

染岡が渾身のドラゴンスレイヤアを放つ。

「負けるわけにはいかない！代表の誇りにかけて！！」

だが、エドガーが前線からゴール前まで戻ってきていた。そしてエドガーはドラゴンスレイヤアに挑み始める。

「エクス……カリバアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

エドガーはエクスカリバーを発動し、ドラゴンスレイヤアにぶつける。

「ぐおおおおッ！！」

するとエドガーは染岡のドラゴンスレイヤアを直接蹴り返す。

「なんだと！？」

ドラゴンスレイヤアと自陣のゴールから打ち放った威力が合わさって、史上最強のエクスカリバーが地面を抉って円堂に向かって飛んでいく。

「旋風陣ツ！はあアアア！！」

しかし、木暮は簡単に吹き飛ばされてしまい、残るは円堂ただ一人となる。今の円堂

ではエクスカリバーを止められない。ここで踏ん張るかどうかは円堂の力量次第だ。「…そうかッ！止める必要はない！ゴールに入れなければいいんだ！」

円堂はいかりのてっついの構えではなく、気を右手に溜めて上空へジャンプする。「どんなシュートでもゴールに入らなければ、得点にはならないんだッ!!」

円堂は気の溜まった右手を地面に叩きつける。すると円堂の周囲にエネルギーフィールドが発生し、エクスカリバーを後方に受け流して得点を阻止。

「…なんじゃあれ……」

エクスカリバーを止めたことにも驚いたが、その止めた方法だった。

大体は何かしらの手段でボールをキャッチしたり、パンチングで跳ね返していたのだが、あいつはキャッチもパンチングもせずにエクスカリバーを止めた。

止めた、というより外させた、あるいは逸らしたというべきなのだろうか。

「やった！出来たぞ！」

あんな技を土壇場で繰り出すなんて……。

我がチームのキャプテンは本当に無茶苦茶だわ。

「比企谷あッ!!」

円堂からボールを受け取って、ナイツオブクイーンを次々と突破していく。しかし、俺の前にはエドガーとランスが立ちはだかる。

「行かせはしない……騎士の誇りにかけて！」

「鬼道、不動！行つたれ！」

俺は後ろにいる鬼道にパスを出して、相手に隙を生み出す。

「行くぞ不動！」

「偉そうに命令すんじゃねエ！」

鬼道と不動は、韓国戦で見たあの連携技の構えに入る。

「キラー……ファイールズ!!」

キラーファイールズで二人を吹き飛ばし、宇都宮へとラストパス。

「行くぞ！」

「はいッ！」

宇都宮と豪炎寺はゴール前に。そして、あの連携技の構えに入った。

「うおおオオツ!!タイガー……!!」

「ストオオームツ!!てえやああアアツ!!」

韓国戦で見た連携技、タイガーストームがフレディに向かって飛んでいく。

「ガラテイイイーン!!」

フレディも全力のガラテイーンでぶつかってくるが、タイガーストームはそれを破ってゴールに叩き込んだ。

3―2の逆転。そして試合終了のホイッスルが鳴り響く。強豪ナイツオブクイーンを辛うじて撃破。

「よおーっし!!やったぞ、みんな!!」

今回は特に染岡と円堂が活躍したと思う。特訓を重ねた末のドラゴンスレイヤーに、規格外の技でシュートを逸らした円堂の技。

今更だが、改めてイナズマジヤパンのサッカーは凄いいということを実感した。

しかし、大会はこれからだ。

アルゼンチンやアメリカ、それにイタリア……イギリスと同等、もしくはそれ以上の實力を持つチームがまだ残っている。

気を引き締めないとな。

## 練習無し

初戦のイギリス代表ナイツオブクイーンを俺達は撃破。

そして、その日の夜。

「初戦の勝利おめでとう。次の試合も気を引き締めて臨んで欲しい」

「はい!!」

「次の対戦相手はアルゼンチン代表ジ・エンパイアだ。攻撃型チームだったナイツオブクイーンとは真逆の、鉄壁の守りが信条のチームだ」

アルゼンチンといえば、あのガタイが少し大きいキャプテン、テレスがいるチームか。

「早速明日から対策と練習を……と、言いたいところだが」

久遠監督は中途半端な部分で話すのをやめ、久遠を見る。

「?どうしたんですか、監督?フユツペも」

「明日の練習は休みだ」

なん、だと……。や、休み……?」

「冬花くんから提案があつてな」

「フユツペが提案を?」



「凄い試合の後だから、一日休んだ方がまた頑張れるかなって……」

待って久遠マジ女神かよ。めっちゃ照れてんじやん可愛い。まるで戸塚みたいだ。養ってくれないかな。毎朝味噌汁作ってくれないかな。

俺達は夜食を食べ終え、各自自分の部屋に戻っていった。

「……明日休みとかマジ最高」

部屋でずっとゴロゴロしていいなんてめっちゃいい日だ。

俺はベッドに寝転がり、家から持ってきたゲームでもしようとする、俺の部屋にノックが鳴る。

「音無でーす！比企谷先輩、ちょっといいですかー？」

どうやら音無がやって来た様だ。部屋のドアを開けると、音無と雪ノ下がいた。

なんか似たシチュエーションどつかであった気がするんだけど。何か嫌な予感があった為、俺はこの一言を送った。

「……俺は嫌だ」

「まだ何も言っていないですよ」

嫌だ。絶対嫌だ。何しに来たか容易に想像できるもん。

「明日、私達の買い物に付き合ってください！」

「お断りします」

なんでマナージャー達の買い物に俺が付き合わなきゃならんのだ。

「あら、断つてしまうのね。けれど、小町さんはこう言つていたわよ」

雪ノ下は自慢げにケータイを見せつけてくる。どうやら小町との連絡の記録だった。

「……小町お土産リスト。3位、島の名産物。2位、優勝トロフィー。1位、お兄ちゃん  
の思い出話……。なんだこれ」

ていうか俺に送れよ。なんで雪ノ下のケータイに送つちやつてんだよ。

「小町さんへのお土産を貴方は渡さないの？小町さん、折角貴方からのお土産を楽しみにしているのに……。なんとまあ薄情な兄だこと」

「いや、思い出話なんて練習してりゃ勝手に作れんだろ。名産物なんて空港で買つてりゃ……」

「そんな手を抜いたお土産はダメですよ先輩！それに、島を巡る機会なんて中々ないんですし！一緒に買いましょうよお土産！一緒に作りましょうよ思い出話！」

お、音無ちゃん、えらく張り切ってるわね。ちよつと引く。

まあ小町がそこまで言っているなら仕方ないな。あくまで小町のためだ。他意はない。それに戸塚への土産も買わなきゃならんからな。

「……分かったよ。行けばいいんだろ」

「流石比企谷先輩は話が早いっ！じゃあ明日どこに行くか決めるんで、私の部屋に来て

ください！木野先輩や八神さん、冬花さんもいますから！」  
「ごめんちよつと待つて」

マナージャー五人に対して俺一人とか何の嫌がらせだよ。

「…流石に他誘わない？こないだの荷物持ちで思ったんだが、俺一人とか嫌なんだけど」  
「でも他に空いてる人いないですよ？さつき大半の人に聞きましたけど」

「マジかよ……」

「いいじゃないですか！比企谷先輩モテモテで！」

木野か久遠辺りに拒否ってもらえば明日一人になれる。小町へのお土産なんて最悪一人で購入に行けばいいだろ。

そんな淡い期待を抱いて、音無の部屋へと案内される。

「あれ？比企谷さん」

「八幡ではないか。どうしたのだ？」

「…それは音無に聞いて」

音無はさつきの話を木野達に伝えた。さあ、嫌と言え嫌と。そうすれば俺は明日引きこもりに……。

「別にいいわよ。それに、やっぱり人が多いと楽しいもん。ね、冬花さん」

「秋さんの言う通りです。それに私、比企谷さんとはあまり話したことなかったから

……仲良くなりたくなってる……」

やだ何それめつちや可愛いんだけど。久遠ってばこんな可愛い子だったのん？

前までの俺なら告白して振られるまである。振られちゃうのかよ。

「ですって先輩！こーんな可愛いマネージャーがお願いしているのに、先輩は断るんですか?!? 鬼なんですか?!?」

どうやら俺に逃げ場はない様で。ドーせならとつと寝ておくべきだったな。

「……分かったよ……」

こうして、俺の貴重な休みが無くなってしまった。解せぬ。

—————

「じゃあそろそろ行きましようか」

「おぉーっ！」

朝から元気ね音無さん。俺はもう少し寝たかったです。頼むから耳元でメガホン使つて起こすのやめようね。マジ鼓膜破れるかと思つたから。

まずはエントランスエリアを巡ることになっているらしい。時間があれば、他国のエリアにも行くかどうか。

俺達はバスに乗って、エントランスエリアに向かう。

「…大丈夫…ですか…？」

久遠が心配そうにしてこちらを伺う。どうやら気を遣わせてしまったようだ。

本当、久遠ええ人やなあ……。

「…大丈夫だ。これくらいは無茶振りには小町で慣れてる」

「小町って……なんでお米が出てくるんですか？」

「お米じゃねえよ」

そのボケは一色で間に合ってる。

「次はセントラルストリート。セントラルストリート。お降りの際は…」

バスのアナウンスでエントランスエリアの中央部分であるセントラルストリートが近づいてきたのが分かった。そして到着し、俺達はバスから降りていった。

「最初はどこに行きますかー？」

「私はここに……」

八神を除くマネージャー陣があれやこれやと向かう店を決めていた。

「…全く、面倒なものだ。八幡がいたからまだ良かったもの……」

今回は八神に同意見だ。

時々思うんだ。女子中学生や女子高生などは、何故暑い中歩き回ることが出来るの

か。いくら店の中にクーラーが効いているとはいえ、気が滅入らないのだろうか。

もしかすると俺より体力ある説。

「比企谷先輩、八神さん！最初に向かう場所が決まりました！早く行きましょう！」

「…おう」

まずはセントラルストリートにあるショッピングモールに向かった。そんな最中、俺は知らない人にぶつかってしまった。

「あ、すいません……」

「……………」

長身で金色の長髪に、白いスーツを見に纏った男。俺はすぐさま謝るが、男は何も言わずにその場を去っていった。

「どうしたのだ？」

「…何でもねえよ」

金髪の男を気にすることなく、俺は木野達の後を追いかけた。

—————

ショッピングモールに入ると、マネージャー達はまず服を見たいと行って服屋に向

かった。

「この服、可愛い……」

「冬花さんもそう思いますよね？私も買おうかなあ」

「八神さんは普段どんな服を着るの？」

「わ、私か？私は……」

マネージャー達なんだかんだ仲がいいですね。八神も馴染めている様だ。

俺は特に買う服などが無いため、向かいにあるライオコツト島のお土産屋に足を運んだ。

キーホルダーにストラップ、ぬいぐるみにサッカーボール、それに有名選手のブロマイド。エドガーのブロマイドまであるじゃねえか。

とはいえ、あいつも中学生だからな。中学生らしいお土産といえば、ストラップとかキーホルダー、それかぬいぐるみか？

小町が喜びそうなもん分かんしな。

「……まあ、妥当にぬいぐるみでいいかな」

部屋に置いてもあり邪魔にならず、かつ見栄えがいいサイズのぬいぐるみにしようと考えて、俺はぬいぐるみコーナーへと向かった。

「……お」

人相が悪いが、どこか憎めない顔をしたパンダのぬいぐるみがそこに置かれていた。そう。雪ノ下が猫と同レベルで好きなものといえば。

「パンさんだ…」

まさかのパンさんがライオコット島に上陸していたのかよ。良かったな雪ノ下。パンさんは世界規模で知られているぞ。

俺は小町にはぬいぐるみ、戸塚にはキーホルダーを贈ることを決めて、すぐに会計を済ませた。

俺がお土産屋から出ると、マネージャー達も服を買い終えた様子だった。

「あ、比企谷先輩！勝手に消えないでください！」

「小町とかへの土産買ってたんだよ。そういえば雪ノ下」

「何かしら？」

「今俺が行った店にパンさんのぬいぐるみがいたぞ」

「…何ですって？」

雪ノ下は目の色を変えてすぐにお土産屋に赴いた。

「…比企谷くん。パンさんって？」

「東京デイスティニーランド人気キャラクターだ」

最もあれを東京とは言えないがな。あれは千葉のものだ。したがって、デーズニーラ



ンドもデーズニーシーも、あくまで千葉のものである。東京のもんじやねえぞ分かったか。

「気になるなら行ってこいよ。外で待ってるし」

「ダメです！比企谷先輩はすぐ消えちゃうから私が監視します！」

「いや、ダメだ。八幡を監視するのは私だけでいい。お前はとつとと土産を買いに行くがいい」

監視つて。俺は犯罪者か何かなのかよ。

結局、音無と八神の二人の監視付きで、再びお土産屋に足を運んでしまった。店員さんからは「また来たのか」みたいな目で見られたよ恥ずかしい。

因みに、やはり雪ノ下はパンさんのぬいぐるみをお買い上げになりました。

—————

「…疲れた…」

宿舎に帰ってきたのは、夕方くらいだった。結局買ったのは小町、そして戸塚へのお土産だ。

由比ヶ浜や平塚先生達などの土産は、雪ノ下と決めて購入した。

「比企谷さんは自分のお土産買わなくて良かったんですか？」

「まあ特に何もなかったからな」

別に自分への土産なんてどうでもいい。マツカンがあれば話は別だったんだがな。

そんな話をしていると、ユニフォームが泥だらけの立向居が重い足取りで上の階に上がって行った。

「立向居くん……なんであんな泥だらけなんだろ……？」

「……まさか、今日一日練習してたのか？」

だとしたら真面目としか言いようがない。昨日のナイトオブクイーンで出場してなかったとはいえ、休める時は休むべきだ。

そんな立向居に対する疑問を頭の隅に残して、今日の一日を終えた。

## 立向居だけの技

アルゼンチン戦に向けて俺達は特訓を開始した。アルゼンチンが誇る鉄壁の守りをどう崩すかが課題となる。

変わらず普段通りの特訓をしていたとき。

「比企谷先輩！少しいいですか？」

音無がこちらに駆け寄って声をかける。

「どうした？」

「あの、立向居くんの必殺技完成に比企谷先輩も手伝ってくれませんか？」

「立向居の必殺技？」

俺は必殺技を目指す理由を音無から聞いた。

どうやら立向居は、円堂の完コピじやイナズマジャパンにいる資格がないと卑屈になっており、円堂の技ではなく、自分だけの技を完成させたいとのこと。

ムゲン・ザ・ハンドも、元は円堂が習得すべき技だったそうで、それも自分の技ではないと言っていた様だ。

それを言い出したらキリないけど、必殺技のきっかけになったのならそれはそれでい

いんだろう。

「……まあ、別に構わんけど」

「本当ですか!？」

どのみち、アルゼンチン戦に向けてオフエンスと並行で必殺技のシユートも強化しておきたかったしな。立向居の練習を手伝おうが手伝わまいが、俺のやることは大して変わらない。

俺は音無に連れられて、立向居達の特訓していると勝手に俺も合流した。

「お、比企谷じゃねえか! 手伝ってくれるのか?」

「ん、まあな」

「比企谷さんがいれば心強いでやんす!」

そんな歓喜されても困る。

「ありがとうございます、比企谷さん!」

「お、おう」

そんなこんなで、立向居の特訓に付き合うこととなった。ムゲン・ザ・ハンドを超える必殺技、魔王・ザ・ハンド。

無限を超えるのが魔王っていうのは何言ってるか分からんが、ネーミング的に強そうだな名前である。

「じゃあ行くぜ！立向居！」

「はい！お願いします！」

俺達は立向居にシユートをしばらく打ち続けた。10本、20本、30本。いや、下手すれば100本以上は軽く打ち続けた。

「……これ、きつついな……」

みんなの疲労も見え始めている。100本以上シユートを打ち続ければ、流石に疲れてくる。止めている立向居も、流石に身体にきている。

「まだよ！打って打って打ちまくるのよ！」

俺達は尚もシユートを打ち続ける。

「まだまだあーッ！必殺技は一日にして成らずよ！こんなもんじゃ終わらないわ！さあもう一度、打てえーッ!!」

俺達はもう一度シユートを打った。だが、シユートを打ったのは二人だけだった。

「あれ？」

どうやら俺と綱海以外の一年生は、バテて座り込んでいる様だ。

「ち、ちよつとみんな！」

「もう100本以上打ってるっすよ……」

「疲れて動けないでやんす……」

「こっちの身にもなってくれよ……」

特に足が悲鳴を上げていることだろう。ずっと足を酷使して打っているわけだからな。

「…ま、流石に休憩するか……」

「ダメダメダメダメえええーッ!!」

「ふあッ!!」

音無の喝が入る。びっくりして変な声出たんだけど。

「立向居のためにみんな協力して必殺技を作るって、あの夕日に誓った約束を忘れたの!?!」

一体何を見せられているんだ俺は。夕日に誓うってスポ根漫画かよ。

「必殺技が出来るまで、立って立って立ち続けるのよ!」

俺もかしいたらヤバイ特訓に参加したかも。こんな鬼軍曹がいるとは思わなかった。音無じゃなくて、やかましじやねえかよ。

「綱海さん、何か言っして下さいっス……」

「…ここまで言われちゃ、やるしかないわな…」

「ええ〜!」

「比企谷さんからも何か言っして下さいでやんす!」

俺をあてにするなよ。

とはいえ、流石に5分10分の休憩は必要だろう。そう思い、俺は音無に説得を試みた。

「…なあ、やかま、違うわ音無」

今完全に名前を間違えかけた。

「今、何を言おうとしましたか？」

「…な、何でもないよ？…そ、それよりだ。流石に休憩がなかつたらさ……」

「は？」

「ごめんなさい何でもありません」

無理だ俺に音無の説得は無理だ。あいつの目ヤバいもん。眼力だけで人を殺せる可能性があるわあれ。

「さあみんな立ちなさい！立って打ちまくるのよ！」

音無軍曹の支配下に置かれた俺達は、再び立向居に向かってシユートを打ち続けた。「行くぞ立向居！」

「はいー」

俺は立向居に向かってシユートを打つ。

「うおおおオオッ!!」

すると立向居の雄叫びと共に、背中から紫色のオーラが竜巻状に発生するが何も起きず、立向居はボールに当たって倒れてしまう。

「大丈夫か立向居？」

「…あと少しで出来そうなのに……何が足りないんだろう……」

「…そんなもん、熱さだ！情熱だ！心の底から湧き上がってくるもんをもっと、全身で表すんだよ！そこから必殺技が生まれるんだ！」

「…でもどうやって表現するんスか？」

「ノリだよノリ！ノリでなんとかなる！」

そんなノリで必殺技が生まれるんなら誰も苦労はしないよ？

……しかし、心の底から湧き上がってくるもの、か……

「いい方法があるよ」

木暮が閃いた様にそう言う。俺達は持ち場に戻り、再びシュートの体勢に入る。

すると、木暮が大きく息を吸って、大声でこう叫んだ。

「このへなちよこキーパー!!」

「むっ……」

そういうことかい。中々ひん曲がった方法だわ。

要するに悪態吐いて立向居の心の底から燃え上がらせるってことか。



木暮の方法を理解したみんなは、木暮に続いて悪口を言っていく。

「ドジ」

「ノロママ」

「根性無し」

「おたんこなす」

なんか、聞いていたら可愛い悪口だな。普段俺が雪ノ下に言われていることに比べれば、まだまだだな。

つーか、これ雪ノ下を出してきた方がよくね？雪ノ下の得意分野じゃねえか。

そう思つて、俺は何の気無しに雪ノ下を見ると。

「ひっ」

雪ノ下からの冷たく鋭い視線が俺に突き刺さる。

やっべ殺される。まだ俺何も言つてないんだけど。

「弱虫毛虫！小者！卑怯者臆病者！ゴミ！クズ！間抜け！穴の空いた鍋！ゴムの伸びたパンツ！」

木暮も木暮でよくそんな悪口が次から次に思いつく。中々のボキャブラリーの豊富さだ。言つてゐることはクソガキみたいだけど。

「な、何をオオオーツ!!」

すると先程より強烈なオーラが、立向居の背中から湧き上がってくる。魔王の姿も若干現れたものの、すぐに引っ込んでしまう。

「…何も…そこまで言わなくても……」

立向居は本気で落ち込んでしまった。まああそこまで言われたら誰だって落ち込むわな……。

しかし落ち込んだものの、すぐ立ち上がって気を取り直した。

「お願いします!」

「よし!行くぜ立向居!」

綱海はツナミブーストの体勢に入った。

「ツナミブーストツ!!おおおおオオツ!!」

「ゴッドハンドツ!!うおおオオ!!」

立向居はツナミブーストをゴッドハンドで止める。

綱海の次に、今度は俺がシュートを打った。

「アストロゲートツ!V2!!」

立向居はマジン・ザ・ハンドの構えに入るが、途中で構えをやめた。

「おいおい。まさかマジン・ザ・ハンドまで出せなくなったわけじゃないだろうな?」

立向居は綱海の声に反応せず、ずっと自分の右手を見つめていた。そして、何か閃い

たのかハツと顔を上げる。

「お願いします！」

「何かよく分かんねえけど、行くぞ」

再び俺達は、立向居へとシユートを打ち続けた。魔王・ザ・ハンドの完全のために。

## 求めるもの

「終わった……」

夕方となり、今日の特訓が終了した。しかし、円堂を筆頭に鬼道や佐久間、そして不動が姿を消していた。

練習中に消えたらしいが、どこへ行ったのか誰も知らないらしい。

妙な不安を頭の隅に置いて、俺はさっさと宿舎の自室に戻った。自室に戻ると、その瞬間に陽乃さんから着信が入る。

「……もしもし」

「あ、比企谷くん。すぐ来れる？ていうか来て」

…相変わらずの破天荒っぷりでした。

場所を伝えられ、俺は陽乃さんに会いに行くために宿舎から出て行こうとしたところで、雪ノ下に引き止められる。

「待ちなさい。もう夕方よ。どこへ行くつもりなの？」

「…陽乃さんに会いに行ってくる。俺の分の夜飯は抜きにしといて先に食べててくれ」

「……比企谷くん。別に、姉さんの言うことを聞かなくていいのよ？姉さん、どうせ比企

谷くんに迷惑をかけるに決まってるわ」

「…ま、そうなったら仕方ねえよ。それに、あの人に借りを作ったからな」

「そう……」

俺はそう言つて、宿舎から出て行つた。陽乃さんに指定された場所へと急いで足を運んだ。指定の場所、なんてことのない喫茶店の入り口の前に陽乃さんが待っていた。

「比企谷くんおつそーい」

「これでも早く来たんですけど」

本当人使いが荒いわ。魔王直々に呼び出しをくろう辺り、今日が俺の命日だったりするのかな。

陽乃さんからの呼び出しで気が滅入りながらも、彼女と共に喫茶店の中に入り、テーブル席に着いた。

「それで、何の用なんですか？俺疲れてるんですけど」

「……比企谷くんの耳に入れておきたい情報があるの。今度ばかりは真面目な話」

いつものらりくらりとしている陽乃さんが、妙に真剣な表情でこちらを見る。

「…どうしたんすか」

「実は、この島の情報屋から話を聞いてね。先日、イタリア代表の監督が失踪したらしいの」

「イタリア代表の監督が失踪……?」

「うん。とはいえ、初戦の時にはいたらしいんだけど。どうやら初戦が終わってから違う監督に代わったの。その監督の名は、”ミスターK”」

陽乃さんはケータイを操作して、こちらに画像を見せてくる。遠目からだから顔は見えないが、長身であり金髪のロング。そして白いスーツを纏っている。

「というかこの人。ついこの間、エントランスエリアで買い物をした時にぶつかった男性じゃねえか。」

「…それで、この人がどうしたんですか?」

「ミスターKの正体を調べていたら、とんでもない人物だったことが判明した。ミスターK……その名は影山零治。帝国学園を40年間優勝に導いた総帥だと分かったの」

影山って言ったたら、円堂の祖父をバスで轢き殺したっていうあの影山か。一時的ではあるが、鬼道や佐久間の総帥だったそうだ。

「影山零治は数々の罪を犯してきた人なの。バスに細工して人を殺したり、手抜き工事を命令してグラウンドに鉄骨を落としたりね。エイリア事件の際に潜水艇と共に亡くなったって記録されていたけど」

「…そんなやつが、イタリア代表の監督に……」

「比企谷くんのチームには、円堂さんと、ゴードルとマントを身につけてる子いるでしょ？恐らく影山はその二人を、ひいては日本代表を狙っている」

「…注意しろってことですか」

「ま、そういうこと。それと、もう一つ。ブラジル代表も監督が代わったの」

「ブラジルもですか？」

いくらなんでも監督代わり過ぎじゃね？

「ブラジル代表の監督は、ガルシルド・ベイハン。FFI大会運営委員長で、オイルカンパニーの社長でもある人物。世界大会が始まってすぐ監督が代わったらしいんだけど……そこはまだ調査中」

「…この間言ってたやることって、そういうことですか？」

「まあね。……このFFIには何か裏がある。もし私の大事な妹の雪乃ちゃんや比企谷くんを傷付ける可能性があるなら、さっさと排除しなきゃね」

彼女は一人で大きな闇と戦っていた。魔王だなんだと揶揄していたが、味方になるとどこまで心強いとは。

「…凄いですね。改めて陽乃さんの凄さが分かりました」

「そうでしょそうでしょー？もつと褒めてくれてもいいんだよー？」

「いやホント。陽乃さんには頭が下がります。その、なんて言ったらいいか分かりませ

んけど……とにかく凄いです」

言っつてしまえば、この人は俺と雪ノ下を、ひいては日本代表を守るために戦っている。そんな彼女になんと言葉をかけたらいいか分らないけど、凄いとしか言いようがない。

「…比企谷くんがそこまで褒めてくれるなんて。お姉さん照れちゃうなー」

「…これくらい、別に普通ですよ」

「ま、ありがとね。そう言っつてもらえて嬉しいよ」

陽乃さんはそう微笑んだ。仮面での笑みか、それとも本心なのか。それは判別できないが、少なくとも俺は陽乃さんが本心で笑っつているように見えた。

「…さて、お姉さんはぼちぼち行かなきゃ。比企谷くんも宿舎に帰らなきゃならないし」「そうですね」

俺達は会計を済ませて、喫茶店から出て行く。

「…あの、陽乃さん」

「ん？どうしたの？」

「陽乃さんのことだから大丈夫なんだと思いますけど……もし、その、調査とかで躓いたら、雪ノ下や俺に言っつて下さい。絶対に力になれる……とは言い切れませんが」

……流石に俺達の問題を、陽乃さんだけに背負わせるのは違いますから」



「比企谷くん……」

影山とかいう危険人物が日本代表を狙っているなら、俺達が危険に晒されることになる。俺達のこととは俺達でなんとかしなくちゃならない。陽乃さんだけに、背負わせるのは違う。

「…そうだね。どのみち比企谷くんには逐一報告はしておくつもりだったし、もしかしたら君の意見は聞いたりするよ。…ありがとね、比企谷くん」

彼女はそう感謝を告げて、俺の頭を撫でる。

「……やっぱり雪乃ちゃんには勿体ないなあ……」

「え？」

「ね、比企谷くん。もしお姉さんが君達の助けになれたのなら、代わりにお姉さんの言うことを聞いてよ」

陽乃さんはそう言った。

恐らく、この先も陽乃さんのお世話になってしまおう。俺達は特訓に集中してF Iの裏事情なんて調べる暇がない。だから、流石に一つくらい言うことを聞くのが人情つものだろう。

「…流石に死ねとかくたばれとかはやめてください」

魔王に死刑宣告とか破滅の道しか見えない。

「こんな時でも比企谷くんは悲観的なんだね。お姉さんそういうところ好きだよ。……  
そうだなあ。私の言うことはただ一つかな。……比企谷くん、私だけのモノになつて」

「……は？」

陽乃さんの突飛的な言葉に目を丸くした。そんな俺に構わず、陽乃さんは話し続ける。

「お姉さん、なんだかんだで比企谷くんのこと気に入ってるからさ。雪乃ちゃんには勿体ない。当然、ガハマちゃんやあの睨んできていた青髪の子にもね」

俺は蛇に睨まれたように硬直してしまう。この人が何故こんなことを言ったのかにも正直驚きではあるが、それより彼女の表情だ。

今の彼女の表情に、俺は全てを支配されてしまう。そう錯覚する程の表情だった。その表情を見ただけで、鼓動が早くなるのが分かった。

もはや微笑んでいるのか、それとも睨み付けているのか、一体なんなのかは分からない。  
い。

そんな陽乃さんは、両手で俺の頬に触れる。

「……私のモノになつたら君が求めている本物を、お姉さんが教えてあげる」

「……本、物……を……？」

「うん。だから……契約だね」

すると陽乃さんは、自身の唇を俺の唇に無理矢理当てた。不意を突かれてしまった俺は、避けることが出来なかった。

「…君の初めては私かな？」

「……それは」

俺は答え切ることが出来なかった。人生で初めてキスをした相手は、八神だからだ。だから陽乃さんが初めてではない。しかし、答えきれない俺を察したのか、陽乃さんは。

「…ふうん。もしかして、あの青髪の子が初めてだったりするの？」

だが、陽乃さんの表情はさつきと違い冷酷な表情に変わる。それこそ、魔王の表情といったところだ。

「何も言わないってことはそういうことなんだ。……気に入らないなあ」

陽乃さんは再び俺に向かってキスをする。さつきの様な優しいキスではなく、俺の全てを支配しようとする激しく、そして深いキス。

「…っんあ……れろっ……んっ……ちゅぴ……」

逃すまいと俺の顔を両手で固定し、見境なく俺の口内を犯し尽くす。舌と舌が絡み合い、いやらしい水音が俺達の耳に入ってしまう。

やがて俺の意識は、陽乃さんに支配されていく。

しばらくキスを行うと、陽乃さんは俺の顔から離れる。彼女の甘い息と共に、舌から糸が引いていた。

「……………これも初めてじゃない？」

「……………流石に、中学生同士がやってたらヤバいでしょ……………」

「そう。なら良かった」

とはいえ、身体中にキスマークを付けられたことはあるのだが。果たしてあれは中学生がやることなのだろうか。

「もう一度言うね。もし私が君や雪乃ちゃん、日本代表の助けになったのなら、その代わりに君は私だけのモノになるの。分かった？」

「……………はい……………」

俺は力なく、陽乃さんに返事した。まるで魔王に魅了されて、操られたかのよう。

「よし。契約成立だね。じゃあお姉さんは行くから。比企谷くんも早く帰りなさい」

そう言って、陽乃さんは目の前から立ち去る。依然、俺の意識は陽乃さんに支配されていた。陽乃さんの表情、言葉、全てが頭から離れなくなってしまうていた。

「……………もう帰ろう」

俺は宿舎へと戻っていった。

「遅いですよ、比企谷先輩!」

「…八幡、何をしていた。答えろ」

宿舎に帰るなり、音無と八幡が俺に詰めてくる。俺は事細かく答える気力がないため、

「……なんでもねえよ」

そう言って部屋に戻ろうとした。しかし、八幡は俺を逃すまいと腕を掴む。

「……お前の身体から不愉快な匂いがあるのだが。……まさか、私を放つて他の雌に会っていたのか?」

陽乃さんといい八神といい、なんですぐ分かるんだよ。エスパールかよあんたら。

「…音無。お前は食堂に戻っている。あとで私が八幡を連れて行く」

「は、はい。じゃあお願いします…」

音無はその場から立ち去り、食堂へと戻っていった。この場にいるのは、俺と八神だけだ。

「…お前の部屋に行くぞ。洗いざらい吐いてもらう」

俺と八神は、俺の部屋へと足を運んだ。

到着するや否や、八神は俺の肩を力強く握りしめて、俺の顔だけを見つめていた。

「……お前の身体から他の雌の匂いがするのは何故だ。答えろ」

「…別に、お前に関係ないだろ」

「関係ある。お前は私だけのモノなんだ。お前を穢されて、黙っていると言うのか」

もし仮に陽乃さんのことを言ったとしても、八神には何も出来ないし、陽乃さんのやっていることを邪魔することになる。

八神の言葉に、俺は何も返さなかった。

「……答えないか。なら、こうしてやるまでだ」

すると八神は、陽乃さんと同様に、キスを交わしてしまう。八神は俺の口内に舌を忍ばせ、俺の舌諸共、口内で掻き混ぜる。

「んっ……れろっ……ちゅぽっ……んあっ……」

彼女の舌や歯、肉がストレートに当たるのが分かる。拒絶しなければならぬはずなのに、俺は何も出来ずにいた。

八神は満足したのか、俺から顔を離す。

客観的に見て時間はものの十数秒だったが、俺からすれば長い長いキスだった。

「……」この際お前にはもう何も聞かない。だが、もし他の雌に穢されたと私が判断したら、こうして上書きをしてやる。お前の身体に他の雌は必要ない。私だけがお前の身体

を満たせばいい。だから他の雌のことを考えるな。絶対にな」

俺の頭は混乱している。陽乃さんのことだったり、八神のことだったり。今の俺は彼女達に支配されてしまっている。

「では行くぞ、八幡」

「……いや、先に行つててくれ。後で行くから」

「…分かった。だが早く来い」

八神はそう言つて部屋から去つて行く。

「…はあ……」

大きく、深い溜息を吐いた。肉体的にも精神的にも酷く疲れた一日だった。

このまま陽乃さんのことや八神のことに意識を持つていかれたら、アルゼンチン戦に集中出来ない。俺は心を落ち着かせるために、マツカンを開けて一気に飲む。

「…はあつ……」

揺らいだ心が、少し落ち着くのを感じる。やはり、疲れた時には甘いものが必須だ。

陽乃さんのことも八神のことも、そして俺のことも、全部F F Iが終わつてからにしよう。試合に集中出来ずにベンチに下がってしまったら、小町や由比ヶ浜に申し訳が立たない。

「……だいが落ち着いたな」

あれこれ理由を付けて落ち着かせた。俺は部屋から出て行き、食堂へと向かうことにした。

今は、アルゼンチン戦のことだけに集中しよう。そう気を引き締め直した。



## 不落の要塞

明日のアルゼンチン戦に向けて、俺達は朝練習を行っていた。円堂含めた4人が、まだ帰っていないかった。

「……変だな……」

陽乃さんの話では、ミスターKは円堂や鬼道に何か思い入れがあるらしい。もしあいつらがミスターKに危害を加えられていたら問題どころじゃ済まない。

そんな嫌な予感を抱きながら、午前の練習が終えたその時。

「……ちよつと待って。それは本当なの？」

ベンチに座っていた雪ノ下が勢いよく立ち上がる。雪ノ下が誰かと電話していた様だが、彼女は何やら焦っている模様だ。

「……どうしたんだ、雪ノ下」

「今、姉さんから連絡があつて……イナズマジャパンとジ・エンパイアの試合が、一日繰り上がって今日になってるの」

その突如な情報に、イナズマジャパンのメンバー、およびマネージャーは驚きを隠せずにはいた。

「音無さん、今すぐ確認してくれるかしら」

「は、はい！」

音無は急いでFFIの公式サイトを確認し始める。

「ほ、本当だ！今日の午後3時から試合になっています！」

「今、何時だ？」

「もう1時です」

「あと二時間しかねえじゃねえか！」

円堂達は未だに帰ってきてきていない。もしこのまま帰って来なければ、あいつら抜きで試合をしなきゃならない。

「そういえば、監督は？」

「今日、お父さんは響木さんと一緒にFFI大会運営委員に呼び出されたって言って、朝早くに出かけました……！」

円堂達だけじゃなく、監督までがいない。そんなタイミングでジ・エンパイアとの試合。

いくらなんでも出来すぎている。ミスターKがFFI大会運営委員に手を回したのか……？

「……どうする、風丸」

「…あ、ああ……」

円堂達や監督がいない状況下で、まともな試合が出来るとは思えない。恐らく負ける可能性が高い。

「…行くしかないだろう。試合に遅れるわけにはいかないからな」

「お、俺達だけでやんすか!？」

「そんなの無理っスよ！監督もキャプテンも無しで戦うなんて！」

栗松や壁山の不安は最もだった。今まで円堂が精神的支柱となり、鬼道がゲームメイ  
クすることになんとかあったが、今回は両方ともいない。

「心配すんな。円堂達なら必ず来る。そういうやつだろ、あいつらは」

染岡の言う通り、あのサッカーバカ共のことだ。がむしやらに走って後半には間に  
合って来るかも知れない。

ただ、それでも最悪あいつら抜きで試合をやり通す覚悟はしておかなければならな  
い。

「それじゃ行くぞ!!」

「おう!!」

俺達は、試合会場であるヤマネコ島のヤマネコスタジアムへと向かった。

俺達はヤマネコスタジアムに到着した。スタジアムに入ると、初戦と同じく観客席が埋まっていた。

俺達は試合に向けてウォーミングアップを開始する。刻一刻と試合時間が迫っているが、依然円堂達はやってこない。気がつけば、既に試合開始3分前だった。

「両チームはグラウンドへ！」

「……までか……。」

「どうするんスカ……？」

「風丸さん……。」

未だにみんなは不安になっている。円堂達が戻ってくると信じていても、もう試合は始まってしまう。

だが。

「……やるしかないだろ」

「比企谷くん……？」

「……円堂達が監督がいなくて不安になるのは分かる。だが俺達は日本代表。あいつらがいないから試合に出られないとか笑うところだ。……それに俺達には、吹雪や

緑川、砂木沼達、日本にいるやつらの思いを背負ってここに来てるんだ。それを無駄にするわけにはいかないだろ。例え、それが苦しい試合になるとしても」

小町や由比ヶ浜、俺を送り出した総武中の連中、レアンやクララ達エイリア学園のみんなの思いを背負っている。エドガーの言う通り、世界一は俺達だけの夢ではないのだ。

「…比企谷の言う通りだぜ！あいつらの思いに応えなきゃ、俺達は日本代表とは言えねえだろ！乗り掛かった波は超えるしかねえんだ！」

「…そうだな」

今回は風丸がキャプテンとなり、スターティングメンバーを発表する。FWは染岡、豪炎寺、宇都宮。MFは基山、風丸、俺。DFは綱海、壁山、飛鷹、木暮。GKは立向居だ。

「ジ・エンパイアの強さは、なんとと言っても予選大会を通して、これまで無失点を記録している強力なディフェンスです！」

「彼らの攻撃にも注意だけれど、あのディフェンスを破らない限り勝利はないわ」

「任せとけ！そんなディフェンス潰してやるからよ！」

「ああ！」

「それじゃあ、行くぞ!!」

「おう!!」

俺達はグラウンドへと入っていき、自分のポジションに着いた。

今の俺達で、円堂達や監督抜きでどこまで戦えるか。ある意味、いい経験を得る試合となるだろう。

「みんな！気合入れていくぞ!!」

「おう!!」

イナズマジパンのキックオフからだ。審判がホイッスルを吹いて、試合開始の合図を出す。

俺達はまず、ボールを次々と繋げて攻め上がっていく。

「虎丸くん！」

基山から宇都宮へのパス。

だが、MFのエステバンが素早い動きでボールをカット。

「あいつ、いつの間にも！」

流石は防御を売りにしているだけはある。

エステバンはFWレオーネにボールを繋げる。レオーネは基山を抜き去り、攻め上がっていく。

「行かせねえッ！」

俺はレオーネにスライディングタックル。ボールを奪い、豪炎寺へとパスを繋いだ。今度は通る……と思いきや、今度はパブロがカット。パブロは低姿勢、かつ素早い動きのドリブルで攻め上がってくる。まるで、狼の如く。

「デイエゴー！」

パブロがデイエゴにパスを出す、染岡がそれをインターセプト。しかし、ボールを奪った染岡の前から、DFのゴールドが炎を巻き上げながらジグザグに走ってくる。

「ジイグザグフレイムツ!!」

逃げ場のなくなった染岡はゴルドにボールを奪われて吹き飛ばされる。

あれがジ・エンパイアのデイフェンス技……思った通り強力な技だ。だが、あのデイフェンスを破らなければ勝機はない。

ボールは風丸に渡る。

「豪炎寺！」

豪炎寺にパスを出す、セルヒオがカット。次に宇都宮が攻め上がっていくが、エステバンがボールを奪取。次に再び、染岡が攻め上がっていくがゴールドのジグザグフレイムでボールを奪われてしまう。

俺達は攻め続けるが、ジ・エンパイアのデイフェンスが崩せない。

再び、ボールは宇都宮に。前からゴールドが走ってくる。

「虎丸！パスだ！」

「今度こそ!!」

宇都宮は染岡の指示に聞く耳持たず、ゴールドに向かって走っていく。

「ジイグザグフレイム!!」

宇都宮はゴールドにボールを奪われた。

…何か変だ。いつものイナズマジャパンのサッカーが出来ていない様に見える。攻撃が噛み合っていない、チグハグなサッカーとなっている。

「…そうか」

相手のディフェンスを破るのに必死でチームプレーが出来ていない。その上、チームを纏める司令塔が欠けている。

ただでさえジ・エンパイアの厚いディフェンスに難航しているのに、チームプレーがバラバラなんじゃあ試合にならない。

「…やるしかないな」

鬼道や不動みたいな司令塔がない今、誰かが自主的にアドリブで司令塔をやるしかない。

風丸がボールを持って攻め上がる。だが、エステバンとセルヒオがマークに入る。

「宇都宮、フォローに入れ！」



俺は宇都宮に指示を出す、宇都宮は風丸より遙か先にいた。

「豪炎寺！」

次に豪炎寺に指示を出す、豪炎寺も宇都宮同様遠すぎる。

風丸はセルヒオに奪われてしまう。しかし、すぐさま壁山がセルヒオからボールを奪い返す。

壁山は前に上がっている染岡に繋げようとした。

「染岡さん！」

「壁山、こつちに回せ！」

「えっ!？」

「上がれ風丸ッ！」

俺の指示を受けた風丸は上がっていく。

壁山は俺にボールを回し、俺はそのまま攻め上がる。しかし、前からロベルトのスライディングタックル。

「ふッ！」

そのスライディングをジャンプで躲し、風丸へと繋ぐ。

「風丸、豪炎寺にパスだ！」

風丸は指示通り、豪炎寺へと繋げる。

頭をフル回転しろ比企谷八幡。相手の動き、自陣の動きを把握しろ。ぼっちで培った人間観察を發揮しろ。

「フリーオ！」

ゴールドとフリーオが豪炎寺に迫る。

「豪炎寺！こつちだ！」

豪炎寺はバックパスで俺に回し、ゴールドとフリーオを抜き去る。その後、すぐに風丸へとパス。

「行かせるかよ！」

エステバンとゴールドのチャージが風丸に襲いかかる。

「風神の……舞ッ!!」

風丸のオフエンス技で二人を吹き飛ばす。抜いた風丸は豪炎寺へとセンタリング。

「爆熱……スクリユウウーッ!!」

豪炎寺の爆熱スクリユウが炸裂。だが爆熱スクリユウに対して、ジ・エンパイアのキャプテン、テレスが立ち塞がる。

「アイアン……ウオオール!!」

テレスの背後から、大きく厚い鉄の壁が現れ、爆熱スクリユウを完璧にブロックした。

「な、なんだ……今の技は……」

「豪炎寺さんの爆熱スクリューが止められた……う？」

あれがアングレスの不落の要塞、テレス・トルーエか……。なるほど、守備力が非常に高いジ・エンパイアのメンバーの中でも、ずば抜けてスペックが高いな……。

「それでもシユートか？小生でももうちよつとマシなシユートを打つぜ」

余裕の笑みを見せるテレス。

するとテレスは徐に指笛を吹き始める。それと同時に、ジ・エンパイアは身体を低い姿勢に構え始めた。

「上がれええエエッ！」

テレスからパプロに渡る。その瞬間、テレスを除くジ・エンパイアのメンバーはこちらに攻め上がってくる。

俺達はやつらの動きに付いていくことが出来ずに、カウンターを許してしまう。パスを回しながら低姿勢で早いドリブルで俺達を圧倒する。

「綱海！」

「おう！」

ボールを持ったロベルトが綱海に向かって走る。

「ドッグラン!!」

ロベルトが蹴ったボールは凄まじいスピンドで綱海の足元を目まぐるしく回る。綱海

を翻弄し、ボールはレオーネに渡ってゴール前まで猛然と攻め上がる。

レオーネはボールを少し浮かし、浮いたボールに炎を纏う左足で回転をかけ、炎を纏ったボールを勢いよく蹴り込んだ。

「ヘルファイアアツ!!」

炎を纏う強力なシュートが立向居に向かって飛んでいく。

「はああああ!!ムゲン・ザ・ハンドオツ!!」

しかしムゲン・ザ・ハンドは簡単に破れてしまい、ゴールを許してしまう。

0-1で、イナズマジヤパンは失点してしまった。この1点は、きつと重い1点となるだろう。

テレスを中心にした固いディフェンスに素早いカウンター攻撃…。立向居のムゲン・ザ・ハンドが通じないとすると、あのディフェンスを破らない限り、再びカウンターを喰らってしまう可能性が高い…。もし魔王・ザ・ハンドが完成しても通じるかわからないし…。しかし、鬼道と不動がいまいま、どうすればあのディフェンスを破れる……?

やつらに打ち勝つ方法を探りながら、再び俺達からのキックオフとなるのだった。

## イナズマジヤパン敗北

レオーネのヘルファイアで先制したジ・エンパイア。

俺達からのボールで試合が再開。染岡がボールを持つて攻め上がる。そのまま勢いよくチャージを仕掛ける。パブロを躲す。

「染岡！豪炎寺にパスだ！」

しかし、目の前からゴールドが迫ってきていた。

「ジイグザグフレイム!!」

染岡はパスする間もなく、ゴールドにボールを奪われてしまう。そのまま畳みかけてくるジ・エンパイア。点を取るどころか、防戦一方だ。

「レオーネ！」

エステバンからレオーネにボールが繋がる。

今の立向居ではヘルファイアを止めることは出来ない。

「はアツ!!ヘルファイアアアツ!!」

レオーネの容赦ないヘルファイアが立向居に襲いかかる。

「魔王・ザ・ハンドツ!!」

立向居はムゲン・ザ・ハンドを捨て、未完成の魔王・ザ・ハンドで挑むも、やはり失敗してしまい、再びゴールを許してしまう。

0-2。イナズマジヤパンは依然ピンチのままだ。

試合は再開し、豪炎寺がボールを持つて攻め上がる。しかし、セルヒオの素早い動きで豪炎寺はボールを奪われてしまう。セルヒオはエステバンにボールを回す。

今ここでFWに繋がれたらまずい。エステバンに一番近くにいるのは、風丸だ。

「風丸！」

「ああ！任せろ！」

エステバンがレオーネにパスするその瞬間、風丸のスライディングでボールをクリア。

なんとかか3点目は防いだか。

「くっ……うっ……」

「風丸！」

「風丸さん！」

風丸が足を押さえている。どうやら、これ以上のプレーが出来ない様子である。綱海が風丸をゆっくりベンチに連れて行く。

ベンチにいるのは栗松と土方……攻撃に出るなら栗松、守りを固めるなら土方だ……押

されているいまなら土方で守備を固めるか……？

いや、だがやつらの攻撃は半端じゃない。正直、守り切れる自信がない。それに既に2点差つけられてるんだ。失点覚悟で攻めるしかない。となれば、後のことを考えると攻撃的布陣に切り替えた方がいいか。

「風丸の代わりに、栗松に入ってもらおう。頼めるか？」

それなりにドリブル力があつて、ディフェンスも出来る栗松。俺は栗松に懇願する。  
「はい!!」

風丸の代わりに栗松がグラウンドへと向かっていく。

「比企谷。お前にこれを渡しておくよ」

風丸から受け取ったのは、キャプテンマークである。

「…分かった」

俺は風丸から受け取り、左腕にキャプテンマークを身に付けてグラウンドに戻る。

試合はエステバンからのスローイングで始まる。セルヒオに投げ渡すが、栗松が上手くボールをカット。

「えッ!？」

しかし、すぐさまエステバンにボールを奪われてしまう。

「レオーネー!」

エステバンはレオーネへとパスを回した。

「立向居！」

綱海がなんとかレオーネを食い止めているが、それもいつまで続くか。レオーネは綱海のマークを振り切り、立向居に迫っていく。

「怖がってんのか!？」

「えっ……」

「失敗したっていい！お前の全部をぶつけるんだ！」

飛鷹が立向居にそう力強く説教する。韓国戦で、円堂が飛鷹に言った時を思い出す。

「はアツ!!ヘルファイアアアツ!!」

ヘルファイアは立向居に飛んでいく。立向居は目を逸らさず、ヘルファイアに挑み始める。

「これが俺の全部だああアツ!!」

力を入れながら前屈みの体勢を取る。すると、背中から紫色の竜巻状のオーラが発生し、魔王が飛び出す。

「魔王・ザ・ハンド!!」

魔王と共に立向居はヘルファイアに全てをぶつける。

結果、立向居はヘルファイアを完璧にキャッチした。



「あれが魔王・ザ・ハンド……」

円堂のイジゲン・ザ・ハンドに劣らぬ、強烈なGK技だ。円堂と同様に、土壇場で完  
成させやがった。

そしてここで前半終了のホイッスル。依然ジ・エンパイアのリードに変わりはない  
が、雰囲気的にはまだ良くなった。

「やったでやんす！」

「すっげえぞ立向居！」

「ついにやったね！」

今までの苦労は無駄にならなかった。

立向居はみんなに感謝を告げる。

「飛鷹さん！ありがとうございます！」

「……キャプテンなら、ああ言うと思ったただけだ」

待つて飛鷹お前カッコ良すぎだろ。

飛鷹はぶつきらぼうにそう言うて、ベンチへと戻っていく。俺達もベンチに戻り、次  
の作戦を立て始める。

「…魔王・ザ・ハンドがある限り、あっちもそう簡単に点を取れなくなった。後半は積極  
的に攻めて行こう」

「おう!!」

とはいえ、このまま終わりそうには見えないけど。

俺達は再びポジションに着いて、後半戦に向けて構える。

キックオフはジ・エンパイアから。ホイッスルが鳴り響き、後半戦が開始。

すると、デイエゴがイナズマジヤパンサイドに向かつて大きく蹴り上げた。

「さあ、どこからでもかかって来な」

「バカにしゃがって!」

「綱海!」

綱海は豪炎寺に向けてボールを大きく蹴り上げる。豪炎寺がボールを受け取ると、その瞬間にテレスとフリオ、ラモス以外のメンバーが豪炎寺を囲む。

「これが俺達ジ・エンパイアの必殺タクティクス……アンデスのありじごくだ」

豪炎寺は基山や宇都宮にパスを試みようとするが、パスコースが塞がれていてパスを出せない。

パスを諦めた豪炎寺は一人で攻め上がっていくが、思うように進めないでいる。宇都宮や染岡がフォロワーに入ろうとしても、残ったメンバーがそれを阻止する。

豪炎寺はなんとかアンデスのありじごくから飛び出す。

「爆熱……スクリュウウウー!!」

「アイアン…ウオオール!!」

豪炎寺が爆熱スクリューを放つが、テレスがそれを完璧に食い止める。

「あらあら正面。残念だったな」

「くツ……」

「今度はもつといいところに蹴ってみな!」

テレスは大きくボールを蹴り上げる。ボールが飛んだ先には、染岡がいた。

「だったら俺が!」

染岡が攻め上がっていくが、再びアンデスのありじごくの中に引き摺り込まれてしまう。そして豪炎寺同様、ありじごくから飛び出すが、目の前にはテレスが立ち塞がっていた。

染岡はシュートを打つのを躊躇う。その隙に、エステバンがボールをクリア。

「………そういうことか」

アンデスのありじごくは、ドリブルで進ませながら相手をテレスの正面に誘導している。ありじごくを抜けた先には、テレスの真正面。放ったシュートをテレスが止める。フオローしようにもパスコースを消されているからテレスの横を抜けることもできない……。

それが鉄壁を誇るジ・エンパイアの必殺タクティクス…アンデスのありじごく…つて

ことかよ。

俺達は攻め続けるが、何度やってもテレスの真正面に誘導されてしまう。時間は徐々になくなっていく。

0―2という点差に加えてアングスのありじごく。更に円堂と鬼道がない状況。みんなは意気消沈としてしまっている。

「…やっぱり無理だったんす…監督もキャプテンも無しで戦うなんて…」

このままじゃアングスのありじごくを破るところか、試合にすらならない。俺には、円堂や葉山みたいに気の利いた言葉なんて言えない。

それでも。

「…じゃあ諦めるのかよ。このまま」

俺は羞恥心を捨てて、そうみんなに言った。

「試合はまだ残っているんだぞ。もう終わりにするのかよ」

「でも、あのディフェンスが破れないんじや…」

「だからなんだ？だから勝手に試合放棄するつもりかお前らは」

ディフェンス一つ破れず諦めるイナズマジヤパンなど、俺が知っているイナズマジヤパンじゃない。

「俺はお前らとサッカーをして学んだ。逆境に立つても、諦めない精神力を。…最後まで

で何がなんでも諦めない……それがお前らイナズマジャパンのサッカーじゃなかったのかよ。俺が見てきたお前らのサッカーは、全部偽物だったのかよ」

押してダメなら諦める。サッカーをする前までは、ずっとこの座右の銘で通して来た。

だが、円堂や雷門のみんなに出会って、俺は学んだ。負けて転んで倒れても、また立ち上がる。立ち上がって諦めないから、こいつらは強いのだ。

時に、諦めが肝心なのは確かだ。諦めないからって成せるものがあるとは限らない。

しかし、そんなものはこいつらのサッカーじゃない。諦めないことを強要するのは間違えているかも知れない。それでも、このままじゃあいつらの為にならない。

諦めないからこそ発揮出来る、彼らならではの底力があるのだ。

「諦めなかったからアジア予選を勝ち抜いて、ナイツオブクイーンを倒すことが出来たんじゃないのかよ」

すると俺の説得に、思わぬところから援軍が。

「……そうです！比企谷さんの言う通りですよ！みんな立ち上がって下さい！立ち上がって、最後まで戦って下さい！」

「やりましょう！最後まで、イナズマジャパンのサッカーを！」

「……久遠……木野……」

「…日本代表は何も貴方達だけのものじゃないの。日本にいる人々の思いが懸かっているのよ。最後まで戦い抜きなさい。諦めることは許さないわ」

あの雪ノ下までが俺に続いてイナズマジヤパンを説得してくれている。

「そんなデیفエンス、みなさんなら絶対に破れます！私、信じてますから！」

「八幡がここまで言っているんだ。破らなかつたら八幡以外全員潰してやるから覚悟しておけ」

「音無……八神……」

ていうか最後の八神のは恐喝だよ恐喝。励ます代わりに怖がらせてどうする。あいつのことだからマジで潰しに来る。イナズマジヤパンから死人が出ちゃう。

「何があっても諦めない……」

「だからこれまでも勝つてこれた……」

…焚きつけてみたはいいものの、気合だけじゃアンデスのありじごくは破れない。俺はあのデیفエンスを破る策を考えていると、

「比企谷さん！俺達に任せて欲しいでやんす！」

「…お前らが？」

栗松がそう自信を持ちながら懇願する。

「要するに、あのテレスが取れないところからシユートが打てればいいんだろ？」

「豪炎寺さん達はそこで待って下さいっす。俺達がそこまで持つて行くっすから」  
栗松に続いて、木暮と壁山も言った。

「持つて行くっすってな、あの必殺タクティクスはそう簡単に破れるもんじゃねえんだぞ。それにボールを奪われてカウンターを狙われたりしたら……」

「大丈夫です！ゴールは、俺が守ります！」

魔王・ザ・ハンドを身に付けたことで、すっかり自信を持った立向居。今の立向居なら、円堂並みの安心感がある。

「…分かった。じゃあ頼んだわ」

策が決まり、俺達は位置に着く。

飛鷹のスローイングで試合開始。ボールは木暮に渡る。同時に、栗松と壁山がサイドから上がっていく。

しかし、アンデスのありじごくに再び囲まれる。

「お前らなんかに取りられるかよ！」

「いいぞ木暮！」

アンデスのありじごくの中で木暮は辛抱強くボールをキープし続けている。

「真ん中に寄って行ってるっす！」

「もっと右でやんす！」

壁山、栗松の指示を取り入れながら、木暮はアンデスのありじごくで動き回る。

「ちよこまかちよこまかとッ……!」

木暮が空いたスペースを見つけ、そこに飛び込んだ。

「甘いんだよッ!」

しかしゴルドの足が木暮を遮り、体勢が悪くなる。

「木暮!」

しかし、彼の高い身体能力でボールをなんとか奪われず、アンデスのありじごくを抜け出して壁山に繋いだ。

「なッ……!?!」

パスを繋げられたことに驚きながらもジ・エンパイアは壁山を素早く囲んだ。壁山は頑張つてアンデスのありじごくの中でドリブルし続ける。

「絶対に持つて行くっス! 豪炎寺さん達のところへ!」

「壁山……」

壁山の前にエステバンとセルヒオが立ち塞がる。

「絶対、渡さないっス!!」

しかし、自信の巨体を使って強引に突破口をこじ開け、栗松へとボールを繋いだ。

栗松が攻め上がっていくが、ジ・エンパイアは三度アンデスのありじごくを発動して



栗松を囲む。

「負けないでやんす！」

栗松は必死に足掻いてアンデスのありじごくを攻略しようとしている。

「右でやんす！右に行くでやんす！」

しかし、徐々に真ん中に寄って行っている。

「真ん中に寄ってるぞ！」

「ダメでやんす！そっちに行ったらダメでやんす！」

「栗松……」

「右へ行くでやんす！右へ行くで……！」

しかし、栗松からエステバンがボールを奪う。

「もらった！」

エステバンが奪い、ボールを前に繋ごうとする。

「繋ぐでやんす！」

栗松は粘り強い精神力で、強引な体勢からエステバンのボールをクリアし、豪炎寺へと繋いだ。そしてシュートコースにテレスの姿はなかった。

「豪炎寺くん！虎丸くん！新必殺技だ！」

豪炎寺、宇都宮、基山が結集し、3人同時にボールを打ち込んだ。

「グラント…ファイアアツ!!」

大きな炎を纏うシュートが地面を壮大に抉ってゴールに飛んでいく。テレスが必死にシュートコースに飛び込み止めに行くもアイアンウォールを出す時間もなく、グラントファイアに吹き飛ばされてしまう。

「任せろテレス!! ミリオン…ハンズ!!」

GKのホルへはパントマイムのように空中に何回も手を突き出す。突き出したところから、掌の壁で作られたシールドが張られる。

その壁をグラントファイアにぶつけるが、威力はグラントファイアが上手であり、ミリオンハンズを破ってゴールに叩き込んだ。

1-2。無失点を誇るジ・エンパイアから1点をもぎ取った。

「そんなバカな…俺達の必殺タクティクスが破られるなんて…」

テレスが手を出し損ねたとはいえ、グラントファイアのあの威力…。カオスブレイクやネオ・ギヤラクシーと同等、もしくはそれ以上かも知れない。

「あの必殺タクティクスさえ破ってしまえばこっちのものだ! 勝てるぜ、この試合!」

「よしみんな! このまま一気に逆転するぞ!」

「おう!!」

しかし、無情にも試合終了のホイッスルが鳴り響いた。ジ・エンパイアのキックオフ

が始まってすぐに試合が終えた。

1―2でイナズマジヤパンはジ・エンパイアに敗北した。

俺達はこの結果を甘んじて受け、ヤマネコスタジアムを後にした。

――――

俺達は宿舎に到着。宿舎前にて、円堂達が帰ってくるのを待っていたが、みんなは試合に負けたことをだいぶ悔やんでいる様子だ。

「みんなー!!」

円堂を含めた四人が宿舎に帰ってきた。

事情を聞くと、ミスターKこと影山が妨害してきたせいで試合に出られなかったとのことらしい。

「すまない、円堂。勝てなくて…」

「みんな……。…元氣出せよ! 決勝トーナメントに行けなくなっただって、まだ決まったわけじゃないんだしさー!」

「確かに一敗はしたが、残りの試合を全勝すれば可能性は十分残っている」

それを聞いたみんなは、少しだけだが明るくなる。

「それより凄いじゃないか！あの新必殺技のグラントファイア！」

「フツ…」

「立向居！」

「は、はい！」

「やったな！ついに魔王・ザ・ハンド、完成させたんだな！」

「はい！」

円堂がいるだけで、チームの雰囲気は良くなる。やはり、彼がいるからみんなは輝くことが出来るのだ。

「……帰ろう」

一方、俺は今すぐに帰りたいという気持ちを抑えられないでいる。試合が終わってか  
らずっと思っていた。

何故俺はあんな恥ずかしいことを言ったんだろう。何が「最後まで諦めないのがお前  
らのサッカーじゃなかったのかよ」だ。

やっべえ思い出す度に死にたくなる。

みんなに気付かれずに部屋に戻っちゃおう。そう思い立って、みんなが見ていない隙  
を狙ってこっそり帰ろうとするが。

「待ちなさい」

雪ノ下に腕を掴まれてしまう。俺を逃すまいと、力強く掴まれてしまう。

「ちよ、離せ。今すぐ部屋に帰りたいんだよ」

「大人しくここにいなさい」

帰りたい今すぐ帰りたい。嫌な予感がして仕方がない。

「それに栗松、壁山、木暮！お前達もよくやったな！なんたつてあの必殺タクティクスを破ったんだからな！」

「…比企谷さんのお陰でやんす」

「比企谷の？」

やっべえ俺の名前出た。余計なこと言うなよ言ったら死んでやるからな。

「そうなんですよキャプテン！比企谷先輩が思い出させてくれたんです！」最後まで何がなんでも諦めないのがイナズマジャパンのサッカーだろ”つて！凄くカッコ良かったですよ！」

音無いいい！！余計なこと言うなつて言つてんだろおもお！！いや正確には言つてないけどさあ！

死にたいよお！！今すぐ部屋に帰りたいよお！！なんなら明日から練習に出たくないよお！！

マジなんであんなこと言つたんだ俺はあツ！！死んじやえぱいいのにつーか死ねよ

ばーかばーか!!

「顔真つ赤じゃねえか比企谷!」

「比企谷さん、照れてるんですか?」

「し、しよんなことはないじよ…!?!」

「思いつきり囁んでるじゃねえか!」

「あははははっ!!」

周りは試合中と違つて明るい雰囲気となる。みんなは俺を見て笑っている。

もうイナズマジヤパン抜けようかな。俺はイナズマジヤパンの中でも黒歴史を残してしまった。恥ずかし過ぎて日本に帰りたい。

「よーしみんな! 残りの試合、全勝を目指して明日からまた特訓だ!!」

「おう!!」

円堂の一言で、みんなは再び気を引き締め直した。

イナズマジヤパンは第二試合を敗北という結果で終わる。ついでに俺の黒歴史も残ってしまった一戦であった。

最悪な一戦でした。

## さらば栗松鉄平

アルゼンチン代表ジ・エンパイアに敗北した俺達は、次の試合に向けて特訓を行っていた。次の対戦相手は、アメリカ代表ユニコーン。一ノ瀬や土門などがいるチームだ。

特訓しているそんな中、俺達の耳に朗報が入った。彼が日本代表に戻ってくると、久遠監督から知らされる。その朗報にみんなはワクワクしながらグラウンドで待っていた。

「久しぶりに会えるな、あいつに！」

みんな彼が来るのを心待ちにしているからか、落ち着かずにはいられなかった。

宿舎前にキヤラバンが止まり、その人物はゆつくりとこちらに歩いてきた。

「相変わらずだね、みんな」

その人物は、穏やかに微笑む。彼が今、帰ってきたのだ。

「吹雪!!」

そう。イナズマジャパンのストライカーである吹雪士郎が帰ってきたのだ。韓国戦での怪我で、もう合流することは難しいと思われていたのだが。

「吹雪、よく帰ってきてくれた。怪我はもう大丈夫なのか？」

「予定より早い早いじゃないか。頑張ったんだな、リハビリを」

「うん……。アルゼンチン戦を観ていても悔しかったんだ。何も出来ない自分がね……。だから、早く合流したかったんだ。みんなと一緒に、世界と戦いたかったんだ……」

アクシデントだったとはいえ、一時的に代表から外されてしまった。きつと悔しかったんだろう。それでも、世界と戦いたいという理由が彼を奮い立たせて、辛く苦しいリハビリもあつという間に終わらせてきた。

染岡達と同様、凄い努力だ。

「吹雪さんがいれば、イナズマジヤパンはもつと強くなるっス！」

「……喜んでる場合かよ。吹雪が代表に戻ってきたってことは、誰かが落とされるってことだぞ？」

不動の言う通りだ。吹雪が帰ってきた反面、人数制限により誰かは必ず代表から外されてしまう。

「……その通りだ。……吹雪に代わって代表から外れるのは……」

監督は一度、俺達を見回す。そして、代表から外れる者の名を挙げる。

「……栗松だ」

「えっ……！」



「栗松っスか!？」

「これは世界に勝ち抜くための判断だ」

久遠監督は淡々とそう言い放つが、栗松の脱退に壁山や立向居などが納得していなかった。

「監督、栗松はアルゼンチン戦で凄く頑張ったっス!」

「俺が魔王・ザ・ハンドを完成させることが出来たのも、栗松の協力があつたからです!」

「…既に決定したことだ。栗松、帰国の準備をしろ」

「監督!」

しかし、彼らの説得は久遠監督には届かなかつた。

「栗松! お前から頼むっス!」

「やめろ!」

壁山が栗松からも頼むように促すが、染岡がそれ止めた。

「栗松に必要なのは同情じゃねえ。さっさと日本に帰ることだ」

「染岡……」

「さあ、さっさと練習始めようぜ!」

染岡はそう言つて一人、練習を開始しようとした。

「染岡さん、どうしてそんな冷たいことが言えるんスか……?」

「……染岡だから言えるのさ」

「えっ?」

「染岡は、アジア予選の代表に選ばれなかっただろ? 凄く悔しかったと思う。でも、諦めないで必死に練習して、そしてレベルアップした。それが監督に認められたからこそ、代表に呼ばれたんだ」

染岡も一度は落とされた。だが並々ならぬ精神力で必死に練習して代表を勝ち取った。その結果が、あのドラゴンスレイヤー。

「……とつとと日本に帰れ」……早く日本に戻って特訓しろ……時間を1秒も無駄にするなつてことでやんすか……?」

中々のヒールっぷりだ。しかし、カツコいいじゃねえか。

「……分かったでやんす。俺もレベルアップして、戻ってくるでやんす!」

栗松はそう意気込んで、帰国の準備を始めた。

—————

空港にて、俺達は栗松の帰国を見届けた。栗松が乗るイナズマジエツトは、ゆっくりと動き始めていく。

「へエ。中々の去り際じゃないか。ま、足の怪我也軽くないみたいだしな」

そう。彼はアングスのありじごくを突破して豪炎寺にボールを繋げる際、かなり強引な体勢で繋いだ。着地した瞬間、彼は右足を捻ってしまったのだ。

「…テレビ越しでよく気付いたな、お前」

「…まあな」

栗松が乗るイナズマジエツトは、段々と宙に浮いていき、そのまま空の彼方へと飛んでいく。

頑張れよ、栗松。

—————

翌日。

俺達はみんなで集まって試合を観ていた。エドガー率いるイギリス代表ナイツオブクイーンvsミスターKが就任したイタリア代表オルフェウス。

結果は2-1のオルフェウスの逆転勝ちだった。

最初は、ナイツオブクイーンの必殺タクティクス、無敵の槍で相手のディフェンスを

突破し、エドガーが1点をもぎ取る。前半はナイツオブクイーンが優勢で終わるが、後半からオルフェウスの動きが明らかに代わってナイツオブクイーンを翻弄。一気にキャプテンであるフィディオが2得点。

「鬼道……!」

「ああ、間違いない。イタリア代表の力を引き出し、イギリス代表を破る作戦を授けたのは影山だ」

曲がりなりにも40年間帝国を優勝に導いた指導者。率いて間もないチームを劇的に変えてしまった。その手腕は恐ろしいものだど理解した。

そして俺達は、再び次の試合に向けて特訓を開始した。

しかし、いつもより周りがピリピリしており、特に円堂、鬼道、佐久間、不動が特に気が荒だっていた。恐らく、影山の采配を観て少なからず影響してしまったのだろう。

俺は一人、リフティングを続けていた。

「比企谷くんは合流しないの?」

「正直、今特訓しても得られるものは何もない」

影山に影響されていつものあいつらのサッカーが出来ていない。そんなやつを相手にしても、無意味だ。

「練習中止!グラウンドでサッカー以外のことを考えるな!頭を冷やせ!」

監督はそう喝を入れて、グラウンドから去っていく。まあ、妥当な判断だわな。

俺はとっとと宿舎に帰って、残りの時間はベッドでひたすらゴロゴロして暇を潰した。

-----

さらに翌日。

「久遠監督。昨日はすみませんでした」

「もう大丈夫です」

「よろしくお願いします!!」

練習開始時に、昨日の練習を反省していることを伝え、気を引き締め直して特訓に臨む姿勢を見せる。

「…それでは、今日の練習を始めろ」

「はい!!」

俺達は再び特訓を開始した。打倒ユニコーンという目標を胸に抱いて。

## 最強のアメリカ

特訓が終わったその夕方。俺達は監督と一緒に、大きめなモニターの前に集まった。夕方から始まるFFIのダイジェストを観るためだ。

「FFIダイジェスト！昨日行われたイギリス代表ナイツオブクイーン対アメリカ代表ユニコーンの試合結果をお伝えします」

試合のダイジェストが映される。最初に映ったのは、土門、そして西垣のプレー姿である。

「土門、および西垣の加入により、ディフェンスが更に強固になりましたね」

土門も西垣も、エイリア事件からだいぶ強くなっている様だ。その後、すぐに一之瀬の姿が映される。

「一之瀬！」

一之瀬がエリックを抜き去り、マークに繋いでエドガーからマークを振り切り、ディランへとセンタリング。そのセンタリングに合わせてディランがシュートして得点を決める。

「司令塔の一之瀬が攻撃の中心となり、イギリスのDFを粉砕。キャプテンのマーク、F

Wのデイランもプレーに冴えを見せてユニコーンの快勝です」

「特に、北中米大陸予選でも活躍した一之瀬は本大会に入っても絶好調ですね」

べた褒めされる一之瀬達。確かに実況の言う通り、今見た感じではべた褒めされるのも納得できる。

しかし俺には一つ、違和感があった。

「うーん……なんだろう、この感じ」

「どうした？」

「うん……前と変わったっていうか……なんか違うんだよな、一之瀬のプレー」

「……俺もそう思っていた」

どうやら、俺が抱いている違和感は気のせいではなかった。現に円堂や鬼道も、俺と同じ違和感を感じていた。

テレビ越しだから気のせいだと思っていたが、円堂や鬼道の言う通り、一之瀬のプレーが以前とは何かが違う。

それだけではない。一之瀬の気迫には、凄みを感じた。まるで、この大会に全てを懸けていると言わんばかりの気迫。

「レベルアップしたからじゃないのか？」

「レベルアップ……うん、そうだな。きつと」

円堂はひとまずそれに納得した。

「約束したんだ……次は、世界の舞台で戦おうって！その時がとうとう……くうーっ  
！よし！夕飯前にもう一度練習だ！」

「おう!!」

みんなは夕飯前だというのに、打倒ユニコーンに燃えて再び特訓をするためにグラウンドに向かった。

「……どうしたの？比企谷くん」

雪ノ下に声をかけられた俺は、未だにモニターに視線を向けていた。MVPの一之瀬のプレーが再生されていた。やはり、一之瀬の気迫が凄い。それこそ、少し怯んでしま  
うくらいに。

「……なんでもねえよ」

俺は、グラウンドに向かうみんなの後に付いて行く。

一之瀬達を倒すためには、どんな努力も惜しまないということである。

そして、俺達はユニコーン戦まで特訓に特訓を重ねた。朝飯前だろうが夕飯前だろう  
が関係ない。みんなは必死に特訓を行なった。

全ては一之瀬達に勝つために。



試合当日になる。

試合会場であるクジャク島のクジャクスタジアムへと向かって、ウォーミングアップを始めた。

前回のアルゼンチン戦で敗北した以上、ここから先は負けることは許されない。相手に一之瀬達がいようが関係ない。

今日も、いつも通りにプレーするだけだ。

「両チームは整列して下さい！」

審判の招集がかかり、俺達は整列。

不意に、俺は一之瀬を見る。テレビで観た時と同じく、いや、それ以上の気迫を一之瀬は纏っている。

整列し終わり、俺達はそれぞれのポジションに着いた。

F Wは染岡、豪炎寺、宇都宮。M Fは基山、鬼道、風丸。D Fは俺、吹雪、壁山、綱海だ。G Kは勿論円堂。

ユニコーンからのキックオフで試合開始のホイッスルが鳴り響いた。デイルンからすぐに一之瀬に渡る。

「見せてやれカズヤ！」

ボールを受けた一之瀬は一人でイナズマジヤパン陣内に攻め込んでくる。

「止めてやる！」

風丸が一之瀬にマークに入るが、すぐさま抜き去られてしまう。次に基山が一之瀬を追うが、彼の華麗なボール捌きによって振り切られてしまう。

「行かせねえよ！」

基山の次に俺が一之瀬に対してデیفエンスに入るが、彼のスピードとボールコントロールにより簡単に突破されてしまう。

「なんてやつだ……！」

一之瀬は勢いに乗って、綱海に吹雪に壁山をも抜き去って、残るは円堂だけになる。

「行くよ円堂！」

「来い！」

「これが俺の必殺技！」

一之瀬はボールを両脚で挟み、大きく逆エビの体勢で飛んでいく。空中でシュートの態勢を取ると、背後から青いペガサスが降臨する。

「ペガサス……ショットツッ!!」

一之瀬は空中から円堂に向かってボールを打ち込む。それと同時に、ペガサスも共に

向かって飛んでいく。

円堂はイギリス戦で見せたあの必殺技の構えに入る。

「イジゲン・ザ・ハンドッ!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドを繰り返す。

「なんてパワーだッ!!」

そのままペガサスショットはイジゲン・ザ・ハンドを突き破り、ゴールの中に入っていく。

試合開始早々にユニコーンが先制点。

「ほんの挨拶代わりだよ」

一之瀬はそう告げて、自陣へと戻っていく。

テレビで観た時より、またレベルアップしている様だ。彼の気迫が籠ったプレーに圧倒されてしまった。

「やるな一之瀬!でも、俺達だって負けはしないぞ!反撃するぞ、みんな!」

「おう!!」

先に失点してしまった俺達からのボールとなる。試合が再開し、ボールは染岡に渡る。染岡の前から一之瀬が走ってくる。

「はああああアッ!!フレイルムダンス!改!!」

進化したフレイムダンスで染岡からボールを掠め取る。

「この試合、絶対に勝つ!!」

一之瀬はそう意気込んで、こちらの陣に切り込んでくる。

「マーク!」

一之瀬からMFのマークへとボールを繋げる。それに合わせて、FWのデイランが前線へ走り込んでくる。

「ヘイ!こつちだマーク!」

「そうはさせないぞ!」

基山と宇都宮がデイランにマーク。

俺はデイランが囷だと予想して、デイフェンスラインから一之瀬に向かって一気に詰めて行く。

「カズヤ!」

案の定、マークから一之瀬にボールを繋ごうとするが、それを俺がインターセプト。

「何ッ!」

「流石は比企谷だ!読んでいたか!」

そのまま攻め上がり、鬼道にパスを出す。

「よし、反撃だ!」

前線にいる染岡と豪炎寺が共に駆け上がっていく。

一方、ボールを持った鬼道に、巨体のDFダイクが立ちはだかる。

「真イリユージョンボール!!」

進化したイリユージョンボールでダイクを突破し、豪炎寺へとセンタリング。

「爆熱……スクリユウウーツ!!」

豪炎寺の渾身の爆熱スクリユーがGKピリーに飛んでいくが、それを阻止するために二人のDFが爆熱スクリユーに挑む。

「くっ!! スピニングカットV2!!」

西垣は以前より進化したスピニングカットを爆熱スクリユーにぶつけた。威力は落ちるものの、爆熱スクリユーがスピニングカットを突破。

「まだだ! ボルケイノカットV2!!」

スピニングカットで威力を削いだ爆熱スクリユーに、今度は土門の進化したボルケイノカットをぶつける。流石に二人がかりのデیفエンスでは突き破ることは出来ず、ボルケイノカットに豪炎寺のシュートを完璧に防がれてしまう。

「くっ……!」

「……今日は、負けられないんだ!」

「……俺達も、負けるつもりはない」

一之瀬だけではない。土門も西垣も、一之瀬に負けない気迫だ。

「土門、西垣!!行くぞ!!」

「おう!!」

ボールは土門から一之瀬に渡る。一之瀬が攻め上がると同時に、DFの土門と西垣がオーバードラップ。

「行かせない!」

基山と風丸が一之瀬の行手を塞ぐが、マークとのワンツーパーズで抜かれてしまう。

「土門、西垣!GO!」

すると、三人は見覚えのある体勢に入った。

一之瀬を中心に土門と西垣が走りこんでくる。三人が一点を同じ速度で通過し、巻き起こった炎がボールを空へと舞い上げる。舞い上がったボールには、不死鳥が誕生する。

「あれはッ……!!」

一之瀬と土門、そして西垣がボールに向かって大きくジャンプし、三人が同時に蹴り込む。

「ザ・フェニックス!V2!!」

かつて一之瀬と土門と円堂が繰り出したザ・フェニックスが、今度は敵として襲い掛

かってきた。以前より更に更に威力が増したザ・フェニックスに壁山が立ち向かう。

「ザ・マウンテンツ!!」

壁山はザ・マウンテンを繰り出す、ザ・フェニックスの方が威力が上手だったため、ザ・マウンテンは崩されてしまう。

「まだだ! いかりの……てっつい!!」

円堂は威力が弱まったザ・フェニックスをなんとか防いだ。

しかし、イギリスやアルゼンチンと違ってユニコーンは攻守共に優れている。今まではどちらか攻撃か守備のどちらかが抜きん出ていたが、ユニコーンはどちらも完璧だ。

これも、一之瀬達がいる影響かも知れない。

「まだまだ試合はこれからさ、円堂」

「ああ! 俺達はお前達に絶対勝つ!!」

ユニコーンの猛攻を凌いだ。

次は、俺達の攻撃だ。

## 最後の試合

ザ・フェニックスを防いだ俺達は、反撃を試みる。ボールは豪炎寺に渡る。

「シユートは打たせない！」

ユニコーン陣内に切り込む豪炎寺に対して、一之瀬が向かってくる。

「真フレイムダンス!!」

進化したフレイムダンスで、豪炎寺からボールを掠め取る。

「くッ……!」

一之瀬の活躍が止まらない。縦横無尽で動き回るフィールドの魔術師。プロ顔負けのプレー姿だ。

「お前を自由にはさせないぞ！」

攻め上がる一之瀬に対して、鬼道が徹底したディフェンスに入る。一之瀬は鬼道を抜こうとするも、鬼道がそれを行かせんとする。

「流石は鬼道だ！そう簡単に抜かせてくれないな！」

一之瀬は背後にいるマークにバックパスし、少し先にいるシヨンへと繋げ、一之瀬



にボールを戻す。早いパスワークで鬼道を躲す。

勢いに乗る一之瀬は猛然と突っ込んでくる。

「ザ・マウンテン!!」

壁山がザ・マウンテンを繰り出す。しかし、一之瀬はボールを大きく打ち上げてザ・マウンテンを躲す。

「行くぞ円堂! ペガサス……ショットッ!!」

一之瀬は再びペガサスショットを打ち込む。

「イジゲン・ザ・ハンド!!」

円堂は負けじとイジゲン・ザ・ハンドを繰り出し、ペガサスショットにぶつける。しかし今度は、ペガサスショットを完全に逸らした。

「よし! 止めたぞ!」

「次は必ずゴールしてみせる!」

ペガサスショットを止めた円堂。

「比企谷!!」

円堂からボールが渡る。

「カズヤに負けちゃいけない! 俺達もギンギンに行こうぜ!」

「ああ!」

俺の前から、マークとテイランが向かってくる。

「サザンクロスカットッ！」

サザンクロスカットで二人を突破。そのまま前線の宇都宮にボールを繋げる。宇都宮はスライディングを仕掛けるシヨーンを軽やかに躲す。

「God damn!!」

「土門！ゴールに近付かせるな！」

「おう！」

宇都宮に向かって土門がチャージ。しかし、宇都宮はひとりワンツで土門を躲す。

「よっし！」

「行かせるか！」

しかし、自陣のゴール前まで戻ってきた一之瀬が宇都宮の攻撃を間髪止める。ボールは外へと転がっていく。

「凄えな……」

思わず声に出してしまうほど、一之瀬のプレーには凄みを感じられた。

イナズマジパンのスローイングで試合再開。

ボールは基山に渡るが、すぐさま一之瀬に奪われてしまう。ボールを奪った一之瀬はそのまま攻め上がっていく。

「これ以上は行かせないよ！」

一之瀬の前を吹雪が塞ぐ。

「スノー…エンジェル！」

韓国戦で見せたデیفエンス技、スノーエンジェルが炸裂。一之瀬を凍らせて、ボールを奪ってそのままオーバーラップ。その横から、風丸が吹雪に合わせて攻め上がっている。

「一体何をするつもりだ…!? ダイク、トニー！ 止める！」

「おう!!」

しかし、吹雪の得意のスピードでダイクとトニーをあつという間に抜き去る。

「今だッ！」

「ザ・ハリケーン!!」

ボールを持った吹雪が、エターナルブリザードの要領でボールに回転をかけて冷気を纏わせる。次に風丸の風神の舞の要領でダッシュし、その冷気を纏ったボールに突っ込んで、勢いよくシュート。

新たな新技が、GKピリーに向かって飛んでいく。ピリーは華麗なフットワークでシャドーボクシングを始めて、ジャブで気を飛ばしつつ距離を測る。

「フラッシュユ…アッパー!!」

身体をかがめて、ザ・ハリケーンに対して右アツパー。

しかし、ザ・ハリケーンはフラッシュアツパーを打ち破ってビリーを吹き飛ばしてのゴール。

風丸と吹雪士郎の新技で1―1の同点に追いついた。

「やったぞー!!吹雪!風丸!!」

ここで前半終了。

1―1の同点でハーフタイムを迎える。

「……トイレ行」

俺はハーフタイムのうちにトイレを済ませようと、会場内のトイレに向かう。

さっさと用を済ませて、俺は手を洗う。

「大丈夫なの?」一之瀬くん

「ん?」

この声は木野か?俺は手を拭いて廊下に出ると、円堂がそこにいた。

「あ、比企谷……」

円堂はどうやら隠れて聞き耳を立てていた。盗み聞きはあまりしたくはないが、どうやら深刻そうな話をしているのは雰囲気で分かった。

「……こうしてる間にも手術の成功は難しくなってるんでしょ?」

手術？

まさか一之瀬、今の今までどこか痛めて戦っていたつてののか？

「大丈夫だよ、秋。心配はいらないって」

一之瀬がそう言つても、依然木野の表情は暗いままだ。

「もう、土門と西垣のやつ、少し大袈裟なんだよ」

「それでもツ……無茶よ……」

「秋……」

「なんで……一之瀬くんばかり、こんな……」

「……さあね。だけど、それを悩んだところで何も変わりはないよ。だったら、今の俺に出来ることを力一杯やってみたい。…俺は戦うよ。たとえば、最後の試合になるとしてもね」

……そういうことだったのか。一之瀬の気迫の裏側が、ようやく分かった。

「…どういふことだよ、一之瀬……？」

「ちよ、お前……」

一之瀬の言葉に動揺した円堂は、堪らず尋ねてしまった。

「円堂……それに比企谷」

「なあ……最後の試合って、なんなんだよ……？」

「……それは……」

「……これ以上サッカーが出来ないかも知れないから、だろ」

「！そうなのか、一之瀬!？」

「……比企谷の言う通りだよ」

一之瀬は諦めて告白した。

彼の身体には、昔交通事故で受けた傷が残っていたらしい。雷門に入る時には、完全に治ったと自分でも思っていたらしいが、どうやらその傷はまだ消えていない様だ。

その傷を治すために、前から医者に早めに手術をしろと言われていたらしい。だが、成功率は50%。治ってもサッカーが出来るか分からないらしい。

だからこのFFI世界大会で、円堂達と悔いのない試合をしてから手術を受けるらしい。

二度とサッカーが出来ないのかも知れないなら、いつそのこと円堂達と戦ってから手術を受けようってことなんだろう。

「一之瀬……今日のお前のプレー……その覚悟があつたからなのか？」

「ああ。俺はこの試合に全てを賭けている。チームを決勝に導くために」

彼の凄い気迫は、最後の試合に最高の相手と戦って倒すという目的があつたからなのだ。

一之瀬は、本当に凄いプレーヤーだ。サッカーに対する姿勢には敬服せざるを得ない。

「……そうか。だが、それは俺達も同じなんだわ。日本代表が世界一になるために、お前達アメリカを倒す。お前にどんな事情があろうが、一切手は抜かない。……円堂ならそう言うだろう？」

確かにサッカーが二度と出来ないかも知れないなんて、辛いことなのかも知れない。だが、それに同情して手を抜いて負けるなんてのは一之瀬に対して最低の行為をしていることになる。

あつちが全力で来るなら、こちらもいつも通り全力を出すだけだ。それが、プレーヤーとしての礼儀なのだ。

「……ああ。比企谷の言う通りだ。遠慮はしないぞ、一之瀬」

「……ありがとう、円堂。比企谷。……後半戦、楽しみにしてるよ」

一之瀬は闘志を燃やしながら笑みを浮かべ、その場から去って行った。

「……ありがとう、比企谷くん」

「何が？」

「一之瀬くんの想いに応えてくれて」

「……別に礼を言う必要ないだろ。あんなセリフ、円堂なら言いそうだなって思っただ

けだ」

誰があんなスポ根の主人公みたいなセリフを好き好んで吐くかよ。円堂かキャプテン翼だろあんなん言うのは。

「…やつぱり、比企谷くんは捻くれてるなあ」

「うっせえ。余計なお世話だ」

後半戦は更に激しい試合展開が予想される。ザ・ハリケーンも次からはそう簡単に打てはしないだろうし、それにまだ何か隠していることがあるだろう。

油断はせずに、冷静にプレーしよう。

—————

1-1の同点で後半戦が突入。イナズマジヤパンからのキックオフで試合開始。ボールは染岡に渡るが、すぐに一之瀬が奪取。

「いきなりサプライズだ！」

「ああ！見せてやろう！」

「デیفフェンス！マンツーマンだ！」

ゴールに向かってデイランとマークが走り込んでくる。鬼道の指示で、壁山と吹雪がマンツーマンに入る。



一之瀬は前線に向かって大きく蹴り上げる。そのボールにデイランとマークが合わせている。

デイランとマークが大きく飛んで、そのまま同時にボールを蹴り込む。

「ユニコーンブースト!!」

二人が同時に打ち込むと、ボールと共にユニコーンが円堂に向かって駆けて行く。

「イジゲン・ザ・ハンド!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドを繰り出す。しかし、ユニコーンブーストはペガサスショットより遥かに威力が高い。

イジゲン・ザ・ハンドは簡単に破られてしまい、1-2と再びユニコーンのリードとなってしまう。

「ヒヤッホウツ!!ギンギンに決まったぜ!!」

「ああ!絶妙なセンタリングだったぞ、カズヤ!」

凄まじい威力だ。何か隠しているとは思っていたな、あんな技を隠していたとはな。

「円堂!!この試合は、俺達が勝つ!!」

「こつちだつて負けるもんか!!絶対に逆転してやる!!」

後半戦開始早々、ユニコーンの勝ち越しリードとなる。だが、まだ後半は始まったばかりである。

円堂の言う通り、絶対に逆転する。

## 不死鳥の最後

ユニコーンブーストで1―2で勝ち越されてしまった。イナズマジャパン。

俺達のキックオフから始まり、宇都宮が基山にパスを出すのが、一之瀬がそれをインターセプト。そのままサイドからデイランとマークが走ってくる。

「通すか!」

鬼道が一之瀬目掛けてスライディングを仕掛けるが、軽やかに一之瀬は躲す。

そのままデイランとマークへとセンチリング。すると、円堂がゴールから飛び出していく。

「フツ、判断ミスか!」

「ゴールはもらったア!」

「やらせるもんか!」

円堂はボールに向かって大きく飛んで、グラウンドの外へとヘディングで弾いてユニコーンブーストを封じた。

それにしても、二人の気迫が凄まじい。一之瀬の全力のプレーに、円堂も全力で応えようとしているのだ。

ユニコーンからのスローイングで試合再開。マークへと投げ渡すがそれを染岡がインターセプト。染岡はそのままダイクを抜き去って、シユート体勢に入った。

「轟け！ドラゴン……スレイヤアアアアー!!」

「フラツシユ……アツパー!!」

染岡はドラゴンスレイヤーを放つが、ビリーのフラツシユアツパーによつて弾かれてしまう。弾かれたボールはゴールの後ろに飛んでいき、イナズマジャパンのコナーキツクのチャンスとなった。

「やつらはザ・ハリケーンを警戒してくる筈だ。吹雪に合わせるのは厳しいぞ」  
「そうだな……豪炎寺には一之瀬がマンマークで付いてるし……」

そんな中、綱海が何やらキツク素振りを始めていた。

「こんな時、あれが打てりやいいんだけどな……」

「どうした、綱海？」

「……いや、なんでもねえ」

すると、久遠監督の指示が綱海に飛ぶ。

「綱海。お前が蹴るんだ」

「お、俺?!」

久遠監督は綱海に、コーナーキックを蹴ると指示する。その指示に、イナズマジャパ

ン、およびユニコーンの面々は目を丸くしていた。

俺は久遠監督の意図を読み取るために考察を始めた。

綱海にコーナーキックを蹴るほどのコントロールはない。どっちかというところ、綱海はパワーが特徴である。そんな綱海をコーナーキックを任せるとなると、答えは限られてくる。

綱海はコーナーにボールを置いて、気合を引き締める。

「ここが海の男の見せどころ……絶対に決めてやるぜ」

ユニコーンは徹底したマークに付いた。そして、コーナーキック開始のホイッスルが鳴り響く。

「行くぞー！」

セットプレーから、定位置に就いた綱海が足を振り上げ、ボールを浮かす。

「ザ・チューブ！ここだああアア!!」

浮いたボールを振り上げた足で蹴り込む。波がボールを中心に筒状になってゴール目掛けて飛んでいく。

「やはりダイレクトか！」

一之瀬は読んでおり、ザ・チューブを止めようとするがあえなく撃沈。ピリーはフラッシュアップを出す余裕もなく、ゴールを許してしまう。

「よっしやああアア!!」

綱海の新技、ザ・チューブで2―2の同点に振り戻した。久遠監督はこれを見抜いていて、綱海にコーナーキックを蹴らせたのか。

しかし、まだまだ油断は出来ない。こつちが点を取ればあちらも点を取りに来る。

ユニコーンからのボールで試合再開。すぐに一之瀬にボールが渡って攻め上がる。一之瀬の隣にはマークも共に攻め上がっている。

「デイラン！ミケーレ！Go！」

「おう!!」

デイランとミケーレはサイドから全速力でゴール前に上がっていく。共に、一之瀬とマークもゴール前まで攻め上がり、計四人がペナルティエリアを囲む形となった。

「壁山！綱海！気を付けろ！」

「行くぞ！必殺タクティクス！」

ボールを持った一之瀬がゴール目掛けてシュート。それを止めるために、綱海がそのシュートを弾く。

「マーク！」

しかし、弾いた先にはマークが先回りしていて、間髪入れずにシュート。今度は壁山が弾く。

「デイラン！」

だがまたしても、弾いた先にはデイランが現れ、シュートを打ち込む。綱海がヘディングで弾くが。

「ミケーレ！」

先回りしていたミケーレが弾いたボールをシュート。その繰り返しをユニコーン  
は行なっていた。

ペナルティエリア外にいる俺達は、ユニコーンの選手に徹底したマンマークで動きを  
抑えられている。

「圧倒的スピードで相手ディフェンスよりも数的優位の状況を作り、雷鳴が轟くように  
激しく攻撃する……それが、ローリングサンダー！」

再びミケーレがゴール目掛けて打ち込む。すると、そのシュートに壁山と綱海の両方  
が反応する。壁山が無理にボールを取りに行ってしまう、綱海とぶつかる。

そして、ゴール前はガラ空き状態となる。

「マーク！デイラン！」

「行くぞ！」

「ビッグサブライズだ！」

「グランフェンリル!!!」

三人が仁王立ちになり、一之瀬とデイランが先行して走り出す。その瞬間、マークの背後から巨大な狼が出現。マークは足元のボールを打ち込む。放たれたシュートと共に、狼が一之瀬とデイランの後を追う様に駆けていく。

一之瀬とデイランがそのボールにタイミングを合わせて、同時に打ち上げる。打ち上げられたボールに、マークがフィニッシュのシュート。

凄まじい威力を誇るボールと共に、狼が円堂に向かって襲いかかる。

「イジゲン・ザ・ハンド!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドで立ち向かう。

しかし、結果は火を見るよりも明らかであり、グランフェンリルがイジゲン・ザ・ハンドを打ち破った。

「よしー」

2―3。再びユニコーンの勝ち越しとなってしまう。

しかし、ユニコーンの勢いはこれだけでは止まらない。イナズマジヤパンのボールで試合再開するも、ボールを奪取されて再びローリングサンダーが猛威を奮う。

「次から次へとツ……………」

「これじゃキリがないぜ……………」

壁山と綱海に疲労が見え始める。ローリングサンダーで集中的に狙われて、体力に限



界が来ないわけがない。

ミケールがシュート。それを綱海が弾くが、そのまま足がもつれて転倒する。ボールは運良くタツチラインを割った。

「壁山！綱海！大丈夫か!？」

「どうってことねえよ……」

しかし、壁山も綱海もこれ以上のプレーは難しいだろう。そんな中、イナズマジャパンのメンバー交代。壁山、綱海、風丸に代わって、土方、木暮、不動が入る。

ここで不動を入れることは、必殺タクティクスを破る算段があるってことだ。

「みつともないねエ、掻き回されちゃって」

「フツ、手厳しいな」

「事実だからな。見かねて出てきてやったんだよ。……どうすればいいか分かってんだろうな、比企谷クン？」

「…まあな」

そう。さっきのローリングサンダーで、あらかた攻略方は分かった。ローリングサンダーさえ破ってしまえば、グランフェンリルは勝手に身を潜める。

「ローリングサンダーを破っても、またグランフェンリルは打ってくる可能性はある。だから先に、グランフェンリルを破る。そのための土方と木暮だ」

「……よし！その作戦にしよう！」

ローリングサンダーの封じ方は分かったが、グランフェンリルをどうやって破るのだろうか。

試合は開始して、すぐさまローリングサンダーの体勢になる。すると、ボールを持ったミケレに木暮と土方が詰めていく。両サイドがガラ空きとなってしまうた。

ミケレはすぐさまマークに繋げる。

「グランフェンリル!!!」

再びグランフェンリルが発動。マークが打ち込み、一之瀬とディランが打ち上げる。

「行くぞ木暮!!」

「おう!!」

土方は木暮の頭を掴んで、思い切り上に投げる。木暮はそのままマークがシュートを打つ前に、空中でボールをクリアする。

「何ッ!?!」

しかし木暮がクリアしたボールは土門がトラップ。

「先にディフェンスを崩すぞ！」

「おう!!」

ボールはマークに繋がる。マークはシュートを打ち込む。そのボールを木暮が弾く。

「吹雪！」

吹雪はスティープからのマークに振り切って、デイランより先回りしてボールをクリア。鬼道へとパスを出すのが、西垣がトラップ。そのまま一之瀬に繋げる。次に一之瀬がゴール目掛けて打ち込む。そのボールを土方が弾く。

「比企谷！」

次に俺はミケーレより早く先回りしてボールを奪う。そのまま、円堂にボールを戻す。

「ローリングサンダーが不発だと……!?!」

「魔術のタネは見破ったぜ」

「何ッ…!?!」

「お前達は跳ね返りを計算して蹴っているんだ。ならそこに先回りすればいい」

そう。このローリングサンダーは極めて単純な破り方だ。ユニコーンの選手からマークを振り切れば、それが可能となる。

それに、何度もローリングサンダーを仕掛けているせいで、マンマークも甘くなっていた。

つまりこれは、初見殺しの必殺タクティクスだ。

「そしてこの必殺タクティクスは……」

「カウンターに弱い」

折角ドヤ顔で言い切ろうとしたのに不動と被っちゃった。

「円堂!!」

「おう!!」

円堂は豪炎寺に向けて大きく蹴り上げる。ユニコーンの選手はみんな前線にいたため、すぐに戻ることが出来ない。

「ヒロト! 虎丸!」

豪炎寺の合図で二人も攻め上がっていく。そのままゴール前まで迫り、アルゼンチン戦で見せた新技の体勢。

「グランド……ファイアアア!!」

相変わらず地面を抉ぐる強烈なシュート。

「フラツシユ……アツ……!」

だが、ビリーのフラツシユアツパーはグランドファイアを止めることが出来ず、得点を許してしまう。

3—3の同点。

残り時間もそれほど残されているわけではない。恐らく次の1点が決勝点となる。点を取った勢いのまま、俺達は攻め続けた。

試合再開し、鬼道がボールを奪って攻め上がる。

「スピニングカットV3!!」

西垣がボールを奪って、土門に繋ぐ。

「行くぞ土門!」

「ああ!」

土門とマークに対して、染岡と基山が突進する。土門がマークの手を掴み回転する。遠心力を使って、マークを大きく上へと投げ飛ばす。

「ジ・イカロス!!」

飛ばされたマークの背中には翼が生え、太陽と被ったマークはさながら天使の様だ。その神々しさに二人は目が眩み、突破されてしまう。

「カズヤツ!」

マークから一之瀬に渡り、木暮を躲してテイランに。テイランはすぐさま一之瀬に戻す。

「Youが決めるんだ!」

「…ああツ!!」

一之瀬がゴール前まで攻め上がっていく。

「行くぞ円堂!」

「来い、一之瀬ー！」

一之瀬は再びペガサスショットの体勢に入る。

「ペガサス……ショット!!」

一之瀬の渾身のペガサスショットが円堂に向かって飛んでいく。

「イジゲン・ザ・ハンド!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドを繰り返す。しかし、またもやペガサスショットに打ち破られる。

ゴールに入ると思いきや、上のゴールポストに直撃する。ゴールポストに直撃したボールは下へ落ちて、地面でスピンのする。そして、円堂に向かってボールが跳ねる。円堂は咄嗟にキャッチ。

「クソッ!!」

一之瀬のシュートは惜しくもゴールに入らず、得点に繋がらなかった。

イナズマジヤパンvsユニコーンの試合は激しい展開を繰り返しながら、タイムアップが迫ってくる。

染岡が攻め上がると、土門のスライディングでボールがフィールドの外に出ていく。

するとここでユニコーンの選手交代。一之瀬をベンチに下げて、エディに代わる。その指示に、ユニコーンの選手は困惑していた。当然、一之瀬もだ。

「お願いです！このまま戦わせてください！」

「お前はずっと全力の戦いをしてきた。疲労が激しいはずだ」

「大丈夫です！まだやれます！今日は特別な試合なんです！俺は最後までピッチに立ってほしいんです！」

「もう交代は認められた。お前はフィールドを出なければならぬ」

エディがウオーミングアップを終えて、フィールドに入っていく。一之瀬は諦めて、重い足取りでフィールドを去ろうとした。

「……嫌だ。これで終わりなんて……」

「……私には、選手を守る義務がある」

「！まさか、俺の身体のことを……」

「……ああ」

一之瀬はユニコーンのメンバーに後を託して、フィールドから出て行った。

「一之瀬……」

一之瀬が抜けてユニコーンの戦力はだいぶ減少した。しかし、こればかりは仕方がない。ユニコーンには悪いが、これで勝負を決める。

試合が再開し、ユニコーンの攻撃が始まる。俺達はユニコーンの攻撃を防いで、最後の反撃に出る。

「円堂！こっちにくれ！」

俺は円堂にパスをくれと指示。円堂は俺にボールを繋げる。

「絶対に行かせない！スピニングカットッ……！」

「サザンクロスカット!!」

スピニングカットを出す前にサザンクロスカットで西垣を突破。俺はそのままシュート体勢。

「アストロゲート！V3ッ！」

俺はビリーに進化したアストロゲートを打ち込んだ。

「フラツシュ……アツパー!!」

ビリーはフラツシュアツパーを繰り返す。しかし、こちらのシュートの方がやや威力が高いため、フラツシュアツパーを破ってゴールに叩き込んだ。

4-3。ついにユニコーンに逆転。

そして、試合終了のホイッスル。イナズマジャパンはユニコーンに逆転勝ちで試合を終えた。

「……ふう」

俺はベンチに戻って、座り込んだ。疲れてもうまともに歩く気すら起きない。

「お疲れ様。比企谷くん」



「よくやった。八幡」

「…ん。悪いな」

雪ノ下と八神から、タオルとドリンクを受け取る。

一之瀬がベンチに下がった後でも、彼の気迫はフィールドに残っている気がした。そのくらい、彼の気迫がこの一戦に影響を及ぼしたんだ。

一之瀬とは話したことはあまりないけど、これだけは絶対に言い切れる。

……凄ごいな、一之瀬。

## 崩壊

一之瀬達がいるアメリカ代表ユニコーンを逆転勝ちで収めた。残りの試合は、ミスターK率いるイタリヤ代表オルフェウス。グループAで1位のチームである。

そして一日の練習を終えたそんな時。

「ひゃっはろー」

神出鬼没の魔王が車に乗って現れた！八幡は逃げようとするが魔王の睨みで逃げられなかった！残念！

「…また何の用ですか、陽乃さん」

本当、この人俺の行動把握し過ぎじゃない？特訓終わってから電話かけてくるとか明らかにイナズマジヤパンのスケジュールを把握してる。

ヤバ過ぎんだろ。ストーカーかよ。魔王がストーカーとかバッドエンドまっしぐらじゃねえか。

「比企谷くん冷たい。お姉さんとキスした仲なのに」

「ッ…」

アルゼンチン戦の前。俺は陽乃さんに、強引にキスをされた。あの時のことが今に

なつて頭の中で思い浮かんでしまい、陽乃さんを直視出来ないでいる。

「…あれは、陽乃さんが強引にしたんでしようが」

「むっ、ツレないなあー。……まあいいや。とりあえず乗りなよ」

俺は陽乃さんの車に乗り込む。乗り込んだ俺に、彼女は調べあげた情報を話し始めた。

「今日呼んだのはこの間の続き。次のイナズマジャパンの相手は、ミスターK率いるイタリアでしょ？この間のことから更に情報を洗い出してみただけど、ミスターKの背後にはもっと大きな存在がいるのが分かったの」

「…やっぱそうですか」

「なーんだ、知ってたんだ。つまんないの」

「いや、知ってたっていうか……ちよつと色々ありました」

アジア予選の最中、円堂のお爺さんから手紙が届いた時があった。円堂のお爺さんが亡くなった理由をあまり知らなかった俺は音無に聞いた。

40年前に影山の罫でお爺さんが亡くなったと。しかし当時影山は中学生。そんなこと一人で出来るとは思えない。ならば誰かが影山に力を貸した人物がいるということだ。

「それで、そのラスボス的な存在の正体は分かったんですか？」

「ま、それなりにね。まだ確証はないけど」

流石は陽乃さんだ。本当この人一人で警察何人分の働きをしているんだろうか。相変わらずのスペックの高さに恐れ入る。

「その人物と関係あるかは分からないけど、ここ最近ミスターKはイタリアの銀行にお金を送り続けていることが分かった。その受取人は”R”。それ以外はまだ分からない」

何かの企みのために金を送ってるってことか？ミスターKに謎の人物”R”。それとは別にいるであろうラスポスの存在。

なんか途端にキナ臭くなってきたな。

「とりあえずはこんなところかな。ま、注意して頑張んなさい」

「…はい。ありがとうございます」

話が終わった様なので、俺は車から出て行こうとドアノブに手をかける。だが、何故か車のドアが開かない。

「…陽乃さん。鍵開けッ……!?!」

鍵開けてください。俺はそう言おうとした。だが、それを陽乃さんは遮る。俺の言葉を遮ったのはただ一つ。陽乃さんの艶やかな唇だ。

「んっ……ちゅっ……れろっ………」

彼女は、陽乃さんは、深く濃厚なキスを始めた。俺を絶対に逃すまいと、両手で俺の髪をこれでもかというくらいに握りしめる。陽乃さんは、俺の全てを余すところなく支配しようとして、狂った様に俺の口内を自身の舌で犯し尽くす。

「ん、んっ……………れろっ……………ちゅぶっ……………」

そんな陽乃さんに、俺はまたも拒絶出来なかった。突き返そうとすれば出来るはずなのに、それすら許してくれなかった。

「ん……………ぶはあっ……………。…本当、比企谷くんは可愛いなあ……………。特に、その怖がついてる表情が……………」

陽乃さんは、互いの口内で混ざり合った唾液の糸をゆつくり引いていきながら離れていく。陽乃さんの唇はいやらしく光り、それを舌舐めずりして拭き取る。

「……………キス、好き過ぎるでしょ……………」

「比企谷くんが悪いんだよー？お姉さんをこんなに発情させちゃうから。本当なら、今すぐにも君を私のモノにしちやいたいんだけどなあ」

「…それは遠慮します。多分遺書を遺す羽目になるので」

俺は陽乃さんが苦手だ。確かに味方になったらこれ以上ない戦力だ。しかし、陽乃さんの思考が読めない。彼女は何を考え、何に基づいて行動しているのか。

このキスだってそう。俺はそこまで好かれることなどしていない。

すると突然、俺のケータイに着信が入る。かけてきたのは、雪ノ下だった。

「へえ。雪乃ちゃんからじゃない」

「……もしもし」

「遅い。もう夜ご飯の時間よ。一体どこにいるの」

「…それは」

なんと答えればいいのかだろう。単純に陽乃さんと言えればいいのに、何故か口からそれが言えない。

「比企谷くん。ケータイ貸して」

陽乃さんが小さく囁いた。

この人に貸したらまず間違いなく面倒なことが起きる。

「それは無理で…」

「貸しなさい」

陽乃さんは低く冷たい声でそう囁いた。それだけではなく、彼女の表情も何かおかしかった。さつきはずっとニコニコとしていたのに、今では鋭く俺を睨む。

すると、陽乃さんは有無を言わさずにケータイをひったくる。

「ひやつはろー雪乃ちゃん。元氣してるー?」

「…なんで姉さんがそこにいるの」

雪ノ下は呆れた物言いだった。それに対して、陽乃さんは妙にテンションが高かった。

「んーつとね、比企谷くんとドライブデートだよ」

「……話にならないわ。比企谷くんに代わって」

「え、嫌だけど」

「……は？」

「今お姉さん達大事な取り込み中だから。じゃあねー」

陽乃さんはそう言って、通話を無理矢理終わらせた。何を考えているんだ、この人は……。

すると、再び雪ノ下から着信が入る。

「しつこいね雪乃ちゃんも……。あ、そうだ。比企谷くん」

「……なんですか」

陽乃さんは俺を呼んでから、雪ノ下からの電話を出す。するとすぐさま、陽乃さんは俺を抱きしめて動けなくする。

「勝手に切らないでちょうだい。比企谷くん、早く代わって」

ケータイからは、雪ノ下が喋っている。電話に出ようにも、出られない。そんな中、陽乃さんは俺の耳元に囁いてくる。

「ねえ、比企谷くん。今ここで比企谷くんと私があんなことやこんなことしてて、雪乃ちゃんにバレたら、どんな反応するのかなあ？」

「ま、まさか……あんな……」

それはヤバイ。いくら雪ノ下を揶揄うにしても、度が過ぎてる。

「急に顔を青ざめちゃって……。可愛い子だね。……んっ」

陽乃さんは突然、俺の耳を噛み始めてきた。優しく、労る様に甘噛みしてくる。彼女の生温かい歯や、いやらしい唾液が混じった舌などが、俺の口内ではなく、耳に襲いかかる。

「くっ……うあっ……」

「……いい声。もつと聞かせて？比企谷くんの、可愛い声を」

「うっ……あッ……」

俺は声を抑えるが、それでも尚声を発してしまう。

以前、陽乃さんに耳が弱いと言った覚えがある。事実、女子に耳元で囁かれたり弄られたりしたら恥ずかしくなってしまうくらいだ。

「比企谷くん？変な声出さないでちょうだい？いいから早く出て」

「……だつてさ。比企谷くんの鳴き声が聞こえてる筈なのに、何もされてないって疑わないんだね」



「は、陽乃さん……ちよ、やめっ……」

「嫌だ」

俺の痛い願いは陽乃さんに届かなかった。むしろ、陽乃さんの行為を後押ししてしま  
う。

「比企谷くん？どうかしたの？返事をして」

「あははっ。雪乃ちゃん焦ってる焦ってる。楽しいなあ」

「姉さん。一体何をしているの？早く比企谷くんに代わってちょうだい」

「そうだなあ……今私達が何やってるかを当てられたら代わってあげる」

「はあ？何やってるかなんて分かるわけじゃないでしょう？」

「つまらない答えだね。なら、ヒントを差し上げよう。……あむっ」

すると陽乃さんは再びキスを始めた。そしてわざと聞こえる様に、ケータイを俺達の顔付近に近づけ、先程よりも激しく乱れた。

「……んっ……んあ……ちゅぱっ……」

「……姉さん？本当に何をしているの？」

しかし、雪ノ下の問いに陽乃さんは反応せず、ただただ俺の唇を、舌を、唾液を、全  
てを支配し、貪り尽くすのに集中している。

「れろおっ……ん、んあ……ちゅ……」

「…姉さん。まさか、貴女……」

「んっ……ふはあっ……。……ちそうさま……比企谷くん」

陽乃さんの表情は、誰もが魅了される程妖艶で、いやらしい。彼女の口からは、俺と交わった証である唾液が垂れていく。

「……雪乃ちゃんがモタモタしてるから悪いんだよ？これから比企谷くんは私のモノだから。手を出さないでね」

「……最低。そんな不純なことをしていたなんて……。お母さんにこのことを伝えるわ」

「別にいいよそうしても。まあ雪乃ちゃんにそんな度胸あるのか知らないけど。……それに、比企谷くんを紹介出来るいい機会だし。なんならこっちからお願いしちゃうくらいいい」

「……ふざけないで。……とにかく、比企谷くんを早く解放して」

「ちえっ。比企谷くんが日本代表じゃなければなあ。ずっと手元に置いておけたのに」

陽乃さんは可愛らしく舌打ちをして、俺から離れていく。俺はもう何も考えることが出来ず、ただ虚空を眺めていた。

「…あたら。比企谷くんを骨抜きにしちゃったかな。おーい。比企谷くーん」

陽乃さんが俺を呼びかける。ボーっとしていた俺は現実に引き戻され、つい挙動不審

になつてしまった。

「ッ……は、はい……？」

「雪乃ちゃんが早く戻つて来いってお怒りだよ。今日はもう十分比企谷くんと楽しめたし、ありがとね」

「……俺には背徳感と罪悪感しかないんですけどね」

「もし居場所が無くなつたらいつでもお姉さんのところにおいで。ずっと可愛がつてあげるから」

「……結構です。自分の居場所は自分で決めるんで。じゃ、失礼します」

俺は今度こそ車から出て行き、陽乃さんに軽く頭を下げる。そして、俺は宿舎へと戻つていった。

—————

宿舎に戻ると、雪ノ下が仁王立ちで待っていた。彼女は俯いており、顔は長い黒髪で部分的に乱れながら覆われて、どんな表情をしているのかが分からない。

「……比企谷くん。来なさい」

「いッ……！」

雪ノ下は俺の右腕を強く掴む。強く掴まれてしまった俺は、痛いと感じてしまう。

雪ノ下は何も言わず、彼女の部屋に連行される。

「入りなさい」

俺は雪ノ下の部屋に無理矢理連れ込まれる。

「…雪ノ下」

「黙りなさい」

「ッ……」

彼女はきつと怒っている。夜ご飯の時間に遅れたこともあるだろうが、それ以上に陽乃さんに押搦われたことが。

「…特訓終わってどこに行つたのかと思えば、姉さんのところなのね。この間も遅れて帰ってきたのも、姉さんなんでしょう？」

雪ノ下の酷く冷たい声が、俺の耳に突き刺さる。痛いほどに。

「それで話をしていたと思えば、姉さんと淫らなことまでしていた。……私、前に貴方に言つたわよね？女に現を抜かして下手なプレーをすれば、貴方の居場所はないつて。聞いてなかったのかしら？」

「……覚えてるよ」

「にも関わらず貴方は八神さんや姉さんと淫らな関係を持っている。今の貴方は最低な

屑と呼ばれても仕方ないわ。それが不可抗力だったとしてもね」

返す言葉が見つからない。

八神然り、陽乃さん然り。俺が最初から強く拒絶しておけばこんなことにはならなかった。

あれこれ言い訳を考えて突き返せば良かった。それでも、出来なかった。偏に、俺の意思の弱さが招いたことだ。

「…貴方からしていないというその一点は信じているわ。姉さんや八神さんから仕掛けてきたのだろうしね。……そう。貴方からするわけがない。私は貴方のことを知っている。貴方が進んでそんな不潔なことをしないと分かっているもの」

「ゆ、雪ノ下……?」

「……これから比企谷くんは私が監視します。貴方のこれからの全てを」

雪ノ下の様子が何かおかしい。

すると彼女は顔を上げてこう言った。

「だから、これからは私に連絡しなさい。どこに出かけるにも、何をするのにも。全て私に連絡しなさい。これは命令よ。断ることは許さないから」

彼女の表情に恐怖を抱いた。別に髪で顔が部分的に隠されているとかではない。

彼女の瞳は暗く濁っており、瞳孔が完全に開いてしまっている。これはまるで……。

「…八神……」

「私は八神さんではないわよ比企谷くん。それとも、私の目の前でその名を出すくらい彼女を意識しているの？違うでしょう？」

雪ノ下の表情は、八神と同じ表情だ。この表情を、俺は幾度となく目にしてきた。雪ノ下が、壊れてしまった。

「ゆ、雪ノ下っ。何かおかしいぞ」

「私は普段通りよ。貴方が更におかしくなったのでしょうか？元からおかしいのに、更におかしくなってしまうって……これはもう重症ね」

いつもと変わらない雪ノ下の罵倒。だが、今の雪ノ下の言葉には返す余力もなく、ただ恐怖だけを感じていた。

「…これ以上おかしくならない様に、私が監視するわ。じゃないと手をつけられないから。いいわね、比企谷くん」

「雪のツ……」

「いいわね？」

彼女は俺の首に両手を添えた。少しずつ、彼女の力が強まっていく。分かった、と言わなければ首を絞める。そう言わんばかりの彼女の瞳。

「…分かった」

雪ノ下は壊れてしまった。いや、俺が壊してしまったんだ。俺の意思の弱さが、彼女を壊してしまった。なら、その責任は誰が取るのか。

そう。

俺が取らなければならない。

「……いい返事よ。もう二度と姉さんと二人きりにさせないわ。八神さんともね」

彼女は満足できる答えを得たのか、俺の首から手を離す。

「……これも言ったわよね。奉仕部という空間の中では私の言うことが正しい、と。つまり、私の言うことは絶対なの。貴方には逆らう権限も権力もない。私が貴方の全てを決める。それこそが、私達にとって正しい選択なのよ？分かった？」

「……雪ノ下」

「私は分かったのかと聞いているの。私の名前を聞いているわけではないわ」

「……分かった」

「……そう。ならいいのよ。では、早く食堂に行きましょう」

「……そうだな」

これを見た由比ヶ浜や一色、小町はなんと言うのだろうか。俺を責めるのだろうか。はたまた雪ノ下を止めるのだろうか。

そんな仮定を考えても仕方がない。俺は、彼女を壊してしまったのだから。

そんな仮定より、彼女を修復することを考えよう。じゃないと、イタリア戦に集中出来ない。



## イタリア戦前

あれから雪ノ下の束縛が激しくなった。八神みたいに、私以外誰とも話すなどは言つて来ない。しかし、どこへ行くにも何をするのにも必ず雪ノ下が付いてきたり、わざわざ聞いてきたりする。

答えあぐねると、彼女の普段のお淑やかな表情が、一転して冷徹な表情になる。それに加えて、八神までもが更に束縛を激しくする。

「どうしたんですか、比企谷先輩？ なんだか疲れた様な顔してますけど……」  
「……なんでもねえよ」

少し病みつつあるそんな俺に、音無が気を遣ってくれた。正直、音無が俺の今一番の救いである。

次また八神や雪ノ下姉妹があんな風に迫ってくると、こちらまで本当に病みそうになつてしまう。

俺はそんな状態で、特訓していた。すると、監督がいきなり招集をかける。監督は招集をかけると、練習試合を行うと言い始めた。

「相手はスペイン代表レッドマタドルだ」

確か、ブラジルやドイツがいるグループBの強豪国だった筈だ。キャプテンのケラルド・ナバルを中心とした攻撃的なチーム。

「予選を突破出来るのはグループ上位2チーム。我々は残り一試合。しかもその相手は、現在1位のイタリアだ。他のチームの勝敗次第だが、おそらくこの試合に勝たなければ予選突破はないだろう。同じくレッドマタドールも、次に勝たなければ決勝トーナメント進出が難しくなる状況下に置かれている」

監督が現在のグループ争いの状況を説明していると、俺達の後ろからスペインの国旗の色である赤と黄色のユニフォームを纏った集団がやつてくる。

こいつらが、レッドマタドール。

「よって、互いの戦力アップのために練習試合を行うことにした」

俺達はすぐに、レッドマタドールとの練習試合の準備に取り掛かった。

—————

FWは豪炎寺と染岡、基山。MFは鬼道、不動、佐久間。DFは俺、飛鷹、綱海、壁山、GKは円堂。

試合が始まり、すぐ俺達が攻め上がっていく。ボールは鬼道に渡り、レッドマタドール陣内を深く切り込んでいく。その鬼道に、佐久間と不動が追随。

「次の試合にはあの技が重要になる！」

「ああ！レッドマタドールには、踏み台になってもらうぜ！」

三人は大きく空に向かって飛んでいき、鬼道が空中で指笛を高らかに吹く。指笛に呼応して現れた紫色のペンギンと共に、ボールを中心にして陣を組む。

「皇帝ペンギン……3号ッ!!」

紫色の強力なエネルギーを纏ったボールを三人がかかと落として蹴り落とす。蹴られたボールは、凄まじい威力を放ちながらペンギンと共にGKのフェルミンに向かって低空に突き進む。

「ぐおおおオオッ!!」

自身の巨体を使って皇帝ペンギン3号を止めようとするフェルミンだが、必殺技なしでは流石に止めることが出来なかった。

1-0で、イナズマジヤパンが先制する。

あれが皇帝ペンギンの最終進化系とかいう皇帝ペンギン3号……。確かに、最終進化系と誇れる素晴らしい技だ。

先制したイナズマジヤパンの勢いは止まらず、再び攻め上がる。ボールは俺に渡って、前線へ攻め上がっていく。

しかし、前からDFでありキャプテンであるケラルドが向かってくる。

「ウエルカムバック！」

ケラルドが右足を振り上げると、風が巻き起こり、その風が俺からボールを巧みに奪ってケラルドの足へと引き寄せられる。

「しまったッ……！」

ボールを奪ったケラルドはそのまま攻め上がっていく。続いて、染岡がケラルドに向かって走っていく。

ケラルドは不適に笑って、どこからか赤い布を取り出し、相手を誘うように布を振る。

「マタドールフェイント！」

それを見た染岡は、冷静さを欠いて大きな唸り声を上げながらケラルドに突っ込んでいく。闘牛士の様に、軽やかに突っ込んできた染岡を躲した。

ケラルドはFWのサムエルに繋ぎ、サムエルはゴール前まで走っていく。同時にFWのダビもゴール前へ。そして二人の後を追う様に、ケラルドもオーバーラップ。

すると、サムエルとダビはボールを勢いよく踏み付ける。そのボールに向かって、ケラルドがスライディング。

「スリング……シヨットッ!!」

ボールはおもちゃのパチンコの様に弾かれ、円堂に向かって飛んでいく。

「イジゲン・ザ・ハンドッ!!」

しかし、イジゲン・ザ・ハンドはあえなく破られてしまい、スリングショットがゴールに突き刺さる。

すぐさま1-1の同点に追いつかれてしまった。

流石はスペイン代表。ブラジルやアルゼンチンに続いて強豪国と言われることはある。だが、今の段階では互角。ここで勝つことが出来れば、大きな自信に繋がるだろう。イナズマジャパンのボールになり、再び鬼道にボールが渡る。そして、皇帝ペンギン3号の体勢に入りつつあった。

「もう1点取るぞ！ 皇帝ペンギン3号だ！」

だが、佐久間と不動を置いて鬼道だけがレッドマタドールのゴールに突き進んでいく。DFのラファエルとアントニオが鬼道の行手を塞ぐが、スピードに乗った鬼道は突破して、フェルミンに向かってシュート。

フェルミンは鬼道のボールに向かって闘牛の様に突っ込み、ボールを大きく外へと弾き飛ばした。

「お前、何焦ってんだよ」

さっきの鬼道のプレーに不動が注意する。しかし、不動の言葉に耳を傾けずに自分のポジションに戻る。

おそらく、鬼道の頭を支配しているのはミスターKこと影山のことなんだろう。鬼道

の恩師だと言うらしいし、影山に対して思うところはあるのだろう。

そのまま試合は終盤戦まで互角の展開となり、最終結果は1―1の同点で試合を終えた。

試合を終えた俺達は整列する。円堂とケラルドが試合後の握手を行う。

「決勝トーナメントで会おうぜ！」

「ああ！今度は勝負をつける！」

すると、拍手が聞こえてくる。

「すごい！本当にどちらもすごかった！」

「本当、練習試合とは思えないくらい！」

マネージャー達が試合を終えた俺達に拍手を送る。

今日の練習試合はいい特訓となった。やはり、実戦に勝るものはないということだろうか。

俺は、試合の疲れで地面に重く座り込んだ。

「お疲れ様、比企谷くん。タオルとドリンクよ」

「いい試合だったぞ、八幡」

雪ノ下と八神が同時にタオルとドリンクを渡そうとやってくる。

しかし。

「貴女は必要のないのよ、八神さん。そうやって自分の気持ちを押しつけて、比企谷くんを困らせていることにそろそろ気づけないのかしら？」

「貴様こそ、イナズマジヤパンのマネージャーになったのなら他所の者を労わるがいい。八幡には、私だけがいればいい」

「そういうところが比企谷くんを困らせていることに気づかないなんて、もはや哀れとしか言いようがないわね。同情するわ」

「雌豚が凶に乗るな。八幡、あちらに行こう。こんな雌豚など放っておけばいい」

「待ちなさい比企谷くん。私が言ったこと、もう忘れたの？ 国語三位が聞いて呆れるわ」  
彼女達の会話を聞いているだけで、心が病みそうになってくる。八神から、雪ノ下から、俺は逃げる事が出来ない。俺が一人になれるのは風呂と就寝の時だけ。

それ以外は八神、あるいは雪ノ下が絶対に近くにいる。

加えて陽乃さんの存在も俺に影響を与えてくる。この場にはいないからいいものの、俺のケータイには陽乃さんの連絡先が登録されている。

俺に逃げ場などない。完全なチエックメイトである。

結局この争いは終わらずに、八神と雪ノ下共々、俺はずっと一緒にいることとなった。

レッドマタドールとの練習試合から2日後。

明日はいよいよイタリア戦。明日に備えて、俺は早めに寝ようと自室に戻る。流石の雪ノ下と八神も、就寝の際に部屋に入ってくる様なことはないのだ。

一番自分が落ち着く時が、就寝時間である。

「……はあ……」

俺は電気を消そうとすると、部屋にドアに対して叩いたノック音が響く。

まさか、八神か雪ノ下か？

「比企谷先輩、ちよつといいですか？」

俺の部屋に訪れたのは、音無であった。八神や雪ノ下ではないことに、少し安堵した俺はドアを開く。

「どうしたんだ？」

「比企谷先輩と話したいことがあって……入っていいですか？」

「……別に構わんけど。あんま騒ぐなよ」

ここで騒がれたりでもしたら、八神や雪ノ下が来るに決まっている。本当ならここで追い返すべきなんだろうが、音無の真面目な表情を見てその気はなくなってしまった。

音無は静かに部屋に入る。

「適当に寛いでくれ」

音無は、俺のベッドに腰掛ける。その後、俺と音無の隣を交互に見る。どうやら隣に



座れというサインなんだろう。

俺は音無の隣に腰掛ける。

「それで、どうしたんだ？」

「……比企谷先輩、最近何かあったんですか？」

「……何の話だ」

「惚けないで下さい。アメリカ戦が終わってから、比企谷先輩ですよ」

流石、マネージャーといったところか。幾人の選手を見てきたからか、人の様子がまかに分かるようになってきている。

つまるところ、洞察力や観察眼が鍛えられているということだ。

特に、マネージャーの中では音無がそれがダントツだ。

「……俺が変なのはいつもと変わらんだろ。大体、人間どこか変な部分がある。逆に変な部分がない人間はアンドロイドみたいなやつってことだ。つまり変な人間は一周回って普通の……」

「……やつぱり。比企谷先輩って、何かあった時口数が多いってこと気が付いてますか？」

「ッ……」

小町にも似たようなことを言われた記憶がある。何かあった時、普段よりもどうしようもないことを言うという。

「…この間も言っただろ。何もねえよ」

「教えてくれるまで私部屋に帰りませんから」

「居座るのはやめて？君のお兄ちゃんに色々怒られそうだから」

なんだかんだで鬼道ってシスコンな気がするんだよなあ。知らんけど。

「…どうしても教えてくれないんですか？」

「だから、何も無いってさつきから…」

「私、そんなに頼りないですか？」

「…は？」

「比企谷先輩が嘘ついてまで隠し事してるのは見て分かります。先輩って顔に出やすいですから」

音無が見抜いた様にそう言う。ポーカーフフェイスが得意だと思っていたんだが、どうやらそうでもなかったらしい。

「この数日、比企谷先輩を見ていてなんとなく分かりました。雪ノ下先輩や八神先輩のことを考えてたんでしょ？」

俺は核心を突かれ、そのことに対して何も言い返せなかった。言い返せないのは、音無の言う通りだったからだ。

「三人の間で何があったのかは私にも分かりません。でも、比企谷先輩があんな辛そう

な表情をしてたの初めて見ました。だから、少しでも比企谷先輩の力になりたいんです」

「…たとえ音無の言うことが正しいとしても、お前がそこまでする必要はないだろう」  
そう。彼女が首を突っ込んでくる必要がない。突っ込んできて、彼女まで心を病んでしまつたら元も子もない。

しかし、彼女は引かなかった。

「ありますよ！だって、私はイナズマジャパンのマネージャーですから！選手のケアはマネージャーの仕事なんです！」

こいつはきつと、本気の善意で俺のために動こうとしてくれたのだろう。それは十分嬉しいことだ。

でも。

「……悪いが、お前には頼らない」

「えっ……」

「お前の言う通り、今の俺には悩んでいることがある。けどそれは俺が招いた問題なんだ。だから俺が解決しなきゃならない。無関係のお前に頼るわけにはいかねえよ」

とつとと音無を言いくるめて帰ってもらおう。これ以上首を突っ込まれると色々困る。

しかし、音無は。

「…無関係じゃありません！たとえ無関係だったとしても、私は比企谷先輩の力になりたいんです！」

音無は声を荒げて、俺に向かってそう言ってくる。いつの間にか、彼女は俺のジャージに力強くしがみついていた。

「だから、別にお前を頼る必要なんて……」

「いやッ！嫌だッ！私は絶対比企谷先輩の力になるんだからッ！先輩に何を言われても、力になるんだからあッ！」

「お、おい音無……」

荒ぶる音無を俺はなんとか宥めようとするが、一向に収まる気配がない。

「なんで頼ってくれないのッ!?私ってそんなに頼りないの!?!」

「…別にそうは言っていないだろ。お前がいたから立向居の魔王・ザ・ハンドだって完成したようなものだ。そんなお前が頼りないわけないだろ」

立向居の様子を見抜いた音無がいたから、綱海や栗松達が集まって魔王・ザ・ハンドの特訓が出来たんだ。久遠が調子を崩した時も、木野が一之瀬のことで悩んでいた時も、音無が一番頑張ってマネージャーの仕事を買っていた。

「じゃあなんで頼ってくれないの!?!」

「確かに音無は頼れるマネージャーだ。だけど、無関係のお前を巻き込むわけにはいかない。だから……」

「巻き込まれてもいい!!辛くなっても、苦しくなってもいい!!それでも私は比企谷先輩の力になりたいのツ!!絶対……絶対に役に立つから……!!だから……私を頼ってよおツ!!」

すると、彼女は涙を流していた。悲痛な表情で懇願している最中に、涙を流してしまっただろう。それほどまでに、俺の力になりたかったのだ。彼女の真つ直ぐな気持ちは、もはや疑う余地がない。

だが、本当巻き込んでしまっているのだろうか。彼女はああ言っているが、もし彼女になんらかの危害が加わってしまったら。

そう考えると怖くなる。鬼道に申し訳立たないし、何より俺のせいで誰かが傷つくのは許されない。

しかし、それでも音無の思いを無碍にしているものなんだろうか。

彼女がここまでかなぐり捨てて自分の本音をぶつけてきた。それを否定していいわけがない。

迷いに迷った末に、俺が彼女にかけて言葉は。

「……分かった」

「えっ……!?じ、じゃあッ……!」

「…特段何かをして欲しいことはおそろくない。…ただ、話を聞いて欲しい。今は、それだけでいい」

「はいっ……はいっ!!私、絶対比企谷先輩の力になりますから!!これからずっと、私に頼らなきゃならないって思えるくらい頑張りますから!!」

「…ああ。頼むわ」

彼女の悲痛な表情が一転し、晴れやかな表情になった。そんな表情に、俺は少し笑みを浮かべた。

「比企谷せんぱーいっ!」

泣いていた彼女はもうどこかに去り、子どもみたいに急に戯れついてきた。そんな彼女の表情は、とても幸せそうな表情だった。

「……ありがとな、音無」

彼女は立派なイナズマジャパンのマネージャーだ。少し病みつつあった俺の心は、音無のお陰で和らいだ。

「はいっ!比企谷先輩っ!えへへっ」

これなら、明日のイタリア戦、少しは集中出来そうだ。

## カテナチオカウンター

今日はイタリア戦当日。音無との話の後、少しだけ心身ともに休ませることが出来た気がする。

俺達は今日の試合会場である、コンドル島のコンドルスタジアムへと赴いた。決勝トーナメントに進出するために、この一戦は絶対に負けられない。

「今日のスタメンを発表する。FW、豪炎寺、染岡、基山。MFは鬼道、比企谷、佐久間。DF、壁山、綱海、吹雪、飛鷹。GKは円堂。以上だ」

「はい!!」

俺達はそれぞれのポジションに着く。

試合開始のホイッスルが鳴り、イナズマジパンのキックオフで試合開始。

ボールは染岡に渡り、阻止すべくMFのアンジエロがチャージ。しかし、染岡はキレのあるドリブルで突破する。

「カテナチオカウンターだ!」

「!?!」

フィディオが必殺技の様にその単語を発した。その言葉に、俺達は動揺する。

「もらったー！」

フィディオが動こうとすると、その前にジョルジョが動き出して染岡からボールを奪い去る。

「……なんだったんだ。今のは」

カテナチオと言えばイタリアの言葉で門、つまり鍵や錠前などを意味する古い戦術のことである。

何故そんなことをいきなり言い出しのかは分からない。が、無意味な言葉を発する筈がない。何かを仕掛けてくる筈だ。

「行かせるかアツ！」

佐久間の強力なスライディングでジョルジョからボールを奪取。佐久間がボールを奪うものの、オットリーノが奪い返す。それを次に吹雪が奪う。

一進一退。互いに奪い合い、相手陣内に攻め上がろうと試みている。

ボールはDFのベントに。俺はベントにマークに入る。

「ベントー！」

フィディオがベントに声を掛けるが、ベントは無視してジャンルカにボールを回す。「悪いなフィディオ。この試合だけは好きにさせてもらおうぜ」

オルフェウスの動きが変だ。動きというか、キャプテンであるフィディオに一度も



ボールが渡っていない。

見たところ、どうやらオルフェウスのメンバーはフィディオを信用していない様だ。ボールを持ったジャンルカはジョルジョとのパスワークで佐久間を抜き去る。

「行かすものかッ！」

しかし、鬼道がすぐにジャンルカからボールを奪い返す。

「豪炎寺！」

奪ったボールを豪炎寺に繋げようとするが、豪炎寺にはオットリーノがマンマーク。豪炎寺だけではなく、基山や染岡には、マルコとベントが徹底したマークに付いている。FW陣は身動きが取れない。

パスコースを塞がれた鬼道は、アントンのスライディングでボールを弾かれる。しかし、依然俺達がボールを保持し続けるが、徹底したマークが硬過ぎてFW陣に中々ボールを繋げずにいた。

すると、ディフェンスラインから吹雪が一気に駆け上がってくる。

「佐久間くん！」

佐久間は吹雪にボールを回す。吹雪は得意のスピードで、猛然と切り込んでいく。

「カテナチオカウンターだ！」

「!?!」

「まただー！」

フィディオオは再びカテナチオカウンターという単語を発した。だが、フィディオオの指示を無視してジャンルカが吹雪にチャージ。吹雪は勢いよくジャンルカを抜き去る。

「行かせるかアー！」

オットリーノが豪炎寺から離れて、吹雪に向かって走っていく。

「今だー！豪炎寺くん！」

「し、しまった！」

吹雪と豪炎寺はゴール前まで駆け上がって、必殺技の体勢に入った。

「うおおおおオオツ！！」

「だああああアツ！！」

「クロスファイアアアツ！！」

吹雪と豪炎寺の連携技、クロスファイアがGKブラージに襲いかかる。

「任せろ！！コロッセオツ…！！」

だが、ブラージの必殺技を出す間も無く、クロスファイアが炸裂する。イナズマジヤパンがオルフェウスから先制点をもぎ取った。

「いいぞー！吹雪！豪炎寺！」

オルフェウスから先制点は大きい。オルフェウスはアメリカの様にバランスが取れ

た強豪チームだ。そういう攻守揃ったチームが一番厄介なのだ。

点を取られたオルフェウスからのボールで試合が再び始まる。ボールはラファエレに渡る。

「行くぞ、ラファエレ！」

フィデイオの声に耳を持たず、ラファエレは独断でイナズマジヤパン陣内に攻め上がってくる。

「染岡！豪炎寺！左右からプレスをかけろ！」

「よしー！」

「佐久間！比企谷！俺に続け！」

俺達は鬼道の指示で動き始める。突進するラファエレに染岡が向かっていく。

「突破してやる！」

ラファエレのフェイントで染岡は躲される。しかし、染岡の背後から佐久間が現れ、ラファエレからボールを奪い取る。

「何ッ!?!」

一瞬でボールを奪った俺達はオルフェウス陣内に攻め上がっていく。

「比企谷！」

俺は佐久間からボールを受け取る。

「まずい……みんなディフェンスラインを下げろ！」

フィディオがそう指示を出す、その指示の言う通りに動いたのアンジェロだけだった。

「何する気だよジャンルカ！」

「守ってばかりで勝てるかよ！ボールを奪い返す！」

「でも、フィディオはディフェンスラインを下げろって……」

「ミスターKの信じるやつの指示なんかに従えるか！行くぞー！ジョルジョ、ベントー！」

ジャンルカを筆頭にジョルジョとベントが俺に向かってボールを奪いに来る。

「ライアー……シヨット！」

俺はライアーシヨットを仕掛けて、三人の間を抜き去る。そのまま俺はペナルティエリアに切り込んで、ノーマークの豪炎寺へとセンタリング。

「はああああアッ！」

すると、フィディオが鋭いスピードで自陣ゴールに戻って、豪炎寺へのセンタリングをクリアする。

「……なんて速さだ」

流星はイタリアの白い流星と呼ばれるストライカー。彼の全体的なスペックは、一之瀬やエドガーを凌ぐかも知れない。

佐久間のスローイングで試合が再開する。

向こうは何やら揉めている様だったが、こちらがチャンスなのは変わりない。一気に叩くしかない。

「鬼道！」

ボールは鬼道に渡る。ラファエレのマークが入るが、鬼道はなんとか競り勝って、染岡に繋いだ。

「アンジエロ！」

「うん！」

アンジエロが染岡へとスライディング。ボールを奪ったアンジエロから、この試合初めてフィディオにボールが繋がった。

「来い！フィディオ！」

「行くぞマモル！」

フィディオと共に、オルフェウスは攻め上がっていく。

「止める！」

「ラファエレ、アンジエロ！左右から上がれ！」

俺は指示を出している隙を突いて、フィディオへとスライディング。ボールをグラウンドの外に弾き飛ばす。

「危ねえ……」

今、少し妙な動きに見えたのは俺の気のせいか……？ファイディオに初めてボールが渡ったからか……？

ダンテのスローイングで試合再開。ダンテからファイディオへとボールを投げ渡す。

「互いの同じ距離を取りつつ、ボールの動きを予測しろ！」

「そんなこと言われても……」

「特訓を思い出せ！ミスターKの特訓の意味が分ければ、必ず出来る！」

俺と鬼道がドリブルで攻め上がるファイディオに向かっていく。

「ラファエレ！」

ファイディオからラファエレへと大きくパス。しかし、ラファエレにはファイディオのパスが届かず、ラファエレの前へとボールが転がる。そのボールを綱海が拾う。

「鬼道！」

綱海から鬼道にボールが回る。

「ファイディオ！攻められっぱなしじゃないか！」

「俺がボールを取りに行く！」

「ダメだ！フォーメーションを崩すな！」

徐々に、ファイディオを取り巻くフォーメーションが段々と定まってきた。ファイ

ディオが走りながら、自身の周囲のメンバーの動きをコントロールしているのだ。

フィディオは少しずつ鬼道へと近づいていき、トリツキーな動きで鬼道にアプローチをかける。

すると、オルフェウスのベンチからミスターKが憤慨する。

「そのプレーをやめろ！私の全てを壊したあの男のプレーなど！」

「いいえ、やめません！貴方が求めているサッカーは……貴方の父、影山東吾が中心にやることで完成するのですから！」

鬼道の前に、フィディオが回り込んで行手を阻む。鬼道は躲そうとするが、フィディオの完璧なテクニックに突破出来なかった。

「鬼道、こっつちだ！」

佐久間が鬼道に呼びかけるが、アンジェロが素早くマーク。俺には、ダンテがマークに付いた。そして、オットリーノとアントンが合流することで、鬼道は一瞬にして包囲された。

「一瞬で囲まれただ?!？」

「これがあの特訓の成果なんだね！」

「そしてこれが、ミスターKの目指したサッカー！」

動けない鬼道に向かって、正面にいるフィディオが再びトリツキーな動きでボールを

奪取。

「なッ……!？」

「…サッカーを愛する者だからこそ作り上げることが出来た完璧な必殺タクティクス！これがッ……カテナチオカウンターだッ!!」

鬼道から奪ったフィデイオは、前線にいるラファエレへと大きくパス。守りから一瞬で攻撃に転じてしまった。

これが、カテナチオカウンター。

「絶対に止めてやる!」

円堂はシュートを打たせまいと走って行くが遅かった。ラファエレは腕組みをしてゴールを睨みつけると、地面一帯が凍り始める。

「フリーズ……ショットツ!!」

ラファエレはボールを打ち込む。するとボールは氷の地面を滑る様に円堂に向かって飛んでいく。

円堂はフリーズショットを技無しで止めようとしてしまう。フリーズショットは円堂の手を弾いてゴールに突き刺さる。

ラファエレのシュートで1-1の同点ゴール。

確かにカテナチオカウンターも凄かったが、それを完成させたフィデイオが何より凄



い。それに、ファイディオのプレーは今までのプレーとは何かが違っていた。ミスターKにファイディオ……そして完成されたカテナチオカウンター……。やはり、そうこの試合は簡単に勝てそうにないな。

## 熱闘

オルフェウスの必殺タクティクス、カテナチオカウンターからのラファエレのシュートで同点となる。

俺達のボールで試合再開。鬼道にボールが渡って攻め上がっていく。しかし、鬼道に對してフィディオが向かってくる。

「……は通さない！」

鬼道はフィディオをフェイントで抜こうとするが、フィディオも負けずに鬼道に食らいついてボールを奪う。

「行かせるかッ！」

俺はフィディオに挑む。フィディオの視線を先読みして、フィディオの行く先に先回りする。

「くッ……！」

しかし、フィディオも世界トップレベルのプレイヤー。見事なボールコントロールで、俺を華麗に抜き去る。

「行くぞマモル！」

フィディオは抜き去ってから超ロングシュートを打ち込む。

「イジゲン・ザ・ハンドツ!!」

フィディオのシュートに向かってイジゲン・ザ・ハンドを繰り出す。フィディオのシュートは円堂が完璧に防ぐ。

「まだだ!・どんどん狙うぞ!」

フィディオのプレーも流石だが、オルフェウスの個々の実力も相当なもの。加えてあのかテナチオカウンター。中々に苦しい展開だ。

円堂からのゴールキックで試合再開。ボールは再び鬼道に繋がる。

「豪炎寺!」

豪炎寺にパスを出そうと試みたが、オルフェウスのデイフェンスは素早くFW陣を徹底的にマーク。

「鬼道!」

俺は前線が上がっていく。鬼道は俺に合わせてボールを回す。

とりあえず、かテナチオカウンターを直で感じてみる必要がある。正直、突破出来る気はしないが、次に繋げるための布石を作らなければならない。

「アンジェロ! ジャンルカ! ジョルジョ! 互いの息を合わせろ!」

「おう!!」

俺の行手にファイディオが立ちほだかる。

「今だ！アントン！オットリーノ！」

ファイディオの的確な指示でDFとMFが素早く行動する。気付いた時には、俺は既に囲まれてしまった。

「数の暴力かよ……」

一人に対してこの人数。俺は皮肉げにそう呟いた。

こんな大人数の中で、ボールをコントロールすることは出来ない。ましてや、俺の目の前にいるのは全てにおいてハイスペックなファイディオ。

俺はファイディオを突破しようと試みた。

「無駄だツ！カテナチオカウンター！」

「ツ……」

俺は一瞬、ファイディオの動きに違和感を感じた。その隙に、ファイディオからボールを奪われてしまう。

「ラファエレ！」

ボールを奪ったファイディオは前線のラファエレに大きくパス。そのボールを受ける体勢で待つラファエレに、吹雪が向かっていく。

「来たな」

するとフィディオからのボールが大きくカーブ。ラファエレはそれに合わせて走って、吹雪の裏をかいた。

「しまった！」

ボールを受けたラファエレは再び必殺技の構えに。

「フリーズ……シヨット!!」

ラファエレのフリーズシヨットがゴールに向かって飛んでいく。そのフリーズシヨットに対して、壁山と飛鷹はダブルディフェンス。

「ザ・マウンテンツ!!」

壁山がザ・マウンテンを繰り出すも、簡単に碎かれてしまう。

「どりゃああアアツ!!真空魔ツ!!」

ザ・マウンテンで弱まったボールに更に真空魔でボールの威力を殺す。それでも尚、ボールはゴールに飛んでいく。

「いかりの……てっついッ!!」

円堂がいかりのてっついを繰り出してなんとかフリーズシヨットを止めた。

しかし、依然オルフェウスが有利なのは変わらない。カテナチオカウンターがある限り、一瞬で攻撃に転じることが出来る。

俺達は果敢に攻め上がるが、カテナチオカウンターの威力は絶大だ。何度突破しよう

としてもフィディオに防がれてしまう。

ボールは鬼道に渡り、サイドの染岡へとセンターリング。

「ブラーじ、来るぞー！」

ブラーじは染岡のシュートに対して構える。

「轟け！ドラゴン……スレイヤーアアアー!!」

染岡のドラゴンスレイヤーがブラーじに向かって襲いかかる。

ブラーじは両手を胸元でクロスさせ、パワーを溜めた。そのパワーを一気に解き放つと、ブラーじの背後からローマのコロッセオのような壁が地面から出現する。

「コロッセオ……ガード!!はああアツ!!」

コロッセオの壁を閉じて、ドラゴンスレイヤーを完璧に防ぐ。

「俺のコロッセオガードはそう簡単に破れないぜ！」

「くそッ……」

あのブラーじとかいうGKも強力な技を持っている。イタリア最強の守護神と謳われることはあるな。コロッセオガードを破れるのは連携技か豪炎寺か。

しかし、カテナチオカウンターのがあるから豪炎寺はおろか連携技にまで繋げない。カテナチオカウンターのの中に入ったら最後だ。

今までの防御の必殺タクティクスを、完全に超越している。

「……あ」

今までの防御の必殺タクティクスはどんな戦術だった……？

ボックスロックは1人を4人で囲み、パスコースを塞いでボールを奪っていた。パーフェクトゾーンプレスは、二つの包囲網を作って徹底したプレッシングで相手を精神的に追い詰めた。アブソリュートナイトは、ドリブルで向かってくる選手に対して次から次へと襲いかかる戦術だった。アンドレスのありじごくは、1人を大勢で囲みながらテレスの目の前に誘導していた。

思い返してみれば、どの防御型の必殺タクティクスも共通点があった。それはカテナチオカウンターに対しても同じこと。その共通点こそが、防御型必殺タクティクスを未然に防ぐための材料だったのだ。

「……試してみるか」

俺はこの策を使うために必要な人物を呼び出した。俺の呼び出しに駆け寄ってきたのは、豪炎寺と鬼道。そして綱海だ。

「どうしたんだ？ 比企谷」

「……カテナチオカウンターを出させず、点を取れるかも知れない策がある」

「そんな作戦があんのかよ!?!」

「……話してみてくれ」

俺は頭の中で作り上げた策を、彼らに伝えた。

「…確かに。その方法なら、カテナチオカウンターを出させずともゴールを狙えるかも知れない。何より、俺達に対するリスクがない」

「やってみる価値はあるかもな、鬼道」

「なら決定な。じゃ頼んだわ」

俺の策はその場凌ぎでしかない。しかし、その場凌ぎだろうが何だろうが、最終的に点を取ってさえいければそれでいい。

ブラージからのパントキックでアンジエロに飛んでいく。しかし、それを鬼道がインターセプト。

「比企谷ツー！」

俺は鬼道からボールを受け取る。俺に向かって、ラファエレが突進してくる。

「もらったッ！」

俺はラファエレのチャージを躲し、綱海にバックパス。

「行くぜ!!」

綱海はその場で必殺技の体勢に入る。

「ツナミブースト…V2!!」

綱海はライフエンスラインから、オルフェウスのゴール目掛けてツナミブーストを打



ち込んだ。

「な、何ッ!？」

「デイフェンスラインからの超ロングシュートに対して、オルフェウスは動揺してしま  
う。」

「今だ！走れ豪炎寺！」

「ああ!!」

オルフェウスは少なからずツナミブーストに注目している。そこには必ず隙が生ま  
れる。デイフェンスラインからロングシュートを打たれば、何事だっと思っからな。

豪炎寺はツナミブーストに合わせて、必殺技の体勢に入った。

「爆熱スクリユウウツ！改ッ!!」

豪炎寺はツナミブーストを進化した爆熱スクリユウでシュートチェイン。ロング  
シュートとはいえ、キック力のある綱海のシュートに豪炎寺のシュートチェイン。

「コロッセオ…ガード!!はああアアッ!!」

ブラージはコロッセオガードを繰り返す。しかし、コロッセオの壁に徐々にヒビが入  
り始め、そのままコロッセオガードを打ち破ってゴールにねじ込んだ。

イナズマジパンが2―1の勝ち越しとなる。俺の策が、ズバリハマった。

—————

「カテナチオカウンターを出させず、点を取れるかも知れない策がある」

「そんな策があるのかよ!？」

「……話してみてくれ」

数分前。

俺はこの策の中心人物を呼び出して、内容を説明した。

「…まず、今まで戦ってきたチームの必殺タクティクスの共通点はなんだと思う?」

「共通点?」

「そんなこと言われてもわっかんねえよ」

俺の言葉に、3人は分からないといった表情だった。

「答えは地面にボールが着いているということだ」

「…地面?」

「パーフェクトゾーンプレスを思い出してみる。あれを破ることが出来たのは、俺達が空中でボールを続け様に繋げたことだからだ。今まで戦ってきたチームの防御型必殺タクティクスの内容は勿論違うが、どの必殺タクティクスも俺達がドリブル、つまり地面にボールがあったから有効だったんだ。まあボックスロックは例外だけど」

ボックスロックは上に躲されることも考えた必殺タクティクスだった。

「…ということは、空を使ってボールを繋げるということか?」

「俺も最初は考えた。けど、途中でフィディオにボールをカットされる可能性がある。だからその策はやめて、別の策にした。キーマンは綱海だ」

「お、俺?!」

綱海は仰々しく驚く。

「アジア予選や本戦に入ってから、綱海はお得意の超ロングシュートを打っていない。つまり、あいつらの頭の中には超ロングシュートを打ってくるかも知れないっていう可能性なんざ考えてすらない。そこを突くんだよ」

「んん? 結局、どういうことなんだよ?」

俺はもつと分かりやすい様に要約して伝える。

「簡単に言えば、綱海の超ロングシュートを豪炎寺がチェインして、カテナチオカウンターを未然に封じつつゴールを狙おうってことだ。綱海はボールが来たら、前の様に超ロングシュートを打てばいい。簡単だろ?」

「…確かに。その方法なら、カテナチオカウンターを出させずともゴールを狙えるかも知れない。何より、俺達に対するリスクがない」

「やってみる価値はあるかもな、鬼道」

「なら決定な。じゃ頼んだ」

一応、カテナチオカウンターの破り方も考える様に伝えた。なんせ、これは初見殺し

の戦術。二度も通じる程、オルフェウスは甘くない。

1点つていっなのはとても大きいのだ。だから、何をしても取らなければならない。これは、そういう策だ。

—————

2—1で勝ち越した俺達。

次はオルフェウスのボールで試合が再開した。ボールはMFのダンテに渡る。

「行かせるか！」

「エコーボール!!」

俺と佐久間がダンテに向かっていく。ダンテはボールを上蹴りながら宙返りする。ボールが地面に着いた途端、特殊な空間が発生して俺達を包む。

そダンテがボールを跳ね回らせると、空間の中でボールの跳ねる音がうるさく反響して俺達を幻惑する。

俺と佐久間は耳を塞いで動きを止めてしまう。その隙に、ダンテは抜き去っていく。

「ラファエレ！」

ダンテが右サイドにいるラファエレにセンターリング。それを読んでいた吹雪と飛鷹がラファエレにマークに付くが、ボールは大きくカーブ。

逆サイドから上がってきていたファイディオがそのボールを受け取って、ゴールに迫る。

「行くぞマモル!!」

「来い!ファイディオ!!」

ファイディオの足元、そして手前にルーン文字で“s w o r d”と書かれまくった魔法陣が浮ぶ。

「オーデイン……ソオオード!!」

その魔法陣の中で、ファイディオが勢いよくシュートを放つ。放たれたボールが黄金に煌く巨大な剣となつて、円堂に襲いかかる。

「イジゲン・ザ・ハンドオツ!!」

円堂は渾身のイジゲン・ザ・ハンドを繰り出す。しかし、ファイディオが放つオーデインソードが威力が上手であり、イジゲン・ザ・ハンドを破つて文字通りゴールへと突き刺さつた。

俺達はすぐさま点を取られてしまい、2-2の同点となつてしまった。

「凄え……なんて強烈なパワーなんだ……。……これがお前の必殺シュートなのか?」

「見せたかつたんだ。君にこのシュートをね」

「……次は決めさせないぜッ」

やはり、オルフェウスは取られたら取り返してきやがる。

それに、俺達は未だにカテナチオカウンターの破り方が分かっていない。スコアの上では五分五分だが、内容はやや不利である。

一方で、ファイディオの動きに妙な親近感が湧いてくる。もしかしたら、俺の気のせい  
かも知れない。

ファイディオの動きが、鬼道に似ているということ。

## ミスターKとルシエ

2―2の同点で競り合うイナズマジヤパンvsオルフェウス。俺達のボールから試合開始。

鬼道にボールが渡るが、ファイディオのディフェンスによって行手を遮られてしまう。閱ぎ合いの末、ファイディオが鬼道のボールをクリアする。ボールはタッチラインを割っていく。

と、ここで選手交代。染岡に代わって不動が投入される様だ。不動が入るということは、カテナチオカウンターの攻略の術を見出したと捉えることが出来る。なんだかんだで、不動はカンフル剤として出てくるからな。

「監督から伝言だ。鬼道が持ち込めつてよ」

「……お前も見ていただろう。俺の動きは全てファイディオに読まれてしまう」  
「だったら、お前にもやつ動きが読めんだろ？」

「……何？」

「本当は気付いてんだろ。ファイディオのプレーが自分に似てるってよ」

「……やっぱ、あれ鬼道のプレーに似てたのか」

フィデオの動きに親近感が湧いたのは、いつも近くで見ている鬼道のプレーが重なっていたからか。

確かに、互いが似た動きをするのであれば、互いの動きを読むことが出来る。フィデオが鬼道の動きが読めるのなら、鬼道もまたフィデオの動きを読むことが出来る。

つまり、カテナチオカウンターを破ることも出来なくはない。

佐久間からのスローイングで試合再開。ボールは不動に渡り、不動と共に鬼道も前に上がる。

「行けッ、鬼道！」

不動から鬼道へ。そのまま鬼道は一人で攻め上がる。

しかし、オルフェウスは容赦なくカテナチオカウンターの体勢に入る。鬼道は再び、オルフェウスの選手に包囲された。

「来い！何度来ても、カテナチオカウンターは破れないぞ！」

「勝負だッ！」

鬼道がフィデオに対してフェイントを仕掛ける。フィデオもそれに対応する。しかし、先程とは一転してフィデオの動きに鬼道は付いていくことが出来ている。

相手の一手、二手先を読み合った競り合いが勃発する。



「どうだッ！」

競り合いの末に、フィディオが鬼道からボールを奪い取る。

「まだだ！」

しかし、鬼道は粘ってフィディオから再びボールを奪い返して抜き去る。

「そこだッ！」

鬼道は勢いに乗ったままオットリーノの横を抜いていく。

鬼道が一人で、鉄壁のカテナチオカウンターを打ち破った。

「ヒロト!!」

鬼道から基山へのセンタリング。

「流星ブレードッ!V2!!」

基山のダイレクトシュートがブラージへと向かっていく。

「コロッセオガード!!はああアッ!!」

ブラージはコロッセオガードを繰り出す。しかし、流星ブレードはいとも簡単にグラウンドの外へと弾き出されてしまった。

「危ねえ……」

「……まさか、カテナチオカウンターが破られるなんて……」

……で前半終了。依然変わらず2-2の同点のまま。激しい接戦は後半に流れた。

「点が入らなかつたとはいえ、カテナチオカウンターを破つたことが大きいな」

「この調子で行けば勝てる！」

「…それはどうかな。やつらは試合中に、あれほどの必殺タクティクスを完成させて来たんだ。どんな力を秘めているか計り知れないぞ」

鬼道の言う通りだ。あんな難易度の高い必殺タクティクスを本番で完成させてきた。それに、オルフェウス自体個々のスペックが高い。カテナチオカウンターを破つたからといって、油断は一つも出来ない。

俺達がハーフタイムで休憩をしていると、スタジアム内の歓声が徐々に大きくなる。何事かと思つて周りを見渡すと、スタジアムの入り口である階段から現れる。その人物は、オルフェウスのベンチへと歩み寄る。

「キャプテン！」

「キャプテン!!」

オルフェウスの選手は、その人物のことをキャプテンと呼ぶ。オルフェウスのキャプテンはフィディオではなく、あの栗松と同系統の頭をした人物だということなのか。

「…中田。ヒデナカタか？」

「初めまして。ミスターK」

「キャプテンでありながら、随分長い間チームを離れていたな」

「チームのためです。でも、自分の考えた以上の成果ですよ。貴方のお陰でね」  
「フツ……」

話から察するに、彼、ヒデナカタという人物は自分が抜けることでオルフェウスの選手達を強く育てようと考えていたということになる。

不意に、ヒデナカタが後ろに視線を向ける。ミスターK共々、俺達もそちらに視線を向けた。そこには、俺達同い年くらいの外国人の少年と、幼い少女がやって来ていた。

「ルシエ……どうしてここに。中田、どういうつもりだ。ルシエをここに連れてくるな  
ど」

ミスターKは、どことなく焦った様な雰囲気ヒデナカタに問うた。

「お言葉ですがミスターK。ルシエの願いなんです。目が見えるようになったら、最初  
に貴方のサッカーを観たいってね」

「だからといって、こんなところに……」

「……これが最後なんじゃないんですか？ 今日を最後に貴方の試合は観られなくなる  
……違いますか？」

「ツ……」

「この一戦が、ミスターKの最後の試合？ それは一体……」

「前半の戦いを見て分かりました。貴方はもう過去の貴方ではない。今日で全てを償う

つもりではないですか?…もう自分から逃げることはない。自分の犯した罪からも……」

最後の試合とは、そういうことか。陽乃さんや鬼道に聞いた話では、ミスターKこと影山は幾度となく人に危害を加え、あまつさえ殺人まで行なった。それらを全て償うために、今日の一戦が最後だったことなのか。

「貴方はサッカーへの恨みを晴らすための手段を選ばなかった。その手に掛かって多くの選手がチャンスを奪われ、ルシエはその策略の中で怪我を負ってしまった。サッカーとは何も関係がないというのに。そのことが心のどこかで引つかかっていたんです。だから貴方はルシエを見舞ったんですよ。そして彼女の目の病気を知った。その手術には莫大な費用がかかることも。貴方はルシエの怪我が治ってからも手紙を送り続けた。治療費と共に」

お金を送っていた……?」

そういえば、陽乃さんも似たようなことを言っていたな。Rという人物にお金を送り続けていると。

R………つまり、ルシエって子のことだったのか。ミスターKの巻き添えを食らったルシエには目の病気があること、そしてその手術費に莫大な費用が必要なことを知った。

だからミスターKはルシエが手術を受けられるように、お金を送っていたということなのか。

「どうしてそんなことを？」

「……ただの気まぐれだよ」

「……そうでしょうか？……ルシエのために何かしてやることで、少しでも救われていたんじゃないですか？ 闇の世界に入り込んでしまった貴方自身の心が……貴方の心は闇の世界から抜けたがっていたんです」

ミスターKも一人の人間だ。ルシエのことも、自身が今まで犯した罪も、きつと彼は悩んで、苦しんで、足掻いたんだろう。その結果が、最後の試合だということなのだ。

「……お前はそんなことを調べるために旅に出ていたのか？」

「いえ。旅の途中、偶然知ってしまっただけです。俺はそんなお人好しではありませんよ」

ヒデナカタが話し終わると、ルシエはミスターKのそばに歩み寄った。

「おじさん？」

「……ルシエ……」

「その声……やっぱりおじさんだ！」

「……見えるのか？」

「うん！おじさんのお陰で私の目、見えるようになったんだよ！」

「…そうか。良かったな」

「おじさん、ありがとう！」

ルシエは更にミスターKの近くに寄ろうとすると、ミスターKは手で彼女を静止する。

「ルシエ。私は君に感謝されるような人間ではない」

「そんなことないよ！おじさんは私に手術を受けさせてくれた！手紙で励ましてくれたもの！おじさん、ありがとう！私、サッカー勉強する！おじさんといっぱい話したいから！」

ルシエは満面の笑みで微笑んだ。

「…私には試合がある。話は後だ」

「うん！じゃあ後で！応援してるから！」

ルシエはミスターKにメールを送り、外国人の少年と共にグラウンドから去って観客席へと戻っていった。

「……ハーフタイムも終了だな」

俺達は後半戦に向けて、再びグラウンドへと入っていく。オルフェウスはここでメンパーチェンジ。

M Fのジャンルカに代わって、ヒデナカタ。本当のキャプテンであるヒデナカタがジャンルカのポジションに入る。

「…ヒデナカタか…」

彼のことは知らない。しかし、一目見ただけですぐ分かった。

彼は強い。恐らく、この場にいる誰よりも。そう思わせるような風格が、彼から溢れ出している。

激闘の後半戦が、いよいよ始まろうとしている。

## ミスターKの最期

オルフェウスのキックオフで後半戦が開始。すぐにMFのヒデナカタにボールが回る。

すると、ヒデナカタからジョルジョ、ダンテ、ラファエレと続け様にダイレクトパス。正確なパスもさることながら、空いたスペースを見つけてそこに走り込むポジショニングもいい。

これが前半戦で戦ったチームかって思うくらいだ。これだけチームが変貌したのは、あの男、ヒデナカタが加入したからに違いない。

俺達はオルフェウスのパス回しに手を出せずにいた。

ボールはフィディオに渡る。綱海と吹雪がフィディオに対して詰めるが、ヒデナカタが走り込んでくる。フィディオはヒデナカタにボールを繋げる。

ヒデナカタには壁山と飛鷹がディフェンスに入るが、ヒデナカタのキラーパスで奪うことが出来ず、再びフィディオにボールが渡った。

「オーデイン……ソオード!!」

フィディオの必殺シュートのオーデインソードが円堂に切っ先を向ける。



「イジゲン・ザ・ハンドオツ!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドで迎え討つ。しかし、またもオーディンソードに破られてしまう。ゴールに入るか入らないかという瀬戸際で、

「くツ!!」

ゴール前まで戻ってきていた鬼道がブロック。ゴールポストの上に当たって下へと跳ね返り、円堂がなんとかそれを止める。

「助かったぜ鬼道!」

「…負けるわけにはいかないからな…!」

なんとか防いだが、ヒデナカタが加入しただけでオルフェウスが見違える様に強くなっている。

円堂から前へ前へとボールを繋ぐ。そして、ボールの保持者は鬼道に。鬼道が攻め上がっていくと、再びオルフェウスは必殺タクティクスの体勢に入る。

「カテナチオカウンター!」

ファイディオが鬼道からボールを奪い取ろうとするが、鬼道は完璧にファイディオの動きを見切つて躲した。

しかし。

「なッ!」

フィディオを躲した先には、ヒデナカタが走り込んできていて、鬼道からボールを奪ってラファエレに繋げた。

ヒデナカタが加入したことで、カテナチオカウンターまでもが強化されている。

綱海と吹雪がラファエレに向かって走るが、ヒデナカタへとボールを戻す。

「行くぞッ！」

俺はヒデナカタに向かって突進。しかし、俺はあっさりヒデナカタに躲されてしま  
う。

「え、エラシコかよ……」

サツカーのテクニックとして有名なエラシコ。ヒデナカタのそれは尋常じゃないく  
らいのスピードだった。

プロのサツカー選手みたいな動きじゃねえか。

ヒデナカタはそのままゴール前まで走っていく。ヒデナカタは一度止まり、ボールに  
強烈なバックスピンをかけてボールを浮かせる。

「ブレイブ……シヨオオットオツ!!」

浮かせたボールにヒデナカタがオーバーヘッド。青いオーラを纏ったシュートが円  
堂へと向かっていく。

「イジゲン・ザ・ハンドツ!!」

円堂も負けじとイジゲン・ザ・ハンドを繰り出す。

しかし、イジゲン・ザ・ハンドは簡単に破れてしまい、ゴールの中に入ってしまった。オルフェウスが逆転して2―3となる。

「……すごいシュートだ……でも、次は止めてみせる！」

チーム力が格段に上がったオルフェウス。

しかし、1点を取られたからといって諦めるようなイナズマジャパンではなかった。試合が再開し、鬼道にすぐボールが渡る。

「カテナチオカウンター！」

鬼道はフィディオを躲すが、その先には必ずヒデナカタが待ち構えていて、ボールを奪われてしまう。俺達は絶え間なく攻め上がるが、オルフェウスに尽く防がれてしまう。

タイムアップまで刻一刻と迫る。このままでは、イナズマジャパンが負けてしまう。ボールは再びヒデナカタに渡る。

今ここでシュートを打たれてしまつては、ダメ押しになる。俺はヒデナカタに挑むが、今度はヒールリフトを仕掛けて躲されてしまう。

「クッソー！」

ヒデナカタはブレイブショットの構えに入った。

「ブレイブ……シヨオオットオツ!!」

容赦のない一撃が打ち込まれる。

「必ず止める!そして、みんなに繋げるんだ!!」

円堂は三度イジゲン・ザ・ハンドの構えに入る。

「イジゲン・ザ・ハンド!改ツ!!」

なんと円堂はこの土壇場でイジゲン・ザ・ハンドを進化させてきた。この進化に、ヒデナカタも驚いている。

ボールは段々と逸れていき、ゴールポストに直撃する。直撃したボールは前に跳ねていき、ラファエレがヘディングで決めようとするも、綱海がヘディングでクリア。

「行けえツ!壁山!!」

綱海から壁山にボールが渡る。

「このボールは渡さないっス!」

壁山から飛鷹に、飛鷹から吹雪に。イジゲン・ザ・ハンド改で死守したボールを、オルフェウスに渡さぬ様にパスを繋げていく。

ボールは豪炎寺に渡る。豪炎寺にはヒデナカタが詰めて行くが、豪炎寺が鬼道へとヒールパス。

鬼道がボールを受け取って、攻め上がっていく。しかし、またしてもオルフェウスの

選手に囲まれてしまう。

「カテナチオカウンター!!」

鬼道はフィディオのディフェンスを躲すが、再びヒデナカタが立ちはだかる。が、しかし。

「鬼道!」

「フツ!」

「行くぞ!」

鬼道の背後から佐久間と不動が現れて、三人がかりでついにヒデナカタを抜き去っていく。三人はそのまま必殺技の体勢に入った。

「皇帝ペンギンツ……!! 3号オオオツツ!!」

鬼道、佐久間、不動の渾身の一撃、皇帝ペンギン3号がブラージに襲いかかる。

「コロッセオガード!! はああアアツ!!」

ブラージも全力のコロッセオガードで皇帝ペンギンにぶつかった。しかし、コロッセオガードに徐々にヒビが入り始め。

「ぐああアアツ!!」

コロッセオガードを粉砕してゴールに叩き込み、点をもぎ取った。

3-3。これでオルフェウスと並んだが、残り時間がもう残されていない。

オルフェウスのボールから、試合が再開。

「もう一度突き放す！」

「決勝点を取る！」

俺達イナズマジヤパンとオルフェウスは、決勝点を取るために激しいプレーを繰り広げた。

そして、ここで試合終了のホイッスルが鳴り響いた。3―3の引き分けで、オルフェウスとの試合を終えてしまった。

「はあッ……はあッ……」

勝てなかった。この試合に勝たなければ、イナズマジヤパンは決勝トーナメントに進出出来ないというのに。

「勝てなかったっス……」

「はあ……はあ……クツッお……」

「チームを離れていった人達の思いを、僕達は背負っていたのにッ……」

「悔しいね……！」

「くツ……」

みんな、とても悔しい思いをしている。

「あいつに勝って……」

「予選突破を、決めたかった……！」

ここまで悔しいと思ったのは一体いつ以来だろうか。アルゼンチン戦で敗北した時も悔しい思いはしたが、それ以上だ。

「……小町に、なんて言われるかな……」

まだ決勝トーナメントに行けなくなつたわけではないが、明後日のアメリカ代表ユニコーンと、アルゼンチン代表ジ・エンパイアの一戦の結果で決勝トーナメント進出チームが決まる。

しかし、ユニコーンが負けな以上、俺達の進出がなくなる。このまま、俺達は終わりのなのかも知れない。

「……胸を、張ろうぜみんな！」

そんな中、あの人物がみんなに声をかけた。

それは勿論、サッカーバカの円堂だ。

「俺達、やるべきことは一生懸命やったんだ！」

この円堂の一言が、周りを元氣付けた。

俺達は立ち上がり、試合終了の整列を行なつた。

「いい試合だったな！」

「ああ。心から楽しめたよ」

「フィディオ、感謝する。本当のあの人を引き出してくれて……」

「……そうしなければならなかったんだ。チームのためにも、俺のためにも」

俺達は握手を交わして、ベンチに戻っていった。

音無と目金、グループAの試合結果を調べている。

「待つしかないなんて……」

「全ては明後日……。明後日行われるユニコーンの試合結果次第です。この引き分けてオルフェウスは勝ち点8でグループ1位が決定。イナズマジヤパンは勝ち点が7。ユニコーンが勝てば、同じく勝ち点7。その場合、二つのチームの得失点差で決まります。ですが、イナズマジヤパンは大量得点差で勝った試合が一つありません……」

悔しい顔を浮かべるみんな。そこに、久遠監督が話を始めた。

「勝たなければならぬ試合に勝てなかったな。それがお前達の現実だ。……だが、誰に恥じることもない、最良のプレーだったと言えるだろう。……後は、結果を待て」

「はい!!」

俺達が今出来ることは待つことだけだ。緑川風に言えば、人事を尽くして天命を待つってことだ。

「……フィディオ。そして鬼道。お前達は本物だ。私も、お前達の様になりたかったのかも知れない」



「…貴方なら、なれますよ」

すると、コンドルスタジアムの最下層でパトカーのサイレンが聞こえて来る。

「まさかッ、自分で!?!」

「…私にとつてこれが最後の試合だ。楽しかったよ」

すると、鬼道は不意にいつも付けているゴーグルを取り外した。初めて、鬼道の素顔を見た気がする。

「…久しぶりだな。お前の素顔を見るのは」

「これは帝国学園にいた時、貴方がくれたものでしたね」

「お前には、もう必要ないか」

「いえ。これからも使わせてもらいます。これは俺のトレードマークですから」

そんな穏やかな会話をしていると、スタジアムに鬼瓦刑事を含めた警察と雷門夏未、そして陽乃さんがやってくる。

「……なんているのあの人。」

「ミスターK、いや、影山零治。傷害罪及び、国外逃亡の容疑で逮捕する」

ミスターKは警察に連行され始める。ミスターKは止まり、フィディオと鬼道にこう告げた。

「…私がこの言葉を口にするのではないと思っていたが………ありがとう。フィディオ

才……そして鬼道」

「……監督……」

「影山……総帥……」

ミスターKは再び連行され始めた。そんな中、俺は陽乃さんに話しかけられる。

「ひやつはろー比企谷くん。試合、お疲れ様だったね」

「……何しに来たんですか、あなた」

「まあまあそうツンツンしなーい。私、今鬼瓦刑事と手を組んでるの。何度か話してるでしょ？ミスターKのこととか色々。警察ってやつぱり頼りになるね」

すると、話の展開が読めない雪ノ下が、俺に尋ねてくる。

「比企谷くん。何のこと？」

「まあ雪乃ちゃんにも後から話すよ。とりあえず、ミスターKから話を聞かなきゃね」

連行されるミスターKに、鬼瓦刑事は問い詰める。

「待て影山。お前を操っていたのは誰だ？お前が40年前にバスに細工し、ここまでの全ての陰謀を企むことが出来たとは思えん。お前に力を与え、闇に引き込んだ人物がいるはずだ」

「……そこまで調べていたか」

「今自白した方がいいんじゃない？どうせ後で言うことになるんだし」

ミスターKはその場で止まり、ゆっくりと白状していった。

「……いいだろう。確かに私に力を貸し、苦しみから解放すると言う人物がいた。私はその言葉を信じたが、結局は40年間苦しみ続けた……。その人物は外国から日本に組織を送り込み、日本のサッカー界を支配しようとしていた……」

「で？それは誰なの？」

陽乃さんはミスターKに問うた。ミスターKは、その人物を名乗り上げた。

「……その男の名は……」ガルシルド・ベイハン」

ミスターKの口からはつきりと聞いてしまった。ミスターKを操っていたのは、ブラジル代表ザ・キングダムの監督でFFI大会運営委員長のガルシルドであった。

「……ガルシルドには気を付けろ。やつは闇は底知れぬ……」

ミスターKはそれを最後にして、スタジアムから姿を消した。鬼瓦刑事や雷門、そして陽乃さんはミスターKの連行に付いて行った。

このFFI、何やら波乱が巻き起こりそうだ。

俺達もコンドル島を後にして、自分達の宿舎へ戻った。

—————

オルフェウスとの一戦から次の日。

宿舎のモニターを点けると、衝撃のニュースが流れ込んできた。

「昨日、イタリア代表チーム、オルフェウスの監督であるミスターK氏が、事故により亡くなりました。ミスターKこと影山零治氏は、元帝国学園サッカー部の監督であり……」

そのニュースに円堂が、鬼道が、佐久間が、不動が特に驚いていた。この4人は特に、ミスターKに思い入れがあったからだ。

「鬼道……大丈夫か？」

「……影山……総帥……」

円堂が鬼道に尋ねるが、鬼道は何も答ええない。ずっと、ミスターKの名前を呟いていただけだった。

「……佐久間。鬼道を部屋に連れて休ませてやれ」

「……分かった」

俺はそう伝え、佐久間は鬼道を部屋に連れて行った。折角和解が出来たというのに、すぐに死亡……受け入れられないのも無理はない。

とはいえ、事故とは考えにくい。

大会運営委員長のガルシルドなら、昨日の試合を観ていたに違いない。おそらく、ミ

スターKが連行するところも。

証拠隠滅のためか、見限ったのかは分からないが、事故に見せかけて殺したっていうのが妥当な考えだが……。

真実はもう、誰にも分からない。

## 最後のノートと伝承の鍵

オルフェウスとの一戦から二日後。俺達はモニター前に集まって試合を観ていた。アメリカ代表ユニコーンvsアルゼンチン代表ジ・エンパイアの一戦。自力進出のなくなった俺達は、固唾を飲んで観ていた。

「……鬼道、大丈夫なのか？」

「……ああ。心配かけてすまなかったな。もう大丈夫だ」

ミスターKが亡くなって一番ショックを受けたのは鬼道だというのに。中々メンタルが強いじゃないか、こいつ。

俺は気を取り直して、モニターに視線を向ける。デイランとマークが必殺技の体勢に入った。

「ユニコーンブースト!!」

二人の強烈なシュートがゴールに迫る。

しかし。

「アイアン……ウオオオール!!」

テレスのデイフェンス技である、アイアンウォールを繰り出す。ユニコーンブースト

は威力がなくなってしまう、テレスに完璧に止められてしまう。

再度、ユニコーンは果敢に攻め上がるが、ジ・エンパイアの鉄壁のディフェンスが崩せない。一之瀬の欠場が、だいぶ影響しているに違いない。

ボールはマークに渡る。マークから土門へとパスを出す。

しかし、ここで試合終了。1―0でジ・エンパイアが逃げ切った。つまり、ユニコーンは負けたということだ。

「ユニコーン負けちゃったっす……」

「ということとは……」

「アメリカに勝ち点が付かない！」

しかし、円堂の表情は曇ったままだ。決勝トーナメント進出はしたものの、それは自力進出ではなくユニコーンが負けた結果だからだ。素直に喜んでいいのか、分からないだろう。

「…俺達は前に進む。敗れたチームの思いも受けて、進み続けるだけだ。そうだろ、円堂」

「…ああ。…よし、みんな！決勝トーナメント進出だ！一之瀬や戦ってきたみんなの思いも一緒に、全力の上にも全力で行こう！決勝トーナメントまで後4日！てっぺん目指して特訓だ！」

「おう!!」

遂に決勝トーナメントか……。なんだか、実感が湧いてこないな。

「比企谷くん。頑張つて」

「八幡、頑張るんだぞ」

「…おう。サンキュな」

雪ノ下と八神から激励を受ける。イタリア戦前から少し怖かったのだが、普通に話す分には大丈夫な様だ。

俺達は決勝トーナメントに向けて、特訓を始めた。

—————

俺達が特訓していると、円堂に招集をかけられる。何故か、雷門も一緒にいた。

なにやら大事な話だそうで、特訓は一時中断して監督共々集まった。話を聞くと、円堂のお爺さんの最後のノートが見つかったらしい。

「冬花、見覚えあるか？」

円堂がノートを開いて、久遠に見せる。

「これは……。パパが見ていたノート。パパに勇気をくれたノート」



イタリア戦前、久遠が記憶を戻したらしく、実の父親は監督ではなく別にいたらしい。その時に、久遠の本当の父親が円堂のお爺さんや影山と関わりがあったらしい。

「…勇氣……」

「パパはこのノートを、何度も何度も読み返していたわ。私が読めるのは、パパがそうやって声に出して読んでくれていたおかげ。私、パパがこのノートから心の強さを貰えるって言ってたのを覚えてる」

「心の強さか……」

久遠のお父さんはよくあんな汚い字を読めるよね。円堂のお爺さん試験とか大丈夫だったのかよ。字の汚さで0点とか普通にあり得そう。

「で、そのノートには何が書かれてあるんだよ？」

「裏ノートに書かれてあった究極奥義を超える、超究極奥義とか？」

「…それは、今フユツペが言った通りなんだ」

「はあ？それじゃ分かんねえぞ？」

「だから、心」

説明を省きすぎだろお前は。由比ヶ浜でももう少しきちんと説明するぞ。

「…要するに、そのノートには必殺技は書かれてない。心を強くする何かしらが書かれている。そういうことなんじゃねえの知らんけど」

「ああ。比企谷の言う通りなんだ。ここに来るまでに目を通したけど、必殺技のアイデアは書かれていないんだ。この中には、俺達がこれから強くなるために必要なことが書かれているんだ。……じゃあ、読んでみるぞ」

円堂はノートに書かれている内容を音読していく。

「技を生み出す根源は心の強さである。新たな技を生み出すには、新たな心を身につけること。……分かるか？」

「まどろっこしいなあ。見せてみる」

綱海が円堂からノートを取り上げ、中身を拝見するが。

「うおッ………すまん、円堂。任せた」

ですよねー。

そりや普通そんな反応するわな。あんなん外国語より難しいぞ。多分翻訳機があっても読み取れない。

何それもはや異世界の言語じゃん。

「よし、じゃあ続けるぞ。心の其の一。どんな時も諦めない”ガムシヤラガツツ”」

「何それ？」

「心の其の二。どんなに強い敵も恐れない”タチムカウユウキ”。心の其の三。大切なものを守りたいと思う”ソコナシノヤサシサ”。心の其の四。仲間の全てを信じられ

る”ゼツタイテキシンライ”。心の其の五。どんな事態にも動じない”コオリノレイセイ”。心の其の六。隠された真実を見抜く力”ミスクシンガン”。心の其の七。人の過ちを許す心の強さ”ユルスツヨサ”。心の其の八。他人の喜びと悲しみを分かつ”ワカチアウナミダ”。心の其の九。高き志を持つ者だけが見る”ハテシナキユメ”。心の其の十。自分の力を信じる心”マヨワナイジシン”。心の其の十一。どん底でも消える事のない”センシノホコリ”。……以上だ」

だいぶ長かつたな。

しかし、この一一個が心の強さになる、ということなんだろう。

「…比企谷くんはどう思う？自称国語三位の貴方から見ても」

「自称じゃないし。つかお前の方が頭良いんだから分かるだろ。……ま、確かに心の強さって言われたら分からなくてもないわな」

「分かるのか？」

「要はこれらを意識して、更に強くなりましょうってことなんじゃねえの？例えば……ガムシヤラガツツ、だったか？あれを意識しておけば、いざピンチになっても最後まで戦い抜くことが出来るってことなんじゃねえの？」

しかし、中々奥が深い内容だった。

これは意識の問題だ。これらを意識するかしないかで、自分が発揮する力が違ったり

するのだろうか。世界の頂点を獲得するためには、これらを意識して戦い抜くことが必要なのだ。

「…比企谷の言う通りかも知れない。なんせ、じいちゃんのノートなんだ。今までだって力を貸してくれた。今度だって、きっと俺達の力になる！」

「おう!!」

俺達は再びグラウンドに行き、特訓を始めた。11個の心を身につけて、準決勝、決勝を戦い抜いて世界の頂点を目指す。

ここまで来てしまったものは、もう後戻りなど出来ない。

「おいお前さん。お前さんに客だぞい。宿舎の食堂で待たせとるからな」

しばらく特訓をしていると、俺は古株さんに話しかけられる。俺に客だと言われて、嫌な予感がした。

まさか、陽乃さんとかじゃないだろうな……。

「比企谷くん。どこに行くの?」

「宿舎の中だ。なんでも客だとよ」

「……分かったわ。なら、私も行くわ。もし姉さんだった場合なら貴方を近づかせるわけにはいかないから」

「……勝手にしろよ」

特訓を中断して、俺と雪ノ下は宿舎の中へと戻っていった。宿舎に戻り、食堂の中に向かうと。

「あ、エイトだ」

「久しぶりねエイト！」

陽乃さんではなかったのが幸いだが、一方で疑問が浮かぶ。何故この島に、この宿舎に、クララやレアン、それにアイシーがいるのだ。

「…確か、比企谷くんの知り合いだったわね」

「あ、ああ…。何しに来たのお前ら」

「何って、応援？」

「あ、うん。いや、まあそれはいいわ。どうやって来たんだ？」

「福引きでライオコット島行きの手ケット当ててさ。しかも三枚」

「当てすぎだろ。お前らどんだけ運良いんだよ。不正行為でも使ったのかこいつらは。」

「まあ細かいことはいいじゃない！それより、私と勝負よ！」

「杏、落ち着きなさいよ。あ、そうだ。エイトに差し入れよ」

アイシーは、大きなエナメルバッグからマツカンを一ダース取り出した。

「ま、マツカンだと……!?!」

「そう。この間兄さんと千葉に帰ってね。決勝トーナメント進出のお祝いだと思ってい

いわ」

「マジかサンキュ」

俺はアイシーからマツカンを受け取った。マツカンが底を尽きて困っていたのだ。1ダースだけでもありがたい。これからアイシーに忠誠を誓おう。

「あ、そうだ。島巡りしてた時、雷門の選手がいたよ。名前忘れたけど……関西弁の女の子と、青い帽子を被った女の子」

「マジか。あいつらまでいるのかよ」

おそらく、あの二人だろう。なんでちよつと懐かしい人物がドンピシャで集まってくるのかな。

「……比企谷くん。来なさい」

俺は雪ノ下に強引に連れて行かれ、一度食堂から出て行く。

「前から思っていたのだけれど、あの三人は誰？」

「……俺がエイリアにいた時に一緒だったやつらだ」

「なんだかとても親しげな様だけれど、彼女達に何か特別な感情でも持っているの？」

雪ノ下は黒く、濁つた眼光でこちらに向ける。

「……別に、なんでもねえよ。単なる知り合いってだけだ」

「……そう。分かったわ」

そう納得して、彼女は食堂へと戻っていった。俺も雪ノ下の後に食堂に戻る。

「ねえ、エイト。今練習中でしょ？見に行ってもいい？」

「…別に外から見る分ならいいんじゃないやねえの」

「じゃ、見に行こ。杏、愛。行こ」

クララはレアンとアイシーを連れて、宿舎から出て行く。俺と雪ノ下も、後から付いていく様に出て行った。再びグラウンドに戻ると、クララの言う通り、あいつらがいた。

「あ、比企谷やん！久しぶりやなあー！」

「…おう。久しいな。浦部、財前」

「相変わらず暗い顔してるよな、お前！」

「ほっとけ」

以前地上最強のメンバーとして戦っていた財前と浦部が、ライオコツト島にやって来ていた。どうせ来るなら小町とか戸塚が良かった。

「…八幡。何故こいつらがいる」

八神がクララ達の存在に気付き、俺に尋ねてきた。

「俺にもよく分からん」

とりあえずクララ達のことを掻い摘んで説明した。八神は納得いかないという顔だったが、来ちゃった以上は仕方ない。

とはいえ、財前や浦部が来たことでまた騒がしくなるな…。

俺はそう思っただけで、浦部の左手首に注目した。

「…浦部、お前そんなブレスレット付けてんのかよ」

「そんなってなんや!?!これはな、ただでもろたんや!塔子も持つてんねんで!」

「だから私は趣味じゃないってこんなの…」

財前はお土産が沢山入っている紙袋から、浦部が付けているブレスレットの色違いを取り出した。

「…私も、好みじゃないかも」

「なんだか変なブレスレットだね」

木野もクララも、あまり惹かれない様だ。

しかし、たった一人。この紫色のブレスレットに惹かれた人物が出てくる。

「私はこれカッコいいと思うけどなあ……」

「マジ?..」

紫色のブレスレットに惹かれたのは音無だった。音無は財前からブレスレットを受け取り、左手首に付ける。

「そんただで貰ったもんよく付けれるな……」

「ええー!?!カッコよくないですか?」



「後悔するからやめとけ」

ただより高いものはないって言うが、実際ただほど面倒なことはないのだ。

というか、厨二病が怠っている人間が付けそうなブレスレットだ。材木座に渡してやろうかな。超絶似合わんと思うけど。

「ちえつ。折角似合うって褒めてくれるかなって思ってたのに……」

音無はぶーぶー文句を垂れ流しながらブレスレットを外そうとした。すると、音無の様子がおかしくなる。

「あ、あれ？」

「どうしたの？音無さん」

「……取れないんです」

「え？」

「リカ、そっちは？」

円堂が浦部に尋ねる。浦部もブレスレットを外そうとしているが、取れる様子が全くない。

「何が”伝承の鍵”だよ！とんだ不良品じゃん！」

「……伝承の鍵ですって？」

財前が妙な単語を発して、雷門がそれを復唱する。

「あの爺さん達はそう言ってたよ。なんだっけ、天と地の王がどうのって……」

「夏末、知ってるのか？」

「……もしかするとそれは……ライオコット島に伝わる魔王伝説と関わりがあるかも……」

「魔王伝説!?!」

魔王伝説……?!

「雪ノ下。魔王伝説って……」

「……ええ。私が以前説明したあの伝説よ」

雪ノ下が話してくれた、ライオコット島に伝わる魔王伝説。それに関連しているであろうプレスレット、伝承の鍵。

その伝承の鍵とやらが、たとえレプリカの不良品だったとしても、外れないのは変だ。……となると、これマジの鍵なのか？

## グループAのオールスター

俺達は宿舎に戻り、雷門から魔王伝説の話が聞かされる。ライオコット島に向かう途中に雪ノ下から聞かされた話と、ほぼ同じ内容だった。

「今でも、天界と魔界の民っているのかな？」

「あくまでも伝承よ。でも、マグニード山に昔から住んでいる先住人の少年達には、天界と魔界の力を操ることが出来るとも言われているわ」

何度聞いてもテンプレみたいなファンタジー物語だ。ゲームとかラノベとかでよくあるお話。

「…で、その伝承の鍵のことなんだけど……」

雷門がモニターに、魔王伝説の関わりある画像を映す。千年前に描かれた絵なのだが、その中には天界と魔界の民らしき人物が多数描かれている。

そしてその民の手首には、浦部と音無が付けているブレスレットと同じものが付けられていた。

「…そっくりだな」

「つまり、古代から伝わる本物…?」

「そこまでは分からないわ。レプリカかも知れないし。けど、外れないというのは気になるわ」

「…でもそれ、鍵って感じに見えないけどな……」

ファンタジーな話ならあるあるだろう。この伝承の鍵から考えられるのは三つ。何かの儀式に使ったか、天界と魔界に行くためのものか、自分達が天界の民、あるいは魔界の民だって証明付けるもの。

「まあでも、ウチは気にしてへんで？」

「マジ？」

「別に害があるわけちゃうし、なんちゆうても可愛いやん？それにその内取れると思うでー？」

「取れなかつたらどうする」

「人間が作ったもんやったら外せるに決まってるやん。これ常識やで？な、春奈」

「そうですね！そのうち外れますよ！やつぱりカッコいいじゃないですか、こういうの！」

「お前らお気楽だなあ」

「綱海ほどとちゃうけどな」

お前ら三人はどっかいどっかいだろ。戸部とたいして変わらんぞ。マジっペー。

とはいえ、今の段階では何の害がないのは確かだ。ただ、不良品のレプリカとは考えにくい。かと言って本物だつていうのも怪しい。

もし本物だつたとして、千年前に作られたものが表に出回つてるのも変な話だ。

「じゃ、そういうわけですから、練習です！決勝トーナメントまで僅かですよ！」

「そうやで！勝利の女神が5人も来てんに、優勝せーへんかつたら許さへんで！」

「え、私達も含まれてるの？」

「…どうやらその様ね」

あまり浦部と関わりのないクララ達が、少し動揺している。

ごめんね。浦部のノリがきつくてごめんね。関西人は本当、ノリと勢いが凄いわ。俺なら絶対引くレベル。

—————

気を取り直して、俺達は再び特訓を始めた。浦部やレアン達などがやってきたおかげで、一段と活気付いている。それだけではなく、決勝トーナメントに出られるという事実が、みんなのテンションを上げている。

「ほらほら気張らんかい！」

「エイト！何よそのドリブル！貴方鈍ったんじゃないの!？」

前言撤回。活気付いたっていうか騒がしくなったただけだ。浦部と同じくらいにレアもクソうるせえ。誰か日本に帰してくんないかな。

しばらく特訓を続けていると、グラウンドの入り口に見覚えのある少年が練習を見ていた。

「ああー!!イタリアの白い流星じゃん!!」

「フィディオ！」

「マモル！」

イタリア代表オルフェウスのストライカー、フィディオが登場する。今更敵情視察か？

「なんだよ突然！あ、そうだ！一緒に練習しないかー!？」

「いいね！ボールをくれ！」

円堂は手元のボールを思い切りフィディオに向かって蹴り上げた。フィディオは大きくジャンプして、ボールをトラップ。すぐさま、別方向にボールを蹴り込んだ。

「え?」

フィディオが蹴った先には、アルゼンチン代表ジ・エンパイアのキャプテンでアンデスの不落の要塞と呼ばれる人物が現れ、ボールを受け取る。

「テレスー！」

テレスがボールを受け取り、再び別方向にボールを蹴り上げる。そのボールに合わせて、今度はアメリカ代表ユニコーンのキャプテンが受け取った。

「マークー！」

テレスからのボールを受け取り、ヘディングでまた別方向に繋げる。その先にはユニコーンのストライカーが張り切って登場する。

「デイランー！」

「行くぜッー！」

デイランが大きく上に蹴り上げる。そのボールに合わせ、イギリス代表ナイツオブクイーンの主将がああ技の体勢に入る。

「エクス…カリバアアアアアアッ!!」

「エドガーまで！」

エドガーの十八番、エクスカリバーが円堂に向かって一直線。

「イジゲン・ザ・ハンドッ！改!!」

イタリア戦で進化したイジゲン・ザ・ハンドをエクスカリバーにぶつける。エクスカリバーは段々とゴールから逸れていき、完璧に防いだ。

「…見事だ」

ナイツオブクイーン、ジ・エンパイア、ユニコーン、オルフェウスの主要人物が揃い踏みした。オールスターじゃねえか。

「みんな、どうしたんだ？」

「マモル、彼らはジャパンのみんなに言いたいことがあるそうだよ」

「言いたいこと？」

円堂が復唱すると、エドガーが話を持ち出す。

「まずは、イナズマジヤパンの決勝トーナメント進出決定に、イギリスを代表してエールを送りたい。おめでどう」

「エドガー……ありがとう！」

エドガーは手を差し伸べて、円堂はそれを握り返した。

「思い出さないか？俺達、ここでちよつとしたゲームをやったよな」

マークが懐かしみながら、そう話しかける。

「……ああ。イギリス代表にパーティーに呼ばれた日のあれか」

そういえば心当たりがある。パーティー会場にいつまでも来ない円堂を俺が迎えに行った時、何やらサッカーをしていた。



「エドガーはいなかったけど、ミー達四人の誰がシユートを決めるか、つてね」  
「勿論覚えてるさ！」

「そのおかげでパーティーには随分と汚れた格好で遅刻したんだつたな」

それはもうごめんさい。うちのサツカーバカがご迷惑をおかけしました。後でしつかり叱りつけておくので許して下さい。

「円堂。お前に言いたいことがあると言い出したのは、俺なんだ」

テレスが神妙な面持ちで円堂に話し始める。

「あのゲームをやった日のことを、謝罪したい」

「し、謝罪つて、そんな大袈裟な……」

テレスは円堂に謝罪の理由を、続けて話す。

「GKのお前を無視して戦っていたんだ。ジャパンなんて大したことないつてな。……ところがこの結果だ。みんな驚いてるよ。ジャパンがこれほどの力を秘めていたとは、とね」

「私も、今回の結果を戒めとするよ。世界は広い。まだまだ上がいる。その上にいたのは紛れもなく、君達イナズマジャパンだった」

「アメリカの分も頑張ってくれよ！」

「ギンギンにね！」

「同じグループAを戦った者として、イタリアとジャパンの健闘を祈る」

ナイツオブクイーンやジ・エンパイアなどから、世界から見れば大したことのないイナズマジヤパンを格下に見ていたのに、みんなが力を認めている。

サッカーをすることで、国境を超えた、良い関係が出来上がっている。

…凄えな、サッカーつてのは。

「みんな…ありがとう！ファイディオ！お互い、頑張ろうな！」

「決勝戦で会おう！マモル！」

「おう！」

円堂とファイディオががっしり握手をする。

すると、円堂が思いついた様に提案を持ちかける。

「そうだ！これだけいるんだし、みんなで練習しようぜ！」

「それはいい！」

「やろう！」

「今日は遠慮なく、ゴールに打たせてもらおうとしよう」

まさかの世界の連中と混合で練習するとは。

「はいはい！私やる！」

「面白そうな練習じゃない！私も混ぜなさい！」

「…私も入りたい。エイトと久々にサッカーしたい」

「世界レベルのプレーヤーと練習なんて、これからきつと無いだろうし。私もやりたくな」

血気盛んな女子達なことだ。

「いつそ2チームに分かれて、ゲームをするというのはどうかな」

「でも、誰かは控えになっちゃおうしな……」

「…じゃあ試合の時間を通常より少し伸ばせばいいんじゃないやねえの。普通の試合でさえクソ長いんだし、少し伸ばせば控えに入ってる連中も満足すんだろ。知らんけど」

「あ、それいいな！基礎体力も同時につけることが出来るし！」

よし。これで俺が控えに回って長時間サボることが出来る。

世界の選手と交えて練習？そんなもんでもいいよ。そんなことよりマツカンを飲むことの方が重要なんだよ。

「リカさんや八神さんは行かないんですか？」

「…私は八幡の活躍を見るだけでいい」

「ウチも、今日はイケメン軍団を観賞するんやあ」

財前を始めとした彼女達は、ストレッチを始める。

それにしても、財前やクララ達がサッカーをする姿なんて久しぶりに見るな。

「チーム分けはどうする?」

すると、目にも留まらぬ速さでエドガーとフィディオの前に赤面した浦部が現れる。

「そら勿論くじ引きやあん!」

浦部曰く、赤と白の2色を用意した棒を二人が同時に引いて、赤組の人と白組の人に  
分けて試合をするとのこと。

まずは、G Kの円堂と立向居が引くことになった。

「白です!」

「俺は赤組だ!」

その後、俺達は続いてくじを引いていき、赤組と白組に分かれる。俗に言う、ドリ  
ムマツチが始まろうとしていた。

しかし。

「……暗いな」

先程まで暑いくらい晴れていたのが、今では雨が降りそうな程の暗雲になりつつあつ  
た。

……マジで嫌な予感がするな。

## 天魔襲撃

チームは分けられて、俺は白チームとなった。

同じチームには、鬼道や豪炎寺に宇都宮、不動に佐久間。それに綱海と飛鷹と立向居。そして、レアンやデイラン、マーク、テレスが一緒となった。

対して赤チームは、円堂を筆頭に、染岡や風丸、基山と吹雪。壁山と木暮と土方、財前。アイシーやクララ、そしてフィディオとエドガーだ。

「面白くなりそうじゃないか！」

「ジャパンのみんな、よろしくな」

「おう！こつちこそよろしくだ！」

「今日の試合、いい思い出になるっス！」

みんな、これから始まる一戦を楽しみにしている。俺は控えてサボれると楽しみだつたのに……。

「…序盤から出ななきゃならないのね」

「ていうか、なんで貴方と一緒にのチームなのよ。私、エイトと戦いたかったんだけど」

「俺に言うなそんなこと」

俺達の控えには佐久間と飛鷹だ。試合始まってすぐに変わってもらおうかな。

「さあみんな！決勝トーナメントに向けて、気合入れていくぞ！」

「おう!!」

白組からのキックオフで、試合が始まろうとしている。

「白組！ギンギンに行こうぜ！」

試合開始のホイッスルが鳴り響く。するとその瞬間、ゴロゴロと雷の音が小さく鳴る。

今日一日はずっと晴れの予報だった筈だが……。

「構うもんか！雨だろうがなんだろうが関係ねえ！練習だ練習！」

するとピカッと光り、雷の音も先程より強く鳴り響いた。

「……帰った方がよくない？」

それでも構わず、試合は始まってしまった。

なんでだよ帰ろうよ。わりと激しい雷だよ？俺達が打たれたらどうすんのよ。髪の毛黄色とかになっちゃうよ？いいの？

ボールはマークから宇都宮に。宇都宮に向かって、財前のチャージ。財前は宇都宮からボールを奪い取った。

「たはっ、やるー!!」

「へへっ！結構やるもんだろ？ファイディオ！」

財前からファイディオへとパス。それを食い止めるために、俺とテレスが向かっていくが。

「きゃあああつ！」

雷の音は未だに静まらない。それどころか、先程よりもっと激しくなっていた。

「どうする？続けるか？」

「うーん……」

「きゃあああつ！！」

試合を中断するかどうか悩んでいると、再びベンチからマネージャー達の悲鳴が聞こえる。

何事かと思い、そちらに視線を向けると。

「な、なんでこんななんたってんの!?!」

「なんなんですか、これ……」

浦部と音無が身につけているブレスレット、もとい伝承の鍵が、何かに反応しているかの様に光り輝く。

「まさか……雷門や雪ノ下が言っていた……!?!」

「そんな……あれは伝説よ……!?!」

「あの爺さん達、絶対怪しかったもん！やっぱり何かあるんだよ！」

すると再び雷鳴。今度は、グラウンドのナイターに天空から一筋の稲妻が落ちて破壊する。

凄まじい爆風と土煙が俺達全員を襲う。

少しして、爆風と土煙が収まると。

「田堂さん!!上!!」

田堂が後ろを振り向いて顔を上げると、ゴールポストの上には妙な格好をした人物がいつの間にか現れていた。その格好はまるで、“天使”。

「なんだよお前!!」

しかし、天使と思われる人物は無視してボールを上には打ち上げる。自身も大きくジャンプし、打ち上げたボールをグラウンドに蹴り落とした。

「うあああッ!!」

「ぐあああアッ!!」

蹴り落とされたボールが地面に着いた途端、先程以上の衝撃が俺達を吹き飛ばす。衝撃が収まり、俺達が立ち上がると、天使は浦部の目の前に立っていた。

動けずに座り込んでいる浦部に、天使は怪しい笑みで見下していた。

「……迎えに来た」



天使が浦部の額に人差し指を優しく突くと、浦部の目は何かの催眠にかかったかのように死んでいた。天使が浦部に手を出そうとすると、

「おい！リカに何するんだ!!」

「人間……邪魔をするなッ!」

天使に向かって走る円堂をボールをぶつけて返り討ちにする。

「円堂!!」

ボールをぶつけられた円堂は腹を抑えて、地面に横たわる。

「……これ以上の邪魔立ては、恐ろしい結末を迎えることになるぞ!」

天使が浦部を抱き抱えながら、円堂に警告する。

だが、ここに来たのは天使だけではなく。

「きやあああッ!」

今度は音無の悲鳴。そちらに視線を向けると、天使とは真逆の真つ黒な格好した人物が現れる。その姿は、「悪魔」の様だ。

悪魔が音無に近づくと、天使が悪魔に向かってボールを打ち込む。悪魔は、それを軽々とトラップした。

「失せろ!……ここはお前達のような邪悪な者どもの来る場所ではない!」

「偉そうに行つてンじゃねエよ!お前こそ消えろ!世界は魔王と魔界軍団Zが支配す

るって、決まってんだよ!」

魔王とか魔界軍団とか言っている。ということは、こいつらガチモンの天使と悪魔……?

「笑止!世界を統べるのは天の輝きのみ。天空の使徒が、今ここでお前を成敗してくれよう」

「天空の使徒だつて……?」

「や、やつぱり、本物の天使と悪魔つてことつスカ……?」

俺達のそんな疑問の眩きに、悪魔が苛立ち威嚇する。

「うるせエンだよ人間共オ!!ガタガタ吐かすとお前らの魂喰つちまうぞオ!!」

「やれるもんならやってみなさいよ!返り討ちにしてやるわよ!」

そんな威嚇に一步も引かないレアンは逆に威嚇し返し、ボールを持って悪魔に向かって蹴り込んだ。

「ザコがア!!調子に乗ってンじゃねエ!!」

レアンのシュートを悪魔はダイレクトで打ち返し、レアンにぶつける。

「きゃああアツ!!」

「れ、レアン!」

レアンはぶつけられた箇所を押さえながら悪魔を憎しげに睨む。クララやアイシー

がレアンの身体を支える。

「騒がしいぞ、不浄の者」

悪魔は天使の静止に鼻で笑い、音無の肩を強引に掴む。

「春奈アア!!」

音無に手を出されたことに、鬼道は怒りを表す。音無を助けようと走っていくが、

「おらア!!」

悪魔によって鳩尾をぶつけられ、倒されてしまう。

このままじゃ、浦部も音無も危険な目に遭う。それだけは絶対に避けなければならぬ。  
い。

「クッソ!」

俺は転がっているボールを、悪魔目掛けて打ち込む。しかし、やはり悪魔には通用しなかった。

「どいつもこいつもしつけエンだよオ!!」

「ぐあアツ!」

悪魔に蹴り返されたボールは、鳩尾の部分に直撃。俺は痛さのあまり、押さええすには  
いられなかった。

「お兄ちゃん!先輩!」

音無がこつちに駆け寄ろうとするが、悪魔はそれを許さず、音無の腕を強引に掴む。「お前は選ばれた……魔界になア」

悪魔に睨まられると、音無は意識を失ってしまう。悪魔はその音無を抱き抱える。

「春奈!! 貴様離せ!!」

鬼道が悪魔に立ち向かうと、グラウンドに再び大きい稲妻が落ち、稲妻の閃光で周りが光る。

光が収まると、天使と悪魔、それに浦部と音無がグラウンドから消えていた。

「……まさか、連れて行かれたというの?」

「でもどこに!? あいつら本当に天界と魔界のやつらなんですか!?!」

「そんなの分かんねえよ!」

目の前であんな衝撃的なことが起こり、みんなは現状を受け止め切れていなかった。

「まだ遠くに行つてない筈だ! 追いかけてよう!」

「よし! とにかく探そう!」

「闇雲に探しても見つかんねえだろ。この島バカみたいに広いんだぞ」

こういう時こそ、冷静にならなきゃならない。

普通の人間なら、冷静にならない方が当たり前なんだ。……だが、知り合いが二人も拐われている。考えなしに探すのは得策じゃない。

「…春奈は、選ばれたと言っていた」

「気になる言い方だった。本当に天界と魔界に関わる者なら、言いそうな言葉だけど……」

音無が選ばれた……？

音無が魔界に選ばれたのなら、浦部は天界に選ばれたものになる。しかし、彼女達が無作為に選ばれたなら迷惑なことこの上ない。

彼女達が選ばれる、その共通点……。

「……そういうことか」

「何か分かったのか、比企谷」

「天使と悪魔つつつたら、浦部も音無も伝承の鍵を付けていた。もし、あの魔王伝説が本物だとするなら……」

俺は大きく聳え立つ火山に視線を向けた。

「目指すはマグニード山か……」

「……よし！行こうみんな！」

俺達の目的地はマグニード山へと決まった。

「八幡、私も行くぞ。八幡に手を出したことを後悔させてやる……」

「……ダメだ。お前は残ってくれ」

「な、何故!？」

「敵があまりにも不明過ぎる。音無と浦部が拐われたとはいえ、他の天界と魔界のやつらがまだ潜んでいるかもしれない。宿舎の中に避難しておくのが最善だが、最悪を想定して、力のあるお前は残ってくれ。…頼む」

俺は八神に頭を下げる。

もし俺達がいけない間にマネージャー達に手を出されるって考えると、恐ろしいからな。もしかしたら無意味なのかも知れないが、それでも頼りにはなる。

「……分かった。八幡に頼まれては仕方がない。……ただ、無理だけはしないで欲しい。もし八幡がいなくなってしまうたら……私も死ぬからな」

「今回ばかりは八神さんの言う通りよ。…自分の身体を、大切にしてちょうだい」  
「……善処する」

改めて、俺達は天使と悪魔がいるであろう、マグニード山へと向かっていった。

マグニード山を登っていくと、段々と妙なロープを着こなした老人が二人立っていた。

「あー！」

財前がそれを見るや否や、一目散に詰め寄った。

「あんた達、ここで何してんだよ！」

「ほお……やはり伝承の鍵はお前さんを選ばなかったと見える」

「よい……それでよい」

状況的に考えて、さっきの連中と関わりがあるのは間違いなさそうだな。

「知ってるのか？」

「ああ……！伝承の鍵を私達に押し付けてきたのは、あの爺さん達なんだよ！」

「本当か!？」

「ああ！間違えるもんか！……あんた達のせいで、リカと春奈がッ！」

財前は更に詰め寄ろうとしたが、円堂がそれを静止した。

「ほっほっほ……どうやらあの娘さん達を取り戻しに来たみたいだな……」

「当たり前だ！」

「二人はどこにいる！」

「……天空の使徒住うは”ヘブンズガーデン”」

「……魔界軍団Z蠢くは”デモンズゲート”」

ヘブンズガーデンにデモンズゲート……。

いかにも天使や悪魔が住み着いてそうな、捻りのない名前だな。

「春奈はそこにいるんだな……！たとえ地獄の底だろうと、俺は春奈を助け出す！」

「その意気だ鬼道。天使よりも悪魔よりも強いものは、人間の絆だつてことを教えてやろう」

佐久間のその言葉に、謎の老人は嘲笑う。

「人間の絆とは……」

「見せてもらいたいものよ……」

謎の老人達は、片方は上の道を、もう片方は下の道を指差す。

「行くがいい。天界への道は上だ」

「魔界への道は下じゃ」

「…貴方達は、一体何者なんです!?!」

フィディオの問いに、老人達は声を合わせて笑い始める。

「…なんだか楽しそうじゃねえの」

「……楽しんでおるとも。新たな千年紀の始まりになるやも知れぬからな……」

「さあ行け！この祭りを盛大に取り行おうではないか！」

そう楽しそうに言い捨てて、謎の老人達は洞窟の中へと姿を消していった。

「……さっきの爺さんの話だと、浦部はヘブンスガーデン、音無はデモンズゲートにい



るってことだ。……ここからは、赤組と白組で二手に分かれた方が良さそうだな」

「俺も行くぜ、鬼道！」

「おう！同じチームになったんだ、力貸すぜ！白組全員で、魔界に乗り込んでやろうぜ！」

「今度こそ、あの悪魔を燃やし尽くしてやるわ！」

「赤組はヘブンズガーデンだ！天界のやつらから、リカを取り戻すぞ！」

「おう!!」

円堂率いる赤組は、天使が住うヘブンズガーデンに。そして俺達白組は、悪魔が潜むデモンズゲートに進むことになった。

まさか15年間生きてきて、ファンタジックな場所に行くことになるとはな。材木座に言ったら喜びそうな話だな。

「エイト」

「ん？どうした、クララ」

「…気を付けてね」

クララは心配そうにこちらを伺う。

「…互いにな」

クララやアイシーが実力者とはいえ、たった一人で俺達全員を吹き飛ばした相手だ。

俺だって、心配しないわけがない。

「よし！白組出発だ！」

円堂達はヘブンスガーデンに、俺達はデモンズゲートへの道のりを辿っていった。全  
ては、浦部と音無を助けるために。

## 魔界軍団乙

円堂達と分かれて、俺達はデモンズゲートに足を踏み入れた。暗闇の洞窟の中は、蒸し暑い蒸気が円満している。

「なんだここは……」

「全く陰気なところだぜ……」

「お兄ちゃん!!」

すると、彼女の悲痛な叫びが洞窟内で大きく反響する。

声の方に視線を向けると、何やら赤いドレスを着せられた音無が、鎖で繋がれて動けないでいる。

「助けて!!」

「待つてろ!今助ける!」

俺達が音無を助けに行こうとするが、

「儀式を妨げる者には……」

洞窟内で、凄まじい熱風が吹き荒れる。

「恐怖と破滅をオ!!」

「くっ……」

「ここは既に魔界。人間風情がよくこんな所まで来れたモンだぜ」

音無の後ろから、悪魔のリーダー的人物と、褐色の女悪魔が現れる。

「…何者だ、お前達は」

「俺は魔界の戦士デスタ。そして……俺達が魔界軍団Zだア！」

魔界の住人気取りか……。

どいつもこいつも、普通の人間みたいな容姿をしていない。十人に聞けば十人が、悪魔みたいな容姿をした人間だと言うだろう。

俺も俺で、散々雪ノ下に見た目がゾンビと言われてきたわけだから、大きい括りでは俺も悪魔になっちゃうのか。

俺の前世は魔界軍団Zの一員だったんか。何それウケねえ。

「春奈を返せ!!」

「そうはいかねエ。こいつは大事な生贄だからなア」

「生贄だど!?!」

「地の底に封じられし魔王……伝承の鍵に選ばれし乙女の魂を喰らい、千年祭の日に目覚める」

「我らが主人魔王が復活すれば、世界は破滅の炎に包まれ文明は崩壊する。そしてこれ

より千年、地上は魔王と魔界軍団乙、悪が支配する世界となる！」

女悪魔が汚い笑みで音無の腕を掴む。音無の心は、恐怖によつて支配されている。

「貴女は魔王を復活する生贄となるのよ？嬉しいでしょ？」

「要するに嫌がらせがしたいから適当な女を一人選んで魔王を復活させるってことか。設定がチープ過ぎて笑えんな」

材木座でももう少しマシな設定を作れるぞ。

「…やる気か人間」

「じゃなかったらこんな怖いところは来てねえよ。…そうだろ、鬼道」

「ああ！魔王も魔界も関係ない！春奈を傷付けるやつは、俺が許さん！」

「…本当にやる気みたいよ、この人間達」

「魔王復活は目前なんだ。人間ごときに渡すと思うのか？」

「ならば力づくでも奪い返す!!」

すると、今度は別の場所から別の人物が俺達に尋ねてきた。

「人間が魔界の者に挑むか……？」

その声の方角に対して目を凝らすと、ローブを着た謎の老人が一人、立っていた。

「魔界の住人に戦いを挑む者は、古のオキテに従わねばならぬ。…すなわち」

デモンズゲートを覆う霧が晴れる。晴れた先に見えたのは、サッカーグラウンドで

あった。

「サッカーで戦い、勝者を決めるべし」

「…だから、なんでサッカーなんだよ」

俺は呆れる様に眩く。

なんなの？天使も悪魔もサッカー好きなの？純粹だなおい。

「生贄を助けたくば……」

「試合に勝って奪い返せ……そういうことか」

鬼道の答えに老人は頷く。

「俺達に勝負を挑むのか？人間」

「ああ！待ってろ春奈！俺達が必ずお前を取り戻す！」

こうして、白組 v s 魔界軍団Zの試合が行われることとなった。

—————

俺達はそれぞれポジションに着いた。FWは豪炎寺、レアン、テイラン。MFは佐久間、鬼道、不動、マーク。DFは俺、テレス、飛鷹。GKは立向居。控えには綱海と宇都宮。

「みんな、気をつけて！」

「お前もすぐにあいつらの後を追わせてやる」

「強き魂が集まれば集まるほど…魔王の力は強くなる」

「やつらの魂も全部取り込ませてもらうぜエ………魔王への生贄としてなア！」

キックオフは魔界軍団Zから。試合開始の笛が鳴り響くと、FWの三人はデスタとサタナトスに向かっていく。

「必殺タクティクス！ブラックサンダー！」

デスタがそう発した瞬間、目の前から姿を消した。

「なッ！」

「What!？」

すると、後ろのゴールからボールの跳ねる音が聞こえる。なんと、デスタは立向居の後ろに瞬間移動していた。

「…え」

立向居は何が起きたのか分からず、ただデスタの姿を眺めることしか出来なかった。

デスタはボールを転がして、ゴールに入れた。0-1で、魔界軍団Zが先制点。

「…何が起きたの…？」

デスタが必殺タクティクスの名前を叫んだ瞬間消えた。感覚的には、アフロデイのヘブンズタイムに限りなく近い。

ボールは俺達からとなり、試合が再開する。ボールは豪炎寺が持つており、前へ上がっていく。

「豪炎寺、パスだ！やつらの戦術が分からないままでは危険だ！まずは、やつらのサッカーを見極める！」

「分かった！」

鬼道は、魔界軍団Zを倒す算段を考えた。

その結果、まずマークへとパスを出す。

「馬鹿がッ！」

しかし、マークへのパスを不動がインターセプト。

「サッカーを見極めるだど!?何を面倒なことを!!」

不動は自慢のテクニクでグラーションャとサタナトスを抜き去っていく。

「魔界軍団だかなんだか知らねエが、ムカつくんだよ!!」

「やってくれるな人間！」

メフィストが不動に向かってチャージ。

「不動、こつち寄越せ！」

俺はデイフェンスラインから一気に駆け上がって、不動からパスの指示を出す。

「おう！」



不動からのボールを受け取って、攻め上がっていく。

確かに戦術が読めない以上、不用意に手を出すのは愚策かも知れない。しかし、サッカーを見極めていたら時間なんてあつという間に過ぎてしまう。

攻めながらも、やつらの戦術の一部は把握できる。

「とりあえず、音無は返してもらおうわ！」

「エイト、私にも回しなさい！こんな三下達、とつとと燃やしてやるわよ！」

俺と共に、レアンも上がってくる。しかし、目の前からアラクネスとバルバトスが立ち塞がる。

「サザンクロスカットッ！」

二人を吹き飛ばして、レアンへとセンチタリング。レアンは大きく跳躍する。

「アトミック：フレアアアッ!!」

バーンの必殺技であるアトミックフレアが、GKアスタロスに飛んでいく。しかし、アスタロスは顔色一つ変えずに、手をかぎす。

「ジ・エンド」

右手をかぎすと、ボールにドス黒いオーラが包み込まれていく。そのままゆっくり捻っついていき、ボールが少しずつ圧縮していく。捻った右手を返すとボールが消滅し、アスタロスの手元に落ちてくる。

「……この程度か？」

「う、嘘……!？」

レアンのアトミックフレアを顔色一つ変えずに完璧に止めた。

「所詮は人間……。今から喰らうとするかア……。やつらの魂をよオ!!」

「な、なんだツ!!」

「魔界軍団Z!!魔王の名に於いて、やつらを殲滅しやがれエ!!」

「おう!!」

デスタが全メンバーに向かって大きく命令した。アスタロトからのパントキック。しかし、不動がそれをインターセプト。

「調子に乗りやがって!だったら何度でもねじ伏せてやるぜ!」

「無駄だねエ!」

メフィストが不動に向かって激しいタックル。不動を吹き飛ばしていく。

「ふ、不動!」

「他人の心配をしている場合?!」

ボールを拾った俺に向かって、今度はアラクネスがスライディング。アラクネスのスライディングで、転倒してしまう。

「エイト!」

ボールを拾ったレアンの前に、巨体のFWサタナトスが現れる。

「ゴー・トゥー・ヘル!!」

サタナトスは左足にドス黒いオーラを纏いながら上にあげて、そのまま振り下ろす。それに反応する様に、ボールの下からドス黒いオーラが溢れ、地面を割ってレアン諸共衝撃で吹き飛ばす。

「きゃああッ?!」

ボールはサタナトスの足元から吹き出す。

「デスタ!!」

サタナトスからデスタへのパス。

デスタは左足でボールに回転をかける。

「くらえエ!!おとおおオオッ!!」

回転がかけられたボールは空中でオーラを纏うと同時に、サッカーボールの色が反転する。

「ダーク…マタアアー!!」

反転したボールを、デスタが蹴り込む。禍々しいオーラを纏うシュートが立向居に襲いかかる。

「魔王…!!ザ・ハンドッ!!」

アルゼンチン戦で見せた魔王・ザ・ハンドを繰り出す立向居。しかし、ダークマターは魔王・ザ・ハンドを打ち破って立向居ごとゴールにねじ込んだ。

0-2。魔界軍団Zが追加点。

「なんだ、こいつら…!!」

「これが悪の力よ!」

こいつらの実力は半端なく強い。FFIにいたとしたら、決勝トーナメントに残る様な実力者達だ。

「お前達は魔王の復活をそこで見ていい!無様に這いつくばってなア!ハッハッハッハッ!!」

そこから、俺達は魔界軍団Zに捌られていく。点を取れる筈なのにそうせず、俺達を吹き飛ばして楽しんでる。

そしてそこで、前半が終了する。

「クッソ……痛え……」

俺達はハーフタイムの僅かな時間を使って、身体を休めようとすると。

「ねエ、そのこの瞳が死んだ人間」

「あ?」

俺は何故か、魔界軍団のメンバーに声をかけられる。MFの、アラクネスとかいう悪

魔だ。

「……なんだよ、悪魔」

「貴方、私達の仲間にならない？」

「は？」

アラクネスが言った意味を理解出来なかった。

仲間？誰が？俺が？

「貴女、何ふざけたこと言ってるのよ！」

レアンはアラクネスに突っかかるが、アラクネスは無視する。

「その瞳……貴方、相当不遇な目に遭っているでしょう？その瞳は、周囲の人間に絶望し、誰も信用しなくなった証拠……貴方の場所は、人間がいる地上ではないわ。私達、魔界側にいるべき存在なのよ」

なんと俺は悪魔からスカウトされてしまう。

なんで俺ってば面倒なやつからスカウトされるんだろう。何これモテ期？

……そんなモテ期は来て欲しくなかったよ。

アラクネスは、妖艶な笑みを浮かべながらこちらに近づく。

「……ち、近づいてくんじゃねえよ……！」

「貴方が悪魔になるなら、私が貴方の欲望を叶えてあげるわ。……人間風情の女じゃ満

足出来ないようなことも……ね」

アラクネスは舌舐めずりをする。その瞬間、俺は全身に寒気が走った。皮肉げに俺は、アラクネスにこう言い返した。

「…このビッチ悪魔が」

「ふふふ…そう粋がってられるのも今のうちよ。貴方達の身体はもう限界。攻めることすら出来ない貴方達は私達に敗北して、世界の終わりを指を加えて眺めることしか出来ないのよ」

確かに、こいつの言う通りだ。魔界軍団Zの前に、次々と倒されていく。

「ふざけるな！春奈は絶対に取り返す！貴様らのくだらん企みなどここで終わらせる！」

「…粋のいい人間だこと。…その瞳の死んだ人間。この試合に貴方達が敗北すれば、貴方を素敵な悪魔にしてあげるわ」

「…うるせえよ。もうそれ以上口を開くなよ」

「…ツレないわねエ」

アラクネスはそう言って、俺達の前から離れていく。

「ツ…はあ…はあ…!!」

「エイト、大丈夫!？」

「あ、ああ……悪いな」

俺はなんとかして、息を整えようとする。

やつの目を見た瞬間、陽乃さんの表情がフラッシュバックした。目の前のモノを、何が何でも支配する目だった。

やつが何を企んでいるのか分からないが、負けない理由がもう一つ出来てしまった。

しかし、そんな理由より優先すべき事項は、音無の奪還だ。

何としてでも、助けなければ。

## 音無奪還

音無を賭けた試合の後半戦が開始した。

「みんな！デیفエンスラインを固めろ！」

俺達は鬼道の指示でデیفエンスラインを固めるが、魔界軍団乙の猛攻が止まらな  
い。時間は刻一刻と過ぎていく。

「鬼道！もう時間がないぞ！」

「分かっている……分かってはいるが……！この状態では、守りに徹するしかない……！」

このまま負ける？ずっと守りに徹した結果が敗北？音無が、魔王復活の生贄となるつ  
てののか？

……そんなこと、許されるわけないだろ。

「バカかお前。守りに徹しても勝てるわけねえだろ」

「……しかし……！」

「お前このままじゃ音無が生贄になるんだぞ。それでいいのかわよ」

「いいわけがないだろう……だが……」

天才ゲームメイカーと呼ばれる鬼道がこのままでは、ガチで負けてしまう。



「……いい加減にしろよ」

自分でも気付かなかった。自分の声が、普段より冷たく、低い声になっていることを。「…お前はあいつの兄だろうッ！お前が助けなくて、誰が音無を助けたよ！」

「比企谷……」

「妹が困っていたなら、兄は手を差し伸べて助けるもんだろ！それがどんだけ恥ずかしくて、惨めになっても、傷付いても！それが、兄としての役目だろうが！」

俺なら絶対助ける。小町が困っていたなら、俺は何をしてでも絶対に助ける。何故なら、たった一人の妹だから。

「俺は絶対に音無を助ける……あいつには、色々世話になってんだ……汚かろうがラフプレーだろうが、そんなもん知ったことじゃない……！あんなコスプレ軍団に、音無取られてたまるかっつもの……！」

「…比企谷……」

仮にここで重症になって決勝トーナメントに出られなくても構わない。俺の怪我で音無の身柄が確保出来るなら、安いものだ。

今度ばかりは、犠牲覚悟だ。

「ハッ！人間風情が何しよオが、お前達の未来は絶望しかねエンだよオ！」

デスタがボールを持って、攻め上がってくる。

「絶対通さねえよ……!」

俺はデスタの前にディフェンスに入る。

しかし。

「どけエ!!」

「ぐあッ!」

デスタの激しいプレーに、俺は吹き飛ばされてしまう。今の立向居には、ダークマターを止められる気力がもうない。

「くらえエ!!おおおおオオツ!!ダーク…マタアア…!!」

「アイアン…ウオオール!!」

デスタが打ち込む瞬間、テレスはアイアンウオールを繰り出す。鉄の壁をぶち抜けないデスタは、そのまま空中から落ちていってしまう。

「何イツ?!」

「デスタが倒された?!」

「馬鹿なア!」

デスタが倒されたことで、魔界軍団は驚きを隠せずにいた。

「比企谷の言う通りだ、鬼道!守っているだけでは勝てんぞ!」

「テレス……」

ボールを奪ったテレスに、サタナトスが襲い掛かる。

「ゴー・トゥー・ヘルツ!!」

「ツ！効かん!!うおおおオオオ……!!はああアア!!」

「ぐああアアツ!!」

テレスは気合でゴー・トゥー・ヘルをそのままサタナトスに返した。

「鬼道！お前は焦って集中力を欠いている！だが、ピンチの時こそ攻める心を忘れるな！……攻撃こそ最大の防衛！それを教えてくれたのは、アンデスのありじごくを破ったお前達、イナズマジヤパンじゃねえか！」

「……テレス……」

「……俺は決勝トーナメントでのイナズマジヤパンの戦いを楽しみにしているんだ。お前達もそうだろう？」

「ああ！こんなところで負けてもらっては困る！」

「カズヤもきつと、同じ気持ちさ！」

テレスの言葉に、マークとディランが同意する。

「鬼道。君は優れたプレーヤーであり、イナズマジヤパンはいいチームだ。だが、チームプレーにこだわり過ぎてサッカーが小さくなっている」

「サッカーが小さく……」

「圧倒的な個人技がチームの局面を変える場合もある」

「Yes。フィールドの魔術師、カズヤが見せた様にね！」

彼らの力説が、集中力を欠いた鬼道に大きく響いた。

「……やるかい？」

「いいだろう！」

「相手は魔王の手下！ 不足はないぜ！……まさかアルゼンチンとアメリカが手を組むことになるとはな」

「南アメリカと北アメリカ……夢の競演だね」

「Yes！ 全米が泣くね！」

「……行くぞ！」

「Let's party!!」

ディランが指で鳴らすと、その合図でボールを持ったテレスが攻め上がっていく。

「よくもデスタを！」

テレスに対して、アラクネス、グラシーヤ、バルバトス、メフィストが包围する。しかし、テレスはたった一人で四人を相手にする。

なんてフィジカルとテクニクなんだ……。これが、鉄壁のチームのキャプテンの力……。味方になった時に、ここまで心強いとは……。

「マーク！」

四人を相手にしたテレスは隙を見つけて、マークへと大きく繋げた。マークは高度なテクニクで、ベルゼブを突破する。目の前に、ヘビーモスとアビゴールがマークの行手を遮るが、大きな跳躍で二人を躲す。

「そこだ！」

マークに向かって、ベリアルがジャンプ。空中で衝突し、二人はそのまま倒れてしまふ。

「…まだまだ！」

マークは倒されながらも、前線のデイランに繋いだ。

「Nice pass、マーク！」

デイランはそのままゴール前まで攻め上がっていく。

「決めるぜbaby!!」

「フフ……」

「これでもくらいな！必殺の…!!」

デイランが右コーナーを狙って、大きく足を振り上げる。それに反応したアスタロスは、横っ飛び。

だが、デイランはボールを蹴る寸前で足を止める。

「なッ…?!」

そして、アスタロスが横っ飛びでゴールがガラ空きになった瞬間を狙い、軽くゴールに蹴る。ボールはポンポンと跳ねながら入る。

「マジ…?」

魔界軍団Zから1点を返し、1―2となる。

まさか、必殺技もなしで点を奪い返すとは…。その上、テレス、マーク、デイランのたつた三人でゴールを決めた……。これが、世界トップクラスの個人技……。

点を取られた魔界軍団Zからのボールで試合再開。サタナトスが攻め上がってくる。

「人間風情が凶に乗りおって…!くたばりぞこないがア…!!」

「くたばりぞこないはどっちだよ」

俺はサタナトスの前にディフェンスに入る。

確か……こうだった。

「…:ゴー・トウー・ヘル!」

「な、なんだとオ?!ぐああああアア!」

俺はサタナトスの必殺技をパクらせてもらった。特別複雑な力はいらない。左足を力を入れて放つ……ただそれだけであそこまでの威力。使わないわけにはいかない。

「ギ…まあ」

サタナトスから奪った俺は、不動へとボールを繋げる。

「テメエら全員、蹴散らしてやるぜ!!」

グラシーヤとアラクネスを片っ端から吹き飛ばしていく。

「不動!こつちよ!」

「ああ!」

不動からボールはレアンに渡る。目の前から、バルバトスとメフィストが詰めてくる。

「貴女達なんて、燃やし尽くしてやるわ!」

レアンはボールと共に宙に浮き、そのままあの必殺技を繰り返した。

「フレイムベール!V2!!」

「ぐわああアア!」

進化したフレイムベールでバルバトスとメフィストを文字通り燃やし尽くす。

「レアン!こつちにくれ!」

「…仕方ないわね!エイト!」

レアンからボールを受け取り、そのままゴール前に迫っていく。

「来い、比企谷!」

「ミーが決めるね!」

豪炎寺、それにテイランと選択肢がある……。だが、普通にパスを回してシュートを打ったんじや決まらない。

「…豪炎寺！」

「こちらか」

アスタロスは豪炎寺に向けて手をかざす。

かかったな。

「アストロゲート…！V3ッ!!」

俺は豪炎寺にパスを回すと見せかけて、渾身のアストロゲートをアスタロスに打ち込む。ジ・エンドを出す余裕を作れず、そのままアスタロスごとゴールに叩き込んだ。

「これが本当のジ・エンドってな」

俺はグッドポーズを作って、それを逆さまにする。

やべえ超爽快だわ。今のは完全に決まったわ。

「まさかミー達を囿にして、自分で決めるとはね」

「…よく言うだろ。敵を欺くなら味方からって言葉を」

これで同点。2―2だ。

しかし、何やら不満な表情をしたレアンがこちらに詰め寄る。

「いい？ 本当は私がシュートを打ちたかったのを、仕方なく我慢してあげたんだからね



「大体、あんなやつ相手なら私だって決めれるんだから！」

「すまんすまん。てか近いから」

「ちよつと、適当に流さないでよ！」

「ふっ…」

「貴方も何笑ってんのよ！」

レ안의クレームっぷりに、豪炎寺やデイランが笑う。

2―2で少しは精神的に余裕が出来た。

しかし、まだ油断は出来ない。あちらには、ブラックサンダーがある。

あれを使われたらおしまいだ。

魔界軍団乙からのボールで試合再開。

「人間共がここまで粘るとは……」

「魔王復活は目前なんだア。邪魔はさせねエ」

再び、豪炎寺達三人がデスタに突っ込んでいく。

「ブラックサンダー!!」

瞬きすると、目の前からデスタは消えていた。

「うおおおおオオ!!」

すると、後ろから立向居の雄叫びが。立向居はブラックサンダーが来ることを読ん

で、浮いたボールを強引にキヤッチ。勢い余って、DESTAと衝突。

「立向居！」

立向居は倒れてはいるが、なんとかボールを死守した。ブラックサンダーを阻止するとは…。

「ば、馬鹿なア!!」

「こつちだ立向居！」

「はい！比企谷さん！」

俺は立向居からボールを受け取って、鬼道にパスを繋げようと試みるが。

「魔王を復活させて、貴方も悪魔にしてあげる！」

「そんな面倒なこといらねえんだわ！」

俺はアラクネスをフェイントで突破する。

「決めろ鬼道！」

「おう!!」

鬼道がトラップし、ゴール前まで攻め上がる。

「決めるぞ！佐久間、不動！」

鬼道達は大きくジャンプして、シユートの体勢に入った。

「皇帝ペンギン…！3号!!」

三人の連携技、皇帝ペンギン3号がアスタロスに向かって飛んでいく。

「ジ・エンド！」

アスタロスはペンギン諸共圧縮し始める。徐々に潰れていき、消されてしまう。

「ククク……」

アスタロスは止めたと油断した。しかし、ボールとペンギンは生きており、勢いよく

ゴールに突き刺さる。

ついに3―2と逆転する。そして同時に、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。

「俺達が……負けたア……?!」

マジで、ギリギリの試合だったわ。

俺は安堵の息を吐いて、立ち尽くした。

「お兄ちゃん！」

「春奈！」

「お兄ちゃん……怖かった……怖かったよお……!」

「……もう大丈夫だ」

……良かったな、音無。

すると、レアンがこちらに来て心配そうに伺う。

「……エイト、大丈夫? 貴方、だいぶ身体痛めつけられたでしょ?」

「…一度二度これ以上の痛みを受けたことあるから大丈夫だ」

とはいえ、決勝トーナメントに響かないかって言われたら嘘になるかな。かなり身体中が痛いし。

「比企谷先輩！」

「へ？」

レアンと話していると、音無がこちらにやってくる。すると、突然に抱きつかれてしまう。

「ふあ?!」

「……先輩……先輩だあ……」

音無は離れる様子を見せるどころか、俺の胸に顔を埋める。え、ちよ、どうしよ。

「…お前のおかげだ、比企谷」

「鬼道…?」

「お前のおかげで春奈を助け出すことが出来た。お前だけじゃない。イナズマジヤパンのメンバーは勿論、テレスやマーク、それにレアンやデイランのおかげだ。ありがとう」  
鬼道は頭を下げる。

「…まあ、何?あれだよあれ。知り合いつていうか、仲間つていうか……その妹助けるのは当然だろ」

「比企谷……」

「……イトらしいわね」

……あの、なんでもいいけどそろそろ離れて欲しいな。あとみんなそんな温かい目で見るのやめて？レアンだけ睨むのもやめて？

「……ちよ、音無。そろそろ離れてくれない？なんならもう一度鬼道の方に……」

「やですつ……離れたくないっ……もうちよつとこのままがいい……」

「……鬼道。なんとかして？」

「諦めろ。春奈は前からお前に懐いているからな」

「ええ……」

そうは言ってもですね、あの柔らかいのがむにゆむにゆ当たつてですね……。私ちよつと困ってるんですけど……。

「……ていうか、イトつてあそこまで誰かのために感情を剥き出しにすることあつたのね。……意外」

「はあ。」

「君の説教……あれは心に響いたね。カズヤからは、捻くれてはいるが冷静沈着な男だと聞かされていたが……成る程。確かに懐くのも領ける」

「いや、勝手に領かないで？」

俺が説教? そんなこと試合中に……。

『…お前はあいつの兄だろうツ! お前が助けなくて、誰が音無を助けたよ!』

『妹が困っていたなら、兄は手を差し伸べて助けるもんだろ! それがただけ恥ずかしくて、惨めになっても、傷付いても! それが、兄としての役目だろうが!』

『俺は絶対に音無を助ける…! あいつには、色々世話になつてんだ…汚かろうがラフレードだろうが、そんなもん知ったことじゃない…! あんなコスプレ軍団に、音無取られてたまるかっつ…!』

……あ。

あは、あは……。

あははは、ははは。

あはははは…はああああアアアア!?

俺何主人公みたいなこと言っちゃつてんの!? 待つて待つて死にたい死にたい超死にたい!

「ちよ、音無離れてマジで今俺死にたいから」

「やだっ…」

「はははッ! 顔が赤いな!」

顔が赤いな、じゃないんだよ!? 俺いつからあんなジャンプ漫画にいそうなやつの子

フ吐いてんの!?

もうやだ本当!!また黒歴史作ったじゃん!!アイデンティティーをクライシスしちゃったよお!!

「ちよ、レアン。余計なこと言いやがって…」

「……ふん。知らないわよ、そんなの」

レアンは笑うどころか、少し不満そうだ。まだパスのことを根に持ってるのかこいつは。

「おおい!!みんなあー!!」

洞窟内で、高らかな音量が響き渡る。こんな喧しい声を出すやつは一人しかいない。

「円堂!」

「勝ったんだな、お前達も!」

「ああ!」

どうやら、円堂達側も浦部を助け出した様だ。

浦部も音無も奪還出来た。これで、FFIの決勝トーナメントに戻る事ができる。

「感謝しているわ」

すると、アラクネスが怪しい笑みを浮かべながらそう礼を告げた。

「貴方達との戦いは、その子を遥かに凌ぐ良い生贄となったもの」

「お前達の強き魂のおかげで、魔王は今日覚めたア！」

「何!？」

すると、デモンズゲート内で地響きが起き始める。それと同時に、魔界軍団乙は姿を消していく。

デスタの言葉が本当なら、魔王がここにやってくる筈だ。俺達は魔王がいつ来てもいい様に身構えた。

「……千年の封印は解けたア」

「……今、破壊の時が始まる」

「その声は、まさか……」

その声に聞き覚えがあった。片方は魔界軍団乙のリーダーであるデスタだったが…。

「強き魂を喰らい、魔王は復活したア！」

「我らは、ダークエンジェル」

「…セイン…? セインなのか…!？」

天空の使徒のリーダー的存在が、デスタと共に同じ衣装を着て現れた。

…何があつたんだ…?」



## 魔王降臨

魔界軍団乙から音無を奪還し、天空の使徒から円堂達が浦部を取り返した。決勝トーナメントに戻れると思いきや、魔界軍団乙のリーダーのDESTAと、天空の使徒の長であるセインが、何故か同じユニフォームを着て、俺達を睨みつけていた。

「ぐツ…円堂ツ…!」

すると、セインは頭を抑えて苦しみ出す。

「セイン!」

「…:…黙れ」

しかし、セインはまた冷たく、憎しみを込めた目に戻る。

何なのあいつ。二重人格か何かなのん？

「どうなってるんだ…」

「魔界が天界を飲み込んだのだ」

円堂の疑問に答えたのは、謎の老人達だ。

「…お前らマジで何者なんだよ」

「我らは天界魔界の儀式を執り行う者」

「セインに何かしたのか?!」

「…数刻前、この者達は花嫁と生贄を奪われたことで、もはや互いに相手を実力で封じようと考えた…。古よりの定め…：魔界は天界を、天界は魔界を憎み…。その憎しみはデモンズゲートの地中深くに溜め込まれていった…。長い時間をかけて満たされた双方の憎しみは、新たな邪悪な力を生み出すこととなった…。」

「…均衡していた二つのバランスは崩れ、そして魔が天を飲み込み、世界を絶望に染める…。その天魔の化身こそ…。」  
「ダークエンジェル」なのだ!」

感覚的には、ダイヤモンドダストとプロミネンスが混ざったザ・カオスに近いチームってことか。…まあ過程は全く違うが。

「ついに…：ついに復活したんだ…：魔王様がア!」

「魔王?」

「ど、どこにいるんすか!?!」

「…：多分、あいつらのことだろ。魔王って」

「ええッ?!」

俺はやつらに指差して、みんなに教える。状況的に考えて、十中八九ダークエンジェルが魔王に違いない。

すると、再びセインが頭を抑えて苦しみ始める。

「…あ、悪魔に意識を支配されるなど、なんとということだ……。…止めてくれ！ 我らの手が穢れぬうちにッ……！」

「セイン!?!」

「フフハハハ……フハハハハハハッ……」

セインは高らかに笑い始めた。先程までは、自我を持っていたのだろうが、今のセインは完璧に悪魔に染まってしまっている。

「はあアッ!」

セインがサッカーボールを、円堂目掛けて打ち込んだ。円堂はボールを受け止めようとするが、ボールのあまりの威力に吹き飛ばされてしまう。

「円堂!」

「フハハハッ……お前達の魂、寄越すがいい」

「…サッカーは、そんなことのために使うんじゃない……! お前は俺達と試合して、サッカーの楽しさを分かってくれたんじゃないのかよ?!」

「…円堂よせ。今のあいづらに何言っても無駄だ」

セイン本来の意識は悪魔に乗っ取られている。セインの目的はサッカーを楽しむことではなく、俺達を徹底的に潰す気なんだろう。

「我らは魔界も天界も超えた存在……ダークエンジェル。魔王なのだ!」

すると、俺達の周りからスポットライトが当てられる。そのスポットライトが俺達の周りを回転し始める。

「な、なんやこれ……？」

「戦つて分かった……お前達の魂は素晴らしい。よつて、我々がより完璧なる魔王になるための、生贄にしてやるぜ」

デスタが指を弾いて鳴らすと、特定の11人がスポットライトに包まれる。

「今光に包まれた者が選ばれた11人。共にこの11人で儀式を行う……交代はなしだ」

「さあ、昇天するがいい。お前達の愛するサッカーでな」

—————

ダークエンジェルとの試合が始まるうとしていた。FWは基山、豪炎寺、レアン。MFは、不動、鬼道、フィディオ。DFは俺、壁山、テレス、吹雪。GKは円堂。

「これより、儀式を執り行う」

ダークエンジェルからのキックオフでホイッスルが鳴り響いた。

「ダークエンジェルの力……」

「思い知るがいい」

基山とレアンがボールを奪いに行こうとするが、目にも留まらぬ速さで抜き去る。

次に豪炎寺が向かっていくが、素早いパスであつという間に突破した。

「速くなってるわ!」

「パワーアップしてるのか!」

セインとデスタのツートップが次々と抜き去つて、ゴール前にまで迫ってくる。

「恐怖しろオ!」

「そして魂に還るがいい!」

デスタが空中でボールを足で挟みながら回転する。するとサッカーボールの色が反転する。

「シャドウツ…!!」

デスタは反転したボールをセインにパス。

「レイツ!!」

そのボールをセインがオーバーヘッドキック。凄まじいオーラを纏ったシュートが円堂に向かっていく。

「イジゲン・ザ・ハンドツ!改ツ!!」

しかし、イジゲン・ザ・ハンド改は簡単に破られてしまう。

たった数分で1点を取られてしまった。これがダークエンジェル……魔王の力なのか。

「いいぜエその顔。恐怖を味わうほど魂は美味くなる……もつと恐怖しろオ……もつとオ！」

ダークエンジェルのあまりの強さに、みんなは啞然としていた。

「何ボーつとしてんだお前ら！」

不動がみんなに喝を入れる。

「取られたら取り返す！それがサッカーつてもんだろ！」

「不動……」

「……そうだ！みんな反撃だ！」

俺達のボールで試合再開。

不動にボールが渡り、鬼道と共に持ち込んでいく。

「キラー……ファイールズ!!」

二人の連携技のキラーファイールズで突破しようと試みる。しかし、MFの位置にいるサタナトスは顔色一つ変えずに必殺技を繰り出した。

「ゴー・トウー・ヘル!!」

キラーファイールズで纏った強烈なオーラさえも、サタナトスのゴー・トウー・ヘルに

よって返り討ちにされた。

サタナトスからボールはウイネルに渡る。

「行かせない！」

ファイディオとテレスは、同時にスライディングを仕掛けるがウイネルが簡単に躲す。

「スノー……エンジェルツ!!」

躲した先には吹雪が回り込んでおり、スノーエンジェルで間髪攻撃を防いだ。しかし、3人がかりでやっとなんかという感じだ。

ボールを奪った吹雪はオーバーラップして、豪炎寺と共にゴール前に詰めていく。

「うおおおオオ！」

「うおおおオツ！」

「クロスファイア！改!!」

進化したクロスファイアをGKアスタロス目掛けて打ち込んだ。アスタロスは右手をかざしてあの必殺技を繰り出す。

「ジ・エンドV2」

アスタロスも、進化したジ・エンドでクロスファイアに挑んだ。クロスファイアは圧縮されて、消されてしまう。

「フフフ……」

スピードやパワーが上がっているのは分かっているのは分かっているが、技まで進化してるとはな。ダークエンジェル優勢だ。

「恐怖しろオ。魂はますます美味くなる」

「魂魂しつこい！なんならお好みソースも付けたるか!?」

DESTAの言葉にイラついた浦部が喧嘩を売った。

お好みソース付けた魂ってなんやねん。美味いんかそれは。

DESTAは浦部に向けて、ニヤリと笑みを浮かべる。

「こいつらの後…お前の魂も美味しくいただく」

そんな発言に恐怖を感じた浦部はDESTAに言い訳を伝える。

「う、ウチは根性が腐つとるから魂はめっちゃまずいで!?この二人なんてどうや!」

浦部はすぐさま音無と財前に指差す。あいつの変わり身の早さつてば凄え。

「なーんて、冗談や冗談……」

浦部は気を取り直して、俺達に向かって応援する。

「…万が一の時はあいつからだな」

「…はい」

浦部死亡のお知らせですご愁傷様でした。

ボールはサタナトスに渡り、不動がデイフェンスに入る。



「デビルボール！」

サタナトスが蹴り込んだボールに悪魔の羽が生え、ボールが不動の周りを飛んで攪乱する。

ボールはそのままデスタに渡る。

「シャドウツ…!!」

「レイツ!!」

2発目のシャドウ・レイがゴールに向かって飛んでいく。

「ザ・マウンテン!!」

シャドウ・レイに壁山が立ち向かう。しかし、ザ・マウンテンは粉碎されてしまう。

「アイアン……ウオオール!!」

続いてテレスがアイアンウォールを繰り出す。だが、テレスのアイアンウォールできえも破られてしまう。

「イジゲン・ザ・ハンド！改!!」

ザ・マウンテンとアイアンウォールで威力をかなり封じたシャドウ・レイにイジゲン・

ザ・ハンドをぶつける。今度はなんとかゴールから逸れていき、追加点を死守した。

「助かったぜ！壁山、テレス！」

「よく守ったな」

「だが、それもどこまで持つかな？」

こいつらの力はバケモン並みだ。このまま攻められっぱなしじゃ、いずれジリ貧になる。点を取るのには簡単じゃない。

「…鬼道、不動」

「ああ…」

「…言われなくて分かってんよ」

どうやら、俺の考えが彼らと一致しているようだ。流星は頭の冴える司令塔。何も言わずに伝わるとか便利だなおい。

「…豪炎寺、レアン、基山。お前らは絶対前線から離れんな。守りに徹するとか考えなくていい」

「……ああ」

「…分かった」

豪炎寺と基山は前線に戻っていく。しかし、レアンだけが戻らずにいた。

「…はよ戻れ」

「……怪我だけは無しだから」

「…今更だな」

彼女は彼女なりの心配をして、前線に戻っていった。

気を引き締めて、俺達果敢に攻め上がる。しかし、ダークエンジェルの防御が崩せない。それどころか、再び一方的に攻められ続けてしまう。

ボールは再びデスタに渡る。

「やるぞで」

「ハッ、また二人でシャドウ・レイか……。一人で来いよ。それとも俺が怖いか？」

不動は息切れしながらも、デスタに挑発する。

「息切れしているお前など恐れるわけがねエ！」

デスタは荒々しいタツクルで不動を吹き飛ばした。這い蹲る不動を、デスタは嘲笑う。

「話にならねエな……。セイン！」

二人は再びシャドウ・レイの体勢に入った。デスタが回転をかけて、セインにパスを出そうとするところで。

「打たせるかアツ！」

俺は空中でデスタの強烈なボールをインターセプト。

「クソ痛え……！」

俺は腹を押さええながら、なんとか意識を保って立ち続ける。俺はデスタに、皮肉げに感謝を伝えた。

「…パスしてくれて……ありがとうさん……」

「ふぎけるなア！」

デスタは逆上して、こちらに向かって突進してくる。俺はヒールパスで、鬼道にボールを繋いだ。

「豪炎寺！」

鬼道は前線にいる豪炎寺へと繋げる。

「豪炎寺！ヒロト！グランドファイアよ！」

「けど、あれは虎丸くんがいなきや……！」

「いいから！私を信じなさい！」

「……よし！分かった！行くぞヒロト！レアン！」

三人がゴール前に攻め上がって、グランドファイアの体勢に入った。

「グランド……ファイアアアアッ!!!」

完全なるアドリブでのグランドファイアが、思った以上の威力を放ってアスタロスに向かつて地面を抉りながら襲いかかる。

「ジ・エンドV2！」

アスタロスはジ・エンドを発動。しかし、グランドファイアがそれを上回って、ゴールに入ってしまった。

タイムとなった。　　ダークエンジェルから1点を返して、前半が終了する。1―1の同点のまま、ハーフ

## 千年の決着

「……いつてえ……」

俺は腹を押さえながら座り込んだ。無理して我慢すればなんとかなると思ったが、マジで吐きそうなくらい痛い。

「大丈夫ですか、比企谷先輩？」

「……まあ、後半戦なんとか戦えるくらいにはな……」

しかし、活動限界がギリギリだ。魔界軍団Zと戦った痛みそのまま、ダークエンジェルと戦うこととなったのだ。

「……しかし、レアンがグランドファイアを使えるのは驚いたな」

「ああ。お前のおかげだ」

基山の言葉に豪炎寺も賛同する。

「当たり前でしょ！なんてつたつて、私は最強のサッカー選手になるんだから！あんな技くらい、私だって出来て当然よ！」

「クスっ……。エイリア学園の時から変わらないなあ、レアンは」

宇都宮が出場していないから少し懸念していたが、思わぬ誤算だった。

「……凄えよ、レアン」

グランドファイアだって、努力の末に作り上げられた連携技。豪炎寺と基山と息を合わせることも凄いが、何よりそれを裏付けるのは彼女の努力。

エイリア石に頼っていた時より、もっとレベルアップしていた。それこそ、世界と渡り合えるレベル。

「…ま、まあね！今更私の凄さが分かったの？貴方なんて今の私にかかれば倒せるんだから！この試合が終わったなら勝負よ！」

「…また気が向いたらな」

「そればかりじゃない！」

レアンはギヤーギヤーと騒ぐ。そのレアンの喧しさに、周りは笑い始める。

……だが、まだ油断はできない。やつらは、一度見たら対応してくるはずだ。それに自尊心が高い。1点取られたことで、恐らく逆に力を高めてくる。

「無敵の力を手に入れた筈なのに……よもや失点などオ！」

「…一人一人の力が強いから勝つんじゃない。全員の力と、思いが一つになるから勝つんだ！だからサッカーは面白いんだ！」

「面白い？我らのサッカーに面白さなど必要ない。…サッカーは儀式。憎い相手を叩き潰すための手段に過ぎないのだ！…お前達をぶっ潰す……魂も残らない程にな……！」

セインの、他の者を憎む目が強くなる。

後半戦が開始する。俺達のボールからでキックオフだが、すぐさま奪われてしまう。ボールがメフィストが保持し、不動に向かって蹴り込んだ。

「ぐああアア！」

そのボールを今度はウイネルが鬼道に向かって打ち込む。

「うあああアツ!!」

不動、鬼道に続けて、前線にいる三人以外の俺達が、ダークエンジェルの猛攻に次々と倒されてしまう。

「これ以上は無理だ！俺達も戻って守備だ！」

前線にいる三人が守りに徹し始めた。豪炎寺に向けて、デスタがボールを強くぶつけた。

「ぐあああアツ！」

そのボールを次にセインが、基山とレアンにぶつけていく。

「うあああア！」

「きやあああア！」

「喚けエ！叫べエ！恐怖しろオ!!」

残った円堂にセインとデスタの一方的なりんち。俺達は、ダークエンジェルの前に倒



されてしまう。

「どうやらここまでの様だな」

「我らに歯向かった結果がこれだ」

二人は揃って高笑いし始めた。

だが、この状況下でも尚、立ち上がる人物がいた。それは勿論、あいつしかいない。

「違う……！お前達のやっていることは……本当のサッカーじゃない……」

「愚かな。我らを認めぬだど？」

「ならば止めを刺してやろう……お前達のサッカー諸共なア！」

二人は三度、シャドウ・レイの構えに入った。

「シャドウツ……!!」

「レイイツ!!」

止めのシャドウ・レイが円堂に襲いかかる。

「キャプテン!!」

「円堂!!」

円堂はイジゲン・ザ・ハンドの構えに入るが、円堂の放つ光が強くなる。

「真……イジゲン・ザ・ハンド!!」

また土壇場でイジゲン・ザ・ハンドを進化させやがった。シャドウ・レイは徐々に逸

れていき、ゴールポストに直撃。それを、円堂がしっかりとキャッチ。

「仲間の思いに応える……これもサッカーだ!!」

シャドウ・レイを防いだ円堂はパスを出す。ボールを受け取った俺は、向かってくるエルフェルとギユエールに臆せず進む。

「サザンクロスカットツ!改ツ!!」

俺は二人を突破してフィディオに繋げる。

「オーディン……ソオオード!!」

フィディオの渾身のオーディンソードがアスタロスに切っ先を向ける。

「やらせぬ!」

しかし、オーディンソードに合わせて豪炎寺、基山、レアンが合わせて走っていく。

「グラランド……ファイアアアアアツ!!」

オーディンソードの加わったグラランドファイアがアスタロス目掛けて向かっていく。

「ジ・エンドV3!」

円堂と同じく、アスタロスもジ・エンドを進化させる。だが、オーディンソードに重ねたグラランドファイアはジ・エンドを打ち破る。

ゴールに入る瀬戸際で、ゴール前まで戻ってきたセインとDESTAが同時に弾き返す。だがそんな中、円堂が自陣のゴールからダークエンジェルのゴール前まで攻め上がった

てきた。

「いくぞおおオツ!!メガトン……ヘッドォ!!」

前よりパワーアップしたメガトンヘッドを、ゴール目掛けて弾き飛ばした。デスタは手を出せず、セインは自身の身体で堪えていた。

だが、徐々にセインは押されていき。

「ぐあアツ!」

セインをも吹き飛ばして、逆転の1点をもぎ取った。

「やったああああ!!」

仲間の思いに応えて進化させ、仲間を信じて反対側のゴールまで駆け上がってきた。

…円堂の前じゃ、天使も悪魔も敵わないってことか。ということは円堂人間やめてることになる。

まさかうちのキャプテンがバケモンだったという事実。

そこで、砂時計の砂は落ち切って、試合終了のホイッスルが鳴り響いた。

2-1で、ダークエンジェルに勝利。

「身体に満ちていた悪魔の力が消えていく……」

どうやらセインを始めとした、天空の使徒の意識が正常となる。

天空の使徒のメンバーは全員元に戻った。天空の使徒は白い衣装に戻り、魔界軍団乙は黒い衣装になる。

「戻ったんだな！」

「ああ。感謝するぞ、円堂」

セインは次に、デスタを筆頭した魔界軍団乙に視線を向ける。

「デスタ、そして魔界軍団乙。使命により、お前達を封印する」

「クツ…」

「待った！」

セインが魔界軍団乙を封印しようとした時、円堂が待ったをかける。

「サッカーは、使命とかそんなもんでやるんじゃない。もっと楽しいものだけ」

「お前、何を……」

すると、魔界軍団乙が現れた岩の扉が開き始める。

「…今回は失敗したが、次の千年後には必ず、我ら魔界の民が天界を支配する！」

「…そしてその瞳の死んだ人間。今度こそは必ず、私の悪魔にしてあげるわ」

彼らはそう告げて、岩の扉の向こう側へと姿を消した。どうやら、外側からじゃ開か

ない様だ。

「お前が止めなければ、やつらを封じ込めることがツ……………！……………そうか……………そうだったのか……………」

「セイン？」

「…今分かった。私の中にある憎しみの心……………そのせいで私は悪魔に付け込まれたんだ…。我ら天界の者と魔界の者とが合体したチームが魔王そのものだとするならば……………魔王とは、我々の中にある醜く争う心だということになる…」

「……………どういうことだ？」

「伝説にあった魔王はいないのだ。…魔王とは、自分の中にあつたのだから。…先祖は、魂と魂のぶつかり合うことの大切さ……………それを伝えるためだけにサッカーを選んだのではない……………自分自身の醜い心を抑えるための修行として、サッカーを選んだのだ…」

「…貴方の言う通りかも知れないわね」

だからなんでサッカーに固執するかな。

しかも、セインの言うことが正しいなら俺の中に魔王が住み着いてることになるんだけど。もしかして俺の中に陽乃さんいるの？何やだそれ怖い。

「…お前達のおかげで、ようやく理解出来た気がする。サッカーとは、心の修行なのだ  
な」

「修行かどうかわく分らないけど……楽しいもんだぜ！」

「楽しい……………。…フツ…そうだな」

彼らは逆光を纏いながら、デモンズゲートの出口に戻る。

「また千年後に備えなければならぬ。魔界の民に、この事実を伝承するためにも……  
さらばだ！」

天空の使徒は、光が差す道の向こうへと歩いていく。

「サッカーの素晴らしさを教えてくれたこと、感謝する！ 円堂！」

「セイン!! また一緒に、サッカーやろうなあー!!」

こうして、魔王伝説の物語は幕を閉じた。

—————  
俺達もデモンズゲートから去り、マグニード山の麓のバス停に向かった。外に出ると、空は綺麗な夕焼け色に染まっている。

「ありがとうな、みんな」

「円堂、ファイディオ。決勝トーナメントでの活躍を期待してるぜ」

「ああ！」

「マモル。俺達が次に戦えるのは決勝だ。お互い準決勝を勝ち抜き、必ず決勝で会おう  
！」

「必ず！」

バスがやってきて、彼らは乗り込む。そして、それぞれの国のエリアへと帰って行った。

俺達も、自分達の帰るべき宿舎に向かつて、歩き出して行った。宿舎に帰ると、浦部と音無の無事を木野や久遠が泣きながら喜んだ。

雷門や雪ノ下、それに八神も無事を祈っていた様で、少し安堵した様子を見せていた。疲れた俺は、みんなより先に部屋に戻って眠りについた。明日からどうせ練習あるって言うんだし、とっとと寝るに限る。

今日はよく働いたぜ。

## 音無の想い

天使と悪魔の大騒動が終わって、私達は決勝トーナメントに集中することになった。みんなはあんなことがあつた後なのに、変わらず楽しみながら特訓していた。

なのに私は、みんなの特訓に集中して見ることが出来ずにいた。ずっと、あの人だけに、視線を向けていた。いや、向けられずにはいられなかつた。

私の言うあの人は、キャプテンでもなければお兄ちゃんでもない。私が見つめている先にいるのは、クセ毛をボサツと伸ばして、頭にアホ毛ぴよこんと可愛らしく生えていて、目が周りのみんなより腐っていて、体の姿勢が悪い男の子。

比企谷八幡。

昨日の件から、私は片時も目を離せずにはいられなかつた。

あの人を最初に見たときの印象は、変な人という一言のみ。目が腐ってるのは先程も言つた通りなんだけど、性格も捻くれてるし面倒くさがり。

ナニワランドの地下修練場で、リカさんの差し入れて様々な料理が出てきた時、先輩だけが一人で何も食わずに座っていた。

まだ馴染めないのかなって思つて、私は勇気を出して声をかけた。私は、なんで一人



でいるのかを聞いてみた。返ってきたのは、こんな答えだった。

「まあ、別に理由はない。これがいつもの俺だからだ」

そう言っていた。先輩はその後、更に目を腐らせていった。

本当によく分からない人だった。それでも、サツカーの実力は文句の付け所がなかった。サツカーを始めて数ヶ月で、雷門のみんなと同等にプレーしているから。

変な人だけど、凄い人なんだって思った。

けど、先輩と一緒に戦えたのはほんの僅かな期間だった。

陽花戸中に、エイリア学園マスターランクのザ・ジエネシスが現れた。雷門に勝負を挑み、勝った暁には先輩を連れて行くと言い出した。

結果は惨敗。先輩は、私達の前から連れて行かれた。それだけではない。吹雪さんも無理して倒れて、ジエネシスのリーダーはキャプテンの友達であるヒロトさんだと判明。

みんなは挫折してしまいそうになったけど、諦めない心で、私達は再びエイリアと戦う気力を取り戻した。

豪炎寺さんも迎え入れてイプシロン改を倒したものの、ダイヤモンドダストという新たなチームが現れた。

私達は沖縄から東京に帰るも、ダイヤモンドダストからの挑戦を受けてFFスタジア

ムに向かった。そこに向かうと、ダイヤモンドダストに連れ去られた先輩が一緒にいた。

私達は、なんでエイリア学園の味方に付いてるんだと思った。それでも、負けるわけにはいかないのです。私達はダイヤモンドダストと試合を行なった。アフロデイさんが助っ人にやってきて、引き分けて試合が終えた。

私達の前からダイヤモンドダストが消えるけど、まさかの先輩だけがスタジアムに取り残されるということが起きた。私が先輩の名前を呼ぶと、

「ひ、ひゃいっ」

嘯みながら返事した。あ、普段の変な先輩だつて分かって、少し安堵した。

お兄ちゃん、何故エイリアの味方をするのかと聞いた。けど、先輩は教えてくれず、そのまま後から現れた八神さんと共に姿を消した。その後、ダイヤモンドダストとプロミネンスが合体したチーム、ザ・カオスが現れる。そのチームにも、先輩はいた。

試合はジェネシスのグラン、もといヒロトさんと八神さんが現れて中断した。アフロデイさんが離脱したその後、私達の監督である瞳子がエイリアと繋がっているという疑いが出た。

監督曰く、エイリアには秘密があるから自分と富士山麓にいるあるアジトに向かって欲しいと。

最初、一之瀬さんや土門さん、リカさんはアジトに向かうことに消極的だったけれど、結果的にはみんな揃って向かうことになった。

富士山麓にあるエイリアのアジトに忍び込むと、そこでジェネシスのユニフォームを身につけた先輩がいた。誰かと通話していると、私達をとある場所に案内すると言って案内し始めた。

「なんでマップ見ながら案内してるんスカねえ？」

「単に道音痴なだけじゃねーの？うっしっし」

「おいコラ聞こえてんだよ。ここの複雑さ舐めんな。もはやダンジョンなんだよ」

壁山くんと木暮くんがそう揶揄うと、先輩は普段通りの様子で返してくる。エイリア学園にいても、やっぱり先輩は変わらず先輩なんだと思つて、クスツと笑つてしまった。私達は瞳子監督の全てを聞いて、その上でジェネシスと戦うこととなった。エイリア学園最強というのは伊達でなく、陽花戸中で戦った時より強く感じた。

それでも、みんなは諦めずに必死に食らいついて、最後の最後には雷門がジェネシスを倒した。

そして、私達は先輩の事情を聞かされていた。どうやら、先輩は昔八神さんと会つていたらしく、その時八神は助けられて先輩のことを好きになつたらしい。

その好意が段々と抑えられなくなつて、エイリアへと連れて行つたらしい。ただ、そ

れだけの理由ではなくて、実は先輩の妹さんがエイリアに監禁されていた様で、エイリアに、八神さんに逆らえば妹がどうなってもいいのかと脅されていたらしい。

先輩は妹さんを守るために、エイリアの味方に付いたということだった。

エイリア学園は無くなり、先輩は再び雷門の仲間となった。

その後、風丸さんや染岡さん達、怪我で離脱した雷門のみんなが操られて戦うことになったけれど、キャプテン達の強い思いで無事に助け出すことが出来た。

数ヶ月後には、F F I の日本代表の選考試合で先輩と出会うことになった。先輩は代表入りを果たして、アジア予選では先輩は活躍していた。世界大会に入っても、先輩は活躍していた。

その頃から私は、変な人という印象から、捻くれてるけど優しい人という印象に変わって、好感が持てる様になった。

イギリス戦の後では秋さんや冬花さん達も連れて、一緒に買い物に行ったり、立向居くんの新必殺技完成に手伝ってもらった。

なんだかんだで、人に優しくするんだ、あの先輩は。日に日に私は、先輩という居心地がいいな、と思い始めていく。

そんなある日。

イナズマジャパン第二試合の相手、アルゼンチン代表ジ・エンパイアの一戦の当日に、

キャプテンとお兄ちゃん、佐久間さんに不動さんがいないという状況に陥る。

試合の時間は迫るけど、お兄ちゃん達は帰って来ない。それどころか、監督達も出かけていて帰ってきていない。それでも試合に遅れるわけにはいかないので、お兄ちゃん達抜きでスタジアムに向かって戦った。

相手は鉄壁の守りを誇るチームで、最初は手も足も出なかった。けど、そんな時先輩が、いつものお兄ちゃんの代わりに司令塔になって、みんなに指示をしていく。

そのおかげで、みんないつも通りのプレーが出来る様になった。けれど、ジ・エンパニアのキャプテンのあまりに強いディフェンスの前に、私達は破ることが出来なかった。

それどころか、反撃をくらって0―2。3点目になるというそんな土壇場で、立向居くんが魔王・ザ・ハンドを完成させて止めた。

これでこれ以上簡単に点を取られることはない。後は、あのディフェンスを破れば勝機はある。

そう思っていたけど、ジ・エンパニアの必殺タクテイクスが非常に手強かった。何度攻めても点が取れない。やっぱり、キャプテンやお兄ちゃん、監督がいない状況で勝てるわけがなかった。

誰もが諦めかけたそんな時。

「……じゃあ諦めるのかよ。このまま」

比企谷先輩が、みんなにそう言った。

「試合はまだ残っているんだぞ。もう終わりにするのかよ」

「でも、あのデیفエンスが破れないんじゃないか……」

「だからなんだ？だから勝手に試合放棄するつもりかお前らは」

先輩が、先輩だけが、こんな状況になっても諦めていなかった。

「俺はお前らとサッカーをして学んだ。逆境に立つても、諦めない精神力を。……最後まで何がなんでも諦めない……それがお前らイナズマジャパンのサッカーじゃなかったのかよ。俺が見てきたお前らのサッカーは、全部偽物だったのかよ」

先輩はみんなにそう訴えていく。先輩なりに、彼らを奮い立たせるために。

「諦めなかったからアジア予選を勝ち抜いて、ナイツオブクイーンを倒すことが出来たんじゃないのかよ」

先輩に言われて、改めて思い知らされた。まだ試合の時間が残っているのに、諦めちゃダメなんだ。私達は、先輩に続いて応援した。私達に出来ることは応援するくらいだけだから。

みんなは先輩の言葉で立ち上がり、必殺タクティクスを打ち破る作戦に出た。試合は負けてしまったけど、それでも必殺タクティクスを破って、無失点を誇るジ・エンパイ

アから1点を取り返した。

この展開を作り出したのは、紛れもなく比企谷先輩のおかげなんだ。

私はこの時、この場の誰よりもカツコよく見えた。本人はものすごく恥ずかしがっていただけ、本当にカツコよかった。

それから私は、先輩の姿を目にすることが多くなった。特訓をしている時も、多分、他の人達よりずっと多く視線を向けていた気がする。意識して見ていたわけではなく、無意識に先輩の姿を捉えていたんだ。

第三試合のアメリカ戦も終えて、次はイタリア戦だけだった。そんな時、先輩の様子がおかしかった。何かを抱えている様な、何かに怯えている様な……とにかく、様子がおかしかった。

私は気になって、先輩に尋ねるけど。

「……なんでもねえよ」

ぶつきらぼうに言って、特訓を始めた。

絶対何かあったに違いない。八神さん、もしくは雪ノ下さんのことだと、私の勘がそう言っていた。

その時、スペイン代表レッドマタドールとの練習試合が行われた。影山のことで意識しているお兄ちゃんも気になったけど、本当に疲れている様な表情をした比企谷先輩も

気がかりだった。

試合終了後、お兄ちゃんは未だに表情が固いし、先輩は八神さんと雪ノ下さんに詰め寄られてる。それはいつもの光景だけど、先輩の表情はいつもとは違った。

そしてイタリア戦の前日に、私は何かあったのかと聞いた。案の定、先輩は誤魔化そうとする。雪ノ下さんと八神さんが関係していることだったんだらうけど、実際に何が起きたのかわからなかった。だから気になって、先輩に尋ねた。先輩に、私を頼って欲しいとお願いした。

「……悪いが、お前には頼らない」

私は、シヨックだった。シヨックというより、嫌だった。先輩が嘘をついてまで悩んでいることを隠していることもそうだけど、それ以上に私を頼らないって言われたことが嫌だった。

挙げ句の果てには、無関係と言われて突き放される。

嫌だ。そんなの嫌だ。

たとえ無関係だとしても、私は先輩の力になりたかった。それが私に辛い目に遭っても、苦しい目に遭っても、余計なお世話だと言われたとしても、私は先輩の力になりたかった。

先輩に、頼って欲しかった。



どんな些細なことでもいい。私を頼って欲しい。先輩が辛そうな表情をしているのは、私も見たくない。

私は、涙を流しながら懇願した。すると、先輩は折れて、分かった、と言った。特段何かをして欲しいことはないけど、話を聞いて欲しいとのこと。

私の感情は有頂天になる。先輩の力になれることが、そのことがとても嬉しかったから。私はこれから、先輩のために頑張る。

先輩は絶対弱音を吐かない。普段は弱音だらけだけど、あんなのは本当の弱音じゃないって分かってる。

だから、先輩に弱音を吐かせたい。きちんと悩みごとは、誰かに相談して欲しい。出来るなら、一番先に私に悩みを打ち明けて欲しい。

そしてイタリア戦が終了した後。リカさんと塔子さんが貰った伝承の鍵の片方を、私は付けてしまった。とても魅力的で、カッコよかったから。

先輩に似合うって言われると思ったけど、先輩の反応はイマイチだった。私は外そうとするけど、取れなかった。私はそのことを、あまり気にしなかった。

どうせレプリカだろうし、リカさんの言う通り人間が作った物だしいつかは取れるんだらうって。

でもそれは大間違いだった。レプリカではなく、本物の伝承の鍵だった。伝承の鍵を

付けた私やりかさんのところに、天使と悪魔が現れた。

私は怖くて動けなかった。お兄ちゃんや先輩が立ち向かうけど、吹き飛ばされてしまう。心配して駆け寄ろうとしても、悪魔に強引に手を掴まれてしまい、悪魔の目を見ると気を失ってしまった。

目を覚ますと、私の後ろには崖だった。下には溶岩が。変な衣装を着させられ、鎖に繋がれて動けなかった。

周りには悪魔が沢山いた。私は何をされるんだろうと。きつと、悪魔に酷いことをされてしまうんだと。

そう考えただけで、私はまた怖くなって涙を流してしまふ。

そんな時、お兄ちゃんや先輩達がやって来てくれた。私を助けるために、来てくれた。けれど、悪魔達の力は強大だった。後半戦になっても、スコアは0―2。時間だけが過ぎていく。

私は段々怖くなってきちゃう。私、もうここで終わりなのかなって……。

「……いい加減にしろよ」

その時、耳を疑った。酷く冷たく、低い声色でお兄ちゃんにそう言った。

それが、あの先輩だったんだ。

「……お前はあいつの兄だろうッ！お前が助けなくて、誰が音無を助けたんだよ！」

「比企谷……」

「妹が困っていたなら、兄は手を差し伸べて助けるもんだろ！それがどんだけ恥ずかしくて、惨めになっても、傷付いても！それが、兄としての役目だろうが！」

あんな感情剥き出しな先輩を初めて見た。アルゼンチン戦の時でさえ、あそこまでじゃなかった。

「俺は絶対に音無を助ける……あいつには、色々世話になつてんだ……汚かろうがラフプレーだろうが、そんなもん知ったことじゃない……あんなコスプレ軍団に、音無取られてたまるか……」

その瞬間、私は完全に恋に落ちた。

試合結果は3―2でお兄ちゃん達のチームの勝ち。私は堪らず、まず真つ先にお兄ちゃんのところへ飛び込んだ。恐怖を紛らすために、お兄ちゃんの温かさを得るために。

お兄ちゃんに飛び込んだ後、私は次に先輩に向かって飛び込んだ。先輩は挙動不審になつていたが、関係ない。

先輩の声。先輩の温かさ。先輩の匂い。

私はそれだけで、とても安心した。お兄ちゃんと同等の、いや、それ以上の安らぎや温かさを、私は得た。先輩は離れると言うが、私は先輩から離れたくなかった。

ずっと先輩と一緒にいたい。もう先輩から離れたくない。

比企谷先輩の優しさは、言ってしまうえば猛毒だ。先輩は捻くれてるくせに、自分の周りにいる人間には酷く優しい。

その優しさは、他人を病ませてしまうほどまで変えてしまう。その毒に侵されてしまえば、先輩とずっといたくなる。そんな毒だ。

八神さんの言うことが、少しは理解出来たかもしれない。

先輩の優しさを、独り占めしたい。優しさだけじゃなく、先輩の全部を独り占めしたい。先輩の声を聞くのは私だけがいい。先輩の目を見るのは私だけがいい。先輩の身に触れるのは私だけがいい。他の人に譲りたくない。

次から次へと、そんな独占欲が私を支配していく。このまま独占欲に身を任せたら、多分先輩は困っちゃう。だけど、私は先輩と一緒にいたい。

どうしたらいいんだろ……。

「…どうしたの、音無さん」

「へ？」

ずっと比企谷先輩のことを考えていると、不意に木野先輩に声をかけられた。突然のこと、変な声が出ちゃった。

「ずっと比企谷くんのこと見てたけど……何かあったの？」

「い、いえ！なんでもないんです！」

「？…：そう？ならいいんだけど」

私は再び、比企谷先輩の方に目を移してしまふ。ここまで言つて、今更だとは思ふけどはつきり言う。

比企谷先輩のことが好き。捻くれてるけどみんなに優しくする先輩が好き。恥ずかしいくせにみんなのために行動する先輩が好き。腐つた目だけどそれが却つてカッコよく見えて好き。蕩けるような先輩の声が好き。あの可愛らしいアホ毛を生やした先輩が好き。

全部好き。大好き。

もし比企谷先輩とこれから先もずっと一緒にいられたのなら、とても幸せなんだろうなあ…。

「…：よしー！」

決めた。

私は、比企谷先輩にアタックする。あの人の人格上、人の好意には慣れていないと思ふ。どんどんアタックして、私を意識してもらおう。

幸い、比企谷先輩は私に対して嫌悪感はないと思う。それに、おそらく悩みごとがあつたら頼ってくれる筈なんだ。このアドバンテージを、活かさないわけにはいかな

い。

先輩、大好きです。

いつか、この私の想いが。

先輩に、受け取ってもらえたらいいな。

## ザ・キングダムの間

俺達の準決勝の相手が決まった。グループBを全勝で勝ち上がった、ブラジル代表ザ・キングダム。

キャプテンのマック・ロニージョはブラジル史上最高と呼ばれるほどの実力者であり、そのロニージョに続く面々も個々の実力は相当高い。

それに、ザ・キングダムには攻撃型必殺タクテイクス、アマゾンリバーウエーブという最強のタクテイクスを持ち合わせている。

円堂を始めとしたみんなは、そんな強豪相手に戦えると楽しみにしていたが……。

「……八百長？」

「そうなんだ。今朝ロニージョに会ったんだけど、負けて欲しいって言われてさ……。でも、試合でのロニージョを見れば、あいつはそんなことを言うやつじゃないって思うんだ」

「……比企谷はどう思う」

「いや、どうって言われても……」

円堂と鬼道、それに土方が事情を説明してくれた。しかし、ロニージョがそういうこ

とを持ちかけるってことは、そうせざるを得ない何かがあるということだ。

可能性としては一つ。やつが絡んでいる。

「…あれ。何してるの?」

俺達が話し込んでみると、そこにアイシーがきよとんとした顔でこちらを見ていた。円堂や土方は、アイシーに大体の事情を説明する。

「…八百長、ね。でもなんかあるとしたら、ガルシルドってやつが原因でしょ」  
そう。

アイシーの言う通り、ブラジル代表の監督はガルシルドが原因と考えられる。ミスターKを操って日本代表を潰そうとしたんだ。何かあってもおかしくない。

「…やはりそこに行き着くか。だとすれば、このままにしておくわけにはいかないだろう」

「よし…じゃあ早速ブラジルエリアに行こう!何か分かるかも知れない!」

俺達は練習が終わった後、ブラジルエリアに向かった。ブラジルエリアに到着すると、街の色んなところでサッカーをしているのが映る。

「…すっげ…」

流石はサッカーが国民的スポーツとなっている国だけはある。サッカーだけでなく、陽気にサンバを踊っている人もちらほらいる。俺達はブラジルエリアを探索すると、何



やら誰かが揉めていた。

「待つてくださいい！」

「お前の親父には仕事を辞めてもらうからな」

「そんな……それじゃ俺達家族は生きていけないよ！」

俺達が目にしたのは、黒いスーツにサングラスをかけた男が二人、小さい子供とザ・キングダムofザ・ジャージを羽織ったDF、ラガルトが揉めている場面だった。

黒尽くめの男は、子供から持っていたサッカーボールを奪った。

「何するんだよ！」

「これはガルシルド様が与えた物……もうお前に使う権利はない。恨むなら試合でミスした兄を恨め！」

黒尽くめは奪ったボールをどこかへと蹴り飛ばした。サッカーボールを強引に奪われ、挙げ句の果てにどこかに蹴り飛ばされたことに対して、子供は号泣する。

「お願いします！次の試合、絶対期待に応えて見せます！だからもう一度！もう一度だけ、チャンスをご覧ください！」

「チャンス、か」

「お前達のミツシヨン成功率は常にチェックしている。それを忘れるな」

「はい！二度とミスはしません！」

「おい、揉めてるんだ」

彼らのそんなやり取りに、土方が横槍を入れる。

「あんた達は、イナズマジヤパン……」

土方は小さいな子供の頭を撫でて、慰める。

「ほら、もう泣くな」

「だつてえ……僕のボールを……」

「分かった。後で探してやるから、な?」

黒尽くめは舌打ちをして、その場から去っていった。

「ちくしょう! ガルシルドめ!」

「ガルシルドめ……」

「よせ、もういい……! ……行くぞ……」

二人はそそくさとその場から立ち去ってしまった。

「……やっぱり、ガルシルドが絡んでるのね」

「……さっきの黒尽くめのやつらも、ガルシルドの手下だろうな」

俺達はさっきの少年を探すついでに、蹴飛ばされたボールを探す。土方がボールを見つけ、俺達はラガルトと、ラガルトと一緒にいた子供を見つけた。

土方は子供にボールを渡した。

「あ、僕のボール！ありがとう！」

「…何か用か？」

「ロニージョに会いたいんだ。どこにいるか知らないか？」

円堂達はロニージョの居場所を尋ねるが、知らない様子だった。

「…そのロニージョが八百長頼んできたらしいの。何か知らない？」

「何ッ…?!」

どうやらラガルトは知る由もなく、八百長試合の件はロニージョの独断で頼みにきたらしい。

「ロニージョのやつ、そこまで思い詰めていたのか……」

「……兄ちゃんがこんなに苦しい思いをしているのは、ガルシルドのせいなんだ！みんな騙されたんだよ！」

「……話してみてくれないか？」

ラガルトは、ぽつぽつとガルシルドについて話し始めた。それはあまりに重く、残酷な話だった。

「…ガルシルドは、貧しくて困っていた俺達に、サッカーをするためのお金や場所を提供してくれて、家族にも仕事を与えてくれた。…でも、あいつに逆らったり試合でミスをしたら、厳しい罰を受けることになったんだ……俺達の家族にまで……」

「何!？」

「ガルシルドは、自分の作戦通り完璧に勝つことを要求した。ミスは一切許さない。だから……」

「…選手への負担が、バカみたいに大きくなってしまったか…」

「既に2人、オーバーワークで動けなくなってしまった……このままでは、二度とサツカーが出来なくなるやつも出てくる……。ロニージョは、君達イナズマジヤパンを強いチームと認めたからこそ、負けてくれと頼んだんだ……チームや家族を守るために、自分のプライドを捨てて……」

ラガルトトから、大体の事情を聞かされた。その事情に、円堂が、土方が、アイシーが、鬼道が怒りを抱いた。

「…まるで、家族が人質みたいなものじゃない…」

「そんなことを自分のチームの選手に……」

「なんて酷えやつなんだ!」

ガルシルドは恐ろしいやつだ。ザ・キングダムの選手は勿論、ミスターKやボディーガードすらも道具としか見ていない。にも関わらず自分は悠々と表舞台で猫を被っている。

そういうやつが、一番危険なやつだ。何を仕掛けてくるか読めたもんじゃない。

「…許せない！絶対！」

「ああ！こんなのおかしいぜ！なあ、なんとかならねえのかよ！」

「…どうしろって言うんだ……？」

「それは…」

「俺達にはどうすることも出来ない。ガルシルドの言うことに従うしかないんだ…」

「それで、本当にいいのか!？」

「……いいんだ……それで……」

ラグルトは、弟を連れて俺達の目の前から去っていった。そんな彼の後ろ姿は、悲  
痛な姿に見えてしまった。

-----

「やつぱりダメだ！このままじゃ、準決勝を戦うなんて出来ない！」

「ああ！あの二人の辛そうな姿を見たら放つとけないぜ！なんとか助けてやらなきや

よお！」

「ザ・キングダムを、ガルシルドの手から解放するんだ！」

「だが、簡単には行かないぞ」

「…家族のこともあるしね」

「……一つ、案がある」

俺がそう口にするのと、みんながこちらに注目する。

「ほ、本当かよ！」

「……ガルシルドのところには、きつと証拠がある。ロニージョ達を限界以上にプレーさせて家族を人質に取っていることに加え、ミスターKに力を貸したという証拠……。さっきのボディガードは、選手達をチェックしていると聞いていたし、証拠が無くても何か手掛かりはあるかも知れない」

「た、確かに……。それじゃ早速……」

「だが、これはかなりリスクだ。失敗すれば俺達はただじゃ済まない。最悪殺される可能性だってある。……。それでも、お前達は行くのか？」

そもそも、これは誰からも助けてくれなんて言われていないし、余計なお世話だと言われてしまう可能性がある。完全なるエゴだ。

しかし、彼らの答えは最初から決まっていたようだ。

「…ああ！俺は行くぜ！ロニージョを、ザ・キングダム みんなをガルシルドの手から解放しなくちゃ！」

「俺も！あいつらの辛そうな姿は放つとけないからな！」

「……お人好しだな、本当」

俺達は、ブラジルエリアの外れにあるガルシルド邸へと向かった。正面から堂々と入るわけにはいかないので、ガルシルド邸の外壁でバレないところから入れるところを探す。

「ここだ。この木を伝って行こう」

ガルシルド邸の内側へと伸びている太い枝を使って侵入する。サッカーグラウンドがあるが、そこら一帯にはボディーガードがいない。

俺達はガルシルド邸に近づき、草の茂みで目立たないところにある窓から侵入を試みた。円堂が開けようとするが、中々開かなかつた。

「任せろ」

円堂の代わりに、土方が交代して窓を開けようとした。鍵が掛かっているであろう窓に、土方は自分の腕力で強引に開けようとした。

結果、開いたには開いた。しかし、その直後に警報の音が邸宅中に響き渡る。

「強引に開けすぎだな……」

「だって、グズグズしてらんねえだろ？」

俺達は即刻ボディーガードに見つからぬように、情報が記載されているコンピュータを見つげるために、手当たり次第に部屋を開けていく。

しかし、中々そのコンピュータが見つからない。

「急がねえと捕まっちゃまうぞー！」

「……もう遅いけどな」

俺達の少し後ろには、小太りの男性とボディーガード四人が立っていた。

「見つけましたよ」

捕まるわけにはいかず、ガルシルド邸の廊下を走っていく。

廊下を走り回った先には、大きな扉があった。円堂がなんとかして開けようとするが、ここにも鍵が掛けられていた。

「下がれ円堂」

円堂は退いて、代わりに土方が。土方は自身の身体を使って扉に体当たり。鍵諸共ぶち壊して扉をこじ開ける。

土方ここに来て色々壊し過ぎじゃね？請求書とか送られないよね。

土方がこじ開けた部屋の中には、いくつか端末が揃っていた。おそらく、ここがガルシルドに関する情報がある筈だ。

「……(こ)ね」

「頼むぞ、アイシー」

「任せなさい」



アイシーはポケットからUSBメモリを取り出して端末に繋ぐ。そして、端末の中にある情報を次から次へと吸い出していく。

しかし、扉のあちら側から体当たりしている様な音が響いてくる。力のある土方と円堂が扉を押さえているが、いつまで持つか。

「……終わったわー！」

「よしーもういいぞー！」

次の体当たりが来る瞬間に、円堂と土方が扉から離れる。それを知らず体当たりを仕掛けたやつらは、勢いよく前に倒れてしまい、その隙に一気に逃げ出した。

しかし、ガルシルドのボディーガードは増え続けて俺達を追ってくる。サッカーグラウンドから、グラウンド外に続く架け橋に差し掛かったタイミングで、土方が止まる。

「ここは任せろ!!スーパァー……しこふみいいイイツ!!」

土方の必殺技、スーパァーしこふみが炸裂。地面が揺れてしまい、ボディーガードは架け橋から水が溜まっている大きな溝に落ちていく。

その隙に、俺達はガルシルド邸を脱出して、宿舎へと戻っていった。

—————

俺達は宿舎に戻り、すぐにモニターに先程のデータを映し始める。そこに映っていた

のは、俺達には全く無縁のものばかりであった。

「…響木さん」

「……とんでもないものを持って来てしまった様だな……」

「とんでもないもの？」

「ここに載っているのは、ガルシルドが世界征服を企んでいる証拠だ」

その言葉に、みんなは驚いてしまう。

俺達が取ってきた証拠が、まさか世界征服の情報だとは思わなかった。

この大会、マジでどうなるんだ……。

# ガルシルドの陰謀

「世界征服って……」

ガルシルド邸から盗んだデータは、まさかのガルシルドが世界征服を企んでいると予測出来るデータだった。

「……どういふことなんですか?」

「……油田だ」

「油田?」

油田とは、石油の元になる原油を掘る場所を指している。

「FFIを主催し、大会委員長でもあるガルシルドは、ブラジル代表ザ・キングダムの監督というだけでなく、世界にいくつもの油田を持つオイルカンパニー社の社長でもある。飛行機に自動車。石油は現代社会には欠かせないエネルギー。ガルシルドはその原油を抑えることで、今まで世界に大きな影響力を持っていた。その油田が枯れかけている」

「……枯れかけてる?」

次にモニターに映されたのは、ガルシルドの油田から算出される原油量の推移を示し

たデータらしいが、全く見方が分からん。

「物凄い勢いで減っているわね……。ピーク時の4分の1しかないわ」

流石は学年1位のユキペディア。よく分かるよなあんな謎のデータ。中学生には難しいどころこれ。

「原油が取れなくなるのは時間の問題だろう。そしてこれが…」

原油量の推移のデータから、次は様々な兵器が映し出されていた。

「最近買収した軍事関連企業の兵器に関する生産計画だ。どの兵器の製造数も5倍に引き上げられている」

俺は映されたデータに驚きを隠せなかった。

戦車などの兵器にも驚きはしたが、俺違う部分を見つめていた。

「…アイシー、ちよつとパソコン貸してくれ」

「え？う、うん……」

俺は気になるデータをモニターに映した。モニターに映されたのは、難しい内容書かれたいくつものデータ。パツと見た感じ、おそらく兵器生産にあたっての計画書だろう。

「…これがどうしたの？」

俺は気になる部分をマーカーで引いた。その部分を見たみんなが、特にFFで優勝し

た際の雷門メンバーが驚いていた。

「なッ…!?か、神のアクア…!?」

「か、神のアクアって、世宇子が使っていた…!?」

「…あれには身体能力を強化する成分が入っていたんだろ。この計画書には、神のアクアの量産について書かれてる…」

世宇子の総帥は影山。その影山が操っていたんだから、バックにいるガルシルドが神のアクアに関連しても不思議ではない。

「…それだけじゃない。次の資料の…」

俺は再びマーカーで線を引く。次に、目を大きくしたのはエイリア学園の共々。

「……エイリア石だ…!?」

「ああ。この計画書にも、エイリア石のエネルギーを吸い取る機械や、そのエネルギーを人へ送る機械の量産化することが書かれてる」

「つまり、兵器と同時並行で神のアクアやエイリア石のエネルギー供給機を量産しようとしてるってことなの？」

「エイリア石はもうないから、おそらくその供給機を量産するのは不可能だろうが、神のアクアなら量産出来るかも知れない。影山が持ち込んできたってことは、必ずガルシルドが関連している筈だからだ」

つまり、今までのことがガルシルドに繋がると言えば繋がることになる。

「でも、なんで神のアクアやエイリア石を……?」

「神のアクアやエイリア石は身体能力を強化するドーピングアイテム。サツカーに関わらず、あらゆる面で圧倒的アドバンテージを得ることが出来る。この戦車や戦闘ヘリの情報から察するに、神のアクアやエイリア石を兵士に使うつもりなんだろう。それがあれば、戦争でも役立つからな」

「せ、戦争?!」

「戦争ってどういうことですか、先輩!」

戦争というパワーワードに、みんなは動揺していた。俺は、続けて説明し始める。

「…戦争をするのに石油は必要不可欠だ。もし今戦争が起これば、どの国も限られた量の油田を奪い合い、その価格は一挙に高騰する。ガルシルドの枯れかけた油田も莫大な利益を生むことが出来る。さらに、この兵器に加えて神のアクアなどを自らが供給すれば、サクツとガルシルドが世界を支配出来るって寸法だ」

俺達なんて、路傍の石でしかない。そう思わせるほど、ガルシルドの力は強大だということだ。

「…比企谷の推測通りだ。ガルシルドは戦争を引き起こそうとしている。ガルシルドがF F Iを開催したのは、参加各国を互いに歪ませ、戦争を引き起こさせるためだ。その

証拠も揃っている」

「……まさか、F F Iの裏にそんな事情があったなんて……」

「ガルシルドの闇……総帥が言っていたのはこのことだったのか……」

中学生には重い話だ。戦争とは無縁の中で生きてきたんだから。

まあ危うく俺と八神と基山は戦争に駆り出されそうだったけど。

「……許せない。サツカーを、そんなことのために利用するなんて……」

サツカーを穢されたと感じた円堂は、ガルシルドに怒りを抱く。

「……だが、それも終わりだ。八幡達が取ってきたデータは我々の手中にある。警察に

突き出せば、ガルシルドはすぐ逮捕されるだろう」

「……そうですよね！これだけ証拠があれば、逮捕出来ますよね！」

「これは俺が警察に持って行こう。お前達は準決勝に集中して挑め」

「はー!!」

—————

翌日の朝。

響木監督はF F I運営委員にガルシルドの悪事の証拠を持って出かけた。円堂と土方は、このことを一刻も早く伝えるためにロニー・ジョ達のところに向かった。

それから数時間後。

「…ガルシルドってやつ、早く捕まるといいな」

「…ま、そうだな」

すると、俺の電話に着信が入る。着信先は、陽乃さんだ。

「…もしもし」

「比企谷くん。今すぐイナズマジパンのメンバーと監督連れてエントランスエリアの病院に来て」

電話に出た陽乃さんは、少し焦り気味というか、とにかくいつもの子供っぽい陽乃さんではなかった。

「…どういうことですか？」

「君達のところに、サングラスかけて紫のバンダナ付けてるおじさんいたでしょ？あの人、今さっき道端で倒れていたの」

「えっ、はあ!？」

「苦しんでる様子だったからすぐ救急車を呼んだの。とにかく、早く来なさい」

そう言って陽乃さんは電話を切った。

「どうしたの？」

「…クララ。今すぐ古株さんにキャラバンを出すように言ってきてくれ」



「う、うん。分かった」

俺はタイミングよく帰ってきた円堂や土方、それにみんなと監督を呼んで、陽乃さんの話をそのまま伝えた。みんなや監督は、その事実には相を変えろ。

俺達はすぐキャラバンに乗り込んで、エントランスエリアにある病院へと急いだ。

俺達が手術室の入り口前にいくと、陽乃さんが腕を組んで待っていた。

「来たね、比企谷くん」

「容態はどうなんですか？」

「家族でもなんでもないから教えてもらえなかったけどね。見た感じ、昨日今日で悪化した感じはしなかったよ。前々から患ってたんじゃないかな」

「…監督は何か知ってるんじゃないですか？」

鬼道が久遠監督に尋ねる。それに久遠監督は縦に頷き、話を始めていく。

「…その人の言う通り、響木さんは昔から重い病気を患っていた。医者からは何度も手術を勧められていたが、FFIが終わるまでは、と頑なに断っていたそうだ」

「…響木さん…！」

「……じゃ、私は行くね。これ以上上部外者がいても邪魔だろうし」

陽乃さんはそう言って立ち去ろうとする。が、彼女は一旦止まって、こちらに振り向

いてこう忠告した。

「…ガルシルドには気をつけなさい。いくら証拠を持っていても、それを握り潰すくらい力はあから」

「姉さん……」

「じゃあね。準決勝、楽しみにしてるから」

陽乃さんはそんな忠告を俺達に残して、病院から去っていった。それから少し時間が経つと、看護師の方がこちらに来た。

「あの、すいません。警察の方がいらしてます」

「私が行こう」

看護師は久遠監督を警察のところに案内していく。久遠監督は、警察にガルシルドの悪事の証拠を渡す。それを受け取った警察は、病院から去っていく。

—————

それからまた翌日。

今日はとうとう準決勝だ。しかし、周りの顔は未だに暗い。響木監督の容態が分からないままだからだ。いすると、食堂に勢いよく木野が入ってくる。

「今、病院から連絡があつて、響木監督の検査の結果もいいから、手術は予定通り行うぞうよー！」

「…そうか……」

「上手くいきますよね……?」

「あつたりまえだろ！そんなもん、失敗なんかしてたまるかよ！」

「ああ。いかに大変な手術だろうと、響木監督なら必ず乗り越えられる」

段々と、みんなの士気が上がっていく。

響木監督とあまり関わりはないけれど、手術が成功するよう祈つておこう。

「よし！今日の試合絶対勝つぞ！」

「勝つて、響木監督に勝利のプレゼントっす！」

「おお!!」

これで迷うことなく、準決勝に集中することが出来る。

俺達は今日の試合会場である、ウミガメ島のウミガメスタジアムへと向かった。

—————

俺達はウミガメスタジアムに到着し、試合の準備を始めていた。相手はグループBを

全勝で勝ち上がったチーム。一発勝負の決勝トーナメントでは、一つの油断は命取りとなる。

俺達がウォーミングアップを行なっていると、

「な、なんだッ？」

突如スタジアム内が大きく揺れ始める。それと同時に、スタジアムが暗くなり始める。空を見上げると、巨大な飛行艇がスタジアム上空で停泊していた。

その巨大な飛行艇に付属している、卵型の鉄の塊がゆっくりと降ろされてくる。段々と降りてくると、その場で卵型のそれはパツクリと割れてしまい、中から金色の小さなピラミッドが見えてくる。

ピラミッドに取り付けられているシャッターが開いていき、中から二人ほど姿を表す。

中から現れたのは。

「ガルシルド!？」

ガルシルドとその側近の小太りの男が、派手派手しくスタジアムに登場してきた。

「なんであいつが！警察に捕まったんじゃないのか！」

しかし、ガルシルドは堂々とスタジアムに登場してきた。これを見た久遠監督は今すぐ警察に電話するが。

「…そうですか」

「監督？」

「警察では、そのような証拠を受け取っていないそうだ」

陽乃さんが言っていたのは、こういうことだったのか。

いくら重罪を重ねようが、自身の財産や権力を行使すれば罪は罪として認められることはない。

つまり、ガルシルドは捕まらないということだ。

「…どうすりゃいいんだよ。ガルシルドがいるつてことは、俺達が勝ったらロニージョ達の家族はとんでもないことに……」

「そんなこと出来ないっス……」

みんなの心が乱れ始めた。俺達は響木監督のために、そして世界一のために負けられない。しかし、仮に俺達が勝てばロニージョ達やロニージョ達の家族はヤバいことになる。

……それでも。

「……この試合は勝つ気でいく。相手がどんな事情を持っていようが、そんなことは関係ない」

「比企谷!？」

「で、でも俺達が勝ったらロニージョ達の家族は行き場を失って……」

「かも知れないな。だが、こつちにも負けられない理由つてのがあるだろ。それとも何か？ あいつらに情けをかけて、わざと負けることが出来るっていうのかよ」

「そ、それは……」

「……サッカーバカ風に言つてやる。どんだけ辛い試合になろうが最後まで諦めんつてことだ。勝利の女神は、諦めないやつに微笑むとかなんとかつてな」

確かにロニージョ達の家族は流石に同情してしまう。しかし、だからといって俺達が負けるわけにはいかない。

世界一のために馬鹿みたいにサッカーやってきたんだ。ここで折れたら全てが泡と化す。

「……比企谷の言う通りだ！ この試合、絶対勝つぞ！」

「円堂……」

「……これは俺達とガルシルドとの戦いだ。サッカーを戦争の道具なんかに使おうとする卑劣なやつだ！」

「……ああいうやつを放っておけば何するか分からんからな。……今朝お前ら言つてたどろ。響木監督に、勝利のプレゼントするつて」

「……ここで負けたんじゃ、響木監督の手術が成功してもきつと響木監督は納得しない。」

どんな理由があろうが、俺達は勝つしかないんだ。

「…みんな…この試合必ず勝つぞ！」

「おう!!」

俺達はポジションに付いた。FWは豪炎寺、宇都宮、基山。MF、風丸、鬼道、俺。Dは、吹雪、壁山、土方、飛鷹。GKは円堂。

キックオフはイナズマジヤパンからだ。審判がホイッスルを啞え、そして試合開始の音を高らかに響かせる。

ボールは宇都宮に渡る。宇都宮が攻め上がっていくが、すぐさまロニージョがすれ違い様にボールを奪ってしまふ。

「行くぜ、ボーイ」

攻め上がってくるロニージョの表情は、まるで人が生み出す表情ではなかった。

彼の目は、完全に死んでいたのだから。

## ロニージョの暴走

準決勝第一試合。イナズマジヤパンvsザ・キングダムの試合は、ロニージョのワンマンプレーから始まる。

「ロニージョ……?」

「昨日までとは、何か違う!」

土方の言う通り、ロニージョの様子がおかしい。まるで、何かに操られているかのようだ。

「チェックだ!」

「よし、俺が!」

風丸はロニージョに向かってスライディング。しかし、ロニージョは飛んで躲す。続いて鬼道も向かっていくが、ロニージョの圧倒的なテクニクで一瞬にして抜き去られる。

「止める!」

俺はロニージョに対してディフェンスに入る。俺はロニージョに必死に食らいつく。しかし、上手い股抜きで俺も止められなかった。



「ロニージョ！回せ！」

ガトがロニージョに声をかけるが、それを完全に無視して一人で上がっていく。

「困い込め！」

サイドのDFである吹雪と飛鷹がロニージョに向かっていく。

「スノー……エンジェル！」

吹雪はスノーエンジェルを発動するが、ロニージョは物ともせず突破。続いて飛鷹が。

「どりゃああアアツ!!真空魔ツ!!」

飛鷹は真空魔を繰り出すが、それすら難なく突破されてしまう。

「今度は俺っス！」

壁山はザ・マウンテンの構えに入るが、その前に抜かれてしまった。最後には土方が待ち構える。

「スーパー……しこふみいいイイツ!!」

土方は渾身のスーパードリフトを繰り出すが、ロニージョはそれも軽やかに躲けてしまう。まさに、神業とも言えるべきプレーだ。

ロニージョはそのまま円堂に向かってシユート。しかし、ボールは大きくゴールから逸れていく。

「ロニージョー・なんでチームメイトにボールを渡さねえ！あいつらを信用していねえのか!?今までガルシルドの野郎に屈してても、ザ・キングダムサッカーは守ってきただろ！みんなのために頑張ってきたじゃねえか！」

さっきのロニージョのプレーに、土方は納得がいていない様子だった。しかし、ロニージョは何も答えずに自分のポジションに戻っていく。

「どうしたんだロニージョ。さっきのシユート、お前らしくないぞ」  
「次はボールを回せよ。頼むぜ」

ガトがロニージョの肩に手を置くと、ロニージョはそれを振り払った。その行動にザ・キングダム、そしてイナズマジャパンは目を大きくする。

イナズマジャパンのゴールキックから試合が再開する。ホイッスルが響くと、再びその瞬間、ロニージョの目から光が消えていく。

「……まさか……」

俺はガルシルドに視線を向けた。もしかすれば、ロニージョの様子がおかしくなるのはガルシルドが何かをしたからかも知れない。

「いくぞおー!!」

円堂からのゴールキックで風丸に渡る。風丸から鬼道に。鬼道から俺に繋いでいく。俺はボールを持って攻め上がっていく。

すると、後ろからラガルートがバク転しながら迫ってくる段々と距離が近づき、そのまま俺を飛び越してくる。

「ローリングスライド!!」

俺を飛び越して、勢いに乗ったままのスライディング。不意を突かれた俺は、ボールを奪われてしまう。

「よし、繋ぐぞー!」

「こっちだー!」

ラガルートがガトにボールを繋ごうと試みたそんな時。ラガルートの動きを阻止した者がいた。

ボールを奪ったのは、ラガルートと同じチームメイトのロニージョである。ロニージョは構わずイナズマジヤパン陣内に切り込んでいき、続け様にディフェンスを突破していく。

「ロニージョ!!」

土方の豪快なスライディングも、ロニージョの前では無になる。ロニージョは飛んで躲し、そのままシュート。

だが、またもやゴールから外れてしまう。

再び円堂からのゴールキックとなるが、ロニージョの様子がおかしい。試合の時もそ

うだが、序盤から飛ばしているからか、ロニージョの疲労が尋常じゃない。

ロニージョは自陣に戻ると、ガトに胸ぐらを掴まれてしまう。

「お前なあ、さっきのあれなんだよ!？」

「待て! 監督が見てるんだぞ!」

「イナズマジヤパンと、観客もな」

ガトは周りを見て冷静になって、ロニージョから手を離す。ロニージョは何も言わずに、自分のポジションに戻ろうとした時。

「お前…監督に”RHプログラム”をされたんじゃないのか?」

ラガルートがロニージョに尋ねると、ロニージョは止まる。

「RHプログラムって……」

「本当なのか、ロニージョ」

ロニージョは何も答えずに、ただただ苦虫を噛み潰した様な表情をしている。そんな様子を見たみんなが、ロニージョの周りに集まる。

「やつぱり、RHプログラムを受けたんだな? 答えてくれ、ロニージョ!」

「……仕方なかったんだ!」

ロニージョは頭を抱えて、怯えた様にそう答えた。

「……いつだ」

「昨日だ」

「だからか……プログラムが身体に馴染んでないんだ。その疲れ方、普通じゃないぞ」

「力の加減が出来ないから、シユートが決まらないんだな」

「……このゲームの間に、力をコントロールしてみせる！俺達は負けられないだろ！俺が実験を受ければ、みんなに手を出さない……やつは約束してくれた！家族だって無事でいられる！みんなを守るには、他に手はなかったんだ！」

ロニージョは強い男だ。

家族やチームメイトのために、ガルシルドの実験を自ら受け入れる、その誰かを守りたい気持ち。

だが、ガルシルドはそんな約束は守らないだろう。自分さえ得していれば、他の連中なんてどうだっていいと考えている。

ある意味、人間らしいといえ、らしいけどな。

「……自分で抱え込むな」

「水臭えぞ、ロニージョ！」

「……でも……俺は……！」

「こうすればいいんだ」

レオナルドが指笛を吹くと、さつきまで豪炎寺、宇都宮、基山にガツチリ付いていた

マークが外れていき、そして新たにマークに付いたのはロニージョであった。

その策に、イナズマジヤパンと観客はどよめいていた。

「……成る程な……」

「…何か分かったのか？」

「試合開始すると様子がおかしくなるロニージョを、二人がかりでマーク。これ以上好き勝手やらせたらロニージョは使いものにならなくなるからな……。こつちとしては、FW三人フリーになったからチャンスになったけど」

円堂からのゴールキックで再び試合再開。ロニージョの様子がまたおかしくなり、動き出そうとするがガトとラガルトが抑える。

俺達はその隙に、地道にボールを繋いでいく。

ボールを受け取った基山が、ゴールまで駆け上がっていく。

しかし。

「ローリングスライド!!」

ラガルトの華麗なディフェンスが基山の攻めを封じる。ラガルトに鬼道がマークに入るが、ラガルトはレオナルドにボールを繋いだ。

レオナルドがボールを受け取り、攻め上がっていくと、レオナルドを含めた7人が勢いよくこちらに攻め上がってくる。

「このフォーメーションはッ……！」  
来る。

やつらの最強の必殺タクティクス。

「行くぞ！ザ・キングダム、必殺タクティクス！」

「おう!!」

「止める！」

「アマゾンリバーウエーブ!!」

7人の背後に、大きなアマゾン川の波が巻き起こる。

「うわああああアアツ!!」

アマゾンリバーウエーブが猛威を振るう。俺達は波に吞まれてしまい、そのままゴール前の進入を許してしまう。

「ロニージョー！」

レオナルドがボールを打ち上げる。

「プログラムなんかには負けるなッ！」

「打たせねえエツ!!」

飛鷹がボールに向かって大きくジャンプ。それに合わせて、ガトとラガルトがロニージョーのマークを外す。ロニージョーは遠慮なく飛んで、レオナルドのボールを受け

取った。

ロニージョは空中で円堂に向かって思いきりシュート。

「いかりのてっつい…V2!!」

進化したいかりのてっついのでロニージョのシュートを抑えようとするが、いかりのてっついには破られてしまう。

なんとかボールを弾き飛ばしたものの、こぼれ球をロニージョのオーバーヘッドで押し込まれてしまう。

「しまったー！」

ロニージョのシュートが決まってしまった。ザ・キングダム、0―1で先制する。

「…アマゾンリバーウェーブとロニージョの暴走を組み合わせることが目的だったのか……」

やつら本来のサッカーでないことは、なんとなく感じ取れる。しかし、それを抜きにしてもやはり強い。

点を取られた俺達は、試合再開後、すぐに反撃を開始した。しかし、ザ・キングダムも一筋縄ではいかない。

ボールを奪われてしまい、レオナルドに再び渡る。

「行くぞー！」



「おう!!」

ザ・キングダム、またはアマゾンリバーウエーブの体勢に入った。前方から押し寄せる波に、俺達は止めることができない。

「ロニージョー!」

レオナルドからのセンタリング。ロニージョーが大きく飛び、円堂に向かってシュート。

「いかりのてっつい…V2!!」

円堂は再びいかりのてっついを繰り出す。しかし、また破られてしまう。弾いたものの、ボールは絶好のシュートチャンス。

すると、そのボールを両足で挟んで、なんとか2点目を防いだ人物が現れる。

「飛鷹!」

飛鷹のディフェンスで、2点目を阻止した。そこで、前半終了のホイッスル。ザ・キングダムのリードでハーフタイムを迎える。

「おいロニージョー!」

ベンチに戻ろうとするロニージョーを、土方が引き止める。

「初めの方、随分とめちやくちやなサッカーだったよなあ!」

「……俺の勝手だ。放つといってくれ」

「放つとけるかよ！納得いかねえんだよ！」

「土方、戻れ」

「けどよ、円堂……」

「……俺達はサッカーしてんだ。どんな手を使おうが、勝たなきゃならないのは互い様だ」

ラガルートが激しく体力を消費したロニージョを連れて、ベンチに戻っていく。

「…彼らの事情が分かっているから、中々そうもいかないんだがな…」

「じゃあ負けるか？」

「いや。……ただ、苦しいだけだ」

「……そうだな」

「…ロニージョは無理をしている。その無理をチーム全体がなんとかしようとしている。ゴールからそれがよく見えるんだ」

「やつぱりガルシルドだ…！ガルシルドなロニージョ達を苦しめてるんだ！」

「…だからって俺達には何も出来ない。あいつは堂々とこの場に現れやがった。俺達の無力、そしてロニージョ達の無力を嘲笑いに来たんだ」

俺達は何をしようが、全て無になる。警察にまで手を回された。いくら証拠を掴んでも、やつは揉み消した。

何も出来ない虚無感に満たされてしまい、俺達は自分のベンチに戻る。  
すると。

「実験は終わりだガルシルド！」

ザ・キングダムスのベンチには、ライオコット警察と、スキンヘッドの男性、そして鬼瓦刑事がいた。

「おや？レオン・サムス前監督ではないか」

「何故ここにいるのか、驚かないのか？」

鬼瓦刑事は合図を出すと、警察達がガルシルドと側近の男を包囲する。

「お前には聞きたいことが山ほどあるんでな。ガルシルド・ベイハン！ちよいとばかり事情聴取に付き合ってもらうぞ」

警察達の登場で、会場内がざわついていた。その後すぐに、医者達がロニージョの周りにやって来て、何やら身体検査を行なっている。

「監督、行ってみてもいいですか？」

円堂が尋ねると、監督は縦に頷く。円堂に続いて、土方までもが鬼瓦刑事のところに向かった。

「ひゃっはろー」

「ふあッ!？」

突然、耳元で独特な挨拶を囁かれた。俺は驚いて、変な声を出してしまった。突然現れて、こんな挨拶するのは彼女しかない。

「…陽乃さん。俺耳弱いって言いませんでしたっけ」

「知ってるよー？わざとに決まってんじゃない」

「うぜえ……………で、今度は何しに来たんですか？」

「ほら、あそこのスキンヘッドのおじさん。あの人連れて来たの。ザ・キングダムの本래の監督だつてさ」

「ああ……………」

そういえば、陽乃さんはいつしかこんなことを話していた。影山のことについて、ザ・キングダムのことを話してくれた。

世界大会が始まってから、監督がガルシルドに変わったとか何とか。

「あの人、世界大会が始まってからガルシルドに監禁されてたんだつて。選手がどうなってもいいのかつてね」

「…マジか……………」

「次にあの子ね。比企谷くんならもう気付いてると思うけど、あのロニージョつて子、ガルシルドに酷いプログラムの実験を受けさせられたらしいの。そのプログラムの名は、RHプログラム」

「RHプログラム……？」

「人間の身体能力を限界まで引き上げる強化人間プログラム……まあドーピングってやつだよ」

ドーピング云々は、彼らの会話から聞いてなんとなく分かった。

「RHプログラムの末路が、あのボロボロの身体」

「……ロニージョ……」

「……ま、家族やチームメイトを人質にされていたからね。逆らえば罰を受けてしまう。だからその人達を守るために、彼は一人で実験を受けたの」

「酷えじゃねえか！」

「そんなことをしなくても、ロニージョ達は十分に強い選手だというのに！」

染岡や豪炎寺がガルシルドを非難する。しかし、ガルシルドは鼻で笑う。

「フン。力を与えてやったのに、非難される謂れはないわ。ロニージョは納得してプログラムを受けたのだ」

「家族を人質にされて、何が納得だあ?!」

「……俺達は全てを知っているんだ。お前は戦争によって巨万の富を得ようとしている。RHプログラムも、サッカーをするためではなく、戦争のために作り出されたものだ」

「……ロニージョは素晴らしいサンプルだ。そして、ここは私にとって実に意義のある実

「験場となった」

「それはどうかなあ？」

俺の近くにいた陽乃さんが、いつの間にか審判の目の前にいた。陽乃さんは、手首に繋がれていたホイッスルを無理矢理千切った。

「……このホイッスルで、君の中にあるRHプログラムが発動していた……だよな」

ロニージョは陽乃さんの尋ねに対して頷いた。

「さあ、これで自由だ」

「……ありがとう」

「来てもらおうか、ガルシルド」

ガルシルドは何も答えず、警察達に連行されていく。ついでに側近も。

「比企谷くーん。私疲れたよー。なんかご褒美欲しいなあー」

「あの無闇矢鱈に触ってくんのやめてくださいマジで」

「ぶーぶー」

「それより、まあ、あれです。……ありがとうございました。色々と、頑張ってくれたわけですし」

「……お礼は、君の身体で、つてね」

「それは結構です」

そのセリフは逆じゃないですかね。陽乃さんが言うのと殺される未来しか見えないのは俺の気のせいですかそうですか。

「…ま、君達が盗んだ証拠のおかげでもあるけどね」

「？あの証拠の中には、RHプログラムのことは記載されてなかったですけど……」

「ああ、プログラムや監督の件はミスターK、影山が死んじゃう前に手がかりを残してくれたんだよ」

「…総帥……」

「…ま、そんなところだから。これからガルシルドのことで私も付き合わなきゃならないし、私は行くね。ばいばい、比企谷くん」

陽乃さんはそう言い残して、ガルシルドを連行する警察の後を追っていく。本当、相変わらずだな。あの人は。

「…先輩」

俺が陽乃さんの背中を見つめていると、俺のユニフォームに音無が摘んでくる。音無は、ぷくつと頬を膨らましている。

「…あの人、誰なんですか？」

「雪ノ下のお姉さんだ。イタリア戦でも見ただろ」

「…仲がいいんですね」

「やめろやめろ。あの人と仲がいいとかなんの罰ゲームだそれは」

「だって、あの人すつごく先輩に引つ付けてたじゃないですか。先輩も突き放さないし」  
「突き放せないだけだ。あの人を敵に回したら俺の選手生命どころか、人間生命が終わる」

「…なんかやだ」

音無の掴む力が強くなる。

それだけじゃない。雪ノ下や八神までもが、目を死なせている。目を死なすつてなんだよ。

「…まさか、姉さんに好意を抱いてるの？ 貴方が？」

「私は許さないからな。八幡にあんな雌は必要ない」

相変わらず今日も絶対好調ですな面倒くさい。

円堂はロニージョに向かって、笑顔でグッドポーズ。

「良かったな、ロニージョ！これで本気のサッカーが出来る！」

「本当に、ありがとう！」

「ロニージョ！お互い、本気のプレーで家族に応えようぜ！」

「ああ！」

ガルシルド達はスタジアムから出て行き、入場口まで連行されていたそんな時。



「ガルシルド！」

ロニージョがガルシルドを引き止める。

「最後に言いたいことがある！この試合で、何故必殺技を打たなかったか、分かるか」

「…それがどうした？」

「たとえプロگرامでお前に支配されようとも、俺の心はずつと家族のものだ！仲間のものだ！俺のものだ！だから必殺技は打たなかった。俺が完全に負けてないと、お前に伝えるために！」

ロニージョはガルシルドに対して、屈しないことを表すために必殺技を使用しなかったことを言い放つ。

しかし。

「……気が済んだか？」

しかし、ガルシルドはロニージョの話などを全く聞いていない様子だった。

「私が去ったあと、ぬるい玉遊びに興じるがいい。だが忘れるな……私が逮捕されたら、お前らの家族はどうなると思う？」

「ッ!!」

その瞬間、ザ・キングダム一同の表情が一転した。先程の清々しさは消えて、今はまるで後悔しているかの様な表情だ。

…何があつたんだらうか。

## サッカー王国の逆襲

俺達の目の前からガルシルドが逮捕された。しかし、ロニージョ達の顔は浮かかないままだった。そんな様子のまま、後半戦が始まろうとしていた。

イナズマジヤパンはここでメンバーチェンジ。宇都宮に代わって染岡。点を取るために、攻撃のリズムを変えるという考えだろう。

緊張の後半戦、開始。

ボールはロニージョに渡る。鬼道がすぐさま向かっていくが、ロニージョはガトにパス。風丸がガトにマークに付くが、ガトはコルジアにパス。コルジアも、モンストロにパス。

守りに徹した様なパス回し……これがザ・キングダム本来のサッカーだっていうのか？

……いや、表情から読み取った感じではそうは見えない。ザ・キングダムの、本来のサッカーではなさそうだ。

それどころか、前半より動きが悪く見える。

ガルシルドが捕まって、ロニージョ達に危害を加えるやつはいないわけだが……。

「ッー」

……そうか。そういうことだったのか。

ガルシルドが捕まったことが却って、ロニージョ達を苦しめている。その理由は、確かにあった。

彼らが守りに徹していると、

「がっかりだ!!」

俺の後ろから怒号が飛んできた。

普通にびっくりしたんだけど。ちよつと漏らしそうになつちやつた。ちよつと土方さん、あんた顔怖いんだから声まで上げたらマジビビるんだけど。

「ガルシルドが逮捕されて、本気のザ・キングダムが見れるかつて期待していたのによお」

ロニージョは何も答えられなかった。

「ロニージョー!」

レオナルドからロニージョにパス。直後、前線にいた基山と鬼道がロニージョに向かって走っていく。

「これじゃパスできない……!」

ロニージョはバックパスを諦めて、仕方なく攻め始めた。しかし、ロニージョの前に

は土方が。

「ブレード……アタック!!」

土方がかかとかから生み出した衝撃が、ロニージョを吹き飛ばす。

「これがイナズマジヤパンのサッカーだ!」

土方がボールを持ち込んでいく。前からラガルートが突進してくるが、土方はヒールパスで吹雪に繋いでラガルートの裏をかいた。

ボールは土方に戻して、二人は攻め上がっていく。

土方と吹雪は、あの必殺技の体勢に入った。

「サンダー……!!」

「ビーストツ!改!!」

韓国戦で見せた二人の連携技。進化したサンダービーストが、GKファルカオに飛んでいく。

「カポエイラ……!!」

しかし、ファルカオは必殺技を出す間も無く、ゴールを許してしまう。

これで1-1の同点となった。

「ロニージョ、どうしたんだ?」

円堂がロニージョの様子を見兼ねて、駆け寄った。

「前半より、プレーにキレがなくなってる。ガルシルドは刑事さんが必ず逮捕するって約束してくれた！もうお前達を脅かしたり、命令したいするやつはいないんだぞ！」

「……家族のこと、だろ」

「ツ……ああ……」

俺が端的に言うのと、ロニージョは力なく頷いた。

「家族って？」

「ロニージョ達の家族は、ガルシルドから仕事をもらってたって言うただだろ。そのガルシルドが逮捕された今、ロニージョ達の家族は仕事を無くすってことだ」

ある意味、ザ・キングダムはガルシルドがいてもいなくても変わらないってことだ。

「……彼の言う通りさ。サッカーで優秀な成績を収めることで、家族の生活を楽にさせようと頑張っていたら、逆に家族を苦しめることになってしまふ。サッカーでの自由は手に入れたのかも知れない……だが、本当にこれで良かったのか？？ガルシルドの言うことを聞いていれば、少なくとも家族は……」

未だに苦悩するロニージョに、土方が喝を入れる。

「お前達は、何も分かかっていない！」

「お前に何が分かると言うんだ?! 恵まれた環境で生活してきたお前に、俺達の何が分かる?!」

「……家族の想いだ」

「……家族の？」

「俺にも兄弟がいる。一番上の俺が、世界大会に出場している間、弟達は寂しい思いをしている筈だ。だが、それでも弟達は俺を世界大会に送り出してくれた。何故だか分かるか？」

土方の問いに、ロニージョは何も答えなかった。

「自分達のことより、俺がサッカーで活躍する姿が見たいからだ。弟達もその思いがあるから、俺は頑張れる。ロニージョ、きつとお前達の家族もそうだ。お前にサッカーをさせてやりたい……お前の活躍を見たいからこそ、お前をこの大会に送り出してくれた筈だ」

「………」

「しっかりしろ！兄ちゃん!!」

土方がロニージョに説得していると、観客席から大きな声が飛び込んできた。その声を発したのは、ラガルトトの弟だった。

「俺は、カッコいい兄ちゃんが見たいんだ！」

「あいつ………」

「兄ちゃん!!」

土方の説得に加え、ラガルートの弟の叫びにロニージョは笑みを浮かべた。

「…俺達は勘違いをしていたようだ。あの日、家族が笑顔で送り出してくれたのは、サッカーで輝いている俺達を見たかったから、か……」

「……ああ！」

ロニージョの言葉に、ザ・キングダムの方々は頷く。

「…やろうぜ!!俺達ザ・キングダムの、本当のサッカーを!!」

「おう!!」

どうやら、彼らに迷いは無くなった様だ。緑川風に言うなら、寝た子を起こしたってやつだ。

…あいつ元気にしてるかな。

「みんな…こっちもイナズマジャパン魂、見せてやろうぜ！」

「おう!!」

改めて、本当の後半戦が始まる。1―1で同点となり、ザ・キングダムからのボールで試合再開。

ボールはロニージョに渡る。ロニージョは不敵な笑みを浮かべると、その場で軽快にステップを踏みながら踊り始めた。その行動に、俺達や観客は目を丸くする。

鬼道が構わず、ロニージョに向かっていくと、ロニージョは踊り始めながらドリブル



をし始めた。まるで、ボールと共に踊っているかの様だ。そのまま向かってくる鬼道を華麗に躲して、レオナルドに繋ぐ。

続いてレオナルドも、その場で見事なボール捌きを繰り広げる。吹雪が突っ込んでいくが、レオナルドは躲していく。何度もチャージを続けるが、レオナルドはそれをのりくらりと躲して、ガトへと繋いだ。

ガトは力強いドリブルで駆け上がっていく。に、対して土方が行手を阻む。

「ブレード…アタック!!」

しかし、ガトはそれを物怖じせず、続け様にボールを蹴って青いオーラを生み出す。

壁キックの要領で、空中でエラシコを仕掛け、土方を突破する。

「ロニージョー!」

ガトからロニージョへのパス。

「来い!ロニージョ!!」

ロニージョがヒールでボールを打ち上げ、そのボールを足で挟んで、空中で勢いよく回転させる。

「ストライクサンバツ!V2!!」

エネルギーを纏ったボールを、ロニージョが豪快に蹴り出す。

「真一・イジゲン・ザ・ハンドツ!!」

円堂はダークエンジェル戦で進化させたイジゲン・ザ・ハンドを繰り出す。

しかし、ものの見事に破られてしまう。

「くッ!」

ロニージョのストライクサンバが決まり、1―2となる。

シヤドウ・レイを止めた真イジゲン・ザ・ハンドを完璧に破った。流石は大会得点王

……マツク・ロニージョ。えげつねえやつだ。

ボールは俺達から。

しかし、勢いに乗ったザ・キングダム相手に俺達は苦戦する。防戦一方といったところである。

ろである。

だが、このまま負けるわけにはいかない。

「円堂!」

「おう!」

円堂からのボールを受け取った俺は、攻め上がっていく。目の前には、MFボルボレタとDFのバーグレが立ちはだかる。

「サザンクロスカット! V2!!」

俺はサザンクロスカットで二人を抜き去って、そのままゴール前に。

「これ以上は入れさせない！」

GKファルカオはしっかりと警戒する。

「アストロゲート！V3!!」

渾身のアストロゲートをファルカオに向かって打ち込む。

「カポエイラ…スナアアツチ!!」

ファルカオは、シュートに側転しながら向かい、逆立ちの状態でボールを両足で挟み込む。回転しながら蹴り上げてシュートを外へと弾き飛ばす。

「行ったれー！」

「おう!!」

俺は弾き飛ばされたボールを、染岡に繋いだ。

「ドラゴン……スレイヤアアア!!V3!!」

染岡の進化したドラゴンスレイヤーに合わせて、豪炎寺も必殺技の構えに。

「真！爆熱……スクリユウウツ!!」

凄まじい威力を放つ合わせ技のシュートが、ファルカオに向かっていく。

「カポエイラ…スナアアツチ!!」

再びカポエイラスナツチを繰り出して、シュートを弾き飛ばしてしまう。

だが、二人が放ったシュートの威力が残っていたため、地面に触れた途端、勢いよく

回転してゴールの中に飛んでいく。

「なッ!?!」

これで2-2の同点となる。

しかし、ザ・キングダムもこのままでは終わらない筈だ。

ザ・キングダムのボールで試合再開後、すぐにロニージョにボールが渡った。

「ストライクサンバツ!V2!!」

ロニージョがストライクサンバを放つ。これ以上の点はやれまいと、吹雪と飛鷹が身体を張ってブロックする。

「ぐああアア!!」

しかし、ストライクサンバはそのままゴールに向かって飛んでいく。

「いかりのてっつい!V2!!」

3人がかりでストライクサンバを防ぐ。防いだ円堂は風丸へとボールを繋いだ。

「竜巻イ……!!」

「落としッ!!」

韓国戦で見せた風丸と壁山の連携技、竜巻落としが炸裂。

しかし、空中でロニージョが竜巻落としを足でブロック。威力は落ちたものの、ロニージョのブロックを破ってゴールに飛んでいく。

「カポエイラスナッチV2!!」

カポエイラスナッチが進化させ、竜巻落としを完璧に防いだ。ロニージョだけではなく、あのGKも進化させている。

「勝つぞ!!」

「おう!!」

「最後まで諦めるな!!」

「おう!!」

もう時間は残されていない。次の1点が、決め手となるだろう。

竜巻落としを止めたファルカオが、ラガルートへと繋ぐ。

「ロニージョ!!」

ラガルートからロニージョに。すると、ザ・キングダムは再び必殺タクティクスの体勢に入った。

「これが本当の必殺タクティクス……アマゾンリバーウエーブだ!!」

すると、先程より大きく、激しい波が俺達を呑み込む。下半身だけだったのが、今では全身を呑みこまれてしまった。ザ・キングダムに突破され、ロニージョはゴール前に。

「ストライクサンバアツ!!V3!!」

ロニージョはまたストライクサンバを進化させる。今まで見たことない威力を誇り

ながら、円堂に飛んでいく。

「させるかよッ!!」

土方と壁山が足でブロックするが、威力は落ちないまま二人を蹴散らしていく。

「真！イジゲン・ザ・ハンドオツ!!」

円堂は全身全霊でイジゲン・ザ・ハンドを繰り出すが、やはり破られてしまう。ゴールに入るその寸前で、彼が現れた。

「させねえ……絶対に入れさせちゃならねえんだ!!真空魔ツ！V2!!」

ゴールに入るといふ際どこいところで、飛鷹が現れる。進化した真空魔を繰り出して、ストライクサンバの威力を完全に殺して防いだ。

「響木さんに報告するんだ！勝利を!!」

飛鷹からのロングパス。鬼道がボールを受け取り、モンストロの激しいチャージを躲して基山に繋ぐ。

「ヒロトくん!!特訓の成果を!!」

「よしッー!」

二人は止まり、腕を組んで仁王立ち。基山が赤色、吹雪が青色の気を放出し、黄緑色のオーラを纏ったボールが上昇する。二重螺旋を描きながら二人が上昇し、基山と吹雪が同時に打ち込む。

「ザ・バアアアース!!」

二人の新技がファルカオに飛んでいく。

「カポエイラスナッチV3!!」

ファルカオも進化させたカポエイラスナッチで対抗する。ファルカオは、逆立ちでボールを挟み込んだまま、シユートを入れさせまいと粘る。

「行けえええエツ!!」

「勝つんだああアア!!」

ザ・バースの威力が息を吹き返し、ファルカオの足を弾いてそのままゴールに突き刺さった。

3―2となり、ついに逆転。この1点は、紛れもなく飛鷹の渾身のデイフェンスが引き寄せたものだ。

そして、試合終了のホイッスルがスタジアムに鳴り響く。

俺達はザ・キングダムを逆転勝ちで下し、決勝進出を決めた。決勝進出を決めたことで、みんなはとても喜んでいる。

小町。世界一まで後一步だ。お前が自慢出来る様に、俺は頑張るからな。

ちゃんと見といてくれよ。ていうか見てなかったら泣くからな。せめてお兄ちゃん

の活躍はちゃんと見ててね。

「ボーイ……いや、円堂！おめでとう。君達イナズマジヤパンこそ、決勝に行くのに相応しいチームだ」

「ありがとう！」

「いや、礼を言うのはこっちの方さ。準決勝の相手が君達で良かった。それに土方！お前の言葉、ここに響いた！」

ロニー・ジョは、自身の胸に手を当てた。

「そうか！」

「この先どんな苦しいことが起きても、俺は俺のサッカーを貫き通す！その決意が出来たよ」

「今度、サンバを教えてくださいよな！弟達に教えてやりてえんだ！」

「ああ！勿論さ！」

俺達はベンチに戻った。木野が病院からの連絡を、そのままこちらに伝えた。

「響木監督の手術、成功したそうよ」

「本当か!? やったああー!!」

響木監督の手術にみんなは喜ぶが、木野が、でも、と続けて話す。

「……かなり長い時間の手術だったから。消耗も激しいみたい。目が覚めるまでは、安心



出来ないって」

「……そうか」

「…要するに、待つしかないってことか」

激闘を繰り広げた準決勝は、イナズマジヤパンが決勝戦に駒を進めて幕を下ろした。  
このまま、何事もなく決勝戦を迎えられたらいいんだがな。

## コトアール襲撃

ザ・キングダムとの準決勝は、俺達が3―2の逆転で決勝進出を決めた。残るは後一試合。イタリア代表オルフェウスと、グループBを2位で突破した、コトアール代表リトルギガントの試合結果で相手が決まる。

その試合を見に行くために、みんなはコンドルスタジアムへと向かった。

そう。みんなは。

俺と雪ノ下は、病院へと向かった。受付の看護師に、ある人物の病室の場所を教えてください、そこへ足を運んだ。

病室を開けると、

「おっ、比企谷くんだー。ひやつはろー」

病室のベッドで片足にギプスを身につけた陽乃さんが、元気にひやつはろーと挨拶をする。

「…相変わらず元気ね」

「まあ大した怪我じゃないからねー。単に足捻っただけなのに、大袈裟にされたもん」

今朝、病院から雪ノ下に、陽乃さんが足を怪我したという連絡が流れてきた。だから

俺と雪ノ下はコンドルスタジアムには行かず、病院へと赴いたのだ。

「…それで、何があつたんですか？」

「…ガルシルドに逃げられちゃつたんだよね、これが。あんな犯罪者一人逃すなんて、私もまだまだだなあ」

「…でも、ガルシルドは姉さんや鬼瓦さんと一緒にいたのでしょう？」

「連行中に通行止めされてるところがあつてさ。パトカーから外に出たら上から鉄骨がズドン。幸い、誰一人として死人は出ていないよ」

やはり、ガルシルドはあのままじゃ終わらなかつたか。素直に連行されるのも、なんだか変だとは思っていた。

「それより、二人とも気を付けて。ザ・キングダムが敗れた以上、ガルシルドは君達、イナズマジパンをこのまま放っておかないと思うから。決勝戦前に、誰か死んじやいましてーとかシャレにならないし」

「…分かつているわ」

そう忠告した陽乃さんは、退屈そうに背伸びをし始める。

「…にしても、病院つて暇なんだねえ。比企谷くん、よく退屈せずに病院にいられたよね」

「小町にゲームやら本やら持つてきてもらつたんで」

なんなら病院生活を楽しんでいたまでである。

「あ、そうだ。どうせ今日練習ないんでしょ？今日一日、私の部屋で一緒に過ごそうよ」  
「俺がいたら余計退屈になると思うんですが」

「そんなことないよー。暇つぶしには最適だよ」

怪我をしていても、魔王はいつだってブレていなかった様です。

「…そういうえば、あつちはどうなってるんでしょうね」

雪ノ下が思い出した様に、口を開いた。

「イタリアとコトアールの試合か？」

「そういえば今日だったね。今どんな感じだろう」

陽乃さんはリモコンを操作して、テレビを点け始める。チャンネルを変えると、イタリアとコトアールの試合が映り始めたが。

「……マジか」

0-8という、驚愕的なスコアになっていた。

点差にも驚いたが、それ以上に驚いているのは、負けているのがオルフェウスだったからだ。

ミスターKが亡くなって、キレのある采配が無くなったことも痛手だろうが、それでもチームにはフィディオがいる。

にも関わらず、リトルギガント相手に8点を許してしまう展開。

試合終了のホイッスルが鳴り響き、決勝戦に駒を進めたのは、コトオール代表リトルギガントだった。

「凄いよね、このリトルギガント。イナズマジャパンのついでに、ちよこちよこグループBの試合も観てただけだよ。お姉さんが知る限り、リトルギガントは必殺技を一度も使ってなかったよ」

「必殺技を一度も……!?!」

何のためにそんな縛りを付けたのかは分からないが、そんな状態でスペインやドイツを差し置いて、グループBを2位通過したってことになる。

コトオール代表リトルギガント……。これはまた、面倒なチームに当たったもんだな。

「……あ、そうだ」

陽乃さんが思い出したように、再び口を開いた。

「?..どうしたんですか?」

「全然話変わるけど。この間救急車で搬送された人いるじゃない。名前知らないけど

……サンガラス付けてた人」

サンガラス付けてた人……響木監督のことか。

「……響木さんが、どうかしたの?」

「その人、一般病棟に移されるところ見たの。多分、もう大丈夫だと思うよ」

その陽乃さんの知らせに、俺は少し、安堵の息を吐いた。

「…そうですか」

一番心配していたのは飛鷹だった。この報告を聞けば、きっと彼は喜ぶだろう。

俺達はこのまましばらく、陽乃さんと病室で過ごした。病院だから、前みたいに襲われる心配もない。それに雪ノ下が物凄く警戒しているしから多分大丈夫だろうし。

仮に襲われた瞬間、ナースコールに頼るとしようしようしよう。

「…本当に暇だなあ」

「暇が一番平和ですよ」

そうしてまったりしていると、俺のケータイに着信が入る。着信先は、レアンだった。俺は一度病室から退出し、コールに出る。

「…どうした？」

「エイト大変よ！今すぐコトアールエリアに向かつて！」

電話口から聞こえる彼女は、何やら焦っている様子だった。

「…マジでどうした」

「とにかくコトアールエリアに向かつてって言うてんの！私達も今からコトアールに向かうから！それじゃ！」

「ちよ、おいつ…」

レアンは言いたいことだけ言って、一方的に電話を切る。レアンはコトオールが大変なことになっていると言っていた。

コトオールエリアで何かが起きたのだろうか。

「比企谷くん！」

すると、病室から勢いよく雪ノ下が飛び出てくる。

「どうしたんだ？」

「大変よ……コトオールエリアが……」

「……!?!」

俺は陽乃さんの病室に戻って、映っているテレビを急いで確認した。どうやら、緊急速報が流れているようだ。

「ライオコツト島のコトオールエリアが襲われています！襲っているのは何者なのか、その目的はなんなのか、一切不明です！なお、現場ではコトオール代表達が協力し、救助を行っている模様です！」

…こりや確かに大変だわ。

テレビに映っているコトオールエリアは、ほぼ壊滅状態と化している。建物や木は破壊され、土煙だけが高く蔓延している。

「…私の見舞いはいいから、早くコトアールエリアに行きなさい。おそらく、これを仕組んだのはガルシルド。なんでコトアールを襲っているのか分からないけど、このままガルシルドを放っておくのも危険だよ」

「…分かりました。行こう、雪ノ下」

「…ええ」

俺達は病室を飛び出して、今すぐコトアールエリアに向かうことにした。病院のエントランスを飛び出すと、目の前には円堂達イナズマジヤパンのみんなと、赤キヤップを被った爺さんに、雷門がいた。

「比企谷くん……それに雪ノ下さん」

「…どうしたんですか？そんなに焦って……」

俺達は、さっきのニュースの内容を端的に伝える。

「今、正体不明の者達がコトアールエリアで破壊活動を行っていると速報が入ったの」  
「コトアールエリアが!？」

その知らせを聞いたみんなが驚愕する。雪ノ下に続けて、俺も知らせる。

「コトアールの代表達が救助を行なってるらしいが、それもいつまで保つか分からんとつとと行かねえと、島からエリア一つ消えることになる」

「…よし、分かった!みんな、コトアールエリアに急ごう!」



俺達は急いでキャラバンに乗って、コトアールエリアに向かった。

俺達はコトアールエリアに到着した。

目の前に広がっていたのは、コトアールエリアのあちこちが破壊されている惨状だった。

「コトアールの街が……」

随分と派手にぶち壊してる。ここまでくると、ガルシルドがコトアールに何か恨みでもあるんじゃないかと思う。

「エイトーツー！」

俺の名前を呼びながらこちらに走ってくるのは、レアンとアイシー、クララに、ターバンを巻いたコトアールの選手。

「リ्यूー！」

「ナツミ、監督！」

「無事だったか……」

しかし、リ्यूーと呼ばれるこの選手。どことなく、吹雪に似ているような気がするの  
は俺だけだろうか。

「状況はどうなってる？」

「建物は見ての通りだけど、奇跡的にコトアールの住人に重傷者はいないよ。みんな、コトアールの宿舎に避難してるけど、サッカーボールで無差別に攻撃してるやつらはまだそこかしこにいる」

「…そのテロもどきをどうにかしないと、最悪コトアールの宿舎にまで被害が及ぶぞ」「ああ！みんな、街を壊してるやつらを止めるんだ！」

俺達は、崩壊したコトアールエリアを探索し始めた。周りは見ての通り、災害が起こった後の様な状態。

それにしても、サッカーボールでこれだけ街を壊していると、暴れているやつらは相当な身体能力を持っていることになる。

そもそも、普通にサッカーボールを蹴つても街なんて壊せないからな。それこそ、エイリア石とかでも使わない限り。

「あつ、あそこー！」

アイシーが指差した先には、大木を支えているコトアールのキャプテン、ロココ・ウルパがいた。どうやら、小さな子供を守るために倒れてきた大木を支えているのだから。

「熱血…パンチッ!!」

勢いよく飛び出した円堂は、右拳に力を込めて大木にぶつける。円堂に殴られた大木

は、大きく吹っ飛んでいく。

「つーか円堂のパンチやばすぎるだろ。今度から円堂に喧嘩売らんとこ。殺される。」

「危ないところだったな！」

「…エンドウマモル…？それに、イナズマジヤパン…？」

彼は俺達を不思議そうに見る。何故ここにいるのかという疑問の現れだろう。俺達の後ろから、赤キヤップの爺さんがロココに近づく。

「…ダイスケ！それにナツミ！」

すると、どこからか誰かの拍手が聞こえてくる。拍手の音をする方に視線を向けると、そこに臙脂色のマントや、スカーフを身に纏う1人人が現れた。

「…流石はイナズマジヤパンのGKエンドウマモル…！見事な反応です」

昨日まで聞いた様な声と話し方だった。加えて、体型が小太りである。俺の記憶の中では、そんな人物は一人しか知らない。

「…お前、ガルシルドの側近のやつだな」

「…名答。観察眼だけでエイリア学園に抜擢されただけではありませんね」

すると、顔を纏っていた臙脂色の布を取り外す。

取り外すと、やはり正体はガルシルドの側近である小太りの男だった。小太りの男に続いて、周りのやつらも正体を見せていく。

「私達はガルシルド様のために作られた私設サッカーチーム……」 チームガルシルド  
”

「チームガルシルド……?」

「…イナズマジヤパンの諸君。君達まで現れるとは…」

すると、今度は土煙の向こう側から、あいつの声が聞こえてきた。

その姿は段々と鮮明になっていき、次第に姿が完全に目視出来た。

「ガルシルド!」

「……リユー。この子をみんなのところに」

「分かった!」

リユーは子どもを連れてこの場から去っていった。

「やはりお前の仕業だったのか!」

「…まあ、こんなことするのは貴方しかないしね」

「しかし何故だ!何故コトアールの街を破壊する!」

「何故?知りたければその男に聞いてみることだな」

ガルシルドが指を差した人物とは、赤キヤップの爺さんだった。

「この人に……?」

「そうだ。コトアール代表リトルギガントの監督、ミスター・アラヤ。……いや、円堂

大介にな」

円堂大介って、円堂の爺さんの……。

生きていたってのか……。

「…目的はこのわしか？だがわしを引つ張り出すために、こんな下手な小細工までするとはな。この間のブラジル戦で世界中に悪事がバラされて焦つてきた様に見える。いつもは人を操るだけで、自分は安全なところから見ているだけのお前がな」

「フン、貴様にだけは言われたくないわ。40年間もの間、こそこそと私を嗅ぎ回つていたお前にはな」

40年……。

つまり、この二人は前から知り合い、あるいは互いが互いを一方的に知っていたということになる。

その互いを知ることになった40年前の出来事といえば……。

「……40年前って言ったら、イナズマイレブンを襲つたあの事故が起きた年だったよな」

「事故？なんの話よ」

「…そういえば、杏さん達はイナズマイレブンのことや影山のことは知らないわよね」

木野が、40年前のあの出来事を話し始めた。

「…その年、円堂大介監督率いる伝説のイナズマイレブンは、FF全国大会決勝戦に出場するため、バスで試合会場に向かっていたの。でも、その途中バスは事故を起こして、伝説のイナズマイレブンは試合会場には行けずに不戦敗…」

「でも、それは影山がやったことだって……」

「その時影山は中学生。一人でそんなことは出来ない。影山に力を貸しているやつがいた。それが、そこにいるガルシルドだったってわけだ」

「比企谷くんの推測通り。ガルシルドは、世界征服の欲望のための一つの手段として、世界のサッカー界を支配してきた。日本においては、影山を帝国学園の総帥にして操り、日本サッカー界を思うようにしてきたの」

掻い摘んで言えば、今までのことは全部こいつが悪いつてことだ。

「わしはこの40年間、お前のことを調べ上げ、追いつけてきた。お前の行なってきた悪事の全てを暴くために」

「だがその苦労もどうやら無駄だったようだ。現に私はこの通り捕まっていない。……円堂大介。これ以上私の邪魔はさせぬ。貴様とイナズマジヤパンは、この場で私が叩き潰す」

陽乃さんの言う通り、やはり俺達も標的となっていたか。この間のブラジル戦じゃ、なんだかんだとガルシルドの邪魔をしてきたからな。

「この子達は関係ない。潰すならわしだけで十分な筈」

「そうはいかぬわ。私が叩き潰すのは、円堂大介。貴様と貴様のサッカーだ！今日こそ、貴様を葬り去ってやる……貴様のサッカー諸共な！」

「そのために、この島の人達を巻き込んだというのか……!?!」

「私利私欲のために、様々な人を巻き込んできたということか。クソみたいな話だな本当。」

「……その勝負、受けて立つ！」

円堂がガルシルドに向かって、勝負を受けると告げる。

「……やめろ守。これはわしとガルシルドの問題だ」

「違うよ、爺ちゃん。これは、爺ちゃんとこいつだけの問題じゃない。サッカーを守る戦いなんだ……俺、許せないんだ。サッカーを悪いことに利用するなんて絶対許せない！」

「守……」

「円堂の言う通りです。俺達にやらせて下さい。なあ、みんな！」

円堂や豪炎寺に続いて、みんながガルシルドに挑むようだ。サッカーを守るために、みんなの意思は固まった。

「……止めても無駄の様だな」

「…だったら僕達が！僕達だって思いは同じ！街を壊されて、このまま黙ってなんかいられない！やるなら僕達にやらせてよ！」

「……戦えるのか？その肩で」

ロココは肩を痛めている。さっきの大木で、見て分かった。オルフェウス相手に、必殺技無しで0点に抑えるGKが、大木ごときで辛そうな顔はしない筈だ。

ロココは肩を押さえながら、悔しそうな顔をする。

「……ここは、俺達に任せてくれないか？絶対に守ってみせる…俺達のサッカーを！」

「……分かった。頼んだよ、イナズマジヤパン」

「ああー！」

こうして、俺達イナズマジヤパンと、チームガルシルドの試合が行われることとなった。



## 究極の強化人間プレイヤー

コトアールエリアを無差別に襲っていた者達、チームガルシルドに対して、リトルギガントの代わりに俺達、イナズマジヤパンが挑むことになった。

久遠監督や響木監督がいない中で、赤キヤップの爺さん、もとい円堂大介が指揮を取るとのこと。

「この試合、絶対勝つぞ!!」

「おう!!」

俺達はポジションに着く。

F Wは宇都宮と豪炎寺。M Fは風丸、基山、鬼道、不動。D Fは俺、壁山、飛鷹、吹雪である。G Kは円堂。

あちらのキャプテンは、ガルシルドの側近の男、ラボック・ヘンクタツカー。どうやら、ポジションはD Fらしい。

イナズマジヤパンからのキックオフで、試合開始のホイッスルが鳴り響く。まずは、地道にボールを繋げて攻め込んでいく。宇都宮から風丸、風丸から基山、基山から鬼道へとパスを回していく。

だが、鬼道の前にMFのマンティスがボールを奪いに来た。しぶといチャージに一時はマンティスにボールを奪われてしまうが、鬼道は強く粘って、ボールをすぐさま奪い返した。

「豪炎寺！」

鬼道から豪炎寺へのパス。

しかし、DFのバファロが目にも留まらぬ速さでボールをカット。

「ヘッジホッグ！」

バファロからMFヘッジホッグに繋げる。そのヘッジホッグに風丸が向かっていく。

「行かせるかア！」

しかし、ヘッジホッグは不敵な笑みを浮かべ、風丸を一瞬で抜き去った。

DFのやつといい、MFのやつといい、人間の身体能力を超えたスピードを発揮している。

「調子に乗ってんじゃねエ!!」

不動がヘッジホッグにマーク。しかし、ヘッジホッグは大きく跳躍。

「マンティス！」

空中でヘッジホッグからマンティスに。マンティスはボールを受け取って、そのまま攻め上がっていく。

こいつら、やはり……。

「油断するな！相手は強化人間プログラムを受けているぞ！」

鬼道がみんなにそう伝える。

鬼道が言っていることは、十中八九正しい。街を壊すほどの破壊力、エイリア石でも出せないあのスピード、さらにはさっきの跳躍。

あれが素で出来る奴がいるなら出てきて欲しいもんだ。

「スノーエンジェル！」

吹雪がスノーエンジェルを繰り出す。しかし、RHプログラムで底上げされたスピードで、マンティスはそれを躲した。

「間違いねえ！鬼道の言う通りだぜ！」

「なんでそんなことを……！そんな身体でサッカーをすれば、身体がボロボロに！」

「…どうやら、何も分かっていない様ですねえ。私達がロニージョ達と同じだと思ってるのですか？」

「何……？どういうことだ？」

鬼道がそう問うと、ヘンクタツカーはそのまま話を進めていく。

「貴方達の言う通り、RHプログラムを使えば身体はボロボロになってしまふ。しかし、それは未完成だからなのです。完成されたプログラムを使えば、ロニージョ達の様にボ

ロボロになることはない。だから、究極の強化人間プログラムを作り上げるため、今まで実験を行い、または他所からデータを入手していました」

「実験……?」

「…ザ・キングダムのリニージョを始め、チームKのデモ二オ……神のアクアを使い、全国大会でその神のごとき力を見せた、世宇子中……そして、まるで宇宙人かと思わせるほどの身体能力を底上げする、エイリア石を使役したエイリア学園など……ね」

「で、デモ二オやアフロディ達まで!」

「それに、私達も……!」

アフロディと仲の良い円堂や、エイリア学園に所属していたレアン達は驚きを隠せず  
にいた。

しかし、ヘンクタツカーの話に、一つ解せない部分がある。

「…ちよつと待て。世宇子が強化人間プログラムに関連しているのは、世宇子に影山がいたからだろ。エイリア学園がお前らにどう関係してるんだ」

「…ミスター・ケンザキをお覚えですか?」

「け、劍崎……!」

「劍崎……確か吉良さんの隣にいたやつだよ……?」

劍崎竜一。吉良星二郎の側近であったが、裏切りを見せて風丸や葉山達を利用した

ダークエンペラーズを使って、俺達にけしをかけてきた男。

「そう。かつて吉良星二郎の側近であったミスター・ケンザキは、実はガルシルド様の下だったのです」

「何!？」

「最初は、ケンザキの言う、世界を支配する欲望を叶える代わりに、エイリア石の情報をこちらに送るよう命じました。ジエミニストームやイプシロン、それにダイヤモンドダストにプロミネンス……エイリア石を使って構成されたチームの身体能力の情報をこちらに送り込んでくれました……。しかし、彼は吉良星二郎を裏切り、ガルシルド様も裏切った。エイリア石に取り憑かれてしまい、その挙句が不出来なチームのダークエンペラーズ……。そして失敗に終わった。なんと愚かな男だったのでしょうか」

「私達の、データを……」

エイリア学園の情報が、剣崎によって流されていたということか。

「ですが、決してその苦勞も無駄になりませんでした。カゲヤマにケンザキ……それにロニージョやデモーニオ達、彼らのおかげで、究極の強化人間プログラムの作り上げることが出来たのですから」

ガルシルドは、このプログラムを作るために、様々な人達を利用してきたのか。

すると、ヘンクタツカーが思い出したように話を変えた。

「…そういうえば、ケンザキの話に興味深い内容がありました。エイリア学園は確か、身寄りのない子ども達がエイリア石によって強くなったチームでしたね。しかし、ある日突然、全く無関係の人間がエイリア学園にスカウトされた…」

「…そ、それって…まさか…」

「そう。そこにいる、ミスター・ヒキガヤの話です」

ヘンクタツカーは俺に指を差す。

確かに、やつと言う通り、八神に連れ去られてエイリア学園に入ることになった。

「優れた洞察力…頭のキレ…そしてエイリア学園に容易く順応出来る身体能力…。…その話を聞いて、実は一目置いていたのです。私達が作り上げる強化人間プログラムの実験台としてね」

「…またこういう展開かよ。」

エイリア学園に魔界軍団、そしてガルシルド。俺は余程、悪役が向いてるわけなのね。俺ってば純真無垢な男の子なのに。

「だから、隙を見て貴方を連れ去ろうとも考えましたが…そこにいるミス・ヤガミが邪魔でそれが出来なかった」

今度はヘンクタツカーは八神を指差す。

あの頃、確かに八神とずっと一緒にいて、1人の時間が中々なかった。

意図せず、俺は八神に助けられていたということなのか。

「ミス・ヤガミだけではなく、ミス・ハルノも邪魔で貴方に介入出来なかった。貴方達がガルシルド様の館にいらっしやった時、そのまま捕まえてRHプログラムの実験台として使おうかと思いましたが、取り逃してしまいました。ですが、貴方の代わりにロニージョを実験台にして、RHプログラムのデータを取ることに決めました。…そして、その末に完成したのが私達……究極の強化人間プレーヤーなのです」

ガルシルドによつて利用され、苦しめられた人達は一体何人いるのだろうか。

そんな事実にも、円堂の身体は震えていた。

怖いわけでも、武者震いわけでもない。

様々な人を巻き込み、サッカーを悪用したガルシルドを許さないという怒りで震えていた。

「…ロニージョやデモーニオ…それに、アフロデイ達まで実験台に使うなんて…!!」

「全てはガルシルド様が支配する理想の世界を実現するため」

ヘンクタツカーが指を弾いて鳴らすと、ボールを持ったマンティスは吹雪を抜き去っていく。続いて、マンティスに向かって俺が走っていく。

「変な理想を掲げて俺達を巻き込んでくんない！」

すると、マンティスはイリニュージョンボールを繰り出す。分裂したボールは上に飛ん

でいき、それに合わせてクロウもジャンプ。

「ジャツジスルー3!!」

分裂したボールをクロウが連続で俺に向かって蹴り込んでくる。1個は避けたものの、続けて飛んでくる2個のボールに、俺は倒されてしまう。

「ぐあアツ!!」

「え、エイトツ!!」

「コヨーテ!!」

クロウからFWのコヨーテに繋ぐ。コヨーテは完全にフリーだ。

「くらえ……これが究極の強化人間プレイヤーの必殺技!!」

コヨーテはボールを打ち上げ、コヨーテ自身も大きくジャンプし、そしてボールを両足で挟み込んだ。

「ガンシヨットオオツ!!」

弾丸のごときシュートが円堂に向かって飛んでいく。

「強化人間なんかに負けてたまるか!!」

円堂も怯まず、必殺技の体勢。

「真!イジゲン・ザ・ハンド!!」

円堂は真イジゲン・ザ・ハンドでコヨーテのシュートに対応する。



しかし。

「うわああアアツ!!」

イジゲン・ザ・ハンドは簡単に破れてしまい、ガンシヨットがゴールに突き刺さった。先制点をもぎ取ったのはチームガルシルドだ。

「強え……」

真イジゲン・ザ・ハンドが破られるとは……。

ロニージヨのストライクサンバと同等、もしくはそれ以上の威力を誇るシュートだったってことだ。

完全した究極の強化人間プログラム……それを受けた強化人間プレイヤー達……。  
苦しい試合になりそうだな……。

## 恐怖のチームガルシルド

コヨーテのガンショットで先制点を奪われた俺達。

次に俺達のボールで試合再開。宇都宮が攻め上がっていきが、前からマンティスが詰めてくる。

「こっちだ！虎丸！」

宇都宮から豪炎寺にパス。しかし、そのパスをマンティスが恐るべきスピードでカット。

「任せろ！」

ボールをカットしたマンティスに、今度は不動がプレスをかける。しかし、マンティスは大きくジャンプして不動を躲した。そのまま、地上にいるクロウへとパス。クロウも、目にも留まらぬ速さでディフェンスを抜く。

反撃どころか、このままでは防戦一方である。

なんとか、やつらの弱点をあぶり出したい。

「コヨーテ！」

クロウが前線にいるコヨーテに繋ぐ。

「ゴー・トウー・ヘルツ！」

俺はコヨーテにディフェンス技を繰り出し、ボールを奪った。

「比企谷！こつちだ！」

俺は不動へとロングパス。

「今だ！デュアルタイフーン!!」

不動がボールを受けたと同時に、鬼道がそう叫んだ。

不動の周りには飛鷹、壁山、豪炎寺、基山が立ち、鬼道の周りには俺と吹雪、宇都宮、風丸が立つ。

イギリス戦で見せた攻撃型必殺タクティクス…デュアルタイフーン。不動達が攻め上がると、俺達も攻め上がる。

「行かせるか！」

不動達には、オウルとジャツカルが向かっていく。

「鬼道！」

不動の指示で、壁山が鬼道を取り巻く台風へと、ボールを繋げる。風丸が壁山のボールを受ける。

「任せろ！」

続いて、鬼道達にはデインゴとマンティスが向かっていく。

「不動!」

俺達は相手を翻弄しつつボールを繋げ、かつキープして攻め上がっていく。

「行かせません!」

不動達にはヘンクタツカーが向かっていく。

「虎丸!」

ヘンクタツカーの裏を突いた宇都宮が、不動からのボールを受けて、シュートチャンス。

「はあッ!はああアアッ!!グラディウスアーチ!!」

イギリス戦で見せた宇都宮の必殺シュートが、GKフォクスに向かって襲いかかる。

フォクスは、手を胸の前でクロスさせ力を溜める。

「ビッグスパイダー!」

手を大きく広げると、背後に大きな蜘蛛の脚が8つ現れ、グラディウスアーチをそのまま蜘蛛の脚で挟み込む。挟み込まれたボールは威力が殺されてしまい、ボールはフォクスの手の中に。

「コヨーテ!」

フォクスから前線のコヨーテにロングパス。チームガルシルドのカウンター攻撃が始まった。

今のままじゃ、円堂は何やってもあのシュートを止めることは出来ない。  
そんな中。

「ガン、シャン、ドワーンだ!!」

…急に異国の言葉を話されてもなんのこっちゃやって反応になるんですが。

何? ガン シャン ドワーン?

「ガン、シャン、ドワーン………そうか! そうやって気を溜めれば!」

なんで今の一言で理解出来るか不明なのはさておき、コヨーテは構わず必殺シュートの構えに入る。

「くらえ! ガン ショット オオツ!!」

ガン ショット が円堂に向かって飛んでいく。

「ガン!! シャン!! ドワァアーン!!」

円堂が右手を前にかざすと、背後から臙げながら何かが見れた。しかし、それは全くの無意味で、ガン ショット がそのまま円堂を吹き飛ばしてゴールに突き刺さった。

「くっ……!」

「違う! ガン シャン ドワーン ではない! ガン、シャン、ドワーンだ!!」

ガン、シャン、ドワーンじゃなくてガン、シャン、ドワーン……?」

え、あの人本当に大丈夫? お年を召しているせいでボケてるのかというオチはやめて

ね。

「ガン、シャン、ドワーンじゃなくて、ガン、シャン、ドワーン……。そうか！そうすれば！」

いやマジでなんで理解出来んの？もしかして真の宇宙人が円堂だったりすんの？うちのキャプテンが人間じゃない件について。

「よし、今度こそ！」

イナズマジャパンのボールで、再び試合が始まる。宇都宮がボールを持って上がるが、マンテイスにすぐに奪取されてしまう。

マンテイスだけでなく、依然チームガルシルドが圧倒的に有利となる。

シユートにオフエンス、そしてディフェンス。全てがチートと言っても過言ではない。FWはFWの、MFはMFの、DFはDFの役割を完璧にこなしている。

「……ん？」

待てよ。俺は何か見落としている気がする。もし見落としているのなら、確認する必要がある。

ボールの行方はDFのバファロの足元に。

「もらったッ！」

俺はバファロに向かって走っていくが、バファロは躲さずに、MFのクロウにパスを

出す。

何故パスを出したのだろうか。RHプログラムで身体的に強くなったのなら、さっきのマンティスの様な圧倒的なスピードでも抜き去ることが出来たはずだ。

にも関わらず、躲すことをせずにクロウにパスを出した。いや、出すことしか出来なかった、と言った方が正しいのか？

もしかすると、やつらの弱点は……。

「スコープォー！」

クロウからFWのスコープォへと大きくセンタリング。スコープォは空中でそのボールを、ゴールに向けて叩き込む。

「ガン！ シャン！ ドワーン!!」

再び円堂は、さっきのように手をかぎすが、やはり背後からは臍げな何かしか見えな。円堂はシュートを弾いてしまい、こぼれ球に向かつてスコープォが一気に詰めていく。

スコープォがこぼれ球を蹴り込むが、円堂はまたも弾く。それをスコープォがまた、蹴り込み、そのボールを円堂が、また弾く。

大きく弾かれたボールの先にはヘッジホッグがいる。ボールをトラップし、そのまま上がっていく。

「コヨーテー！」

ヘッジホッグからコヨーテへ。コヨーテは圧倒的なスピードでディフェンスを突破し、一気にゴール前まで攻めていく。

「マモル！」

「自分の気をコントロールしろ！もっと身体全体を使うんだ！」

さつきとは違い、的確な助言を円堂にぶつける。さつきの言葉を理解した円堂なら、おそらく何かをやつてくるに違いない。

そういうやつだからな。

「ガンシヨットオオツ!!」

コヨーテの渾身のガンシヨットが、三度円堂に向かって飛んでいく。

「ガン!! シャン!! ドワアアアーン!!」

すると、さつきより少し鮮明となり、円堂の背後から魔神に似た何かの姿を現した。ぶつちやけると、スーパースイヤー人みたいなやつが円堂の背後から現れた。

そのサイヤ人、もとい魔神と共にガンシヨットに挑む。しかし、すぐに魔神が消えてしまい、そのまま円堂を吹っ飛ばしていく。

だがシュートはゴールには入らず、ポストに直撃してボールは弾かれていく。そのころぼれ球に向かってスコルピオが走っていくが、円堂は気合でボールを抱き込む形で3点



目を防いだ。

そこで、前半終了のホイッスル。

0―2で、依然チームガルシルドが有利だが、3点目を取られなかったのは大きいかもしれない。

しかし、ここからやつらを出し抜く策を講じなければ、勝つことが出来ない。

まあ、策がないことはないんだけど。

## 40年の終止符

俺達がベンチに戻ると、円堂のお爺さんからポジション変更を言い渡される。

「壁山と飛鷹がFWに!？」

「豪炎寺と宇都宮はMF。不動と風丸は、ディフェンスに下げる」

だいぶ大胆なポジションチェンジなこと。その円堂のお爺さんの指示に、みんなはどよめく。

だが、この策に俺は賛成だ。なんせ、ほとんど考えていたことが一緒だったからだ。

「…夏末」

「はい」

円堂のお爺さんが変わって、雷門が話を紡いでいく。

「…前半の試合を見る限り、身体能力では明らかに向こうが上。けれど、彼らにも弱点があるわ」

「弱点？」

「完全な分量制であるが故に、それが却って仇になったってことだ」

「そう。比企谷くんの言う通り。FWはFWの、MFはMFの、DFはDFの役割しか果

たしていないのよ。完全な分量制の結果、DFにはMFに必要なキープ力や突破力が不足している」

そこを崩すために、MFとDFを混ぜるって寸法だ。一見めちやくちやなフオーメーションだが、理に適っている。

「でも俺、シュートなんか打てないっすよ」

「心配するな。シュートを打つだけが技じゃない」

中々いいことを言うじゃないですか。この発言も、まるで円堂を思わせてくれる。流石は血の繋がったサイヤ人……じゃなかった、祖父と孫。

ハーフタイムを終え、俺達は大介さんの指示に従って、ポジションチェンジを行なった。

「血迷ったか円堂大介……。ヘンクタツカー！遠慮はいらぬ！円堂大介のサッカーを叩きつぶせ!!」

チームガルシルドからのボールで後半戦が開始。スコープオが、クロウに繋げる。

「コヨーテー！」

クロウからコヨーテへとロングパス。しかし、それはディフェンスに回っていた不動がカット。

「通すか！」

「コヨーテがボールを奪い返そうとするが、不動のキープ力がコヨーテを圧倒している。」

「豪炎寺!」

不動から豪炎寺にパス。豪炎寺の前からは、オウルが向かってくる。

「行かせるか!」

しかし、豪炎寺はトップスピードでオウルを抜き去った。

「比企谷!」

今度は俺の番。豪炎寺からボールを受けた俺は攻め上がっていく。前から、ヘッジホッグがスライディング。

「鬼道!」

ヘッジホッグのスライディングを躲し、鬼道へと繋いだ。

凄えわ、あの爺さん。たったポジションチェンジをしただけで、ここまで試合展開が変わっていくなんて。

流石は雷門のレジェンドプレーヤーってところか。

「行かせません! ジャツカル!」

鬼道に向かって、ヘンクタツカーとジャツカルのダブルデイフェンス。

「今っす! ザ・マウンテンツ!!」

壁山のザ・マウンテンが、ヘンクタッカーからボールを奪い返した。  
「虎丸くん！」

壁山から宇都宮にパス。そして、宇都宮と豪炎寺は共にゴールへと突き進んでいく。

「タイガー……!!」

「ストオオーム!!」

宇都宮と豪炎寺の連携シュートが、フォクスに向かって襲う。

「ビッグスパイダー！」

フォクスは再び、ビッグスパイダーで挑む。しかし、先程とは違い、徐々に押されていく。

「ぐッ……ぐああアアッ！」

蜘蛛の脚を蹴散らして、タイガーストームを見事に決めた。ようやく1点を取り返し、1-2となった。

俺達はその勢いのまま、チームガルシルドに向けて反撃を開始した。

試合開始後、すぐにボールを奪って、吹雪にボールを繋げる。

「風丸くん！」

「ああ！」

吹雪がクロウとオウルをスピードで抜き去る。そして、アメリカ戦で見せたあの連携

技の体勢に入った。

「吹き荒れるー！」

「ザ・ハリケーン!!」

ザ・ハリケーンが炸裂。フォクスはビッグスパイダーを出す間も無く、ゴールを許してしまった。

2-2の同点となる。イナズマジヤパンの反撃は、未だに終わらない。試合再開後、すぐにチームガルシルドはDFのバファロにボールを下げる。

「こつちだー！」

同じDFのデインゴが走っていく。バファロがデインゴにパスを出す。

「させるかッ！真空魔ツ!!V2!!」

飛鷹の真空魔でボールをカット。そのまま豪炎寺へとボールを繋げた。そして、宇都宮と基山が共に上がっていく。

「グラント…ファイアアアッ!!!」

グラントファイアが地面を抉りながら、DFのヘンクタツカーを吹き飛ばし、ゴールに向かっていく。

「ビッグスパイダーー！」

フォクスはビッグスパイダーでグラントファイアに挑むが、結果は火を見るより明ら

かだ。蜘蛛の脚を焼き尽くし、フォクスごとゴールに押し込んだ。

3―2で、イナズマジパンの逆転となる。そしてここで、試合終了のホイッスル。チームガルシルドとの激闘の末、逆転勝利で試合を終えた。

「ば、バカナ……私の究極の強化人間が………ヘンクタツカー！この敗北は貴様らのせいだ！」

「なっ……」

「私はお前達に、最強の力を与えてやった！なのにそれを使いこなせなかった、貴様らのなア！」

チームガルシルドのやつらは唾然としている。

今までガルシルドのために尽くしてきたのに、たった一つの敗北で捨てられてしまったからだ。

とことんゲス野郎もいとところだ。

そんな様子を俺達が見ていると、コトアールエリアに爆音と振動が響き渡る。上を見ると、ガルシルドがウミガメスタジアムにやってきた時に使った飛行船が現れた。

ガルシルドは、逃亡を始めようとしている。そんなガルシルドを、ヘンクタツカー共々追いかける。

「我々を見捨てるのですか!?これだけ尽くしてきた私達を！」

「貴様らの代わりなどいくらでもいる」

「ガルシルド様ッ……!」

ガルシルドがそう言い捨て、飛行船に乗り込もうとした。すると、黒のスーツを着た男性達が、飛行船の入り口を遮り、ガルシルドの目の前に現れた。

「なんだ貴様らは?」

「国際警察だ。ガルシルド・ベイハン。お前を逮捕する」

「国際警察ッ?」

「……少々お遊びが過ぎた様だな、ガルシルド」

「とつととライオコット島からおさらばしていれば良かったのにね」

すると、そこには鬼瓦刑事と、松葉杖を突いた陽乃さんまでが現れた。

「本当に私を逮捕するつもりかッ?」

国際警察は、手錠をガルシルドに見せる。ガルシルドは珍しく、焦りの様子を見せ始めた。

「……何故分からぬのだ!世界は刻一刻と病んでいる!サッカーなどという球遊びに浮かれている今この時にも、世界の残された資源を有効に使うためには!私による支配が必ず不可欠なのだ!世界を救うのはこの私だ!!私だ……私なのだぞ!!」

「……お前達も連行する!」



ガルシルド、そしてチームガルシルドは、飛行船と共に、鬼瓦刑事と国際警察に連行されていった。

「結局、あいつらもガルシルドに利用されたってことか……」

「考えてみると、可哀想な人達ですよね……」

これでガルシルドの手による悲劇は、もう起こることはなくなつた。40年間の物語が、今決着したので。

「ありがとう、マモル。大介のサッカーを守ってくれて。それに、正直びつくりしたよ。

君達の強さには。あの強化人間に勝つたんだから」

「いや。それは大介さん達のアドバイスがあつたからこそだ」

「君達の実力さ。指示通りに動ける君達のね」

「ロココ……」

「でも、決勝では負けないから。君達に勝つて、F F Iで優勝するのは、僕達リトルギガントだから」

「俺達だって、負けないぜ！」

ロココと円堂は、互いの拳を合わせた。

「……青春してるねー」

陽乃さんがそう茶化す様に言う。

「陽乃さんは行かないんですか？」

鬼瓦刑事と共に、ガルシルドの連行に付いて行くと思ったのだが。

「もうガルシルドは終わりだしね。ここから先は、私には関係ないことだもん」

「…相変わらず、破天荒な人ですね」

魔王の身勝手さには、警察もおっかなびつくりだろうね。

すると、陽乃さんは思い出した様に、話を変え始める。

「あ、そういうえば」

「?どうしたんですか？」

「あの時の約束のことで話があるから。今日のこの後、空けといてよー」

約束……。そういうえば、なんか陽乃さんと無理矢理約束されたんだっけ。確か、ヤバい内容だったやつだ。

「私がイナズマジヤパンの助けになったなら、君は私のモノになるって約束。もしかして忘れちゃったの? 酷いなあ」

ヤバい内容でした。

「…ちゃんと覚えてますよ」

「おお、偉い偉い。それじゃ、また電話かけるからね」

陽乃さんはそう言って、俺の目の前から、おぼつかない足取りで去っていった。

「…おい、八幡。さっきの約束とやらはなんだ」

俺と陽乃さんの話を聞いていたのか、すぐさま八神が詰め寄ってくる。対して、俺ははぐらかす。

「…まあ、色々あつてな」

「まさか、お前はあんな胡散臭い雌に付いていくわけではあるまいな？私を置いて、あの雌を選ぶのか？」

八神は俺の首に両手を添えて、こちらを睨む。いつも通り目が据わっており、暗く濁り切った青い瞳が俺を捉えている。

「…そついうのじゃねえよ」

その時、俺は嘘を吐いてしまった。

もしあの約束が果たされるのであれば、捉えようによつては陽乃さんを選ぶことになる。この場を収めるために、俺は八神に嘘を吐いてしまった。

「…ならいい」

八神は、ゆつくりと両手を離していく。そして、俺に向けて忠告する。

「…覚えておけ。お前と永遠に共にするのは、私だけでいいんだ。他の雌を選ぶなど許さんからな」

久しぶりにこんな八神を見た気がする。イタリア戦以降、なんだか忙しくて、八神と

しつかり話す機会がなかった。

すると、

「病院から連絡だわ！」

木野が急いで電話に出て、病院の者と話している。一通り話し終わると、木野がケータイを耳からゆつくり離して、電源を切る。

「秋？」

「……響木監督。意識が戻ったそうよ！」

木野が涙ぐみながら、みんなにそう伝える。ようやく意識が戻ったか……。

—————

俺達はライオコット病院に急いで戻った。看護師曰く、奇跡だそうだ。響木監督だからこそ、復活したと言えるのだろう。

円堂と円堂のお爺さんは響木監督と話すことがあり、病室に残った。他のみんなは疲れてしまい、病院のエントランスで寝ている。

試合で疲れた身体を休めるために、俺も眠りに着こうと思ったそんな中、俺のケータイに着信が入る。

着信先は勿論、陽乃さんである。

「もしもし」

「今すぐにセントラルパークに来れる？　っていうか来なさい。さっきの話の続きだよ」

「……分かりました」

短く、そう伝えて電話を切る。

「…行くか」

俺は一人、病院から出て行った。そして陽乃さんが待つ、セントラルパークへと、足を運んだ。

## あの時の契約

ガルシルドは連行され、響木監督が復活した。

みんなは病院で寝ているそんな中、俺は一人で、セントラルパークで待つ陽乃さんの下に足を運んでいる。

さつきまで夕焼けだった景色が、セントラルパークに向かっていくにつれて、徐々に暗くなっている。

病院からかれこれ時間をかけて、セントラルパークに到着する。周りを見渡すと、陽乃さんが砂浜で座り込んでいる後ろ姿が確認出来た。

俺は陽乃さんに近づくと、足音で気づいたのか、陽乃さんはこちらに振り向いた。

「来たね、比企谷くん」

「…最初はドタキャンしようかなんて考えましたけどね」

「ひつどいなあ。……隣、座って?」

俺は陽乃さんの隣に座り込んだ。客観的に見れば、ただただ男女が海を眺めながら話している絵図だ。

「じゃ、契約について。話そっか」

「…はい」

ついに、この瞬間が来た。

俺は固唾を飲んで、陽乃さんが話し始めるのを待った。

「どうだった？」

「…どう、とは？」

「私が君の、君達の助けになったのかってこと」

正直、陽乃さんには頭が上がらない。警察と組んだとはいえ、俺達のためにガルシルドのことを調べていたんだ。

ヘンクタツカー曰く、俺は陽乃さんが邪魔で手が出せなかつたと聞く。つまり、俺が知らないところで陽乃さんは俺を守ってくれていたんだ。

それなら、俺が出すべき答えは。

「…助けてくれて、感謝してます」

「どういたしまして。それで？契約の報酬は？」

「…聞いてて分かつてるなら聞く必要ないでしょ」

「比企谷の口から聞きたいの」

俺は、今日この瞬間から。

「……好きにしてください。煮るなり焼くなり捌くなり殺すなりと」

「比企谷くんは私が生粋の殺人鬼か何かに見えるの？全く、恩人に向かつてなんてこと言うのさ」

陽乃さんは可愛らしく怒るが、陽乃さんの瞳はそんなチャチなものじゃない。

手に入った。欲しいものが手に入った。

そう言わんばかりの目。まるで、独占欲を剥き出しにした目だ。

「……じゃ、契約の報酬は比企谷くん自身で。今更嫌だとかは無しだからね」  
「……はい」

そう言つて、妖艶な表情に変わる陽乃さんは俺の頬に手を添える。

俺はこの人には抗えない。そう覚悟した瞬間。

「……おい。何をしている？」

陽乃さんの声でも俺の声でもない、第三者の冷たい声が聞こえてきた。その声の方に向くと、

「私の八幡に手を出すな」

「や、八神……」

八神が憎しげな瞳で陽乃さんを睨んで立っていた。それに、来たのは八神だけじゃなかった。

「せ、先輩から離れてください！」



「何なの貴女。燃やされたいの?」

「……エイトから、離れて」

「ま、そういうことだから」

八神の後ろには、音無、レアン、クララ、それにアイシーまでいた。

「姉さん。いい加減比企谷くんに手を出すのはやめて」

「雪ノ下……」

あの雪ノ下までもが、八神達と共に現れた。

「……雪乃ちゃんやガハマちゃんだけじゃなくて、他の女の子にも手を出してたんだけ?」

「へえ……」

陽乃さんは、恐ろしく、底冷えするような声で俺の耳に囁いた。

「……あのさあ。今、比企谷くんと大事な話をしてるの。悪いんだけど、ちよつと他所に消

えてくれない?」

「黙れ。貴様が消えろ」

「あれれ? 君私より年下だよね? いけないなあ、そんな言葉遣いじゃあ」

「……不愉快な面と言動だ。とつとつと八幡から離れろ」

「それは出来ないなあ。だって、もう比企谷くんはお姉さんのモノだから。ね、比企谷く

ん」

そう言つて、陽乃さんはわざわざ確認する。俺は、絞り出すように声を出す。

「……悪いな」

「ほらね。比企谷くんはお姉さんのモノ。そういう契約だからね」

「…契約？何の話？」

「……さつき言つていた約束とやらのことか」

「そうそう。契約の内容は一つ。私がガルシルドのことを調べて比企谷くんを、君達を助ける代わりに、比企谷くんの全てを私がもらうこと。ミスターKやガルシルドのことも、私結構頑張ったんだから」

えっへん、と言わんばかりに彼女は胸を張つて自慢する。

「…そんな……嫌です！先輩と離れるなんて嫌！嫌です!!」

「君の気持ちなんか知らないよ。とにかく、金輪際比企谷くんに近付かないでね。近づいたら………消しちゃうかもね」

「…ふざけるな。八幡は私だけのモノだ。八幡に声をかけて合つていいのも、八幡と視線を交わしていいのも、八幡と触れ合つていいのも全部私だけなんだ。貴様に、八幡を絶対に渡さない」

「しつこいなあ。さつきから言つてるじゃん、比企谷くんは私のモノだつて。聞いてなかったの？それとも聞こえなかった？これだから話の聞かないガキは嫌いなんだよね」

彼女達の争いはさらに激しくなる。どちらも、一切引く気はないらしい。すると、ここで雪ノ下が口を挟む。

「……姉さんにしては、いやに焦っているように見えるわね。比企谷くんを取られるのがそんなに怖い？」

「…雪乃ちゃんもそんなジョーク言えるんだ。全く面白くないけど」

「私は面白いわよ？だって、久しぶりに姉さんの人間らしい表情が見れたもの。その、焦った表情をね」

「…いつの間にか言うようになったね、雪乃ちゃん。今まで自分の力じゃ何も出来なかったくせに。それも、比企谷くんの影響かな？」

「比企谷くんの影響ではないわ。私がこういう人間だつてことを、姉さんは今まで見てきていなかったの？」

今度は雪ノ下姉妹の論争が始まった。あの雪ノ下が、少しではあるが陽乃さんを言い負かしている。

陽乃さんは一回、溜息を吐くと、今度は俺の方を見る。

「……どの子も比企谷くん比企谷くん比企谷くん。比企谷くん、すごく好かれてるね」

「…そう、なんですかね…？」

「……あ、そうだ」

すると、陽乃さんは何やらいいことを思いついたという表情を浮かべていた。

「比企谷くん、この契約の話はちよつと保留ね」

「は、はあ？」

「仕方ないから雪乃ちゃん達に一旦比企谷くんを預けておくよ。別にこのままでもいいんだけど、それじゃあ面白くないからさ」

「……何考えてんの？」

「さあなんだろうねー？ただ、履き違えないで欲しいけど、譲ったわけじゃないから。預けたってことだからね」

「預けた？」

預けたという言葉に、クララが疑問を浮かべて復唱する。

「そう。いずれは返してもらうけどね。君達は比企谷くんとイチヤイチャラブラブしてればいい。彼を好きになるなり依存するなり勝手にすればいい。……けど、そんな好きな相手を、依存していた相手を、敵であるお姉さんに何も出来ずに奪われてしまったら。お姉さんに奪われた瞬間、君達は何を見せてくれるのかな？絶望するのかな？はたまた怒り狂うのかな？それとも、自分達の無力を悔やむのかなあ？」

陽乃さんは諦めていなかった。むしろ、俺に対する執着が強くなった。

ここで一旦引いたのは、彼女達を二度と立ち上がれないように叩き潰すための策だろ

う。

『好きなモノを構いすぎて殺すか、嫌いなモノを徹底的に潰すことしかない』

いつしか、葉山が陽乃さんのことについて言っていた言葉だ。

あいつの言う通り、八神達は陽乃さんの言うところの、嫌いなモノになっている。

「比企谷くんもつままない人間にならないでよね？ そうなったら折角の策がパーなんだから」

「…俺はいつまで経ってもつまらない人間ですよ」

「そういうところが好きだよ。本当、手放すのが勿体ないくらいね」

陽乃さんは、その場からゆっくりと立ち上がる。そして再び、陽乃さんはこちらを振り向く。

「…じゃあね、比企谷くん。決勝戦、頑張つてね」

そう言って、陽乃さんは俺達に背中を向けて歩いていく。陽乃さんの姿が見えなくなると、八神達がこちらに駆け寄ってくる。

「エイト、大丈夫ツ？」

「あ、ああ……大丈夫だ。……つか、なんでお前らここに来てたの？」

「エイトがコトアールエリアである人と話してから様子が変だったから。病院からこつそり付いて行ってたの」

「……そうか」

「ごめんなさい。姉さんが、度々迷惑をかけてしまって……」

「……気にすんなよ。何も迷惑をかけられただけじゃないからな」

確かに幾度となく迷惑をかけられていたが、反面、俺達を助けるために奮闘していたのも事実だ。

無理矢理だったとはいえ、俺にはあの契約を受ける義務があった。つくづく、陽乃さんには頭が上がらないのかも知れない。

「……先輩？」

「……なんでもねえよ。…帰るか」

俺はその場から立ち上がり、付着した砂を払った。そして、俺達の宿舎を目指して、帰路を辿った。

## 謎の幻影

陽乃さんとの契約は保留となった今、俺が集中しなければならぬのは決勝戦だ。

オルフェウスを圧倒したりトルギガントの実力は未知数。加えて、円堂の爺さんの完璧な采配と雷門の鋭い洞察力。

だから危険視していたのだが……。

「今日からイナズマジャパンのマネージャーとなった、雷門夏未だ」

雷門中の制服を着て、監督から紹介を預かった雷門。雷門がイナズマジャパンのマネージャーになるということに、みんなは少なからず疑問を抱いている。

昨日までリトルギガントのマネージャーだったやつが、急にイナズマジャパンに来たんだから。

「いいのかア？あつち行ったりこつち行ったりするやつなんかチームに入れてよ」

不動の言いは分かる。

正直、雷門が何を考えているか読み取れない。だからこそ、最終的な判断をするのは、円堂だ。

円堂は雷門の前に一步を踏み出し、右手を差し出す。

「よろしくな！夏未！」

円堂は迷いなく、雷門をチームの一員として受け入れた。

「…ええ。こちらこそ」

雷門は微笑み、円堂の右手を握り返した。

「よろしく頼むぞ！」

「お願いしますっす！」

「ええ。よろしくね」

ま、これがイナズマジャパンなんだよな。本当、どいつもこいつもお人好しなこと。それが、このチームのいいところではあるんだけど。

「よし！練習開始だ！」

「おう!!」

雷門を迎え入れて、俺達は練習に励んだ。

準決勝では、ロニージョ達がガルシルドに縛られていたことが幸いして勝利した。もしガルシルド抜きで、最初からザ・キングダムサッカーを見せつけられていれば、負けていたのは俺達の可能性がある。

それに、ブラジル戦やチームガルシルド戦では、俺はあまり役に立っていない。

このままじゃ、完全な力不足だ。



そして時は深夜になる。

「……寝付けないな」

妙に目が冴えてしまった俺は、気分転換に宿舎の外に出る。周りは誰もおらず、そして深い暗闇と化している。せめてもの灯りは、電灯だけ。

「……自販機で何か買うか」

そう思い、俺はジャパンエリアにある自販機を探した。

自販機を見つけ、何にしようか迷っていた。

「……つか、パンさん売ってんならマツカンも売つとけよ……」

そんな皮肉を一人で呟いていると。

「……お兄ちゃん……」

「……は？」

今、聞き間違いでなければ、我が妹の小町の声が聞こえてきた。周りを見渡してみると、俺以外誰もあるしていない。

「……幻聴か？」

よく考えてみれば、そもそも小町がこんなところに来るわけがないし、たとえ来たと

しても、こんな深夜に一人では出歩かないだろう。

それにしても、我が妹の幻聴が聞こえてくるとは。それほど小町成分が足りなくなってきたということだろう。

小町い、早く会いたいよお。

「…お兄ちゃん…」

「……また？」

小町成分はさておき、いくらなんでも幻聴が聞こえてくるほど俺はそこまで落ちぶれてない。

いや、もしかすれば小町じゃないかもしれない。迷子の可能性だってある。

「……誰か、いるのか？」

「…お兄ちゃん……。小町だよ……」

「ッ!？」

今はつきりと、一人称を小町と名乗った。迷子ではなく、小町の声だ。

「…小町?どこだ？」

「…後ろだよ。お兄ちゃん」

「は?？」

俺が後ろを振り向くと、そこには本当に小町がいた。ショートカットで俺と同じアホ

毛を生やし、八重歯が特徴の小町がそこにいた。

「こ、まち……………」

「うん、小町だよ。お兄ちゃん…」

「…なんで、ここにいるんだ？つか、こんな深夜に何を……」

俺の問いに、小町は遮る。

「お兄ちゃん」

「…どうした？」

「……サッカー、楽しい？」

小町が唐突に尋ねてきた。

何故急に、こんなところで、こんな時間に、そんなことを聞いてくるんだ…？

「…なんで、そんなこと聞いてくるんだよ」

「…だって、サッカーは危ないスポーツなんだよ？そんな危ないスポーツに、お兄ちゃん達は必死になって大会で戦ってる……。いつ怪我するか分からないのに……」

「…おい、どうしたんだよ」

「お兄ちゃん。サッカー、やめよう？」

「急に、何を……」

小町がいきなりそんなことを言い放った。小町は悲しげな表情をしながら、話を続け

ていく。

「忘れたの？ サッカーなんてものがあるから、小町達の学校を壊されたんだよ？ サッカーなんてものがあるから、小町は悪いやつらに拐われたんだよ？」

「…それは……」

確かに。

言われてみれば、サッカーに関わってきてから奉仕部にいた時以上の面倒ごとが俺にのしかかっている。

「…それに、お兄ちゃんはきつと無茶をする。その無茶のせいで、また怪我するの。サッカーなんてものが無かったら、怪我することなんてない筈なのに……」

「…まるで、決勝戦で俺が怪我するかも知れないって口ぶりだな」

「…だって、今までお兄ちゃん無茶してきたでしょ？ エイリア学園の時も、世界大会の時も……小町、これ以上傷つくお兄ちゃんは嫌だ。だから、サッカーやめよ？ サッカーやめて、また雪乃さんや結衣さん達と奉仕部で楽しく過ごそう？」

「……………」

小町が俺に向けて、手を差し伸べる。

そんな差し伸べられた手を俺は……………。

「えっ……………」

パシイっと、引つ叩かれた音が静かな街中に響き渡る。

そう。小町から差し伸べられた手を、俺が勢いよく払って。手を払われた小町は、驚きの表情に変わる。

「……お前、誰だ」

俺の言葉に、小町は慌て始める。

「な、何言ってるの……？小町だよ？お兄ちゃんが好きな、妹の小町だよ……？」

「確かに、小町は兄思いで、俺が無茶した時も心配してくれたり、相談に乗ってくれたりする可愛い妹だ。……だがな」

俺は小町に、目の前の人物を睨み付ける。

「俺の知っている小町はそんなことは言わない。必ず最初に、”小町に話してみて？”って決まり文句があるんだよ」

「……あ……」

「それで俺が話した時、あいつは、”ごみいちゃんのことだから、仕方ないな”って呆れながら許容してくれるんだよ。で、最後になんやかんや応援してくれる。……俺のことを、一番理解してくれているからな」

小町は何も言葉を発しなくなる。ついには、顔すら俯かせてしまう。

「……もう一度聞く。お前は誰だ」

「……チツ」

すると小町と思われる人物は、顔を上げてこちらを睨み付ける。そんな敵意を向けながら、目の前から忽然と姿を消した。

「……なんだったんだ……今のは……」

一体誰だったのだろうか、今のは。言葉を交わして分かったことは、妙にサッカー嫌いだったことくらいだ。

小町からしてみれば、サッカーを嫌いになっても仕方ないかも知れないが……それでもあいつは笑顔で、俺を世界大会に送り出してくれた。

つまり、小町がサッカー嫌いという説は少なからずない。

小町の偽物……にしてみれば、中々似せてきている気はする。

ガルシルド……ではないだろうな、多分。

「……夜に歩くもんじゃやないな」

俺は自販機で缶コーヒーを買って、そのまま宿舎へと戻っていった。偽小町の言葉を頭の片隅に残しながら。

『サッカー、やめよう?』

小町の言う通り、サッカーをしてから碌なことがなかった。

エイリア学園に学校破壊されて、小町共々連れ去られてしまう。よく分からん犯罪者に危うく手を出されるところだったし、天使と悪魔が俺達を襲ったりするし。

だが、サッカーが危ないスポーツだと言うならば、野球もバスケもラグビーも危ないスポーツだろう。そんなことでビクビクしているようならば、そもそも最初からサッカーはしていない。

それに、意外と悪くないものだったりするのだ。サッカーというスポーツは。ぼっちでも出来るスポーツだしね、テヘツ。

「……まあ、サッカーアンチなんているだろうし。そこまで気にする必要はないよな」

そんなことより、決勝戦に集中しなければならぬ。一々気にして戦っていられるほど、今の俺に余裕はない。

## オルフェウス再び

「……眠い」

結局寝たのは4時くらいだったからな。中々寝付けなかったこともあるが、なんだか偽小町のことを考えていたからな。

「ふあ……あ……」

「エイト、やっと起きた」

俺が大きく欠伸をしていると、クララが部屋に入ってきた。

「早く来て。みんなもう集まってるよ」

「…了解」

俺はとつと準備して、みんなが集まるミーティングルームに向かった。

「遅れてすんません…」

そう謝りながら入ると、この場にいる筈のない人間が二人ほど、モニターの前に立っていた。

「……オルフェウス……」

なんと、オルフェウスのGKブラーヂ、そして白い流星と呼ばれるストライカー、ファイ



ディオがジャージ姿で立っていた。

「……何しにきたの？イナズマジヤパン志望しに来たの？」

「違うよ。なんでも、リトルギガント戦のことを伝えにきてくれたんだって」

そういうば、準決勝でリトルギガントと当たったのはオルフェウスだったな。とはいえ、敵であつた俺達にそんなことするのは、いいものなのか？

俺はとりあえず、空いてる席に着いて、彼らの話を聞く態勢になる。そして、まず最初にブラージが口を開き始める。同時に、モニターにはオルフェウスとリトルギガントの試合が映し出される。

「…リトルギガントのスペックは恐ろしいものだった。鋭い動きに恐るべきスピード、そして破壊力……。まるで、人数が倍になった様だったぜ」

「どこにパスを出しても奪われ、どんなに守っても突破されたよ。…カテナチオカウンターでさえもね」

「やつらに勝つためには、あのスピードやパワーを封じることが必要だ！」

「俺達は全力で、リトルギガントの戦い方を伝える。今日は決勝戦本番のつもりでぶつかってきてくれ！」

リトルギガントの戦いを直で感じたオルフェウスとの練習試合か。ついこの間戦ったっていうのに、なんだか久しく感じるな。

グラウンドに集まり、俺達はそれぞれポジションに付いた。どうやら、この一戦は15分ハーフとのこと。フィディオ曰く、それが限界らしい。

FWは豪炎寺、染岡、基山。MFは風丸、不動、佐久間。DFは木暮、飛鷹、壁山、俺。GKは円堂。

対するオルフェウスのフォーメーションは……。

「…なんだあれ」

オルフェウスのフォーメーションが変である。FW、MF、DFの全員が前線に立っていた。

「これがリトルギガントの恐ろしさだ」

オルフェウスからのボールで試合が開始した。ボールはすぐアンジェロに渡る。アンジェロに向かって、風丸と基山が詰めていくが、アンジェロはアレサンドロにパス。アレサンドロに向かって、次に豪炎寺が走っていくが、すぐさまジュゼッペにパス。

「速い！」

オルフェウスは素早いパスワークで、俺達を翻弄していく。パスだけではなく、スピードも速い。一つ一つの動きに、全力を注いでいるかの様な、激しいプレーを繰り広

げている。

ボールはラファエレに渡り、フィディオがゴールに向かって走っていく。

「行かせるかよッ！」

不動がチャージを仕掛けるが、ラファエレはその前にフィディオにパス。木暮がフィディオに向かって走っていくが、フィディオはひとりワンツで素早く躲す。

「行くぞ！マモル！」

「来い！フィディオ！」

フィディオは必殺技の構えに。円堂も、それに応じて警戒する。

「オーディン……ソオオード！改ッ!!」

進化したオーディンソードが円堂に襲いかかる。

「ガン！シャン！ドワァーン!!」

円堂はチームガルシルド戦で見せた新たな必殺技を繰り出す。失敗に終わり、オーディンソードが決められてしまう。

0-1で、オルフェウスが先制する。フィディオは変わらず、険しい表情で言い放つ。「リトルギガントの攻撃は、もつと厳しいぞ！」

次に、俺達ボールで試合を再開しようとするが。

「何ッ!？」

さつきまでの全員攻撃型布陣が逆転し、全員防御型布陣となっていた。FWのフィディオでさえ、ディフェンスのポジションに付いている。

試合が再開し、俺達は反撃を試みる。風丸がボールを持って上がるが、目の前にラファエレとアンジェロが立ち塞がる。

「クツ……比企谷!」

風丸からのバックパスを受けた俺は、前線に向かって攻め上がっていく。しかし、今度はオットリーノ、ジュゼツペ、ダンテ、アレサンドロの四人が一斉に囲い込んでくる。「一人に対してそれずるくね?」

四人それぞれがボールを奪いに襲い掛かってくる。激しいプレーに、俺は精一杯ボールを保持し続けるが。

「甘いぞツ!」

「しまった!」

オットリーノのチャージでボールを奪われてしまう。

全くパスが通らない。これではジリ貧じゃねえか。

「フィディオ!」

ボールは再びフィディオに渡る。フィディオはゴール前まで駆け上がっていき、オー

デインソードの体勢に入った。

「オーデイン…ソオードツ!!改ツ!!」

ファイディオのオーデインソードが円堂に向かって遠慮なく飛んでいく。

「ガン!シャン!ドワアーン!!」

再び円堂は新技の構えに入り、オーデインソードに挑む。しかし、再び円堂の新技は突破されてしまい、追加点を許してしまう。

「クソツ…!なんで出来ないんだ…?!どうして上手くないんだ…?!こんなことじゃ、リトルギガントには勝てない!」

「円堂……」

試合が迫っているに加えて、リトルギガントの強さを疑似体験してしまった今、何かなんでも新技を会得しなければやつらには勝てない。

そんな思いが、円堂を焦らせている。

ここで、前半終了のホイッスルが鳴り響き、ハーフタイムに入った。俺達は後半に向けて話し合う。

「攻撃も守備も、向こうのほうが人数が多い…」

「これがリトルギガントの強さなのか…」

「実際に倍の人数と戦っているような、圧倒的運動量を持ったチームということだろう」

あっちには円堂の爺さんがいる。オルフェウスより強いチームに仕立て上げるなんて、わけないからな。

「そんな相手にどう戦えば…」

「イタリアから8点も取った上に無失点なんて、完全無欠っス！」

「…完全なチームなんていないわ」

「夏未？」

「大介さんは言ってた。どんなチームにも必ず、自分達には見えない穴が生まれる、と」  
円堂の爺さんが言っていることは正しい。

人間完璧な奴はいない。おそらく、あの陽乃さんにだって欠点がある。その欠点が見つかからないから、完璧超人なわけだけど。

とにかく、弱点がある。それを見つけない限り、オルフェウスに、リトルギガントに勝てはしない。

「後半の指示を伝える。宇都宮、土方、吹雪、そして鬼道。後半は、お前達で行く」

「はい！」

飛鷹、木暮、風丸、染岡に代わって、吹雪、土方、鬼道、宇都宮が入る。鬼道や不動がいれば、オルフェウスの守りを崩すことが出来るだろう。

だが、他力本願じゃいつまで経っても力が付かない。俺も俺なりに、やつらを突破す

る術を見つけないければならない。

後半戦、イナズマジヤパンからのボールで試合が開始した。ボールはすぐに鬼道に渡る。鬼道と共に、佐久間や不動が攻め上がる。

「行くぞー！」

鬼道が佐久間へとパスを出そうとするが、交代したアントンが素早くディフェンスに入る。鬼道はそのまま、佐久間とは別の方向に向けて蹴ってしまった。

オルフェウスは反応出来なかったが、ボールが飛んだ先には誰もおらず、タッチラインを割った。

「あれは……」

オルフェウスが反応出来なかったことに対して、俺は一つの策を思いついた。

「鬼道、不動。ちよつと来てくれ」

「?どうした、比企谷」

「策がある」

俺は思いついた作戦を、鬼道と不動に話す。

「そオいうことかよ」

「…確かに、その方法ならあのディフェンスを突破出来る。やってみよう」

今の俺には強烈な技を持ち合わせていない。出来ることといえば、策を練って伝える

ことくらいだ。

まあ、鬼道や不動ならずぐ気づいただらうけど。

試合は始まり、ボールは不動が持つ。共に、鬼道と佐久間が上がるが、フィディオを含めた6人が不動達にディフェンスに付いた。鬼道と不動が顔を合わせる。

それを見兼ねて、フィディオとラファエレは鬼道を注意する。フィディオとラファエレは、一気に鬼道に詰め寄る。その隙に、フィディオとラファエレがいなくなったスペースに不動がボールを転がす。

その瞬間に、二人は一瞬だけ動きを止める。その隙に鬼道が二人を躲して、不動からのボールを受け取る。

「何ッ!?!」

どれだけ人数がいようが、予想外の事態には対応が遅れるのが人間だ。相手がリトルギガントなら、空いたスペースはオルフェウスよりも広い。

そこに突破口がある。

3人は一気にゴールに向かって走り、連携技の体勢に入った。

「皇帝ペンギン………3号オオツ!!!」

進化した皇帝ペンギン3号が放たれる。それに合わせて、豪炎寺が走っていく。

しかし、そうはさせまいと、オットリーノが自身の巨体を使って、皇帝ペンギン3号



に挑む。だが皇帝ペンギン3号は、構わずオットリーノを吹き飛ばしてゴールに向かって飛んでいく。

「真！爆熱……スクリユウウツツ!!」

「コロッセオ……ガード！改!!」

豪炎寺の爆熱スクリユーに対して、ブラージは進化したコロッセオガードに挑む。だが、コロッセオの壁にヒビが入り始める。そして。

「ぐああアアツ!!」

そのまま豪炎寺のシユートはコロッセオガードを打ち砕いて、ゴールに突き刺した。

1-2。ついにオルフェウスから1点を返した。

やつらの攻略は分かった。だが、やつらを防ぐ方法は依然見当たらない。正直、この試合は普通に負ける。

点を取られたとはいえ、勢いはオルフェウスにある。最後には必ずフィディオに渡り、オーディンソードで決められる。

円堂も諦めずに、新技を繰り出してはいるが、完成の様子はまだ無さそうだ。

気づけば1-5。円堂は何度も新技を繰り出すが、何も変わらずにいる。そのことに対して、悔しそうな表情を浮かべている。

「これだけやっても完成しないのかよ……なんで……どうしてなんだッ……」

「…マモル。君はどんな絶望的なピンチだつて、自分の力で乗り越えてきたんだろ。どんな必殺技だつて必ず、身につけてきたんだろ」

今まで円堂が習得してきた必殺技は、ピンチの時にこそ完成させてきていた。あるいは、進化させてきた。努力の甲斐があつたつてもあるんだろが、あいつの諦めない心が技を生み出し、進化させてきた。

「その新しい必殺技のヒントだつて、ただの掛け声から自分で見つけ出したものじゃないか。…君には出来る。君なら必ず出来る！」

試合は再び始まり、またファイデオにボールが渡つた。

「行かせねえッ！」

ファイデオの動きは前より鋭くなっている。頭をフル回転し、視野を広げて身を動かす、ファイデオの先々の行動を予測する。

「いい動きだねッ！だが、甘いッ！」

ファイデオは即座にボールを後ろにして、ヒールリフトを繰り出した。

「しまっ…！」

宙に緩やかに浮かぶボールに反応出来ず、俺はファイデオに突破されてしまう。

「行くぞオツ!!」

ファイデオは再び、オーデインソードの体勢に入った。

「真！オーディイン……ソオオードオツ!!」

ファイディオもオーディンソードを進化させる。凄まじい威力を放つシュートが、円堂に向かって飛んでいく。

「うおおおオオオオツ!!」

円堂は新技の構えに。すると、先程より衝撃が強くなり、少しだけだが新技の完成形が現れた。神々しい化身が、円堂と共にオーディンソードに挑む。

だが、まだ完成には至っておらず、オーディンソードはそのまま円堂ごとゴールに叩き込む。

円堂はボールを抱いたまま、その場で蹲る。

「マモル！大丈夫か!？」

みんなが蹲る円堂に駆け寄る。しかし、円堂はすぐさま立ち上がる。

「見えた……やつと見えたぞ！新しい必殺技の姿が!」

まだ完成ではない。だが、完成形は見えた。この調子でいけば、こいつはまた試合の中で完成させる。そんな予感がする。

試合はオルフェウスの大量得点差で幕を下ろした。

「あのフォーメーションのおかげで、決勝の戦い方が見えてきた。ありがとう」

「ああ!」

「お前達なら必ず世界一になれる！頑張れよ！」

「よし！この必殺技、必ず完成させてみせるぞ!!」

円堂がそう意気込むと、目金がちやっかりと現れる。

「あれはゴッドハンドを超えた、ゴッドキャッチです！」

毎度毎度すかさず必殺技を名付ける目金くんは一体なんなんだろう。半分以上の必殺技の名付け親が目金とか、なんか嫌だ。

「ゴッドキャッチか……よし、やるぞ！ゴッドキャッチだ!!」

……俺も、早いところ必殺技を身につけないとな。

## エール

オルフェウスとの試合が終えたその夜。

「それじゃ、繋ぎまーす！」

モニターを点けると、その瞬間に大歓声がモニターから響き渡る。

「な、なんだ？」

「おーい！イナズマジヤパンのみんなー！こんにちはー!!」

「こんにちはー!!」

モニターに映し出されたのは、雷門中サッカー部の半田や松野などの面々だった。

「見てくれ！みんな雷門中サッカー部なんだ！」

モニターがズームバックされると、体育館には数え切れないくらいの雷門中の生徒が

集まっていた。

「ええーッ!?!」

雷門出身のみんなは、特に驚いている様子だった。

「うちの学校から、イナズマジヤパンに沢山選手が行ってるだろ？おかげで、サッカー部

の人气が上がったんだ！」

「アジア予選の時から、どんどん部員が増えてきてるんだよね！」

「毎日入部希望者が来てるんです！一年から三年まで、こーんなにいます！」

「凄えな。たった十数人しかいなかった部活が、あんなに増えるなんてな。まさに圧巻。」

すると、そんな時。俺のケータイが震え始める。

「誰からだ…？」

ケータイを取り出すと、着信先にはハートとかキラキラした絵文字が並んで表示されている。しかし、その絵文字の間に、平仮名で“ゆい”と表示されている。

つまり、これは由比ヶ浜からの電話だ。

「雪ノ下。ちよつと来てくれ」

「？」

俺達は一度部屋から出て、俺の部屋に連れ込んだ。連れ込んだって表現がなんかヤバいが、まあそこは置いといて。

スピーカーをオンにして、電話に出る。

「あ、ヒツキー！やつはろー!!」

「由比ヶ浜さん…」

「ゆきのーん！超久しぶりだね！」

「…ええ。久しぶりね」

なんだか由比ヶ浜と話すのが懐かしく感じる。たった2ヶ月程度会っていないだけなのに、なんだか懐かしい。

「私もいますよー!」

「お兄ちゃん、雪乃さーん!」

「一色に小町まで…」

あざとい小悪魔ごと一色と、我が妹の小町まで一緒にいる。

「せんばーい!私がいなくて寂しかったですかー?」

「全く。むしろ清々したよ」

「なんでそんな反応になるんですかあー!」

相変わらずあざといな小娘よ。

「…それで、どうしたのかしら?」

「あ、うん!ヒツキー、ビデオ通話に変えてくれない?」

「え?おう」

俺はビデオ通話に変える。すると、小さい画面の中には由比ヶ浜と一色、小町がいた。久しぶりに、二人の顔を見た気がする」

由比ヶ浜ははにかんで、そう言う。

「まあ、久しぶりではあるな。それで、どうしたんだ？」

「明後日、決勝戦でしょ？だから電話かけたの！それに、実はここにいるの小町達だけじゃないんだよ？」

「え？」

由比ヶ浜達が一度退き始めると、次に画面に映し出されたのは…。

「八幡！久しぶり！」

「戸塚ああーッ！」

待って戸塚出てくるとか八幡聞いてない。すっぴんのままで電話しちやってるわ恥ずかしい。

「バカじゃないの、アンタ…」

「川崎さんまで……」

「知り合いが世界大会の決勝戦に出るってなるなら、一応応援はしとく必要があるでしょ」

「うん！八幡が活躍する姿、みんなで見るからね！」

よし任せろ戸塚。戸塚のためにハットトリックかましてやるぜ。戸塚のためなら俺頑張れる。

「…まあ、頑張るなよ。大志やけーちゃんも応援してんだから」



「ありがとな。戸塚、川崎」

「頑張れ、八幡！」

二人はそうエールを残して、画面外へと消えていく。次に画面に映し出されたのは、平塚先生だった。

「久しぶりだな。比企谷、雪ノ下」

「平塚先生……」

「お前の活躍は見ているよ。決勝戦まで、よく上り詰めたな。だが、泣いても笑っても次が決勝戦だ。私がお前に言えることはただ一つだけ。……悔いを残すな。自分が納得出来る、最良のプレーをしてこい」

「……本当、カッコいいっすね。あんた」

「なんでこんなカッコいい人が結婚出来ないのかなあ。このままだと俺が貰っちゃうよ？ いいの？」

「今度、二人が帰ってきたら一緒にラーメンでも食おう。イナズマジャパンでの、手土産話を持つてね」

「……そうですね。楽しみにしてます」

「ではな。頑張れよ」

平塚先生はカッコよく言い残して、画面から消えていく。

「まだまだせんばい達に話したい人が沢山いるんです！次どうぞー！」  
「え、まだいるの？」

戸塚に川崎に平塚先生来たら十分じゃない？

材木座？そんなやつ俺の知り合いにはいないよ？気のせいだよ？

次に画面の中に入ったのは、葉山だ。

「葉山……」

「比企谷、雪ノ下さん。久しぶりだね」

「…珍しいな。お前がこういうのに参加するなんて」

「川崎さんの言う通り、知り合いが世界大会の決勝戦に出るなら応援しないわけにはいかないだろう？」

義理堅いことで。別に嫌ならしなくてもいいんだけどね。

「ヒキオ！隼人が応援してんだから、絶対に優勝しろし！」

「三浦さん……」

葉山や、あの三浦までがエールを飛ばしている。対して仲がいいわけでもないのに、わざわざ時間を割いてまでこんなことをするのは。

「ヒキタニくん！俺達、めっちゃ応援してっから！」

「あ、帰ってきたらジャパンの話も聞かせてね。男の子がいっぱいいるでしょ？特訓や

試合中に、ヒキタニくん達が不可抗力で絡み合って……キマシタワーっ!!」  
「ちよ、海老名擬態しろし!」

相変わらずのやかましいグループなことだ。

「…比企谷。決勝戦、勝てよ」

「…おう」

葉山達はそう言い残して、画面外から消えていく。

「次! 城廻先輩です!」

小町がそう言うと、画面には城廻先輩が映される。

「こんにちはー。久しぶりだね、二人共」

「お久しぶりです、城廻先輩」

「比企谷くん、次は決勝戦だね。きつと、比企谷くんにとっては大きい思い出になる。平

塚先生も言ったように、悔いだけは残さないでね?」

「…分かりました」

「じゃあ比企谷くん。決勝戦、頑張つてね。ふぁいとー!」

城廻さんはそう意気込みながら、可愛らしく応援する。何これ可愛い。流石マイナスイオン放出する城廻先輩。

城廻先輩と入れ替わって、由比ヶ浜が再び映される。

「ヒツキー。次に出てくる人には、ちょっと驚くかも知れない。けど、ちゃんと聞いてあげてね」

由比ヶ浜が神妙な面持ちでそう伝える。由比ヶ浜がまた画面外から消えると、入れ替わって映し出されたのは、驚きの人物だった。

「……相模さん」

画面に映し出されたのは、相模南だ。しかし、対峙したあの時の様なてきいはなく、今はただ悔恨の表情だった。

「……珍しいな、お前も。まさか、相模まで参加するなんてな」

「ウチが参加するって言い出したの。ずっと言いたいことがあつて……」

すると相模は、突然頭を下げ始めた。

「ごめんなさいー！」

「相模……？」

「……あの屋上の時のこと、謝りたかつたから。ウチの我が儘で、みんなに迷惑かけて……それに、あんたにも悪いことしちゃったから……」

相模が謝っているのは、文化祭の時のことだろう。本番のプレッシャーに潰された相模は、文化祭実行委員長でありながら仕事を放棄した。由比ヶ浜や雪ノ下が即興ライブで時間を稼いでいる間、俺は相模を連れ戻すことになった。

しかし、俺は葉山の様に優しく言うことも出来ないし、何より葉山がただ単に連れ戻せば、雪ノ下がやってきたことが無意味になる。

だから、俺は俺なりに。

相模を徹底的に追い込んだ。結果的には、相模も戻り、相模の依頼も、雪ノ下の努力も無にならなかった。

自身の評判と引き換えに。

「…最初、イナズマジヤパンのサッカー観てた時、あんたの姿を見てこう思った。あんたみたいなやつは場違いだって。どうせ足を引つ張るに決まってるって」

まああながち間違いではないけどね。

「…でも。アジア予選や世界大会じゃ、あんたは活躍してた。足を引つ張るところか、みんなから頼られるやつだった。だから、ウチは思い返してみたの。…なんで、あんたがあんなことしたのかって」

「…相模…」

「みんなから頼られるやつが、なんであんなことするんだって。だからずっと考えてた。それで、分かったの。……全部、我が儘なウチが悪かったんだってこと」

相模の表情は、段々と暗くなっていく。気づけば、彼女の目には微かな涙が流れ始めていた。

「…ウチの我が儘で、比企谷や雪ノ下さん、それに城廻先輩や、みんなに迷惑をかけたんだって分かった。あの時、あんたがあんなことを言ったのは、私の評判を悪くしないためだったんでしょ？」

相模は本気で悔やんでいた様子だった。あれだけプライドの塊の様なやつが、一変してちゃんとした人間になっていた。

だが、一つ違うことがある。

「…ウチつて、本当に最低だよ。ウチのせいで、比企谷が…」

「それは違う」

「えっ…？」

相模が言っていることは違うのだ。確かに、色々迷惑はかけられた。だが、あの屋上で的一件は違う。

「別にお前を助けたくて助けたわけじゃない。あれが、俺が思い付いた最善の策だっただけだ。結果的にお前が助かったのかは知らんけど、お前が謝る必要も悔やむ必要もない。それに、嫌われていたのは文化祭前からずっとだ」

「それでもっ！ウチがサボらなきゃ文化祭はちゃんと回った！結衣ちゃんや雪ノ下さん達が時間を稼ぐ必要がなかった！…全部、全部ウチが悪いんだよ……。……。ウチなんて、死んだ方が……。」

こういう時、葉山ならば「そんなことないよ」って、気の利いたことを言うのだろう。しかし、相模がサボって迷惑をかけたのは事実だ。そんなことをないと言つても、今の相模は納得しないだろう。

「…確かに最低だよ、お前は。あれだけ我が儘に、やるだけやって色んな人に迷惑かけてんだから」

「っ…………だよね…………」

「だが、それを自覚して、後悔してんなら上出来だろ。少なくとも、俺からしてみれば今のお前は最低じゃねえよ」

「比企谷…………」

「だからこの話はこれで終わりだ。過去を清算出来てんならそれでいい。自分を最低と言う必要も、死にたくなると思う必要もない。堂々と、プライドのお高い相模南をしていればいい」

そう。終わりだ。

一々過去を引つ張つてくる必要はないし、相模自体はちゃんと反省して、成長しようとしている。

「…ふっ。何それ」

相模は少し吹き出す。暗い表情をしていた彼女は、段々と晴れやかになっていく。流

していた涙を拭い、目を赤くしながら、彼女はこう言った。

「…ありがとう。比企谷」

「……おう」

相模に感謝を伝えられる日が来るとは思わなかった。俺は思わず、短く返してしまっ  
た。

「…あ、ごめん。折角の決勝戦前に、ウチの面倒な話しちゃって…」

「別に気にしてねえよ」

「比企谷。ウチ、応援してるから。帰ってきたら、色々聞かせてくれる？」

「…気が向けばな」

「…うん。頑張りなよ、比企谷」

そう言って、相模は清々しい表情で去っていった。再び、由比ヶ浜や一色が画面に映  
る。

「ヒツキー、頑張つてね！帰ってきたら、今度ハニトーの店に連れてつてよ！」

「お前はそれ以前に受験勉強頑張れ」

「…そうね。私達が帰ったら、きっちり教えてあげるわ」

「ううう……」

「じゃあせんぱい！私受験生じゃないので、どこかに連れてつてくださいー！」



「俺は受験生だから無理だな」

「ぶーぶー!!」

「あざとい」

リアルでぶーぶー言うやつなんて初めて聞いたよ。赤ちゃんですらぶーなんて言わんぞ多分。

「…じゃ、雪乃さん。お兄ちゃんのこと、お願いします」

「ええ」

「お兄ちゃんも! 決勝戦、頑張つてね! 優勝したら、帰ってきた時小町のハグで迎えてあげるから! 今の小町的にポイント高い!」

「そうだな。小町にハグされるなんて、八幡的にポイント高い」

「最後までシスコンだあ……。とにかく、頑張つてね! ヒツキー!」

「…ああ。じゃあな」

そう言つて、通話が切れる。

みんなの思いが詰まった時間だった。葉山や三浦、相模までもが俺を応援してくれている。

勝手で過度な期待だ。

それでも、俺はそれに応える必要がある。それが、イナズマジヤパンの一員である俺

の役目だからだ。

俺はケータイをポケットに入れて、俺はドアノブに手をかける。

「…比企谷くん。由比ヶ浜さん達の思いに、応えましょう」

「……そうだな」

俺は戸を開けて、部屋を出る。そのまま宿舍の出口へ向かい、戸を開ける。目の前に見えるグラウンドには、ナイターの中でみんなが練習している姿だ。

「…すっげ」

15分ハーフだったとはいえ、オルフェウスと試合した今日の夜に、あんな嬉々として練習している。雷門からの動画を途中から観ていないから知らんけど、きつとみんなも日本にいるやつらからのエールで刺激を受けたのだろう。かくいう、俺もそうなんだけど。

俺は一足遅くに、グラウンドに足を踏み入れた。

――

翌日。

いよいよF F I世界大会決勝戦前日。今日は総仕上げであり、明日に向けて調整する

日である。

前日だけあって、やはりみんな気合が入っている。

だが。だがしかし。

必殺技思いつかなくてマジやばい。

シユート技は止められるし、オフェンス技もブロック技も通じるか分からん。せめて決勝戦では見せ場一つくらい残さなきゃ、気が悪い。

「難しい顔してるね、比企谷くん」

「ん？」

俺が悩んでいると、吹雪が声をかけてくる。隣には、鬼道も。

「明日は決勝だ。難しい顔をするな」

「つつてもな……」

「心のその七。ユルスツヨサ」

「え？」

吹雪が唐突にそう言い始めた。確か、円堂の爺さんが書いた最後のノートだったわけ。

「あのノートで、一番心に響いたのがそれなんだ。僕は、ずっと完璧という言葉に囚われて、それが出来ない自分を許せなかった。僕は僕なんだって思えなかった」

吹雪といった時間は短い、それでも彼が背負っていた心の闇は知っていた。イプシロ  
ン戦以降、相当思い詰めていたからな。

「…でもみんなのおかげで、強さも弱さも、間違いなく僕自身だと気づいたんだよ」

吹雪は拳を胸に当てる。

「あのノートは、自分自身を見つめ直すものなんだ」

「見つめ直す……か」

俺の今まで見つめ直しても碌なもんじゃないぞ。エイリアに拐われているわけだし、  
そもそも最初からサッカーやる気じゃなかったわけだし。

でも、今はそれほど悪くはないと思えるのだ。サッカーなんて、やるにしてもずっと  
一人でやってきていたからな。誰かと一緒にサッカーするなんてことは、今までなかつ  
た。

体育でサッカーがあってもサボってるわけだし。

「自分が分かれば、心の奥底に眠っていた力を引き出せる。僕にとってそれが、心のその  
七。ユルスツヨサ」

「…まあ、強くなるきっかけが出来て良かったんじゃないの」

「うん。……鬼道くん。それに比企谷くん。力を貸して欲しいんだ」

「…俺は円堂と会って、サッカーへの思いを見つめ直し、変わることが出来た。比企谷は

どうだ」

「俺は……」

別に俺は何も変わっちゃいない。この捻くれた性格も、ペシミストでどうしようもないところも変わっていない。集団でいることの良さなんて全く感じない。

だが。

雷門に、あの円堂というサッカーバカに出会って。サッカーをすることの楽しさや、こいつらと同じ目標を背負って戦うことに、不思議と嫌悪感は抱かなくなっているのだ。

もとよりサッカーは好きじゃないし、団体行動も苦手だ。諦めちゃならないとかいう言葉も、傲慢じゃないのかと思っていた。人間諦めてもいい時だつてある。それを強要することに、俺は気に入らなかった。

けど、それでもこいつらと一緒にいることに嫌な思いはしないし、ピンチになつても最後まで諦めちやいけなとかいう考え方にも嫌な思いはしない。むしろ、自分はそうしたいのではないかと、無意識にのうちに思い込んでいたのかも知れない。

要するに、円堂と出会って、自分の中で何かが変わり始めていたのだろう。それがいかどうかは分からんけど、嫌な思いはしないことは確かだ。

「……あのサッカーバカとずっといりゃあ、嫌でも何かは変わるだろう」

「…比企谷らしい答えだな」

「そんな僕達だからこそ、手を組めば大きな力を手に入れられる。やってみようよ。新しい技を」

「なるほど、連携技か……。やってみる価値はあるな」

「うん！やろう、鬼道くん！比企谷くん！」

「…そうだな」

吹雪と鬼道はボールを持って、円堂がいるゴールに走っていく。

改めて思った。

こいつらとサッカーするのは、案外悪くないのだと。

# 決勝戦

翌日。

いよいよ、今日はF F I世界大会決勝戦。リトルギガントと世界一を懸けて争う。

俺はユニフォームに着替えて、上からジャージを羽織る。準備を済ませて、宿舎の外に出る。

空を見上げると、からつと晴れた青空である。ライオコット島を照りつける太陽に、目が眩む。

「…あつっ」

俺は身体を動かすために、ランニングを始めようとすると、グラウンドでは既にみんなが走り込みを始めていた。

「気合入ってんな…」

まあ、俺も人のことは言えんけど。

集合までの短い時間、俺達は気合を入れるために走り込んだ。

—————

そして、集合時間となる。宿舎の入り口で、俺達は監督の前に揃って立つ。

「監督！全員揃いました！」

監督は俺達を見渡し、そして、口を開いた。

「円堂守」

「え？」

監督から円堂への突然の名指し。円堂は、何のことか理解出来ずにいた。そしてもう一度、監督は。

「円堂守」

監督は円堂の名を呼ぶ。円堂は監督の意図を読み取り、そして。

「…はいッ！」

大きな返事で返す。

イナズマジヤパンのキャプテンであり、精神的支柱の円堂。彼がいるからこそ、ジャパンのみんなは輝くことが出来る。

「豪炎寺修也」

「はい！」

イナズマジヤパンのエースストライカー、豪炎寺。その足で、今までイナズマジヤパンに幾度となく貢献してきた。



「鬼道有人」

「はい！」

イナズマジャパンの司令塔として、数々の戦略を練ってきた。円堂、豪炎寺に続いてジャパンの中心的人物だ。

「風丸一郎太」

「はい！」

チームでも群を抜く足の速さの持ち主。そのスピードは、相手を翻弄する武器となっている。

「染岡竜吾」

「おう！」

一度は代表から落ちたものの、諦めずに特訓をした末、イナズマジャパンの有力なFWとして活躍している。

「壁山塀吾郎」

「はいっす！」

臆病者のDFであるが、実力は本物。テレスに劣らない、素晴らしいディフェンスを兼ね備えている。

「吹雪士郎」

「はいー！」

攻守共に優れたオールラウンダー。まさに、完璧なプレイヤーと言っても過言ではない。

「不動明王」

「はいよ」

天才ゲームメイカー鬼道と並び立つ、もう一人の司令塔。表の司令塔が鬼道なら、裏の司令塔が不動である。

「比企谷八幡」

「はい」

不動の次に、俺が呼ばれる。

由比ヶ浜や一色、小町、総武の連中の思いを背負っている。最低でも、恥ずい試合はしないようにしないと。

「佐久間次郎」

「はいー！」

染岡と同じく、一度は落ちてしまったものの、努力の結果、見事に返り咲いた。鬼道、そして不動との連携が抜群だ。

「綱海条介」

「おうッ！」

DFでありながら、強烈なシュートを兼ね備えているサーファー。サーフィンで鍛えた身体能力には、驚かされるときがある。

「土方雷電」

「はい！」

とんでもないパワーの持ち主のプレイヤー。仲間、そして家族に対する思いは、人一倍強い。

「木暮夕弥」

「はい！」

悪戯好きのDF。小さい身体に秘めたずば抜けた運動神経は、相手を攪乱する。

「立向居勇氣」

「はいッ！」

円堂を慕うGK。だが、ゴッドハンドやマジン・ザ・ハンドを見ただけでマスターする才能は、目を光らせるものがある。円堂と引けを取らない、いいGKだ。

「基山ヒロト」

「はい！」

ジェネシスで共に戦ったFW。流星のごときシュートを放つキック力と、優れた頭脳

を持つプレイヤー。

「宇都宮虎丸」

「はい！」

小学六年生ながら、代表に選ばれたプレイヤー。そのサッカーセンスは鬼道や豪炎寺に勝るとも劣らない。

「飛鷹征矢」

「うす！」

ど素人で代表に選ばれたプレイヤー。最初こそは危うい部分もあったが、今はその影が見えない。立派なDFである。

選手全員を呼び終えた監督は、次にマネージャーに点呼をかける。

「木野秋」

「…はい！」

一之瀬や土門達との幼馴染の木野。木野の、誰にでも気さくに接することが出来る人当たりの良さは、チームを癒す。

「音無春奈」

「はいっ！」

鬼道の実の妹で、いつも元気のあるマネージャー。時々喧しいことがあるが、彼女の

その元気な姿はチームを明るくする。

「目金欠流」

「ここにいますー！」

なんでイナズマジヤパンに付いてきたのか未だに分からない存在。彼がここに来て果たしている役割は、新たな必殺技の名前を授けることである。

「久遠冬花」

「はいー！」

礼儀正しく、大人しい性格だが、芯が強いマネージャーである。たまに毒舌を吐くことがあり、おそらく天然ちゃんである。

「雷門夏未」

「……はいー！」

ついこの間までリトルギガントのマネージャーであった雷門。円堂の爺さんの下で身につけた観察眼は、チームの力を高めることが出来る、いい戦力である。

「八神玲名」

「……ああ」

基山と同じく、ジエネシスで共に戦ったプレイヤー。冷静沈着で、サッカーの実力も申し分ない彼女は、俺に対して異常なまでに依存している。

「雪ノ下雪乃」

「はい」

我が奉仕部の部長で、体力以外ハイスペックな人物。八神や三浦と対立することあるが、由比ヶ浜に対してはとても甘い。あだ名はゆきのん、あるいはユキペディアである。マネージャーも呼び終わると、監督はしばらく口を閉し、そして再び開く。

「…緑川リュウジ」

「…」

イナズマジャパンにいたことのある、緑川の名が挙げられる。

おちゃらけた性格で、ことわざが好きな緑川は、誰よりも努力家である。その努力の結果が、ライトニングアクセルだった。

「栗松鉄平」

「！」

緑川に続き、栗松の名を挙げられる。

チームのムードメーカーである栗松は、アルゼンチン戦では大活躍した。立向居の魔王・ザ・ハンドが完成したのも、栗松がいたからである。

「…そして、選ばれなかった多くのプレイヤー達……その意志を受け継ぐ、日本代表としての決勝戦だ。……勝つぞ！」

「はい!!」

俺達は決勝の会場である、タイタニックススタジアムへと向かった。

—————

「さあ、第一回フットボールフロンティアインターナショナル世界大会決勝戦！日本代表イナズマジャパン対コトアール代表リトルギガントの一戦が、ここタイタニックススタジアムで行われようとしています！」

俺達はタイタニックススタジアムに到着し、控え室で準備を始めていた。控え室のアナウンスでは、世界大会を実況していた人物の声が流れてくる。

「ブラジル代表ザ・キングダム、イタリア代表オルフェウスが敗退するなど、波乱続きだった今大会も、遂に決勝戦を残すのみとなりました！果たして、記念すべき第一回目の優勝はどちらのチームに輝くのでしょうか！既にタイタニックススタジアムは、超満員の観客で溢れ返っております！」

実況と共に、タイタニックススタジアムにいる歓声が控え室に聞こえて来る。

「円堂！」

「はい！」

監督が控え室に入室し、円堂にキャプテンマークを授ける。円堂は左腕にキャプテン

マークを付ける。

「行こうぜ、みんな！」

「おう!!」

「あ、俺トイレに行きたいっスー!!」

そういうのは先に行つところね壁山くん。

—————

俺達はリトルギガントと共に、タイタニックスタジアムのピッチへと入場していく。

それぞれのチームのベンチに向かい、フォーメーションを決めていた。そんな中、突如リトルギガントのベンチから重々しい音が聞こえてきた。

リトルギガントのベンチの方を見ると、リトルギガントの選手全員が、身体から何かを取り外しているようだった。

「……まさか、重りか？」

「そう。一人20kgの重りを付けているの」

「そんなに!?!」

「あれを付けた状態で試合をしてきたのよ。しかも、必殺技を一度も使わずにね」



必殺技を一度も使っていないことは陽乃さんから聞いていた。しかし、20kgの重りを付けたまま試合をしてきたとはな。

「……やべえな」

飛んだ縛りで、オルフェウスを叩きのめした実力を持つてゐることは、重りを外して必殺技を使つてこられたら、ただでは済まないことになる。

この決勝戦、荒れそうだ。

## 頂上決戦 前編

ピッチの真ん中では審判がコイントスを行う。コイントスの結果、先行はイナズマジャパンからのボールとなる。

俺達は、それぞれのポジジョンに付いた。

FWは染岡、豪炎寺。MFは佐久間、風丸、鬼道、基山。DFは俺、壁山、飛鷹、吹雪。GKは円堂だ。

対するリトルギガントも、俺達と同じくバランスの取れた4―4―2のフォーメーションで来ている。

今、審判がホイッスルを啜える。そして、決勝戦開始を告げる音が高らかに鳴り響いた。

「行くぞー！」

染岡がボールを持って攻め上がっていく。染岡がリトルギガント陣内に切り込んでいくと。

「な、何ッ!？」

ゴーシュとドラゴのダブルディフェンスで、あつという間にボールを奪われてしま

う。

「なんて速さだ！」

「だが付いていけない！ オルフエウスとの特訓を思い出せ！」

ゴーシュがドラゴへとパスを出す。だが、そこに鬼道が早く向かってインターセプト。

「上がれ！ 染岡、豪炎寺！」

「おう!!」

凄まじいスピードではあるが、オルフエウスとの練習試合の効果がここで発揮されており、対応出来ている。

「佐久間！」

鬼道から佐久間に。そのパスを、佐久間がセンターリング。そのボールに合わせて、豪炎寺が必殺技の体勢に入る。

「真！ 爆熱… スクリュウウウツ!!」

豪炎寺の渾身の必殺シュートが、GKロココに向かって飛んでいく。だが、ロココは動揺していない。

ロココが両腕をクロスすると、両手に赤いオーラを纏う。そのまま、豪炎寺のシュートに向かって飛んでいく。

「ゴッドハンド…X!!」

そのまま右手から、赤いゴッドハンドを繰り出して、爆熱スクリューにぶつける。そして、豪炎寺のシュートを完璧に止める。

「ゴッドハンドX…:…?」

円堂の山吹色のゴッドハンドや、立向居の青色のゴッドハンドと違い、豪炎寺の爆熱スクリューを、いとも簡単に止めてしまう赤いゴッドハンドをロココは繰り出してきた。

流石、円堂の爺さんと共に歩んできただけはある。

ロココは笑みを浮かべながら、ボールを下に落とし、そのままダイレクトに蹴り込む。

ボールは凄まじい勢いで、円堂に向かって直線上に飛んでいく。

「ぐッ…!?!」

円堂の対応が遅くなるも、ロココのシュートをなんとか防ぐ。

「ゴールからゴールにダイレクトで蹴ってきやがったよ…!」

余程のキック力がなければ、今みたいなことは出来ない。ロココは、豪炎寺や染岡に引けを取らないキック力の持ち主ということになる。

「攻めろ、みんな!!」

円堂が鬼道に向かって大きく投げ渡す。しかし、リトルギガントの素早いマークで鬼

道はパスが出せない。

俺はディフェンスラインから、一気に上がっていく。

「鬼道！上だ！」

俺は走りながら、鬼道にそう伝える。マークされていても尚、使える必殺タクティクスが俺達にはある。

「そうか……行くぞみんな！」

鬼道は大きく跳んだ。

「必殺タクティクス……ルート・オブ・スカイ！」

韓国戦で繰り出した必殺タクティクス。鬼道、俺、佐久間、基山、風丸と、空中でダイレクトパスを出すことで、リトルギガントが反応出来ないでいる。

「そう来る……。ウインディ！」

ボールに合わせて動く豪炎寺に、DFのウインディが向かっていく。

「取らせるかよ！豪炎寺！」

染岡は空中で、更に上空へとボールを蹴り上げた。豪炎寺はそれに合わせて、大きく跳ぶ。

「うおおおオオッ！」

すると、豪炎寺への高いパスをウインディがクリア。ウインディ一人で、ルート・オ

ブ・スカイが破られた。

クリアしたボールは俺のところに転がってくる。

もうルート・オブ・スカイは使えない。なら、個人技で行くしかない。そう考えた俺は攻め始めようとする、

「行くよー！」

するとリトルギガントは、DFのウォルターとジニーを残し、それ以外のメンバーが俺を一齐に囲う。囲うと、そのまま時計回りに走り出していく。走り出すと、黄緑色の竜巻を起こし始める。

「必殺タクティクス…サークルプレードライブ！」

「くっ……！」

俺は竜巻の中で、ボールを奪われないようにキープする。ボールを上へ上げようと考えたが、竜巻は俺をどこかに誘導しようとし、そんな隙はなかった。

そして竜巻は動きを止め、徐々に消えていく。周囲を見渡すと、なんと自陣のペナルティエリア内だった。

「戻されてたのかよ……！」

するとリトルギガントは、こちらに一齐に襲いかかる。ボールをドラゴに奪われてしまい、シュートチャンスを作ってしまう。

「くらえエツ！ダブル・ジョー！！」

ドラゴは空中でボールを右足で蹴り、更にボールを少し浮かせる。背後には恐竜のアゴと思われるものが出現し、そのアゴが噛み砕くモーションと同時に左足で蹴り飛ばす。

打ち込まれたボールは激しく上下に反復し、円堂に向かって飛んでいく。

「ゴツド…キヤツチツ！！」

円堂はゴツドキヤツチを繰り返す。しかし、呆気なく破れてしまい、ダブル・ジョーがゴールに突き刺さった。

先制点を得たのはリトルギガント。

今のゴツドキヤツチがまだ未完成だったとはいえ、凄まじい威力のシュートだった。多分、真イジゲン・ザ・ハンドは通用しないと見ていい。ストライクサンバやガンシヨットより、ずっと強烈な技だ。

ボールは俺達から。

ホイッスルが鳴り響き、俺達は反撃を試みた。染岡がボールを持って上がっていく。

しかし、ドラゴが染岡に迫りついてマークに付いた。

「染岡くん！」

「おう！ヒロトツ！」

染岡からの基山。基山から、今度は風丸に。風丸から、再び染岡へとボールを繋げる。

「轟け!!ドラゴン…スレイヤーアーツ!V3!!」

染岡のドラゴンスレイヤーがロココに飛んでいく。

「ゴッドハンド…X!!」

ロココは再びゴッドハンドXを繰り出し、ドラゴンスレイヤーを止めた。

止めたロココはマキシに向けてボールを蹴り上げると、風丸がインターセプト。風丸はそのまま攻め上がっていくが、キートが前から向かってくる。

「風神の舞!改!!」

風丸は風神の舞でキートを突破。風丸から、今度は基山にセンターリング。

「流星ブレード!V3!!」

今度は基山の流星ブレードがロココに向かっていく。

「ゴッドハンド…X!!」

ロココはまたもゴッドハンドXを繰り出し、流星ブレードを完璧に止める。

ロココはシンティに向けてパス。攻め上がってくるシンティに向かって、俺は走っていく。

「ゴー・トゥー・ヘル!V2ツ!」

俺はゴー・トゥー・ヘルでシンティからボールを奪う。そのまま佐久間に繋げる。



「豪炎寺！」

佐久間から豪炎寺へのセンタリング。

「真！爆熱…スクリユウウーツ！！」

豪炎寺は再び爆熱スクリユウを放つ。

「ゴツドハンド…X！！」

だが、ロココは豪炎寺のシユートをもた完璧に止めてみせる。あれだけ攻められておきながら、ロココは疲れを見せない。

「マキシ！」

ロココからマキシにボールが渡る。今度はリトルギガントのカウンターだ。

「よーし！もう一点取るぞー！」

「させるか！」

「遅いよ！」

マキシにマークに付いた鬼道。しかし、スピードに乗ったマキシは鬼道を躲す。マキシに対して、吹雪と飛鷹が立ちはだかるも。

「キート！」

加速してのキートとのワンツーで簡単に突破される。そのままマキシはドラゴにセンタリング。

「よし、行くぜエツ!!ダブル・ジョー!!」

ドラゴの強烈なシュートが円堂に襲いかかる。

「うおおおオオ!!ゴツドキャッチ!!」

円堂はゴツドキャッチを繰り出すが、まだ未完成のままだった。段々と円堂は押されていく。

すると円堂は、ゴールに入れさせまいとして、我が身をゴールポストにぶつけることでダブル・ジョーを防いだ。ボールはそのままピッチの外に。

しかし、リトルギガントからのコーナーキック。ピンチなのには変わらない。試合再開し、ウインデイが大きく蹴る。

「ユームー!」

ボールはゴーシユに渡り、ユームと共に高速でパスを繋げる。

「デュアルストライクツ!!」

高速パスで分裂したボールを、二人が同時に蹴り込み、再び一つのボールとなり、円堂に向かって襲いかかる。

「ゴツドキャッチ!!」

円堂は諦めずにゴツドキャッチを繰り出すが、またも失敗。ボールがゴールに入ろうとしたその瞬間、壁山が飛び込み、ヘディングでシュートをクリアした。

「壁山！大丈夫か!？」

「絶対に…ゴールは破らせないっす!」

いくら息巻いても、依然リトルギガントのチャンスに変わりはない。このまま攻められっぱなしじゃ、いつか体力が切れちまう。

とはいえ、今の状況から脱するいい手が思いつかない。

再度、リトルギガントのコーナーキック。シンティが蹴り上げると、飛鷹がヘディングし、そのこぼれ球を吹雪がクリア。

「まだだ!!」

だが、クリアしたボールをドラゴが強引に取りに行った。

「ダブル・ジョー!!」

円堂はゴッドキヤッチの体勢に入る。しかし、背後の化身が消えてしまう。円堂が再び構えると、円堂の前に割り込む人物が。

「うおッ!!」

なんと、前線にいた染岡がペナルティエリアまで戻り、自身の身体を使ってダブル・ジョーを防いだ。だが、染岡は勢いよく転がっていく。

「そ、染岡!!」

横たわる染岡に、みんなが駆け寄る。

「決めさせるかよ……ぐッ！」

「染岡！」

今の一発で、染岡は身体を動かさないでいる。

ここで、選手交代のコールが。負傷の染岡に変わり、宇都宮が入ることになる。染岡は、担架で運ばれていく。

「頼んだぞ、虎丸」

「…みなさんに、監督からの伝言があります」

「何？」

俺達は、宇都宮からの伝言を聞いた。監督の指示は、だいぶ思い切ったものだった。

だが、今の現状を考えると、それが一番最善の策かも知れない。

三度、リトルギガントからのコーナーキックで試合が再開する。打ち上げられたボールを、キートがヘディングで弾き飛ばす。そのボールを、円堂がパンチングでクリア。

「クソッ！」

円堂が弾いたボールを、俺がクリア。しかし、その先にはドラゴが現れ、ボールを持って攻め上がっていく。

「これで決める！」

「させるかあッ！」

宇都宮がドラゴに向かってスライディング。しかし、ドラゴはジャンプで躲す。

「そこだツ!!」

ジャンプしたドラゴに向かって、鬼道と風丸の2人がかりのディフェンスでボールを弾く。だが弾いたボールをゴーシユが抑える。

「これでどうだ!」

ゴーシユが蹴り込むボールに対して、豪炎寺が弾く。そのボールを基山がピッチのセンターサークルにクリア。

その隙に俺達は、監督の指示に移行した。

「ツ!?!」

ピッチにいるメンバー全員が、ペナルティエリアを囲うように集結する。

「みんな……これは……」

「久遠監督の指示です」

「円堂。お前のゴツドキャッチが完成し、ボールをキープするまで……!」

「俺達もゴールを守る!」

ゴツドキャッチが完成していない今、円堂だけに守らせるのは不安。なら、全員が集結してゴールを守ればいい。これこそ、物量作戦だ。

俺達はリトルギガントの猛攻を、必死になって凌いでいく。だが、みんなの体力は

徐々に削れていく。

「円堂……いつも後ろでゴールを守ってるくせに、お前が守られてどうすんだよ……！」

「比企谷……」

「円堂……」

そんな時、ベンチにいる監督から円堂に向けて声がかかる。監督は、何も伝えず、ただただ左腕を掴んでいただけだった。

しかし、円堂ただ一人が、監督の行動の意味を読み取った。

「これだけシュートを打っても決められないなんてね……」

「ああ。だがそれもここまで……」

マキシからドラゴにボールが渡る。ドラゴがドリブルで、こちらに攻め上がってくる。

「うおおおおオッ……!!」

ドラゴがシュートを打つ体勢になる。それに対応するために、鬼道と豪炎寺がドラゴに向かっていく。

しかし、ドラゴはシュートを打たずに、マキシへとパス。マキシが受け取り、迫ってくる基山と宇都宮にボールを奪われる前に、キートへとパス。

「ドラゴ……」

キートはヘディングで、ドラゴへとセンタリング。ドラゴは、ダブル・ジョーの構えに入る。

「ゴールは俺が守る！」

「吹っ飛ベエツ!!ダブル・ジョー!!」

ドラゴの強烈なシュートが円堂に向かって襲いかかる。

円堂は再びゴツドキャッチの構えに。しかし、今までのとは何か違った。

「イナズマア……ジャパンツ!!」

円堂は背後の化身と共に、ダブル・ジョーに挑む。ダブル・ジョーの威力は段々と失い、円堂の手には、少量の雷を帯びたボールが収まっていた。

遂に、リトルギガントのシュートを完璧に防いだのだ。

「出来た……出来たぞ……!ゴツドキャッチが完成したアツ!!」

あれがゴツドキャッチ……。近くにいたから分かる、あの力強さ……衝撃……。なんてキャッチ技なんだ……。

「やったな、円堂」

「いつも遅いんだよ、お前は」

「豪炎寺……」

豪炎寺が円堂に拳を向ける。それに対して、円堂も豪炎寺に向けて拳を向けて、タツ

チする。

「待たせたな、みんな！全員で守った……今度は、全員で攻めよう！みんな、反撃だ!!」  
「おう!!」

ゴツドキキャッチの完成とシュートを止めたことが、イナズマジヤパンに良い影響を与えている。

俺達は前に向かって走る。背後から円堂が、止めたボールを蹴り上げる。

「行くっスー！」

壁山がボールを受け取り、上がっていく。

「行かせないよー！」

壁山に向かってマキシがスライディング。ボールを弾く。

「任せろー！」

そのこぼれ球を鬼道が抑える。前から、ドラゴが詰めてきている。しかし、鬼道は勢いに乗ってドラゴを躲す。

「飛鷹ー！」

鬼道から飛鷹に。

「比企谷ー！」

飛鷹から、今度は俺にパス。ボールを受けた俺は、前に向かって突き進む。



「俺が止める！」

ゴーシユからのスライディング。俺はボールを宙に浮かして、そのスライディングをやり過ごし、躲していく。

「何ッ！」

「吹雪！」

ゴーシユを躲した俺は、吹雪に繋げる。前からシンティとウィンディが走ってくる。吹雪は物怖じせず、スピードに乗って二人を強引に突破。

俺達は次々と向かってくるリトルギガントを、躲していく。

俺達の後ろには、あのサッカーバカがいる。ならば、俺達は前に突き進むだけだ。それが、俺達の役割だ。

ボールは巡り巡って、基山に渡る。

「通させねえッ!!」

ドラゴが基山に厳しいマークで、ドリブルを防ぐ。ボールは転がっていき、そこには誰もいない。

そう思いきや。

「ッ!?!」

こぼれ球を、ゴールから前線まで走り込んできていた円堂が抑えた。円堂がそのまま

ドリブルし、ボールを蹴り上げる。

「うおおおおオオオッ!!」

基山が雄叫びを上げながら、上体を屈ませる。右手を地面につき、風のオーラを纏いながら、地面を大きく蹴ってボールに向かって飛んでいく。そのまま、一回転しながらボールを蹴り込む。

「天空……落としいいイイッ!!」

蹴り込まれたボールは、流星ブレードを遥かに超えるエネルギーを纏いながら、ロココに向かって飛んでいく。

「ゴッドハンド…X!!」

ロココはゴッドハンドXを繰り出す。だが、先程とは違い、徐々に後ろに退がっていく。

「ぐッ…！くッ…！…！」

ロココは粘る。

しかし、天空落としの威力に押されてしまい。

「ぐあアッ!!」

ゴッドハンドXが破れ、リトルギガントのゴールに突き刺さった。

「や、やった!」

基山の新技、天空落としが見事に決まり、リトルギガントから一点を取り返した。1

——1。イナズマジャパンは、同点に追いついた。

ここで、前半終了のホイッスルが鳴り響く。

まだまだ油断は出来ないが、ひとまず一息つける。

## 頂上決戦 後編

基山の天空落として同点に追いついたイナズマジヤパン。前半が終了し、ハーフタイムに入った。その間に、選手交代。風丸に変わり、不動が入ることになる。攻撃のリズムを変えるための意図だろう。

間もなく後半が始まる。

俺達は、気合を入れ直すために、円陣を組み始めた。円堂はニツと笑い、そして。

「みんな行くぞ!!」

「おう!!」

俺達はピッチに入り、それぞれのポジションに着き始めようとした。対するリトルギガントも、ピッチに入ってくる。

が、しかし。

「あれは…」

GKだったロココが、フィールドプレイヤーのユニフォームに着替えていた。ロココの代わりに、ケーンがGKになり、そしてドラゴがいたポジションにロココが入ることになっている。

「ロココがFWに…?」

「…前半で見せたキック力を考えれば、妥当な策だろうな」

ゴールからゴールに蹴るまでの力を備えている。同点となった今、リトルギガントとしても点を取りたいはず。そこに、ロココを投入するということだろう。

「…だが、ロココを抑え込めればなんとかなるかも知れない。あのケーンつてやつがロココより優れたGKでないなら、ロココを抑えつつ、攻撃していけば点を取れる筈だ」  
「僕と飛鷹くんがマークに付くよ」

「よし！それで行くこう！」

後半の作戦が決まり、俺達はポジションに着いた。そして、運命の後半戦のホイッスルが鳴り響く。

ボールはロココに渡り、攻め上がってくる。

「お手並み拝見といこうか！」

入って早々に不動がロココにチエツク。

すると、ロココは凄まじい速さで不動を突破する。

「ここから先は行かせない！」

不動に続いて、壁山と吹雪がロココにマークに付いた。ロココは二人を突破しようとするが、流石のロココも二人を相手取ることとは出来ず。

「真一・スノーエンジェル！」

吹雪のディフェンス技でロココからボールを奪う。そのままボールは前線に繋がっていき、最後に基山に渡る。

「うおおおおオオオツ!!」

基山は、ロココから点を奪った必殺技の構えに入る。

「天空……落としいいイイイツ!!」

基山の天空落としがゴールに向かって飛んでいく。

「ウォルター！」

マキシの指示で、ウォルターが動く。

「グランドクエイク!!」

ウォルターが右拳を勢いよく地面にぶつけると、地面にヒビが入り、そこから衝撃が溢れ出る。その衝撃の壁を、天空落としにぶつける。

だが、グランドクエイクをそのまま破り、ゴールに向かって飛んでいく。

「ゴッドハンド……X!!」

すると、GKのケーンがゴッドハンドXを繰り出してくる。威力が弱まった天空落としを、ケーンはガッチリとキャッチ。

まさか、ケーンまでゴッドハンドXを繰り出すとは。ロココに勝るとも劣らないGK

だった。

止めたケーンは、ゴーシユへとボールを繋いだ。共に、マキシも上がっていく。鬼道がマキシに向かってマークに付きに行く。

「ロココには出させない!」

「止められるものなら、止めてみる!」

ゴーシユがマキシに向かってパスを出す。すると、ボールはスケートボードの形となり、その上にマキシが乗る。

「エアライド!!」

マキシがエアライドで鬼道を翻弄して躲す。だが、躲した先には不動が回り込んでいた。

マキシは一度、ロココを見るが、俺や吹雪、壁山が厳しくマークしていたため、諦めてゴーシユにパスを出す。

「ゴーシユ!」

ゴーシユがボールを受け取り、再びロココを見る。だが、依然ロココは厳しくマークされている。

今度は、キートにボールを出す。

リトルギガントは、個人技では俺達に競り勝つてはいるが、ロココをマークしている

以上、ロココにボールを渡ることではない。

だが、それでもそのまま黙って指を加えるだけのロココではなかった。

マークの厳しい中、ロココが勢いよく飛び出す。

「ロココー！」

「させるかー！」

マキシがロココにボールを出す。と同時に、飛鷹がそのボールに足を伸ばす。飛鷹のつま先に当たったボールは軌道を変えていく。

そのボールに向かって、円堂が走っていく。

「みんなが繋いでくれたこのボール、無駄にはしない！」

しかし、円堂が抑えるより先にロココが一步早く、ボールを抑えた。ここで、円堂とロココのタイマンである。

「来い、ロココー！」

ロココは地面に両手を付き、ボールを両脚で挟みつつ、縦に回転しながらジャンプする。そして、両脚からボールを離し、その両脚でXの文字を作りボールを切り裂く。

「X…ブラストオオオツ!!」

Xの文字から、真紅の光線が円堂に向かって放出する。

「ゴッド……キャッチ!!」



円堂はゴツドキャッチでXブラストに対応する。しかし、徐々にXブラストの威力がゴツドキャッチを押しつけていき。

「ぐああアツ!!」

円堂を吹っ飛ばしてXブラストを決めた。1―2となり、リトルギガントが追加点を得た。

再び追う立場となった俺達。

ホイッスルが鳴り響き、ボールは豪炎寺に。豪炎寺と共に宇都宮が上がっていくと、背後から不動も上がってくる。

「あれをやるぞー!」

「でも、あの技は……!」

「んなこと分かってる!一か八かだろ!」

三人がボールを囲い、それぞれポーズを取る。

「Go!」

不動の合図で、三人はボールの周りを走る。すると、ボールに竜巻が発生し、三人は竜巻の中に突っ込み。

「うおおおおオオオツ!!」

三人同時にボールを蹴り上げる。竜巻の中をボールが勢いよく駆け巡り、ケーンに向

かっっていく。

「これなら……!」

だが、ボールの威力は途端に弱まってしまい、ケーンが技を使わずに止めてみせる。

「マキシ!」

ケーンからマキシに向けてパスを出す。そこを狙って、俺はそのパスをインターセプト。

「な、何ッ!」

「お前が攻めの起点だろ。……豪炎寺!」

ボールを奪った俺は、すかさず前線に上がる豪炎寺にパスを出す。共に、宇都宮と基山も上がっていく。

「グラウンド……ファイアアアツ!!!」

三人は、グラウンドファイアをロングシュートで放つ。そのまま巨大な炎はケーンに向かって迫る。

「ゴッドハンドX……改ッ!!」

ケーンはこのタイミングでゴッドハンドXを進化させ、グラウンドファイアを完璧に止めてしまう。

グラウンドファイアを止めたケーンは、ゴーシュに繋げる。ゴーシュと共に、マキシも

上がっていく。

「エアライドV2!!」

攻守に渡り、リトルギガントの動きが良くなっている。

「あいつら、ますます強くなっている!」

「だったら尚更負けるわけにはいかねエ!」

ボールを持ったキートに不動がスライディング。キートはそれを躲すが、続け様にスライディングしてくる鬼道に対応出来ず、ボールを奪われる。

「行くぞ!」

鬼道と不動と佐久間の三人が攻め上がっていき、あの技の構えに入った。

「皇帝ペンギン……3号オオツ!!!」

進化には進化を。進化した皇帝ペンギン3号が、勢いよくケーンに向かって飛んでいく。

「真!ゴツドハンドX!!」

なんと、またケーンがゴツドハンドXを進化させる。グランドファイアに続き、皇帝ペンギン3号までもが止められてしまう。

リトルギガントの反撃。ボールはユームに渡り、ユームからロココへと繋がった。

「X……ブラストオオオツ!!」

ロココのXプラストが炸裂。しかし、対する円堂は笑っている。

「ゴッド……キャッチ!!」

すると、円堂までもがゴッドキャッチを進化させる。進化したゴッドキャッチは、Xプラストを完璧に止めた。

「比企谷ツ、行けえッ!!」

ボールが俺に渡る。円堂は、自身たつぷりといった面持ちでこちらを見ていた。

「…なんだよあいつ。カッケエじゃねえか」

円堂が進化して止めたボールだ。このボールを、無駄にするわけにはいかない。

俺はドリブルして、攻め上がっていく。共に、鬼道と吹雪が上がってくる。

「行くぞー!」

「おう!!」

鬼道と吹雪が最初にジャンプし始め、同時に俺はボールを蹴る。俺が蹴ったボールを吹雪が蹴り上げ、吹雪が蹴り上げたボールを鬼道が一回転して踵落とし。

そうして溜まった爆発的エネルギーがボールを纏い、三人同時にボールに向かって足を振り切る。

「ビッグバンッ!!!」

蹴られたボールは、グラウンドファイアの比にはならない、大きいエネルギーを纏う。

ぶっちゃけると、ゴールとケーンが壊れそう。

「真！ゴッドハンドX!!」

ケーンは物怖じせず、ゴッドハンドXで立ち向かう。ケーンはなんとかゴッドハンドXで粘るが、ビッグバンの威力がゴッドハンドXを遥かに上回り、技を打ち破ってゴールに押し込んだ。

これで同点ゴール。2―2。リトルギガントに再び追いついた。

すると、ここでホイッスルが鳴り響く。リトルギガント側のゴールを見ると、ケーンが手首を押さえている。

先程のビッグバンで、無理をし過ぎたようだ。

「選手交代！ロココ、GKに戻れ」

負傷したケーンに代わり、ロココが戻る。ロココがいた位置には、リユウが入る。

そして、リトルギガントからのボールで試合が再開する。ボールはリユウに渡り、すぐさまキートンに繋がる。

キートンはボールを蹴り上げ、自身もジャンプする。

「ダブル…グレネード！」

ボールを右脚で蹴り、次に左脚で蹴り、最後に両脚でシュート。青い光線が、円堂に向かつていく。

「ゴッド……キャッチ!!」

円堂は危なげなくダブルグレネードを止める。円堂は再び俺にボールを繋げる。

「もう一度だ!」

俺達は再び、ビッグバンの体勢になる。

「ビッグバンッ!!!」

ビッグバンがロココに迫っていく。

すると、ロココはゴッドハンドXの構えではなく、別の構えを取る。ロココは手を交差し、勢いよく胸を張る。ロココの胸から、巨大な手が現れ始める。

「タマシイ・ザ・ハンドオツ!!」

ゴッドハンドXより遙かに強力な技を、この土壇場で生み出しやがった。ビッグバンの威力がなくなり、ロココは完璧に止めてみせた。

リトルギガントは、反撃を開始する。しかし負けじと俺達もその反撃を阻む。まさに一進一退の攻防。互いが譲らず、ただただ時間が迫っていくだけ。

ボールがタッチを割り、リトルギガントのゴールキックとなったそんな時。

「ワハハハハッ!!」

突然、円堂の爺さんが高らかに笑い始める。リトルギガント、イナズマジヤパンのメンバー全員が不思議な顔をしている。

「よし！胸の重りを外せ！」

「ツ?!」

まだ重りを付けていたってのか？

しかし、リトルギガントの反応を見る限り、重りを付けていないと察せる。

では、何故急に胸の重りを外せと言ったのか。

単純にボケたか。……その可能性もないわけではないが、おそらく違う。

円堂の爺さんのことだ。本当の重りではなく、心の重りを外せとでも言っていると、そう捉えることも出来る。

「……どうやら、まだ油断は出来ないようだな」

「比企谷は分かったのか？じいちゃんの言ってること」

「お前の爺さんだからな。…要するにお前の爺さんは、思い切りサッカーしてこいって言うてんだろ。自分達がしたいように、心置きなくサッカーをしろっていうことだろう  
」

すると、リトルギガントの雰囲気明らかに変わる。

「よし！やろうみんな!!」

ボールはゴーシュに渡る。共に、マキシも上がる。

「エアライドV3!!」

マキシが鬼道を躲し、再びゴーシユにボールを戻す。ゴーシユは身体に火を纏い始め、そのままドリブルしていく。

「ヒートタツクル!!」

ゴーシユのタツクルで壁山が吹き飛ばされる。

やはり、リトルギガントの動きが変わった。動きやキレが良くなっている。円堂の爺さんの一言で、チームを劇的に変えてしまう。

まるで魔法だ。

ゴーシユと共に、今度はチームが上がってくる。

「デュアルストライク!」

飛鷹と吹雪が二人にマンツーマンでマークに付こうとする。

「ツ!待て、フェイクだそれ!」

彼らの高速パスを遮り、そのまま攻め上がってくる者がいる。誰であろう、GKの口ココだ。

ロココは自陣のゴールから、ペナルティエリア付近まで一気に上がってきていた。

「行くぞ、マモル!!」

「来い、ロココ!!」

円堂とロココ。



三度、相見える。

## 世界一

「Xブラスト！V2!!」

ゴールから上がってきたロココが、Xブラストを進化させ、円堂に向けて放つ。

「ゴッド……キャッチ!!」

円堂はゴッドキャッチで対応する。しかし、Xブラストがやや勝り、円堂が後ろへと押されていく。そして、ゴッドキャッチが破られてしまう。

が、ボールはかろうじてゴールに入らず、ゴールポストに直撃して跳ね返る。しかし、そのこぼれ球をリユースが抑える。リユースに向かって、壁山が走っていく。

「ジグザグスパーク!」

リユースがジグザグに走って、ブレーキをかけると、足からジグザグに青い火花が壁山へと辿っていく。その火花が直撃し、壁山は動けなくなる。

リユースはそのままシユート。円堂がそのシユートをパンチングで弾くが、それをユースムが拾い、ゴースユと共に高速パスを始める。

円堂は、またロココが来るのではないかと警戒していた。しかし、そんな様子はなく、

彼ら自身が直接ゴールを狙う様だった。

「デュアルストライクツ！V2!!」

円堂はゴッドキャッチを繰り出す余裕がなく、デュアルストライクを直接受ける。

円堂はそのシュートの勢いを使い、バックステップで無理矢理ゴールポストにぶつかりに行く。ボールは円堂の手から離れて、こぼれ球となる。

リユーがそれを拾おうとするが、俺が先に回り込んでボールをクリア。

「お前、だいぶ無茶するよな」

「へへっ……」

しかし、リトルギガントの攻撃は終わらない。クリアしたボールをマキシがトラップ。マキシに向かって、飛鷹が走る。

しかし、リユーとのワンツーで突破されてしまう。その隙を突いて、吹雪がマキシからボールを弾き飛ばす。だがそれも、リユーが抑える。

鬼道と吹雪がリユーにマークに付く。しかし、リユーはボールを二人の頭上に軽く浮かせて、キートに繋ぐ。ボールを受けたキートは、円堂に向けてシュート。

そのシュートを、不動がクリア。クリアしたボールは佐久間に渡ろうとする。だが、そのボールをロココがインターセプト。

ロココがまたしてもゴールから飛び出しており、円堂に向かって猛然と突っ込んでい

く。

「Xブラスト！V2!!」

時間ももう無い。ここで決められたら試合が終わる。俺達は決死のブロックで、Xブラストの威力を削ごうとした。

しかし、あえなく吹き飛ばされてしまう。

「ゴッド……キャッチ!!」

円堂はゴッドキャッチで挑む。しかし、やはりXブラストがゴッドキャッチをやや上回っている。そして、またもやゴッドキャッチが破られてしまう。

ゴールに入るその瞬間、前線からゴールまで戻ってきていた豪炎寺と宇都宮が同時に蹴り、なんとかボールはゴールの外へと飛んでいく。

しかし、リトルギガントのチャンスに変わりはない。

コーナーキックが始まると、リトルギガントの猛攻が再び始まる。

「ヒートタックル…改!!」

「ジグザグスパークV2!!」

「デュアルストライクツ！V2!!」

「ダブルグレネード！V2!!」

リトルギガントの猛攻が続くどころか、どいつもこいつも必殺技を進化させてくる。

「守れ！守り抜くんだったッ！」

リトルギガントの猛攻で、俺達は徐々に体力を減らしていく。それに、ボールに触ることすら敵わない。

ボールが運良く、タッチを割る。

シンティが転がっていくボールを拾いに行くと、なんと久遠監督が拾い、シンティに渡す。

監督がベンチから出てきたことに、みんなは不思議そうな表情をしていた。無論、この俺も。

「よく聞けお前達。これから最後の指示を出す」

このタイミングで監督からの指示…？

何か、攻略を掴んだのだろうか。

「…思い切り、楽しんでこい!!」

全然違いました。その指示とやらに、俺達はポカンとする。

俺は、久遠監督の意図を考えた。

楽しんでこい、か。このピンチの状況が分からない監督では無いはずだ。にも関わらず、最後にエールの様な指示を飛ばしてくる。

「…成る程ね」

監督の言いたいことはよく分かった。意図を読み取った俺達は、大きな声で監督に返事を返す。

「はい！監督！」

「はい！！」

試合が始まり、ボールはキートに渡る。

鬼道が、キートに向かってスライディングを仕掛けるが、キートは躲す。

「ナイススライディング、鬼道！」

円堂が鬼道へ向けてナイスと呼びかける。

「何がナイスだよ！ボールに触れもしなかったんだぞ！」

全くその通りでございます。

しかし俺達は今、試合の結果より、サッカーを楽しむことを優先している。

ボールはキートからシンティに。シンティが上がっていくと、佐久間がチャージをかける。だがこれも、簡単に躲されてしまう。

「いいぞ、佐久間！」

シンティが躲して今度はユームに。ユームは、すぐにリユーにパスを出す。それを基山が頭で取りに行こうとするが、間に合わず、転んでしまう。

「ナイスフアイト、ヒロト！」

俺達はリトルギガントに向かってボールを奪いに行く。依然、彼らからボールを奪えてはいない。

それなのに、何故だか今の状況を楽しんでいる自分がいる。俺だけじゃない、みんなが笑っている。みんなが楽しんで、サッカーをしている。

…客観的に見たらなんで笑ってんだって話になるけどね。なんなら俺の笑う顔とか一体誰得だよ。

リトルギガントの猛攻は尚も続く。しかし、俺達は諦めずに食らいつく。サッカーを、楽しんで。

ボールは再びキートに渡る。鬼道がキートへとスライディング。キートはまたも躲すが、先程と違い、あと少しでボールに触れそうだった。

鬼道だけではない。佐久間や基山、みんなが少しずつ、無意識にリトルギガントの動きに付いていける様になっている。

俺達が付いていける様になったことで、リトルギガントはシュートまで持つていけなくなっていた。

「止めるー！」

ボールを持ったゴーシュに、俺は勢いよくスライディング。俺の足がボールに触れて、弾き飛ばす。

ルーズボールとなり、鬼道と豪炎寺が急いで取りに行く。  
しかし。

「ッ!?!」

ルーズボールを抑えたのは鬼道でも豪炎寺でもない。リトルギガントのGK、ロココがボールを抑えていた。ロココはそのまま攻め上がっていく。

佐久間、不動を躲す。そのままディフェンス陣を一気に突破して、最後に円堂と一対一となる。

「マモル……君達が強くなるなら、僕達ももつと強くなる!」

ロココは飛んで、Xブラストの体勢に入る。

「Xブラストツ!!V3イイイツ!!」

最大威力のXブラストが、円堂に向かって襲いかかる。

「うおおおおオオオツ!!」

円堂が大きく雄叫びを上げる。

そして、円堂はゴッドキャッチの体勢に移る。

「ゴツドオ……キャッチイツ!!」

なんと、円堂はこの土壇場でゴッドキャッチをまた進化させる。ロココの進化に 대응、自身ももう一段進化し、最大威力のXブラストを完璧に止めた。



「やりやがった…」

凄すぎて一周回って引くレベルだよ。

円堂がXブラストを止めたことで、ピンチが一転し、チャンスとなる。試合終了も残りわずかだ。

「いつけえええエエツ!!」

円堂がボールを大きく蹴る。不動とシンティがそのボールに合わせてジャンプするが、空中で二人がぶつかり、ボールは落下する。

そのボールを、佐久間が拾って豪炎寺に。だが、ユームが小さい身体を使ってクリア。互いに譲らない攻防が繰り広げられている。イナズマジャパンも、リトルギガントも全身全霊のプレーでぶつかり合っている。

転がっていたボールを、俺とリユウが同時に蹴る。そして、同時に弾かれてしまい、ボールが転がっていく。

すると、そのルーズボールを拾ったのは、リトルギガントではなく、あいつだった。我らのキャプテンでサッカーバカの、円堂だ。

残り時間がない中、円堂までが攻撃に参加していたのだ。

「キャプテン!」

「キャプテン!」

「キャプテン！」

壁山、吹雪、飛鷹が円堂に追隨。

円堂に向かって、マキシが走ってくる。

「円堂！」

円堂は、鬼道とのワンツーパスでマキシを突破。

「戻れエツ!!」

カウンターをくらっているリトルギガントは、急いで自陣に戻っていく。

「円堂くん！」

「円堂！」

「円堂！」

基山、不動、佐久間も円堂の名を呼ぶ。

「円堂!!」

「円堂くん!!」

ベンチからも、彼を信じて呼び続ける。

「円堂ッ！」

俺も、円堂を信じて、あいつの名前を呼んだ。

ここまで来れたのは、俺達だけの力じゃない。雷門のメンバーや総武の連中、代表か

ら落選した者、敵として戦った者達の思いがあるからだ。

その思いは今、円堂が持つボールに込められている。

「キャプテン！」

「円堂！」

前線にいた宇都宮と豪炎寺と共に、ゴールに向かって走っていく。

「行くぞ！みんなアツ！！」

彼らは、ボールを囲いポーズを取る。そして、ボールの周りを三人が走り続ける。すると、ボールに巨大な竜巻が発生し始め、その竜巻の中に三人が突っ込み。

「ジェットオツ！！ストリィィィームツ！！！」

絶大な威力を誇るジェットストリームが、ロココに向かって襲いかかる。

「止める……！勝つのは、僕達リトルギガントだツ！！」

ロココは、ビッグバンを防いだあの技でジェットストリームに挑もうとする。

「タマシイ・ザ・ハンドオツ！！！」

ロココもタマシイ・ザ・ハンドを進化させて、ジェットストリームにぶつける。すると、シュートの回転が途端に弱まる。

止められる……そう思ったが、威力を吹き返して、ロココをギリギリと後ろへと押し  
ていく。

「くツ……くツ……!!」

ロココは気合で、ジェットストリームを防ぎ切ろうと粘る。

「止める……!!このボールだけは止めるんだッ!!」

鬨ぎ合いの末、ジェットストリームの勢いが勝り、タマシイ・ザ・ハンドをぶち破る。

「ぐああアアッ!」

凄まじい風圧を周りに散らしながら、ゴールに突き刺さった。

ここで、試合終了のホイッスルが鳴り響く。さつきまで湧いていた歓声が途端に静まる。

俺達は息を切らしながら、ただただ立ち尽くしていただけた。

「勝った……のか……?」

呆然と立ち尽くす中、壁山は自身の頬をつねり始める。

「痛くないっス……。でも……」

俺達はスコアを確認する。

イナズマジヤパンvsリトルギガント。スコアは、3-2と表記されている。

3-2。リトルギガントより1点、イナズマジヤパンが多く表記されている。

これは……。

「……やったああああアアッ!!」

円堂が枯らしそうなほどの大きな声で喜び始める。同時に、スタジアム内で今までで一番の歓声が湧き始めた。

「優勝……したのか……」

FFIの頂点に立ったのは、日本代表イナズマジャパン。俺は腰が抜けて、その場で座り込む。

「はは……ははは……」

……マジかよ。

世界一を目指して戦ってきたが、いざ優勝すると、こんなにも信じられないものなんだな。だが、紛れもなく優勝したのはイナズマジャパン。

俺達のチームなのだ。

「……やったわ」

由比ヶ浜、一色、小町。戸塚と戸塚と戸塚。それに、総武のみなさん。

……マジで優勝してしまいました。

俺が座り込んでいる間、みんなは円堂に向かって駆け寄っていた。

「……終わったな」

俺のサッカー生活は、これにて幕を下ろす。FFIで優勝した以上、俺がもうサッカーと関わる理由はない。

…まあ、気晴らし程度ならやるとは思うけど。

俺達はベンチに戻り、監督の前に並び立つ。

「久遠監督！」

「…俺に言わせれば、まだまだ欠陥だらけだが……、お前達は今、世界で一番マシなプレーが出来るチームになった。……よくやった」

監督からのそんなありがたいお言葉をもらう。今まで世話になった監督に対して、俺達は。

「…ありがとうございます!!」

後は閉会式のみを残すだけとなる。その閉会式の準備の間、俺達は待っていた。

飛鷹は響木監督に感謝を告げたり、響木監督は円堂の爺さんと話したり。一部のメンバーは、リトルギガントのメンバーと話していたり。

「先輩っ!!」

「うおっ」

俺の正面から、強い衝撃が与えられる。音無が、俺に向かって飛び込んできた。

「先輩っ、先輩っ！優勝おめでとうございませう！とつてもカッコ良かったです！」

「…ありがとな」

なんだかんだで、こいつに迷惑かけたり、頼ったりしてたからな。そういった意味を

含め、感謝を伝える。

「…おめでどう、八幡。私にとって、お前は世界一輝いていた」

「…そうかい。ありがとな」

八神も、少量の涙を流しながらおめでどうと伝えてきていた。ここで突き放すほど俺は鬼じゃない。

「…優勝祝い。帰ったら、あの部屋で。由比ヶ浜さん達としましょう」

「そういうの、多分もう考えてそうだけだな。あいつなら。もしかしたら小町辺りが」

「ふふつ、それもそうね。…優勝おめでどう、比企谷くん」

「…ああ」

第一回フットボールフロンティアインターナショナル優勝は、日本代表イナズマジャパン。様々な苦難を乗り越えて、世界一の座を掴み取った。

これで、全てが終わった。

俺は、俺達は、そう思っていたのだ。